昭和七年五月十日印刷
昭和七年五月十五日發行

不許複製

國譯一切經　密教部　四

編輯兼發行者　岩野眞雄
東京市芝區芝公園七號地十番

印刷者　渡邊通夫
東京市芝區芝浦町二丁目三番地

印刷所　日進舍
東京市芝區芝浦町二丁目三番地

發行所
東京市芝區芝公園地七號地十番
大東出版社
振替東京一九四七一番
電話芝（二一一六番
三〇四〇番

製本所　兩角製本所

索　引

（頁數は通頁を表はす）

——密教部四索引終——

て、默然として住せり。

又復た、金剛如來も亦即ち三界の所有一切心法に安住して、彼の一切如來の心平等中に安住して默然として住せり。

佛此の經を說き已り、一切の大衆は佛の說く所を聞き、咸各歡喜し信受し奉行せり。

佛說一切如來金剛三業最上祕密大敎王經(終)

命す。菩提の廣現なり。若しは取、一切樂法の相、彼の法の自性は動ずる所なし。因果の自性は心より生ずる所なり。心を離れたる有相と、諸の法性と貪等と、過失と及び諸障は、皆金剛に住して、生ずる所なし。彼の菩提心の廣大なるに歸命す。一切法を出現す、此れは清淨無等に住す。智の方便の法の生ずる所なり。祕密灌頂は常に相應す。菩提金剛に常に歸命す。此の法を觀ずるが若きは最上と爲す。彼彼は[九二]三種の成就の義なり。行人は決定して當に圓滿す。菩提金剛に常に歸命す。若し金剛成就法を作せば、當に一切の劣成就を離るべし。諸佛を尊重して、淨信を生じ、菩提金剛に常に歸命す。今此の祕密集會の教を、若し聞くを得たる者は、倘ほ希有なり。況や復た讀誦し、若しは思惟し、尊重、供養し、及び書寫せよ。此れ功德窮ることなし。菩提金剛に常に歸命す。息災等の法は諸の儀軌なり。大明と印契と行相とを、理の如く作せば皆成就す。菩提金剛に歸命す。今此の最上の祕密法を、若しは見聞し、隨喜する者あらば、能く一念の淨信心を生じ、獲る所の功德は無邊際なり。況や復た行人此の法に依りて、祕密の行を修習し相應するおや。此の功德の聚廣なることは已に宣べたり。菩提金剛に歸命す。

爾の時、一切如來は、諸の菩薩が是の稱讚を作すを聞きて、咸各隨喜して讃じて言はく。善い哉、善い哉。諸の菩薩の衆の善く此の語を說き、諸法中に於て主宰最尊最上は諸の如來の祕密集會の祕密より出生せり。是の言を作して、所有一切如來及び諸の菩薩摩訶薩の衆は、咸各堅固三業に安住して、悉く金剛身語心性平等法中に入りて、默然として住せり。

爾の時、身金剛如來は、卽ち復た、身平等法に住して、一切如來の身平等中に默然として住せり。又復た語金剛如來も亦卽ち三界の所有一切の語行に安住して、彼の一切如來の語平等中に安住し

【九二】三種成就。近成就、大成就、最上成就なり。

善い哉、菩提は大最上なり。諸佛の自在、吉祥尊、菩提金剛の親教師は、一切の想を了して菩提の行に向へり。彼の語言あらずして所依となる、卽ち一切の無所壞を得、所有惡趣をも生ずる所にあらず。彼の大菩提は得がたからず。彼の先づ罪業の因を作す所は、此惡果報なり地獄と名づく。若し彼の地獄生ずるなくば、此の地獄の果は所得なし。所有無數の諸法印は菩提の大金剛に安住す。最上の取を離れたる正了知は、無邊の衆生に相應して住せり。取を離れ、取に非らざる一切の業は、彼の諸の所作にして主宰にあらず、彼の正所作は、大成就を作す。一切の事業は皆平等なり。

爾の時、一切の菩薩摩訶薩は、諸佛が一切金剛大悲より生ずる所の甚深の正法を宣說せるを聞くを得て、又復た歡喜して是の稱讃を作す。

善い哉、善い哉、世の尊しとする所、善い哉、善い哉、大牟尼、善い哉、善い哉、大妙法、善い哉、大悲者、大いなる哉、普賢の悲愍の行。最上。廣大。淨無垢。諸の忿怒の羯磨法を作し。諸の衆生をして佛性に入らしむ。

爾の時、一切如來は、復た諸の菩薩摩訶薩に告げて言はく。諸の善男子よ、汝等は此の一切如來の祕密灌頂の大集會の法を聞けり。驚怖を生ずる勿れ。又復た中に輕謗を生ずる勿れ。應に三摩鉢底に安住すべし。何を以ての故に、菩提金剛は實際に生ずる故に、瞋金剛の性は彼れ廣大の故に、離縛の大明は攝受する所の故に。是の時、諸の菩薩摩訶薩は、異口同音に又復た一切如來を稱讃して、是の如き言を作す。

三世に金剛は實際に生ず、寂滅、離障にして淸淨なり。諸佛の最上大自在なり。金剛の勝三業、所有色受想行識・六根・六塵は皆幻の如し。地水火風及び虛空に歸命す。菩提心の所現なり。彼の貪瞋癡の諸染法、常行の金剛法相應の、種種は皆實性に住するに歸

先づ三昧を作して、金剛身語心を護れ、烏瑟膩の三昧は、儀軌の如く出生す。彼彼は羯磨相なり。白輪の智の光明は、成就を說く所の如し。曼拏羅は依法に聞く所の如く觀想せよ。彼の身に住する所なり。彼に破壞を作す勿れ。諸の觀想法を越えるものは、彼の一切の句召・白輪・金剛橛・金剛橛の大明なり。諸の步相を越えず。忿怒心を生ずる勿れ。當に諸の佛敕を受け、種々の三昧をなすべし。諸の義利を破る勿れ。勝金剛は成就す。禁縛等の諸法は忿怒王より出づる所なり。金剛橛の大明は[九〇]頂心等の諸處なり。法に依りて觀想せよ。諸の苦毒を遠離し。及び諸惡を破壞せよ。彼の金剛橛は一切皆相應す。儀軌の如く、相應と大明等を出生せよ。諸の事業と、持誦と出生と、諸の護摩法と、忿怒曼拏羅とを成就せよ。息災は寂靜心なり。增益は增益の意なり。敬愛は敬愛心なり。忿怒は忿怒の字なり。是の如きは四種法なり。一切の成就を攝するなり。

爾の時、一切如來は諸の菩薩が問ふ所の法に答へ已り。諸の菩薩をして諸の疑惑を斷ぜしめたり、卽ち身語心業を疑ふことを離るゝを得たり。自の身語心は皆金剛堅固の身語心法に安住せり。是に諸の如來は卽時に咸各默然として住せり。

爾の時、彼の菩薩摩訶薩は、咸各一切如來を稱讚して是の如き言を作す。

一切如來の身に歸命す。一切の語に頂禮歸命す。一切如來の心に歸命す。諸の所作に歸命す、身語心業の三金剛は、彼の[九一]三業より得る所なり。佛と衆生とは無等々なり。何の行法を作して成就を求むや。一切の諸佛は壞はさるゝなく行人の大主宰を成就せよ。云何諸の罪業を遠離したるか、若し遠離し已ば、何の果を得るや。

爾の時、一切如來は、亦各彼の諸の菩薩を稱讚して是の如き言を作す。

善い哉、菩薩摩訶薩、善い哉、菩提は大主宰なり。善い哉、菩提は大妙音なり、

【九〇】頂心等。五處を云ふ。

【九一】三業。有情の身語心を云ふ、これ如來の三密と相應し佛と衆生は無く等等となるなり。

の相應するを、　菩提の妙句と說く。　自心の曼拏羅は、　儀軌と相應せりと想へ。　彼の心智の影像は、　最上の成就なりと想へ。　諸の相を現じて相應せり。　彼の六の月は、　諸欲の最上樂なりと觀想せよ。　一切處は常に相轉じ、　彼の大智は成就す。　敬愛法より生ずる所なり。　諸部の衆と相應す。　彼の[八四]金剛橛等は、　敬愛法の護と作る。　彼と相應する所なり、　此れ大蓮華の敎なり　廣大智の作す所なり。　踰室多は一切の所取等と變化す。四種の印は圍遶せり。　曼拏羅の儀軌とは、　中に自ら所作す、　漸略は一切の相なり。　諸の金剛地と作る。　彼の菩提は四種の微妙歌を觀想す。　諸の賢聖の心より現ず。　三金剛地を想へ。　智身の觀想する所なり。　彼の種々の色相は、　自心に住する所の如し。　自因及び自果は種種の灌頂の義なり、　祕密の大明法と、　諸の大明法印と、　六種轉輪王と、　[八五]烏瑟膩沙と、　此の大明王等と、　四富樂の大力と、　一切の欲を了知せば、　金剛大主宰なり。

一切の禪定輪と、　及び一切の灌頂とは、　諸の儀軌と相應せり。　大智の攝受する所なり。

身語心金剛は、　無二の成就法なり。　先に說く所の色の如し。　金剛持明士は、　自身の曼拏羅なり。　此れを大成就と說く。　大烏瑟膩沙は無著相應の相なり。　彼は[八六]近成就の法なり。　軍拏利の影像は本尊の相應法なり。　大明成就と作す。　彼れ大成就する時は、　佛の影像の主尊にして、　此れ一切金剛なり。　祕密の勝と相應す。　此れ諸佛法の分なり。最上成就を作す。　別法は成就せず、　此れ最上より生ずる所なり。　[八七]千　俱胝の劫數諸の佛名を稱讃し、　成就相應を求めよ。　常に親近を生ずる所なり。　金剛蓮と相應す、　此れを近成就と說く。　成就法の所說は、　謂[八八]　吽發吒字なり。　自性の寂靜門なり、　是れ大成就の義なり。　諸佛の大勝尊は、　大執金剛の句なり。　諸佛は[八九]　烏卑夜なり、　諸法と諸法性となり、　所有羯磨の相なり、　即ち相應無著なり。　曼拏羅は諸の所聞の三昧を出生す。

【八四】金剛橛。vajrakīlaka

【八五】烏瑟膩沙。uṣṇīṣa　佛項と譯す。

【八六】近成就、四方便の一。

【八七】俱胝。梵 koṭi.

【八八】吽發吒。hūṃ phaṭ.

【八九】烏卑夜。梵 upāya.

此れ諸の平等の行なり、是れを四種法と名づく。
四金剛拳あり。最上を智甘露とす、一は菩提の空性なり。二は種子の所集なり。三は影像の出生なり。第四は文字の相なり。此等を四法と名づく。親近の成就する所を、最上智の甘露となす。六種の相應の事とは、[七九]六法の相應の若し。最上成就を得。所謂成就法なり。最上成就は生じ　食と禪定と　及び彼の持命法とを現ず。三摩地の念に住するは、此れ六種の相應なり。十種の根本あり、一切處に自ら住す。飲食の所說を現ず、別別に飲食を欲す。五欲法平等なり。即ち五佛相應なり。禪定の儀法に住す彼の禪定の五種とは、所謂[八〇]尋と[八一]伺と、喜と樂受と、及び心一境性なり。此れを五種定と名づく。祕密に三種あり、彼の尋伺と相應なり。三種の喜受あり、樂受に四種集あり。自心に五種の住あり。智の出生を盡く知るなり。
一切の佛の寂靜と、諸の欲性とは、[八二]五智と、我自在とに安住す。五の實際とは自觀なり。彼の賓拏嚩單は純一法に決定す。五色相の大寶とは正念に安住す。自心の明は、日輪中の影像に安住す。寂靜は月寶を現じ、持地の念に安住す。寂滅金剛等は取相より生ずる所なり、五界の諸の有相は菩提の金剛を觀ず。一は陽焰の明。第二に煙相。三に虛空の明相。第四に燈焰の明。五に世間の常明なり、皆虛空の集現なり。金剛道に安住し、虛空界に變化す。念の如くに觀想せよ、彼の相の變化する所は、此れ正念正知なり。
彼の光明より生ずる所の、慧と方便と[八三]等持とは、一切性平等なり。心圓滿の相應を、影像中に觀想せよ。彼の正智は、三摩地の心想より出生す。常に總持を觀ずるに住す。金剛手は平等なり、正念は善く光曼拏羅と相應す。三摩地の光中に一切の障等を離る心は心の妙相に住す、月と金剛とは相應す。最上の句召となすは心の所作等の如し。大明相

【七九】六法。不淫、不盜、不殺、不虛妄語、不飲酒、不非時食なり。

【八〇】尋。vitarka 事理を尋究する麁性の作用なり。

【八一】伺。vicāra 事理を尋究する細性の作用なり。

【八二】五智。法界體性智、大圓鏡智、平等性智、妙觀察智、成所作智なり。

【八三】等持。三摩地 samādhi なり。心を一境に專注し、動亂せず、妄念を離るゝを云ふ。又心を正して持するを等と云ひ、功德を持するを持と云ふ。

應を行ずるも卽ち平等三昧なり。　行人は尊重を生じ、　歡喜は諸法を施す、　阿闍梨は加持を施して成就を得。

癡法と癡相應は、　卽ち癡法の集むる所なり。　儞戸迦の癡法は、　癡金剛の自性なり。
瞋法と瞋相應は、　卽ち瞋法の集むる所なり。　儞戸迦の瞋法は、　瞋金剛の自性なり。
貪法と貪相應は、　卽ち貪法の集むる所なり。　儞戸迦の貪法は、　貪金剛の自性なり。
慧法と慧相應とは、　卽ち金剛の集むる所なり。　彼の大明と賢聖と、　金剛祕密等を、　二手に互に相ひ授く、　如來の證明する所、　弟子灌(頂)を受け已る。　此れ阿闍梨の法なり。
諸佛の方便說なり。　此れ大明の最上なるものなり。

一切法は無二なり、　淸淨光明の相なり。　是の故に此れ相應す。　法に依りて常に作す所は、　此れ諸佛の說く所なり、　最上の大明行なり。　此を越するは愚癡なり。　最上の成就を得ず。　自性と自身法は、　五垢の常に染する所なり。　後大智に安住す。　常に五甘露を念ずべし、　彼の[七四]入嚩囉等は、　是の如き色相を見る、　大明法と相應す。

彼の五種の甘露は、　身を虛空中に起げ、　金剛の[七五]吽字より生ず、　還た復た空より下りて、　妙蓮華を出生す。　[七六]唵字を甘露法に、　彼れ復た中に入りて二祕密相應す。　水精色の光の如し。　是れを密中の密と名づく。　大智の日と爲す。　普ねく一切を句召し、　十方世界の中にても、　此の甘露法と同なり。　五精進も亦然り、　觀想して成就せよ。　三字より出生し、　及び[七七]虛空の種子なり。　彼の別法は成ぜず。　[七八]安怛哩陀那は、　此れ平等に轉ずる所なり。　是れ最上の所說にして、　佛の菩提の成就なり。

四種の方便あり、　菩提、　金剛等なり。　一切の相應の教は、　彼れと常に相應する所なり。
成就は第一となす、　近成就を第二となす、　成就性を第三となす、　大成就を第四となす、

【七四】入嚩羅。梵 jvala 光明と譯す。
【七五】吽。 hūṃ
【七六】唵。 oṃ
【七七】虛空の種子金剛薩埵の種子なり。
【七八】安怛哩陀那。梵 antardhāna 是れ隱形法なり。一字頂輪王瑜伽觀行儀軌に「眞言行者若安怛陀娜、應作是念。我云何能速取成就、常習三摩地。所謂一切法無色、猶如虛空性自性成就、作如是勝解」と。

貪輪より出生する所の、貪相應行は、心の一切の染に隨ふ。諸欲の相應行は、喜樂、

妙喜樂なり。常に作す所の嬉戲は。常に諸の樂境に施し、一切の行を隨順するなり。三界の諸の所生なる、天、阿修羅等は、刹那に所欲に隨ふ、此れを說きて貪の義と名づく。曼拏羅と灌頂とは、最上の勝事業とす、諸佛の加持する所は、諸の成就の事を集む、[五六]婆誐の曼拏羅は、菩提心の境界なり、[五七]爾欣の曼拏羅は諸の儀軌を出生す。一印及び諸印乃至蘊處界の彼の印の住する所は平等なり。曼拏羅の說く所の、[五八]鉤[五九]杖及び[六〇]戍羅、[六一]劍等を四隅に安し、[六二]吒枳と[六三]難拏と、[六四]大力及び[六五]大輪乃至[六六]遜婆等の此の諸の大忿怒金剛明王、六種の轉輪印、[六七]地等の諸賢聖、自印曼拏羅、劍及び[六八]尾拏等、[六九]播怛囉、

[七〇]鉢吒は甚深祕密の印なり。六種の大金剛と、諸佛及び菩薩忿怒明王との印、及び五種の印等と、一大無畏尊とは諸部の儀軌なり。妙華は常に出する所にして、彼の虛空界、

一切の[七一]踰室多、彼の身語心業は、諸部に依りて作す所なり。所有諸の佛塔は彼の無住處と說く。大智の薩埵法は、此れ智金剛念なり。文字種子生ず、三金剛の文字は、

身語心の眞實なり。[七二]必利拏の光明、十方に普ねく、諸金剛の大明を句召す。一切の金剛光は、彼の諸の金剛より生ず。[七三]賓拏嚕卑相と、彼の縛は所說を縛す。金剛の身語心は三業の曼拏羅なり。三業は印相にあらず。曼拏羅の儀軌と、灌頂に三種あり、此の教の中に說くが如し、彼の賢瓶灌頂を、斯れ名づけて第一と爲す、祕密灌頂の若きは、

此れ說きて第二となす。智慧(灌頂)を第三と爲す、次第に亦復た然り。最上の大明は、

彼彼の妙眼相を生ず、妙華は莊嚴する所なり。祕密の法より、祕密中の祕密は生ず。

所有灌頂法乃至、弟子に一切の大明等を授くると、此の一切金剛、最上の灌頂は諸の大明成就なり。諸の最上事業なり。深信と深正慧は、妙愛の法を成就す。彼の一の相

損害爲性」と。
【五四】癡。梵 moha 無明なり、根本煩惱を云ふ。
【五五】大食。貪心を治するに佛の大食を以てす。
【五六】婆欲曼拏羅、梵 bhaga-maṇḍala.
【五七】爾梵曼拏羅。梵 deha-maṇḍala.
【五八】鉤。梵 aṅkṣa.
【五九】杖。梵 daṇḍa.
【六〇】戍羅。梵 śūla 戟なり。
【六一】劍。梵 khaḍga.
【六二】吒枳。梵 tarki.
【六三】難拏。梵 nilndaṇḍa.
【六四】大力。梵 mahāvala.
【六五】大輪。梵 mahācakra.
【六六】遜婆。梵 sumbha. 降三世なり。
【六七】地等。地大。佛眼菩薩。水大。摩摩枳菩薩。火大、白衣菩薩。風大。多羅菩薩。虛空。金剛薩埵。
【六八】尾拏。梵 viṇa.
【六九】播怛囉。梵 pātra.
【七〇】鉢吒。梵 paṭa.
【七一】踰室多。梵 yosita.
【七二】必利拏。梵 premṇa.
【七三】賓拏嚕卑。梵 piṇḍarūpa.

明と明かに相應す、此れを持金剛と說く。
彼の富樂の四種は、自ら加持とする所なり、大無畏金剛は、一一の頂相を現ず。心印
及び大明は廣大の祕密法なり。
因果の二印相、果印の因も亦然り、觀ずる所非ずして、諸の儀軌の不生を成就す、四
分平等合すれば、持明士金剛なり。一切の身語心を、當に三隅に觀想すべし。十輻の
黃色輪の、中に彼の十輻輪を觀想し、中に[四八]十忿怒王を想へ、此れ卽ち彼の十智なり、
自在より出生する所なり。寂滅の金剛は、最上相より出生すと想へ。金剛の熾盛の光は、
不動の雲と變化し、智自性より生ずる所なり。甚深の祕密法は、無垢にして寂靜なり。
[四九]佛眼の觀察する所なり。二足の金剛步は、卽ち金剛の賢聖なり、足を擧げ、足を
下ぐる等は儀軌に住する所なり。諸の所說は三昧の儀式の如く成就す。彼の一切の廣大
の一切步の行く所なり。[五〇]色[五一]聲は諸欲を生じ、苦樂の二種の法は、常に自心に集る所な
り。[五二]貪・[五三]瞋・[五四]癡より生ずる所なり、貪金剛の[五五]大貪は、金剛寶より出生し、寶三昧
に安住す。諸欲の性は平等にして、有相、非相を離る。諸分は皆三字たり、所作、
所斷等、及び自ら變化する所なり、是の如き瞋及び癡は、三種より出生す。祕密印
は淨にあらず。金剛義の作す所なり。瞋輪より出生す。瞋の相應行等は、忿怒金剛が、
智金剛を破して成ずる所なり。彼の正覺の化する所の相應の義とは是の如し。
瞋金剛の作す所は、彼の三界の最勝なり。彼の刹那の間に、諸の破壞の事を作す。
癡輪より出生する所の、癡相應行等は、常に一切を棄捨す、莊嚴する所の珍寶を心
に大海の如く想へば、常に寶を出すに無盡なり。
一切の愚癡行は、覆沒して現ぜず。刹那間の所作も、心金剛に住する所なり。

【四八】十忿怒王と十智。焰鬘得迦、梵 yamāntaka—法智。梵 dharmajñāna. 無能勝。梵 aparājita — 他心智。梵 paraeittajñāna. 馬頭、梵 hayagrīva — 類智。梵 anvayajñāna. 甘露軍拏利。梵 vajrāmṛta — 世俗智。梵 saṃvṛtijñāna. 吒枳。梵 tarki — 苦智、梵 duḥkhajñāna. 大力。梵 mahābala — 集智。梵 samudayajñāna. 儞羅難拏。梵 nīlar ḍa — 滅智。梵 nirodhajñāna. 不動。梵 vajrācala 道智。梵 mārgajñāna. 大明輪。梵 vidyācakra 盡智。梵 kṣayajñāna. 降三世。梵 vajrahūṃ kara — 無生智。梵 anutpādajñāna.
【四九】佛眼、梵 locanābuddha 四明妃の一。
【五〇】色、梵 rūpa 眼根の對象。
【五一】聲、梵 śabda 耳根の對象。
【五二】貪。梵 rāga 五欲の境に染著して離れざるを云ふ。大乘五蘊論に「云何爲貪、謂於五取蘊染愛耽著爲性」と。
【五三】瞋。梵 krodha 身心をして熱惱せしめ諸の惡業を起さしめるを云ふ。大乘五蘊論に「云何爲瞋、謂於有情樂作

大樂を成就するを得。
癡及び最上の癡は、身邊の所作等なり、彼の癡法盡くれば、復た焰鬘尊と名づく。
瞋及び最上の瞋は、心邊の所作等なり、彼の瞋法盡くれば、復た無能勝と名づく。
貪法と最上の貪は、平等持に住する所なり、彼の貪法盡くれば、復た馬頭尊と名づく。
諸の煩惱若し盡くれば、諸の金剛も亦盡く、諸障盡くれば智は生ず、復た軍拏利と名づく。

彼の一切の煩惱と、一切の業は清淨なり。諸業清淨なるが故に、淨業の果は出生す、
貪染及び執取とは、諸相の動ずる所と爲す。
因は果を縛するも亦縛なり、六心の因の生ずる所なり、[四五]吒枳忿怒王が出づる所の六種なり。彼の三昧金剛の出す所も亦是の如し。
彼の[四六]地等の五種は、實際の如くに住する所なり。彼等大明王は、色金剛の六種なり。
此の金剛の諸念は、身語心金剛なり、大主宰を出生し悲方便は、彼の蘊・處・界の三法に於て取著を出生す。無所依に相應して、相應行を出生す。
一切の淨解脫は、一切の有相を離る。一切の心行等は、此れ普遍行と說く、諸れに緣生法及び諸の[四七]根境等あり。意法は平等にして、諸相及諸義、世間の行、信解を說く。所有三昧法は一切の金剛護なり、此れを大明行と說く。各自性に住し、心意の所行に非らず。持誦若しは成壞の此れを諸大明と說く。衆の巧業金剛、智種子の所成は、菩提の種にして無我。無我の自性を持すれば、諸の影像と變化す、三世の種子は生ず、一切の大明は皆眞實より出づる所なりと說く。
自心に住して加持し、三摩地に安住す。彼の諸の灌頂の法は、一切處の供養なり。大

【四五】吒枳。梵 ṭakki.
【四六】地等の五種。地、水、火、風、空なり。
【四七】根境。眼・耳・鼻・舌・身・意の五根と、色・聲・香・味・觸の五境なり。

諸の有情と諸佛法と、諸佛の自性等とを攝受す。此れを[三八]佛部の歌と說くなり。
心最上の寶と、平等に一切を利す。決定を受け、法を受く、此れを[三九]寶部の歌と說くなり。
諸の相と、諸の所作と識は、正慧より生ずる所なり。心に諸行の法を持す、此れを[四〇]羯磨部の歌(と說く)なり。
諸部は無二なり。諸法は無二なり等と說く。瞋法は識より生ずる所なり。心に因りて其に二あり、諸の色法は境像なり。彼の纏縛の自性、意等は受より生ずる所なり。同じく所作の自性なり。想は貪の我法を生じ、一切相を隨染す。諸行は常に憎嫉にして、緣ずる所に我法を生ず。菩提心の自性は、一切處に生ずる所なり、欲心は自ら、貪瞋等の自性と說かる。虛空三昧の相は、前業を現じて果を生ず。諸法は無二の智なり。外の我見を癡となす、彼が互に相ひ合する所を、此れを說きて瞋の義と爲す、貪力は諸相に隨ひ、智金剛の所說なり。極樂の自在の報は、三處悉く平等なり、貪瞋癡も亦然り、常に金剛樂に住す。
諸佛の大方便は、金剛手の正念なり。我法は壞す所なく、卽ち自性を生ずることもなし、彼の諸の性は平等なり、此れ[四一]焰鬘尊の義なり。
我法を了知するに非らず、文字は本も清淨なり、一切の三昧心なり、此れ[四二]無能勝の義なり。我法は語言にあらず、名色は自性なし、一切の三昧法なり。此れ[四三]馬頭尊の義なり。
我法は疑惑を離れ、色の自性は寂靜なり。衆の金剛三昧なり、此れ[四四]軍拏利の義なり。
彼は壞にあらず、知にあらず、語言にあらず、疑を離れたる、佛菩薩の識心なり、

[三八] 佛部。毘盧遮那如來を主尊とす。
[三九] 寶部。寶生如來を主尊とす。
[四〇] 羯磨部。不空成就如來を主尊とす。
[四一] 焰鬘尊。梵 yāmantaka.
[四二] 無能勝 梵。aparājitā.
[四三] 馬頭尊梵。hayagrīvā.
[四四] 軍拏利。梵 vajrāmṛta.

す。

當に知るべし。用ふる所の法の、祕密の數は是の如し。謂はく五法及び九(法)、十七(法)と十三(法)となり。諸佛菩薩等は、大成就を宣說するなり。四法十六法、八法幷びに十二(法)の、阿闍梨の事業は彼等の成就法なり。六種及び二種、十五(種)及び十四(種)の、[二八]彼の喝姹等の法は、近く儀軌を成就す。一(法)及び七法と、十一(法)及び十五(法)は、諸の成就の境想なり。儀軌の如く行ずる所の、諸の如來の事業は、攝受と非攝受と、善調と難調となり。諸の衆生の行相は、一切處に生ずる所なり。金剛儀軌の如く、彼の一切は成就す。諸教の說く所の如く、[二九]曼拏羅の相は、阿闍梨より出生するなり。大明句を尊重し、諸の弟子を攝受し、善く灌頂の義を說きて、諸の弟子に法を授けよ。諸佛及び菩薩は、善く說きて度脫せしむ。慧の方便等を持することは、此れを相應の義と說く。若し自性の智慧と、性相及び方便の、彼が說く所は[三〇]縛を離る。彼の縛を離れたる三種とは、[三一]阿陀囉の自性にして、彼の聖種と等同なり。自性の因と作す所は、諸の聖果と同じからず。阿陀囉の方便の三種の義を攝受することは、彼の[三二]五部の所作たり。自性は(その)一部に同じ。彼の金剛菩提を、最上眞實と說く。

眞實と五部とは、三部の祕密等を說く、諸の祕密の賢聖は、皆[三三]最上部に攝せらる。初なくして寂靜なり。離性と非性とは、[三四]大悲空の性に住す、此れを菩薩の念と名づく。自の[三五]三業金剛は、不懷の自性を得て、大明と相應す、此れを大明士と說く。五因の心法等を、此れを說きて金剛と名づく。

[三六]總持と妙歌とを說くは、[三七]金剛部より生ずと識れ、彼の十中の過去は、實際より出生する所なり。

【二八】喝姹。梵kadga??

【二九】曼拏羅 梵 maṇḍala の相、卽ち諸佛は本有無垢の清淨心なる金剛菩提心の發現と見、此の菩提心は阿闍梨により開發せらるるによる。

【三〇】縛。梵 bandhana 煩惱を云ふ。

【三一】阿陀囉。梵 ādhāra 妙樂？

【三二】五部。佛部、金剛部、蓮華部、寶部、羯磨部。

【三三】最上部。佛部なり。

【三四】大悲空性、大悲は定、空は慧。大悲は蓮華を以てこれに喩え、空は金剛を以てこれに喩え、この定慧相應を祕密として、これを菩薩の念とす。

【三五】三業金剛。身語心の三業よく諸の障覆破する故金剛に喩えたるなり。

【三六】總持。梵 dhāraṇī なり。

【三七】金剛部は阿閦如來を主尊とす、

拏利と名づくるや。云何が普遍なりや。云何が大明行なりや。我見とは復た云何、憎嫉法とは何の義なるや。云何が眞の持誦なりや。云何が深祕密なるや。云何が諸の儀式なりや。貪瞋癡の大法(なりや)。衆生は云何がことを作すや。云何が曼拏羅なりや。云何が印相と說くや。云何が華葉と說くや。云何が諸の塔廟なりや。云何が智輪と說くや。云何が大明句なりや。云何が[二四]祖捺那なりや。云何が[二五]必利拏なりや。云何が召句と名づくるや。云何が大明の縛なりや。云何が灌頂と名づくるや。云何が大明法なりや。云何が五甘露なりや、何をか五精進と名づくるや。云何成就の義なりや。云何が最上の法なりや。方便には幾種ありや。何をか[二六]烏卑夜と名づくるや。當に云何に了知すべきか。一切の相應輪、乃至祕密中種々の儀軌等は、乃ち諸の作す所の事は(何なりや)。是の如き等の諸法の、一一の義は云何。

爾の時、一切如來は諸の菩薩が是の問を發したるを聞きて、[二七]須臾の間默然として住せり。是の時、諸の菩薩は復た諸佛に白して言さく。正覺善逝よ、唯、願くは歡喜し我等を悲愍し。我が問ふ所の如くに、我がために宣說せよ。

爾の時、一切如來は復た諸の菩薩に謂ひて言はく。汝等は應に咸金剛三業に安住して、諸法の自性なる大智の根本を善く持し、然して當に諦かに汝の問ふ所の義を聽けよ。

是の時、諸の菩薩衆は、諸の如來の無上の語言を聞きて、咸各頂受し、即時に金剛薩埵の堅固三業に、安住して、諸佛に白して言さく。善い哉、諸佛よ、善い哉、善逝よ、我等は諦かに聽く。唯、願くは、善く說け、是の語をなして、默然として住せり。

爾の時、一切如來は皆大悲加持願力に住し、異口同音に是の問に答へて言はく。

身語心の三種を、此れを祕密と名づくるなり。諸佛菩薩等を、此れを名づけて集會と爲

【二四】祖捺那。梵 codana.
【二五】必利拏。梵 premṛa.
【二六】烏卑夜。梵 upāya.
【二七】須臾。梵 muhūrta の譯。時の名。一晝夜を婆尾路利。微誓夜、補瑟拏、怛跛婆路。暱嚕醯爾。婆跛。蘇波怛羅。暱嚕拏、暱嚕訶摩。蘇迷藥。忙揭羅、楞比計沙拏。鉢羅閼鉢。阿濕尼、味路喇。輪羅、阿摩羅。三十須臾に別つ。(蕤呬經卷上揀擇地相品)。

哉、寂靜、　諸法の根本、　大なる哉、最上の大涅槃界。　大なる哉、諸の輪廻の道を止息せることよ。

是の時、一切如來は、慈氏菩薩の是の稱讚せるを聞きて、慈氏に告げて言はく。汝の言ふ所の如し、是の如し、是の如し。

爾の時、諸の大菩薩摩訶薩の衆は、又復た雲集して、各最上祕密の供養を以て、一切如來に供養をなして、咸各恭敬し、歸命し、頂禮して、異口同音に是の如き言を作す。大なる哉、深妙の極、聞は得難たし。是の如き祕密大集會等の祕密の行相は、諸法中に於て最尊、最上なり。諸佛の大導師の語は、皆如實に住せり。堅固の大智は衆生に利益をなす。我等、今は略して問ふ所あり。願くは佛の慈悲をもて、我が爲めに宣說せよ。

是の時、一切如來は讃じて言はく。善い哉、善い哉、諸の菩薩摩訶薩よ、善く最上の大功德を作し、所有一切の祕密の句義を、恣まに汝問へ。

爾の時、諸の菩薩摩訶薩は、皆大歡喜して、熙怡の眼を作し、諦く諸佛を觀、又復た各各に恭敬し、頂禮して、是の問言を作す。

[三]云何が祕密と名づくるや。　何をか大集會と名づくるや。　云何が用ふる所の法なりや、　何をか相應の義と名づくるや。　眞實には幾種ありや。　復た幾種の祕密(ありや)。　云何が密中の密なりや。　最上に復た幾ばくの義(ありや)。　云何が菩提心なりや。　云何が大明士なりや。　佛部、金剛部、　蓮華部、　及び彼の羯磨部の此等の諸部の中の、　彼の微妙の歌音は、當に云何が宣說を(なすや)。　癡の法とは云何が義(なるや)、　瞋の義とは復た云何。　云何が貪法と說くや。　云何が金剛呪なるや、　云何が大樂法なるや。　云何が諸の正念なるや。云何が焰鬘尊なるや。　何をか無能勝と名づくるや。　云何が馬頭と名づくるや。　何をか軍

【三】以下第十七品までの說を攝して問言とせり。

應に此の一切如來の金剛三業最上甚深祕密の正法にあたるべし。諦かに信じて、諦かに受し。理の如くに修習せよ。何を以ての故に、此の法は甚深の極にして得難きが故に。

是の時、世尊は卽ち會中に於て又金剛法菩薩に告げて言はく、善男子よ、汝は已に諸法に於て、自在を得て、已に諸佛の金剛灌頂を受けたり、汝當に此の祕密の法を受持すべし。時に金剛法菩薩摩訶薩は、佛の敎敕を受けて默然として住せり。

爾の時、諸佛如來は、復た自の身語心金剛より、彼の三金剛大士の文字と、正句三昧に入りて住せり。

〔二〇〕又復た、世尊よ、大毘盧遮那金剛如來は、卽ち三界の一切の金剛祕密三業の行、一切如來の身平等の中に默然として住せり。

又復た、世尊よ、無量壽語金剛如來は、卽ち三界の一切の語金剛の行、一切如來語平等の中に默然として住せり。

又復た、世尊よ、阿閦心金剛如來は、卽ち三界の一切金剛行の一切如來平等の中に默然として住せり。

〔二一〕宣說一切祕密行金剛加持分第十八

爾の時、慈氏菩薩摩訶薩は、大會中に在りて、諸の如來を見て、一切如來の灌頂の身語心の祕密法門を宣說せり。語言せる所の如く。彼の三昧の如く、如實に見聞して、是の如き言を作す。

大なる哉、普賢、〔二二〕清淨法界は最上甚深なり。身語心業の三種金剛は、祕密の勝行なり。
廣大普遍なる心金剛法は、一切衆生と、三世を出生す。金剛の自性は、大菩提と金剛
正句を得、諸佛の金剛は、廣大威力あり。大なる哉、深妙の此の最上の智、大なる

〔二〇〕第七卷の最終の句と同似なり。是れ此の經は第六卷にして終れるものなるも後第七卷添加されたるならん。

〔二一〕梵 māha-tantra-raje sarva guhya-nideśa-vajra-jñā-nādhiṣṭhāna nāmāṣṭadaśaḥ paṭalaḥ 藏 gsaṅ-ba-thams-cad ston-pa-rdo-rjeḥi ye-śes-kyis byin gyis-rlob-pa. 但し西藏譯は北京版のみに第十八品はありて、ナルタン版、デルケイ版にはなし。蓋しこの品は重ねて前說を說けるものなり。

〔二二〕清淨法界。梵 dharma-dhātu-svabhāva-jñāna 藏 rdsogs-pa-chos-dbyiṅs 法界體性智なり。

汝、金剛手よ、大利樂は祕密の勝三昧に安住し、諸佛の敬愛心を出生して、一切を平等に悲愍す。所有大欲の功德藏は一切の勝珍寶を具足す、故に歡喜し復た稱讃せり、所欲に隨順して攝受す。

爾の時、諸佛の大祕密主大毘盧遮那金剛如來は、卽ち[四]一切大欲性自在金剛吉祥三摩地に入る。定より出でて、卽ち一切如來の出生正行大欲自性三昧中に、默然として住す。

是の時、滿空界の一切如來は各金剛三業を以て、最上甚深祕密中の祕密金剛甘露大三昧行に安住す。是の時、空中に其の相を出現す、是の滿空界の所有一切衆生は、皆悉く三身平等より出生せる金剛吉祥觸法の自性に安住し、卽ち一切如來の應供正等正覺三金剛智を得、皆[五]普賢清淨法界に住して、一切如來の身語心金剛の灌頂を得。

爾の時、諸佛の大祕密主大毘盧遮那金剛如來は、諸の如來に謂ふて言はく。諸佛は世尊の、今是の相を見て、佛法の平等性に住せざるや。諸佛は答へて言はく。已に世尊を見、[六]善逝を見たり。此れ是の如き相の一切は、皆是れ諸佛如來の金剛智行なり。

是の時、諸佛は皆悉く一切如來の上首なる[七]明妃の祕密行に安住して、是の讃言を作す。希有なり世尊。希有なり善逝。此れ是の如き無貪の文字を句と名づく。善く佛の菩提道に往くなり。

爾の時、毘盧遮那金剛如來は諸佛に謂ひて言はく。諸佛は當に虛空金剛三昧の自性平等なるを知るべし。彼の一切法は[八]色蘊にあらず、[九]受蘊にあらず、[一〇]想蘊にあらず、[一一]行蘊にあらず、[一二]識蘊にもあらず。[一三]處にあらず、[一四]界にあらず、取相等にもあらず。[一五]貪[一六]瞋[一七]癡にあらず、[一八]法にあらず、[一九]非法にもあらず。當に是れを住なりと知るべし。

時に、諸の如來は是の語を聞きて默然として住せり。

爾の時、大毘盧遮那金剛如來は復た諸佛菩薩に謂ひて言はく、所有一切世界中の一切の菩薩は、

【四】一切大欲性自在金剛吉祥地三摩地。梵 sarva-kāmo-pabhoga śriya-samādhi.
【五】金剛薩埵の瑜伽三摩地を修するに由りて妙適の淸淨を獲、又普賢菩薩の位を得るなり(理趣釋卷上)。
【六】善逝。梵 sugata 藏 bde-bar-gśegs-pa 如來名號の一。
【七】明妃、佛眼、摩摩枳、白衣、多羅を云ふ。
【八】非色蘊。梵 na-rūpa skandha.
【九】非受蘊。梵 na-vedanā-skandha.
【一〇】非想蘊。梵 na-saṃjñā-skandha.
【一一】非行蘊。梵 na-saṃskāra-skandha.
【一二】非識蘊。梵 na-vijñāna-skandha.
【一三】非處。梵 na-dhātu.
【一四】非界。梵 na-āyatana.
【一五】非貪。梵 na-rāga.
【一六】非瞋。梵 na-dveṣa.
【一七】非癡。梵 na-moha.
【一八】非法。梵 na-dharma.
【一九】非非法。梵 na-adharma.

一切如來三昧法金剛加持王分第十七之餘

爾の時、[一]佛眼菩薩摩訶薩は、一切如來の身語心の祕密より出生して、自の三業を以て、大衆中に於て、歡喜して一切如來大祕密主なる金剛手菩薩を稱讃して、是の如き言を作す。

汝、金剛手大自在は、最上の金剛心に善住し、諸の欲する所、求むる所に隨ひて、一切の衆生界を救度し、自性の眞實法、最上金剛大親愛を欲樂せり。是の故に歸命す、復た稱讃す。唯だ法に依りて我を攝受せんことを願ふ。

爾の時、[二]摩摩枳菩薩摩訶薩は、一切如來の身語心の祕密より出生し、大衆中に歡喜し、一切如來大祕密主なる金剛手菩薩を稱讃し、是の如き言を作す。

汝、金剛手は、衆生を利し、金剛心の大輪に善住し、佛菩薩の最上心より、金剛第一義を出生せり。諸の貪と法性の貪とは平等なり。我が所欲の義に隨ふも亦然り、是の故に歸命す、復た稱讃す。唯だ法に依りて我を攝受せんことを願ふ。

爾の時、[三]觀自在菩薩摩訶薩は、大衆中に於て、歡喜し、諸佛の大祕密主なる金剛手菩薩に、是の如き言を作す。

汝、金剛手の大悲愍は、金剛語を以て廣く利樂し、世間の諸の義利に隨順して、常に世間の事を宣說せる所なり。所有一切の樂の自性は皆普賢の眞實行に攝せらる。是の故に歸命す、復た稱讃す。唯、法に依りて我を攝受せんことを願ふ。

爾の時、一切如來は金剛身語心業平等より極善樂の意を出生し、歡喜して、諸佛大祕密主なる金剛手菩薩を稱讃し、是の如き言を作す。

【一】佛眼菩薩。梵 locanābuddha 藏 saṅs-rgyas-spyan.

【二】摩摩枳菩薩。梵 māmakī.

【三】觀自在菩薩。梵 avalokiteśvara 藏 spyan-ras-gzigs-dbaṅ-phyug. 般若理趣釋卷下に「密意說二根交會五塵成大佛事、以此三摩地、奉獻一切如來、亦能從忘所起雜染速滅、疾證本性清淨法門、是故觀自在菩薩」と。

て悲泣することを止むべきか。何にして三苦惱の想を生ぜざるを能ふや。我は衆生の無智所障を念じて、三密の句に信解を生ぜず。乃至名字尙ほ聞くを得ずと。諸如來は言はく。諸の善男子よ。所得の文字と句の如きは、皆悉く平等なり。知るにあらざれども知るべく、聞くにあらざれども、聞くべし。所有一切如來、一切の菩薩は、其の祕密文字と句に於て、悉く所得なく、所覺なし。何を以ての故に、三密の文字と句は、自性淸淨の故に。是の時、諸の菩薩摩訶薩は是の語を聞きて、默然として住せり。

加持すること八百遍せば、三種の成就及び安膳那法を得、此れ即ち諸佛の普賢祕密行と名づく。

爾の時、一切如來は、金剛手菩薩に問ふて言はく。諸の菩薩摩訶薩は、云何にして祕密の文字と句を當に具足するを得、能く一切如來の祕密三昧行に、堅固信解、如實觀想すべきや。是の時、金剛手菩薩は言はく、諸佛世尊よ、若し諸の菩薩摩訶薩が、其の三種の祕密文字と句に於て、具足し得たる者は、即ち能く彼の一切如來の祕密三昧行に於て、堅固信解、如實觀想なり。諸の如來は言はく、何等をか三となす、金剛手菩薩は言はく、所謂一切如來の身金剛、一切如來の語金剛、一切如來の心金剛、此等を名づけて三種の祕密文字と句となす。若し能く是の如く具足し得たる者を、彼の諸の菩薩摩訶薩は、乃ち能く彼の一切如來の三昧行に於て、堅固信解、如實觀想なりとす。是の時、諸は咸各金剛手菩薩を稱讚して、默然として住せり。

爾の時、金剛手菩薩は、彼の一切如來及び諸の菩薩に告げて言はく、諸の大士よ、當に知るべし、此の法は甚深祕密希有なり。過去、不可較、不可計の微塵數等の[九八]劫を過ぎ、[九九]燃燈如來應供正等正覺出生より已後、乃至[一〇〇]迦葉如來が世間に出現しても、是等の諸佛は皆此の祕密法を宣說せず。何を以ての故に、彼の時、衆生は信解なき故に、此の祕密功德の句義を了知し能はず。是の義を以ての故に、彼の時の中の、諸佛如來は皆最上大乘祕密集會の諸佛の菩提法を宣說せず。乃至[一〇一]剎那[一〇二]羅嚩[一〇三]謨呼栗多、暫く此の祕密法を聞くを得ず。設へ無數の殑伽沙等の劫中に於て、勤勞、苦切にして佛菩提を求むるも得る能はず。是れに由りて此の大祕密法を聞くを得ざる故に、是の故に諸佛は當に此の祕密法は甚だ得難しと知る。爾の時、會中の諸の大菩薩は是の語を聞きて、即時に各各涕淚、悲泣せり。時に諸の如來は彼の菩薩に告げて言はく。止めよ善男子よ、汝等は涕淚、悲泣して、[一〇四]三苦惱の想を起すべからず。時に諸の菩薩は諸佛に白して言はく。諸佛世尊よ我は今云何にし

【九八】 劫。梵 kalpa 藏 bskal-pa. 劫に種々あり。大劫 梵 mahā-kalpa 藏 bskal-pa-chen-po 賢劫 梵 bhadra-kalpa 藏 bskal-pa-bzaṅ-po 中劫 梵 antara-kalpa 藏 bar-gyi-bskal-pa 開劫 梵 vivarta-kalpa 藏 ḥchogs-paḥi bskal-pa 怖劫 梵 saṃvarta-kalpa 藏 ḥjig-paḥi bskal-pa 干劫 梵 śastrāntara-kalpa 藏 mtshon-gyi bskal-pa

【九九】 燃燈如來。梵 dīpaṃ=kara

【一〇〇】 迦葉如來。梵 kāśyapa 藏 skad-cig.

【一〇一】 剎那。梵 kṣaṇa

【一〇二】 羅嚩。梵 lava 藏 than-cig. 頃刻なり。

【一〇三】 謨呼栗多。梵 muhūr=ta 藏 yud-tsam 暫時なり。

【一〇四】 三苦惱。苦苦 梵 duḥkhaduḥkhatā 行苦 梵 saṃskāraduḥkhatā 壞苦 梵 vipariṇāmaduḥkhatā.

身語心は自在たり、三密は住も生もなし、諸の求むる所を成就す、違越者は成ぜず。

又復た自の身語心業を以て、一切の行人は金剛薩埵の最上法を宣說す。

當に[九〇]一肘量ばかりに、頂に曼拏羅を作るべし、中に[九一]唵字を現ぜよ、勝金剛と相應して、刹那に光明を現ず、身語心は善く住して、所作は皆成就す。

又復た自の身語心業を以て、一切の[九二]持明祕密三業法を宣說す。

諸の持明人あれば、諸の有相を遠離して、取著の心を生ずる勿れ、塔廟等を造立して、經典を讀誦する勿れ、曼拏羅を建つる勿れ。若し[九三]自性と相應せば、斯れ即ち最上と爲す。

又復た自の身語心業を以て、一切の毒禁を銷除する禁伏句召祕密法を宣說す。

大輪中に安住して、白色の焰光は熾盛にして周遍す、及び黃色の光等とを想へ。此れ即ち三金剛三昧の大光明なり。彼の三祕密なり、種子は出生する所なり。

又復た自の身語心業を以て、一切如來の身語心輪金剛と和合して擁護をなす大明を宣說して曰はく。

[九四]唵引一句　虎嚕虎嚕二底瑟吒二合底瑟吒二合三　滿馱滿馱四　賀那賀那五　捺賀捺賀六　阿蜜哩二合帝吽引發吒半音七

此の大明は金剛羯磨輪に安住す。輪中に吽字を現じ、中に復た其の名と大明の字と正句とを書け。法に依りて常に安住せば、此れ即ち一切の明、三祕密は住せざるなし。

又復た自の身語心業を以て、金剛[九五]安膳那法を宣說す。

行人は當に四衢或は樹下乃至天廟等に往詣して、安膳那法を作すべし。當に葛波羅に[九六]嚕地囉等を置けるを用ふべく、黑月十四日、其の[九七]中夜時に於て、本部の大明を誦し、

【九〇】一肘量。梵 hasta. 藏 lag-pa. 七麥を一指節とし、三節を一指とし、三十四指を一肘とす。(俱舍論第十二)

【九一】唵。梵 oṃ

【九二】持明人。梵 vidya-puruṣa.

【九三】自性は無相、無所得なり。

【九四】oṃ hulu hulu tiṣṭha vandha vandha hana hana daha daha amṛte hūṃ phaṭ svāhā. & hūṃ

【九五】安膳那。梵 añjana 藏 mig-sman. 安膳那はもと眼藥の名なり。八十華嚴第七十八に、この藥を目に塗れば魔界に入るも魔衆見る能はずとあれば、これ一種の隱形法ならん。

【九六】嚕地囉。梵 rudira 血液なり。黑月。梵 kṛṣṇa-pakṣa 下半月なり。

【九七】中夜。梵 madyame-yāme. 藏 gun-ma-thun. 夜の二更を云ふ。

の句を出生す。菩提を成就し得て、衆生のために利益す。身語心の成就は、諸の成就中の勝なり。一切如來の心は、卽ち無上菩提なり。

此れを一切佛菩薩の大輪三昧三摩地出生の大曼拏羅と名づく。

爾の時、諸佛の大祕密主なる金剛手菩薩は、復た自の身語心業を以て、一切如來の金剛相應、金剛三業祕密の大明を宣說して曰はく。

〔八六〕唵引一句 吽引二 怛嚩二合三 紇哩二合引四 亢五

當に虛空界の、祕密曼拏羅は、三密心より出生すと想へ。金剛薩埵は、大忿怒相を現じ、青蓮華色の如しと想へ。法に依りて四臂は、〔八七〕葛波羅を執持し、五種の光明を現ずと想へ。復た自の舌は、金剛定と相應し甘露法の句召、〔八八〕三叉金剛杵、及び〔八九〕金剛鈎等は、金剛と相應し、諸の佛身を成就すと觀想せよ。

又復た自の身語心業を以て、金剛飮食三昧法を宣說せよ。

若し飮食等に於て、法に依りて當に食せば、甘と相應して、諸の儀軌を越えず。

又復た自の身語心業を以て、一切如來の最上三業供養法を宣說す。

五種の供養法は、最勝の供養と作す。此の一切の金剛は、難行三昧行なり。

又復た自の身語心業を以て、三業祕密の供養法を宣說す。

二處相應して、當に彼の甘露を受くべし。儀軌の如く供養せば、佛の菩提を成就するを得。

又復た自の身語心業を以て、一切如來の三業行法を宣說す。

衆生界は無邊なり、平等持は普遍し、三金剛三昧は大希有に住せしむ。

又復た自の身語心業を以て、一切行人は最上三業の法を宣說す。

す。

【八五】阿娑那。梵 āsana 諸尊の尊位なり。

【八六】hūṃ hri khaṃ

【八七】葛波羅。梵 kapāla

【八八】三叉金剛杵。梵 triśūla.

【八九】金剛鈎。梵 vajrāṅkuśa

して、一切の福蘊なり、彼の[七九]福蘊も皆阿闍梨の毛孔より生ずる所なり、何を以ての故に、善男子よ、彼の菩提心より諸佛智を出生す、眞實の生ずる所は眞實に住す、乃至一切智智の相も亦復た是の如し。爾の時、慈氏菩薩摩訶薩は、是の說を聞きて、驚怖心を生じ、默然として住せり。

爾の時、世尊、阿閦如來・寶生如來・無量壽如來・不空成就如來は、即時に倶に一切執金剛の[八〇]成就勤求三昧金剛三摩地に入る。是れより出でて、咸是の言を作す。汝、諸の菩薩よ、今當に諦聽せよ。所有十方の一切如來、三世の智は、祕密集會より出生する所なり。來りて金剛灌頂阿闍梨を供養し、又復た恭敬稱讃せり。何を以ての故に、諸の善男子よ、金剛阿闍梨は是れ大執金剛なり。是れ即ち諸佛の大智主なり。是の時、彼の諸の大菩薩は、諸の如來に向ふて是の問を發して言はく。諸佛世尊、所有一切如來の身語心の三密の金剛成就は、當に何に依りて住するや。諸佛は答へて言はく。如來の[八一]三密は當に阿闍梨の[八二]金剛身語心に依りて住すべし。又問ふ。即ち此の身語心は、復た何に住すべきか。答へて言はく、此れ即ち無所有、無所著なり。時に諸の菩薩は是の說を聞きて默然として住せり。

爾の時、世尊、大毘盧遮那金剛如來は、又復た諸の如來及び諸の菩薩に告げて言はく。諦かに聽け、諦かに聽け。諸の佛菩薩よ、我今一切の佛菩薩の[八三]金剛三摩地より大曼拏羅を出生せるせることを宣說す。是の時、諸の佛及び諸の菩薩は皆悉く恭敬して是の如き言を作す。善い哉、大執金剛よ、善く說けり、世尊は。善く說けり、善逝は、大曼拏羅を。爾の時、世尊、大毘盧遮那金剛如來は、是の[八四]伽陀を說いて曰はく。

空は淨法界の如し、　佛曼拏羅を想へ、　四方は淨妙の相なり。　定金剛と金剛曼拏羅　[八五]阿娑那輪等と及び種種の供養を觀想せよ。　法に依りて常に作す所あらば、　阿闍梨の心に住せば、　平等の灌頂法なり。　虛空界中に、　諸佛は皆遍滿すと想へ。　諸の儀軌は三種の灌頂

---

rnam-par-sgrol-ma

【七三】虛空。梵 ākāśam 藏 mnamkhaḥ

【七四】金剛薩埵。梵 vajra-sattva 藏 rdo-rje sems-dpaḥ

【七五】宮廣大自在。梵 bhuvaneśvara

【七六】平等行三摩地。梵 samatā-vihāra-samādhi.

【七七】慈氏菩薩。梵 maitreya 藏 byams-pa. 彌勒菩薩を云ふ。

【七八】阿闍梨。梵 ācārya 藏 slob-dpon 軌範師又は正行と譯し、曼拏羅及び諸尊の印言等に通じ、傳法灌頂を受けたるもの、又佛菩薩等も云ふことあり。

【七九】福蘊。梵 puṇya-skandha. 藏 bsod-nams-kyi phuṅ-po

【八〇】成就勤求三昧金剛三摩地。梵 siddhi-samayālambana-vajra-samādhi.

【八一】三密。身密、語密、意密。

【八二】金剛身語心。身語心の三密本有常住にして堅固なれば、何物も破壞する能はず、且つ又三密は能く煩惱を摧破するが故に金剛に喩へるをなり。

【八三】金剛三摩地。三卷教王經には毘盧遮那如來金剛三摩地に入つて、三十七尊を出生せるを說けり。

【八四】伽陀。梵 gāthā 頌と譯

所有諸の三昧は、三身金剛に住す。必利拏三昧なり、心金剛には諍なし。此れを議佛の[六二]三密金剛三昧と名づく。

又復た自の身語心業を以て、一切如來の金剛祕密法を宣說す。[六三]五如來の、轉ずる所の、[六四]五蘊の義平等は、彼の金剛處法、菩薩の曼拏羅なり。又復た自の身語心業を以て、三果の三昧輪祕密法を宣說す。[六五]地大は[六六]佛眼尊なり、[六七]水大は[六八]摩摩枳なり、[六九]火大は[七〇]白衣尊なり、[七一]風大は[七二]多羅等なり、[七三]虛空の金剛界は、即ち[七四]金剛薩埵なり、當に此の諸の大は、即ち諸の菩薩を現ずと知るべし。

此れを一切如來の[七五]宮廣大自在金剛大士三昧と名づく。

爾の時、世尊よ、一切如來は身語心業に住す、大毘盧遮那金剛如來は、即ち一切如來[七六]平等行三摩地に入る、定より出でて、普ねく一切如來及び衆會を觀て、默然として住す。

爾の時、[七七]慈氏菩薩摩訶薩は、即ち起ちて世尊大毘盧遮那及び諸の如來に恭敬頂禮して、是の如き言をなす。所有一切如來の身語心金剛祕密集會の一切の灌頂の義は、一切如來、一切菩薩乃至金剛阿闍梨は、當に云何に見るべきや。佛言はく、善男子よ、所有諸佛、菩薩乃至金剛[七八]阿闍梨等は、皆金剛菩提心に住す。當に是の如く見るべし、何を以ての故に、彼の菩提心と阿闍梨とは無二無二相なり。善男子よ、我今略して說く、所有十方の世界の諸佛如來及び諸の菩薩は、現に衆生に說法し、教化に住せり、彼の一切は三時中に於て、阿闍梨の所に來詣す。諸の佛菩薩は、供養の雲と變化して、供養を爲す。供養を作し已りて、諸佛刹に還る、時に阿闍梨は語金剛より出でて、是く言はく、一切如來は是れ我が父なり、是れ我が母なり、一切如來は是れ我が師なり、慈氏よ、當に知るべし、所有十方の一切の諸佛如來及び諸佛の所行、乃至諸佛如來の身語心は、金剛より生ずる所に

【六二】三密金剛三昧。梵 tri-vajra-samaya.

【六三】五如來。
毘盧遮那 梵 vairocana
阿閦如來 梵 akṣobhya.
寶生如來 梵 ratnasambhava
無量壽如來 梵 amitāyus
不空成就如來 梵 amogha siddhi

【六四】五蘊。梵 pañca skhanda
色蘊 梵 rūpaskhandha 藏 gzugs-kyi-phuṅ-po
受蘊 梵 vedanāskhandha 藏 tshor-boḥi-phuṅ-po
想蘊 梵 samjñāskhandha 藏 hdu-śes-kyi phuṅ-po
行蘊 梵 saṃskāraskhandha 藏 hdu-byed-kyi phuṅ-po
識蘊 梵 vijñānaskhandha 藏 rnam-śes-kyi phuṅ-po

【六五】地大。梵 pṛthivi-dhātu 藏 sahi-khams

【六六】佛眼尊。梵 locanādevi 藏 rnam-par-lhamo-spyan

【六七】火大。梵 tejo-dhātū 藏 mehi-khams.

【六八】摩摩枳。梵 mamāki.

【六九】水大。梵 abdhātū 藏 chuhi-khams.

【七〇】白衣尊。梵 paṇḍara-devi 藏 lha-mo-gos-dkar.

【七一】風大。梵 vāyu-dhātū 藏 rluṅ gi-khams.

【七二】多羅尊。梵 tārāni 藏

爾の時、金剛手は三界に尊敬せられ、一切の佛に稱讃せらる。[五三]廣大祕密主は、[五四]三密堅固に住して、三金剛自在なり。持明大士を想へ、一切の成就を說くに、宗金剛界に住す、佛曼拏羅を想へ、中に身金剛を見ず。金剛頂を觀想するに三面、三身を生じ、不思議の變化をなす。持金剛の大輪は、速かに大菩提を得、[五五]諸部の所有法は、此れ祕密なり、若し別法によりて觀想せば、彼は成就を得ず。

此れを[五六]持明大士の金剛祕密法と名づく。

空界に住して、[五七]部多[五八]囉倪の衆を觀想し、是の如き歡喜を作せ。金剛の三相を現ぜよ、若し是の如く觀想せば、菩薩は大いに敬愛し、七日の中に、三身成就を得。

爾の時、諸佛の大祕密主なる金剛手菩薩は、復た自の身語心業を以て、一切行人の金剛祕密法を宣說す。

自の金剛三業は、三昧の大印の義なり。諸の儀軌の相を想ひ、佛性を成就することを信ぜよ。

又復た自の身語心業を以て、一切行人の金剛祕密法を宣說す。

設へ[五九]印相を結ばずとも、諸の大明を持誦せば、此れ三昧を越へずして、菩提を成就するを得。

又復た自の身語心業を以て、諸佛の三昧の祕密法を宣說す。

彼の五種の甘露に疑謗を生ずる勿れしめらる。此れ[六〇]三密金剛を、依法に用ふ所なり。

又復た自の身語心業を以て、語金剛の三昧祕密法を宣說す。

所有三界中の、一切の[六一]踰室多は彼の祕密法なり、語金剛には謗なし。

又復た自の身語心業を以て、心金剛の三昧祕密法を宣說す。

【五三】廣大祕密主。金剛手菩薩卽金剛薩埵を云ふ。

【五四】三密佛の身語心を云ふ。

【五五】諸部。佛部、金剛部、蓮華部、寶部、羯磨部等なり。

【五六】持明大士金剛祕密法。梵 vidyā-puruṣa-vajra-guhya.

【五七】部多。梵 bhūta

【五八】囉倪。梵 rājñī

【五九】印相。梵 mudrā 印契なり。

【六〇】三密金剛。佛の身語心の金剛なり。

【六一】踰室多。梵 yoṣit

る所の諸の文字句は皆虚妄の攝する所なり。

是の時、會中に大菩薩あり、其れを[五〇]梵初と名づく。復た已に大神通智を得たりと雖も、一切の法相に於て、自性を未だ了知し能はず。是の說を聞きて、是の問言を作す。云何が金剛大我の法等と、金剛眞實の祕密文字を、宣說する所あるや。爾の時、諸の如來は彼の菩薩に告げて言はく。所得の法の如きは、當に實に住(するものなり)と知るべし。梵初菩薩は又復た白して言さく、諸佛世尊よ、我は身語心の金剛祕密文に於ては、如實に得る所ありと雖も、彼の金剛の菩提に於ては、尙ほ了知せず、願くは諸の如來よ我が爲に開示せよ。諸佛は答へて言はく、善男子よ、文字の自性は、眞實もなく、所生もなし。彼の金剛菩提乃至衆生界を、盡く攝受する所なり。普ねく一切をして諸佛の金剛菩提に安住せしめよ。何を以て故に、彼の諸の衆生の得る所の身語心の金剛智は、皆即ち三身の金剛法性の所作なり。

爾の時、諸佛の大祕密主なる金剛手菩薩摩訶薩は、又復た諸の如來及び諸の菩薩に向ひて是の如き言を作す。法界は無住なり、諸法は無我なり、自性は清淨なり、無住の中の金剛より、諸法の儀軌を出生す。所行ありと雖も、所行に非らず。時に諸の如來は咸各金剛手菩薩の是の如き言を稱讚せり。大士よ、所有一切如來の身語心金剛の一切成就と、乃至[五一]三界の一切法は何の語言に依りてか住するや。金剛手菩薩は言はく。一切如來よ、金剛成就の[五二]一切智智と、乃至三界の一切法とは、皆金剛身語心に依りて住す。諸の如來は言はく。身語心は當に何に依りて住するや。金剛手菩薩は言はく、虛空に住するが如し。諸の如來は言はく、虛空は何所に住するや。金剛手菩薩言はく。虛空は住する所なし、空は住する所なきが故に、諸法も亦然り。時に諸の如來は希有の心を生じて是の如き言を作す。大なる哉、大なる哉、金剛薩埵は能く善く宣說せり。是の如し、是の如し。若し身語心が無所有なれば、彼の色相も亦不可得なり。

【五〇】 梵初。梵 brahmādya = veda の思想なり、卽ち宇宙の太源生主を云ふ。これを菩薩の名として、これに對し諸法本不生の理を說明するなり。

【五一】 三界。欲界、色界、無色界なり。翻譯名義集第三に「一、欲界、欲有三種、一、飮食、二、睡眠、三、婬欲、於此三事、希須名欲、若有情界、從他化天、至無間獄、若器世界、乃至風輪、皆欲界攝。二、色界者、形質淸淨身相殊勝、未出色籠故名色界。三、無色界者、於彼界中、色非有故」と。

【五二】 一切智。梵 sarva-jñāna 藏 thams-cad-mkhyen-pahi ye-śes. 佛の自證不共の智なり。

金剛甘露は、　虛空界に遍滿すと想へ。　三金剛の授かる所は、　勝三昧常に住す。
又復た一切金剛[四七]安怛陀那三昧に安住して、自の身語心業より、是の如き言を說く。
所有祕密の法は、四時に最上となす、　彼の三昧に隨順すれば、　卽ち金剛圓滿す。
又復た虛空持明の三昧に安住し、自の身語心業より是の如き言を說く。
身語心の金剛は、　禪定の冠と觀想せよ。　三金剛三昧は、　忿怒を生ずる能はず。
又復た一切持大明等の羯磨の三昧に安住し、身語心業より、是の如き言を說く。
身金剛の堅固は、　外金剛の執持なり、　法金剛の事業は、　儀軌の如く作す所なり。
此れを諸佛の自性大金剛の三昧と名づく。

是の時、諸佛の大祕密主なる金剛手菩薩は、是の如き等の三昧法を說きて、卽ち一切の大執金剛身語心業の金剛平等不思議界に、默然として住す。爾の時、會中に不可計、不可數の佛刹と、須彌山の量に等しき微塵數の菩薩摩訶薩あり、咸各一切如來に頂禮す。是く作して、言して白さく。云何が、諸佛の大祕密主なる金剛手菩薩は、此の一切の佛菩薩の大衆會中に於て、默然として住するや。

是の時、一切如來は諸の菩薩に告ぐ、諸の善男子よ、當に金剛身語心は無所得なり、諸の文字句の自性も亦無所得なりと知るべし。所有一切如來の身語心の文字句も亦[四八]無自性にして、亦非行相なり。是の義を以ての故に默然として住せり。諸の善男子よ、此の如來心も亦是の如く住す。彼の身語心は文字を離れて、無所生、無有相にして、[四九]虛空の實あることなきが如し、一切は皆是れ虛妄の攝する所なり。

爾の時、妙吉祥菩薩等の諸の大菩薩は、諸の如來に向ひ、是く作して白して言さく。是の如し、是の如し。世尊よ、一切如來よ、法界の自性は無行・無作・非來・非去なり。是の義の故に語金剛の生ず

【四七】安怛陀那。隱身法なり。
【四八】無自性。梵 asvamaya.
【四九】虛空。梵 ākāśa

[四二]葛波羅に香を盛り、[四三]帶羅及び噸舍、此れは卽ち部多衆にして、廣大三昧と名づけ、又復た吉祥を爲し、大義利を作す所たり。

又復た一切の[四四]拏吉儞の三昧に安住して、自の身語心業より、是の如き言を説く。

彼の[四五]嚕地囉等を、常に飲食となす、拏吉儞の三昧は、出生の相と相應し、自性は無所生なり、三界は無所行なり、住は無行三昧なり、一切の成就を得。

此れを[四六]三界一切金剛三昧平等三摩地と名づく。

又復た身業に安住して、金剛三昧を成就す。自の身語心業より、是の如き言を説く。

身の三種の所作の一切は金剛より生ず。衆生界に普遍して、佛身の常の所作となる。

又復た語業成就の、金剛三昧に安住して、自の身語心業より、是の如き言を説く。

語業の句は無染なり、三界は淨く圓滿す。是れ卽ち語成就の、雜行三昧なり。

又復た心業成就の金剛三昧に安住して、自の身語心業より、是の如き言を説く。

諸の金剛意地と、金剛堅固の想とは、所説の三昧の如く、三金剛不壞なり。

又復た一切の大明の金剛眞實三昧に安住し、自の身語心業より、是の如き言を説く。

所有、佛、菩薩、緣覺、聲聞衆は、身語心と相應し最上成就を得。

又復た一切如來の身語心の金剛禪定三昧に安住して、自の身語心業より、是の如き言を説く。

彼の金剛薩埵は、所有一切處に於て、身語心の堅固曼荼羅に安住す。三金剛の禪定は、理の如く相應し、諸の大明の眞實の持誦法に安住す。

又復た金剛大明成就三昧に安住し、自の身語心業より、是の如き言を説く。

衆生界は平等に、金剛禪定に住し、三金剛の最上は金剛三昧より生ず。

又復た近成就、最上成就、大成就金剛三昧に安住し自の身語心業より、是の如き言を説く。

【四二】葛波羅。梵 kapāla 頭骨の器。

【四三】帶羅。梵 taira

【四四】拏吉儞。梵 dākinī 空行女天なり。

【四五】嚕地囉。梵 rudira 血液なり。

【四六】三界一切金剛三昧平等三摩地。梵 sarva-traidhātuka-vajra-samayaṁ samāvasaraṇa samādhi.

又復た一切の[三一]聲聞の學三昧に安住す、自の身語心業より、是の如き言を說く。

彼の[三二]十善業道は、　智金剛の作す所、　此の諸の三昧より生ず、　劣解脫と名づく。

又復た一切の[三三]梵王の三昧に安住し、自の身語心業より、是の如き言を說く。

癡は諸の業道と爲る、　大怖畏の相を作せば、　佛の菩提に隨順す、　卽ち金剛身を得。

又復た[三四]嚕捺囉天の三昧に安住し、自の身語心業より、是の如き言を說く。

三界の一切は、　三金剛の所求に住す、　欲性に三種あり、　最上の三昧より生ず。

又復た[三五]尾瑟努天の三昧に安住し、自の身語心業より是の如き言を說く。

衆生は實際に住し、　三金剛は不壞なり。　禪定の金剛に入れ、　虛空は金剛界なり。

又復た三金剛の三昧に安住し、　自の身語心業より、　是の如き言を說く。

所有身金剛は、　是れ卽ち大梵天なり。　彼の語金剛は、　卽ち[三六]大自在天なり。　彼の心の金剛王は、　卽ち尾瑟努天なり。　是の如き等の三天は、　三金剛の所住なり。

又復た一切の藥叉、藥叱尼の三昧に安住し、自の身語心業より、是の如き言を說く。

常に貪欲法に住し、　一切の食噉を恣まゝにするも、　三金剛を捨ざれば、　極難の三昧と作す。

又復た一切の龍王三昧に安住し、　自の身語心より、　是の如き言を說く。

常樂の輩は、[三七]戌鈉と、[三八]嗢囉とを飮食となす。　隨所に香境を欲し、　卽所に三昧を作す。　彼の一切煩惱は決定して隨轉す。

又復た一切の[三九]阿蘇囉、[四〇]乾鈉の三昧に安住し。　身語心業より、　是の如き言を說く。

忿怒惡者を現じ、　華菓を樂となし。　金剛地に安住す、　大可怖は難調なり。

又復た一切の[四一]囉叉娑悉帝哩の三昧に安住し、自の身語心業より、是の如き言を說く。

【三一】聲聞。śrāvaka 佛の小乘法中の弟子にして、佛の聲敎を聞き四諦の理を悟り、見思の惑を斷じ涅槃に入る。

【三二】十善業道。十善とは、一に不殺生、二に不偸盜、三に不邪婬、四に不妄語、五に不兩舌、六に不惡口、七に不綺語、八に不貪欲、九に不瞋恚、十に不邪見なり。この十はよく理に順ずる故に、十善業と名け、善處に常に生ずる道なればなり。

【三三】梵王。梵 brahma 藏 tshaṅs-pa 帝釋天なり。

【三四】嚕捺囉 梵 rudra 藏 drag-po 大自在天の異名。

【三五】尾瑟努。梵 viṣṇu 藏 khyab-ḥjug

【三六】大自在天。引 maheśvara 藏 dbaṅ-phyug-chen-po

【三七】戌鈉。梵 sūnya

【三八】嗢囉。梵 kṣirika

【三九】阿蘇羅。梵 asura

【四〇】乾鈉。梵 kanya

【四一】囉叉娑悉帝哩。梵 rākṣasastri.

法音に歸命す。[二六]毘盧遮那佛は清淨なり。最上大樂は金剛寂なり。諸法の自性は淨光明あり。金剛法を宣說することに歸命す。[二七]寶生如來の甚深妙は、虛空界の諸垢を離れたる如し。自性は清淨にして本より相にあらず、諸の祕密を善說することに歸命す。[二八]無量壽佛の大自在は、諸の疑惑を離れたる金剛住なり、貪の自性を了して彼岸に到る、蓮華部の所說に歸命す。[二九]不空成就佛の正智は、能く一切衆生の願を滿す、自性は清淨にして實際に住す、金剛最上士に歸命す。是の如き稱讚は寂靜句にして、一切如來の共に宣する所なり。諸の修法者若し稱揚せば、即ち諸佛と同等なり。

爾の時、金剛手諸佛の悲愍者は、後ち語金剛より、是の祕密の句を說く。大なる哉、一切の佛、法界は文字を離れ自性は本より清淨にして、虛空の無垢なるが如し。

爾の時、諸佛大祕密主金剛手菩薩は、一切如來の身金剛三昧に安住して、自の身語心業より是の如き言を說く。

彼の四種の三昧は、佛の智海より生ず。飮食は無礙にして此の三昧の最上なりと了せよ。

又復た一切如來の語金剛三昧に安住せよ。自の身語心業より。是の如き言を說く。

彼の四種の三昧は、語金剛の大字なり。五種の甘露は、此の祕密より出生すと了せよ。

又復た一切の執金剛三昧に安住し、自の身語心業より、是の如き言を說く。

彼の四種三昧は、亦即ち甘露法なり。金剛薩埵の大威力より生ずる所なり。身語心の金剛の大三昧より出生す。諸佛の究竟に住し。金剛の攝持する所なり。金剛手の三昧と、金剛手の大光とは、一刹那間に、諸佛の三業を得。

又復た一切の[三〇]緣覺の三昧に安住し、自の身語心業より是の如き言を說く。

身法を善說するに、彼の身は金剛に住す、衆生の戒相を說けば、究竟平等に住す。

【二六】毘盧遮那佛。佛部、法界體性智、常住淨妙法身。
【二七】寶生如來。寶部、平等性智、自受用身。
【二八】無量壽如來。蓮華部、妙觀察智、他受用身。
【二九】不空成就如來。羯磨部、成所作智、變化身。

【三〇】緣覺。梵 pratyeka buddha 藏 raṅ-saṅs-rgyas. 現身口敎を受けずして無師獨悟し能く自ら調するも、他を調せざる一種の聖者。

は、如意寶の妙光なり、最勝の佛菩提なり、諸佛の金剛光なり。

此れを[一六]諸佛圓滿一切願金剛三昧と名づく。

爾の時、執金剛は、一切如來の大祕密主となり。一切如來の身語心の金剛大明行を成就す。大毘盧遮那金剛如來は、又復た自の三業を以て是の如き法を說く。

身語心の金剛、身語心の自性は、自相なり、自の所作なりと。是の如く皆成就せば、

佛眼の句は相應す、金剛の標幟、大明、印相等を想へ。教に依りて善く學べ、諸の如來の祕密は、佛の菩提に安住せり。四時中に於て、祕密の供養を作せ。華果等の諸物は、得る所に隨ひて、食のまゝにせよ。此れ速かに諸佛の最上大海智を得、期六月を滿たす數作法せば、當に成就す。一切の[一七]部多衆は、自他を燒する能はず、食金剛の大鉤は、[一八]摩摩枳の功德なり。語金剛を觀想せよ、一切處に自の印相、禪定を成就し、

三文字の金剛は、此れ諸佛の大智なり。違越する者は破壞す、金剛の大主宰は金剛の文字を生ず、所有[一九]阿蘇哩、[二〇]那儗、[二一]藥叱尼、乃至[二二]摩𤚥尸は三金剛智に住し、各の本部の法に依りて、諸の持明の事を作す、是の如き諸の大明は、祕密の眞實教なり、三金剛より出生して、諸佛の菩提に入る。

此れを[二三]一切如來の眞實金剛持明三昧と名づく。

[二四]一切如來三昧法金剛加持王分第十七

爾の時、一切如來は又復た雲集せり、時に諸の如來は又復た各各自の三業を以て、世尊大毘盧遮那金剛如來を勸請して、祕密の法を說かしめんとして、是の讃を作して言はく。

[二五]阿閦如來は廣大の智なり。金剛の法界は大希有なり。三曼拏羅は三堅固なり。祕密の妙

【一六】諸佛圓滿一切願金剛三昧。梵 bhagavān sarvâśā-paripurnâa vajra

【一七】部多。梵 bhūta 鬼神の總名なり。

【一八】摩摩枳菩薩、梵 mamākī 四明妃の一なり。

【一九】阿蘇哩。梵 asuri

【二〇】那儗、梵 nāri

【二一】藥叱尼。梵 yaksini

【二二】摩𤚥尸。梵 mānusi

【二三】一切如來眞實持明三昧。梵 sarva-tathāgata-vidyā vrata-samaya-tattva-vajra

【二四】梵 sarva-tathāgata-samaya-samvara-vajrâdhiṣṭhāna-vajro-saptadaśaḥ paṭalaḥ 藏 de bshin-gśegs-pa thams-cad-kyi-dam-tshig-dnii sdom-pa rdo-rjehi byin rlabs-kyi-rgyal-po

【二五】阿閦如來。金剛部、大圓境智、自性身。

[七]穰引

此の明句を說き已りて、又復た是の加陀を說いて曰はく。

虛空に金剛を想へ。 金剛曼拏羅は、 金剛より一切の佛如來を出生すと想へ、 中に[八]寶藏神を想へ、 大藥叉の相を現じ、 頂に寶髻の冠を戴く、 色相にして善寂なり、 五佛と相應して住し、 五處を觀想し、 金剛甘露を得て、 禪坐の相を現ず、 復た金剛手と歡喜して相應す、 是の如きの藥叉主は、 大力寶藏神なり。

此れを[九]金剛三昧大富成就吉祥幢三摩地と名づく。是の時、世尊は復た[一〇]金剛欲自在吉祥三摩地に入る。定より出でて、一切の[一一]藥叱尼の三昧句の身語心業を以て、 是の明句を說く。

[一二]稱引

此の明句を說き已りて、 又復た是の伽陀を說いて曰はく。

虛空に金剛を想へ。 四方の曼拏羅は、 四寶の嚴飾する所なり。 香華等は具足せり。 虛空界に遍滿せる諸の藥吒尼を現ず、 三金剛より出生して、 同一の影像なりと想へ。 三金剛は不壞にして、 禪定に安住す。 妙金剛の等持を想へ。 忿怒の頂を觀想し、 心の明句に安住す。 金剛の相應行なり。

此れを[一三]一切の藥叱尼の平等行觀想金剛三摩地と名づく。

是の時世尊は、復た一切の[一四]金剛大明の尾日林毗多金剛川摩地に入る。定より出でて、自の三業を以て是の如き法を說く。

身語心は清淨にして、 諸佛の色相を持し、 紫金色の光の如し。 一切の成就を作す。 安怛陀那等の平等の妙光明なり、[一五]藥叉主は持明天の大尊を成就す。 諸の金剛の成就と、 諸の妙色の成就と、 諸の大妙色の成就と諸の普明の成就とは普遍して出現す。 佛頂の諸の成就

【七】 穰。ङ jaṃ

【八】 寶藏神。梵 jambhara

【九】 金剛三昧大富成就吉祥幢三摩地。梵 vajra-samaya-dravyāradhana-ketu-śri-samādhi.

【一〇】 金剛欲自在吉祥三摩地。梵 vajra-pobhaga-śriya-samādhi.

【一一】 藥叱尼。梵 yakṣaṇi

【一二】 稱。क kṣaṃ

【一三】 一切藥叱尼平等行觀想金剛三摩地。梵 sarva-yakṣaṇi-samatā-vihāra-bhāvara-vajra-samādhi.

【一四】 一切金剛大明尾日林毘多金剛三摩地。梵 sarva-vajra-mantra-siddhi vijrimbhita-vajra-samādhi.

【一五】 藥叉。梵 yakṣa 鬼類なり。

卷の第六

一切曼拏羅成就現證菩提分第十六之餘

爾の時、世尊よ、大執金剛たる。大金剛無畏大毘盧遮那如來は、即ち金剛大無畏無垢三摩地に入る。定より出でて、自の三業を以て是の明句を說く、

[一]尾引

此の明句を說き已りて、復た伽陀を說いて曰はく。

虛空に金剛を想へ。佛光の曼拏羅は、黃色の金剛の尾日林毗多を現じ、諸の相は皆圓滿に、一切の莊嚴する所なり。頂に諸佛の冠を戴き、一切は平等に住す。三金剛は相應して、諸の成就を出生す。

是の時世尊は、復た[二]普音金剛三摩地に入る。定より出でて大金剛を以て、句と身語心の業とを觀想して、是の明句を說く、

[三]綜引

此の明句を說き已りて、又復た是の伽陀を說いて曰はく。

虛空に金剛を想へ、日輪曼拏羅は、諸の佛雲遍滿し、三金剛は自在なり。曼拏羅中に於て、[四]尊那菩薩を想へ。身は白色相を現じ、一切に嚴飾せらる。金剛の三業の堅固より出生して、金剛手大士の持明句に安住す。

此れを[五]金剛三昧智光明三摩地と名づく。

是の時世尊は、復た[六]一切の願ふ金剛大樂三摩地に入る。定より出でて、等持金剛三昧の身語心を以て、是の明句を說く。

【一】尾。梵 viḥ

【二】普音金剛三摩地。梵 samanta-nirghoṣa vajra-samādhi.

【三】綜。梵 oṃ

【四】尊那菩薩。梵 cunda

【五】金剛三昧智光明三摩地。梵 vajra-samaya-jñāna-raśmi samādhi.

【六】一切願金剛大樂三摩地。梵 sarvāśā-vajra-sambhoga samādhi.

阿字は金剛杵なり、及び衆の金剛衆なり。彼の一切の儀軌は、佛の菩提の成就なり。諸の修法する者あらば、山林、曠野及び餘の勝たる方所に詣し、依法に修習せよ。彼は半月中に佛性を成就するを得、彼の三十六百は、須彌山の量の如し、微塵等の數に碎き、一切の諸の會衆彼の一切は皆、菩提の金剛を成ずるを得。

此れ即ち諸佛の[八九]金剛大笑三昧なり。

金剛手の大智は、大いなる語金剛なり。身金剛の大相を持し、[九〇]緊迦囉法を説く。

此れ即ち金剛智輪の四種の大明にして所謂[九一]三昧句、[九二]三昧語、[九三]三昧愛、[九四]三昧拳等なり。

虚空は廣く清淨にして、一切法を遠離し、圓滿の妙相金剛未曾有なるを現ず。所有一切の佛は普ねく諸の衆生を觀ずるに、平等にして一子の如し。諸佛の攝持する所の金剛手の愛樂は廣大の祕密心にして、三金剛に住す。大執金剛は、空に住して、大力妙金剛を觀想す。頂に妙寶冠を戴き、[九五]五嚩拏は相應し、彼の五處と大明は、天金剛忿怒なり。

若しは愚、若しは智、法に依りて、彼は半月中に觀想せば、祕密成就を得、諸の祕密金剛は、金剛歌の大義なり。空に住し佛の大曼拏羅を觀想せよ。[九六]吽字は金剛の明なり。三金剛等なりと想へ。[九七]唵字は眼なりと想へ。能く一切を觀見し、及び諸佛の相を見る。三身の勝金剛なり、所有飢渇等の、世間の爲めの大苦は、瑜伽を修習する彼には思念することを生ぜず、一切の苦を遠離して、心金剛を成就す。毘盧尊の影像は一切義の正句なり、[九八]嚩字は金剛口なり。唵字は金剛眼なり、彼の[九九]唵鑁の二字は金剛舌に安住す。一切處は無住にして、諸の苦を離れて寂靜なり。智金剛の光を想へ。即ち[一〇〇]如意妙寶にして、衆生の意願に願ひて、一切は嚴飾する所なり。

此れを諸佛の如意寶金剛と名づく。

【八八】阿。a

【八九】金剛大笑三昧。梵 vajra hāsa

【九〇】緊迦囉。梵 kiṃkara

【九一】三昧句。梵 samaya-pada

【九二】三昧語言。梵 samaya-preraṇa

【九三】三昧愛。梵 samayā-mantrara

【九四】三昧拳。梵 samaya-vandhana.

【九五】嚩拏。梵 vāna 識布?

【九六】吽。hūṃ

【九七】唵。oṃ

【九八】嚩。va

【九九】唵鑁。oṃ vaṃ

【一〇〇】如意寶金剛。梵 cintā-maṇi-vajra

彼の殺盜、婬妄、諸の染法の自性、佛の三昧に住する者を、如實に了知すべし。

此れを諸佛の最上の三昧常住法と名づく。諸の衆生をして、金剛相應に安住せしめ、理の如くに一切の大明句、一切の三摩地法、祕密の大明王儀軌及び餘の祕密の甘露法を宣說せよ。諸の行人ありて、法に依りて作す者は、無上菩提を得がたからず。當に知るべし、四聖の大祕密法は、是れ卽ち一切祕密の金剛にして、女人の色相を現じ、大輪三昧に安住す。諸の衆生のために利益の行を起し、一切の金剛曼拏羅、大明祕密儀軌を宣布す。彼の五種の飲食を法に依りて食せ、是の如くせば卽ち一切の大明成就を得。是の時、阿闍梨は是の說を作して、又復た其の弟子のために、大曼拏羅と、祕密の行相とを宣示す。金剛祕密の句を宣說し、卽時に口に[七五]唵字を誦せ。是れ卽ち一切の大明の根本なり。刹那の間に光明熾盛となり一切を普照す。此れを諸佛の[七六]大持明士の祕密大明と名づく。亦た卽ち一切の成就大三昧なり。亦[七七]卽ち諸佛、菩薩の成就勝行なり。亦卽ち安怛陀那大力精進の金剛句召最上成就なり。曼拏羅中の一切の金剛事業なり。

空に住せる金剛は、[七八]紇哩字の光明なりと想へ。復た諸佛は虛空界に遍滿し、所有身語心は大明と相應すと觀想せよ。

此れ卽ち[七九]身語心の大明の金剛加持の祕密句なり。[八〇]阿允揭とは所謂。

[八一]金剛手の影像、蓮華手の大光、[八二]無能勝の影像なり。祕密句に安住す。

此れ卽ち[八三]大金剛の祕密句なり。

日輪曼拏羅の中に、[八四]阿閦尊現ず、金剛大輪中に[八五]毘盧遮那は現ず、大輪中に、復た[八六]無量壽現ず、彼の諸の祕密心と、一切の祕密の義なり。大光明を出現し、一切の極苦を照す。

此れ卽ち[八七]一切金剛祕密心なり。

【七五】唵。 oṃ
【七六】大持明士。梵 mahāvidyā-pūraṇa
【七七】安怛陀那。隱形法なり。
【七八】紇哩。 hrīṃ
【七九】身語心大明金剛加持祕密句。梵 kāyavākcitta-mantra-vajrādhiṣṭhāna-pada
【八〇】阿允揭。 aṃ khaṃ vi.
【八一】金剛手。梵 vajra-pāṇi
【八二】無能勝。梵 aparājita
【八三】大金剛祕密句。梵 vajra-guhya-pada.
【八四】阿閦尊。梵 akṣobhya 藏 mi-bskyod-pa
【八五】毘盧遮那。梵 vairocana 藏 rnam-snaṅ
【八六】無量壽。梵 amitāyus 藏 tshe-dpag-med.
【八七】一切金剛祕密心。梵 sarva-vajra hṛdaya-samcodana

前に說く所の如きは、是れ卽ち大曼拏羅の絣線法なり。所有絣線の分量は儀軌の說の如し。既に絣線のこと已る。金剛界を作りて、曼拏羅を成ぜよ。曼拏羅の中に、法と儀軌とに依りて、本尊毘盧遮那の佛像及び諸の賢聖等を置け、復た壇の中に其の方位に依りて五[70]賢瓶を置き、曼拏羅を作り已り、然して後金剛阿闍梨は、法と儀軌とに依りて弟子を攝受し、既に攝受し已りて、法に依りて教授し、是の如き言を作せ。汝當に金剛三業の金剛薩埵の加持の身語心に安住すべし。と、然して後弟子を引きて、曼拏羅に入る、當に曼拏羅に入る時此の大明を誦して曰はく。

[71]阿一句亢尾引囉吽引二

此れを一切三昧身語心の金剛大明と名づく。

曼拏羅に入りて、當に金剛大灌頂の祕密智法を授くべし。當に諸佛は虛空界に滿つと想へ、妙香を以て供養をなせ、復た妙音、歌詠、讚歎を以てせよ。大三昧雲は金剛大曼拏羅に遍滿し、三金剛の三昧に安住すと觀想せよ。然して後金剛阿闍梨は[72]白芥子を以て、弟子の身に擲ぐ、擲げ已りて當に賢瓶を取りて[73]灌頂を授與せよ、是の時弟子は灌頂を受くる時、當に金剛薩埵なりと想へ、灌頂を得已りて、最上三昧に安住せよ。常に[74]毘盧遮那の堅固の心法に住す。諸の所作は正智て隨順し、金剛身語心業を修習し、三界の一切の賢聖に歸命せよ。所有阿闍梨の一切の語言は教の如く奉行せよ。彼の一切の祕密灌頂の法は、理の如く修習せよ。此れ卽ち一切如來の三密の金剛より、出生せる正法なり。諸の弟子に大金剛の義、種種の祕密の菩提金剛を授けよ。諸佛の授くる所の廣大三昧なり。

時に彼の弟子は灌頂を受け已りて、當に最上の大歡喜心を發し、所有一切の賢聖の影像は相應心に住す。阿闍梨は然して大曼拏羅法を指示し、大明、文字、祕密句等を授與し、復た三昧の誓を說き是の如き言を作す。

【七0】 賢瓶。梵 kalaśa(pūrna-ghaṭa) 藏 bum-pa 卽ち此れに五寶等を入れ地に埋む。

【七一】 aḥ khaṁ vira hūṃ

【七二】 白芥子。梵 sarṣapa 藏 yuṅs-kar 學名 papaver somni- ferum(var nigrum.)

【七三】 灌頂。梵 abhiṣecana 藏 dbaṅ-bskur. 元と印度の帝王卽位及び立太子の時用ひられたる儀式なるも後師(阿闍梨)弟子に法を授くる儀式とせらる。

【七四】 毗盧遮那。梵 vairocana 大日如來なり。

す。今曼拏羅の絣線の大明を說いて曰はく。

[62]吽引唵引阿莎引賀引一句

[63]絣の金剛線に五色粉を布る時、當に此の大明を誦すべし。法と儀軌とに依りて如理に作せば、速かに諸佛の菩提を成就す。彼の三昧の儀軌より、賢聖の大明を出生し、加持句、大曼拏羅の勝法の儀軌に住す。毘盧遮那の大主宰は[64]佛眼菩薩を出生し、身曼拏羅の句に住す。身金剛功德の金剛法の主宰と自影像を出生す。此れ即ち一切大明中の最上祕密なり。常に金剛薩埵の大主宰に住し、[65]摩摩枳菩薩の一切の大明を出生す。皆最上祕密より出生せり。是の如く曼拏羅に用ふる所の諸物は、皆悉く具足し、最上祕密に安住せり。此れ即ち金剛大祕密の最上希有の忿怒王の句召なり。諸佛に獻ずる供養は三時になせ、供養の三金剛は無住にして、彼の三金剛と相應せば、即ち大明を得、所有一切の大明を成就す。出生せる食を獻じて諸の[66]部多に施せ、五種の甘露は自心より生ず。是の如き三昧は最勝無比なり、速かに能く諸佛の菩提を圓滿す。若し絣線をもて、曼拏羅を作らんと欲せば、當に是の如く作るべし。當に線を絣ぐ時、毘盧遮那を觀想せよ、及び金剛手菩薩と、金剛甘露等の法と、金剛大光明とを想へ。一切佛の所有[67]羯磨法を觀想せよ、彼の金剛線は是れ即ち五佛なりと想へ、乃ち諸佛の最上祕密未曾有と名づく。當に知るべし。用ふる所の粉に二十五種あり、儀軌の如きは所有一切の大明を說く。當に金剛手菩薩を想ふべし。即ち諸佛の祕密最上菩提の身語心の三昧を得。五處を觀想せよ。是の如き所作が具足せば即ち三金剛不壞を得、金剛より生ずる所なり。金剛手菩薩の作す所の一切の驚怖の如し、所有賢索及び金剛鉤、乃至一切の金剛大明の教法は、皆金剛手菩薩の堅固正慧の三摩地より出生す。所有[68]護摩法及び彼の大明、乃至[69]護摩に用ふる所の物等は、囉虎の頂並びに儀軌に作す所の如く作せ。二處平等に相應し、護摩を作すこと八百遍。即ち三種金剛不壞を得。此れを諸佛護摩の雜行の三昧行と名づく。

【六二】 hūṃ oṃ āḥ svāhā.

【六三】 絣。絹なり。

【六四】 佛眼菩薩。梵 buddha locanā.

【六五】 摩摩枳菩薩。梵 mamāki.

【六六】 部多。梵 bhūta 鬼類なり。

【六七】 羯磨法。梵 karma 事業なり。

【六八】 護摩。梵 homa 希麟音義第一に「護魔梵語也、唐云₂火祭₁案₂瑜伽護魔經₁有₂四種爐₁謂半月形、滿月形、方與₂八角₁應₂四種法₁謂鉤召、降伏、息災、敬愛等、加持雖レ異皆以₂三白食及三雜花果等₁於₂爐中₁焚燎、用祭₂賢聖₁如₂此方燔柴之祭₁」と。

【六九】 護摩に用ふ所の物。五寶、五穀、五藥等。

畫け、其の壇の四隅に、本部の賢聖を畫け、又復た[五三]壇門に、忿怒明王を畫け、此れ法に依りて畫き已らば、即ち曼拏羅を成ず。行人は當に法に依りて、祕密金剛を想へ、本の大明を持誦し、諸の供養の事を作せ、此れ即ち祕密中の難行三昧行なり。

此れを一切祕密の大明三昧の[五四]一切如來の身金剛曼拏羅と名づく。

是の時世尊は、復た[五五]一切語三昧金剛雲莊嚴三摩地に入る。定より出でて、金剛三業を以て、金剛語曼拏羅を宣說す。

復た次に今、語業曼拏羅を說くべし。金剛心より出生す。勝れたる諸の曼拏羅は、其の量二十肘なり、四方と四隅に、四門具足せり、[五六]金剛線もて語曼拏羅の句、金剛功德聚を絣量せよ。金剛の大法王は、諸の大明を出生す、其の曼拏羅の中心に大輪及び一切の印相を畫け、儀軌に依りて畫け、大輪の中心に、無量壽の印を畫け、此れ即ち金剛句なり。勝曼拏羅を作れ、儀軌の如く所作せよ。破壞あらしむ勿れ、祕密の供養を献ぜば、金剛歡喜を得。彼の甘露三昧は、供養成就を作す。此れ即ち[五七]諸佛難行三昧行と名づく。

此れを一[五八]切如來の金剛語曼拏羅と名く。

是の時世尊は、復た[五九]普雲金剛三摩地に入る、定より出でて、金剛三業を以て、最上祕密中の祕密心曼拏羅を宣說す。

當に曼拏羅を畫くべし。中に金剛手を畫け、本部の儀軌に依りて、祕密の三業は生ず。

此れを[六〇]一切如來の身語心の祕密金剛智句の最上甚深祕密中の祕密出生心曼拏羅と名づく。

爾の時、世尊は復た一切如來の[六一]一切曼拏羅出生輪莊嚴三摩地に入る。定より出でて、金剛三業を以て、一切の祕密曼拏羅法を及び彼の一切金剛曼拏羅の印相、一切の大明心祕密等の法を宣說

【五三】壇門、曼拏羅の四方にある門を云ふ。

【五四】一切如來身金剛曼拏羅。梵 sarva-tathāgata kāya-maṇḍala

【五五】一切語三昧金剛莊嚴三摩地。梵 sarva-vāg-vajra samaya-megha-vyūha-samādhi.

【五六】金剛線。梵 vajra-sūtra

【五七】諸佛難行三昧行。梵 sarva-buddhānāṃ samayo duratikramaḥ

【五八】一切如來金剛語曼拏羅 梵 sarva tathāgata vāk-maṇḍala

【五九】普雲金剛三摩地。梵 samanta-megha-vyūha-samādhi

【六〇】一切如來身語心祕密金剛智句最上甚深祕密中祕密出生心曼拏羅。梵 sarva-tathāgata-kāya-vāk-citta-vajra-jñāna-mahāyoyam parama guhyaḥ sambhava citta maṇḍala.

【六一】一切曼拏羅出生輪莊嚴三摩地。梵 sarva-maṇḍala-cakra saṃbhava samādhi.

執金剛者の大毘盧遮那金剛如來を讃して言はく。善い哉、善い哉、諸の佛菩薩は能く此の義を問ふ。諸の大士は當に一切の大明及び一切の金剛の成就は當に金剛身語心に住すと知るべし。何を以ての故に、彼の諸の大明及び諸の金剛成就、乃至一切の佛法は皆身語心に住す。彼の身語心の金剛三業は、欲界にも住せず、色界にも住せず、無色界にも住せず、心身にも住せず、身心にも住せず、語心にも住せず、心語にも住せず、是の三業は無所住に由るが故に、彼の一切法も亦所住なし。譬へば、虚空の自性は清淨なる如く、諸法も亦然り、是の時諸の佛及び諸の菩薩は復た是の言を作す。一切如來は當に何に住し、何れより出生せるや。毘盧遮那佛は言はく、諸の大士よ、一切如來は自の身語心に住し、自の身語心より出生す。諸佛又問ふ。心は何れに住すや。答へて曰はく。虚空に住するが如し。又問ふ。虚空は何れに住するや。答へて曰はく。虚空は所住なし。是の時諸佛及び諸菩薩は、希有の心を生じて、是の讃言を作して、言はく。善い哉、善說、自の心は法性なり、諸行は寂靜なり。是の言を言ひ已りて默然として住す。

[五〇] 一切曼拏羅成就金剛現證菩提分第十六

爾の時、一切如來は又復た雲集す。時に諸の如來は、卽ち金剛三業を以て、世尊大毘盧遮那を勸請し、甚深祕密の法門を宣說せり。卽時に種種の珍寶と變化し、妙莊嚴の具をもて、世尊を供養せり。是の時、世尊大毘盧遮那金剛如來は、卽ち[五一]金剛大曼拏羅無畏三昧王莊嚴金剛三摩地に入る、還た金剛身曼拏羅の一切如來の身語心金剛より出でて、是の如き言を作す、

復た次に今、身の大曼拏羅を宣說す。金剛心の所生なり。勝れたる諸の曼拏羅は、其の量十六肘其の相を四方に作れ。曼拏羅の諸佛は金剛身に安住し、壇中に大輪を畫け、[五二]尾提の金剛相なり、金剛の印法を作れ、勝祕密の大明なり。輪中に毘盧、及び阿閦佛等を

【五〇】梵 sarva-siddhi-maṇḍala vajrābhisaṃbodhi saṃdarśana-paṭalaḥ. 藏 dṅos-grub thams-cad-kyi dkyil-ḥkhor rdo-rje mṅon-par rdsogs-par byaṅ-chub-pa.

【五一】金剛大曼拏羅無畏三昧王莊嚴金剛三摩地。梵 sarva-vajra maṇḍala-siddha samaya-rāja vyūha samādhi.

【五二】尾提。梵 vidhi

ば、卽ち虛空界と無二平等なり。若し諸佛如來は虛空界に安住し、所有一切衆生も虛空界に住するも亦た是の如くに住す。（卽ち）欲界に住せず、色界に住せず、無色界に住せず。若し法は三界に住する所もなく、諸佛如來は生ずる所もなくば、是の故に當に知るべし。彼の一切法は自性あることなし。諸佛如來よ又復た當に知るべし。所有菩提心は諸の如來智より出生する所なり。卽ち彼の菩提心は身に住せず、語に住せず心に住せず。是の故に菩提心は一切に住する所なし。菩提心住するなきが故に、諸法は何にか住する所ぞ。諸法も住することなきが故に、一切は生ずる所なし。是の如きに由るが故に、一切如來の正智は、大金剛句より出生す。諸佛如來も又復た彼の夢想法と知るべし。三界中に出現する所もなく、行ずる所もなし、所得もなく、實あることもなし。士夫等に非らず、相は自他の見る所に非らず、[四七]是の故に三界の所作は一切夢の如く、夢に見る所の如く、夢より出生せる如し。十方に普徧せる一切世界の所有諸佛及び諸菩薩乃至一切の有情も亦復是の如し。一切は夢の如く、我相なくして得べし。當に是の如く住すべし。諸佛如來よ又復た當に知るべし。譬へば大摩尼寶は諸の功德を具するが如く、衆寶中に於ては最上と爲り。諸の衆生の希求する所に隨ひて若しは[四八]金、若しは[四九]銀及び餘の寶等、所求する心に應じて、卽ち能く出現す。當に知るべし、彼の諸寶等は心に住するに從はず。摩尼寶に住するに從はず。一切如來、一切法、一切佛法も亦復た是の如し、諸の有智者は當に是の如く知るべし。

爾の時、一切如來は、世尊大毘盧遮那金剛如來の是の法を說くを聞き、大歡喜を生じ、熙怡の眼を作し。世尊大毘盧遮那金剛如來の是の如きの言を瞻察す。希有なり世尊は虛空界の若く、平等に安住す。彼の一切法及び彼の諸法も亦復是の如く平等に安住す。是の時、會中の所有一切如來及び諸の菩薩は咸是の言を作す。世尊大毘盧遮那金剛如來は、唯だ、一切の大明及び金剛の一切成就等の法を宣說す。卽ち此の一切の大明及び金剛の一切成就等の法は、當に何れに住すべきか。爾の時、

【四七】金剛般若經に一切有爲法、如夢幻影、如露亦如電、應作如是觀、藏 skar-ma-rab-rib mar-me-daṅ/ sgyu-ma zil-ba chu-bur-daṅ/ rmi-lam glog-daṅ sprin-pa-daṅ/ hdus-byas-de-ltar ba ltar-bar-bya// と。

【四八】金。梵 suvarṇa。藏 gser.

【四九】銀。梵 rajata 藏 dṅul.

應するを得て定金剛に安住す。

若し夢中に諸の妙好の園林、及び諸の乾𨍏は莊嚴して遊戲するを見るを得ば、禪定三昧を得て、諸佛の加持する所なり。

若し夢中に諸佛及び菩薩は、諸の灌頂の相を斷し、及び供養の事をなすを見るを得ば、當に祕密最上の持明王を成就すべし。

若し夢中に[四五]贊拏羅、[四六]說那を見るを得ば、當に金剛手の心無住を成就すべし。是の如き種種の夢は金剛より出生する所なり。彼の最上の金剛身語心を成就するは、此れ諸の夢想行なり。自心より生ずる所なり。若し心定に住せば、即ち諸法に安住す、諸法に安住するが故に、諸法は虛空に等し、法もなく、法性もなければ、即ち三昧心に入る。

爾の時、會中の一切如來は、金剛手菩薩の是の如く宣說するを聞き、未曾有なりと歎じ、諸佛の三業を以て、咸各稱讃し、是の問ひの言を作す。云何が夢想は自心より生ずるや、云何が自性及び諸の法性、諸法の實義は虛空の性の如きや。

爾の時、世尊よ、大毘盧遮那如來は、即ち金剛三業を以て、諸の如來に向ふて、是の如き言を作す。諸佛よ、世尊は當に虛空は一切法と非和合、非不和合と知るべし。虛空は所行も一切の所向もなし。及び一切處に出現する所もなし。諸の如來は當に知るべし。諸の夢想法も亦復た是の如し。即ち彼の一切法は皆夢中より、平等に出生するなり。佛、世尊、一切如來の如きも亦諸法と同じ、皆夢中より平等に出生して、隨順に安住す。諸の如來は當に知るべし虛空は色相もなく、亦出現する所もなく、無對にして無礙なりと。彼の一切法も相を離れ無礙なること亦復た是の如し。

又復た當に知るべし、諸佛、如來は所有一切法と、身語心金剛三昧等とは、一切處に於て純一の自性より隨順して轉ずるたりと。所謂自心の自性は動轉する所なし、若し身・語・心が金剛界に住せ

【四五】贊拏羅。梵 caṇḍala
【四六】說那。梵 śvana

持誦すること一百八遍せば、七日の中に一切は成就して、所有自心の大明と儀軌をも亦復た成就す。此れを一切の病苦を銷除する難行三昧と名づく。

爾の時、金剛手の、光明大智の鉤は、解脫の金剛を欲し一切の夢相を說く。夢に見る所の諸法は、卽ち自性を生ずることなく、自性淨眞實なれば、卽ち金剛の自性なり。

若し夢中に成就を求むる行人、或は持誦の相、或は禪定に入るの法を作すを見るを得ば、當に佛菩薩、身を現じて其の前に在り。

此れを[四一]大夢三昧と名づく。

若し夢中に諸佛の妙光明を見るを得ば、最上の菩提を得、一切智を成就し、當に[四二]報身佛は出現して、其の前に在るを見るべし。

若し夢中に三界の尊大士が、諸の供養等を作すを見るを得ば、當に決定して諸佛及び菩薩は[四三]五種の妙樂法を成就すべし。

若し夢中に諸の尊像及び金剛薩埵、大祕密主の像を供養するを見るを得ば、當に平等智、金剛法、大愛を得べし。

若し夢中に自身の諸の相分を見るを得ば、祕密金剛の最上の大明稱を得べし。

若し夢中に諸の如來及び諸の大菩薩に敬禮するを見るを得ば、金剛堅固を得べし。

若し夢中に一切の[四四]乾嚩衆の諸分は皆種種の妙莊嚴、及び童子童女の相好莊嚴の圓滿なるを具するを見るを得ば、此等の相を見る者は所作の成就を得べし。

若し夢中に十方の一切佛は佛刹中に安住するを見るを得ば、當に諸の如來たるを得。施すに歡喜心を以てし、妙法藏を圓滿すべし。

若し夢中に諸佛は法輪を轉じ、及び諸の如來は般涅槃に入るの相を見るを得ば、三昧と相

【四一】大夢三昧。梵 mahā-svapna-samaya
【四二】報身佛。梵 sambhoga-kāya
【四三】五種の妙樂法。喜。藏 dgaḥ-ba 勝喜。藏 mchog-tu dgaḥ-ba 離喜。藏 dgaḥ-bral-dgaḥ-ba. 倶生喜。藏 lhan-cig-skyes-dgaḥ (大悲空金剛大敎王經第二)に四種を出せり。
【四四】乾嚩。梵 kanya

に世間の衆生を惱害するに、行人は法に依りて加持せば、刹那の間に惡毒は銷滅すべし。

又復た[30]唵字を觀想し金剛の覩を作せ。所有一切の[31]曼拏迦、[32]沒哩室、[33]唧迦、[34]薩哩波等は、常に一切の惡毒を出し、衆生を害する者を、皆悉く句召して、法に依りて加持せば、所有惡毒は皆悉く銷滅し、普ねく大智金剛に安住し、彼の虛空金剛曼拏羅に入らしむ。此れを諸惡毒金剛三昧と名づく。

又復た[35]吽字を觀想せよ。心に大金剛を成じ白色の相を現ぜよ。光明は雲を出し大光は普照せり。猶滿月の清淨無垢なるが如し。如實に四處を觀想せば、相應し刹那に安住す。第二、第三も是の如く觀想せば、彼の薩哩波は虛空界に滿つるも、刹那間に惡毒を銷散し、施作する所なし。此れを一切の毒を息滅する祕密の心法と名づく。

又復た阿字を觀想せよ。八葉の大蓮華となる。中に五種の光明を現ずと想へ。周匝遍滿して月の光明の如し。清淨無垢にして平等變化なり。此れ卽ち定心の大祕密句にして最上祕密智に安住するなり。行人は如法に觀想せば、卽ち能く諸の惡病の苦を銷除す。所謂[36]㦘拏、[37]必吒迦、[38]盧多等なり。及び餘の諸病も皆悉く銷除す。諸の世間をして苦惱を遠離せしむ。

復た次に內外の諸の病を息除する執金剛心の祕密三部心の最上の大明句を宣說す。

[39]唵(引一合)唋那除倶(半音二)唵(引一句)阿路力倶(半音二)唵(引一合)嚩曰囉(二合)持哩(二合)倶(半音二)

此の大明句は能く一切の義を成じ、能く一切の苦を除く。若し行人法と儀軌とに依りて、一心に專注して如實に衆類の影像、或は[40]嚩那囉の相、或は說那の相を觀想せよ。自の身語心業を以て、金剛輪に安住し金剛步を作せ。自の身語心を以て、平等に觀想し、觀成就し已らば、卽ち諸佛菩薩の廣大敬愛を得。加持の句に住し、歡喜心を施し、自の金剛身語心業に諸佛の雲及び金剛王廣大の勝雲を想へ。諸の病苦を破りて、解脫せしむ。十方の諸佛金剛大士は、忿怒を現じて、諸の魔惡を破ると想へ。諸の定心と相應せば、羯磨は平等正念を出生す。前の如き大明なり。若しよく相應して、

【三〇】唵。梵 oṃ
【三一】曼拏迦。梵 marḍuka
【三二】沒哩室。梵 mṛścika
【三三】唧迦。梵 citraka ?
【三四】薩哩波。梵 sarpa
【三五】吽。梵 hūṃ
【三六】㦘拏。梵 garḍa
【三七】必吒迦。梵 piṭaka
【三八】盧多。梵 lūta
【三九】jinajik, alolik, vajra dhṛk
【四〇】嚩那囉。梵 vānara

普引二合吒野薩普引二合吒野十一薩哩嚩二合尾伽那二合尾那引野啮十二摩賀引誐拏鉢底十三嚩尾多引怛迦囉引野吽引發吒半音十四

護摩を作す時此の大明を誦せ、金剛身語心業を以て、堅固に持誦せば、此れ卽ち一切の魔衆を調伏して、最上法の觀照とたる。金剛手菩薩は大忿怒相を現ず、此れを金剛手大忿怒三昧と名づく。

復た次に行人は、諸佛の遍滿虛空を觀想せよ。刹那間に諸惡を破壞し、及び一切の執金剛を想ふ者は、諸の大菩薩の遍滿虛空なり。一切の背佛三昧を破壞す。非族の類、諸の惡衆生、乃至一切の囉刹娑等の種種の惡者は皆悉く怖畏して、自ら調伏され、金剛三昧に住す。所有一切の諸の惡鳥獸を皆悉く調伏して三昧に安住す。所有一切の大惡忿怒[三二]薩哩波等は黑色の相を現じ大怖畏を作す。薩哩波を以て食噉となせば此れ等は決定して、自ら調伏さる。此れを諸惡魔を調伏する最上の難行三昧と名づく。是の如き諸佛の執金剛尊は、金剛堅固の禪定の心金剛法と相應す。亦[三三]諸佛金剛大忿怒三昧と名づく。

爾の時、執金剛の王なる金剛手菩薩は摩訶薩、虛空無相の大寂默者の如き[三四]一切灌頂義成就正覺智金剛大士に。是の如き言を作す。

大なる哉、自性は本より清淨なり。彼の金剛最上乘に攝す。彼の無生の妙法中より、諸佛の一切の法は出生するなり。

復た次に祕密の金剛羯磨は、諸の惡苦惱を息除する法を宣說す。當に[三五]揭致迦、或は盎[三六]誐羅を取りて薩哩波の相を畫け、其の狀は極惡にして、黑き光明を現ず、二舌相の大惡忿怒を畫け。是の如く畫き已らば、行人は當に[三七]亢字を想ふべし。中に[三八]訶邏喝羅の光明を出現す。

復た火焰の色相を想へ、行人は當に大明を誦して加持すべし。所有一切の惡毒は皆悉く銷滅す。

又復た[二九]紇哩字を觀想せよ。卽ち能く三界の所有種種の一切の惡毒を出生するものを召集して常

【三二】 薩哩波。梵 sarpa

【三三】 諸佛金剛大忿怒三昧。梵 bagavān vajra-krūra sa=maya-vajra-krodha.

【三四】 一切灌頂義成就正覺智金剛大士。梵 sarvābhiṣeka-saṃbuddha

【三五】 揭致迦。梵 khaṭika 白墨なり。

【三六】 盎誐羅。梵 aṅgāra

【三七】 亢。梵 khaṃ

【三八】 訶邏喝羅。梵 hālāha=la

【三九】 紇哩。梵 hrīṃ

一切は皆驚怖し、身を虚空に[八]一肘二肘量、或は五八十二に起せ。是の如き肘量の數にせば、空中に旋住し、迷悶大怖畏す。

爾の時、金剛手菩薩摩訶薩、諸佛の大祕密主は、淸淨三身にして。又復た是の如き祕密の一切の設咄嚕を調伏する法を宣說す。

若し調伏法を作さんとする行人は、當に[九]尸陀林中に往きて、其の尸陀林の炭を取れ。其の作法は、卽ち須らく那吃那の相と作して、作法に用ふべし。或は尸陀林の灰を用ひて亦作法すべし。大明を以て加持すること一千八百遍、所有一切の設咄嚕は皆悉く調伏され、乃至三界も亦能く調伏さる。

又の法は、若し[一〇]瞿滿婆、[一一]訶野滿婆[一二]設那滿婆等の物を用ひて、三角の曼拏羅を作り、法と儀軌とに依りて護摩を作せ。或は[一三]摩賀滿婆を用ひ、前の作法の如くせよ。

又の法は、或は火壇を作りて、[一四]葛吒迦を燃して、護摩を作せ。或は江河の岸に於て諸の形像を造れ、芥子の量の如し。葛吒迦を以て、護摩を爲せ。或は[一五]芥子及び[一六]羅嚩拏、[一七]帶羅、[一八]尾沙、馱覩囉是の如き等の物を用ひて、同じく護摩を作せ。或は阿悉帝、祖囉拏及び嚕地囉尾沙等を用ひて、護摩を作せ。或は芥子と諸物とを和合して、同じく護摩を作せ。如上の所說の諸の護摩法は當に儀軌に依るべし。法に依りて行步し、若しは坐し、若しは立て。所有勢分及び處所等も法に依りて作せば、刹那の間に決定して成就す。一切の[一九]設咄嚕乃至、大惡[二〇]囉刹娑等は自ら調伏さる。或は隱身自在を得て諸佛菩薩も見ること能はず。

復た次に護摩を作す大明を宣說して曰はく。

[二一]那莫三滿多迦引野嚩引訖唧二合多嚩日羅二合引赦一句唵引二虎嚧虎嚧三底瑟吒二合引底瑟吒二合引四滿馱滿馱五賀那賀那六捺賀捺賀七鉢左鉢左八誐哩惹二合九怛哩惹二合怛哩惹二合十尾薩

【八】肘、梵 hasta 藏 lag-pa 俱舍には七麥を一肘とし、西域記には二十四指を一肘とす。
【九】尸陀林。葬地なり。
【一〇】瞿滿婆。梵 gomāṃsa
【一一】訶野滿婆。梵 hayamāṃsa
【一二】說那滿婆。梵 śvānamāṃsa
【一三】摩訶滿婆、梵 mahāmāṃsa
【一四】葛吒迦、梵 kaṇṭaka（束木）?
【一五】芥子。梵 rājika 黑芥子なり。
【一六】羅嚩拏。梵 lavaṇa ?
【一七】帶羅。梵 taila
【一八】尾沙。梵 viṣa
【一九】設咄嚕。怨敵なり。
【二〇】囉刹娑。梵 rakṣasa
【二一】namaḥ samanta kāya-vāk-citta vajraṇām. Oṃ hulu hulu tiṣṭha tiṣṭha vandha vandha hana hana garja garja visphoṭaya visphoṭaya sarva vighna vināyakāṃ mahā gaṇapati jīvitānta kāraya hūṃ phaṭ.

卷の第五

一切心眞實金剛出生三昧分第十五之餘

爾の時、金剛手菩薩摩訶薩、最上執金剛、三界最勝師は、復た大字の相と金剛清淨法とを現じ、復た妙音聲を出して、是の如き法を宣說す。金剛士の相應は、金剛喜を正覺す。廣大の佛菩提は、持金剛を歡喜す。[一]金剛路左曩、特に[二]烏瑟膩沙の最上大忿怒は、佛の金剛像なりと想へ。明王の最上法は、寶生尊なりと觀想し、明妃の廣大法は、無量壽尊なりと想へ。一切の明事業は、不空大智なりと想へ。一切の大明句は、金剛手尊なりと想へ。所有(あらゆる)[三]藥刹尼と大明及び、教法とは、焰鬘得迦より(出で)、明王の儀軌は、一切の相應行と、祕密の大明等を出す。

此れを諸佛の大金剛三昧と名づく。

復た成就法を說く。曼拏羅を建立し、先行の精熟するを修めて、行人は當に作法すべし。爾の時金剛手、諸法の自在尊は、身語心の最上智金剛を成就す。或は山林、聚落或は復た寂靜處にて金剛定と相應す。法に依りて持誦し、金剛手菩薩の大明と行の觀照は、種種の事業をして願に隨ふて皆成就せしむ。金剛法の影像と、蓮華部の光明と、身語心金剛の、三部の大儀軌は三身入窟の法なり。決定して皆成就す。諸の作法者は、四種の勝地を擇びて堅固にして作法せば、究竟の成就を得。

金剛手菩薩は、最上の等虛空にして、所有入窟の法及び、一切の儀軌[四]吽字の金剛手、[五]賀字の身金剛、[六]阿字の持法尊なり。此れ祕密の明句なり、[七]鄧字の禁伏法には、大可怖の雲を出す。此れを諸の禁伏と名づく。祕密中の最上なり。若しこの法をなす時は、

【一】金剛路左曩。梵 vajra-locana 佛眼尊なり。
【二】烏瑟膩沙。梵 uṣṇīṣa 佛頂尊なり。
【三】藥刹尼。梵 yakṣiṇī
【四】吽。 hūṃ
【五】賀。 hāḥ
【六】阿。 āḥ
【七】鄧。 eḥ

聲を出して、是の如き言を作す。

大なる哉、眞實と此の正念。　大なる哉、祕密の文字と句。
大なる哉、自性は本清淨なり。大なる哉、諸法は妙無垢なり。

法を修習して成就を得る者あらば、猛利心を發し、當に束訖囉を取り、法に依りて食すべし。彼は刹那間に於て、卽ち妙吉祥の光明と等同となる。隱身自在の吉祥勝妙は、身に光明ありて紫金色の如し。若し行人ありて、猛利心を發し、[八四]尾瑟吒、及び[八五]摩賀滿蹉を取りて、法に依りて食せば、大明の勝行を成就するを得、諸佛も見ること能はず。

又復た行人は、猛利心を發し、當に[八六]說那、[八七]訶耶、[八八]摩賀の三種の[八九]滿蹉を取り同處に和合し、法に依りて食せば、卽ち諦行を成就するを得、諸佛も見る能はず。若し尾瑟吒及び三種の鐵を用ひて、合して[九〇]虞尼迦を成ぜよ。二處相應する者は、一切處に於ても、諸佛は見ること能はず。

又復た行人は、猛利心を發して、[九一]瞿滿蹉及び鉢囉拏を取りて虞尼迦を作れ、一處に相應する者は、諸佛も見ること能はず。

又復た行人は、若し[九二]龍腦香及び[九三]栴檀香を取りて、三種の鐵を以て虞尼迦を作れ、二處に於て相應する者は、卽ち諸佛も見ること能はず。

又復た行人は、若しくは[九四]牛黃及[九五]沈水香と、三種の鐵とを取りて、虞尼迦を作れ、二處に於て相應する者は、卽ち諸佛を見ること能はず。

又復た行人は、若しくは[九六]恭俱摩香と、三種の鐵とを取り、虞尼迦を作れ、二處に於て相應する者は、諸佛も見ること能はず。

是の如く、一切平等なりと了知せば、卽ち成就相應の自在を成じ、大印加持の最勝吉祥を得。大威力ありて、隱顯自在なれば、諸佛の光明と同等なり。三千大千界中に於ても、最勝自在なり。乃至[九七]俱胝、[九八]由旬、[九九]刹中にても皆金剛自在を得。[一〇〇]欲、色界中にては、往かんと欲する所に隨ひて一切無礙なり。是れを諸佛の大力三昧[一〇一]安怛陀那大金剛法と名づく。

是の時、世尊は、是の法を說きて、歡喜心を發して、、熙怡の眼を作して衆會を觀察し、微妙の

【八四】尾瑟吒。梵 viṣṭa
【八五】摩賀滿蹉。梵 mahā-māṃsa
【八六】說那。梵 svāna
【八七】訶耶。梵 haya
【八八】摩賀。梵 mahā
【八九】滿蹉。梵 māṃsa
【九〇】虞尼迦。梵 gulika
【九一】瞿滿蹉。梵 gomaṃsa
【九二】龍腦香。梵 karpūra 藏 ga-bur 樟腦なり。
【九三】栴檀香。梵 caṇḍana 藏 tsan-dan.
【九四】牛黃。梵 gorocana 藏 hgi-ḥan
【九五】沉水香。梵 kṛṣṇāgaru a-gu-ru-nag-pa
【九六】恭俱摩香，梵 kuṅkuma 藏 gu-ru-yun 鬱金香なり saffron, crous, marigold, calendula etc. 學名 crous sativus.
【九七】俱胝。梵 koṭi
【九八】由旬。梵 yojana
【九九】刹。梵 muhūrta
【一〇〇】欲色界。欲界と色界なり。
【一〇一】安怛陀那、隱形法なり、慧琳音義第四十二に「唐言潛隱卽是隱形良請彼國邪正雜信異道間居更相是非顯已破彼佛以神力故，說斯要欲令修瑜伽者隨意自在無礙速成若起垢心邪惡處無礙速成險故釋此疑」と。

婆野六吽引吽引發吒上同發吒上同莎引賀引十

當に此の大明を以て、忿怒調伏法を作せ。行人は當に嚕地囉[七一]等を取りて、三角の護摩爐[七二]に置け、其の爐の分量の大小は、諸の儀軌の如くにせよ。復た羅嚩拏[七三]、囉嚩迦[七四]等の物を入れ、燃すに建吒迦[七五]を以て護摩[七六]を作せ。護摩を作す時には、調伏する所の乾鞟の名字を稱へ、前の大明を以て、護摩を作すこと八千遍、日に三時作せ、或は中夜に作して、彼の乾鞟をして、速かに句召し一切の調伏をなさしめよ。既に調伏し已らば、三劫中に於て、常に佛法及び金剛手法を持す。佛三昧に住せば、愚癡を遠離し、壽命を增長す。諸の法を作す者有らば、當に白月八日、或は十四日に、空舍[七七]、或は尸陀林[七八]中に往詣し、摳致迦を用ひて、彼の設咄嚕[七九]の名字を書し、本儀軌に依りて、本部の大明を以て加持せよ。或は母訥誐囉[八〇]を用ひて、調伏法を作せ。行人口に吽[八一]字を誦せば、即時に熾盛の大光猛焰を出現して怖るべし。所有一切の設咄嚕衆及び餘の惡者は、皆大いに驚怖し、悉く調伏せらる。金剛手菩薩を思念せよ、諸佛の金剛最上の三寶は、一切衆生の歸趣する所なり。佛法に違する者は決定して破壞す。所有金剛羯磨部の熾盛光明の曼拏羅中の、本尊の影像と、大明と、印相等を法に依りて作せば、能く一切の設咄嚕衆及び諸の惡者をして隨順し調伏し、一切をして佛菩薩の想に住せしむ。若し佛の正法に違背する者あらば、決定して破壞す。諸の佛菩薩は善方便を以て、一切の怨惡の衆生を調伏して三昧に住せしむ。一切の祕密の大明心法を宣說して、諸の惡を破壞し、諸の衆生をして、智と相應せしめ、常に最上の佛の菩提の想に住せしむ。

若し行人ありて、淸淨心を以て、四處に踰室多[八二]を置くと想へ。一切の莊嚴の諸分は圓滿し、彼の蓮華の如く、開敷の相を現ず。復た吽[八三]字の大明を想へ。五種の光を現じ金剛を成ず。自の身語心業と相應して、金剛堅固を得。即ち無上菩提を成就して、刹那の間に毘盧遮那の光明と同等となり、金剛薩埵大祕密主の三金剛部に安住す。此れを金剛薩埵出生金剛三摩地と名づく。諸の踰室多

【七一】嚕地囉。梵 rudira 血液なり。
【七二】三角の護摩爐。調伏法に用ふ。護摩爐は、梵 kuṇḍa 藏 thab.
【七三】羅嚩拏。梵 lavaṇa 藏 lan-tshu 六味の一なる鹹きものを云ふ。
【七四】囉嚩迦。梵 rājika 藏 yuṅ-ṅag 黑芥子なり。
【七五】建吒迦。梵 kaṇṭaka 藏 tsher-ma 刺ある木を云ふ。
【七六】護摩。梵 homa 焚物を燒き、天を祭り福を受くる法を云ふ。密教にては大日經疏第八に「護摩燒義由護摩能燒除諸業」と。今は惡障を折伏する調伏の護摩を云ふ。
【七七】空舍。寺なり。
【七八】尸陀林。梵 śmaśāna 墓地を云ふ。
【七九】設咄嚕。梵 śatru 藏 dgra-po 翻譯名義集第五に「云怨家也」と。
【八〇】母訥誐囉。梵 mudgara 藏 tho-ba 鎚なり。
【八一】吽。ゑ hūṃ
【八二】踰室多。梵 yoṣita
【八三】吽ゑ。hūṃ

相は殊妙にして、諸分は皆圓滿す。若し此の法を修する者は、眞實の三昧に住して、一切の無礙(むげ)に、最上の成就を得。彼の五曼拏羅(まんだら)は、五佛の影像(えいざう)と想へ。最上の供養を獻ぜよ、祕密の大明行は、毘盧尊の影像なり。金剛身語心は、禪定行と相應す。諸佛の平等の光は、[五九]青優鉢羅華(色)なり。(或は)[六〇]囉惹迦の大色なり。[六一]乾鞨(かねや)を想ふも亦然り。

金剛手と相應す。若し此の儀軌に依りて、能く相應の事を作さば、此の諸の大明中の、雜行も相應行となりて、一刹那間に、金剛手と平等となり。一切法も自在なり。解脱に隨轉(ずゐてん)するを欲する、瑜伽行を修する者は、成就法を欲求して、一切の時中に於て、金剛法を作し、金剛法は無我なりと想へ。卽ち[六二]十地に安住し、善く語三昧を持せ。一切に勝自在なり。所有諸の種族とは、所謂[六三]婆羅門、[六四]刹帝利、[六五]吠舍、及び彼の[六六]首陀等、乃至[六七]旃陀羅なり。諸の乾鞨(かねや)より生ずる所なり。隨取して作法し、當に分別を生ずること勿れ。此の祕密平等は、金剛法を成就す。日の入る時に作法せば、日出づる時に成就す。本法と儀軌とに依りて、理の如くに作す所あらば、金剛薩埵を得。最上の成就を施せ。三身の大誓願(せいぐわん)は、諸佛の一切相にして、[六八]百由旬(ゆじゆん)の光を放ちて、一切を遍照す。二處若し相應せば、衆相は應に平等なり。此の諸の成就中の、雜行三昧行は、彼の五種の甘露なり。金剛成就の食も、亦諸の成就中の、雜行三昧行なり。若し甘露平等なれば、二處も亦相應し、佛の菩提を出現して、最上の眞實を成ず。

此れを諸佛欲解脱三昧法と名づく。

爾の時、世尊よ、大毘盧遮那金剛如來は、卽ち[六九]大三昧忿怒金剛三摩地に入る。定より出でて、金剛三業を以て、一切如來の金剛怖忿怒となり大明を宣說して曰はく。

[七〇]唵引一句 紇哩二合引二 瑟致哩三合引三 尾紇哩二合 多引那那四 薩哩嚩二合 設咄嚕二合 那引舍野五 薩擔二合

【五九】青優鉢羅華。優鉢羅は、梵 utpala 青蓮華なり。
【六〇】囉惹迦。梵 rajaka 藏 btso-blag-mkhan 染絲者なり。
【六一】乾鞨。梵 kanya 藏 sa-bon
【六二】十地。梵 daśa-bhūmi
【六三】婆羅門。梵 brāhmaṇa 藏 bram-ze 僧族なり。
【六四】刹帝利。梵 kṣatriya 藏 rgyal-rigs 王種なり。
【六五】吠舍。梵 vaiśya 藏 rje-hu-rigs 商賈なり。
【六六】首陀。梵 śūdra 藏 dmaṅs-rigs 農人なり。
【六七】旃陀羅。梵 caṇḍāla 屠種なり。
【六八】由旬。梵 yojana 翻譯名義集第三に「西域記云夫數量之稱踰繕那者、舊曰由旬、又曰踰闍那、又曰由延、皆訛略也、踰繕那者自古聖王一日軍行、舊傳、一踰繕那、四十里、印度國俗三十里、聖教所載、唯十六里」と。
【六九】大三昧忿怒金剛三昧地。梵 mahā-samaya-vajra-krodha-samādhi.
【七〇】oṃ hrīḥ ṣṭriḥ vikṛtānana sarva śatrūnnāśaya stambhaya stambhaya hūṃ hūṃ phaṭ svāhā.

指を用て、金剛橛を執り、無量壽佛の步勢を作せ。　智金剛と蓮華より出生せる正法安住三昧を想へ。

爾の時、世尊よ、阿閦金剛如來は、卽ち心金剛尾日林毗多三摩地に入る。定より出でて、金剛三業を以て、心三昧の大明を宣說して曰はく。

[55]唵引一句 嚩日囉二合引 囉引惹吽引二

此れ卽ち金剛部の法なり。前の儀軌の如くに、金剛橛を釘ち、然して[56]五鈷金剛の熾盛の光明を觀想し、阿閦如來の步勢を作せ。當に橛を下す時に、此の大明を誦せば、三金剛は無垢の正法を出生し、三昧に安住す。是の如き等の身語心の三昧は、金剛橛の大明と、儀軌とは虛空界の金剛と等しく出生す。諸の作者あれば、法に依りて作せ。卽ち能く一切の調伏を成就す。

爾の時、世尊よ、大毘盧遮那金剛如來は、盡くの有情界の所依となる。大歡喜を得て、大音聲を出し是の如きの言を作す。

大なる哉、祕密の最勝句。　大なる哉、所說の眞實の義。　大なる哉、寂靜なる妙法門。　大なる哉、金剛廣大の行。　諸佛の所說の金剛橛は、　諸の菩薩の敬愛する所なり。　身語心業の大金剛も、　亦祕密の金剛橛を攝す。　所有一切の大明句は、　眞實と、金剛橛より出生するなり。　最上の金剛身語心は、　是れ卽ち大明の眞實の義なり。

[57]一切心眞實金剛出生三昧分第十五

爾の時金剛手菩薩摩訶薩は、[58]卽ち虛空中に、　大文字を出現す。　一切智よりは一切の灌頂の義を出生す、　復た語金剛よりは、　是の如き法を宣說す。　修法者は當に四方の曼荼羅を想ふべし。　中に忿怒王甘露軍拏利を現ず、　然して中に乾韃を觀想して作法せよ。　彼の色

【五五】 oṃ vajraḥ hūṃ

【五六】 五鈷金剛。梵 pañca-śūla

【五七】 梵 sarva-citta samaya-sarvavara-ṣaṃ bhūtir nāma pañcadaśaḥ paṭalaḥ 藏 sems-can thams-cad-kyi dam-tshig gi sñiṅ po rdo-rje ḥbyuṅ-ba.

【五八】 一切智。梵 sarva-jñātā 藏 thams-cad-mkhen-pa-ñid. 一切の法門を了知する智を云ふ。

九迦引野嚩引訖唧二合多十嚩曰囉二合引 計羅野吽引發吒上同十一

此の大明を說く時は、所有(あらゆる)一切の大威德金剛は、驚怖迷悶し、咸各虛空金剛を思念す。此の大明は即ち[四九]金剛橛なり。若し是の金剛橛を作(つく)らんと欲する者は、或は[五〇]佉禰囉木、或は復た鐵等を用ひよ。其の分量に依りて、如法に作れ。作り已れば法に依りて加持し、能く調伏し、一切を破壞せよ。此れ即ち金剛薩埵部中の熾盛(しじやう)廣大平等光明の三金剛身より出生する所の法なり。若し毘盧遮那金剛如來の大印と相應せば、是れ即ち囉誐金剛なり。若し[五一]焰鬘得迦忿怒明王に住し、大印と相應せば、即ち三金剛橛と名づく。若し甘露軍拏利忿怒明王と相應せば、是れ即ち大惡忿怒(あくふんぬ)より出生せる金剛相應の諸佛の大主宰なり。諸の修法者は當に心より足に至るまで此の金剛橛を想へ。却つて復た頂より前の如く觀想せよ。即ち[五二]尾日林毗多を得て、能く禪定金剛に安住せば、即ち諸佛に決定して相應することを得。

爾の時、世尊よ、大毘盧遮那金剛如來は、即ち金剛尾日林多三摩地に入る。定より出でて、身三昧安金剛橛の大明を說いて曰はく。

[五三]唵引一句 親捺親捺二賀那賀那四儞引鉢多二合嚩曰囉二合引 左訖囉二合吽引發吒半音五

金剛橛を安ずるには當に此の明を誦すべし。彼の橛を下す時は、法と儀軌とに依りて毘盧遮那佛の步勢を作せ。左手の大指を以て金剛橛を執り、右手に釘を用て土に入れよ。分寸は彼の儀軌の如し。此れは即ち金剛薩埵の三金剛身より出生せる正法安住三昧なり。

爾の時世尊、無量壽金剛如來は、即ち詰金剛尾日林眈多三摩地に入る。定より出でて、金剛三業を以て、語三昧の金剛橛の大明を宣說して曰はく。

[五四]唵引一句 紇哩引二合二 唵引三 嚊二合嚩四

此れ即ち蓮華部の法にして、亦前の說の如く、金剛橛を釘つには、此の大明を誦せ。亦左手の大

【四九】金剛橛。梵 vajra-kila 曼拏羅の四隅に結界をなすに用ふるもの。

【五〇】佉禰囉木陀羅尼集經第三に「佉陀囉木唐に柴蘖木といふ」とあるに同じならん。一切如來大祕密王未曾有最上微妙大曼拏羅第一に息災には乳木、增益には吉祥木、室利沙木、降伏には佉儞囉木、調伏には鐵を用ひて橛となすを說けり。

【五一】焰鬘得迦。梵 yamantaka

【五二】尾日林毗多。梵 vijṛmbhita

【五三】oṃ chinda chinda hana hana daha daha dīpta vajra cakra hūṃ phaṭ

【五四】oṃ hrīḥ bhūr bhuvaḥ

召し卽ち至りて、諸の事業を作すに皆成就を得。又此の大明を若し忿怒を以て持誦すること一[三七]洛叉數せば、一切の事業は速かに成就を得。

復次に一切忿怒王は怨惡を調伏することを宣說す。諸の吉祥事の大明を持誦する行を作す。當に調伏さるべき者は、卽ち彼の一切極惡の衆生にして、所謂[三八]阿闍梨を謗り、及び大乘を謗り、諸の魔事を作し、邪明に隨順し、佛の種性を壞して、佛の菩提道を勤求し能はざる者なり。又十方の一切衆生の身語心業に於て、破壞の想を起し、怨惡の心を生ぜる是の如き等の輩は、卽ち此の法を以て調伏すべきなり。若し[三九]調伏法を作さんとせば、當に一處に於て、忿怒の像を想へ、法と儀軌とに依りて、時處に相應し、忿怒の像の前に於て、彼の大明一百八遍を誦せば、一切の惡者をして決定に句召して、悉く調伏せしむ。

又復た若し調伏法を作さんとする者は、先づ當に其の處所を擇ぶべし、或は彼の舍に於て、或は空室(に於て)、乃至四衢道の獨の樹下等に於て、當に[四〇]摩䔍沙阿悉底を取るべし。長さ[四一]八指量の[四二]橛と作て用ひよ。大明を以て加持すること一百八遍、當に用ひて調伏する所の者を[四三]阿哩拶哩に置け、彼は半月中に、卽ち當に調伏すべし。又の法は當に[四四]葛波羅の圓滿具足せる者を用ふべし。當に大明を書きて其の內に置け、默持して彼の阿哩拶哩に往け、或は復た[四五]多羅樹の葉及び餘の竹帛等に以て忿怒の大明を書き、亦前の法の如く阿哩拶哩に置け、彼を卽ち調伏すべし。此れを諸佛の[四六]金剛因大三昧法と名づく。

是の時、世尊は復た一切如來の身語心の[四七]金剛縛三摩地に入る。定より出でて、金剛三業を以て、三界の身語心の金剛橛の大明を宣說して曰はく。

[四八]唵引一句 伽伽伽引多野伽引多野二薩哩嚩二合耨瑟咤二合發吒上同三 計羅野計羅野四薩哩嚩二合播謗發吒上同發吒上同五 吽引吽引吽引六嚩日囉二合引 計羅七嚩日囉二合引 馱嚕引八倪也引二合 鉢野底

【三七】洛叉。梵 lakṣa 翻譯名義集第三に「此云十萬」と。
【三八】阿闍梨。梵 ācārya 師範なり。
【三九】調伏法阿毘遮嚕迦。梵 abhicāruka
【四〇】摩䔍沙阿悉底。梵 manuṣyāsthi
【四一】八指量、指量。梵 aṅguṣṭha 藏 the-boṅ は尺度の量、兩指を　と言ふ。一指と言ふは佛指の闊さ二寸なり（翻譯名義集第三）。
【四二】橛、梵 kīla
【四三】阿哩拶哩。梵 alidvāra
【四四】葛波羅。梵 kapāla 人頭の蓋骨にて作れる器なり。
【四五】多羅樹葉、梵 tāla-pattra-ānkilaya
【四六】金剛因大三昧法。梵 mahā-samaya-hetu-vajra
【四七】金剛縛三摩地。梵 nibandhana-vajra-samādhi.
【四八】oṃ gha gha ghātaya ghātaya sarva duṣṭān kīlaya kīlaya sarva pāpān phaṭ hūṃ hūṃ hūṃ vajra kīlaya vajra dhara ājñāpayati kāya vāk citta vajraṃ kīlaya-hūṃ phaṭ

く[30]三叉及び鉤[31]なり。阿脩羅、乾闥の彼も亦能く句召す。當に皚哩迦[32]、或は復た朅[33]致迦を用ふべし。月の出る時に大明を誦して加持せば句召法と相應す。所有梵釋天は皚哩迦等を用ひて當に彼の名字を書くべし。即時に能く句召するに所求の所作に隨ふ。語金剛の所說の一切は皆意の如くなり。焰鬘得迦大忿怒明王を想へ。一切の相を圓具して、大輪中に安住す。身は赤き劫火の如し。金剛鉤を觀想せよ。大惡忿怒と作る。[34]藥吒尼を句召す。此れを三昧印と名づく。一切の大明句と、一切の句召法とは、所說の如く成就す。金剛手菩薩は須臾に能く是の如き一切の明を善說する、究竟最上の王なり。

爾の時、世尊は即ち普遍三摩地に入る。空より出でて、金剛三業を以て、此の嚩日囉播多維大忿怒明王の大明を說いて曰はく。

[35]唵引一句 戍梨儞引莎引賀引二

此の大明を說く時は、所有一切の大威力者なる那識、乾闥衆は、驚怖迷悶し、咸各諸佛菩薩を思念す。此の大明は速かに能く諸の成就法を圓滿す。彼の乾闥衆は句召を作して、珠妙の相を現ず。即時に諸の成就を作すに至る。

是の時世尊は、復た虛空出生三昧三摩地に入る。從より出でて、金剛三業を以て、此の大法三昧金剛顰眉菩薩の大明を說いて曰はく。

[36]唵引一句 婆野那引舍儞二怛囉引二合西引怛囉三勃哩二合酤致怛致四多吠致五碎帝莎多七惹致引儞引莎引賀引

此の大明を說く時、所有一切の持明天及び天后は皆大に驚怖し、咸大智金剛を思念す。此の大明は大威力ありて、寂滅より金剛最上を出生し、三金剛智に住す。一切處に普ねく能く句召をなす。所有持明天后は此の大明を以て亦能く句召す。彼の天后の大力色相は妙好嚴飾せり。刹那間に於て句

【三〇】三叉。梵 triśūla
【三一】鉤、梵 badiśa
【三二】皚哩迦。梵 gaurika
【三三】朅致迦。梵 khatika 白葉なり、
【三四】藥吒尼、梵 yakṣi
【三五】oṃ śulini svāhā.
【三六】oṃ bhayanāśani trāsaya bhṛkuti taṭi vetari taṭi vairaṭi śveta jaṭini svāhā.

時に無數の大忿怒王を出現す。大威力ありて、所謂大惡阿修羅衆を皆悉く破壞す。この大明も復た能く句召す。

爾の時、世尊よ、大毘盧遮那金剛如來は卽ち[二三]尾日林毗多三昧金剛三摩地に入る。定より出でて、金剛三業を以て、此の一切執金剛三昧の降三界大忿怒明王の大明を說いて曰はく。

[二四]唵引一句遜婆儞遜婆引二屹哩二合賀拏二合屹哩二合賀拏二合屹引三紇哩二合賀拏二合引鉢野屹哩二合賀拏引二合鉢野吽引四阿引那野虎婆誐鑁五引薩哩嚩二合尾鞞囉引惹六囉引發吒半音七

此の大明を說く時は、一切の[二五]乾鞞衆の大威力者も皆悉く金剛薩埵を思念す。皆金剛薩埵大祕密主の三昧步住に依る。此の大明力は能く金剛鉤を以て最上の諸の乾鞞衆を句召す。

爾の時、世尊よ、大毘盧遮那金剛如來は、卽ち[二六]大三昧眞實出生三摩地に入る。定より出でて、自の三業を以て、此の大三昧の三金剛祕密中の正語三摩地眞實句を宣說す。

所有諸佛の三金剛と、金剛薩埵の尊とを觀想せよ。手には金剛鉤及び索を持ち、最上の一切佛を句召し、諸佛の身語業と相應せり。是れ卽ち大金剛相應なり。金剛薩埵大主宰は、決定して常に句召を作す所なり。輪及び蓮華と金剛とを、三金剛より觀想せよ。所有最上の金剛鉤は、普ねく一切の明を句召し、根本の持明士に安住す。一切の金剛地は寂靜なり。所有最上の乾鞞衆の金剛鉤は心に入りて相應す。[二七]風曼拏羅も彼に相應し、決定して一切を能く句召す。

[二八]月曼拏羅を想へ。毘盧尊の像を現ず。理の如く安住すと想へ。甘露法と相應するは、本部の儀軌に依る。本部の大明を誦すること數五十徧に滿てば、決定して能く金剛鉤の大像と平等なる熾盛光を句召す。

[二九]金剛曼拏羅の滿空の乾鞞衆は忿怒金剛を現じ、金剛地に安住す。金剛器仗を執る謂は

【二三】尾日林毗多三昧金剛三摩地。梵 samaya-vijrimbhita-vajra samādhi.

【二四】oṃ sambhani sam bha hūṃ gṛhṇa gṛhṇa hūṃ gṛhṇāpaya gṛhṇāpaya hūṃ ānaya ho bhagavan vidyā rāja hūṃ phaṭ

【二五】乾鞞。梵 kanya (N. of dūrgā)

【二六】大三昧眞實出生三摩地。梵 mahāsamaya tattvotpatti-vajra-samādhi.

【二七】風曼拏羅。梵 vāyu maṇḍala

【二八】月曼拏羅。梵 candra-maṇḍala

【二九】金剛曼拏羅。梵 vajra-maṇḍala

三業を以て、此の吒枳大忿怒明王の大明を說いて曰はく。

[18]那莫三滿多迦引訖唧二合多嚩曰囉引二合 掇一句唵引二吒髻吽引弱三

此の大明を說く時、諸佛如來は皆悉く稱讃し、一切の衆會は大驚怖を生ず。咸各三身金剛を思念す。若し此の大明を持する者あらば、卽ち金剛薩埵と相應し、金剛大明行を成就し、復た能く一切の明句を句召す。

爾の時、世尊よ、毘盧遮那金剛如來は、卽ち[19]清淨無垢智金剛三摩地に入る。定より出でて、金剛三業を以て、此の[20]金剛賛拏三昧不動大忿怒明王の大明を說いて曰はく。

[21]那莫三滿多迦引野嚩引訖唧二合多嚩曰囉引二合 掇一句唵引二 阿左羅三 濟吒四 拏拏吒拏吒五 謨吒謨吒六吒吒七咄吒咄吒八賀賀九 謨賀薩賀十薩賀薩賀十一那賀那賀十二底瑟吒二合 底瑟吒二合十三阿引尾舍阿引尾舍十四摩賀引摩怛播羅哥十五度那度那十六底尼底尼十七佉引 那佉引那十八尾伽曩引二合 摩引囉野摩引囉野十九耨瑟咯引二合 婆乞叉二合野婆乞叉二合野二十薩哩罔二合 酤嚕二十一吉哩吉哩二十二摩賀引尾沙摩囉曰囉二合薩普二合吒野薩普二合吒野二十三吽引吽引吽引二十四怛哩二合囉隷多二十五嚂誐引那多迦二十六盎二十七 敓敓敓二十八阿左羅二十九 濟吒三十薩普二合吒野薩普二合吒野三十一吽引三十二阿三摩底迦三十三怛囉引二合吒半音三十四摩賀引囉縒婆引多野三十五三摩野滿怛嚂二合引三十六敓三十七 鉿三十八 戍夜切亭身覩路迦三十九迦覩二合沙也二合覩囉曰哩二合四十 那謨薩怛囉三合鉢囉二合底賀多嚩隷引毗也二合四十一 入嚩引二合 囉引野四十二 怛囉二合吒上同四十三 阿薩賀那莫莎引賀引四十四

此の大明を說く時、所有一切の天及び[22]緊迦羅等は皆悉く驚怖し、迷悶して身金剛を思念せり。卽

【一八】 namaḥ samanta kāya-vāk-citta vajrāṇāṃ. Oṃ ṭarki hūṃ jaḥ.

【一九】 清淨無垢智金剛三摩地。梵 jñāramālāṃ va-vajra samadhi.

【二〇】 賛拏 梵 caṇḍa

【二一】 oṃ namaḥ samanta-kāya-vak-citta vajrāṇāṃ. Oṃ acala kāṇana hūṃ hūṃ moṭṭa moṭṭa saṭṭa saṭṭa ha ha moha moha saha saha hasa hasa hara hara daha daha tiṣṭha tsṭha aviśa āviśa mahāmatta-pālaka dhuna dhuna tiṇi tiṇi kiṛi kiri khāda khāda vighnān māraya māraya duṣṭha bhakṣa bhakṣa satvaṃ kuru kuru kiri kiri mahāvisama vajra-sphoṭaya sphoṭaya hūṃ hūṃ hūṃ ṭrvalita raṃgamarttaka ā ā hūṃ hūṃ hūṃ acaleṭa sphoṭaya sphoṭaya hūṃ asamantika traṭ mahā valasātaya samayaṃ mantrāṃ hūṃ moṃ śadhyantu vajri nāmas tva prativalebhyaḥ jvālaya trāṭ asaha namaḥ svāhā.

【二二】 緊迦羅。kiṃkira ? 鬼名。

尾那引野伽那引舍迦引野三十八 虎嚕虎嚕三十九 儞引鉢多二合 替拏引野四十 薩哩嚩二合 設咄嚕二合搣四十一 紇哩二合那野引儞閉拏野四十二 親那親那四十三 尾馱引曩砌捺迦四十四 尾馱引曩尸悉吒引二合 摩耨三摩二合曬四十五 三摩野嚩曰囉二合馱囉嚩左曩四十六 摩哩摩引二合 尼儞訖哩二合多野四十七 吽引賀那賀那四十八 捺賀捺賀四十九 覩嚕覩虎嚕五十一 發吒上同發上同五十二 吽引吽引五十三 訖哩二合旦引多引曳五十四 儞嚩哩始二合五十五 尾捺囉二合引 鉢拏迦囉引野五十六 賀那賀那五十七 嚩曰囉二合 難尼那引莎引賀引五十八

此の大明を說く時、所有一切の惡曜は皆悉く驚怖し、咸各金剛薩埵を思念す。此の大明は大威力ありて、若し人一百八遍を持誦すれば、大忿怒明王の敬愛を得。悉く能く一切の魔惡を破壞し、又能く一切の事業を成就す。

爾の時、世尊よ、阿閦金剛如來は、卽ち[15]普雲吉祥三摩地に入る。定より出でて、金剛三業を以て、此の大力大忿怒明王の大明を說いて曰はく。

[16]那莫三滿多迦引野嚩引訖唧二合多嚩引訖唧二合多嚩曰囉引二合搣一句 唵引二 吽引吽引三 發吒半音 發吒上同四 唵引五 烏誐囉二合 戍羅播尼六 吽引吽引吽引七 發吒上同 發吒上同八 唵引九 惹喩二合底儞哩那引二合捺十 吽引吽引吽引十一 發吒上同十二 唵引唵引唵引十三 發吒上同 發吒上同十四 摩賀引嚩羅引野莎引賀引十五

此の大明を說く時、所有一力の大力龍衆は皆悉く驚怖す。咸各三身金剛を思念す。此の大明を若し持誦し相應する者は、卽ち一切の事業を成就す。若し亢旱の時に法に依りて此の大明を誦すれば、卽ち能く雨を降し、諸の境界に隨つて滿足を得。

爾の時、世尊よ、大毘盧遮那金剛如來は、卽ち[17]遍調伏金剛三摩地に入る。定より出でて、金剛

---

ni sarva mantrāṇi sarva mulakarmaṇi sarva mahāgrahān hara hara bhaṃja bhaṃja marda marda idaṃ me kārya sādhaya hūṃ nilaya nilardāya turu turu vighna vināyakanāśakāya hūṃ hūṃ diyta cardāya sarva śatrūṇāṃ hṛdayāni pitraya cchinda cchinda vidyānāṃ cchedaka hūṃ vidyānāṃ śiṣṭhāna smara samayaṃ vajra dhara vacana karmāṇi nikṛntaya hūṃ hara hara daha daha kuru kuru turu turu huru huru phaṭ phaṭ hūṃ hūṃ bhakṣī jñāpaya kṛtāntāya vedaṇai vidrāya kāya hara hara vajra daṇḍine svāhā.

【一五】 普雲吉祥三摩地。梵 samanta-megha śriya-samādhi.

【一六】 namaḥ samanta kāya-vāk-citta vajrāṇāṃ.
Oṃ hūṃ hūṃ hūṃ phaṭ phaṭ phaṭ oṃ śūlapāṇi hūṃ hūṃ hūṃ phaṭ phaṭ phaṭ. oṃ dyoti nirnāda hūṃ hūṃ hūṃ oṃ oṃ oṃ phaṭ phaṭ phaṭ.
Oṃ mahā valāya svāhā.

【一七】 徧調伏金剛三摩地。梵 samanta nirghāta vajra-samādhi.

三嚩曰囉二合苦囉儞哩伽二合多那引野發吒上同四十四鉢囉滿怛囉二合尾那引舍那引野發吒同上四十五怛賴二合路枳也二合婆煬伽囉引野發吒上同四十六薩哩弭引二合沙嚩二合鉢囉二合底賀多引野發吒同上四十七嚩曰囉二合酤羅怛囉引二合薩那引野發吒上同四十七嚩曰囉二合酤羅怛囉引二合薩那引野發吒上同四十八吽引吽引吽引四十九發吒上同發吒上同發吒莎引賀引五十

此の大明を說く時、諸佛如來は、皆悉く稱讃し、一切の衆會は大驚怖を生ず。咸各金剛智主を思念す。卽時に等虛空に遍滿せる一切境界中に於て、[二二]金剛訶邏喝羅廣大光明を出現す。其の一切の非境中には一切大惡忿怒王を出現す。

爾の時、世尊不空成就金剛如來は、卽ち三昧の[二三]出生幢金剛三摩地に入る。定より出でて、金剛三業を以て、此の[二三]儞羅難拏大忿怒明王の大明を說いて曰はく。

[二四]那莫三滿多迦引野嚩引訖唧二合多嚩曰囉引二合掖一句唵引二翳呬曳引二合呬婆誐嚩引三儞引羅二合難拏四覩嚕覩嚕五羅虎盧虎盧七訶引訶引八虞盧虞盧九虞羅引鉢野虞羅引鉢野十訖囉二合摩訖囉二合摩十一婆誐鑁嚩引喩尾儗那普旦尸伽嚂二合十二捺賀捺賀十三捺囉捺囉十四嚩賀嚩賀十五鉢左鉢左十六鉢吒鉢吒十七摩吒十八播多野播多十九摩吒摩吒引鉢野摩吒摩吒引鉢野二十薩哩嚩二合羯哩摩引二合尼一二十親那親那二二十頻那頻三二十婆乞叉二合婆乞叉二合弭捺摩引寫四二十嚕地囉摩寫五二十弭捺摩惹嚕地囉必哩二合野六二十翳呬曳引二合呬婆誐鑁七二十薩哩嚩二合尾伽那引二合儞八二十薩哩嚩二合尾鞞儞九二十薩哩嚩二合滿怛囉引二合尼三十薩哩嚩二合母羅羯哩摩引二合尼一三十薩哩嚩二合母羅屹囉二合欷二三十賀那賀那三三十伴惹伴惹四三十摩哩捺二合三十五伊能弭迦引哩煬二合娑馱野六三十儞引儞羅引野儞羅嚩曰囉二合難拏引野七三十覩嚕覩嚕尾伽那二合

---

nirnirghātanāya phaṭ para=mantra vināśanāya phaṭ va=jra daṃṣṭrāya phaṭ vajra muranirnirghātanāya phaṭ paramantra vināśanāya pha-ṭ trailokya bhayaṃ karāya phaṭ sarva karmeśva prati=hatāya phaṭ vajrâkulasantra=śanāya phaṭ hūṃ hūṃ hūṃ phaṭ phaṭ svāhā.

【二二】金剛訶邏廣大光明。梵 vajra-hālāhala-prabha.

【二三】出生幢金剛三摩地。梵 saṃbhava-ketu vajra-samā-dhi.

【二三】儞羅難拏忿怒明王。梵 nīla-vajra-daṇḍa krodha-rā=ja.

【二四】namaḥ samanta kā=ya vāk citta vajrāṇāṃ.

Oṃ ehyehi bhagava nīla-vajra daṇḍa turu turu du=lu dulu laghu laghu hā hā gulu gulu gulāpaya gulāpa=ya krama krama bhagavan vāyuvegena bhutāṅgīghraṃ daha daha dara dara vaha vaha paca paca maṭa maṭa pātaya pātaya maṭa maṭa maṭṭāpaya maṭṭāpaya sarva karmāṇi cchinda cchinda bhekṣaya bhekṣaya meda=māṃsa rudhira matsya me=damajā rudira priya ehye=hi bhagavan sarva vighnā=

吒半音發吒上同萈引賀引五

此の大明を說く時、諸佛如來は皆悉く稱讃し、一切の衆會は大驚怖を生ず。咸各大菩提心を發起し彼の所有大惡忿怒(ふんぬ)羅刹娑(らせつしや)等は迷悶驚怖すと想へ。此の大明の力は悉く能く調伏す、又此の大明は彼の金剛心より出生する所なり。悉く能く種種の事業を成就す。

爾の時、世尊よ、無量壽金剛如來は、卽ち[九]無量壽出生三摩地に入る、定より出でて、金剛三業を以て、此の蓮華出生の金剛忿怒馬頭大明王の大明を說いて曰はく。

[一〇]那莫三滿多迦引野嚩引訖唧二合多嚩曰囉引二合摋一句唵引二吽引吽引三多引嚕維四尾引嚕維五薩哩嚩二合尾沙伽引多迦六入嚩二合隷多七尾薩普二合凌誐八阿吒吒訶婆計舍哩引九薩吒鉢啗迦引囉十嚩曰囉二合苦嚕彌哩伽引二合多十一左隷多十二嚩蘇馱引多羅十三彌引薩摩引嚕覩怛吒二合鉢多二合十四馱囉尼馱嚩毗沙拏十五阿吒吒賀引十六阿鉢哩弭多嚩維引訖囉二合摩十七阿哩耶二合毗多十八部多誐拏引馱喩二合始多十九沒也切亭身沒夜亭上同二二合喝野屹哩二合嚩二十一佉引捺佉引捺二十二鉢囉滿怛覽引二合親那二十三悉提孕二合弭彌舍二十四阿引尾舍野二十五薩哩嚩二合入嚩二合囉必舍引左引那引二十六薩哩嚩二合誐囉二合呬沙嚩二合底賀覩婆嚩二十七嚩曰囉二合能瑟吒囉三合緊唧囉引野悉二十八伊㗚薩哩嚩二合耨瑟吒二合誐囉二合紇耨瑟吒二合薩哩牟二合嚩引二十九度那度那三十摩他摩他三十一摩吒摩吒三十二鉢吒鉢吒三十三播吒野三十四滿馱三十五那吒那吒三十六沒馱達哩摩二合僧伽引耨倪也二合旦鞠哩忙二合酤嚕尸引伽覽二合三十七喝野屹哩引二合嚩引野發吒半音三十八嚩曰囉二合引野發吒上同三十九嚩曰囉二合誐引怛囉二合引野發吒上同四十嚩曰囉二合儞怛囉二合引野發吒上同四十一嚩曰囉二合能瑟吒囉三合引野發吒上同四十二嚩曰囉二合苦囉引野發吒上同四十

【八】囉刹娑。梵 rākṣasa 鬼の名。翻梵語第七譯曰可畏亦曰護也。

【九】無量壽出生三摩地　梵 amita-sambhava vajra-samādhi.

【10】namaḥ samanta kā-ya-vāk-citta vajrāṇam.

Oṃ hūṃ hūṃ hūṃ taru-la virula sarva viṣaghātaka jvalita visphu liṅga aṭṭātta hāsa keśari saṭāṭā paṭam kāra vajra muramirghāta nava samvātala niśvāsamā-ruto kṣipta dharaṇiṃ dha-bhiṣaṇāṭṭāttā hāsa aparimi-ta vampara krama ārya ga-ṇabhita bhūtagaṇādhyuṣita budhya budhya hayagriva khāda khāda paramantrān cchinda cchinda siddhiṃ mediśa-aveśaya sarva jvala pipāsādin sarvagraheśva pra-tihato bhava vajra daṃṣṭra kiṃciraysi imaṃ sarva duṣ-ṭha grahaṃduṣṭha samvā dhara dhara vidhara vidhara matha matha maṭamaṭa ghā-ṭaya ghāṭaya vandha van-dha budha dharma saṅghā-nujñāta karma kuruśigharaṃ-

hayagrīvāya phaṭ vajrā-ya phaṭ vajra gātrāya phaṭ vajranetrāya phaṭ vajra da-ṃṣṭrāya phaṭ vajra mura-

此の大明を說く時、所有諸佛如來は皆悉く稱讚し、一切の衆會は皆悉く驚怖せり。咸各心に金剛如來を思念す。此の大明は大威力ありて、諸の是の法を作す者あらば、常に〔三〕葛波羅の圓具して損なきものを取り、若しは時、若しは處(に隨ひ)、法に依りて安置し、此の大明を以て加持すること三徧すれば、卽ち能く一切の事業を成就せば。乃至佛眼菩薩、摩々枳菩薩等を、刹那間に於て能く句召す、此れを諸の佛心金剛と名づく。

爾の時、世尊よ、大毘盧遮那金剛如來は、復た最上の〔四〕三昧光明三摩地に入る。定より出でて、金剛三業を以て、此の甘露軍拏利大忿怒明王の大明を說いて曰はく。

〔五〕那莫三滿多迦引野嚩引訖唧曰囉二合引赧一句那謨嚩曰囉二合骨嚕二合馱引野二摩賀引能瑟吒嚕三合怛迦二合吒陪囉嚩引野三阿悉目娑羅鉢囉戍播舍舍賀薩多引二合野四唵引五阿密哩二合多軍拏梨六揭七佉引呬佉引呬八底瑟吒二合底瑟吒二合九滿馱滿馱十賀那賀那十一捺賀捺賀十二鉢左鉢左十三誐哩惹二合誐哩惹二合十四怛哩惹二合怛哩惹二合十五尾薩普二合吒野尾薩普二合吒野十六薩哩嚩二合賀尾伽那引野崗十七摩賀引誐拏鉢底哷引尾旦多迦囉引野十八吒半音莎引賀引十九

此の大明を說く時、諸佛如來は皆悉く稱讚し、一切の衆會は大驚怖を生ず、咸各身金剛如來を思念す。此の大明は彼の一切の大明と相應し、悉く能く一切の事業を成就す。若し儀軌に依つて是の法を作す者は、卽ち諸佛大勇健軍の常に衞護する所を得。

爾の時、世尊よ、寶生金剛如來は、卽ち諸佛の光明金剛三摩地に入る。定より出でて、金剛三業を以て、此の〔六〕無能勝大忿怒明王の大明を說いて曰はく。

〔七〕那莫三滿多迦引野嚩引訖唧二合多嚩曰囉二合引赧一句唵引二吽引三唋那哩致吒四吽引吽引發

【三】 葛波羅。梵 kapāla 藏 thod-pa 人頭の蓋骨に作れる器。

【四】 三昧光明三摩地　梵 samaya-raśmi ghanāgra-samādhi.

【五】 namaḥ samanta-kāya-vāk-citta-vajrāṇām namo vajra krodhāya māha daṃṣṭrotkaṭa bhairavāya asi-muśala pāśa paraśu hastāya.

Oṃ amṛta kuṇḍali kha kha khāli khāli tiṣṭha tiṣṭha vandha vandha hana hana daha daha garja garja visphoṭaya visphoṭaya sarva vighna vināyakaṃ mahāgaṇapati jīvitānta karāya svāhā.

【六】 無能勝。梵 aparā ita.

【七】 namaḥ samanta kāya-vāk-citta vajrāṇam.
Oṃ hūṃ jinaritiha hūṃ hū-ṃ phaṭ svāhā.

卷の第四

身語心未曾有大明句召尾日林毗多王最勝三摩地分

第十四之餘

爾の時、世尊よ、大毘盧遮那金剛如來は、復た一切如來の身語心業の[一]金剛淨光明雲堅固三摩地に入る。定より出で已つて、金剛三業を以て、此の金剛忿怒焰鬘得迦の大明王の大明を說いて曰はく。

[二]那莫三滿多迦引野嚩引訖唧二合 多嚩日囉引二合 𧙃一句 唵引二 揭揭三 佉引呬佉呬四 薩哩嚩二合 耨瑟吒二合 薩埵那摩迦五 阿悉目莎羅鉢囉戍播設賀薩多引二合六 拶覩哩部二合 惹仁左切七 拶覩哩日二合佉八 殺吒拶二合 囉拏九 阿引誐蹉阿引誐蹉十 薩哩嚩二合 耨瑟吒二合 鉢囉引二合 拏引鉢賀引哩尼十一 摩賀引尾伽那二合 伽引 多迦尾訖哩二合 多引 那那十二 薩哩嚩二合 部多婆煬迦囉十三 阿吒吒訶引娑那引儞𧜖十四 吽引伽囉二合 拶哩摩二合 儞嚩薩那十五 酤嚕酤嚕薩哩嚩二合 葛哩䆉二合 親那親那十六 薩哩嚩二合 滿怛覽二合十七 頻那頻那鉢囉毋捺嚂二合引十八 阿引迦哩沙二合 野阿引迦哩沙二合 野十九 薩哩嚩二合 部引旦引儞哩摩二合 他儞哩摩二合 他二十 薩哩嚩二合 耨瑟咍引二合 鉢囉二合 尾舍野二十一 曼拏羅摩提吠嚩莎且引咀迦咀二十二 酤嚕酤嚕二十三 摩迦引哩煬二合二十四 捺賀二十五 鉢左鉢左二十六 摩引尾藍末摩引尾藍末二十七 三摩野耨三摩二合 囉二十八 吽引呼引二十九 發吒詳發吒上同三十 薩普二合 吒野薩普一三十 薩哩嚩引二合 舍引鉢哩布囉迦三十二 呬呬婆誐鑁三十三 緊唧囉引 野悉摩摩薩哩嚩引二合 囉湯二合 娑引馱野莎引賀引三十四

【一】 金剛淨光明雲堅固三摩地。梵 vimala-rasmi megha-vyūha vajra-samādhi.

【二】 namaḥ samanta kā=ya-vāk-citta vajrāṇāṃ.

Oṃ kha kha khāhi khā=hi sarva-duṣṭha damaka a=simuśala paraśu pāśuhasta catur-mukhaṃ catur-bhuja ṣaṭcaraṇa āgaccha-gaccha sarva-duṣṭha-prāṇāpahāriṇe mahā-vighna ghaṭa kavikṛ=tanana sarva-bhūta bhayaṃ kara aṭṭaṭṭa hāsanādine vyāgracarmani vaśane ku=ru kuru sarva kārmāṇicchi-ndacchida sarva-mantrān bhinda bhinda paramudrān ākarśayākarṣaya sarva bhūtānni=martha sarva-du=ṣṭha praveśaye praveśaya maṇḍala madhye vaivasva=ta jivitanta kara kuru ku=ru mama kārya daha daha paca paca mavilaṃva ma=vilaṃva samaya manusma=rə hūṃ hūṃ phaṭ phaṭ sphoṭaya sphoṭaya sarvāśa pariparaka sarvann=āśa pa=ripuṃ kara kara he he bhagavān kiṃcirāyasimama sarvārthāṃ sādhaya sādha=ye svāhā.

爾の時世尊は、復た[一七四]普遍金剛三摩地に入る。定より出でて、金剛三業を以て、此の羯磨大三昧の上首明妃なる[一七五]多羅菩薩の大明を説いて曰はく。

[一七六]唵引一句 多引哩引二咄多引哩引三咄哩引莎引賀引四

此の大明を説く時、所有諸佛所生の大士は、歡喜智に住し、身金剛如來を思念す。諸佛金剛大勇健軍は、衆生界に普ねく勝上の事業を成就せしめ、刹那の間に悉く敬愛せしむ。

【一七四】普遍金剛三摩地。梵 samanta-saṃbhava-vajra sa-mādhi.

【一七五】多羅菩薩。梵 samaya tārā

【一七六】oṃ tāre tutāre ture svāhā.

爾の時、世尊よ、大毘盧遮那金剛如來なる諸佛の大祕密主は卽ち執金剛の[165]息災三昧大三摩地に入る。定より出でて、金剛三業を以て此の一切如來の明妃、[166]佛眼菩薩の大明を說いて曰はく。

[167]唵引一句 婆誐嚩底二嚕颯頗二合嚕入嚩引二合 羅底瑟吒引二合 悉馱路左儞薩哩嚩二合阿哩他二合娑引達儞莎引賀引五

此の大明を說く時、一切の聞者は心に歡喜を生じ、皆悉く諸佛の金剛を思念せり。此の大明は能く一切の事を成就し、能く一切の願を圓滿し、能く世間の爲めに息災法を作し、作す所の事業は成就せざることなし。乃至壽命を捨てんと欲する者も此の明力を以ての故に、復た壽命を得、此れ卽ち金剛三昧を正に宣說する所なり。

爾の時、世尊は復た[169]三身平等忿怒金剛の[168]離性非性金剛三昧三摩地に入る。定より出でて金剛三業を以て、此の一切執金剛の上首の明妃[170]摩々枳菩薩の大明を說いて曰はく。

[171]唵引一句 商哩引二扇引底葛哩引三屈吒四屈致儞引五伽引怛野六屈致鸋引莎引賀引七

此の大明を說く時、所有三金剛不壞の金剛大士は熙怡の眼をもて諸佛を瞻仰し、歡喜し心に金剛を思念す。金剛擁護の法は常に相應する所にして、能く一切の事業を成就し、常に大力を以て金剛護と作り、普ねく一切を遠離怖畏せしむ。

爾の時、世尊は、復た[172]大蓮華三昧觀照三摩地に入る。定より出でて、金剛三業を以て、此の一切法三昧の上首明妃なる白衣菩薩の大明を說いて曰はく。

[173]唵引一句 葛致引尾葛致引二 儞葛致引三 葛致四葛隮吒 尾 葛哩曳引二合 莎引賀引五

此の大明を說く時、所有最上持法の金剛大士は、歡喜心に住し、法語金剛如來を思念す。金剛增益法を成就し、常に廣大なる法藏を增益する所なり。此の大明は能く一切の事を成就し、諸の持誦する者あれば、速かに法語金剛を成就す。

【一六五】息災三昧大三摩地。梵 śānti-samayāgra-samādhi.
【一六六】佛眼菩薩。梵 buddha-locanā
【一六七】oṃ ru ru sphuru jvala tiṣṭha siddha locane sarvārtha sādhani svāhā.
【一六八】離性非性金剛三昧三摩地。梵 bhāvabhāva-samaya-vajra-samādhi.
【一六九】執金剛。梵 vajra-dhara.
【一七〇】摩摩枳菩薩。梵 māmakī
【一七一】oṃ śaṃkare śāntikare ghuṭṭa ghuṭṭini ghātaya ghātaya ghudhini svāhā.
【一七二】大蓮華三昧觀照三摩地。梵 mahā rāga-samayāvaloka-na-samādhi.
【一七三】oṃ kaṭe vikaṭe nikaṭe kaṭaṃ kaṭe karoṭa virye svāhā.

虛空に金剛日輪曼拏羅を想へ。[153]儞羅難拏忿怒明王の像を現ず。利牙ありて黑色なり。常に忿怒相に住して、焰光の熾盛なるを出す。金剛杖を觀想せよ、阿閦佛の冠を戴く、歡喜心を常に轉ず。是の如き忿怒王は、三昧行より生ずる所なり。
此れを[154]最上大金剛杖三昧三摩地法と名づく。
虛空に金剛日輪曼拏羅を想へ。（中に）[155]不動尊忿怒明王の像を想へ。純一の忿怒相にして、[156]劍、[157]索の[158]器仗を持す。焰光の熾盛なるを出す。不動の金剛を想へ。阿閦佛の冠を戴く。歡喜心を常に轉ず。是の如き忿怒王は、三昧行より生ずる所なり。
此れを[159]金剛界平等步順行三摩地法と名づく。
虛空に金剛日輪曼拏羅を想へ。中に[160]大明輪忿怒明王の像を現ず。諸相は悉く圓滿せり。輪の光焰は圍遶して、頂輪三昧に住し、廣大變化を作す。阿閦佛の冠を戴く、歡喜心を常に轉ず、是の如き忿怒王は、三昧行より生ずる所なり。
此れを[161]大明輪明王三昧大力頂輪金剛三摩地法と名づく。
虛空に金剛の日輪曼拏羅中に[162]降三界忿怒明王の像を現ずと想へ。利牙と焰光とは聚りて金剛雲に變化す。手より金剛光を出し、成就を得と觀想せよ。阿閦佛の冠を戴き、歡喜心は常に轉ず。是の如き忿怒王は三昧行より生ずる所なり。
此れを降三界明王の[163]三昧觀想三摩地法と名づく。
此れらの諸の忿怒王は歡喜心を常に轉じて、忿怒相を滅して諸の佛輪に安住す。皆三摩地の金剛智より生ずる所なり。悉く曼拏羅に住して金剛成就を作す。

[164]身語心未曾有大明句召尾日林毗多王最勝三摩地分第十四

【一五三】儞羅難拏。梵 niladaṇḍa
【一五四】最上大金剛杖三昧三摩地。梵 vajra-daṇḍa samāyāgravati-samādhi.
【一五五】不動。梵 vajrācala
【一五六】劍、梵 khaḍga 藏 ral-gri
【一五七】索。梵 pāśa 藏 shags-pa
【一五八】器仗。武器なり。
【一五九】金剛界平等步順行三摩地、梵 kha-vajra-dhātu samaya pādakranta samādhi.
【一六〇】大明輪、梵 vidyā cakra
【一六一】大明輪明王三昧大力頂輪金剛三摩地。梵 nagriga-vidyācala-vajra-samādhi.
【一六二】降三世界。梵 trailoka-vijaya.
【一六三】三昧觀想三摩地。梵 samaya-sambhava-samādhi.
【一六四】kāya-vāk citta-bhuta mantrā karṣaṇa-vijrimbhita rāja-nāma-caturdaśaḥ-paṭalaḥ 藏 sku-daṅ-gsuṅ-daṅ-thugs-rmad-du-byuṅ-ba-sṅags-bgugs-rnam-par-sprul-pahi rgyal-po.

虚空金剛日輪曼拏羅を想へ。(中に)[一四一]無能勝忿怒明王の像を想へ。焔光の熾盛なるを出し。心は金剛喜に住す、蛇を以て[一四二]絡腋と爲し、面は白色大惡忿怒の相を現ず。阿閦佛の冠を戴く。是の如き忿怒王は三昧智の所覺たり。

此れを[一四三]無能勝金剛莊嚴三摩地法と名づく。

虚空に金剛日輪曼拏羅を想へ、(中に)[一四四]馬頭忿怒明王の像を觀想せよ、焔光の熾盛なるを出し。面は赤色を現じ、廣大變化を作して、大惡の步勢を現ず。無量壽の冠を戴く。心は金剛喜に住す、是の如き忿怒王は、持金剛の三昧なり。

此れを[一四五]馬頭明王出生三摩地法と名づく。

虚空に金剛日輪曼拏羅を想へ。(中に)[一四六]甘露軍拏利忿怒明王の像(を觀想せよ)。焔光の熾盛なるを出し。金剛雲を遍現し、面は極めて惡く、黑色にして、利牙ありて忿怒す。阿閦佛の冠を戴く、心は喜相の忿怒なり。是の如き忿怒王は、三昧行より生ずる所なり。

此れを[一四七]甘露軍拏利三昧金剛三摩地法と名づく。

虚空に金剛日輪曼拏羅を想へ、(中に)[一四八]吒枳忿怒明王の像を觀想せよ。身より金剛光を出し、一切に莊嚴せらる。大惡の忿怒を現じ、大怖畏の相を作す、阿閦佛の冠を戴く。歡喜心を常に轉ず。是の如き忿怒王は、三昧行より生ずる所なり。

此れを[一四九]禪定金剛正智主三摩地法と名づく。

虚空に金剛日輪曼拏羅を想へ。(中に)[一五〇]大力忿怒明王の像を觀想せよ。焔光の熾盛なるを出す。三金剛輪は圍み、忿怒して[一五一]胃索を持す。大力金剛を想へ、阿閦佛の冠を戴く、歡喜心を常に轉ず、是の如き忿怒王は、三昧行より生(ずる所なり)。

此れを大力明王の[一五二]三金剛三摩地法と名づく。

【一四一】無能勝忿怒明王。aparājita-krodha

【一四二】絡腋。衣服の一種。又仁獸皮、或は華鬘等を以てす。其の着法は造像量度經解に「其披法。則毛向外、頭前尾後、斜披左肩上、以頭皮遮著左乳。而將右邊後腿皮。從像之背後由右腋下、挽過至像之前。與右前腿皮。互相交盤縛之」と。

【一四三】無能勝金剛莊嚴三摩地。梵 aparājita-vajra-vyūha-samādhi.

【一四四】馬頭。梵 hayagrīva

【一四五】馬頭明王出生三摩地、梵 hayagrīva-utpatti-sambhava-vyūha samādhi.

【一四六】甘露軍拏利。梵 vajrāmṛta.

【一四七】甘露軍拏利三昧金剛三摩地。梵 amṛta-sambhava-samādhi

【一四八】吒枳。梵 ṭarki

【一四九】禪定金剛正智主三摩地。梵 dhyāna-vajra-sambodhi-mati-samādhi.

【一五〇】大力。梵 mahā-vala

【一五一】胃索。梵 pāśaṃshaga-pa. 羂索は菩提心中の四攝方便を表し、鉤召引入し一切を縛するなり。

【一五二】三金剛三摩地 梵 trivajra-samādhi.

此れを[131]佛眼三昧最上大手三摩地と名づく。

當に空に住して、滿月曼拏羅を觀想すべし。（中に）[132]摩々枳菩薩（を現ず）。本部中の影像なり。（女人の色相に住して、廣大の妙眼を現ず。青蓮色の光の如し、諸分皆圓滿せり。衆色の蓮華を持す。三界の歸敬する所なり。佛菩薩の祕密大金剛を成就す。本部の儀軌の如く、法に依りて觀想せよ、

此れを[133]虛空三昧光明雲金剛大笑三摩地法と名づく。

當に空に住して、大法曼拏羅を觀想すべし。（中に）[134]白衣菩薩を現ず。本部中の影像なり。女人の色相に住して廣大の妙眼を現ず。蓮華の妙寶相の諸分皆圓滿せり。手に赤蓮華を持す。最上の法より出生す。金剛蓮華愛、一切の莊嚴する所なり。本部の儀軌の如く、法に依りて觀想せよ。

此れを[135]法智善作最上祕密金剛三昧の[136]法平等眞實現證菩提金剛出現三摩地法と名づく。

當に空に住して、金剛曼拏羅を觀想すべし。中に[137]多羅尊を想へ。中部中の影像なり。

女人の色相に住す。其の身は黃色と作す。種種に莊嚴せられ、廣大の妙眼を現じ、諸分皆圓滿せり。黃色の蓮華を持す、金剛定より生ず。一切は皆歸敬せり。

此れを[138]多羅尊最上大三昧三摩地法と名づく。

復た十忿怒明王の觀想法を說く。

虛空に金剛日輪曼焰羅を想へ。（中に）[139]焰鬘得迦忿怒明王の像を現ず。焰光熾盛にして、

大忿怒怖畏の赤目、利牙あり。手に大利牙を執り、頂に毘盧の冠を頂く。心は金剛喜に住す、是の如き忿怒王は、三昧智の金剛なり。

此を[140]焰鬘得迦變化光明莊嚴三摩地法と名づく。

【一三一】佛眼三昧最上大手三摩地。梵 locanā-samayajñā-hastāgravati-samādhi.

【一三二】摩摩枳菩薩。梵 mamāki

【一三三】虛空三昧光明雲金剛大笑三摩地。梵 kha-ma-rasmi-megha-vajra-davati-samādhi.

【一三四】白衣菩薩。梵 par̥ḍuvāsin 藏 gos-dkar-mo.

【一三五】法智善作最上祕密金剛三昧。梵 dharma-jñānakaraṃ divyaṃ guhyasamaya vajriraṃ.

【一三六】法平等眞實現證菩提金剛出現三摩地。梵 dharma samaya tattvābhisambodhi darśana vajra samādhi.

【一三七】多羅尊。梵 samaya-tārā 藏 dam-tsig sgrol-ma.

【一三八】多羅尊最上大三昧三摩地 梵 samaya tārāgravati-samādhi.

【一三九】焰鬘得迦忿怒明王。梵 yamāntaka-krodha.

【一四〇】焰鬘得迦變化光明莊嚴三摩地。yamāntaka sphuraṇā bhāsa-vyūha-samādhi.

是の如き十忿怒の勝上大明王は[一二二]儀軌の如くに說かる。彼等の諸の相分及び本部の大明は、咸各忿怒大我自在の相を現じて一切を調伏す。此れを勝金剛出生觀想法と名づく。復た三摩地の最勝觀想法を說く。當に空に住して、大輪曼拏羅を觀想すべし、中に[一二三]大毘盧を想へ、本尊の影像を現ず、自心の月は清淨にして、種々の光明を現ず。大[一二四]圓鏡を出生す。三界の曼拏羅は、菩提の觀に安住し、一切の莊嚴する所たり。諸佛の大自在と、諸世間の敬愛と、最上の定金剛とを、法に依りて觀想せよ。

此れを[一二五]毘盧遮那金剛敬愛三昧出生三摩地法と名づく。

當に空に住して、金剛曼拏羅を觀想すべし。中に金[一二六]剛尊を現ず。金剛部の影像なり。自身は忿怒の相にして熾盛の光ありて怖ずべく一切の相を圓具す。一切の莊嚴する所たり。大智寂靜の句は金剛自性と金剛大自在と諸衆生の敬愛とを得、定金剛の照す所なり。法に依りて觀想せよ。

此れを[一二七]金剛三昧出生金剛行三摩地法と名づく。

當に空に住して、大法曼拏羅を觀想すべし。中に大[一二八]法尊を現ず。蓮華部の影像なり。自身に善相を持す。一切の莊嚴する所なり。光明雲の大輪は、廣大變化すと想へ諸法の大自在の三金剛は、大智海の莊嚴を出生す、法に依りて觀想せよ。

此を[一二九]大法三昧出生大法行三摩地法と名づく。

當に空に住して、滿月曼荼羅を觀想すべし。(中に)[一三〇]佛眼菩薩を現ず。本部中の影像なり。女人の色相に住して廣大の妙眼を現じ、種々の寶の莊嚴の諸分も皆圓滿せり。手に大輪を持すと想へ。三界の一切成就智を敬愛す。輪は如意寶の光あり、本部の儀軌の如く、法に依りて觀想せよ。

【一二二】佛說幻化網大瑜伽教十忿怒明王觀想儀軌經等。
【一二三】大毘盧。毘盧遮那如來梵 vairocana なり。
【一二四】圓鏡。ādarśa
【一二五】毘盧遮那金剛敬愛三昧出生三摩地。梵 vairocana-samaya saṃbhava-cāru-vajra-samādhi.
【一二六】金剛尊。阿閦如來梵 akṣobhya.
【一二七】金剛三昧出生金剛行三摩地。梵 sarva-vajra-samaya-saṃbhava-cāru-vajra-samādhi.
【一二八】大法尊。無量壽如來梵 amitāyus なり。
【一二九】大法三昧出生大法行三摩地。梵 dharma-sattva-samaya-saṃbhava-cāru-vajra-samādhi.
【一三〇】佛眼菩薩。梵 buddha locanā 藏 sans-rgyas-spyan.

三面にして三色を現ず。所謂黄・黒・白なり。法に依りて觀想せば、大智を成就するを得。焔鬘得迦大[122]忿怒明王を想へ。六臂にして三面あり。本部の器仗を執り、大惡可怖の利牙を現じて忿怒せり。大黑色の相を現ず。法に依りて觀想せよ。

復た[123]無能勝大忿怒明王を想へ。大焔光ありて、三面なり。大笑の相を出現し、廣大の光明あり、法に依りて觀想せよ。復た[124]馬頭大忿怒明王を觀想せよ。其れ三面を現じて極惡の歩勢をなす。身は赤く劫火の如しと想へ。常に光明を出す所の大可畏の相を現ず、法に依りて觀想せよ。復た次に當に[125]甘露軍拏利大忿怒明王を觀想すべし、身は大熾盛の光、及び金剛火焔ありて、忿怒の威光を現じ、大可畏の相を作す、法に依りて觀想せよ、復た[126]吒枳大忿怒明王を觀想せよ、三面にして三目を現じ、莊嚴せる四臂を具す。本部の儀軌の如く、法に依りて觀想せよ。復た[127]大力大忿怒明王を觀想せよ。其れ三面を現じ、三界を怖かすの相を作すと想へ。諸の惡者を調伏せる、大忿怒威光は、本部の儀軌の如く、法に依りて觀想せよ。復た次に當に彼の[128]儞羅難拏大忿怒明王を觀想すべし。三金剛より出生す。其の三面は利牙外に出づと想へ、身は熾盛の光を出し三界を怖すの相を作す、本部の儀軌の如く、法に依りて觀想せよ。復た[129]不動大忿怒明王を想へ、金剛より出生する所なり。其れ三面ありて、可愛の善相を現ずと想へ、手に劍と索を持す、本部の儀軌の如く、法に依りて觀想せよ。復た[130]大明輪大忿怒明王を想へ、金剛の三面を現じ、光明熾盛を出す、一字の大頂相は普く變化を作して、曼拏羅に安住すと、儀軌の如く觀想せよ。復た[131]降三世大忿怒明王を想へ、三面の熾盛光は、廣大なる怖相を現ず、最上の智を所持す、禪定より出生する所なり、最勝の頂相と廣大の光明聚を現ず。此の三昧を自在に、別別に觀想せよ。

【一二二】大忿怒明王。梵 mahā-krodha

【一二三】無能勝。梵 aparājita

【一二四】馬頭。梵 hayagrīva

【一二五】甘露軍拏利。梵 vajrā-mṛta

【一二六】吒枳。梵 tarki

【一二七】大力。梵 mahāvala

【一二八】儞羅難拏。梵 nilaṇḍa

【一二九】不動。梵 vajrācala

【一三〇】大明輪。梵 mahā-vidyā-cakra

【一三一】降三世。梵 vajrahūṃkara

空に住して、金剛の半月曼拏羅を想へ、金剛法の像を現じ、自心の大義に住す。諸佛菩薩等は、空に滿ち、曼拏羅の五種光は、大法光明に入りて、一刹那間に、諸佛を成就するを得。妙吉祥と相應して、諸事を成就し歡喜を得て、我に最上の大灌頂を施す。諸の世間の敬愛も出現して觀照せり。

此を[一〇〇]寶雲三昧莊嚴三摩地法と名づく。

當に空に住して、火焔曼拏羅を觀想すべし。中に復た[一〇一]金剛囉刹娑を觀想せよ。種々の器仗を執りて、大忿怒の相を現ず。[一〇二]豺狼等の諸獸、[一〇三]迦迦等の飛鳥、此れらの諸類も亦曼拏羅に現ず。常に三種の物を食す、謂ゆる[一〇四]嚕地囉等なり。此の佛三昧に住して、諸惡を破壞する者は、世間の諸所有深妙の法を信ぜず。諸佛の三昧に達する者は、決定して破壞すべし。

此を[一〇五]金剛三昧雲莊嚴三摩地法と名づく。

當に虛空中に住して、[一〇六]吠嚕左那を想へ、空に處して清淨なり。秋月の光明の如し。三面にして三種の色なり。謂ゆる白黑赤等なり、頂に寶髻の冠を戴し、一切に嚴飾せらる。復た[一〇七]嚩日哩を想へ。三面にして三種の色なり、謂ゆる黑赤白等なり。頂に寶髻の冠を戴き、手に大光炬を持し、諸の世界を普照せり。

復た[一〇八]囉儗拏を想へ、三面にして三種の色なり、謂ゆる赤・黑・白なり、頂に寶髻の冠を戴く。若し法に依りて觀想せば、決定して成就を得。復た[一〇九]路左曩を想へ。諸の衆生を救ふの相なり。三面にして三種の色なり。所謂白・黑・赤なり。一切の莊嚴する所なり、法に依りて觀想せよ、復た[一一〇]大明妃嚩吾怛哩を想へ。三面にして三色なり、所謂赤・黑・白なり。本部の儀軌の如く、法に依りて觀想せよ。[一一一]復た持金剛烏哩鉢羅の像を想へ。

【一〇〇】寶雲三昧莊嚴三摩地。梵 ratna-samaya-megha-vyūha-samādhi.

【一〇一】囉刹娑。梵 rākṣasa 藏 srin-po

【一〇二】狼。梵 bheruṇḍaka 藏 spyaṅ-ce-spyaṅ.

【一〇三】迦迦。梵 kākā 藏 bya-rog. 慧琳音義第二十六「迦迦囉此云烏、因聲立名也」と。

【一〇四】嚕地囉。梵 rudhira 藏 khrag. 血液を云ふ。

【一〇五】金剛三昧雲莊嚴三摩地。梵 vajra-megha vyūha-samādhi.

【一〇六】吠嚕左那。梵 vairocana 毗盧遮那金剛如來なり。

【一〇七】嚩日哩。梵 vajrin 金剛明妃なり。

【一〇八】囉儗拏。梵 rāgin.

【一〇九】路左曩。梵 locanā

【一一〇】大明妃嚩吾泥怛哩　梵 mahārājñī

【一一一】持金剛烏哩鉢羅。梵 khavajranetri

諸佛の息災法は、常に利益する所なり。若し國土の[九二]境界、[九三]聚落、[九四]城邑等の、是の中に(於て)、凡そ所作するに諸の災患者あらば、儀軌の作法に依りて、一切の苦を遠離せよ。虛空中に五鈷、大金剛を觀想せよ、變化して諸事を作すに、如意寶の光明の(如く)大法雲現ずと想へ。施に灌頂の法を作し金剛の禪定法は隨所に吉祥の如意寶の成就を作す。金剛施の法を想へ、佛雲、大法雲は金剛手と變化し。三劫の數安住す。諸佛の加持する所なり。

此れを[九五]一切佛祕密身業無相、息除一切衆生苦惱金剛出生三摩地法と名づく。佛の加持力に依りて、金剛最勝定法に依りて、思念し、持誦し、諸の定と相應せよ。金剛橛と十方の曼拏羅の熾盛光明の相とを觀想せよ。甘露法に住せよ。

此れを[九六]諸佛三金剛三昧、調伏世間息災金剛三摩地法と名づく。中に毘盧の像は、自心に安住すと想へ。當に空に住して、息災曼拏羅を觀想せよ。復た自心中の圓光は自身の毛孔より出現すと想へ。復た最上眼は虛空に遍滿すと想へ。諸の佛雲は一一の佛雲中より出現し、諸の灌頂法を施して、勝金剛三昧を一刹那に成就せよ。

此れを[九七]諸佛三昧莊嚴雲三摩地と名づく。中に持法の像は、自心に安住すと想へ、復た空に住して、滿月外曼拏羅を成ずと想へ。[九八]半拏囉は、虛空界に遍滿し、、圓光は如意寶の光明を出現すと想へ。身語心は無住にして、廣大なる變化を作し。身の諸の毛孔中より、寶雲は出現すと想へ。復た大法雲は諸の灌頂の事を作し、最上の定金剛は一切の成就を作す。吉祥の如意寶は、金剛成就法なり。此を[九九]法雲三昧莊嚴三摩地法と名づく。

【九二】境界。梵 pratyanta 藏 mthaḥ-ḥkhob

【九三】聚落。梵 grāmopavicāra 藏 groṅ-gi-ñe-ḥkhor

【九四】城邑。梵 nagara 藏 groṅ-khyer.

【九五】一切佛祕密身業無相息除一切衆生苦惱金剛出生三摩地。梵 sarva buddhānāṃ kāya-guhyam anāvilaṃ sarva-sattva-rāgāpanaya vajra-saṃbhava samādhi.

【九六】調伏息災金剛三摩地。梵 jagad-vijaya-śānti-vajra-samādhi.

【九七】諸佛三昧莊嚴雲三摩地。梵 buddha-samaya-megha-vyūha-samādhi.

【九八】半拏囉。梵 candra ?

【九九】法雲三昧莊嚴三摩地 梵 dharma-samaya-megha-vyūha-samādhi.

し。　大明の義は勝金剛智身を護り、　彼の一切の金剛は菩提の義を守護す。
此を諸佛の三金剛三昧と名づく。
當に虚空中に住して、　大法金剛を想ふべし。　毘盧遮那佛の最上身より出生す。　彼の三身三昧は、　[83]阿薩那の儀軌なり。　當に虚空界に住して、　諸佛は遍滿すと想ふべし。　自ら文字の智を明かにす。　現心の相を觀想せよ、　復た諸佛の漸略なり。　心の大明を觀想せよ、心金剛の所作は遍ねく三身に入る。
此を [84]諸佛堅固三業金剛寶大明作光明三摩地法と名づく。
金剛手を觀想せよ、　一切の相を具足す。　諸佛の行步する所は、　理の如くに順行せり。平等の步は相應して、　頂より足に至るまで觀想せよ。
此れを [85]諸佛自性淸淨金剛海平等步順行三摩地法と名づく。
外曼拏羅中に　忿怒尊現ずと想へ。　金剛羯磨の步、　及び頂相を想へ。
此を [86]諸佛三金剛祕密主禁伏一切外道邪明呪句金剛正語三摩地法と名づく。
三金剛は忿怒の金剛相を出生す。　深黃色を出現し、　頂相は高廣にして、　衆山中の王の如く、　一切より顯出せりと想へ。　諸佛の勇健なる軍は、　能く他軍の衆を伏す。　佛の三昧に達ふ者は、　決定して當に破壞すべし。
此を [87]一切如來三業出生降伏他軍三摩地法と名づく。
禪定の [88]正念に住して、　諸魔の怨を驚覺せよ。　此を佛世尊の [89]吽字と名づく。　[90]金剛橛は五鈷金剛の量にして、　心に諸佛の勇健の軍を現じ、　能く一切を破壞すと觀想せよ。　佛の三昧に達ふ者は、　決定して破壞すべし。
此れを [91]調伏一切癡迷怨惡三摩地法と名づく。

【八三】 阿薩那。梵 āsana
【八四】 諸佛堅固三業金剛寶大明作光明三摩地。梵 bhagavān-kha-vajra-samayaḥ vajra-ratna-pradyotakāra-samādhi.
【八五】 諸佛自性淸淨金剛海平等步順行三摩地。梵 bhagavān-tvabhava-śuddha-vajra-dati-pada-samādhi.
【八六】 諸佛三金剛祕密主禁伏一切外道邪明呪句金剛正語三摩地。梵 sarva-tirthaya-para-pravādistambhana-vajra-samādhi.
【八七】 一切如來三業出生降伏他軍三摩地。梵 sarva tathāgata-kāya-vāk citta-sambhavaḥ sarva-samaya-stambha-samādhi.
【八八】 正念、梵 samyaksmṛti. 藏 yan-dr̥g-pahi dran-pa
【八九】 吽。梵 hūṃ 摧破の義、驚覺の義を表はす。
【九〇】 金剛橛、梵 vajra-kīla-ka 曼拏羅の周圍に結界をなすために立つる棒なり。
【九一】 調伏一切癡迷怨惡三摩地。梵 saṃśayaḥ rūpa-mohā-pana-samādhi.

三界の諸の衆生は、　佛身に住し、　一切の怨を破壞して、　彼は彼の事を成就すと觀想せよ。　空中に大輪を想へ。[七七]五鈷にして四面なり、　一切の相を具足す。　金剛薩埵は、三昧より出生すと想へ。　三世の佛輪を想へ、　右手を以て順轉す。　諸佛の大力輪と、　十方の諸衆生とは、　佛の廣大身を生ず。　彼れ和合相應して、　卽ち自身に遍入す。　復た變化して、　諸佛智の金剛忿怒を出生す。　忿怒部は大惡可畏の相なり。　金剛手の忿怒は、種種の器仗を執り、　破壞の惡想を起す。　諸の大惡を破る者は、　諸佛の勝三身なり。　三金剛の境界は一切成就を施す。　諸の癡闇を救度し、　七日の中に作法は決定して皆成就す。

此れ諸佛の[七八]大執金剛金剛智輪三昧三摩地の行と名づく。

空に住して大輪は金剛光嚴飾すと想へ。　中に毘盧尊を想へ。　一切の相を圓具す。　三世の三昧より生ず。　金剛手の大愛は　金剛杵の焰光なり。　(これを)手に持すと觀想せよ。　十方の諸の衆生は、　金剛身より出生す。　彼は和合相應して、　卽ち自身に遍入す。　諸の佛敕を諦聽せよ。　身語心相應の　最上の[七九]金剛縛なり。　智より出生變化せる、　吉祥金剛手の最勝大三昧なり。　若し此れに違ふこと有る者は、　決定して皆破壞す。

此れを[八〇]金剛大輪佛敕三昧三摩地の行と名づく。

空に住して金剛を想へ。　佛曼拏羅中に、　忿怒王の大輪、　本尊の金剛等、　一切の衆生類、三世の佛は出生す。　彼の衆生の身は[八一]三身曼拏羅に入る。　諸佛は復た是れより變化出生せらる。　彼の焰鬘得迦忿怒明王の相は三世の諸の衆生に大怨惡心を起し、　忿怒破壞して、金剛大智に入ると想へ。

此を[八二]一切三昧出生焰鬘得迦忿怒明王三身智金剛三摩地法と名づく。

身語心の金剛は自ら義を明かにせる功德なり。　卽ち最上三昧にして、　佛敕の轉ずる所の如

【七七】　五鈷。五鈷金剛杵　梵 pañca-śūlā-jāla.

【七八】　大執金剛金剛智輪三昧三摩地　梵 vajra-samayajñā-cakra-samādhi.

【七九】　金剛縛。梵 vajra-bandhana. 內縛、外縛の二種あり。一切の印契の印母なり。大樂金剛薩埵軌に「諸三昧耶印皆從此縛生」と。

【八〇】　金剛大輪佛敕三昧三摩地。梵 cakra-samayajñā-vajra-samādhi.

【八一】　三身曼拏羅。身語心の金剛曼拏羅なり。

【八二】　一切三昧出生焰鬘得迦忿怒明王三身智金剛三摩地。梵 sarva-samaya-sambhava-yamāntaka-samānya-trikāya-jñānama-vajra-samādhi.

等は生ず。金剛持明王は、彼の那弁薩迦なり。最上の成就を施く。忿怒の瞋法は生ず、常に怨敵を害する如く、生ずと雖も無住たり、最上の法を成就す。

此れを[63]諸佛大士三昧と名づく。

復た次に五佛と、諸部の大明の義とを説く。當に心輪中に住して、大智輪の[64]大輪曼拏羅を觀想すべし。大輪明の義なりと想へ。當に金剛心に住して、智金剛の[65]金剛曼拏羅を觀想すべし。金剛明の義なりと想へ。當に寶部心に住して、大智寶の[66]衆寶曼拏羅を觀想すべし。衆寶明の義なりと想へ。當に蓮華心に住して、蓮華智の[67]勝法曼拏羅を觀想すべし、蓮華明の義なりと想へ。當に三昧心に住して、三昧智の[68]三昧曼拏羅を觀想すべし。三昧明の義なりと想へ。諸の曼拏羅中に、五佛の尊を安布せよ、五種の光を出現す、菩提智の所化なり。廣大の一切の明は、種種の義を隨轉し、三金剛不壞は、漸廣復た、漸略なり。身は身自性に住し、心は心自相に住し、語は正語言に住し、最上の供養を得。大輪曼拏羅に、五種の金剛を想へ。中に[69]祕密主と[70]本尊の影像等とを現ず。本部の諸大明、[71]四種曼拏羅は、其の四種の色あり。心明の義と、四金剛事業と、定金剛の所作とを觀想せよ。此の一切の大明は、勝祕密にして常住なり。所有[72]息災法は、當に佛眼の相と知るべし。彼の[73]增益法は、蓮華金剛の相なり。所有[74]敬愛法は其の廣き愛相を現ず。諸の[75]調伏法の中には、金剛忿怒の相なり。此の一切教中に三祕密、三身を、一切の大明中に、那吒迦の相を想へ。若し復た世間に於て、成就を作さんと欲する者は、彼の不孝人、及び阿闍梨を謗するもの、最上の極惡等を除く。此の諸の衆生類は、勇猛にして勤求すと雖も、成就する能はず。

此れを諸佛の[76]大金剛智輪三昧と名づく。

【六三】諸佛大士三昧。梵 bhagavān-mahā-puruṣa-samaya

【六四】大輪曼拏羅—毘盧遮那金剛如來。

【六五】金剛曼拏羅—阿閦金剛如來。

【六六】衆寶曼拏羅—寶生金剛如來。

【六七】勝法曼拏羅—無量壽金剛如來。

【六八】三昧曼拏羅—不空成就金剛如來。

【六九】祕密主。金剛手 vajra-pāṇi なり。

【七〇】本尊。毘盧遮那金剛如來なり。

【七一】四種曼拏羅。大、三、法、羯なり。

【七二】息災法。扇底迦 śāntika 聰明及び長壽、幷に障難を除く法なり。

【七三】增益法。布瑟置迦 pauṣṭika 增長を求め、榮盛、富貴延壽を獲しめる法なり。

【七四】敬愛法。縛施迦羅 vaśīkaraṇa 一切に敬愛せらるる法なり。

【七五】調伏法。阿毘遮嚕迦 abhicāruka 諸の惡鬼等を除く法なり。

【七六】大金剛智輪三昧。梵 mahājñāna-cakra-vajra samaya

す。復た次に[五一]金剛手とは、虛空智所生の、最上最勝尊なり。金剛持誦を說き、諸の大明の義を持す。三金剛の妙相と、三堅固不壞と、三金剛善說との、變化に三種あり、謂はく身語心業なり。諸の金剛の持誦と、三金剛心とは、諸佛の身語心を出し、金剛堅固に住す。最上の祕密法と、勝れたる供養の儀とは、智金剛の所說なり。三金剛心等を、法に依りて持誦する間は、此の菩提と平等なり。復た次に[五二]變化身とは、別別の三不壞にして、身語心は無我なり。廣大智心に住して、廣大金剛を念ず、畢竟不壞なり。此れ卽ち一切佛の、智眼の觀察する所なり。身は金剛菩提なり。性を遠離して性に非らず、此れを諸佛の身と說く。[五三]身の持誦は是の如し。語三昧の菩提は聲を離れ、聲相に非らず、此れを語金剛と說く。[五四]語の持誦は是の如し。心三昧の菩提は、金剛心の行に住す、此れを心金剛と說く。[五五]心の持誦は是の如し。諸義に隨つて持誦するは、非自性の所行なり。三世の佛も亦然り。[五六]寶(部)の持誦は是の如し。身は變化の雲を現じ、普ねく諸の佛刹に遍じ、堅固にして來去もなし、[五七]不空の持誦と名づく。祕密の大明句は、最勝文字の義にして、廣大の音聲を出す、遍ねく曼拏羅に遍じて、一切忿怒法を聞く、三昧智の所生なり、彼の[五八]忿怒の持誦は、祕密にして是の如く說くなり。衆生は癡海に住し、諸欲の義を隨轉し、一切處を了知す、此れ[五九]佛部の持誦なり。衆生は貪海に住し、貪金剛の語を生ず、身心の住も亦然り、[六〇]蓮華部の持誦なり。衆生の瞋無住は、瞋金剛心より生ず、身語の住も亦然り、[六一]金剛部の持誦なり。(此れ)三金剛の三昧なり。金剛三昧中の、是の如き衆金剛は、[六二]那奔薩迦法なり。一切の祕密主は、貪法の實義なり。菩提は貪の所生にして、諸の衆生も亦爾り、佛眼等の大明は、常に貪法を隨轉し、貪の自在を成就し、諸の意道を順行して、癡法の平

【五一】金剛手。梵 vajra-pāṇi 藏 rdo-rje-lag 金剛薩埵なり。身語心の三金剛を司る尊なり。總德の尊にして大日經疏第一に「卽是如來身語意密、唯佛與佛乃能知ㇾ之」と。
【五二】變化身。梵 nirmāṇa-kāya
【五三】身金剛の持誦なり。
【五四】語金剛の持誦なり。
【五五】心金剛の持誦なり。
【五六】寶部の持誦。寶生如來
【五七】不空の持誦。不空成就如來
【五八】忿怒の持誦。第三重忿怒明王
【五九】佛部の持誦。毘盧遮那如來
【六〇】蓮華部の持誦。無量壽如來
【六一】金剛部の持誦。阿閦如來
【六二】那奔薩迦 梵 napuṃsaka (hermaphrodite)

く金剛不壞の身と作れ。　十方の一切佛如來と、　三密の金剛とは皆不壞たり。　加持の　祕密句に安住して、　善く金剛最勝の身と作れ。

復た出世間の法と、最勝境界の佛語の成就との伽陀を說いて曰はく。

諸佛の法語は大吉祥なり。　三種の金剛は破壞すべからず。　加持の　祕密句に安住して、　善く金剛の法語門に入れ、　十方の一切佛如來と、　三種の金剛とは皆不壞なり。　加持の祕密句に安住す。　佛の正語より、　出生する所なり。

復た出世間の法と、最勝境界の佛心成就との伽陀を說いて曰はく。

佛の心金剛は吉祥を持す。　三種の金剛は破壞すべからず。　加持の祕密句に安住す。　佛の心法より出生する所なり。　佛の語は金剛妙法の語なり。　金剛薩埵の語も亦然り。　若し無智の者は軌儀を越ゆ。　彼れは卽ち一切を皆破壞するなり。

[四七]金剛相應莊嚴三昧眞實觀想正智三摩地分第十三

爾の時執金剛最上智一切眞實義出生金剛手菩薩摩訶薩は、一切牟尼大導師なる、一切義堅固供養三昧眞實智主に歸命頂禮し、金剛聲を出し、是の言を作す。

[四八]大いなる哉諸佛の敎。　大いなる哉大菩提。　大いなる哉[四九]寂靜の法。　大いなる哉眞言行。　畢竟[五〇]無生の法にして、　自性無所生なり。　疑を離れて、眞實に住し正智の出生する所なり。　此れは諸佛の說く所にして、　一切の明句法なり。　金剛智の供養と、　三金剛の不壞とは、　諸佛智によりて得る所なり。　三金剛の觀想と、　大相應の持誦とは、　諸佛の加持する所なり。　諸部の諸の明句は、　身語心の相に住し、　大音の大明を持し、　聞きて智海に入る。　三世の佛の出生なる、　大金剛三業は、　無等智と、　金剛明の觀想とを獲得

薩及佛知無量劫、是名識宿命通知。他心通者、知他心若有垢若無垢、自觀心生住滅時、常憶念故得、復次觀他人喜相瞋相・怖相・畏相・見此相已然後知心、是爲他心智。」と。

【四五】五處。頂 mūrdhā 額 lalāṭa 喉 kaṇṭha 咽下 hṛdaya 心上 kaṇṭhanālikā（蘇悉地經）

【四六】唵 ॐ oṃ

【四七】梵 samaya vyūha-tattvārtha-bhāvanā-sambodhi-tri-ṭ: yo-dnáṅh paṭalaḥ 藏 rdo-rje-hi dam-tshig blod-pa-ñid-kyi-do-bsgom-pa mion-par-rdogs-par byai chub-pa shes-byu-ba

【四八】中論卷第二に「若法衆緣生、卽是滅滅性、是故生生時、是二俱寂滅」と。

【四九】寂靜。梵 śānta

【五〇】無生。梵 ajāta

す、是れを金剛心業と名づく。又能く彼の那吒迦より殑伽沙等の身を出生す、劫中を轉迴して住し、佛雲の莊嚴を現ず、諸變化、最上の金剛出生を作す。是れを金剛身業、亦は卽ち金剛神通法とも名づく、[四四]又能く過去の諸法を三昧力を以て、悉く能く思念す。此れ卽ち名づけて金剛宿念となす。是の如き等を名づけて三昧通、金剛眼・耳・心・宿念成就の神通等の法となす。諸佛の神通は諸佛身と平等に成就するなり。常に殑伽沙等の眷屬に圍遶せられて、善く金剛身語心業を行ず。一切の世界に金剛三昧と、相應成就を順行し、能く大義出生の成就をなせ。卽ち四種の三昧を圓滿するを得。金剛不壞の事業を了知し、三摩地、相應、觀想を順行し、最上の菩提を成就せよ。出世間の法の最上成就を修習するには、金剛乘に入りて諸法を順行し、大明を宣說し、自在を觀想して、大成就を作すべし。時に依り、法に依り、自の大明より、金剛の影像を觀想するに金剛の冠を載き、自在の相を作す。卽ち大智金剛を成就するを得と。一切處に於て、常に親近する所の智と甘露法とを、是の如く名づけて一切大明中の眞實義成就となす。若し修習する者は先づ法に依りて、其の處所を擇べ、或は大曠野、或は復た山間、或は寂靜處なり。彼の儀軌に依りて、諸の成就を作し、復た常時に間斷あらしむ勿れ。卽ち一切成就を得、此れを諸佛の大成就法と名づく。復た次に行人は常に親近する所の金剛四種の堅固事業を觀想せば、三金剛身を速に成就するを得、彼の四時に、法に依りて相應す。復た[四五]五處を法に依りて了知し、然して期限を立てて、或は七日、或は半月、乃至一月とし、法と儀軌に依りて、[四六]唵字を觀想し、智金剛を成ぜよ。中に金剛三昧を出生せよ。諸の儀軌の如くに、廣大に宣說せよ。諸の瑜伽法を修習する者あらば、日月時分に於て如實に了知し、越法せしめず。是の如きは卽ち最上祕密出生勝義の相應成就を得。

復た次に出世間の法と、最勝境界の佛身成就の伽陀を宣說して曰はく。

佛身の最上は吉祥を持す。　三種の金剛は破壞すべからず。　加持の祕密句に安住して、　善

【四四】又能く過去以下宿念通を說く。三昧通。梵 samaya-abhijñā.（如意通）金剛眼。梵 vajra-cakṣu.（金剛）耳。梵 vajra-śrotra.（金剛）心。梵 vajra-citta.（金剛）宿念。梵 vajra-nivāsa. 卽ち大智度論第十五に一如意者。有三種、能到轉變、聖如竟、能到復四、一身飛行如鳥無礙、二移遠令近不往而到、三此沒彼出、四一念能至。轉變者大能作小。小能作大。一能作多。多能作一、種種諸物。皆能轉變。外道聾轉極久不過七日。諸佛及弟子轉變自在無有久近、聖如意者、外六塵中不可愛不淨物能觀令淨、可愛淨物能觀令不淨。是聖如意法、唯佛獨有。天眼通者於眼得色界四大造淸淨色、是名天眼、天眼所見自地及下地、六道衆生諸物、若近若遠、若麁若細、諸色無不能照、是天眼有二種、一從報得、二從修得、是五道中天眼從修得、非報得、何以故、常憶念種種光明得故、天耳通者、於耳得色界四大造淸淨色、能聞一切聲天聲人聲三惡道聲、云何得天耳通、修得常憶念日月年歲至胎中乃至過去世中一世十世百世千萬億世、乃至大阿羅漢辟支佛、知八萬大劫、諸大菩

此れを諸佛の大祕密句召三昧と名づく。若し行人ありて諸の成就法を求むる者は、當に五種の飮食にて、三昧想に住すべし。是の人は即ち成就持明を得。五種通と安怛陀那を具し、金剛句召の一切を成就す。若し五種の食具はらざる者は、隨れかの一食を得て三昧に住せば、是の人は即ち最上の相應を得、諸佛如來の共に加持する所なり。一切の相を具し、自の身語心は金剛堅固の心智と平等なり。金剛冠を戴ける最上の[三一]總持なり。彼の一切の佛も此の三昧に同なり。能く他の爲めに最上三昧の一切の成就を作す。此れを[三二]一切平等智金剛三摩地法と名づく。

復た次に三金剛三昧の最上成就法を宣說す。當に自の舌想に於ける其の[三三]吽字は、即ち是れ最上金剛三昧なり。是の如き[三四]舌根は即ち五種甘露と相應して三金剛不壞の自性を得。

又復た當に[三五]阿字、[三六]吒字を知るべし。是れ即ち最上金剛と種種相應す。即ち金剛薩埵を成就す。此れを[三七]金剛甘露三昧三摩地法と名づく。

又復た三金剛三昧の最上成就を修習するものは、即ち最上の金剛三身成就を得。十方諸佛の如意寶海は、淨光明を出して、普ねく世界の金剛自在に遍ず。又復た輪三昧の最上成就を修習する者は、即ち諸法に於て平等に順行して成就す。[三八]殑伽沙等の一切の三昧、及び一切の最上の持明法の中にて、大主宰と爲る。一切の勝妙三昧を圓滿し、金剛身に住すと想へ。安怛陀那は意の如くに自在なるを得。一切處に千光明を放つて、悉く能く諸の成就法を具足せば、所有世間の[三九]阿修羅、[四〇]乾闥等の一切の乾闥衆を皆悉く敬伏して攝受す。善く[四一]殑伽沙等の諸佛如來の三金剛無住の相に住す。是れを金剛成就と名づく。金剛眼を以て普ねく一切を見ること、自の手を運びて、諸佛の業一切を隨意に作すが如し。彼の金剛目の觀達も亦然り。[四二]又殑伽沙等の刹中に於て、大音聲を出して諸の勝義を轉ず。一切處に於ける、一切の普聞は、金剛の耳根勝義を成就す。是れ即ち金剛語業なり。又能く金剛の心業を成就す。[四三]殑伽沙等の刹中に於て、一切の衆生の心行等の法を了達

【三一】總持。陀羅尼 梵 dhāraṇī 藏 gzungs-pa. なり。
【三二】一切平等智金剛三摩地 梵 sarva-samaya-jñāna vajrā-hāra-samādhi.
【三三】吽 hūṃ
【三四】舌根。梵 jihvendriya 藏 lce-hi-dbaṅ-po
【三五】阿 a
【三六】吒 ṭa
【三七】金剛甘露三昧三摩地。梵 samaya-vajrāmṛtamāli samādhi.
【三八】殑伽沙。梵 gaṅgā-nadī-vālukā 藏 gaṅgāhi kluṅ gi-bye-ma 恒伽の沙の多きを以て物の數に喩ふ。以下如意通を說く。
【三九】阿修羅。梵 asura 藏 lha-ma-yin 戰鬪を事とせる一類の鬼神。
【四〇】乾闥。梵 gandharva 藏 dri-za 帝釋天の雅樂を司る鬼神。
【四一】善く殑伽沙等以下天眼通を說く。
【四二】又殑伽沙等以下天耳通を說く。
【四三】殑伽沙等以下他心通を說く。

の持明なり。　金剛部に安住して、　金剛勝を成就す。　金剛智より生ずる所なり。　是の如く金剛身と相應して成就す。　當に空に住して、　衆寶曼拏羅を觀想せよ。　中に[二六]寶生尊を現ず、　手に妙寶を執ると想へ。　大寶生の持明なり。　大寶部に安住して、　最上の寶を成就す。　金剛智より生ずる所なり。　是の如く大寶身と、　相應して成就す。　當に虛空に住して、　中に泆曼拏羅を想へ。　中に[二七]無量壽を現ず。　手に大蓮華を執る。　大蓮華の持明なり、　蓮華部に安住して、　蓮華勝を成就す。　金剛智より生ずる所なり、　是の如く妙法身と、　相應して成就す。　當に空に住して、　三昧曼拏羅を想へ。　[二八]不空成就を現ず。　手に大利劍を執る、　大利劍の持明なり。　三昧部に安住して、　三昧勝を成就す。　金剛智より生ずる所なり。　是の如く大三昧と、　相應して成就す。　所有諸の成就を、　[二九]三叉鉤等と謂ふ。　法に依りて所作せば、　金剛と相應するを得。　禪定心に安住せば、　三業は皆成就す、　此れ卽ち諸佛の大金剛三昧と名づく。　復た成就法を説く、　諸の作法者あらば、　[三〇]四衢道に往くか、　或は獨り樹下に於て、　金剛句召を作し、　本聖士を召集し然して當に儀法に依りて、　隨意に就就を求めよ。　三相應の大明は、　最上三金剛なり。　身語心を句召せよ、　佛諸の大智慧は、　風輪曼拏羅なり。　佛の最上の句召は十方三昧より生ず。　能く一切を句召し、　空想三昧に住するは、　金剛句召法なり。　毘盧遮那尊は、　彼の最上の大輪なり、　佛の無住句召と金剛蓮華等とは、　彼の三昧部の法なり。　三界三昧に住し、　一切の相を具足し、　佛の影像を觀想して、　身語心の句召等を成就せよ。　無數の相應行を觀想して、　善く一切の事を作せ。　彼の圓具の諸相は、　身金剛なり。　金剛舌は、　語金剛平等と相應すと觀想せよ。　三祕密の供養は、　諸の供養中の勝なり。　此れ卽ち一切佛の祕密精妙の法なり。

【二四】大毘盧遮那金剛。梵 vairocana-vajra. 藏 rdo-rje rnam-par snaṅ mdsad.
【二五】阿閦金剛。梵 akṣobhya-vajra, 藏 rdo-rje-mi-bskyod.
【二六】寶生金剛。梵 ratna-ketu-vajra 藏 rdo-rje-rin-chen-dpal
【二七】無量壽金剛。梵 amita-vajra. 藏 rdo-rje-ḥod-dpag-med.
【二八】不空成就金剛。梵 amogha-vajra. 藏 rdo-rje gdon-mi-za-ba
【二九】三叉鉤。梵 triśula 藏 mduṅ rtse gsum-pa
【三〇】四衢道。梵 catvara 藏 bshi-mdo 十字路を云ふ。

復た自心の明に、八葉の金剛蓮を想へ。諸法の無住の相と、[一四]心法とも亦平等なり。三十六百、一一の須彌量、乃至微塵數の清淨寶蓮華を現ず、一切の佛は、最上曼拏羅を供養す。

此れを[一五]蓮華平等三摩地法と名づく。

[一六]三劫三昧に住して、五種智は十方の一切の佛に隨順して、三密承事と作る。自ら明に[一七]劍は五種光を現ずと觀想せよ。行人執持せば、持明自在と、三界の大供養とを得、梵天等は歸命す。[一八]三千界の勇猛、最上の祕密尊の、行ぜん欲する所自在なれば、金剛三業を得。心金剛は、是の如く成就を施く。

此れを[一九]金剛劍成就三摩地法と名づく。

當に[二〇]唵字を想ふべし。即ち虞梨迦を成ず。左拏迦量に如し。中に本尊の像を現じ、住心して觀想せよ。本尊より受けて、行人は刹那の間に諸の菩薩等に與へよ。日の虛空を照すが如く、身は紫金色の相なり。復た[二一]阿字を想ふべし。亦虞梨迦を成ず、左拏迦の量に如し。中に本尊の像を現じ、住心して觀想せよ。本尊より受けて、行人は刹那の間に、菩提の智を成ず、日の虛空を照らすが如く、身は紫金色の相なり。復た次に[二二]吽字を想ふべし、亦虞梨迦を成ず、左拏迦の量に如し、中に本尊の像を現じ、住心して觀想せよ。本尊より受けて、行人は刹那の間に、金剛身を成就す。日の虛空を照す如く、身は紫金色の相なり。當に[二三]空に住して、種智曼拏羅を觀想せよ。中に[二四]毘盧尊を現ず、手に大輪を持すと想へ。輪の持明を成就す。大輪部に安住して、此の勝智を成就す。金剛智より生ずる所なり。是の如く大輪の身と、相應して成就す。當に空に住して、金剛曼拏羅を觀想せよ。中に[二五]阿閦尊を現ず、手に金剛杵を持す。大金剛

【一四】心法。梵 apratihatacitta. 無質碍にして、諸法を緣起する根本たるもの。
【一五】蓮華平等三摩地。梵 padma-samatā-samādhi
【一六】三劫三昧梵 trivajra-jñāna-samaya(第十一品を見よ)
【一七】劍 khaḍga ral-gri
【一八】三千界。三千大千世界 梵 tri-sāhasra-mahā sāhasro lokadhātu 藏 stoṅ-gsum gyi stoṅ chen-poḥi ḥjig rten gyi khams. の略名。彰所知論卷上に「謂四洲界一數至千爲小千界一小鐵圍山圍遶、此小千界一致至千爲中千界一中鐵圍山圍遶、此中千界一數至一千爲三千大千世界」とあり。
【一九】金剛劍成就三摩地。梵 sarva-khaḍ gottama-samādhi,
【二〇】唵 oṃ
【二一】阿 a 菩提智
【二二】吽 hūṃ 金剛身
【二三】

曼拏羅	五佛	持明	持物	五部
種智曼拏羅	毘盧	大輪	輪	大輪部
金剛曼拏羅	阿閦	金剛杵	大金剛	金剛部
衆寶曼拏羅	寶生	妙寶	大寶生	大寶部
法曼拏羅	無量壽	大蓮華	大蓮華	蓮華部
三昧曼拏羅	不空成就	大利劍	大利劍	三昧部

巻の第三

一切如來金剛相應三昧最上成就第十二[一]

爾の時金剛手菩薩摩訶薩は、最上の世の師とせらる所なり。最勝智成就なり。[二]三金剛三昧は、眞實智の所生なり。金剛語業より、成就法を宣說す。等虛空三昧の自性は疑惑を離る。自性の清淨法とは謂ゆる[三]那吒迦想なり。諸の法を作さん欲する者は、當に曠野中、山間及び樹林、華果の茂盛する處に詣でて、當に[四]曚字を觀想して、[五]妙吉祥身を成じ、金剛三業に住して廣大無邊際の量廣百[六]由旬の金剛光熾盛なる光中に諸相を現ぜよ。一切の莊嚴せる所なり。[七]梵王帝釋等も、其の身を見る能はず。此れを[八]妙吉祥勝金剛三昧と名づく。安怛陀那法とは、最上三摩地なり。若し此の法を成ぜんと欲する者は、五種の甘露を以て、三種の鐵に和合して、[九]虞梨迦と爲せ。三金剛の不壞は、三金剛より生ずる所なり。此の法を成ずるものは、[一〇]安怛陀那を得。自心に於て諸佛の不壞とする所に、一刹那間に、妙吉祥出現すと想へ。諸佛の無住相は佛の平等に安住す。自心の明より、本部の法を出生し、三十六百、須彌量の大輪、乃至微塵數の熾盛の金剛輪、彼の一切は皆住すと想へ。

此れを[一一]金剛輪三昧三摩地法と名づく。

復た次に心の明より、大金剛は現ずと想へ。曼拏羅は金剛無住の相に安住す。心金剛は平等に、三十百の一一の須彌量の至微塵數の殊妙の踰室多を現じ諸相は悉く圓滿せり。其の三界中に於ける、最上金剛は彼の[一二]嚕捺囉天となす、一切は皆歸命す。

此れを[一三]金剛平等三摩地法と名づく。

【一】梵 vajra-yoga samaya-as lhanā-gratir-deśa-dvādaśaḥ paṭalaḥ 藏 rdo-rjehi-sbyor-ba-dam-tshig sgrub-pa mchog-ties-par-bstan-pa.

【二】三金剛三昧。ॐ oṃ आः hūṃ より出生せる心語身の三昧をいふ。

【三】那吒迦。梵 naṭaka 或は naṭa 伎戲なり。

【四】曚 म maṃ

【五】妙吉祥。梵 mañjuśrī 藏 hjam-dpal 文殊菩薩なり。

【六】由旬。梵 yojana 玄應音義第二計合ニ應爾許度量一同ニ此方驛邏一也、

【七】梵王帝釋。梵 brahma-indra-deva.

【八】妙吉祥勝金剛三昧。梵 mañjuśrī-vajrāgra samayā-mtar-dhāma kari samādhi.

【九】虞梨迦。梵 kulika ?

【一〇】安怛陀那。三摩地の名。

【一一】金剛輪三昧三摩地。梵 cakra-samaya-samādhi.

【一二】嚕捺囉梵 rudra 藏 drag-po. 大自在天の異名。

【一三】金剛平等三摩地。梵 vajra samatā-samādhi.

固の一劫に住す。虚空の中に金剛曼拏羅を想へ。[三一]吽字の身語心は、一劫に住す。虚空界の中に、法曼拏羅を想へ。[三二]阿字の身語心は、堅固の一劫に住す。

是の如きを名づけて諸佛の金剛の[三三]三劫智三昧と爲す、若し此の法に於て、相應を得たる者は、即ち金剛の身語心業を成じ、堅固の身に住す。理の如く語言は諸妄想を離れ、即ち金剛薩埵の成就を得なり。

者取レ彼名レ之也。
【二三】金剛通金剛宿念通。梵 vjra-nivāsa なり。
【二四】毘盧。毘盧遮那 vairocana
【二五】唵 oṃ
【二六】根本識。阿賴耶識 梵 ālaya 藏 Kun-bshi rnam-par-ses-pa の別名。
【二七】如意寶。梵 maṇi-ratna 藏 nor-bu-rin-po-che. 轉輪王の七寶の一。
【二八】吽 hūṃ
【二九】阿 a
【三〇】唵 oṃ
【三一】吽 hūṃ
【三二】阿 a
【三三】三劫智三昧。梵 tri-vajra-jñāna-samaya.

味より平等に出生す。此れを[一二四]不空成就の三昧光明最上智出生三摩地法と名づく。若し行人ありて、此の法を修する者は、不空の金剛の身語心業を成就し、金剛不空の平等光明を成就す。吉祥智海を出生して、一切衆生を利益す。

復た次に行人は當に虚空に住して[一二五]ओं唵字を觀想すべし。即ち光明の佛曼拏羅を成ず。中に毘盧遮那如來を現ずと想へ。[一二六]三身の相を現じ、大金剛光明を出す。皆毘盧遮那如來の三金剛禪定三昧より平等に出生す。此れを[一二七]趣求菩提身語心最上金剛三摩地法と名づく。若し行人ありて、此の法を修する者あらば、即ち毘盧遮那の金剛三業を成就するを得、平等光明の大菩提智を得て、三身堅固不壞を成就す。

爾の時世尊よ、大毘盧遮那金剛如來は、復た伽陀を說きて曰はく、

諸の修法者ありて、當に精進心を起し、[一二八]山中、或は[一二九]曠野・[一三〇]空舍、及び[一三一]兩河岸の側、[一三二]尸陀林處に往詣して、當に禪定心に住して、隨所に作法を求むべし。當に虚空界に住して、阿閦の智等を想ふべし。此れを諸佛の最上大三昧と名づく。一切の事を或就する大金剛智通なり。五鈷金剛杵は五焰光に莊嚴せられ、五處に相應し、金剛通を出生す。自明の大輪は猛焰識盛光なり。五種通は相應し、[一三三]金剛通は成就す。空金剛輪を想へ。平等の佛光現ず。佛と相應して安住し、佛身と平等なる得。曼拏羅中に自身は[一三四]毘盧と成ると想へ。[一三五]唵字の心に安住し、[一三六]根本識を觀想せよ。金剛心は寂滅にして、出生する所の吉祥の[一三七]如意寶は諸佛の勝成就なり。復た曼拏羅の中に阿閦尊現ずと想へ。[一三八]吽字の心に安住し、其の心に月相を現ぜよ、復た曼拏羅中に無量壽を現ずと想へ。[一三九]阿字の心に安住し、金剛の月相を現ぜよ。此の最勝の三昧は三金剛不壞なり。寂滅の三昧智は、佛の平等を成就するなり。虚空界に住して、中に自曼拏羅を想へ。[一三〇]唵字の身語心は、堅

【一二〇】ओं oṃ
【一二一】無量功德金剛光明吉祥三摩地。梵 amita-guṇa-prabhāsa-śrī-samadhi.
【一二二】大乘 mahāyāna
【一二三】ओं oṃ
【一二四】不空成就三昧光明最上智出生三摩地。梵 amogha-samaya-rasmi-jñānāgra-sambhava-samādhi.
【一二五】ओं oṃ
【一二六】三身。梵 trikāya
法身 dharmakāya
報身 saṃbhogakāya
應身 nirmāṇakāya
【一二七】趣求菩提身語心最上金剛三摩地。梵 kāya-vāk-cittāla-mvana-sambodhi-vajra-samādhi.
【一二八】山中。梵 parvatakandara 藏 ri-khrod. 山窟なり。
【一二九】曠野。梵 kāntāra 寺(一)藏 dgon-pa.
【一三〇】空舍。梵 阿練若 araṇya. 藏 dgon-pa. の譯、村落をるゝ一俱盧舍の處にして修行離に適する地を云ふ。
【一三一】河岸側。梵 maru 藏 mya-ṅam.
【一三二】尸陀林。梵 sitavana 藏 dur-khrod. 玄應音義第七に屍陀林正言二尸多婆那一此名二寒林一其林幽邃而寒因以名也、在二王舍城側一、死人多送二其中一、今總指二棄屍之處一、爲二屍陀林一

現す。是の光の中に即ち金剛薩埵の身を現ず。量は虚空に等し。此れを[一〇四]等虚空界金剛三昧莊嚴三摩地法と名づく。若し行人ありて此の法を修する者は[一〇五]五種の通、及び佛の最上三昧通力を得。是の如きを乃ち一切成就と名づく。

復た次に行人は當に虚空に住して[一〇六]唵字を觀想すべし。即ち最上の佛曼拏羅を成ず、中に阿閦如來を現ずと想へ。復た一切金剛大士を現ず。阿閦佛は智相より現ずと想へ。皆阿閦如來より三金剛の禪定三昧を出生す。此れを[一〇七]阿閦如來の三昧身現證菩提最上金剛三摩地法と名づく。若し行人ありて此の法を修する者は即ち阿閦如來の三昧の身語心を成就するを得。常に金剛堅固に住し、十方世界の一切の金剛供養の事業を成就す。

復た次に行人は當に虚空に住して[一〇八]唵字を觀想すべし。即ち最上の佛曼拏羅を成す。中に寶生如來及び虚空金剛を現ずと想へ。寶生佛を想へ。其の寶相を現ずるに、皆寶生如來の三金剛禪定三昧より出生す。此れを[一〇九]寶三昧自在最上金剛三摩地法と名づく。若し行人ありて、此に法を修する者あらば、即ち寶生如來の金剛三業を成就するを得。寶幢と平等の光明を出現し、菩提の法と、無我の智とを成就じ、祕密平等にして無所住相となる。

復た次に行人は當に虚空に住して[一一〇]唵字を觀想すべし。即ち最上の佛曼拏羅を成ず。中に無量壽如來を現じて施法の相を作すと想へ。無量壽如來より、三金剛禪定三昧と三種金剛甘露とを平等に出生す。此れを[一一一]無量の功德金剛光明吉祥三摩地法と名づく。若し行人ありて此の法を修する者は、即ち無量壽の身語心業を成就するを得。復た金剛壽命の平等光明を得、能く衆生の爲に[一一二]大乘の道を說く。

復た次に行人は當に虚空に住して[一一三]唵字を觀想すべし。即ち最上の佛曼拏羅を成ず。金剛大青蓮華を出現し、中に不空成就如來と、その三昧の相とを現ずと想へ。不空成就如來の三金剛禪定三

歡喜地。梵 pramuditā
離垢地。梵 vimalā
發光地。梵 prabhākarī
焰慧地。梵 arciṣmatī
難勝地。梵 sudurjayā
現前地。梵 abhimukhī
遠行地。梵 dūraṃgamā
不動地。梵 acalā
善慧地。梵 sādhumatī
法雲地。梵 dharmameghā

【一〇二】最上智月菩薩三昧金剛三摩地。bodhi-sattva-jñāna sa-maya-candra vajra-samādhi.

【一〇三】 āli

【一〇四】等虚空界金剛三昧莊嚴三摩地 梵 kha-vajra-samaya vyūha laya samādhi.

【一〇五】五種の通。五神通
一、神境智證通 ṛddhi-vidhi-jñāna.
二、天眼智證通 divya-cakṣus
三、天耳智證通 divya-śrotra
四、他心智證通 paracittajñāna
五、宿命智證通 pūrvanivāsānusmṛti-jñāna

【一〇六】 oṃ

【一〇七】阿閦如來三昧身現證菩提最上金剛三摩地：梵 akṣobhya-samaya-kāyābhisaṃbodhi-samaya-vajra-samādhi.

【一〇八】 oṃ

【一〇九】寶三昧自在最上金剛三摩地、梵 ratna-samaya-sambhoga-vajra-samādhi.

復た次に行人は當に虛空に住して、金剛最上の法曼拏羅を觀想せよ。根本の大明より出生す。持明大士は[九〇]阿字を宣說して曼拏羅を成ずるに、大金剛の[九一]五種色光を現ず。中に無量壽如來を想へ、平等智正語三昧より、正法語を說くに、諸の[九二]戲論を離れたり。平等堅固の金剛語業なり、此れを一切如來の[九三]金剛正語三昧出生三摩地法と名づく、若し行人にして此の法を修する者あらば、即ち金剛語業を成就するを得て、壽は三劫に住し、五境に隨順して遊戲するも無礙なり。

復た次に行人は當に虛空に住して最上の金剛曼拏羅を觀想すべし、根本の大明より出生す。持明大士の[九四]吽字を說き心曼拏羅を成ず。廣大の眞實三昧の五種の光明を現ず。中に大智金剛寶生如來を觀想せよ。一切の金剛は最勝にして無住なり。[九五]金剛心より出生せる三昧は、[九六]一切智の功德海を成就して、大導師と爲りて正智を發生す。此れを[九七]一切如來の金剛祕密大心三昧最上三摩地法と名づく。若し行人ありて此の法を修する者は、即ち金剛心業を成就して、壽は三劫に住し、五境に隨順して遊戲するも無礙なり。

復た次に行人は當に虛空に住して[九八]𑖏𑖽亢を觀想すべし。大金剛平等智曼拏羅を成す。一切の身は虛空界と等しく現ず。皆金剛智より平等に出生す。須臾の間に諸佛菩薩の廣大供養と變化す。此れを[九九]等虛空金剛三昧身語心安怛陀那出生莊嚴光明鬘三摩地法と名づく、若し行人ありて此の法を修する者は、即ち劫三昧に住するを得、諸佛菩薩も亦能見る能はず。

復た次に行人は當に虛空に住して金剛曼拏羅を觀想すべし。根本の大明より出生す。持明大士は[一〇〇]𑖏𑖽字を說きて心曼拏羅を成ず。金剛等作の諸の光明を現ず。中に復た妙吉祥尊を想へ。是れは即ち報身なり。身語心業の金剛三昧に安住し、久しく已に[一〇一]菩薩の十地に安住せり。此れを[一〇二]最上智月菩薩の三昧の金剛三摩地法と名づく。若し行人ありて此の法を修する者は、即ち一切成就を得。

復た次に行人は當に虛空に住して此の[一〇三]剎颯疋零（三合引）字を觀想すべし。是の字の中より智光を出

ṛendriya 四、舌根 梵 jihvendriya 五、身根 梵 kāyendriya.

【九〇】阿 𑖀 a

【九一】五種色。青 梵 nīla 黃 梵 pīta 赤 梵 lohita 白 梵 avadāta 黑 梵 kṛṣṇa.

【九二】戲論。梵 prapañca 佛性論第三に貪愛・我慢・諸見の三戲論、九種戲論を說く。

【九三】一切如來金剛正語三昧出生三摩地。梵 sarva-tathāgata-vāg-vajra-samaya-sambhava-samādhi

【九四】吽 𑖮𑖳𑖽 hūṃ

【九五】金剛心の堅固不壞にして動搖せざる淨菩提を云ふ。

【九六】一切智。梵 sarva-jñāta 藏 thams-cad mkhyen-pa-ñid. 內外一切の法相を了知する智。

【九七】一切如來金剛昧密大心三昧最上三摩地、梵 bhagavan vajra-citta-guhyaḥ sarva-tathāgata kāya-vāk-citta-vajra samādhi.

【九八】𑖏𑖽 klaṃ

【九九】等虛空金剛三昧身語心安怛那出生莊嚴光明鬘三摩地。梵 kha-vajra-samayaḥ kāya-vāk-citta vajrântardhāna-sambhāva vyūha mahi-samādhi.

【一〇〇】欿 𑖏𑖽 khaṃ

【一〇一】菩薩十地。梵 bodhi-sattvāma-daśa-bhūmi

當に此の[72]勃籠（二合引 下同）字を觀想すべし。卽ち虛空の金剛心曼荼羅を成ず。一切の金剛は周匝圍遶せり。中に復た廣大金剛の智雲を想へ。卽ち此れ[73]勃籠字なり、是れ金剛智心なり。

又復た此の[74]吽字[75]唵字を觀想せよ、金剛曼荼羅の本部の諸相は一切圓滿なるを成ず。

又復た此の[76]盎字を觀想せよ、本尊曼拏羅を成ず、本尊と賢聖の諸相は圓滿なり。

又復た此の[77]吽字[78]阿字を觀想せよ。法曼拏羅を成ず。

是の如く諸字中に(於て)、等しく[79]勃籠字は卽ち無所住の相と知るべし。三金剛より出生す。此等を名づけて金剛祕密三昧の心字と名づく。亦是れ三世の諸佛の最勝の身語心なり。所謂[80]唵字にして、卽ち諸佛の最勝身なり。

[81]唵[82]阿字は卽ち諸佛の眞實語なり。[83]阿[84]吽字は卽ち諸佛の大智心なり。又復た吽字も亦卽ち無上菩提なり。此れ卽ち一切如來の無上菩提なり。聖法の無想智を成就し、金剛の諸佛の正因果は持明大士を出生す。是の如くば乃ち最上の名稱を得。大明行現證三昧法の三種金剛堅固不壞を成就す。此れを[85]一切如來の身語心三昧眞實智金剛加持正因三摩地法と名づく。此の法を修する者は、寂靜處に於て、相應に住し、[86]前の字の如くに想ふ。此の人は半月分に於て、速かに能く金剛三業を成就す。

復た次に行人は當に虛空に住して、金剛本尊の最上曼拏羅を觀想すべし。根本の大明より出生す、持明大士は[87]唵字を說きて心曼拏羅を成ず。五種の大光明の雲を出現し、中に最上大毘盧遮那如來を想へ、復た無數の佛身を出現し、金剛光明は遍ねく一切を照す。此れを一切如來の金剛祕密身語心業の金剛光明莊嚴三摩地法と名づく。若し行人ありて此の法を修するものは、半月中に於て速かに最上の勝身を成就するを得。佛身と等しく堅固不壞にして、壽は[88]三劫に住し、[89]五境に隨順して遊戲するも無礙なり。

地。梵 vajra-puṇyottama-samādhi

【六九】唵字 oṃ

【七〇】阿字 a

【七一】吽字 hūṃ

【七二】bhrūṃ

【七三】勃籠字 bhrūṃ

【七四】hūṃ

【七五】oṃ

【七六】aṃ

【七七】hūṃ

【七八】a

【七九】勃籠 bhrūṃ

【八〇】唵 oṃ

【八一】唵 oṃ

【八二】阿 a

【八三】阿 a

【八四】吽 hūṃ

【八五】一切如來身語心三昧眞實智金剛加持正因三摩地 梵 sarva-tathāgata-samaya-tattva-jñāna-vajra-adhiṣṭhāna-hetuḥ samādhi.

【八六】前の字 oṃ a hūṃ

【八七】唵 oṃ

【八八】三劫。劫は 梵 kalpa 顯教にては三劫の長時にを云ふ。密敎にては眞言行者が因位より果位に至る間超過する麁妄執・細妄執・極細妄執の三妄執に喩ふ。

【八九】五境。一、眼根 梵 cakṣurindriya 二、耳根 梵 śrotrendriya 三、鼻根 梵 ghrāṇa=

吽引唵引阿引一句　發吒半音弱仁作切下同二

此の一切の金剛と、佛菩提とは　所有金剛部、寶(部)蓮華(部)等を成就す。　金剛鉤を觀想して、諸部を句召せよ。　復た自心を觀照して、六五那吒迦の法を作せ、　七晝夜中に、金剛事業を作して　身語心の祕密智の金剛を成就せよ。　諸の施願を觀察して、　怖畏を生ぜざらしめ、　廣大成就を施して、　心に大喜愛を生ぜよ。　佛菩薩の一切の眞言行を成就するに　若し此の法を越する者は、　當に彼の壽命を壞すべし。

爾の時金剛手は、　三界の尊を調伏し、　最上の大金剛は、　是の如き音聲を出す。　乃至持明者も、　諸の供養事を成じ、　此の諸佛も、大明三昧法を成就して　明妃自在に入つて、　金剛と相應すると想へ。　此の法を成ずるを卽ち　六六三昧曼拏羅と名づく。

爾の時、金剛手よ、諸の如來は、　諸佛の大灌頂を出生して、　復た是の如き言を作す。　彼の一切の世界を、　此の法を以て句召し、　大印と相應して住し、　一切の事を成就す。　佛の眞實は、　無數億の金剛と變化す。　此れを佛世尊の、　菩提三昧法と名づく。　菩提を成就することを得て、　三金剛の相を成じ、　金剛大士は、　勝菩提の心海に入る。

六七　一切如來眞實三昧最上持明大士分第十一

爾の時世尊よ、大毘盧遮那金剛如來は、卽ち一切如來の　六八最上金剛持明大士三摩地に入る。定より出でて、一切如來の大明金剛最上の明句を宣說す。當に三金剛字の最上六印は、大智金剛一切菩提に平等に安住すと想ふべし。所謂　六九唵字を智の本となす、卽ち身金剛平等なり。七〇阿字は法無我なり、卽ち語金剛平等なり。七一吽字は不可壞なり、卽ち心金剛平等なり。是の如く三金剛平等堅固に住す、卽ち一切如來の身語心の持明大士より出づる所なり。

【五五】 那庾多。梵 ayuta 藏 Ther-hbum 又は阿由多とも云ふ。慧苑音義卷下に「阿庾多は此の方の一兆の名に當る」と。

【五六】 hūṃ oṃ āḥ svāhā.

【五七】 莊嚴曼拏羅。梵 vyūha-maṇḍala

【五八】 吽字 hūṃ 金剛薩埵の種字。

【五九】 自壞法。sva-maṇḍala

【六〇】 自明。sva-mantra

【六一】 自持明人。sva-mantra-puruṣa

【六二】 微妙曼拏羅。sūkṣma-maṇḍala

【六三】 金剛鉤。vajrāṅkuśa

【六四】 hūṃ oṃ aḥ phaṭ jaḥ.

【六五】 那吒迦 nāṭaka 或は那羅 nāṭa. 翻譯名義集、第二人倫篇に「那羅は上伎戲と翻ず」とあり。是れ角力の技を云ふならん。

【六六】 三昧曼拏羅 samaya-maṇḍala

【六七】 梵 sarva-tathāgata-mantra-samaya-tattva-vidyā-puruṣottama ekadaśaḥ paṭalaḥ 藏 de-bshin-gśegs-pa thams-cad-kyi sṅags-kyi dam tshig de-kho-na-ñid rig-pahi skyes-bu-mchog.

【六八】 最上金剛持明大士三摩

定より出でて、諸の如來に向ふて、是の如き言を作す。阿閦佛等の一切如來は各能く無數倶胝[五四]那庾多[五五]の百千の大明を宣說し、一切の成就の事を出生して諸の變化を現じ、十方界にては神通自在にして、諸法を順行す。五境中を遊戯するに無礙なり。眞言行の解脫に相應せり。何を以ての故、一切如來の眞言行法は彼の諸の大持明士を出生して、能く此の諸の如來の身語心、祕密の大明の義を觀察し、一切の最上祕密の大明の心を照達すればなり。常に一切如來の身語心三昧に趣求することを樂ひ、常に一切の執金剛の身語心三昧に趣求することを樂ひ、常に一切の持法の身語心三昧に趣求することを樂ふ。即ち自らの金剛三業を以て大明を說きて曰はく。

[五六] 吽唵引阿引渉引賀引一句

此の大明を說く時、會中の一切の菩薩は、聞きて皆悉く驚怖し、咸各金剛手菩薩を思念せり。

爾の時金剛手菩薩は是の念を知りて、即ち一切如來の大三昧法を說く。

當に空觀に住して、[五七]莊嚴曼拏羅を想ふべし。中に[五八]吽字及び自らの影像等を想へ。金剛の大光明と、廣大不思議と、諸佛の身語心とは、當に是の如く、一刹那に、大金剛三昧を成就すと觀想すべし。金剛王大士は、一切の勝自在にして、[五九]自壇法と[六〇]自明とは、諸の儀軌を出生す。此れ一切の明を攝する、金剛精妙の說なり。[六一]自持明人を現じて、四處に色相を具して、三面相の相應と、三種の色とを想へ。

是の如きを名づけて虛空金剛三昧法と爲す。

此に復た、最上金剛祕密心を說く。當に空に住して、[六二]微妙曼拏羅を觀想すべし。中に復た五鈷金剛杵を觀想せよ、觀想と常に相應して、間斷あらしむること勿れ。三金剛と、彼の[六三]金剛鉤とを思念して、一切の心と諸の賢聖等を句召せよ。

即ち此の大明を說いて曰はく、

【四七】色界 ― 無所有處 ākiñcanyāyatana. 非想非々想處 naivasaṃjñānāsaṃjñāyatana

【四八】四大。catur mahābhūtam
地大。pṛthiv-dhātu
水大。ab-dhātu
火大 tejo-dhātu
風大。vāyudhātu なり。是れ諸物を所造する大種なり。

【四九】箭。梵 śara 藏 mdaḥ

【五〇】筌。梵 nāla 藏 chu-ba

【五一】鑽木 梵 araṇi 藏 gtun-bapa 又は lsrals-pa 鑽木なり。

【五二】中論第一去來品に「已去無有去、未去亦無去、離已去未去、去時亦無去」梵 gataṃ na gamyate tāvad agataṃ naiva gamyate, gatāgata vinirmuktaṃ gamyamānaṃ na gamyate.

【五三】梵 sarva tathāgata hṛdaya-saṃvādano nāma dvāmaḥ paṭalaḥ 藏 de-bshin-gśegs-pa thams-cad-kyi thugs bskul-ba

【五四】倶胝。梵 koṭi 藏 bye-ba 玄應音義第五に「倶致は或は倶胝と言ふ、此れに千萬と云ひ、或は億と云ふ。而して甚だ同じからず、故に本と存せざるのみ」と。

を知り、隨順して一切の法門を宣說す。彼の所說の法は猶ほ虛空の諸の有相を離れたる如し、如來の三昧も亦復た無住なり。諸の善男子よ、譬へば人ありて持するに[四九]箭・[五〇]莖・[五一]鑽木を以て火を出す如し、勤めて其の力を加へれば煙卽と漸く生ず、後久しからずして火方に出だすを得べし。出づれば卽ち滅す、彼の出でたる火は箭莖にも住せず、其の木にも住せず、人の手にも住せず。諸の善男子よ、諸の佛如來の所有三昧も亦復た是の如し、[五二]一切の無住は來にも非らず、去にも非らず、諸法も亦然り。

是の時諸の菩薩摩訶薩は、佛世尊の是の法を說くを聞きて、心に信解を生じて、未曾有なりと歎じ、皆大いに歡喜して是の讚を作して言はく。

廣大希有なる最上法は、　相を離れ寂靜にして虛空の如し。　諸の疑網を破る清淨門なり。
是の故に眞實の說を稱歎するなり。

[五三]觀察一切如來心分第十

爾の時世尊よ、大毘盧遮那金剛如來は、而(原本亦の誤か)復た諸佛如來を召集して、普ねく大三昧耶金剛眞實の現證菩提堅固の三業諸佛如來の祕密門に安住せしむ。是の如く安住せしめて、毘盧遮那は卽ち是の言を作す。當に諸佛の本部の眞實大明の身語心業の祕密最上成就等の法を說くべし。と、是の時金剛手菩薩摩訶薩は衆會の中に大威勢を現じ、目に光明を燦ち、熾然として怖るべし。廣く大會及び十方界を視て、大音聲を出して是の如き言を作す。

金剛の身語心、　三業の觀想に住すれば、　疑惑を離れて、無礙なり。　平等にして所住もなし。

爾の時世尊よ、大毘盧遮那金剛如來は、卽ち如來の自性清淨の波羅蜜多敎の金剛三摩地に入る。

【四八】色界
初禪天
梵天 brahmakayika
梵衆天 brahmapārṣadya
梵輔天 brahmapurohita
大梵天 mahābrahmā
二禪天
少光天 parittābha
無量光天 apramāṇābha
音光天 ābhāsvara
三禪天
少淨天 parittaśubha
無量淨天 apramāṇaśubha
遍淨天 śubhakṛtsna
四禪天
無雲天 anabhraka
福生天 puṇyaprasava
廣果天 bṛhatphala
淨梵地
無煩天 avṛha
無熱天 atapa
善現天 sudṛśa
善見天 sudarśana
色究竟天 akaniṣṭha
和音天 aghaniṣṭha
大自在天 maheśvara

無色界
空無邊處 ākāśānantyāyatana
識無邊處 vijñānānantyāyatana

空中に住して、佛曼拏羅を想ふべし。不空成就を現じ、諸佛を觀想せよ。一切の佛は無住にして、相と諸の語言と、眞妄及び影像とを離れ、皆金剛句に住す。金剛手の說く所の、佛菩薩は彼の諸佛の語言より生ぜらるゝなり。空の如く淨にして無垢なり。大明成就、祕密智の覺する所を說く。[四〇]三昧句の召部は、義が眞實なりと作さるゝなり。

[四一]是の如きを名づけて三昧句召部の不空成就如來の眞實三昧觀想法と爲す。

爾の時金剛手は、三金剛無住にして、堅固不能壞となり。是の如き義を宣說す。當に空觀に住して、三昧曼拏羅を想へ。中に寶生尊と、諸の影像を現ずと想へ。當に瑜伽の行を修する者は、當に諸法空たりと了すべし。縱ひ非法語を說くも、亦淨智に住するを得。

是の如きを名づけて、寶部中の寶生如來の金剛智莊嚴三昧觀想法と爲す。

爾の時會中に菩薩あり。[四二]諸佛三昧金剛幢と名づく。不可數、不可計の須彌山の量と等しき塵數の諸菩薩摩訶薩は、諸如來の是の法を聞いて、未だ曾て有らざることを怪みて卽ち會中に於て大音聲を出して、咸是の言を作す。[四三]諸佛如來大祕密主は、[四四]三界を出過して、世間の一切の諸法を通達せり。云何に是の中の言が法語に非らざるも、淨智を成ずるを得るや。

是の時世尊よ、大毘盧遮那金剛如來は、卽ち諸の菩薩に告げて言はく。止めよ、善男子よ、是の說を作す莫れ。何を以ての故に、汝等は當に彼の最上祕密の行は卽ち菩薩の行なるを知るや、彼の菩薩の行は卽ち如來の行なり、彼の如來の行は卽ち眞言の行なり、諸の善男子よ、譬へば虛空は一切處に於て所住の相の無きが如し。虛空無住の諸法も亦然り。諸法は是の如く當に何れの所にか住すべき。[四五]欲界にも住せず、[四六]色界にも住せず、[四七]無色界にも住せず。[四八]四大等にも住せず、諸の善男子よ一切法は無住なり、此の義は寂靜なりと、當に是の如く知るべし。諸の佛如來は諸の衆生の心の樂欲

【四〇】三昧句召部。梵 Samayā-Karsana-kula

【四一】寶生金剛如來の三昧を說く。

【四二】諸佛三昧金剛幢 sarva-tathāgata-samaya-vajra-ketu.

【四三】諸佛如來大祕密主大毘盧遮那金剛如來を云ふ。

【四四】三界 梵 tri-dhātu 藏 khams-gsum.
欲界 梵 kāma-dhātu 藏 hdod-pahi khams
色界 梵 rūpa-dhātu 藏 gzugs-kyi khams.
無色界 梵 arūpa-dhātu 藏 gzugs-med-paḥi khams.

【四五】

欲界
- 地居 bhauma
  - 四天王天 catur mahārājakāyika
    - 持國天 dhṛta-rāṣṭra
    - 增長天 virū-ḍhaka
    - 廣目天 virū-pākṣa
    - 多聞天 vaiśra-maṇa
  - 忉利天 trāyastriṃ-śa
- 虛空居 āntarikṣa-vāsin
  - 須夜摩天 yāma
  - 兜率天 tuṣita
  - 化樂天 nirmāṇa-rati
  - 他化自在天 para-nirmitavaśa-vartin

最上清淨眞實三昧分第九[三三]

[三四]爾の時金剛手は、復た空の字相を現ず、一切の灌頂行と、一切の勝自在と、身語心とは三業曼拏羅に相應す。最上の法は、諸佛の祕密智なることを宣說す。當に空に住して金剛曼拏羅を觀想せよ。中に阿閦尊を現じ、金剛を執り、大焔光は熾盛にして、五種の光圓滿し、三世の佛を出生す。[三五]金剛部は變化して身語心に相應す、最上の金剛と、上首の禪定法とは、心と平等に成就すと想へ。衆の祕密金剛は、能く一切を破壞して、阿閦金剛は生じて、諸佛の境界に住す。

是の如きを名づけて、金剛部中の阿閦如來の眞實三昧觀想法と爲す。

[三六]爾の時金剛手の智解脫は自性淨無垢を成就し、大菩提の行に入りて、眞實の三昧を說き、佛の菩提法を成ず、當に虛空中に住して、佛曼拏羅を想へ。中に毘盧尊と、一切の佛とを現ず。諸寶と相應して、金剛の影像を成ず。彼の三金剛より、一切の妙寶を出す、如意寶珠と平等となり、圓滿に寶海に現ず。諸佛の大牟尼は諸の佛子を出生す。

是の如きを名づけて佛部中の毘盧遮那如來の眞實三昧一切部中の大智觀想法と爲す。

[三七]爾の時金剛手は染性より解脫するを說く。祕密の淨とは無著の蓮華曼拏羅なり。當に虛空中に住して、大曼拏羅を想へ。中に無量壽と、[三八]諸佛の供養とを現ず。祕密の行と相應して、一切の教を想へ、此の最上の金剛は四の三昧と相應す。二根本と相應して、能く二種を出生す。諸如來を觀想して、三金剛を成就せよ。

是の如きを名づけて、蓮華部中の無量壽如來の眞實三昧觀想法と爲す。

[三九]爾の時金剛手、金剛明句の義と、無我の智を出生して、是の如き法を宣說す。當に虛

酢味 梵 āmla
鹹味 梵 lavaṇa
辛味 梵 kaṭuka
苦味 梵 tikta等なり。

【三三】 梵paramārtha śuddha-tvārtha samaya nāma navamaḥ paṭalaḥ 藏 don-dam-paḥi de-ko-na-ñid-kyi don-gyi dam tshig.

【三四】 阿閦金剛如來の三昧を說く。

【三五】 金剛部。阿閦を主尊となす。

【三六】 毘盧遮那金剛如來の三昧を說く。

【三七】 無量壽金剛如來の三昧を說く。

【三八】 諸佛の供養、供養の四明妃等を云ふ。

【三九】 不空成就金剛如來の三昧を說く。

一切は皆清淨にして、相を離れて寂然たり。少法も差別あることなし。皆是れ諸の如來の神通慧の作す所なり。祕密最上の法は、[二六]五部より出生す。當に虛空に住して、大智海を觀想せよ。自身は月輪に處り、種々の嚴飾を具す。諸佛の心智に住するは、寂靜たる金剛界なり。」四寶莊嚴せる、高廣殊妙の塔は五種の光明鬘もて、清淨に圍遶すと想へ。

復た大智海は三世に住相なく、廣大不思議にして、一切法を總攝すると想へ。自らの毛中より、供養の智雲及び五種の蓮華を現ず、謂はく青蓮華等なり。生ずるに三種の華あり。聖賢より現ずる所の、[二七]迦哩尼迦華、及び[二八]末利迦華・[二九]踰體迦妙華・[三〇]迦囉尾囉等は、一一皆殊勝にして、妙香悉く周遍すと想へ。輪曼拏羅は種々の莊嚴を具し、廣さ百由旬の量にして、金剛及び蓮華、輪幷びに寶劍等周匝し悉く圓滿すと想へ。智慧の觀を以てせば、一一は空に現じ、廣さ倶胝由旬にして、四方を淨嚴飾せる、衆寶所成の塔にして、自性は淨にして無垢なりと想へ。正智觀を以てせば、諸部の供養の因にして、五種の勝功德は、供養の雲海を成じ、寶衣は淨にして無垢なり。供養して菩提を求め、五種の供養を作し、聖賢の歡喜を得るは種々の最上の寶なりと想へ。彼の一切の妙寶は最上の成就を得、七寶は境界を嚴り、一切は圓滿して現じ莊嚴すと想へ。正慧に安住すれば、種々の義成就すべし。最上の大印相は、佛曼拏羅中に於て、[三一]諸の觸と相應し、及び[三二]諸の味を成就す。當に空に住して寶嚴曼拏羅を觀想せよ、自體は卽ち佛身となり。廣大の供養を作す。彼の最上の祕密は一切法に隨順して、加持の句に安住す。是れ眞實の供養なり。所有ゆる甘露味を能く資として智慧を生じ、諸佛の三業に住し、金剛智を成就す。

---

mng 惡趣に於て、善趣に於て、涅槃に於て、此れらを成立せしむる因に於て、及び其れらの不顚倒の因果關係に於て所有る無智なり。雜染の生起に所依を與ふるを業とす。

【二四】金剛乘。密乘を云ふ。顯敎の大乘等に對す。十八會指歸に「演說瑜伽二乘不共佛法、說曼茶羅、三昧耶事業、各量同虛空、證者如上所說、各各分劑各不雜亂、開證四身所謂自性身・受用身・變化身・等流身・是能頓利樂一切有情諸菩薩・聲聞・緣覺、及諸外道、名瑜伽金剛一乘敎王法」と。

【二五】字相、文字に字相、字義あり、字相は顯、字義は密とす。

【二六】五部。佛部・金剛部・蓮華部・寶部・羯磨部なり。

【二七】迦哩尼迦華 karṇikā

【二八】末利迦華 mallikā

【二九】踰體伽妙華 yūtaikā

【三〇】迦囉尾囉華 karavim

【三一】諸の觸。滑性 梵 śla-kṣṇatva
澁性 梵 karkaśatva
重性 梵 gurutva
輕性 梵 loghutva
冷性 梵 śīta
飢 梵 bubhukṣā
渴 梵 pipāsā 等なり。

【三二】諸の味。
甘味 梵 madhura

すを、最上の持妙と名づくるたり。又復た云何にして、[一六]三昧耶の念觀と名づくや、謂はく三昧の文字は諸の儀軌を清淨にし、如來の莊嚴する所は、[一七]妙樂成就を得るなり。又復た云何が[一八]般若波羅蜜の三昧耶の念觀と名づくや、謂はく諸法の自性は大光明清淨にして、無生・無所依・無智にして亦無得、無因・無所生なり。又復た云何が彼の無生念觀、亦諸法の自性は清淨光明の法なりや、虛空の相を離れたる如し、亦復た文字を離れ、無二・非無二・無垢にして寂靜と名づく。又復た云何が諸部の供養觀と名づく、謂はく身心は相を離れ、平等の供養を作し、諸部と相應して甘露法を成就し、佛の[一九]加持身及び彼の金剛心を得、身語心は清淨にして、諸の邪念を遠離して、持明の行を成就し、金剛不壞を得。

[二〇]甘露三昧分第八

爾の時世尊よ、寶生金剛如來は、一切如來の金剛三業に安住して、大會中に於て金剛手菩薩最上自在執金剛者に向ふて稱歎し、勸請して、是の如き言を作す。

大乘の金剛士は、空の清淨行に住して、普賢の大供養が、願くは最上行なることを說きたまへ。[二一]貪[二二]瞋[二三]癡の染性は同じく[二四]金剛乘に入り、虛空と平等なるは、無住の大供養なり。解脫の道の歸する所を、三乘は共に佛の大樂清淨なりと宣說す。願くは供養法を說きたまへ。菩提心は廣大にして、善く妙法輪を轉ず。身語心を清淨にして、金剛乘に歸命せよ。爾の時金剛手菩薩摩訶薩は、佛の勸請を受けて、即ち供養法を說かんとして、一切の虛空に遍せる廣大の[二五]字相を現ず。一切の灌頂の義を金剛寶部に攝し、三金剛の身語心は善樂に安住す、諸佛出生法は、諸の如來を供養す。彼の供養法とは、身心平等に住し、著を離れて無礙なり。當に諸の法性は、大地の方所に遍ずと了すべし。

【一六】三昧耶。梵 samaya 藏 dam-tsig. 一、平等の義、如來が衆生の三業と如來の三密と其の本性無二平等なりと知り、衆生を加持して如來と其の德を等しからしむるなり。二、本誓の義、如來が衆生をして悉く無上菩提を得しめんと大誓願をおこすなり。三、除障の義、如來が方便を以て衆生の煩惱蓋障を除くなり。四、驚覺の義、無明に狂醉せる衆を驚覺し、或は定中の菩薩を驚覺する義なり。

【一七】妙樂。藏 ďin-tu-bde-dgah.

【一八】般若波羅蜜 梵 prajñā-pāramita 藏 ses-rab-kyi pha-rol tu bpyin-pa. 智慧到彼岸。

【一九】加持身。眞言行者が三密の妙行を修し、三密相應せる時、瑜伽觀中に來現せる佛身なり。

【二〇】梵 mantra-asthamaḥ patalaḥ 藏 bsan-gcihi-dam-tsig.

【二一】貪 梵 rāga 藏 hdod-chags 有と享樂とに耽著し、希有するを云ふ、苦を生ずるを業とす。

【二二】瞋。梵 dvesa 藏 she-bdan 有情に於て憎恚するなり、不安穩住の惡行に所依を與ふるを業とす。

【二三】癡。梵 moha 藏 gti-

念と相應して、菩提の觀を成ぜよ。若し身觀に住せば、即ち身相無礙なり。若し心觀の想に住せば、心諸有の著を離る。諸佛の愛樂する所を、佛眼に住して觀察せよ。二處は皆平等にして、速かに佛性を成就す。[一一]吽字及び[一二]唵字、[一三]發字等の儀軌は、五種の光明を現ず。蓮華金剛を想ふこと、月の淨光焰の如く、隨意に觀想せよ。佛の念等と相應して、菩提を求むることを觀想せよ。云何が佛の念を觀ずる、謂はく一切處に遍じて、皆諸佛の影像は佛智の雲を出現するなり。云何が法の念を觀ずる、謂はく一切處に遍じて、金剛法の智雲を出現すると觀想するなり。云何が金剛の觀、謂はく一切處に遍じて、金剛薩埵は金剛の智雲を現ずると想ふなり。云何が諸部の觀、謂はく一切處に遍じて、本尊の影像及び本尊の智雲を現ずるなり。云何が忿怒の觀、謂はく一切處に遍じて、忿怒の聲を出し、忿怒の智雲を現ずと想ふなり。云何が菩提の觀及び彼の菩提の念、本も金剛の蓮は二處悉く平等にして、智日の金剛を現じ金剛の供養を作すなり。復た云何にして[一四]曼拏羅の念觀と名づくを得るや、謂はく二處平等にして妙蓮華自在にして、

大相應の曼拏羅の自性を出生するなり。云何が身の念觀、謂はく一切如來は所有ゆる勝妙身にして、五蘊の性は圓滿にして、彼の佛身の自性は平等なりと、是の如く見るなり。

云何が語の念觀、謂はく金剛の法語は平等なりと、是の如く見るなり。最上の法性を持すればなり。云何が心の念觀、謂はく普賢の大心は一切に普滿して、[一五]祕密の根本に住することを平等なりと、是の如く見るなり。金剛の大心を持すればなり。云何が有情の觀、謂はく諸の有情の心及び彼の身語業は平等なりと、是の如く見るなり。皆相平等を離れて、

一切は虛空の如し。復た云何にして、一切の大明の相と名づくるを得るや、謂はく即ち身語心の念觀は法に相應して、身は妙金剛に住し、語心も亦是の如し。是の平等觀を作

重性・輕性・冷・飢・渴（同）

【九】結、煩惱の異名。見結・戒取結・疑結・貪結・恚結・慢結・嫉結・慳結等。

【一〇】身語意の業。身業・語業・意業の三業を云ふ。身所造の業を身業と名づけ。所欲の義を發語せんと思ふ故に語業と名づけ。意は之れに相應の業なるが故に意業と名づく。（大乘成業論）

【一一】吽字。hūṃ

【一二】唵字。oṃ

【一三】發字。phaṭ?

【一四】曼拏羅、梵 maṇḍala 壇と譯す。灌頂に用ふると、護摩に用ふるの二種ありて、諸尊を布置せるを云ふ。

【一五】祕密の根本、金剛と蓮華と相應するを云ふ。

卷の第二

祕密精妙行分第七

爾の時世尊よ、大毘盧遮那金剛如來は、又復た一切如來金剛三業の大三昧耶、最上眞實大明[一]の勝行三摩地の法の伽陀を宣說して曰はく。

諸の富樂の樂ふ所を、隨意に卽ち當に行ふべし。種々の相應を獲得せば、速かに佛性を成就す。又復た諸の富を樂ふ所を隨意に行ひ、本尊と相應せば、自他の供養を成ず。苦行を作して法を求むるも、彼は成就する能はず。[二]諸の樂を意に隨つて行ずれば、斯れ善く成就を爲す。假使へ四方に、飲食を求めて、活命し。持誦して間斷せざれば、諸の富樂を成ずるを得。善く身語心に住して、大菩提を勤求し、夭橫の怖を遠離し、當に地獄に墮せざるべし。佛菩薩の所行は、最上の大明行なり。謂はく勝法の文字は、諸の富樂を成就し、諸樂の境に順行するは、卽ち[三]五智自在なり。菩薩は常に諸佛の善所作を稱歎す。當に[四]色の三種は自他の供養を成じ、一切の佛は、毘盧尊の出生を敬愛す。又復た[五]聲の三種は、諸の聖賢を供養し、一切の佛は、寶幢の出生を敬愛す。又[六]香の三種は諸佛等を供養し、一切の佛は無量壽の出生を敬愛す、又復た[七]味の三種は諸聖賢を供養し、一切の佛は、不空尊の出生を敬愛す、又復た[八]觸の三種は、本部を供養し、彼の諸の佛金剛は、阿閦尊の所得なり。彼の色聲香等は、心常に諸[九]結を離る。一切の佛世尊は、祕密の眞實を說く。色聲等の明句を、諦心して觀想せよ。復た各本部に於て、諸の聖賢を觀想せよ。佛の念と相應して住し、作法を觀想して念ぜよ、[一〇]身語意の業を觀じて、金剛の念觀を成ぜよ。諸部の念と相應して、忿怒の念觀を成ぜよ。賢聖の

【一】梵mantra cārgra-sapta-mahā paṭalaḥ 藏 uṅags kyi spyod-pa-mchog.

【二】最上妙樂輪を行ずるを云ふ。

【三】五智。梵 pañca-jñānā 藏 ye-śes lṅa 五佛の智、法界體性智(毘盧遮那)梵 dharma-dhātu viśuddhi 藏 chos-kyi dbyiṅs rnam-par-dag-pa. 大圓境智(阿閦)梵 ādarśa-jñāna 藏 me-loṅ-lta-buḥi ye-śes 妙觀察智(無量壽)梵 pratya-vekṣaṇā jñāna 藏 so-sor-rtog-paḥi-ye-śes 平等性智(寶生)梵 samatā-jñāna 藏 mñam-pa-ñid-kyi ye-śes 成所作智(不空成就)梵 kṛtya-anusthāna jñāna 藏 bya-ba-nam-tan-du grub-paḥi-ye-śes

【四】色の三種。可見有對色、不可見有對色、不可見無對色。(阿毘曇論)、顯色・形色・表色・(大乘五蘊論)

【五】聲の三種。執受大種因聲、非執受大種因聲、俱大種因聲(大乘五蘊論)

【六】香の三種。好香 惡香・所餘香(同)

【七】味の三種。甘味・酢味・鹹味。辛味・苦味・淡味(同)。

【八】觸の三種。滑性・澁性・

五鈷金剛杵と、衆寶とは麥の量の如しと、心に住して觀想せよ。復た八葉蓮華を想へ、[一六二]左拏迦の量の如しと、心に住して觀想し、大菩提に迴向せよ。輪等は皆最勝にして、儀軌の如く觀想せば、菩提の句を成就し、諸功德を圓滿にす。大明行は最勝にして、佛菩提に安住し、諸法の句を出生して、金剛三業に住す。爾の時金剛手は、諸の衆生を利せんがために、諸の清淨の行は、祕密中の最上なることを說く。法の分限中に於て、塵の染する處となるも、著さらるゝことなく、祕密の供養を作すを、是れを心供養と名づく。若し甘露の食を以てせば、勝義の果を成ずるを得。最上の眞實法は、相を離れたる菩提心なり。當に四種の食を以て、常に法に依りて食せば、三業の祕密に住し、一切は皆成就す。此の四を常に食すと雖も、癡想を生ずること勿れ。此の四の非法を離るれば、當に飲食の性を了し、諸佛の敬愛、及び菩薩の智慧を得。諸の相應行等は、速かに佛性を成就し、欲界中の自在、及び諸のあらゆる作は、威光色力を得て、一切は皆敬愛す。世に大名稱ありて、視る者は光照せらるゝ如し。一切の佛の祕密は、
　諸の菩薩の最上なり。

此れを一切祕密の大明行金剛三業の眞實法門と名づく。

【一六二】左拏迦 caṇaka.

是の如き大明は、當に五種の無礙の功德を以て、五種の行を具して諸佛を供養す。是の如く供養せば速かに諸佛の自性を成就するを得。卽ち能く一切如來の金剛三業に安住す。是れ持金剛者なり。

爾の時金剛手菩薩摩訶薩大執金剛は、一切如來が各大明を說くに隨喜し、亦自ら眞言行門に安住せり。身語心の三業に悉く靜かに住し、廣大成就法門を照達せり。心は無我に住し、大歡喜を生じ、身語の二業は諸の有相を離る。是の如き三業の相應は、猶ほ虛空平等に安住せるが如し。身語心業の自性は皆無所得なりと了達す。是に由りて眞言行相と、自性相應とを得、智あらずして覺する所、心あらずして觀ずる所は、遠く有爲の諸行造作を離れて、彼の身語心の相は彼の菩提の自性と相應す。是の如き大明と儀軌とを宣說す。

時に金剛手尊は、諸佛の光明に住し、諸佛の一切智を、最上觀想と說く。當に虛空中に住して、[一五四]月曼拏羅を想へ、諸佛の影像は現じ、微妙の行と相應す。應に觀想すること是の如し。

[一五五]唵字

當に一心に住して、芥子は空に滿つと想へ。諸の智句と、祕密智の儀軌とを觀想せよ。

復た虛空中に住して、[一五六]日曼拏羅を想へ、諸佛の影像は現じ、一切句は圓滿せり。

應に觀想すること是の如し。

[一五七]吽字

復た虛空中に住して、[一五八]輪曼拏羅を想へ、佛眼の相を出現し、金剛蓮華を想へ。復た虛空中に住して、[一五九]寶曼拏羅を想へ、衆寶の相を出現すと、圓滿に觀想せよ。復た空觀に住して、[一六〇]蓮華曼拏羅を想へ、金剛相と相應し、蓮華金剛を想へ。復た空觀に住して、[一六一]光明曼拏羅を想へ、諸佛の善相を現じ、最勝の光は圍遶せり。復た青蓮の相を現ず。

【一五四】月曼拏羅。梵 candra-maṇḍala 自性本清淨にして、自他の二行相應せる曼拏羅を云ふ。
【一五五】oṃ
【一五六】日曼拏羅。sūrya maṇḍala 智慧清淨にして莊嚴し、金剛喩定より生じ、解脫の光明は平等に光る曼拏羅に名づく。
【一五七】hūṃ
【一五八】輪曼拏羅。cakra maṇḍala 貪は本も清淨にして、諸の煩惱怨悉く除斷し語を表示せる曼荼羅に名づく。
【一五九】寶曼拏羅。ratna-maṇḍala.
【一六〇】蓮華曼拏羅。padma-maṇḍala.
【一六一】光明曼拏羅。raśmi-maṇḍala.

[一四三] 身語心加持分第六

爾の時世尊よ、阿閦金剛如來は、復た一切如來の身語心祕密三摩地に入る。定より出でて、加持心の大明を宣說して曰はく。

[一四四] 唵引一句 薩哩嚩二合怛他引誐多唧多嚩日囉二合 莎婆引嚩引怛摩二合酤放引三

又復た世尊よ、大毘盧遮那金剛如來は、彼の定より出でて、復た [一四五] 離塵金剛三摩地に入る。是れより出でて、加持身の大明を宣說して曰はく。

[一四六] 唵引一句 薩哩嚩二合怛他引誐多迦引野嚩日囉二合 莎婆引嚩引怛摩二合酤放引三

又復た世尊よ、無量壽金剛如來は、即ち [一四七] 無二平等金剛三摩地に入る。定より出でて、加持語の大明を宣說して曰はく。

[一四八] 唵引一句 薩哩嚩二合怛他引誐多嚩引吾嚩二合日囉二合 莎婆引嚩引怛摩二合酤放引三

此の [一四九] 三金剛は、是れ諸の如來の大祕密句なり。諸の觀想と分別を離れて、一切眞言行相に安住せり。

又復た、世尊よ、寶生金剛如來は卽ち [一五〇] 智燈金剛三摩地に入る。定より出でて、此の大明を說いて曰はく。

[一五一] 唵引一句 薩哩嚩二合怛他引誐多引耨囉二合誐拏嚩日郎二合 莎婆引嚩引怛摩二合酤放引三

又復た、世尊よ、不空成就金剛如來は、即ち不空金剛三摩地に入る。定より出でて、此の供養の諸佛の大明を說いて曰はく。

[一五二] 唵引一句 薩哩嚩二合怛他引誐多布惹引嚩日囉二合 [一五三] 莎婆引嚩引怛摩二合酤放引三

【一四三】梵 kāya-vāk-cittādhiṣṭhāna-paṭalaḥ, 藏 sku-daṅ-gsuṅ daṅ thugs-byin-gyis rlob-pa.
【一四四】oṃ sarva-tathāgata-citta vajra svabhāvātma ko haṃ.
【一四五】離塵金剛三摩地梵 °virajapada vajra samādhi.
【一四六】oṃ sarva tathāgata kāya vajra svabhāvātma ko haṃ.
【一四七】無二平等金剛三摩地° samatādvaya vajra-samādhi.
【一四八】oṃ sarva tathāgata vāg-vajra svabhāvātma ko haṃ.
【一四九】三金剛°身語心を云ふ。
【一五〇】智燈金剛三摩地 jñāna-pradīpa vajra-samādhi.
【一五一】oṃ sarva tathāgatānurāgaṇa vajra svabhāvātma ko haṃ.
【一五二】oṃ sarva tathāgata pūja vajrasvabhātma ko haṃ.
【一五三】svabhāvātma ko haṃ.

是の時會中に菩薩摩訶薩あり。[一四〇]除蓋障と名づく。佛世尊の是の法を說きたまへるを聞きて、未だ曾て有らざりしかと怪み、卽ち佛に白して言はく。云何にして、諸の如來は大衆中に此の義を宣說せりや。我れ昔より未だ聞かず、法となすべきか、非法の語となすべきか、願くは佛世尊よ、我がために開曉したまへ。と、

爾の時世尊大毘盧遮那金剛如來は、卽ち除蓋障菩薩に告げて言はく、止めよ、止めよ、善男子よ、是の說を作すなかれ、當に所說は卽ち諸の法性なり、一切如來の眞實淨智なり、諸法精妙の勝義出生なりと知るべし。是の如きを[一四一]菩提の行句と名づく。

又復た、所有不可數、不可計の一切の佛刹中の[一四二]須彌山の量に等しき、塵數の諸菩薩衆は、佛が是の法を說けるを聞きて、皆大いに驚怖し、迷悶して地に躄り、各是の念を作す。唯だ願くは世尊よ、哀みて救護を加へ、我等が輩をして、本座に還らしめよ。

爾の時世尊大毘盧遮那金剛如來は、其の念を知りて、卽ち一切如來の金剛三業虛空平等無二金剛三摩地に入り、其の定中に於て、金剛三業を以て、神通加持をせば、卽時に諸の菩薩衆は、咸醒悟を得て、諸の怖畏を離れて、能く各々は復た本座に還りぬ。

是の時、一切如來は是の事を見て、皆大いに歡喜して希有の心を生じ、咸な清淨深妙の法音を以て、是の伽陀を說いて曰はく。

大いなる哉最上の法、　大いなる哉法義生、　法は無我にして眞實なり。　金剛王に歸命す。

身語心は虛空と平等に住し、　疑惑を離れて無礙なり。　金剛身に歸命す。　如來の心は最上にして、　三際道は隨轉し、　眞如界は相を離る、　如虛空に歸命す。　虛空の身は眞實にして、　虛空の語を善く轉じ、　虛空の法は清淨なり、　無所喩に歸命す。

【一四〇】除蓋障菩薩　梵°sarva-nivaraṇa-viṣkaṃbhin. 除一切蓋障菩薩、或は除一切惡趣菩薩とも云ふ。此の菩薩は大慈悲拔苦除障門に住し、正に菩提心中の如意寶珠を以て一切衆生に無畏を施し其の所願を滿す。

【一四一】菩提の行句　梵°bodhi-caryā-pada.

【一四二】須彌山°sumeru 妙高山と譯す。印度世界觀の一小世界の中心をなす山の名。

供養に住せば、身相は無礙なり。若し心供養に住せば、心性は平等なりと了せよ。智者は善く安住して、無量の功德を具す。諸佛の吉祥なる句は、虛空界の莊嚴なり。世間の供養の、[134]香華燈塗等の若きは、聖賢の歡喜と、諸の菩薩の敬愛を得。

[135]一切明句行分第五

爾の時世尊よ、大毘盧遮那金剛如來は、金剛三業大自在主、大執金剛王となり、一切處に最勝自在にして、善く諸法の一切行義、及び諸の行相を說き、大衆の中に於て是の如き言を作す。諸の大士よ、當に彼の一切法は諸の疑惑を離れたりと知るべし。眞實に若しは[136]貪、若しは[137]瞋、及び[138]癡の法等は此の三平等より出生し、此れ法性にして、是れ卽ち無上の大菩提性なりと了せよ。是の如く了知せば一切の成就を得、假使へ世間の[139]旃陀羅の輩、及び諸の惡類も、常に起ちて諸の衆生心を殺害す。若し能く淨なる信解を以て祕密を修する者おや。是の如き人等は皆成就を得て、能く大乘の祕密に安住す。

復次に若し無間の業を造する諸の衆生の類ありて、廣く諸の惡極の重罪を造るも、能く淨信を起して、祕密の法を修せば、亦一切の最上の成就を得。若し衆生ありて、殺生の業を造し、不與取を行じ、諸の邪染を受けて大妄語を起し、是の如き等の諸の惡業を造する者も、若し能く淨信解を起して祕密法を修せば、是の如き等の人も亦成就を得。何を以ての故に、諸の大士よ、當に祕密法の中の、若しは染、若しは淨、若しは怨、若しは親は皆悉く平等なりと知るべし。若し了知せる者は乃ち能く最上の大祕密法に安住す。是れ卽ち諸佛の自性を成就せるものなり。是の如き故を以て一切法に於て疑惑を離るゝを得。唯だ阿闍梨を毀謗する者を除く。是の如き等の人は、設使へ祕密法を勸求するも、成就し能はざればなり。

【一二九】青迹。多羅菩薩　梵 sa-maya-tāra.
【一三〇】沒訥識羅 'pudgala? 金剛大忿怒焰鬘得迦明王。
【一三一】寶杖。金剛大忿怒鉢羅研得迦明王。
【一三二】蓮華。金剛大忿怒鉢納鬘得迦明王。
【一三三】金剛杵。金剛大忿怒尾覲難得迦明王。
【一三四】香華燈塗若し金剛頂經等ならば、金剛香菩薩、金剛華菩薩、金剛燈菩薩、金剛塗香菩薩の外の四供に當る。
【一三五】梵 samanta caryāgra pañcamaḥ paṭalaḥ. 藏 kun-tu-spyod paḥi mchog.
【一三六】貪、若し諸佛は貪心を離れたりと了せば、菩提心は貪性より出す。復た普賢の行を出生す、貪心は卽ち是れ佛如來なり。
【一三七】瞋。若し諸佛の調伏心を了せば、微妙智は瞋性より出づ。復た一切智を出生す。瞋心卽ち是れ佛如來なり。
【一三八】癡。若し自心に於て能く覺了せば、光明は彼の癡性より出づ、復た能く一切佛を出生す、癡心卽ち是れ佛如來なり(一切祕密最上名義大教王儀軌)。
【一三九】旃陀羅。caṇḍāla 卑族な

[125]一切如來心曼拏羅分第四

爾の時、佛世尊よ、大毘盧遮那は、復た彈指して、一切の諸の如來を句召す。是の時諸の如來は、又復た皆雲集し、毘盧尊を勸請す。曼拏羅法を說く、諸の如來は寂靜にして、諸の如來は最上法無我を出生す。願くは曼拏羅を說きたまへ。寂靜の法は、正智行清淨を出生す。普賢は最上の語をもて、願くは曼拏羅を說きたまへと。諸の[126]有情の大心は、自性は淨にして無垢なり、普賢は最上の心をもて、願くは曼拏羅を說きたまへと。爾の時[127]金剛手は、三界の最勝尊にして、救度三界者なり。菩薩摩訶薩は、諸の如來の大心もて、諸の如來の、諸の曼拏羅の性の出生を、次第に宣說す。我今最上の大心曼拏羅を說く、心は金剛三業曼拏羅に安住し、信解心を[128]線と爲す、分量の所作を稱へば、智慧の絣量を以てす。三業の觀想に住し、十二時量に、大心曼拏羅を作れ。四方と四隅の四門、四樓閣と、中心に大輪を置け、圓滿にして缺くる所なし、[129]各本尊は印に住し、所作は儀軌の如し。輪中に[130]金剛を想へ、帝靑の大光を現ず。[131]五鈷の大智杵は、光焰可怖の相なり。東方に[132]大輪を想へ、金剛光は莊嚴せり。南方に[133]大寶を想へ、衆寶の光明を現ず。西方の[134]大蓮華は、蓮華の色光を現ず。北方の[135]大利劍は、熾盛光を出現す。東南隅の[136]佛眼は、靑雲の色光を現ず。西南隅の[137]智杵は、摩摩枳を出生す、西北隅の[138]蓮華は、開敷相を出現す、東北隅の[139]靑蓮は、靑雲の色淨光なり、復次に東門に[140]渡訥識維を想へ。南門に[141]寶杖を想へ。金剛淨焰光なり。西門に[142]蓮華を想へ、熾盛の劍光を現ず。北門は[143]金剛杵、及び金剛瓶等なり。是の如く觀想して、心曼拏羅を成ぜよ。金剛三業を以て、廣大供養をなせ。若し身

【一二五】梵 sarva-tathāgata-citta maṇḍala caturtha paṭalaḥ 藏 de-bshin-gśegs-pa-thams cad kyi thugs kyi dkhil-hkhor.

【一二六】有情。sattva 衆生と同じ。

【一二七】金剛手。vajra-pāṇi 執金剛と云ふに同じ、金剛薩埵の名なり。

【一二八】線。金剛線 藏 rdo-rje-srad-bu.

【一二九】本尊は印に住す。三昧耶曼拏羅を示めす。

【一三〇】金剛。大毘盧遮那如來を標示す。

【一三一】五鈷大智杵。梵 pañca-śula-mahājala. 五鈷金剛杵を云ふ。

【一三二】大輪。阿閦金剛如來を表す。

【一三三】大寶。寶生金剛如來を表す。

【一三四】大蓮華。無量壽金剛如來を表す。

【一三五】大利劍。不空成就金剛如來を表す。

【一三六】佛眼。佛眼菩薩 梵 buddha locana.

【一三七】智杵。摩摩枳明妃 梵 māmakī.

【一三八】蓮華。白衣菩薩 梵 pāṇḍuvāsin.

不空成就の印も(相應行を出生す)。　佛の曼拏羅を想へ、　帝青の大光を現じ、　堅固の三業に住せり。　金剛の大焰を持す。　大惡可怖の相は、　水精の月光を現じ、　髮髻の冠を莊嚴し、　熾盛の大輪を持す。　衆の莊嚴は清淨にして、　紫金色の光を現じ、　佛雲は諸部を照す。　[二一]九鈷の金剛杵を執持すと觀想せよ。　珊瑚の色光は、　金剛焰を嚴飾し、　大寶の光明を持し、　熾盛の雲は普遍せり。　蓮華の色光を現じて、　髮髻の冠を莊嚴す、　熾盛の蓮華を持し、　蓮華金剛を想へ、　此の五種の光明は、　不空堅固の相なり。　善く智慧の劍を持す。　佛の曼拏羅を想へ。

是の伽陀を說きて、復た一切如來の法界自性三摩地に入る。定より出でて、復た金剛三業の加持の大明を說いて曰はく。

[二三]唵引一句　達哩摩二合駄引覩嚩日囉二合　莎婆引嚩引怛摩二合酤引三　欠

是の大明を說きて、復た伽陀を說いて曰はく。

五種の大寶を現ず。　皆[二四]芥子の量の如し。　無比にして復た最上なり、　常住にして相應すと觀ぜよ。　此の寶は廣大住なり、　無住にして、　復た廣大なり。　彼の廣大の寶雲は、　即ち佛の平等光なり。　金剛大輪を現じて、　大寶雲を出現し、　大蓮華藏を持し、　本部は器仗を執る。　復た菩薩の雲を現ず。　廣大無邊際なり。　自在變化にして、　一切は皆無礙なり。　虛空界中に、　月曼荼羅を現ず、　自ら曼荼羅等は、　大輪圓滿すと想へ。　蓮華曼拏羅は、　金剛自在なりと想へ。　寶曼拏羅は自性清淨の寶より生ず。　曼拏羅は、　虛空の相より出生せる、　即ち佛の最上の性なる、　身語心の成就と相應す。　此の堅固出生は、　一切智の相を具す。

【二一】九鈷金剛杵　nava-śū=la-mahā-vajra.

【二二】法界自性三摩地　梵 dharma-dhātu-svā bhāva-sa=mādhi.

【二三】oṃ dharma-dhatu sva=bhāvātma ko kaṃ.

【二四】芥子。(一)梵 rājikā 藏 yuṅs-nag 黑芥子。(二)藏 se=rgapa 藏 yuṅs kar. 白芥子。

するものと名づく。

爾の時菩薩摩訶薩あり。名を[一〇六]慈氏と曰ふ。大會の中にありて、諸の如來が各々自らの三業を以て祕密の法性の明句、及び菩提心の法を説くを聞きて、大歡喜を生ぜり。(その)歡は未だ曾てあらず。即ち衆中に於て是の如き言を作す。

大なる哉一切の佛、　大なる哉祕密の法、　妙法の門、　眞實清淨の義を宣說して、　及び菩提心を説く、　我は歸命し稱歎せり。　無我より出生せる、　一切の佛菩薩は、　已に諸の疑惑を離れ、　無相にして亦無礙にして、　皆菩提心に住せり。　我は歸命し稱歎せり。　普賢の一切の義は、　菩提心より轉じ、　及び彼の一切の行と、　菩提の行とは、　堅固菩提心より生ずる所なり、　我は歸命し稱歎せり、　如來の心の淸淨なり、　是れ即ち菩提心なり、　身語業の堅固なるを、　金剛三業と名づく。　佛菩提の所歸を、　我は歸命し稱歎せり。

[一〇七]金剛莊三摩地分第三

爾の時、世尊よ、大毘盧遮那金剛如來は、復た一切如來の[一〇八]變化大雲莊嚴金剛三摩地に入る。定より出でて、即ち大明を説いて曰はく。

[一〇九]唵引一句　輸孿切身多引倪也二合那嚩日囉二合二　莎婆引嚩引怛摩二合酤欱呼郎切下同三

是の大明を説きて、復た伽陀を説いて曰はく。

[一一〇]虛空界中に、　佛の曼拏羅を想へ、　光明の雲は大に嚴しく、　佛の平等の焰光と、　五種の平等の光とは、　平等圓壇となる。　五欲性の解脱を、　五自在行と名づく。　平等觀想に住して、　佛の影像中にあり。　遍照尊の大印は、　三業と相應して住し、　金剛の身語心は、　大印の觀想に住せり。　阿閦尊の大印は、　相應行を出生し、　寶生の大印、　無量壽の智光、

【一〇六】慈氏 maitreya 彌勒菩薩なり。

【一〇七】梵 vajra-vyūha-nāma-samādhiḥ tṛtīyaḥ paṭalaḥ. 藏 rdo-rje bkod-pa'i-tiṅ-ṅe-ḥdsin.

【一〇八】變化大雲莊嚴金剛三摩地 spharaṇa-megha-vyūha-samādhi.

【一〇九】oṃ śūnyatā jñāna-vajra svabhātma ko-haṃ.

【一一〇】一切祕密最上名義大敎王儀軌に「五色和合若相應。五曼拏羅爲嚴飾。五眼觀現諸惡。五色即是五如來。五佛平等法相應。地分五色莊嚴相。當於五曼拏羅中。想五佛依方位。五種功德悉周圓。五色即五三摩地。其壇中心地淸淨。月愛摩尼光妙色。東方地相大靑色。南方黃如儀軌。西方赤色隨所應。北方曼爾瑟吒色。諸處皆用尾提相、唯門中道勿應用。壇中毘盧遮那、想現水精月光相」とあり。

るなり。彼を了達するが故に、即ち無所得なり。此れ即ち名づけて一切如來が安住せる堅固身語心業と爲す。

爾の時、世尊よ、大毘盧遮那金剛如來は即ち一切如來の[九三]現前金剛三摩地に入る。定より出でて、是の如き言を作す。當に菩提心とは一切の性を離れたりと知るべし。若しは[九四]蘊、若しは[九五]處、若しは[九六]界は取もなく、捨もなし。諸法は無我にして、平等出生なり。而して彼の心法は本より不生なり、是の故に當に知るべし。我法の自性は即ち彼の空性たり、是の如く了する者を乃ち堅固に菩提心に住するものと名づく。

又復た、世尊よ、阿閦金剛如來は即ち一切如來の[九七]無盡金剛三摩地に入る。定より出でて、是の如き言を作す。菩提心とは無法、無法性なり、無生にして亦無我なり。此の性は虛空の如く諸の分別の相を離れたり。是の如く了する者を堅固に菩提心に住するものと名づく。

又復た、世尊よ、寶生金剛如來は即ち一切如來の[九八]法無我金剛三摩地に入る。定より出でて、是の如き言を作す。菩提心とは即ち諸法無性にして諸法の相を離れ、[九九]法無我より實際に生ずる所のものなり。是の如く了する者を、乃ち堅固に菩提心に住するものと名づく。

又復た、世尊よ、[一〇〇]無量壽金剛如來は即ち一切如來の[一〇一]熾盛焰光金剛三摩地に入る。定より出でて、是の如き言を作す。菩根心とは即ち[一〇二]無生法なり。性に非らず、無性に非らず。虛空の句の如くに相應して住せり。一切法に於ても亦是の如く行ず。是の如く了する者を乃ち堅固に菩提心に住するものと名づく。

又復た、世尊よ、[一〇三]不空成就金剛如來は即ち一切如來の[一〇四]現前住金剛三摩地に入る。定より出でて、是の如き言をなす。菩提心とは、是れ即ち自性淨光明法なり。彼は菩提に非らず。有相にして、亦現前に非らずして、[一〇五]三昧として證すべし。是の如く了する者を乃ち堅固に菩提心に住

【九四】蘊 sukhanda. 色、受、想、行、識の五蘊。
【九五】處、十二處即ち眼處、色處、耳處、聲處、鼻處、香處、舌處、味處、身處、觸處、意處、法處、
【九六】界。十八界、即ち、眼界、色界、眼識界、耳界、聲界、耳識界、鼻界、香界、鼻識界、舌界、味界、舌識界、身界、觸界、身識界、意界、法界、意識界、（大乘五蘊論）
【九七】無盡金剛三摩地 梵 akṣaya-vajra-samādhi.
【九八】法無我金剛三摩地 梵 nairātmya-samādhi.
【九九】法無我、諸法は因緣生にして實の自性なしと達するを云ふ。
【一〇〇】無量壽金剛 amitāyur-vajra. 藏 mtse-dpag-med rdo-rje.
【一〇一】熾盛焰光金剛三摩地 jñānāroiḥ jñānādhi-pradipa-vajra-samādhi.
【一〇二】無生法。眞如の理、涅槃の體を云ふ。
【一〇三】不空成就金剛 amogha-siddhi-vajra 梵 don-hgrub-rdo-rje.
【一〇四】現前住金剛三摩地 藏 abhibhavana-vajra-samādhi.
【一〇五】三昧 梵 samaya.

王を出現し、北門に坐す。
是の如き等の大忿怒明王は、咸各一切如來の身語心の[八七]大喜三昧耶の大曼拏羅中に安住す。

[八八]菩提心分第二

爾の時一切如來は、金剛三業の大供養を作すを以て、毘盧遮那如來を供養す、是の供養を作し已りて咸な各是の伽陀を說いて曰はく

我は各精妙の法なる最上金剛身語心を說くを樂ひ、　及び無上の大菩提なる一切如來の祕密義を說く。

是の時毘盧遮那金剛如來は金剛三業の大祕密主となりて、諸の如來の是の伽陀を說くを聞きて、默然として住せり。

爾の時、會中に諸の菩薩ありて咸各內心に是の相を思惟せるを世尊は知りて、大會中に是の如き說を作せり。若しくは身、若しくは心の生ずる所の相あらば、是れを住相と爲す。身心が相を離るれば、當に何れの所にか住せん。語言の分別も亦復た是の如しと。時に諸の菩薩は是の法を聞きて、皆悉く一切如來の[八九]堅固三業に安住し、一切の相を離れて虛空の如し。大歡喜を生じて咸是の言を作す。

大なる哉[九〇]普賢の大法界は、堅固無動の身語心なり。　無生の相を應に生ずるところに名くべし、　一切の生法も皆是の如し。と、

是の時一切如來は各各堅固の三業に安住して、卽ち一切如來の[九一]現前正覺金剛三摩地に入る。定より出でて咸是の言を作す。[九二]菩提心とは當に無性と知るべし。性は無性にあらず、性も亦性にあらず、若し此の性を了せば卽ち無性も了すべし。是の如き了とは、卽ち能く彼の無上の性を了達す

「四菩薩の四種の大明は祕密の身語心業を總攝し諸の供養中、是れ眞の供養なり。卽ち是れ金剛界中の大愛樂者なり」と。
【七九】遍照金剛三摩地　梵 mahā-vairocana samādhi.
【八〇】yāmanta kṛt.
【八一】現前正覺金剛三摩地　梵 abhisaṃbodhi-vajra-samādhi.
【八二】prajña dhṛk.
【八三】法寶所作三摩地　梵 dharmavaśaṃkari samādhi
【八四】padmānta kṛt.
【八五】身語心金剛三摩地　梵 kāya-vāk-citta-vajra-samādhi.
【八六】vighnānta kṛt
【八七】大喜三昧耶又極喜三昧耶とも云ふ。金剛薩埵の三昧を云ふ。
【八八】梵 bodhicittan nāma dvitīyaḥ paṭalaḥ 藏 byaṅ-chub-kyi-sems.
【八九】堅固三業、佛の身語心を云ふ。
【九〇】普賢。金剛薩埵の因位を云ふ。
【九一】現前正覺金剛三摩地梵 abhisaṃbodhi-a,rasamādhi.
【九二】菩提心梵 bodhi-citta.
【九三】現前金剛三摩地梵 abhi-samaya-vajra-samādhi.

の三業を以て一切如來の大曼拏羅中に安住して、金剛大忿怒焰鬘得迦明王の根本心の大明を宣說して曰はく。

[八〇] 唵引一句 野鬘引得訖哩三合吽半音二

此の大明を說く時、彼の佛は、世尊よ、一切如來の身語心の一切如來の大明根本より大忿怒明王を出現し、東門に坐す。

復た、一切如來の[八一]現前正覺金剛三摩地に入る。定より出でて、自らの三業を以て一切如來の大曼荼羅中に安住して、金剛大忿怒鉢囉研得迦明王の根本心の大明を宣說して曰はく。

[八二] 唵引一句 鉢囉二合研得訖哩三合吽半音二

此の大明を說く時、彼の佛は、世尊よ、一切如來の身語心の金剛三昧の大明根本より大忿怒明王を出現し、南門に坐す。

復た一切如來の[八三]法寶所作三摩地に入る。定より出で已りて、自らの三業を以て一切如來の大曼拏羅中に安住して、金剛大忿怒鉢訥鬘得迦明王の根本心の大明を宣說して曰はく。

[八四] 唵引一句 鉢訥鬘引得訖哩三合吽半音二

此の大明を說く時、彼の佛は、世尊よ、一切如來の身語心の一切如來の語業行より大忿怒明王を出現し、西門に坐す。

復た一切如來の[八五]身語心金剛三摩地に入る。定より出で已りて、自らの三業を以て一切如來の身語心曼拏羅中に安住して、金剛大忿怒尾覲難得迦明王の根本心の大明を宣說して曰はく。

[八六] 唵引尾覲難二合得訖哩三合吽半音二

此の大明を說く時、彼の佛は、世尊よ、一切如來の身語心の一切如來三業行の和合より大忿怒明

【六〇】 一切祕密最上名義大敎王經に「壇の中の毘盧遮那佛は、水精月光の相なりと想へ、彼は一切の佛を同一に攝す、此れ卽ち無畏眼如來なり」と。

【六一】 金剛部―阿閦如來

【六二】 寶部―寶生如來

【六三】 蓮華部―無量壽如來

【六四】 三昧部―不空成就如來

【六五】 佛部―毘盧遮那如來

【六六】 持金剛調伏三昧三摩地 vajra dharānurāgaṇa-sagaṇa-samaya-samādhi.

【六七】 dvesa ratih.

【六八】 女人の色相、佛眼菩薩の色相を出現するなり。

【六九】 調伏金剛三摩地 anurāgaṇa-vajra samādhi.

【七〇】 moha-ratih.

【七一】 女人の色相、摩摩枳塗尊の色相を出現するなり。

【七二】 持蓮華調伏金剛三摩地 梵 rāgadharānu rāgaṇa-vajra samādhi.

【七三】 rāga ratih.

【七四】 女人の色相、白衣菩薩の色相を出現せるなり。

【七五】 語言三昧金剛三摩地 梵 kāya-vāk-citta visanvādana-vajra-samādhi.

【七六】 vajra rati.

【七七】 女人の色相、多羅菩薩の色相を出現するなり。

【七八】 是の四の持明菩薩云云一切祕密最上名義大敎王經に

此の大明を說く時、彼の佛は、世尊よ、一切如來の身語心より持明菩薩を出現し、[六八]女人の色相に住して東南隅に坐す。

又復た、世尊よ、毘盧遮那金剛如來は卽ち一切如來の[六九]調伏金剛三摩地に入る。定より出でて、自らの三業を以て一切如來部中の一切の上首の明妃の根本心の大明を宣說して曰はく。

[七〇]唵引一句 謨引賀囉帝二

此の大明を說く時、彼の佛は、世尊よ、一切如來の身語心より、持明菩薩を出現し、[七一]女人の色相に住して西南隅に坐す。

又復た、世尊よ、無量壽金剛如來は卽ち一切如來の[七二]持蓮華調伏金剛三摩地に入る。定より出でて自らの三業を以て一切如來の蓮華部中の一切の上首の明妃の根本心の大明を宣說して曰はく。

[七三]唵引一句 囉引哦囉帝二

此の大明を說く時、彼佛は、世尊よ、一切如來の身語心より持明菩薩を出現し、[七四]女人の色相に住して、西北隅に坐す。

又復た、世尊よ、不空成就金剛如來は卽ち一切如來の[七五]語言三昧金剛三摩地に入る。定より出でて、自らの三業を以て一切如來の三昧の句召部中の上首の明妃の根本心の大明を宣說して曰はく。

[七六]唵引一句 嚩日囉二合囉帝

此の大明を說く時、彼の佛は、世尊よ、一切如來の身語心より持明菩薩を出現し、[七七]女人の色相に住して、東北隅に坐す。

[七八]是の四の持明菩薩は一一皆一切如來の明妃三昧の正智より出生す。

爾の時、世尊よ、大毘盧遮那金剛如來は、復た[七九]遍照金剛三摩地に入る。定より出でて、自ら

【四九】 ratna-dhṛk.

【五〇】 一切祕密最上名義大敎王經に「南方に寶生如來を想へ、閻浮金光相を出現す諸佛は普ねく攝して衆生を利す。此れ卽ち光明眼如來なり」と。

【五一】 大蓮華敎出生金剛三摩地 梵 mahā-rāga-sambhava-vajra samādhi.

【五二】 一切祕密最上名義大敎王經に「西方に無量壽を觀想せよ 蓮華色の大光を出現す、法智より大無畏を生す、此れ卽ち蓮華眼如來なり」と。

【五三】 ālolik.

【五四】 觀自在大明主 梵 lokeśvara-mahā-vidyā. 觀自在菩薩は無量壽如來の因位の尊なり。

【五五】 不空三昧金剛三摩地 藏 grub-pa gdon mi-za-baḥi-mchog-dam-chig ḥbyuṅ-baḥi rdo-rje shes-bya-baḥi tiṅṅe ḥjin. 梵 amogha-samaya sambhava-vajra-samādhi.

【五六】 prajña dhṛk,

【五七】 一切祕密最上名義大敎王經に「北方不空成就佛は、摩竭色光の相を出現す。普ねく衆生を攝し亦同生なり、此れ卽ち慈愛眼如來なり」と。

【五八】 三昧出生金剛三摩地 梵 samaya-sambhava samādhi.

【五九】 jina-jik.

色相を現じ、[五四]觀自在大明主の大印と相應し、最上の一切如來の金剛三業に安住す、此の持明人は西方に坐す、是れを蓮華部の主となす。

又復た、世尊よ、不空成就如來は卽ち一切如來[五五]不空三昧金剛三摩地に入る。定より出でて自らの三業を以て三昧句召部の最上精妙自根本心の大明を宣說して曰はく。

[五六]唵引一句鉢囉二合倪也引二合特哩二合倶半音二

此の大明を說く時、彼の佛は、世尊よ、一切如來の身語心中より持明人を出現し、白黑綠の三種の色相を現じ、不空金剛の大印と相應し、一切如來の金剛三業に安住す。此の持明人は北方に坐す。是れを[五七]三昧部の主と名づく。

又復た、世尊よ、大毘盧遮那金剛如來は卽ち一切如來の[五八]三昧出生金剛三摩地に入る。定より出で已り自らの三業を以て佛部の最上精妙自根本心の大明を宣說して曰はく、

[五九]唵引一句嚩那嚩倶半音二

此の大明を說く時、彼の佛は、世尊よ、一切如來の身語心中より、持明人を出現し、黑白赤の三種の色相を現じ、大毘盧遮那の大印と相應し、最上根本の一切如來の金剛三業に安住す。此の時持明人は中方に坐す。是れを[六〇]佛部の主と名づく。

是の如く[六一]金剛部、[六二]寶部、[六三]蓮華部、[六四]三昧部、[六五]佛部部等の五部は甚深祕密の法門なり。是れ卽ち五種祕密解脫の成就なり。

爾の時、世尊よ、阿閦如來は復た一切如來の身語心の[六六]持金剛調伏三昧三摩地に入る。定より出でて自らの身語心を以て一切の金剛部中の一切の上首の明妃の根本心の大明を宣說して曰はく。

[六七]唵引一句訥尾引二合沙囉帝二

---

dan-yid-bde-ba. 男女の交會の樂を煩惱卽菩提の理趣に喩へたるなり。

【四一】大持明人 梵 mahā-vidyā-puruṣa 藏 rig-pa-chen-poḥi skyes bu.

【四二】一切如來祕密集會金剛妙眞實法門。藏 bdus-pa gsaṅ ba las byuṅ ba / de-bshin gśegs-pa kun-gyi gsaṅ / rdo-rje sñiṅ po ḥdus-pa-yi / de-ñid bcom ldan-ḥdas du gsol /

【四三】最極の妙樂。藏 bde-ba dam-yid-bde-ba myoṅ-ba. 如來の法味。金剛蓮華合會の理趣を云ふ。

【四四】大智光明阿閦金剛三摩地 梵 jñāna-pradīpa-vajra samādhi.

【四五】最上精妙自根本心大明 藏 she-sñan-gi rigs-kyi sñags-mchog sñiṅ-po.

【四六】vajra dhṛk.

【四七】阿閦如來の大印 梵 akṣobhya mahā mudra 藏 bskyod pa-ḥi phyag rgya chen-po.

【四八】一切祕密最上名義大敎王經に「東方に阿閦佛を觀想せよ、帝靑の光明相なり、一切の金剛は同一に稱す。此れ卽ち金剛眼如來なり」と。

得て、悉く祕密の眞實廣大法門を了達せしめ、諸の疑念を斷ず、是の如き功德は最勝無比なり。所有一切如來の衆會は、一切如來の灌頂の金剛身語心の祕密の三業なり。一切如來の加持の所作は、一切如來の金剛三昧より出生せる正句、一切如來の[四三]最極の妙樂、無上の勝義乃至一切如來の智、現前智、因果等の法なり。隨自の定說は今正に是の時なり。爾の時世尊阿閦金剛如來は、勸請を受け已つて、卽ち一切如來の[四四]大智光明阿閦金剛三摩地に入り、定より出でて、金剛三業に住し、金剛部、[四五]最上精妙自根本心大明を曰はく。

[四六]唵引一 嚩日羅二合特哩二合倶半音二 句

此の大明を說く時彼の佛世尊は、一切如來の身語心中より、持明人を出現し、黑白赤の三種の色相を現し、[四七]阿閦如來の大印と相應し、最上根本一切如來の金剛三業に安住し、此の持明人の東方に坐す、是を[四八]金剛部主と名づく。

又復た世尊よ、寶生如來は卽ち一切如來の寶生金剛吉祥三摩地に入る。定より出でて、自らの三業を以て宣して寶部の精妙自根本心の大明を說いて曰はく。

[四九]唵引一 囉怛那二合特哩二合倶半音二 句

此の大明を說く時、彼の佛は、世尊、一切如來の身語心中より持明人を出現し、黃白黑の三種の色相を現じ、寶生の大印と聚集相應し。虛空界に入つて虛空界の一切如來の金剛三業に安住せり。此の持明人は南方に坐す。是れを[五〇]寶部の主と名づく。

又復た世尊よ、無量壽は卽ち[五一]大蓮華敎出生金剛三摩地に入る、定より出でて、自の三業を以て[五二]蓮華部の最上の精妙の自根本心の大明を宣說して曰はく。

[五三]唵引一 阿盧力倶半音二 句

此の大明を說く時、彼の佛は、世尊よ、一切如來の身語心中より持明人を出現し、赤白黑の三種の

---

yod.

【二六】佛眼 梵 buddha-locanā 藏 sans-rgyas-spyan.

【二七】摩摩枳 梵 māmakī.

【二八】白衣 梵 pāṇḍuvāsin 藏 gos-dkar-mo.

【二九】多羅 梵 samaya-tārā 藏 dam-tsig-sgrol-ma.

【三〇】色自性 梵 rūpatva bhāva 藏 gzugs-kyi-ṅo-bo.

【三一】聲自性 梵 śabdatva bhāva 藏 sgrahi-ṅo-bo.

【三二】香自性 梵 gandhatva-bhāva 藏 drihi-ṅo-bo.

【三三】味自性 梵 rasatva bhāva 藏 rohi-ṅo-bo.

【三四】觸自性 梵 sparśatva-bhāva 藏 reg-gi-ṅo-bo.

【三五】淸淨境界 藏 rdo-rje btsun-mohi-bhaga.（金剛明妃の根門と譯す）。

【三六】大三昧耶の大拏羅。藏 dam-tsig-chen-pohi dkyil-hkhor 佛の三昧形を以て表示せる曼拏羅を云ふ。

【三七】金剛菩提心 梵 bodhi-citta-vajra.

【三八】金剛三摩地 藏 zil-gyis-gnon-ba rdo-rje.

【三九】金剛薩埵 梵 vajra-sattva 藏 rdo-rje-sems-dpah 煩惱卽菩提の理趣を表し、この理趣に若し行人達すれば卽ち諸尊の果に契達するなり。

【四〇】最勝妙藥。藏 ble-ba-

爾の時世尊阿閦金剛如來は、諸の如來の[三五]清淨境界を周遍せる十方の廣大圓滿の[三六]大三昧耶の大曼拏羅中に於て、加持願力を以ての故に、理の如く安住せり。自性の種種の色像を觀達し、出生變化せる無邊の佛雲は、四方に周密して間隙する所なし。中に於て本尊の曼拏羅を出現す。廣大莊嚴にして諸佛の中に住せり。是の如く出現して即ち一切如來の身語心の金剛三業の一切如來の大曼拏羅中に、理の如く安住せり。是の時、世尊大毘盧遮那金剛如來、阿閦金剛如來、寶生金剛如來、無量壽金剛如來、不空成就金剛如來の是の諸如來は、皆悉く[三七]金剛菩提心に安住せり、菩提心に住して即ち一切如來の現前に入つて、[三八]金剛三摩地に安住せり、又復た一切如來は吉祥清淨の大金剛地、乃至盡虛空界に安住せり、一切衆生は一切皆[三九]金剛薩埵を得て加持となり、復た一切如來の[四〇]最勝妙樂を得。

爾の時世尊大毘盧遮那金剛如來は、一切如來の身語心金剛三業の所生の三摩地より出でて、即ち[四一]大持明人を現じ、一切如來の大明の加持をもて安住するを得、乃至普遍無邊にして悉く此の持明人を加持す。佛世尊は菩提心より、其の三面を出現して諸佛の前に住せり、時に諸の如來は一一皆現ず、是の時世尊阿閦金剛如來等の一切如來は、大毘盧遮那金剛如來の心の三摩地より出で已つて、各是の言をなす。

大なる哉一切の佛は、　悉く菩提心より轉じて　諸の如來の祕密の　勝無礙に安住せり。

又復た世尊大毘盧遮那金剛如來は彈指して[四二]一切如來を召集せり。時に諸の如來は即時に眞實の三昧を出現し、諸の寶雲、雨寶の供具と化して、世尊大毘盧遮那金剛如來を供養せり。是の供養を作し已つて頂禮恭敬し、咸な是の言を作す。世尊よ、我等は皆自ら一切如來祕密集會金剛妙直實法門を宣說せられんことに隨はんと欲す。是の時世尊大毘盧遮那金剛如來即ち讃じて是の言をなす。善い哉善い哉諸佛世尊、善作善說是れ大希有たり、所有一切の祕密行を修する諸の菩薩衆は、未曾有を

藏 me-rdo-rje.

【一三】金剛風 梵 vāyu vajra 藏 rlun-rdo-rje.

【一四】金剛虛空 梵 ākāśa-vajra 藏 nam-khaḥ rdo-rje.

【一五】金剛色 梵 rūpa-vajra 藏 gzugs-rdo-rje.

【一六】金剛聲 梵 śabda-vajra 藏 sgra-rdo-rje.

【一七】金剛香 梵 gandha-vajra 藏 dri-rdo-rje.

【一八】金剛味 梵 rasa-vajra 藏 ro-rdo-rje.

【一九】金剛觸 梵 sparśa-vajra 藏 reg-bya-rdo-rje.

【二〇】金剛法界自性 梵 dharma-dhātu-vajra藏chos-kyi-dbyiṅs kyi ṅo-bo-ñid-rdo-rje.

【二一】毘盧遮那金剛 梵 vairocana vajra藏rdo-rje-rnam-par-snaṅ-mdsad.

【二二】阿閦金剛 梵 akṣobhya-vajra 藏 rdo-rje-mi bskyod-pa.

【二三】寶生金剛 梵 ratna ketu-vajra藏rdo-rje-rin-chen-dpal. 又は rdo-rje-rin-chen-tog.

【二四】無量壽金剛 梵 amita-vajra 藏 rdo-rje ḥod-dpag-tu-med-pa.

【二五】不空成就金剛 梵 amogha-vajra 藏 rdo-rje gdon-mi-za-pa. 又は rdo-rje-don-

佛説一切如來金剛三業最上祕密大教王經[1]

西天譯經三藏朝奉大夫試鴻臚鄕傳法大師施護奉詔譯

卷の第一

安住一切如來三摩地大曼拏羅第一[2]

是の如く我れ聞きき、一時佛は一切如來の神通加持と一切如來の[3]金剛三業と一切如來の正智出生の變化清淨境界に住せり。不可數不可計の一切佛刹須彌山の量と等しき、塵數の諸大菩薩衆と倶なりき。其の名を[4]金剛三昧菩薩、[5]金剛身菩薩、[6]金剛語菩薩、[7]金剛心菩薩、[8]金剛定菩薩、[9]金剛最勝菩薩、[10]金剛地菩薩、[11]金剛水菩薩、[12]金剛火菩薩、[13]金剛風菩薩、[14]金剛虛空菩薩、[15]金剛色菩薩、[16]金剛聲菩薩、[17]金剛香菩薩、[18]金剛味菩薩、[19]金剛觸菩薩、[20]金剛法界自性菩薩、是の如き等の菩薩摩訶薩を上首となす。是の時、等虛空界の一切如來あり。所謂[21]大毘盧遮那金剛如來、[22]阿閦金剛如來、[23]寶生金剛如來、[24]無量壽金剛如來、[25]不空成就金剛如來、是の如き等の一切如來なり。譬へば胡麻が、虛空に遍滿して間隙なきが如く、虛空中に一一出現せり。爾の時、世尊大毘盧遮那金剛如來は大衆中に於て、一切如來の最勝自在大教三摩地に入る。此の三摩地には一切如來の莊嚴身より入る。是の三摩地中に於て、一切如來の身語心の業を總攝せる、大主宰となる。一切の所求の義に隨順するが故に、一身中に諸の影像を現はし、諸の變化をなし、然して復た、本の毘盧遮那佛身を現す。是の身中より三摩地を出すは、是の變化に由るが故なり。卽ち時に、[26]佛眼菩薩、[27]摩摩枳菩薩、[28]白衣菩薩、[29]多羅菩薩を出現す。是の如き等の菩薩は出生して住す、又復た[30]色自性菩薩、[31]聲自性菩薩、[32]香自性菩薩、[33]味自性菩薩、[34]觸自性菩薩、是の如き等の菩薩も出生して住す。

【一】梵 śrī sarva tathāgata kāya-vak-citta-rahasyād vinirgama śrī guhya-samājasya mahā-tantra rājasya pūrvārddhaḥ. ナルタン梵 sarva tathāgata kāya-vāk-citta-rahasya samāja nāma mahā kalpa-rāja. デルケイ梵 śrī guhya samaja mahā tantra rāja.

【二】梵 sarva-tathāgata samādhi-maṇḍalādhiṣṭhānaṃ nāma prathamaḥ paṭalaḥ.

【三】藏 sku-gsuṅ-thugs-kyi rdo-rje-btsun moḥi bhaga.

【四】金剛三昧 梵 samaya-vajra 藏 dam-tsig-rdo-rje.

【五】金剛身 梵 kāya-vajra. 藏 sku-rdo-rje.

【六】金剛語 梵 vāk-vajra. 藏 gsuṅ-rdo-rje.

【七】金剛心 梵 citta-vajra. 藏 thugs-rdo-rje.

【八】金剛定 梵 samadhi-vajra. 藏 ḥdsin-rdo-rje.

【九】金剛最勝 梵 jaya-vajra. 藏 rgyal-rdo-rje.

【10】金剛地 梵 pṛthivi-vajra. 藏 sa-rdo-rje.

【一一】金剛水 梵 āp-vajra 藏 chu-rdo-rje.

【一二】金剛火 梵 teja-vajra

る。五佛、四明妃、四明王は其の曼拏羅中に於て自各眷屬と共に坐すのであるがそれは本經の一一によつて見られたい。又この曼拏羅は他に微細、羯磨等の妙用を表示せる曼拏羅となつて表はれることは、金剛頂系に屬するだけに同一である。即ち其の微細の曼拏羅中に於て衆生の貪、瞋、癡は清淨なること（前說の如し）を示し、それを心月、大輪、妙月、日輪、五佛と名づけてゐる。此には其の詳說を略し、本經と同一の流なる諸經を列すれば無二平等最上瑜伽大教王經、一切祕密最上名義大教王儀軌、一切如來大祕密王未曾有最上微妙大曼拏羅經、瑜伽大教王經、幻化網大瑜伽教十忿怒明王大明觀想儀軌經、大悲空智金剛大教王儀軌經等である。

（本文中梵は梵語、藏は西藏語の略語）

本經の解題並に和譯は、清水亮昇君の勞に依る所頗る大なるものあり、記して以て其の困苦の勞を深謝す。

昭和七年三月十六日

譯者　神林隆淨　識

デルケイ版は缺)である。

其の經題は梵本には Śrī sarva tathāgata kāya-vāk-citta-rahasyād vinirgansa śrī guhya-samājasya mahā tantra rājasya pūrvārddhaḥ とあり。西藏譯ナルタン版にある梵名は śrī-guhya samāja mahā tantra rāja. 西藏名は dpal-gsan ba ḥdus-pa-shes-bya-ba rgyud kyi-rgyal-po とあり。又デルケイ版所載の梵名は sarva tathāgata kāya-vāk-cittarahasyo guhya samāja nāma mahā kalpa-raja. 西藏名は de-bshin-gśegs-pa tham cad-kyi-sku-gsuṅ-thugs-kyi-gsaṅ chen-gsaṅ-ba ḥdus-pa-shes-bya-ba-brtag-baḥi rgyal-po-chen-po 又北京版は梵名及び西藏名俱にデルケイ版に同じである。此の中、ナルタン版とデルケイ版とに於ては其の譯語に於て、異つてゐる處が多い。此れは原本に時代の相違があつたとも見られるが、槪して西藏語譯としてはナルタン版の譯が優れてゐると思はれる。其の問題はさておき、其の所說は身語心の三業が如來の其と相應する所に一切法及び涅槃界が出生するを說くものであり、據つて來る所の敎理の中心は中觀の空思想より來たるものである。而して如來の三密（三祕密）が衆生の菩提心に住するものであり。此の菩提心を無性、無所得なりとしてをり。且つ一切諸法は虛空の如く三界、四大等にも住せず、因緣生なりとして、譬へば或人が箭、莖、鑽木を以て火を出すに、其の火は箭、莖、鑽木、或は手にも住せずとしてゐる、此れは中論等の一切諸法因緣生の思想から來てゐるのである。又菩提心の發現なる諸佛の相である曼荼羅は卽ち本經を始終せる一脈の眞髓である。今此の曼拏羅の大略を示めせば、中央に毘盧遮那金剛如來、東方に阿閦金剛如來、南方に寶生金剛如來、西方に無量壽金剛如來、北方に不空成就金剛如來は安住し其の四隅に四明妃がある。卽ち阿閦金剛如來より出生せる佛眼菩薩は東南に坐し毘盧遮那金剛如來より出生せる摩摩枳菩薩は西南に坐し、無量壽金剛如來より出生せる白衣菩薩は西北に坐し、不空成就金剛如來より出生せる多羅菩薩は東北に坐すのである。又其の四門に金剛大忿怒焰鬘得迦明王は東門、金剛大忿怒鉢羅研得迦明王は南門、金剛大忿怒鉢納鬘得迦明王は西門、金剛大忿怒尾覲難得迦明王は北門にあつて、此れらは各毗盧遮那金剛如來が、遍照金剛三摩地、現前正覺金剛三摩地、佉寶所作三摩地、身語心金剛三摩地に入つて出生せる明王である。而して其の各々は一曼拏羅中にあつて、五佛の曼拏羅は種智(大輪とも云ふ)曼拏羅、金剛曼拏羅、衆寶曼拏羅、法曼拏羅、三昧曼拏羅と云ひ、四明妃、四明王各曼拏羅中にあつて、一大曼拏羅をなすのであ

dam-tshig.

最上清淨眞實三昧分第九

梵 Paramârtha-śuddhatvârtha-sama-ya 藏 don-dam-paḥi dag-pa-de kho na-ñid-kyi don-gyi dam-tshig

觀察一切如來心分第十

梵 sarvatathāgata-hṛdaya-saṃvāda-na 藏 de-bshin-gśegs-pa thams-cad-kyi thugs bskul-ba

一切如來眞實三昧最上持明大士分第十一

梵 sarvatathāgata-mantra-samaya tattva-vidyā-puruṣottama. 藏 de-bshin-gśegs-pa thams-cad-kyi sṅags-kyi dam-tshig de-kho-na-ñid rig-paḥi skyes-bu mchog.

一切如來金剛相應三昧最上成就分第十二

梵 vajra-yogasamaya sādhanāgratir-deṣa 藏 de-bshin-gśegs-pa thams-cad-kyi rdo-rjeḥi-sbyor-ba dam shig sgrub-pa mchog ṅes-par-bstan-pa.

金剛相應莊嚴三昧眞實觀想正智三摩地分第十三

梵 sarva vajrasamaya vyūha tattvā-artha-bhāvanā-sambodhi 藏 rdo-rjeḥi dam-tshig bkod-pa-ñid-kyi do-bsgom-pa mṅon-par-rdogs-par byaṅ chub-pa shes-bya ba

身語心未曾有大明句召尾日林畔多王最勝三摩地分第十四

梵 kāya vāk cittādbhutta mantrā karṣaṇa vijrimbhita-rāja藏sku-daṅ-gsuṅ-daṅ thugs rmad du-byuṅ ba-sṅags ḥgugs-rnam par sprul-paḥi rgyal-po

一切心眞實金剛出生三昧分第十五

梵sarva citta-samaya sarvâjra-a ṃbhūti藏 sems-can thams-cad-kyi dam-tshig gi sñiṅ-po rdo-rje ḥbyuṅ-ba

一八

一切曼拏羅成就金剛現證菩提分第十六

梵 sarva siddhi-maṇḍala-vajrābhisaṃbodhi 藏 dṅos-grub-thams-cad-kyi dkyil ḥkhor rdo-rje mṅon-par-rdsogs par byaṅ chub-pa.

一切如來三昧法金剛加持王分第十七

梵sarva tathāgata samaya saṃvara-vajrādhiṣṭhāna-vajra. 藏 de-bshin-gśegs-pa-thams-cad -kyi dam-tshig-daṅ-sdom-pa rdo-rjeḥi byin-gyis-rlabs-kyi rgyal-po

宣說一切祕密行金剛加持分第十八

梵 sarva guhyanirdeśa-vajra-jñānâdhiṣṭhā) 藏gsaṅ-ba-thams-cad-ston-pa rdo rjeḥi ye śes-kyis byin-gyis-rlo bpa.(西藏譯ナルタン版.)

正藏十九・六二一c）も盛んになり、經の始めに禮拜語を附すこと、或は藥師七佛供養儀軌如意王經（正藏十九・五一）には、宮毘羅、伐折羅、迷企羅、安底羅、頞儞羅、珊底羅、因陀羅、波夷羅、摩虎羅、眞達羅等の藥師十二神將を、極畏藥叉 nod-spyin gi ḥzigs. 金剛藥叉 rdo-rje-nod-spyin 執嚴藥叉 rgyan-ḥdsin 執星藥叉 gzaḥ-ḥdsin 執風藥叉 rluṅ ḥdsin 居處藥叉 gnas-bcags 執力藥叉 dbaṅ-ḥdsin 執飮藥叉 gtuṅ-ḥdsin 執言藥叉 smra-ḥdsin. 執想藥叉 bsam-ḥdsin 執動藥叉 gyo-ḥdsin 圓作藥叉 rdsogs-bye 等と譯してゐるのはその顯著なる例と云はねばならぬ。

こゝに支那の佛教は漸く西藏のそれとなり、遂にその本質を失ふて喇嘛教となるに至つたのである。然し西藏に蓮花生によつて密教が傳へらるゝまでは、西藏の佛教は殆んど顯教であつたのである。

蓋しこの瑜伽系の怛特羅 tantra は已に那爛陀寺の僧、羅睺羅跋陀羅 rāhura-bhadra に出現せるを見る。(tāranātha 一一二頁)

（五）本經の內容

今梵本と藏譯と漢譯との比較を述べれば、

（密教三之三西藏文祕密集根本坦特羅寺本婉雅氏稿參照）

一切如來金剛三業最甚深祕密中祕密諸佛大集會安住一切如來三摩地大曼拏羅分第一

梵 sarvatathāgata kāya-vāk-citta-rahasyāt guhya-samāja-sarva-tathāgata-samādhi-maṇḍalâdhiṣṭhānaṁ nāma prathamaḥ paṭataḥ)

藏 de-bshin-gśegs-patham-cad-hyi tiṅ-ṅe-ḥdsin dkyil-ḥkor byin gyis-rlob-pa

菩提心分第二

梵 bodhicitta) 藏 byaṅ-chub-kyi-sems

金剛莊嚴三昧地分第三

梵 vajravyūha nāma samādhi.) 藏 rdo rje bkod-paḥi-tiṅ-ṅe-ḥdsin.

一切如來心曼拏羅分第四

梵 sarvatathāgata cittamaṇḍala.)

藏 de-bshin-gśegs-pa thams-cad-kyi thugs-kyi dkyil-ḥkhor.

一切明句行分第五

梵 samanta-caryāgra.) 藏 kun-tu-spyod-paḥi mchog

身語心加持分第六

梵 kāya vāk cittâdhiṣṭhāna) 藏 sku-daṅ-gsuṅ-daṅ thugs-byin gyis-rlob-pa.

祕密精妙行分第七

梵 mantra-caryāgra) 藏 sṅags-kyi spyod-pa-mchog

甘露三昧分第八

梵 mantra-samaya) 藏 bsaṅ-gciḥi

大金剛妙高山樓閣陀羅尼一卷
梵 mahāvajra meruśikhara kūṭāgāra
藏 rdo-rjeḥi ri-rab-cheu-poḥi rtse
moḥi khaṅ-pa brtsegs-pa
寶帶陀羅尼一卷
梵 Mekhala)藏 me-kha-la
息除中天陀羅尼經一卷
梵 sarva buddhāṅgavati)藏 saṅs-rgyas
thams-cad-kyi yan lag-daṅ
ldan-pa
最上意陀羅尼經一卷
梵 viśeṣavati)藏 khyad-par-can
一切如來正法祕密篋印心陀羅尼經一卷
梵 sarvatathāgatādhiṣṭhāna hṛdaya
guhya-dhātu karaṇḍamudra)藏 de-
bshin-gśegs-pa-thams-cad-kyi
byin gyis rlabs-kyi sñin-po gsaṅ
baḥi riṅ bsel-gyi za-ma-tog
其の他一切如來安像三昧儀軌經一卷。金剛場莊嚴般若波羅蜜多教一分一卷。金剛香菩薩大明成就儀軌經三卷。廣大蓮華莊嚴曼拏羅滅一切罪陀羅尼經一卷。舍身陀羅尼經一卷、聖觀自在菩薩功德讃一卷、祕密相經三卷等あり。又法天は傳教大師の號を賜ひ始めて吉祥持世の譯經をして奉つたと云ふ。

　これ等の外來の三藏はその譯するところは密教の經軌多く。其の多くは西藏所傳のそれと同一のである。

　これらによつて、宋代の佛教は唐のそれと同様に密教の隆盛を極めたのであるが唐代に於ては金剛頂初會の經と、理趣會に屬する一部の譯經にとゞまり宋代に至つては本邦に傳へられなかつたが、三十卷大教王經の以外に金剛頂瑜伽經の後部に屬する所の第六會、第九會、第十五會等の男女の交會を如實に現せるものなることに注意を要するのである。而して又西藏の密教の修密、瑜伽、無上瑜伽等の判教を以てしても多く無上瑜伽に屬し、即ち烏仗那國 udyāna より西藏に流傳したる密教が瀰漫その他施護等の將來せる密教たることである。理趣會は最上根本大樂不空三昧大教王經に出りて增廣、其の極に達し、大方廣菩薩文殊師利根本儀軌に出りて文殊法は大數衍を見、本經に至つて第十五會祕密集會瑜伽の完成を見、大悲空智金剛大教王經儀軌經に至つて最も淫靡、露骨なるを見るのである。其の後宋にあつては仁宋立ち、西藏にあつては阿底沙 atiśa 超巖寺 vikramaśila の學頭となり入藏してこの密教の改革を企てるに至つたのである。而して宋にあつては密教亦衰頽し禪の三昧が萌した。

　其の後元代に至つて發思八 ḥphags-pa 等の名僧來り、追つて西藏大藏經も輸入せられて至元錄は其の勘同をなし、如來大藏經目錄はその漢字目錄である。又藏本よりの譯經（重刻藥師七佛供養儀軌序

藏 tham-cad-gsaṅ-ba-rgyud-kyi-
rgyal-po

偏照般若波羅蜜經一卷

梵 prajñāpāramitā nayaśata pañcaśa-
tika)藏 śes-rab-kyi pha-rol-tu
phin-paḥi tshul brgya-lṅa-bcu-pa

聖八千頌般若波羅蜜多一百八名眞實圓
義陀羅尼經一卷

梵 ārya-prajñā pāramitānāmaṣṭaśata
ka) 藏 śes-rab-kyi pha-rol-tu
phin-paḥi-mtshan brgya-rtsa-
brgyad-pa shes-bya-ba

帝釋巖般若波羅蜜多心經一卷

梵 kauśikaprajñāpāramitā)藏 śes
rab-kyi pha-rol-tu phyin-pa
kauśika

守護大千國土經三卷

梵 mahāsāhasrapramardana)藏 stoṅ
-chen-po rab-tu-ḥjoms-pa

如意寶總持王經一卷

梵 hiraṇyavatī)藏 dbyig-daṅ-ldan-
pa

最上燈明如來陀羅尼經一卷（陀羅尼集
第九）

梵 agrapradīpadhāraṇī-vidyārāja 藏
rig-sṅags-kyi rgyal-mo-mchog

佛頂放無垢光明入普門觀察一切如來心
陀羅尼經二卷

梵 samantamukha praveśa raśmiv
imaloṣṇī-ṣaprabhāsa sarvatathāgata
hṛdaya samaya-vilokate)藏 kun-
tu-nas sgor ḥjug-paḥi ḥod zer
gtsug-tor dri-ma med-par snaṅ
-bar de-bshin-gśegs-pa-thams-
cad-kyi sñiṅ-po-daṅ dam-tshig-
la rnam-par-lta-ba

智光滅一切業障陀羅尼經一卷

梵 jñānolkā-nāma-dhāraṇī-sarva ga-
ti-pariśodhanī)藏 ye-śes-ṭa-la-la
shes-bya-baḥi gzuṅs ḥgro-ba
thams-cad yoṅs-su sbyoṅ-ba

蓮華眼陀羅尼經一卷

藏 padmaḥi spyan shes-bya-baḥi
gzuṅs

施一切無畏陀羅尼經一卷

梵 Sarvâbhayatapradāna)藏 thams-
cad-la-mi-ḥjigs-pa rab-tu sbyin
pa

無能勝幡王如來莊嚴陀羅尼經一卷

梵 dhvajāgrakeyūra)藏 rgyal-mtshan
gyirtse-moḥi dpuṅrgyan

聖大總持王經一卷

梵 mahādhāraṇī)藏 gzuṅs-chen-po

聖持世陀羅尼經一卷

梵 vasudhārā-)藏 bcom-ldan-ḥdas-
ma nar rgyun-maḥi rtog-pa

聖觀自在菩薩不空王祕密心陀羅尼經一
卷

梵 amogha paśa hṛdaya)

藏 doṅ-yod-shags-paḥi sñiṅ-po

て終つたが其の後眞宗の世に至つては梵僧の來宋するもの、又は支那人にて譯經及び著述の業に從ふもの多く、惟淨、法演、如淨、天息災、重顯、善照、淨源、惟白、法賢、仁岳、道謙、張商英、楚圓淨善、崇岳、智圓、陳舜俞、道源、仁勇法天、了悟、寶臣、非濁、道誠、陳田夫智遇、施護、善月、智廣、道欣、文素、本嵩、惟蓋竺、方會、日稱、智照、蘊聞慧開、贊絢、慧南、延一、延壽、夤式、除徵、正覺、承遷、紹德、紹隆、宗曉、宗杲、宗紹、王日休、戒珠、咸傑、元照希麟、義遠、行秀、契嵩、繼忠、克勤、金總持、才良、贊寧、士衡、子璿、師會慈賢、法雲、志盤等五十餘人、就中、贊寧は大宋僧史略三卷を撰し、法雲は飜譯名義集二十卷、希麟は玄應、慧琳等にならひ、未だ音義せざる者、大乘理趣六波羅蜜經を初め、續開元釋教錄に至る二百六十六卷の音義十卷を撰し、續一切經音義と名づけ。又贊寧は宋高僧傳三十卷を著し、又志盤は佛祖統紀五十四を著した。又外來の僧中にして法天（後法賢と改む）天息災、施護、慈賢等は其の最なるものであり、多く密教經典の翻譯に從事したのである。就中天息災は北天迦濕彌羅國より來り、明教大師の號を賜り、又其の譯經するにあたつて、譯堂の中の東堂の西に面して粉を聖壇に塗つて四門を開き、梵僧に祕密の咒を持誦せしめ、又木壇には賢聖の名字を輪に畫き、以て之れを法曼拏羅なりと云ふたと云ふ。佛祖統紀四十三縮（致九、九七左）又施護は烏塡曩國より來り顯（或は傳）教大師の號を賜り（同譯經に當り）法進、常謹、清紹等は筆受、綴文。光祿卿揚說、兵部員外郎張洎は潤文。殿直劉は監護の役をしたと云ふ。又始めに如來莊嚴經を譯して奉つたとあるも現存してゐない。（同、宋高僧傳第三、致四、八十二a）

今施護の譯經一百十五部二百五十五卷の中密部屬するものを列すれば、

最勝妙吉祥根本智最上祕密一切名義三摩地分二卷
梵 mañjuśrīnāmasaṃgīti) 藏 hjam-dpalye-śes sems-paḥi don-dam-paḥi mtshan yaṅ-dag-par brjod-pa

無二平等最上瑜伽大教王經六卷
梵 advayasamatāvijayākhyāvikalpa-mahārāja) 藏 gñis-su-med-pa mñam-pa-ñid rnam-par-rgyal-ba shes-bya baḥi rtog-paḥi rgyal-po-chen-po

一切如來眞實攝大乘現證三昧大教王經三十卷
梵 sarvatathāgatatattvasaṃgraha) 藏 de-bshin-gśegs-pa thams-cad-kyi de-kho-na-ñid bsdus-pa

一切祕密最上名義大教王儀軌二卷
梵 sarvarahasyo nāma-tantrarāja)

寺は百七堂ありてその內五十三堂は祕密眞言の堂、五十四堂は顯教の堂となつてゐたらしい。そして班抵達 paṇḍita は八十八、其の外慶讃式奉仕の僧、護摩奉仕の僧、修行監督者等を擁し、當時那蘭陀寺に萠した密教はこゝに移り、こゝに至つて其の地方の風習に感化せられたる左道密教と化した。其の密教が行はれ又中觀、唯識も行はれて當時に於ては實に佛教の中心地となつてゐた。(tāranātha 二九三頁參照）後 1201A.D 回々教の侵入に依りて毘倶羅摩什羅寺 vikramaśīla は破壞せらる。

この時西藏に於ては蓮花生上師 padma sambhava は乞㗚提賛王 kri-sroṅlde-btsan の請に依りて北印度より中觀宗の典籍、及び陀羅尼、密教の經典等を齎らして來藏し、羅薩 lha-sa の東南に三耶寺 samaya を建立し、それに住して盛んに密教宣布につとめてゐた時であつた。言ふまでもなく彼の密教は普賢如來が金剛持如來に授け、金剛持如來は烏仗那國王因陀羅菩提に授け、而して荼枳尼天等の行ふところとなつたものであつた。所謂超巖寺に行はれてゐたそれである。

この時宋にあつては太祖は沙門三百人に詔して舍利梵經等を求めに入竺せしめたのであつた。之れ宋乾德二年のことである。就中繼業は印度にあつてこの超巖寺（鍛羅寺？正藏五一・九八二 a）に館し、又三耶寺が模して建てたと云はれる那爛陀寺の北十五里に在る烏嶺頭寺 oḍanta-pūr に行き、後入藏して三耶寺に至つたと云ふことである。卽ち遊方記抄繼業西域行程（正藏五一・九八二 b）に「又北十五里有ニ那爛陀寺一、寺之南北各有ニ數十寺一、門北西向、其北有ニ四佛座一、又東北十五里至ニ烏嶺頭寺一、東南五里有ニ聖觀自在像一（中略）自レ此渡レ河北毘耶離城有ニ維摩方丈故跡一、又至ニ拘尸那城及多羅聚落一、踰ニ大山數重一至ニ泥波羅國一、又至ニ摩偷果一、過ニ雪嶺一至ニ三耶寺一」と云ふてゐる。此の中烏嶺頭寺（アジヤンタ ajanta 洞窟の訛語とも云ふターラナータ二七六註）に關しては其の附近の小寺にて智護 prajñāra-kṣita は那露波 nāropa に師事して無上瑜伽中の「男」卽ち方便坦特羅 pitṛ ta-ntra（藏 pha-rgyud）と「女」卽ち智慧坦特羅 mātṛ tantra（藏 ma-rgyud）を聞き、とくに智慧坦特羅に精通し以て上樂祕密輪 cakrasambara（藏 ḥkhor-lo sdom-pa）を行じてゐたと云ふ。又毘倶羅摩什羅寺が回々教の侵害を受けた時彼は祕密修法を以てこれを防いだと傳へてゐる。（ターラナータ三二九頁）

これらによつて見ても已に宋にはかゝる西藏の密教の傳來した事を知るのである。太祖沒し其の子太宗の時繼業は歸宋し所得の梵夾舍利等を奉り年八十四にし

に ñau-thos 二に rnü saüs-rgyas 三に byaü-sems 四に kriyā-tautra 五に upa-tautra 六に yoga 七に mahā yoga 八に anu-yoga 九に ati-yoga の九乘を立て、佛果成道に至る階程とせり。又其の經典を四部に分類し第一に眞言、印相を說ける作祕經 bya-rgyud とし、第二に修祕經 sphod-rgyud にして大日經等之れに屬し、第三相應祕經 rnal-hbyor-rgyud にして、第四相應無上祕經 rnal-hbyor-bla-med-rgyud とし、本經はこの相應無上祕經中に屬せるものにして、最も重ぜられ、卽ち身語心の圓滿淸淨に依り、法爾に凡聖不二を成就し此土に出現しては劫波 kalpa の差別なく、無差別平等に敎はんとしての說法たりとせり。密敎發達誌善無畏傳法諱經(三七九頁)に「西藏喇嘛敎古派、亦以ニ密經一、爲ニ法身所說一、然其新派、則爲ニ法身不說法一、經軌皆應身如來所說、又以ニ其瑜伽及無上瑜伽祕經、爲レ出ニ於隱藏經中一、而謂隱藏或在阿闍梨心內」と云ふてゐる。本經には「時に阿闍梨は語金剛より亦是の言を出す、一切如來は是れ我が父なり、一切如來は是れ我が母なり、一切如來は是れ我が師なり、慈氏當に知るべし、所有十方の一切諸佛如來及び諸佛所行、及び諸佛如來の身語心は金剛の所生の福蘊にして、彼の福蘊は皆阿闍梨の毛孔より生ずる所なり」と云ふ。蓋しかゝる密敎は已に印度に於て流行し、波羅 pāla 王朝瞿波羅 gopāla 王の時代この眞言行者の輩出が多かつたと云ふ。(ターラナータ二七三、二五九、二七五、三一五、三八二參照)

(四)宋朝密敎と西藏密敎並譯者の略傳

金剛智三藏に出つて、唐に金剛頂瑜伽經が傳來せられ、不空三藏その流を汲んで寫瓶を受け、善無畏三藏所傳の胎藏法と蘭菊の美を爭ふて唐代に流行を極め、序で慧果出で、其の爛熟の極に達したのである。我が最澄、空海、常曉、圓行、圓仁、慧運、圓珍、豐智、宗叡、圓載、眞如親王等の入唐に出りて本邦に請來せられたのは、實にこの唐代密敎であつて、法華、華嚴等の思想より出で、中觀、唯識の思想を多分に含んだ所謂純密敎の發達であつた。がこの時より幾許もなく唐の晩、宣宗代になつて遂に其の密敎は衰頽するに至つたのである。

丁度この時東、印度にては波羅 pāla 王朝の末裔達磨波羅 dharma-pāla 出で(西藏傳は瞿波羅 gopāla 提婆 deva 羅薩 rāsa 達磨 dharma となり。達磨の卽位は永泰元年 (730 A.D)頃たり tāranātha 六頁)深く佛法を信じて、烏仗那 udyāna 國恒河の河畔なる一小山の山腹に毘倶羅摩什羅寺 vikramaśīla (唐に超巖寺、勝巖寺、勝性寺と云ふ) を建立した。その

スロン・ツアガムポ sron bstan-sgan-po王沒して五十年乞栗雙提贊 khari-sron ldehu bstan 王即位した。彼は西曆七二八年に生れ、初め彼は佛教に歸依せざりしが金城公主の感化に依つて後之を信仰し、王は蓮華生上師 padma-ḥbyuṅ-gnas等の諸學者を招聘し、或は迦摩羅什羅 kamal-śila を印度より聘して、支那の大乘學者和尚と論を戰はしめた。迦摩羅什羅は法天譯の菩提心觀釋 byaṅ-chub sems-bsgom-pa 施護譯の廣釋菩提心論、bsgom-paḥi rim-pa を著はせりと云ふ。其の他毘盧遮那羅佉怛、康龍、尊護、等を聘し、佛教の隆盛、飜譯の事業を盛んにした。就中蓮華生上師は西紀七四七年烏杖那國より來藏せし密教の宣布者である。然し彼の宣布せし教は如何なるものであつたかは明かでないが察する所烏杖那國は當時大乘の流行せし地で、又淫靡なる風の密教の行はれてゐた地であつたから、恐らくは中觀派に屬する左道密教の宣布者であらう。即ち本經の如きは其の地に行はれた經典であつたであらう。且つ本經の譯者施護 dāna-pāla が烏杖那國の三藏であるにおいてをや。彼の宣布せる密教を舊密教と云ふ。其の後乞栗倈巴瞻 khri-lde gtsug-brtan rab-pa-can十八歲(816AD)に即位し積那彌多 jinamitra 濕達怛羅菩提 Śilendrabodhi等を印度より招聘し大小乘經典を譯し聖典目錄を製し、又西藏宗教は大小乘の聖典に據り、祕密の呪法等は之を嚴禁した。後西曆八九九に即位せし彼の王の弟ランダルマ glaṅ-dar-ma は斯の如く歷代の王佛教の隆興に孜々として努めたるも、是の王遂に佛教を破壞するに至つた。王は支那史に達磨と傳へ、酒を嗜み、畋獵を好み、凶慢少恩であつたと云ふ。嘗に彼の王は佛教の破壞者たるのみならず、國家文化の施設に對しても理解なく、其の破佛するに當り、一切の僧侶を追放し、若くは還俗せしめ、經論、佛像等は或は水に投じ、或は燒き、或は埋藏せしめたと。偶々支那に於ては唐武宗に當り、其の會昌破佛(845 A.D)と殆んど同時なりしは奇と言ふべきである。蓋し西藏はかゝる闇黑時代と化したるも、イーシ、オヱ ye-śes-ḥod 等の護法家は、此のランダルマの破佛に失はれたる經卷を補はんとして盛んに曼特羅、坦特羅の輸入をはかり、左傾的密教の隆盛を見るに至つた。此の時までは西藏の佛教は原始的大乘の顯教であつた。其れに追害以後輸入せられたる密教加はり、遂に左道的密教の大流行を見るに至つた。こゝに阿提沙 atiśa (西藏名 phul-byuṅ) この奇怪なる密教に對し實踐的道德說を鼓說しカダムパ bkaḥ-gdam-pa を開き、又彼に基きて是の舊密教を改革をした宗喀巴 tsoṅ-kha-pa あり。然からばこの舊密教は一

dus-na gdoṅ-dmar gyi rgyal-po shes bya ba dbaṅ thaṅ daṅ mthu skyes-na yul khams gshan moṅ tu phrogs bzaṅ ṅo / deḥi tshe-na byaṅ-thub sems bpaḥ gcig gdoṅ dmar gyi rgyal-poḥi sk-ye ba blaṅs te bod khams su. dam paḥi chos ḥbyiṅ ṅo/ yul khams gshan nas kyaṅ chos kyi mkhan po daṅ / gsuṅ daṅ mdo ste la sogs pa spyan draṅs so / gdoṅ dmar gyi yul du gcig lag khaṅ daṅ / mcod rten maṅ tu brtsigs / dge ḥdun sta gñis gtsugs / rgyal po daṅ blon po la sogs pa dkor ril gis dam paḥi chos la spyod/rgyal po gdon dmar deḥi tshe li yul yaṅ rgyal po deḥi mṅaḥ ris su dbaṅ bar ḥgyur ro/ dam paḥi chos daṅ / mchod rten la sogs paḥi dkon mchog gsum gyi mṅaḥ ri mi ḥbri / rgyas par gtsugs shiṅ m chodo / rgyal po gdoṅ dmar rgyud rabs bdun du dam paḥi chos rpyod par ḥgyur ro / rgyal-po ḥdiḥi rabs bdun du yul khams gshan dkon mchog gsum gyi mchod rten bsnogs pa la ṅan sems daṅ gnod mi byad do / (中略) deḥi rjes la byaṇ chul sems dpaḥ sig gdoṅ dmar gyi rgyal po byas paḥi rgyad rabs bdun gyi tha-ma la rgyal po deḥi bun ma rgya yul nas rgya rjeḥi bumo koṅ co byaṅ chub sems dpaḥi yaṅ pa shig ḥkhor drug brgya daṅ gdoṅ dmar gyi yul du ḥoṅs so/ koṅ choṅ ḥphags paḥi chos la dad bdaṅ thad cnes gdoṅ dmar gyi rgyal po yaṅ dad-pa che ste / sṅon pas kyaṅ dam paḥi chos rgyas par ḥgyur ro // とあり、又造像量度經の引に(正藏二一、九三八c)其於土番則唐之貞觀中。創興佛法。前後果使東土及天竺。徵聘諸賢。而賚取衆經。一切五明典籍。繼續翻譯。準令國内公

一〇

私立」刹」とあることに出つても、其の佛教の興隆及び、其の後、彼の國王は、印度或は支那より經典を取り寄せ、諸賢聖をも詔聘して、以て飜譯し、或は寺院の建立に急なるものがあつたことを知るべきである。彼の王は文成公主が將來した佛像を安置すべき殿堂を建立し、又は蠶種丼びに麥苗を取寄せしめて、詩書等の國學又は政事の學等を學ばしめ、鋭意其の文化の復興に務めたが、其の最も大なる彼の功績は端美三波羅 thu-mi-sam bhoṭa等の十六人を印度に遣はし、彼の國の文字を基とし、西藏の語韻を參酌し、以て國字の制定にあつた。彼等は印度に留ること七年、其の還藏するに當つて諸種の佛教經典を將來し、又尼波羅 Nepal 等の諸國より學者を作ひ、佛典の飜譯に從事したと云ふも、其の飜譯せし經典は現存せぬ。只彼の作りし西藏文典の八部中、二部を殘存せるのである。この英主

であるといふ。之れより五代百二十餘年經てスロン、ツアン、ガンポ sron btsan sgan-po 王は西暦六一七に生れ唐貞觀二年（692 A.D）に卽位し、同八年唐太宗と同盟を結びし彼國の英主にして唐書等に棄宗弄讃或は棄蘇農贊等とあるは卽ちこの王である。彼は有爲勇悍にして隣國を併呑し、其の威を隣國に振ひ、其の領土は遠く北の于闐 khotan にも達した。彼は始めネポール Nepal より王女を娶り其の妃となしたが、其後突厥（藏drug-gu）迴鶻（藏 hor）等の諸蕃が何れも支那より公主を迎えたるを見て、彼は貞觀年間屢ゝ使を遣はし金寶を奉じ通婚を求めたが唐の太宗は之を許さなかつた、が遂に同十五年（641 A.D）宗室の女文成公主を以て之に與へることゝした。大唐求法高僧傳卷上（致七・九二・九三）に太州の玄照は入竺の途次文成公主を送り、再び唐に歸る時、文成公主に見え深き禮遇を受けたと云ふ。蓋し彼の王以前は西藏は無文國にして未開野蕃の民にして法令なく、宗教は梵教 bon-po なる巫教の一種であつた。唐書第二百十一上、黨項の條に（黨項は西藏卽吐番 thu bphod のことである）その國情を記し「有棟宇織犛尾羊尾、覆屋歲一易、俗尙武無法令、賦役人壽多過百才、然好爲盜、更相剽敓、尤重復男女衣裘褐被氈畜犛牛馬驢羊以食、不耕稼地、寒五月草生八月霜降、無文字候草木記」とある。そこで文成公主は西藏に赴かんとするに及び、西藏に佛像、經卷、天文、醫藥の書を賜はらんことを願つた。これが西藏に佛像、經卷の傳はる始めである。又公主の彼の國に至るや、彼の王は親しく部兵を率ゐて道に之を迎え、公主と共に其國に歸つたと云ふ。又公主のために一城を築き以て後世に誇示せんとした。公主古來の風として西藏人は赤土を以て其の顏に塗る習慣あり。彼の公主は之を好まざるにより、彼王は直ちにこれを禁じたと云ふ。釋迦牟尼如來像法滅盡之記に（正藏五一、九九六a）之を記し「當爾之時赤面國（gdoṅ-dmar-gyi-yul 西藏國の異名）王有ニ大威勢一多侵ニ餘國一以爲ニ自境一、爾時有ニ一菩薩一、於ニ赤面國ニ受レ生、爲レ王於ニ自國內一、廣行ニ妙法一、從ニ於他國一。請ニ其法師及經論一、赤面國中、建ニ立精舍一、造ニ窣堵波一度□□衆、國王大臣幷諸國人、廣行ニ正法一、爾時于闐屬ニ彼赤面王一。故廣行ニ正法一、建ニ立塔寺一、置ニ其三寶人戶田園一、興ニ供養一、赤面國王、七代已來以行妙、此七代王、於ニ餘國中所有三寶及塔寺處一、不レ起ニ惡心一、亦不ニ損害一、（中略）後於ニ異時一有ニ一菩薩一、爲ニ赤面國第七代王一、彼王納ニ漢菩薩公主一以爲レ妃、后將ニ六百侍從一至ニ赤面國一、時彼公主極信ニ佛法一、大具ニ福德一、赤面國王亦大淨信、興ニ於先代一、廣興ニ正法一」この西藏文（丹珠爾 ṅe-pa421a li-yul kyi luṅ bstan-pa）dehi-

最初の語言の表示する所なり。此れ即ち大曼拏羅なり。自性の光明は本と清淨にして、菩提より上あることなし、諸の衆生の利益なる事を成す、此れ即ち妙月曼拏羅なり。智慧は清淨にして莊嚴する所なり。彼の金剛喩定より生ず、解脫の光明は平等の光なり。これ即ち日輪曼拏羅なり。五佛は平等にして相應せる若し、五智は和合して諸の作用をなす、五眼は清淨にして善く觀視す、此れ即ち五佛曼拏羅なり」とある。而して其の五曼拏羅に各色あり即ち心月曼拏羅を月愛摩尼妙色、大曼拏羅を地相大青色、妙月曼拏羅を黄色、日輪曼拏羅を赤色、五佛曼拏羅を曼爾瑟色として、是の五色は其の三摩地を表せるものである。是の如く初會は六曼荼羅、この第十五會は五曼拏羅ありとし、各會の曼荼羅を合して金剛頂瑜伽大本に總じて一百二十八曼荼羅ありと云ふ。

（三）西藏密教中に於ける本經の位置

今西藏密教の判教及び本經の位置を述べる前に西藏佛教の大體を述說する必要がある。彰所知論卷上（縮藏九a）及び佛祖歷代通載第二（縮致十二a）に「如來滅度後千餘年西蕃國中初有王、曰呀乞㗚贊普 gñaḥ khri-btsan-po 二十六代有王、名曰給陀朶㗚思顏贊 tho tho ri gñan bstan 是時佛教始至、後第五代有王、名曰雙贊思甘普 sroṅ btsan sgam po 時班彌達 paṇḍita 名阿達陀、譯主名曰端美三波羅、thu-mi sambhoṭa 飜譯教法、修建袷薩 lha-sa 等精舍、流傳教法、後第五代有王、名曰乞㗚雙提贊 khri-sroṅ ldeḥu btsan 是王召請善海大師蓮華生上師 padma ḥbyuṅ gnas 迦摩羅什羅 kamala śīla 班彌達 paṇḍita 衆成就人等、共毗盧遮那 vai-rocana 羅佉怛及康龍尊護等七人飜譯教法、餘班彌達 paṇḍita 共諸譯廣敎法、三種禁戒興流在國、後第三代有王、名曰乞㗚倈巴贍 khri-lde gtsug rab-pa-can 是王界廣、時有積那彌多 jinamitra 幷濕達怛羅菩提 śilendra bodhi 班彌達、paṇḍi-ta 等、共思割斡吉祥、積酌羅、龍幢 kh-uḥi rgyal-mtsan 等、已飜校勘、未飜而飜廣興教法、西蕃王種、至今有在、班彌達等、飜譯譯主、善知識衆廣多有故、教法由興」これに依りて、西藏佛教の歷史の概說を見ることが出來る。就中ニヤー、チ、ツアン、ポ gñaḥ khri bstan-po 王の歷史は明かにせず。又ト、ト、リ、ニヤンツアン tho tho-ri gñan-bstan 王は西曆三四八（戊申歲）に生れ、西曆三六七（丁卯歲）に二十歲にして即位し、其の國を領し、其の八十歲の時、天上より一寶筐が降下した、啓いて之を見れば、其の中より莊嚴經と、金塔、寶球鉢等が收めてあつた、之れが彼國佛教の傳來の始め

の修生の智は、本有の理と相應して、慧定不二の境(三摩地)を吾人の還滅の境地なりと云ふのである。但しこの諸佛出生の義は初會の大日如來の四智を表現せる四佛より十六大菩薩を、四佛より四波羅蜜菩薩をそれに酬ひて大日如來より內四供養菩薩を、その供養のために四佛は外四供養菩薩を出生するとは相異して部母たる波羅蜜の菩薩より諸佛を出生することに留意すべきである。(祕藏記は之れに據る)

(b)曼荼羅について

今曼荼羅の起源についてはさておき、印度に於ける曼荼羅の作壇は蕤呬耶經卷中(正藏一八、七六四b)に「夫曼荼羅、又其三重亦四重、亦有ニ多量一、其最外院廣開ニ一門一、亦有ニ如是開四門一者、幷有ニ門出一、凡曼荼羅多分唯開ニ一門一、然其中院定開四門、凡出入者用ニ其西門一、或依ニ本法一隨レ說出入、從有如是開四門者、要以ニ白色一圍ニ其三門一、如レ是三重之院一切曼荼羅應レ如是作、餘圍遶院准レ此應レ知、一切本尊置ニ於內院一、其次諸尊置ニ第二院一、其諸護世天當置ニ外院一、此爲是都說曼荼羅法、或如本法依彼安置」と一般に曼荼羅を作る通則を說いてゐる。本經に於ては金剛部、蓮華部、三昧部、佛部の五部を建て「五部は甚深祕密の法門にして、是れ卽ち五種祕密の解脫成就なり」と云ふてゐる。而して此の金剛部の主なる阿閦金剛如來は、大毘盧遮那金剛如來の東方に坐すとし。又寶部の主なる寶生金剛如來は、毘盧遮那の南方に坐すとし、又蓮華部の主なる無量壽金剛如來は、毘盧遮那の西方に坐すとし、又三昧部の主なる不空成就金剛如來は、毘盧遮那の北方に坐すとし、佛部の主なる大毘盧遮那金剛如來は中央に坐すとしてゐる。是れ其の五部の主尊を云ふたのである。又此の第十五會には五曼拏羅を建てるものにして、心月曼拏羅、大輪曼拏羅、妙月曼拏羅、日輪曼拏羅、五佛曼拏羅がそれである。卽ち心月曼拏羅とは初會に於ける成身會の如きもので、諸尊の形像を以てし、妙月曼拏羅以下は其の妙用及び其の諸尊平等なるを表示せるに過ぎぬ。是れ初會金剛頂經の六曼荼羅が、羯三微供の四曼荼羅は大三法羯にして、四印會はこの四種曼荼羅の各不離を表し、且つ一印會は四印會に於ける四尊ありと雖も、是れ此の四尊及び曼荼羅會上の無量の諸尊は毘盧遮那獨一尊に過ぎざることを表せるに同じである。この本經の五曼拏羅を一切祕密最上名義大敎王儀軌卷下(正藏十八・五三九c)に說明して「戲笑、言說及び歌舞は、皆是れ佛語方便門なり、自他の二行相應する中に、諸の衆生の利益事を現す。自性の光明は本と清淨なり。此れ卽ち心月曼拏羅なり。貪は本と清淨にして蓮華の如し、諸の煩惱の怨は悉く除斷す。

btsun-mohi-bhaga は之れ女根を云ふのである。之を又十八會指歸に般若波羅蜜宮とも云ひ、本經にては正智と譯してゐる。叠寂は(正藏六一、一三三b)大悲空智金剛大敎王經の之の文を釋して、大悲とは定にして蓮華を以て喩へ、空智とは慧を表せるものにして、金剛を以て喩へ、所謂るこの定慧、金剛の二が相ひ合したるを祕密と云ひ、世尊はこの祕密を說かんとしてこの喩施婆倪に住し三摩地に入つたのであるとしてゐる。不空の三卷敎王經卷下(正藏一八、二二一a)に「次當レ說二祕密成就一於二婆伽一入レ身女人或丈夫一切想入已彼身令遍舒」と。又般若波羅蜜多理趣釋卷下觀自在菩薩の段(正藏一九、六一二b)に「以自金剛與彼蓮華、二禮(體)和合成爲二定慧一。是故瑜伽廣品中。密意說二二根交會一五塵成二大佛事一。以二此三摩地一奉二獻一切如來一。亦能從二忘心一所レ起雜染速滅、疾二證本性淸淨法門一」と云ふてゐる。此の中の二根交會と云ふは、或は之を貪染相應と云ふ語を以て表はしてをり、或は定慧の不二を以て二根交會と云ひ、是れを祕密と云ひ、是れに依つて大佛事を成し得て、此の三摩地に住せば、忘心より起る所の一切の雜染は滅して本性淸淨の佛心を開發すると云ふにある。卽ち是れを金剛薩埵の身なりと云ふのであるが、その大佛事とは現法樂住にして定慧二根和合して生ずる妙樂を云ひ金剛薩埵の大貪染三昧を云ふのである。故に本經の抄譯たる一切祕密最名義大敎王儀軌卷下(正藏一八、五三九a)に「無我平等智出生、無相無礙無我見、一切染愛悉淸淨、此卽金剛手菩薩、此說二金剛染因緣一、卽是金剛無上智、染々復是淨蓮華、華卽金剛妙法智、若自種出自相、卽一切佛同此攝、二種變化若相應、金剛薩埵眞供養、大智了知自種子、悲愛二法卽和合、二處相應住等持、以無二法」と云ふてゐる。この中の二處相應して等持に住すと云へる、この三摩地に佛は住したので、この三摩地を本經には變化淸淨境界と云ひ大悲空智金剛大敎王經には祕密中祕密妙三摩地、藏 de-bshin-gsegs-pa thams-cad-kyi sku dan-gsun-dan thugs kyi sñin-po rje-bstun gsan-ba las śin-tu ces-gsan-ba と云ふてゐる。又般若波羅蜜多理趣釋卷上(正藏一九、六〇八b)にこの三摩地を妙適淸淨と云ひ「妙適者卽梵音蘇囉多也。蘇囉多者、如二世間那羅那哩娛樂一、金剛薩埵亦是蘇囉多。以二無緣大悲一。遍二緣無盡衆生界一。願得安樂利益、心曾無二休息一自他平等無二故。名二蘇囉多一耳。由レ修二金剛薩埵瑜伽三摩地一、得二妙適淸淨句一是故獲二得普賢菩薩位一」と。蓋し是れ瑜施婆倪、梵 yogirbagha とは諸佛の母たる慧を表せる般若佛母の隱語にして卽ち般若波羅蜜に住せる毘盧遮那より一切の佛菩薩を出生せるを云ひ、而も此

此經大都與二惠心軌一同也

諸佛境界攝眞實經三卷罽賓三藏般若譯

此經亦應從二初會金剛界品一而出。然與二不空所譯三卷教王經等說相一大異

佛說一切如來眞實攝大乘現證三昧大教王經三十卷

施護三藏宋朝太平興國年中翻初會四大品指具

佛說最上根本大樂不空三昧大教王經七卷

法賢三藏宋太平興國中譯出。

是十八會中第六會廣本也。不空所譯理趣經彼會略本。故段段曼荼羅等不レ說レ之。七卷經具說レ之。又明二世出世間種々悉地一。與二指歸說一符合矣。

佛說一切如來金剛三業最上祕密大教王經七卷

施護譯、十八會中第十五會名二祕密集會瑜伽一此經應是從二彼會一出。檢二其說相一與二指歸文一最符合矣。右多依二果師一出レ之

とある。猶ほこれ等も其の疑の餘地を存するも是れに依つて見るに金剛頂瑜伽經は全譯はなくも、其の部分譯の存したることを見るのである。

(二)本經の說處と曼荼羅の相

(a)說處について

十八會中他會はさておき、第十五會に相應する本經は金剛頂經瑜伽十八會指歸(閏二、二四a)に「第十五會名二祕密集會瑜伽一於二祕密處一說。所レ謂喩師婆伽處說、號二般若波羅蜜宮一。此中說二教法、壇、印契、眞言、住禁戒一、似レ如二世間貪染相應語一、會中除蓋障菩薩等、從レ座起禮レ佛白言。世尊大人不レ應レ出二麁言雜染相應語一、佛言。汝等清淨相應語、有二何相狀一、我之此語、加二持文字一、應レ化緣二方便一、語レ引二入佛道一、亦無二相狀一、成二大利益一、汝等不レ應レ生レ疑、從レ此廣二說實三摩地一、諸菩薩各々說二四種曼荼羅四印一」と。空海の金剛頂經開題。(正藏六一、一c)にも同一の文を引用してゐる。此の中、說處を喩師婆伽處と云ふてをり、或は祕密處とも云ふのである。(密教發達誌は第十六會法界宮說と誤つてゐる)然からば此の喩師婆伽處とは本經には「一時の佛は一切如來の神通と(西藏文缺)一切如來の金剛三業と、一切如來の正智に住す、藏 hdi-skad-bdag-gis thos-pa dus gcig-na bcom-ldan-hdas-de-bshin-gsegs-pa tham-cad-kyi sku-daṅ gsuṅ-daṅ thugs-kyi sñiṅ-po rdo-rje-btsun-moḥi-bhaga-la bshugs-so」とあり。又大悲空智金剛大教王儀軌經(梵 he-vajra-tantra藏 hyeḥi-rdorje-shes-bya-ba rgyud-kyi rgyal-po)には「一時、薄伽梵は一切如來の身語心、金剛喩施婆倪に住す。藏本經に同じ、梵 sarva-tathāgata kāya-vak-citta vajra yogirbhageṣu」と云ふてある。即ち喩師婆伽處

の尊勝佛頂眞言修瑜軌儀卷下（正藏一九、三七八a）に九會の曼荼羅の圖を出だせるより構想して畫いたものであら[2]。猶其の外瑜伽大教王經の十八會の各會を說ける經典を曇寂の金剛頂大敎王經私記第一（正藏續六一、一二四c）に

金剛頂瑜伽略出念誦經四卷金剛智譯

此經多分略二出初會金剛界一兼雜二他會說一總說二四會一。於レ中成身羯磨三摩耶三會。從二初會金剛界品所說大曼荼羅中第一金剛界大曼荼羅一出。大供養一會從二第四廣大供養羯磨曼荼羅一出。又說二召罪。摧罪。業障除等印明一。是皆從二第二降三世品一出（見三十卷經第十。十紙）

此外、初起行住作法並正覺壇十三尊曼荼等。皆是應下從二餘會中一出上矣。

金剛峯樓閣一切瑜伽瑜祇經一卷金剛智譯

古來有二二義一。一此經十八會外深祕經（云云）一凡金剛不レ可レ出二十八會一。故此經亦十八所レ攝（云云）

金剛頂修習毘盧遮那三摩地念誦法一卷金剛智譯

心覺發問集意。此軌從二金剛界品所說一印曼荼一譯出。依二十八會指歸一「一印曼荼羅具二十七尊一十七尊者大日爲」中四波八供四攝總成二十七尊一此軌中亦說二此七尊一也

虛空藏求聞持儀軌一卷善無畏譯

此軌從二初會中一切義成就品一而出。彼品說二寶部法一。金剛頂開題云。第四一切義成就大品中說二六曼荼羅一。此中說二寶部虛空藏法一（云云）儀軌內題下注云。出二金剛頂一切義成就品一。

金剛頂蓮花部心念誦儀軌一卷不空譯

此軌有二成身羯磨三昧耶大供養四會一。與二略出經一其義相同。此等外有二慾大樂等印明一。應是從二第六理趣會中一而出矣。

金剛頂三十七尊分別聖位經一卷同譯

出二金剛界品第一曼荼羅中成身會一。

金剛頂壽命陀羅尼經一卷同譯

金剛頂壽命陀羅尼儀軌一卷同譯

此二本出二初會第二降三世品一。

大樂金剛不空眞實三昧耶經一卷同譯

金剛頂瑜伽他化自在天理趣會普賢修行念誦儀軌一卷同譯

此二經從二第六會一出

金剛頂瑜伽金剛薩埵五祕密修行念誦儀軌一卷同譯

此軌應是從二第十三中一而出。指歸云。復說二祕密中曼荼羅十七尊支分一。共成二五尊一同居二蓮華臺等一故

金剛頂勝初瑜伽中略出大樂金剛薩埵念誦儀軌一卷同譯

金剛頂勝初瑜伽普賢菩薩念誦法一卷同譯

大樂金剛薩埵修行成就儀軌一卷同譯

此三本從二第八會一而出、此會名二勝初瑜伽一故

金剛頂一切如來眞實攝大乘現證大教王經二卷同譯

は初會の金剛頂經所說の金剛界品の曼荼羅のみの研究にして其の著述を列すなれば西暦九世紀前半に、祕藏記に空海は其の端を開かれ十世紀後半石山寺の學匠にして、般若寺觀賢の著弟なる淳祐は曼荼羅會中の各尊の梵號・密號・種子・三昧耶形・印相・眞言・圖像の七種を聚集せる胎藏界七集三卷、金剛界七集二卷の著述あり、就中胎藏界七集三卷は淳祐が胎藏界について六部二十卷の著作をなしたるものゝ一部にして、其の後記に「内供奉十禪師傳燈大法師位淳祐撰之」とあるが、金剛界七集二卷は胎藏界七集に倣ふて後人の撰したるものであり、其名詳を明かにしないので淳祐の撰と傳へて此の兩部を合して石山七集と云ふてゐる。又十二世紀前半に覺鑁上人は鑁阿界祕事、兩部曼荼羅功德略鈔、金剛頂經蓮部心念誦次第沙汰、曼荼羅沙汰等の著作あり、十四世紀の始めに、信日上人は金剛界曼荼羅鈔二卷の著述あり、十八世紀前半に智積院十九世として名聲ある本圓僧正は兩部曼荼羅義記五卷を撰し、其の外菩提華祥蘂師は現圖曼荼羅金剛界諸尊便覽四卷の著等あり、近く栂尾祥雲師の「曼荼羅の研究」等あるも金剛頂瑜伽經の曼荼羅の研究とは云ひ得ない、勿論古來の研究がこの初會に殆んど限られたことは金剛界曼荼羅が眞言密教の根本聖典なる金剛頂經の中心思想であつて、其の思想は純清なるもので我國に傳へられたる唐代密教の精髓であることに基因してゐるのである。然し金剛頂瑜伽經の十八會を知るには宋代密教に表はれたる思想も不純なりとして一朝に捨てることは出來ない。今金剛界十八會の第一會金剛界品の六曼荼羅とは卽ち初めに金剛界大曼荼羅は普通に成身會と云ひ、施護の大教王經(第一――第六)。金剛界大曼拏廣大儀軌分に相當し、二に陀羅尼曼荼羅は三昧耶會と云ひ施護の教王經第七金剛祕密曼拏羅廣大儀軌分第二に相當し、三に微細曼荼羅は微細會と云ひ施護の教王經第七金剛智法曼拏羅廣大儀軌分第三に相當し、四に一切如來廣大供養羯磨曼荼羅は供養會と云ひ施護の教王經第八金剛事業曼拏羅廣大軌分第四に相當し、五に四印曼荼羅は四印會と云ひ六に一印曼荼羅は一印會と云ひ、此の二會は施護の教王經第八現證三昧大儀軌分第五に相當するのである。蓋し此の金剛界品に六曼荼羅ありと雖も、此れ成身會以外の五は、この根本成身會の妙用展廻の相であつて、成身會は四種曼荼羅に於ては大曼荼羅にして、三昧耶會は三昧耶曼荼羅、微細會は法曼荼羅、供養會は羯磨曼荼羅であり、四印會、一印會は成身會中の一部分抄出と見るを得るのである。但し現圖曼荼羅の九會の圖像は此の六會に理趣會、降三羯磨會、降三世三昧耶會の三會を加へたもので、慧果が善無畏三藏

云、次說第三會名一切教令瑜伽法界宮說。此經中說大曼怛羅五部、一一部五曼荼羅各三十七、成一大曼荼羅、一一尊各說四印、大印三昧耶印法羯磨印各說成就法。理趣經云、金剛部中乃至羯磨部中、皆具五部、一一聖衆具無量曼荼羅四印等亦無量也云云、此中曼荼羅廣大、如一切教集瑜伽經所說。薦福大和上金泥瑜伽曼荼羅是也。問。此曼荼羅樣如何。答復先置大輪、其中安置五箇大輪、一一輪中各置三十七尊、其座位樣如成身會、四方外院安一切外金剛衆、譬如屛位圍遶一城四邊而已、或持旗、或把棒、或執戟、或執鼓、其中主伴不可稱計。抑須薦福本圖耳（合直五箇七十三尊若加天后成九十三尊）」とある。是れ此の金泥の曼荼羅は第三會一切經集瑜伽經に由つて金剛智三藏が手繪したものであり、其の圖樣も他と異つたことを云ふてゐる。又此等の諸說より大村西崖氏は密教發達志第四不空譯經宣法

（六〇三頁）に「更說阿闍梨灌頂修行曼荼羅（蓮華座一圓光、中央畫金剛薩埵、左右畫二明妃）是所謂五祕密也。其曼荼羅觀行作法。各皆依金剛略法。又說五部各具五曼荼羅、而云如一切教集瑜伽經所說、若實然則第六會之一部。應同于第三會何有說別會之要乎。又注記云。薦福大和上金泥瑜伽曼荼羅是也。且就修行曼荼羅云。具如金泥曼荼羅像東南隅是也。薦福大和上者。蓋指金剛智、想金剛智所畫。有金泥五部五曼荼羅而其東南隅圖五祕密歟。五祕密者。初萠于瑜祇經理趣品末會說之、理趣釋蓋衍瑜祕之意次加之而漫言如第三會可知。」と即ち第三會は第六會の一部にして何等この會を別立する必要はないと云ふてゐる。此れ等の意に依れば、金剛峯樓閣一切瑜伽瑜祇經、最上根本大樂金剛不空三昧大教王經、遍照般若波羅蜜經等は總て、この會を說ける經典に屬するのである。是れ等に依つて、

金剛頂瑜伽經の梵本は古來の傳說とは異り、唐代に於て金剛頂瑜伽大本は金剛智三藏によつて請來せられ、しかも彼は其の梵本を見て他會の曼荼羅をも口述せられたことが解るのであり、且つ金剛頂瑜伽大本は金剛頂系に屬する箇々の經典の總名であつて別に瑜伽の大本があつたのではなく、一つの經集に名づけたものである。然し其の十八會の開攝の問題については、瑜伽大本の十八會は、其の會を說ける經典の所說に隨つて名を樹てたものであつて、其の經典は不空の十八會指歸に據れば四千頌、五千頌、七千頌等の經典であり（現に施護の三十卷金剛頂經第三十卷の終に四千頌と云はれてゐる）これらが集まつて十萬頌になるのであると。金剛頂瑜伽十八會指歸は其の目錄或は開題とも見るべきである。今胎藏界曼荼羅に關することはさておき（但し金胎を合一せるものは擧ぐ）古來本邦の古德

佛說一切如來金剛三業最上祕密大教王經解題

（一）金剛頂瑜伽大經と本經

金剛頂瑜伽大經とは古來十萬偈十八會ありとせられる經を云ふのである。金剛頂經開題（正續六一・一a）に「所謂金剛頂瑜伽一切如來眞實攝大乘現證大敎王經は、是れ其の題額なり、此れに二あり總と別となり。總とは金剛頂瑜伽の五言是れなり。此の經に都て十萬偈十八會あり、通じて金剛頂瑜伽と號す。別名は會に隨いて號を樹つ、初會は一切如來眞實攝大乘現證大敎王と名づく。卽ち此經是れなり」と云ふてゐる。此の中初會の一切如來眞實攝大乘現證大敎王とは不空譯の大敎王經にしてこの初會の經を云ふ。蓋し金剛頂瑜伽の大經は、金剛智三藏が渡唐の途次、難に遇ふて海中に投じたと古來傳へてゐる。卽ち金剛頂大瑜伽祕密心地法門義訣に此の經の百千頌本は此の國に未だ有らず。此の略本とは開元の初に、金剛菩提三藏云はく、我が西國より發し來りて南海を渡るに、其の大船三十餘隻あり。一一に皆五六百人あり、一時に同じく大海を過ぐ。行くこと海中に至りて大風に逢ふて、諸船及び人並びに皆漂沒す。我が附する所の船も亦沒せんとす。爾の時兩本經の經夾は常に身の近くに於て受持供養せり。其の時、船主船沒せんとするを見て、船上の諸物を海中に擲ぐ、時に怖懼して經夾の收めたるも忘れ、其の百千頌も亦海中に擲ぐ、唯だ略本存するのみとあつて其の略本を金剛智の譯せる金剛頂瑜伽中略出念誦經なりと云ふてゐる。唐代に初會を說いた經典の以外に金剛頂瑜伽中の梵本が全々なかつたとは云はれない。今金剛頂瑜伽中略出念誦經を檢するに是の經は初會のみを說いてゐるばかりでなく、他の會の說も雜へてゐる、又五大院安然の八家祕錄卷下諸圖像部第二十錄外祕密曼荼羅（正藏五五、一一三一b）の下に「薦福寺金剛三藏手繪金剛泥曼荼羅苗一楨仁會昌滅佛法日和上密屬二手工一令レ圖（那）本邦無二復異本一」とある。是れは薦福寺金剛智三藏が手から畫いた金泥の曼荼羅を又慈覺大師圓仁が、會昌滅法の日法全和上の好意に由りて、手工に屬して圖せしめたものである。この金泥の曼荼羅を、慈覺大師圓仁は請來、それを又智證大師圓珍が見て、其の著三部曼荼羅（佛全、智證大師全集第四、五頁b）の中に說明して「問金泥曼荼羅爲二何會一答指歸

諸法眞實の性相は皆空にして無相無作なり」と云へり。

【一八二】我執、梵語ātma-grāha. 西藏語 bdag-tu ḥdsin-pa. 衆生の體は元と五蘊假和合なるを知らずして、主宰の用ある個我の實在を妄執するを云ふ。成唯識論第一に我執の二種を説き俱生と分別となりとせり。

【一八三】六波羅蜜の眞言。前の六波羅蜜の註を見よ。

【一八四】六種の方便云云。六波羅蜜の修行に由つて三空即ち空、無相、無願(無作)と觀じて解脱するを云ふ。

【一八五】愚嚕耶。guhya 祕密と譯す。以下略出經第四、諸佛境界攝眞實經卷下、念持品等を見よ。愚嚕耶の眞言、略出經第四に出づom sarva-tathāgata-guhya mahā-pravarti-pūjā ma-gha samudra spharaṇa sa-maye hūṃ.

【一八六】四種の眞言云云。略出經第四に「常に應に毎日の四時に念誦すべし、謂はく、晨朝、日午、黃昏、夜半なり」と云へり。

【一八七】珠を持して云云。略出經第四に「應に四種の數珠を持して四種の念誦を作せ四種を作すとは、所謂ゆる音聲念誦、二に金剛念誦、三に三摩地念誦、四に眞實念誦なり。此の四種念誦力に由るが故に、能く一切の罪障苦厄を滅して、一切の功德を成就す」と云へり、

【一八八】廻向發願。諸佛境界攝眞實經卷下に廻向發願の眞言を説きom sarva kuśala mūlāni pariṇāmayāmi と云へり。

【一八九】華嚴經、梵名 buddhā vataṃsaka nāma mahā-vaipulya. sūtra. 西藏名 saṅs-rgyas phal-po che shes-bya-ba śin-tu rgyas-pa chen-poḥi mdo. 楞伽經、梵名laṅkāvatāra-sūtra 西藏名 laṅ-kar-gśegs-paḥi theg-pa chen-poḥi-mdo. 俱に金剛頂系の經典の本據をなす、就中楞伽經は分別聖位經にも引用せられたり。

【一九〇】金剛院承明殿不空三藏の灌頂道場なり。貞元新定釋教目錄第十五に「敕於大明宮南桃園翻譯。起自月朔終乎月望於承明殿灌頂道場御執舊經對讀新本」とあり。

【一九一】降三世忿怒曼荼羅會、兩部曼荼羅義記第五に「諸尊の位は皆成身會の如し、但し大日尊は智拳印に住す四智四波羅蜜の十六尊は皆二手拳と作し臂を交へを胸を押す。餘尊は成身會の如し。但し金剛薩埵は忿怒降三世を現ず。又外院の四角に三古位在り、天形を現ず、東南に鉤を持し、西南に刀を持し、西北に蓮花を持し、東北に空を持す。又種子は如上の成身會の如し」とあり。

【一九二】菩提心。略出經第四に「汝一心に聽け、菩提心とは大悲より起り、成佛の正因なり、智慧の根本たり、能く無明の業報を破し、能く慳怨を摧破す」とあり。

金剛頂瑜伽略述三十七尊心要(終)

つの金剛拳を左右の頸乃至胷腹に摩す即ち是の念を作す、我今此の牛頭栴檀の最上塗香を持し、十方の諸佛菩薩及び衆生の身に塗る」と云へり。

【一七二】四無量心。慈（梵maitri. 藏 byams-pa）悲（梵karuṇā. 藏 sñiṅ-rje）喜（梵muditā. 藏dgaḥ-ba）捨（梵upekṣā. 藏 btaṅ-sñoms）の四を云ふ。就中慈は東方普賢菩薩の三摩地にして法界體性智、大圓鏡智之に配せられ。悲は南方虛空藏菩薩の三摩地にして、平等性智之に配せられ。喜は西方觀自在菩薩の三摩地にして、妙觀察智之に配せられ。捨は北方虛空庫菩薩の三摩地にして、成所作智之に配せらる。

【一七三】檀波羅蜜、檀波羅蜜供を云ふ、略出經第四に「oṃ sarva tathāgata mahāvajrobhava-dāna-pāramitāpūja megha-samudra-spharaṇa-samaye hūṃ 論じて曰はく、一切如來の大金剛より生ずる所の檀波羅蜜の雲海を以て、普く供養す。香身の契を結び已て、是の思惟を作す。願くば一切衆生の身口意業の一切の不善を願くば皆遠離し一切の善法を願くば皆成就せんことを」と云へり。

【一七四】戒波羅蜜。戒波羅蜜供を云ふ。略出經第四に「oṃ sarva tathāgatānuttara-mahā-buddhahara kuśala(śīla)-pāramitā-puja-megha-samudra-spharaṇa samaye huṃ 論じて曰はく、一切如來の無上菩提より生ずる所の善戒波羅蜜多の雲海を以て、普く皆供養す。觸地の契を結び已て復是の念を作せ、願くは一切衆生懸心を成就して、相惱害することなく、諸の怖畏を離れ、彼れ此れ相視て、心に歡喜を生じ、諸の相好を以て、其の身を莊嚴し、一切甚深の法藏を成就すべし」と云へり。

【一七五】須彌頂、世界の中央なる須彌山の頂を云ふ、須彌山とは法苑珠林第二に「蘇迷盧山を以て中と爲す、高さ三百三十六萬里、四寶所成なり、東面は黃金、南面は琉璃、西面は白銀、北面は玻瓈なり」と云へり。

【一七六】忍波羅蜜。忍波羅蜜供を云ふ。略出經第四に「oṃ sarva-tathāgatānuttara-mahā-dharma mahā-buddh:(utpādana) kṣānti-pāramitā-pūja-megha-samudra-spharaṇa-samaye hūṃ 論じて曰はく、一切如來の無上法大覺悟より生ずる忍辱波羅蜜多の雲海を以て、普く皆供養す。金剛闘勝精進の堅を結び已て、是の思惟を作せ、願くば一切衆生菩薩の行を修して、精進堅固の甲冑を破らしめよ」と云へり。

【一七七】精進波羅蜜。精進波羅蜜供を云ふ。略出經第四に「oṃ sarva tathāgata saṃsāra sahāpratittaka(?)mahā-virya pāramitā-puja-megha-samudra-spharaṇa samaye hūṃ 論じて曰はく、「一切如來の生死を捨てざる大精進波羅蜜多の雲海を以て、普く皆供養し三摩地勝上の契を結んで、是の思惟を作せ願くば一切衆生をして盡く能く煩惱隨煩惱の怨讎を調伏し、一切の深禪定の相を、獲得せしめんと」と云へり。

【一七八】泥犂 niraya 地獄と譯す。翻譯名義集第二に摩訶止觀輔行傳弘決をひき、「地獄は義より名を立つ、謂はく地下の獄なり名づけて地獄と爲す」と云へり。經律異相第四十九、第五十に地獄の種類を列せるも、その主なるものは、八熱地獄（活・黑繩・合會・叫喚・大叫喚・熱大熱）八寒地獄（頞浮陀・尼羅浮陀・呵羅羅・阿婆婆・㬋㬋・漚波羅・波頭摩・摩訶波頭摩）とす。

【一七九】六道。地獄・餓鬼・畜生・阿修羅・人間・天上の六種なり。法華經序品に「六道とは衆生生死の所趣なり」と云へり。

【一八〇】禪波羅蜜。禪波羅蜜供を云ふ。略出經第四に「oṃ sarva-tathāgatānuttara mahā-ukta-vikāra dhyāna-pāramitā pūja-megha-samudra spharaṇa-samaye hūṃ 論じて曰はく一切如來無上大安樂住の禪定波羅蜜多の雲海を以て普く皆供養す。一切如來、能く一切衆生の願を授與する寶生の契を結び已て、是の思惟を作せ、願くば一切衆生五種の明處智を成就し、一切世間の智慧を、普く皆成就して、眞實の見を得、盡く煩惱障と所知障とを除く智を獲得し、辯才無畏の一切佛法を以て、其の心を嚴飾すと云へり。

【一八一】慧波羅蜜。慧波羅蜜供を云ふ。略出經第四に「oṃ sarva-tathāgatānuttaraklesa-jñāna-nivāraṇa-vāsana-jityana mahā-prajñāpāramitā-pūja-megha-samudra spharaṇa-samaye hūṃ 論じて曰はく一切如來の無上調伏にして、煩惱の習氣を滌むる大慧の波羅蜜多の雲海を以て普く皆供養す。勝上の三摩地の契を結び已て、應に思惟すべし。

遮那佛は復一切如來の適悦供養三昧耶に入る」と云へり。是れ此の菩薩は大日如來が阿閦如來を供養せんが爲めに流出せるものにして、阿閦如來は初發心の菩提を主るために、この菩提の悦意を供養するために出生せるなり。

【一六四】金剛鬘印。二手金剛拳になし左拳覆せて左腰に當て、右拳は仰げて不竪不横に心に當つ。是れ金剛鬘菩薩の印にして、是の菩薩は大日如來が寶生如來を供養するために流出せる尊にして、金剛頂經第二に「爾の時世尊毘盧遮那佛は復た一切如來の寶鬘灌頂三昧耶に入る」と云へり。

【一六五】金剛歌菩薩。是れ大日如來が無量壽如來を供養するために流出せる尊なり。

【一六六】六十四の梵音。

一、流澤聲。
二、柔軟聲。
三、悦意聲。
四、可樂聲。
五、清淨聲。
六、離垢聲。
七、明亮聲。
八、甘美聲。
九、樂聞聲。
十、無劣聲。
十一、圓具聲。
十二、調順聲。
十三、無澁聲。
十四、無惡聲。
十五、善柔聲。
十六、悦耳聲。
十七、適身聲。
十八、心生勇銳聲。
十九、心喜聲。
二十、悦樂聲。
二十一、無熱惱聲。
二十二、如教令聲。
二十三、善了知聲
二十四、分明聲。
二十五、善愛聲。
二十六、令生歡喜聲。
二十七、使他如教令聲。
二十八、令他善了知聲。
二十九、如理聲。
三十、利益聲。
三十一、離重複過失聲。
三十二、如師子音聲。
三十三、如龍音聲。
三十四、如雲雷吼聲。
三十五、如龍王聲。
三十六、如緊那羅妙聲。
三十七、如迦陵頻伽聲。
三十八、如梵王聲。
三十九、如共命鳥聲。
四十、帝釋美妙聲。
四十一、如振鼓聲。
四十二、不高聲。
四十三、不下聲。
四十四、隨入一切音聲。
四十五、無缺減聲。
四十六、無破壞聲。
四十七、無染汚聲。
四十八、無希取聲。
四十九、具足聲。
五十、莊嚴聲。
五十一、顯示聲。
五十二、圓滿一切音聲。
五十三、諸根適悦聲。
五十四、無譏毀聲。
五十五、無輕轉聲。
五十六、無動搖聲。
五十七、隨入一切衆會聲。
五十八、諸相具足聲。
五十九、令衆生心意惟喜聲。
六十、説衆生心行聲。
六十一、入衆生心喜聲。
六十二、隨衆生信解聲。
六十三、聞者無分量聲。
六十四、衆生不能思惟稱量聲。

【一六七】金剛舞菩薩。是の菩薩は大日如來より不空成就佛を供養せんがために、神通舞戲三摩地に住して流出せる尊なり。金剛頂經第二に「則ち彼の婆伽梵は金剛を持し、一切世界の微塵等の如來の身と爲る、復た聚まつて一體と爲り、金剛舞大天女と爲る」と云へり。

【一六八】金剛寶印。金剛燒香菩薩の印なり。金剛頂瑜伽中略出念誦經第三に「本の如く、縛し二羽の掌を覆け、下に之を按ず、此を燒香と名づく」と云ひ、諸佛境界攝眞實經卷下に「金剛拳を結び、二拳を相並べ、拳の面を下に向け、舒べて兩拳を出す、即ち是の想を作す、無量の香雲は印の上より出づ、即ち金剛燒香の印と名づく」と云へり。

【一六九】劫樹の印。金剛華菩薩の印なり。金剛頂瑜伽中略出念誦經第三に「本の如く二羽の掌を仰け、上に之を擧ぐ、此れを華の供養天三摩耶の契と名づく」と云ひ諸佛境界攝眞實經卷下に「金剛拳を結び、二拳を相並べ仰けて上に舒べて出す、是れを金剛花の印となす」と云へり。

【一七〇】羯磨三昧耶の印。金剛燈菩薩の印なり。金剛頂瑜伽中略出念誦經第三に「本の如く縛契し、智定度を竪つ、此れを燈供養天三摩耶の契と名づく」と云ひ、諸佛境界攝眞實經卷下に「金剛拳を結び兩拳を相合す近く心前に置く、即ち金剛燈の印と名づく」と云へり。

【一七一】達摩三昧耶の印。金剛塗香菩薩の印なり。金剛頂瑜伽中略出念誦經第三に「本の如く縛し拳を開ひて、其の胸の前に摩し已つて、各分けて外に向く、此れを塗香供養天三摩耶の契と名づく」と云ひ、諸佛境界攝眞實經卷下に「爾

す。精勤決定を金剛と名づく」と云へり。

【一四九】虚空藏菩薩。梵名 ākāśa-garbha. 西藏名 nam-mkhaḥi-sñiṅ-po. 或は梵名 gagana-gañja. 西藏名 nam-mkhaḥ-mdsod-pa. 大日經疏第十一に「虚空は破壞すべからず、一切も能勝者たるなきが如き故に、虚空等力と名づく。又藏とは人大寶あつて所欲の者に施すに自在にして之を取れば貧乏を受けざる如し、如來の虚空の藏も亦復た是の如し、一切の利樂、衆生の事も皆中より出づ、無量の法寶も自在受用にして窮竭の相なし、虚空藏と名づく」と云へり。

【一五〇】觀自在菩薩。梵名 avalokiteśvara. 西藏名 spyan-ras-gzigs-dbaṅ-phyug. 般若理趣釋卷下に「觀自在菩薩は手に蓮華を持す、一切有情の身中を觀ずるに、如來藏性自性淸淨の光明あり、一切惑染の染する能はざるなり。觀自在菩薩の加持に由りて離垢淸淨を得て聖者と等同なり」と云へり。

【一五一】羯磨大菩薩。梵名 amogha-siddhi. 金剛界七集卷上に「私に云ふ、羯摩杵を一切金剛と名づく、萬德威儀圓滿するが故に」と云へり。

【一五二】五智金剛杵。金剛頂瑜中略出念誦經第二に「先づ金剛縛し已つて、忍願度を相著けて竪て、進力度を以て、忍願の傍に於て曲叉の如くす。竪たるのと相去ること兩大麥許り。又定智度及び檀慧度を以て、兩兩相合し、竪てて叉股の如くす。是を金剛契と名づく」と云へり。

【一五三】弓箭の印、金剛愛菩薩は菩提心を愛念し、衆生の菩提を厭離する心を射害する大悲の德を內證として、其の印を弓箭とせり、略出經第三に「次に又二つの跋折囉を畫け、其の形箭の如し」と云へり。

【一五四】歡喜の印、金剛喜菩薩は菩提心に於ける大悲の行を喜び稱讚し、一切衆生をして三業淸淨にして、憂惑を除き歡喜踴躍を獲しむるなり。略出經第三に「次に稱善哉を畫け拳を彈指像の如く作るべし」と云へり。

【一五五】虚空藏大菩薩の大寶印、略出經第三に「次に掌中に寶珠を畫け、光明焰を具す」と云へり。

【一五六】金剛威光大菩薩の印、此の金剛威光菩薩は一切如來の福德の大威光を以て、有情界を照し、無智の暗を破るを其の內證とせり。略出經第三伽に「次に金剛日輪の印を畫け、上は光明焰の如くすべし」と云へり。

【一五七】金剛幢菩薩の印、金剛幢とは幢旗の竿頭に如意寶珠を着せたるものにして、是れ世間出世間の希願を滿足せしむる檀波羅蜜の行願大悲心を表せるものなり。略出經第三に「次に寶幢を畫け、其上に火焰光を畫くべし」と云へり。

【一五八】金剛笑菩薩の印、金剛笑菩薩は廣く有情を度して能く事滿足せるを歡喜し微笑するを其の內證とせり。略出經第三に「次に橫に雙跋折囉を畫け、中間に露齒の像を畫くべし」と云へり。

【一五九】次に當に云云。金剛法菩薩を表す文なり。此の觀自在菩薩（略出經、瑜祇經等に金剛法菩薩を觀自在菩薩と稱す）は諸法の本性淸淨の理を證得せるが故に、譬へば蓮華の泥に染まざる如きなり、金剛頂經第一に「爾時婆伽梵復た觀自在大菩薩の三昧耶に入り。法加持を出生す、金剛三摩地と名づく」と云ふ。略出經第三に其の三昧耶を說き「次に跋折囉を畫け、腰に蓮華あり」と云へり。

【一六〇】文殊室利菩薩。金剛利菩薩と同體なり。金剛頂經第一に「爾の時婆伽梵復た曼殊室利大菩薩の三昧耶に入る、法加持を出生す、金剛三摩地と名づく（中略）金剛劒形を生じ佛掌中に住す、則ち彼の金剛劒形より、一切世界微塵等の如來身を出ず」と云ひ、又略出經第三に「次に金剛刀劒を畫け熾焰光を具す」と云へり。

【一六一】法輪淸淨觀、金剛頂經第一に「時に世尊一切如來の輪に入る、金剛三摩地と名づく、一切如來の大漫荼羅三昧耶は無餘の有情界を盡し、不退轉法輪に入らしむ」と云ひ、略出經第三に「次に金剛輪輻金剛を畫くべし」と云へり。

【一六二】無言三昧耶、金剛頂經第一に「爾の時婆伽梵復た無言大菩薩摩訶薩の三昧耶に入り法加持を出生す、（中略）時に世尊一切如來の祕密語三昧耶に入る、一切如來祕密語言智三摩地と名づく、無餘の有情界を盡して、語を成就せしむ」と云へり。是れ此の菩薩は、祕密微妙の言語を以て衆生の戲論の妄言說を絕無するたり。略出經第三に「次に其の舌を畫け、赫奕光明を具す」と云へり。

【一六三】金剛喜戲菩薩、金剛頂經第二に「爾の時世尊、毗盧

して闕乏する所なし、復た自身諸佛に同じ、一切供養して願を滿ぜずと云ふことなし。即ち虛空庫菩薩の同事する所なり。

已上六段親しく阿闍梨の所に於て決擇す。

花を持せり。【二三】偈に曰はく。金剛頂經第二に「奇哉華供養、能作諸莊嚴、由如來寶性、速疾獲供養」と云ひ、略出念誦經第二に「我是華供養、能爲諸嚴身、供養寶性已、速獲於菩提」と云へり。【二四】華は已に云云。金剛燈菩薩を明す。【二五】金剛燈菩薩。梵名嚩日囉路計 vajrālokā. 金剛燈明侍女菩薩とも云ふ。密號を普賢金剛除暗金剛と云ふ。種子は dīḥ. 形像は白色にして、燒爐を持す。【二六】偈に曰く、金剛頂經第二之に同じ。略出念誦經第二に「我是大供養、以爲淸淨燈、若具法光明、速得諸佛眼」と云へり。【二七】燈は既に云云。金剛塗香菩薩を明す。【二八】金剛塗香菩薩。梵名嚩日囉健題 vajra-gandhā. 金剛塗香侍女菩薩とも云ふ。密號は淸淨金剛勝淨金剛と云ふ。種子は gaḥ. 三形は塗香器、形像は靑色にして、塗香器を持す。【二九】偈に曰く、金剛頂經第二之に同じ、略出念誦經第二に「我塗香供養、是殊妙性意、若以如來香、遍授一切身」と云へり。【三〇】已上第一金剛香菩薩、第二金剛花菩薩第三金剛燈菩薩、第四金剛塗香菩薩は外四供養にして略出念誦經第二に「都て一切如來の敎示を奉受する天女と名づく」と云へり。【三一】即ち云云。金剛鉤菩薩を明す。【三二】金剛鉤菩薩。梵名嚩日囉矩捨 vajrāṅkuśa. 密號を普集金剛、召集金剛、鉤引金剛と云ふ。種子 jaḥ. 三形は金剛鉤、形像は黑色にして、左手拳にし、右手鉤を取る。【三三】偈に曰く、金剛頂經第二之に同じ、略出念誦經第二に「我是諸如來、堅固三摩耶、若我鉤召已、祇奉一切壇」と云へり。【三四】既に鉤の義云云。金剛索菩薩を明す。【三五】金剛索菩薩梵名嚩日囉幡賒 vajra-pāśa. 密號を等引金剛、慈引金剛と云ふ。種子は hūṃ. 三形は索。形像は白黃色にして右手に索を取る。【三六】偈に曰く、金剛頂經第二之に同じ、略出念誦經第二に「我是諸如來、金剛固羂索、設入諸微塵、復令彼引入」と云へり。【三七】索の義云云。金剛鎖菩薩を明す。【三八】金剛鎖菩薩、梵名嚩日囉薩普 vajra-sphoṭa. 金剛鎖械菩薩、金剛鏁菩薩とも云ふ。密號を堅持金剛妙住金剛と云ふ。種子は vaṃ. 三形は鎖、形像は肉色にして、左手拳にし、右手鏁を取る。【三九】偈に曰く。金剛頂經第二之に同じ。略出念誦經第二に「我是諸如來、金剛堅鉤鎖、雖一切縛解、爲生故受縛、縛住性中」と云へり。【四〇】鎖の義云云。金剛鈴菩薩を明す。【四一】金剛鈴菩薩。梵名嚩日囉吠捨 vajra-veśa. 密號を解脫金剛歡喜金剛と云ふ。種子は hoḥ. 三形は金剛鈴、形像は靑色にして鈴を取る。【四二】大種智。一切智智を云ふ。即ち一切如來の佛智を云ふなり。【四三】偈に曰く。金剛頂經第二之に同じ、略出念誦經第二に「我是諸如來、金剛攝牢固、能爲一切主、亦復作僮僕」と云へり。已上第一金寶鉤菩薩、第二金剛索菩薩、第三金剛鎖菩薩、第四金剛鈴菩薩は四攝の四菩薩にして略出念誦經第二に「已上は一切如來の受教者と名づく」と云へり。【四四】鉤召し。金剛鉤菩薩に配し。【四五】引入し。金剛索菩薩に配し。【四六】縛し。金剛鎖菩薩に配し。鎖は繫ぎ留むるの義なり。【四七】調伏す。金剛鈴菩薩に配し。鈴は四魔を驚覺し、自ら調伏するの義なり。この四菩薩は大日如來化他の爲めに示現せる身なり。【四八】金剛薩埵。梵名 vajra-sattva. 西藏名 rdo-rje-sems-dpaḥ. 金剛頂瑜伽中略出念誦經第四に「一切衆生の所有る心は、堅固菩提にして薩埵と名づく、心不動三摩地に住

息災と調伏との如き法則は又別なり。眞言の加句道場に引入する法事は、皆本部に依ても亦その撥を同せず。今此に啓鑿せば衆疑を斷ぜしむ、此れに依て修行せば必ず差謬なけん、即ち經に依て廣說せんと欲せば、義は密にして申べ難し。諸餘の軌儀備さに經の內に在り。且らく金剛界の三十七尊に約して要門を修集し、輪環鉤帶して而も敷演す。弟子等、既に法施を蒙て喜躍深きを增す。虔恭して一心に佇立して聽き口の依に鈔寫して私かに記せり。

次に空・無相・無願の解脫門に入るとは、所謂る空とは一切の法皆空なり。空の體も亦空なれば空も亦た不可得なり。無相とは地・水・火・風・男・女等の相幷に靑・黃・赤・白なり。此の十相に於て一切の萬法、體を擧げて皆空なり。以て一切の相空にして不可得なりとなす。無願とは、凡そ所修の道は三界の希望の心を絕せり。願求する所あるは皆是れ有相なり、永く妄想を絕し、願求する所の心を斷つ。願もなく、求もなきは是れ眞の解脫なり。この三相空なるに由るが故に即ち解脫の法門に入て、この正理を悟る。即ち身に光明有て法界に廓周し、即ち毘盧遮那の正體智に同ず。皆縣㗚耶の眞言を誦するに由る。此の密印を結で即ち三密觀解脫門に入り、一境一心にせよ、即ち當に證悟すべし。次に三秘密口印、此の三密に由て、三業清淨なり。此の身法界に滿ち、微塵盡く是れ一切諸佛なり。一一の佛の前に於て皆自身あり。諸佛の足下に於て禮拜し承事し供養し懺悔し發願すと觀ぜよ。四大印とは初は金剛薩埵なり。想へ五智の杵、常に[一九二]菩提心月輪の上に在りと。其の杵は無量の光明を發して、即ち菩提心智を成ず。第二は寶印なり。即ち虛空藏菩薩金剛福德の聚、珍寶無窮なり。又能く一切如來に灌頂して衆生の願を滿ず。次に觀自在菩薩なり。此の印に由るが故に、能く法界をして清淨ならしむ、無言の觀門に入て、舌の上に於て五智金剛を觀ぜよ。光明赫奕として說法無疑なり。即ち勝義の菩提印に入る。第四は羯磨印なり、羯磨金剛杵を想へ、此の杵の印を結で、月輪に於て、心上に旋轉せよ。法界に滿る輪なり。諸有の所願皆滿足することを得、承事供養

菩薩、第四金剛舞菩薩は、內供養の四菩薩にして略出念誦經第二に「已上の四は都て、一切の諸如來の密法供養なり」と云へり。

【一七】阿閦如來云云。金剛焚香菩薩を明す。

【一八】金剛焚香菩薩梵名嚩日囉杜閉 vajra-dhūpa. 又金剛焚香侍女菩薩とも云ふ。密號を無礙金剛、速疾金剛と云ふ。種子は [illegible] aḥ. 三形は薰爐なり。形像は黑色にして、香爐を持す。

【一九】偈に曰く。金剛頂經第二之に同じ。略出念誦經第二に「我爲天供養、能令善滋茂、若入諸衆生、速得證菩提」と云へり。

【二〇】香已に云云。金剛華菩薩を明す。

【二二】有情。sattva 舊譯に衆生と譯し、新譯に有情と譯すと普通云へるも、俱舍論には有情。譯語を出せり。之れ原語異るに依る。即ち有情は生を有するものゝ總稱に用ひ、衆は有生無生に通じて用ひたる語なるが如し。

【二三】金剛華菩薩。梵名嚩日囉補澁閉 vajra-puṣpa. 又金剛覺花侍女菩薩とも云ふ。密號を妙色金剛、清淨金剛と云ふ。種子は [illegible] oṃ. 三形は花盤なり。形像は淺黃色にして、鮮

の心に住して、[一八七]珠を持して念誦せよ。持念すること畢已はらば、種種の讃歎を誦し、種種の名華を獻じて、百字の眞言を誦し、卽ち塵刹佛海に入て、運心して廣大にせよ。供養法事既に畢らば、則ち前に羯磨の三十七尊印より、後ちに便ち三昧の契及び十六大供養乃至十七の雜供養を結べ、已後、閼伽を獻じて[一八八]迴向發願し、然して卽ち三昧耶に入れ、心三摩他觀門に住して念誦し、卽ち經行して念を息め、[一八九]大乘華嚴楞伽等の經を轉讀し、佛道を思惟せよ。

國師大三藏和上[一九〇]含暉院承明殿の大道場に於て頃ろ餘暇に因つて梵經を披讀し、忻然として顏を熙しめ法樂虛適す。大慈の戶を開きて、諸の童矇を誘ひ良緣を啓いて知見せしむ。我が秘教は浩汗にして涯りなく、法體幽微にして實に際を窮め難し、今且らく瑜伽の教跡に依て、略ぼ指南をなす。眞言の門爰に理趣を開けり。今說く能觀は毘盧遮那佛報身これなり、所觀は四智の如來なり。能觀はこれ四方の如來、所觀はこれ十六大菩薩なり。能觀はこれ心、所觀はこれ境なり。八供養及び四大護菩薩等各能所を具す。能所を具すと雖も、能所の體は本空なり。空有の理本なければ、中道の心斷に契ふ。今此に金剛界三十七尊大曼荼羅及び賢劫の千佛、外金剛部の二十天及び四十天等を建立す。これ初原にして、展轉して無量の曼荼羅を相生す。

今また[一九一]降三世忿怒曼荼羅會の三十七尊調伏の法則を建立せん。文殊乃至諸天、外金剛部は稍諸の法に異れり。且らく修證に依て、略ぼ指陳を述べん。三昧耶心に於て出入無礙にして精しく理智を修し、菩提心に住し、舒展すること涯りなく、法界に廓周して衆を成じ、卽ち金剛光明峰內に入れ、虛空を出づるごとく虛空に遍滿し、微塵海會の如來咸な來て同じく證す。又心印を傳へ、微細の觀門を指示す。金剛の一乘を以て心要となす。

又護摩の法を說かん、益を獲ること窮りなし、凡そ施爲するところは、須らく師に依て受くべし。爐の數壇所爲不同なり、蘇蜜・柴薪倶に妙用を申ぶ。香藥、飲食を供養するが如くに至ては、

菩薩を明す。

【二〇九】箜篌梵語 vira. 西藏語 pi-wan. 樂器の名。和名を久太良古止と云ふ。

【二一〇】金剛歌菩薩。梵名嚩日囉霓帝 vajra-gīta. 又金剛歌詠天女菩薩とも云ふ。密號を無畏金剛、妙音金剛と云ふ、種子は gīḥ. 三形は箜篌なり形像は白色にして左手に箜篌を取り右手に之を彈く。

【二一一】偈に曰く。金剛頂經第二之に同じ、略出念誦經第二に「我是諸供養、以爲歌詠者、雖能令歡喜、假設如空響」と云へり。

【二一二】歌詠を具云云。金剛舞菩薩を明す。

【二一三】廣大儀軌、如來の儀則を云ふ。

【二一四】金剛舞菩薩。梵名嚩日囉儞哩帝曳 vajra-nṛtya. 又金剛法舞天女菩薩とも云ふ。密號を神通金剛、妙通金剛と云ふ。種子は kṛta. 三形は羯磨杵。形像は左手の五指を舒べ、左股に當て、右手の五指を舒べて胸に當つ。

【二一五】偈は曰はく金剛頂經第二之に同じ。略出念誦經第二に「廣大一供一切供、能作利益遍世間、若以金剛舞儀式、而能成就佛供養」と云へり。

【二一六】已上第一金剛嬉菩薩、第二金剛鬘菩薩、第三金剛歌

恭敬し隨順し、喜悅して心に從ふ。これ卽ち忍波羅蜜の行相なり。

[一七七]精進波羅蜜とは、若し人、修行すれども、精進して苦行を勤行すること能はざれば、解脫を求むるに至て、魔卽ち便りを得て、[一七八]泥犂生死海中に墮在す、[一七九]六道に巡環して出ることを得るに由なし。この故に須らく精進の鎧甲を被て、懈怠の魔を摧き、萬行を精修して悉くみな成就すべし。威德自在なること日輪のごとく、三千の威儀、八萬の細行みな此の我を持するに由れり。精進波羅蜜の行相なり。

[一八〇]禪波羅蜜とは、凡そ人の修行するに、心多く散亂して計慮を爲し、卽ち六種の散動を備ふ。身心を纏繞し、念安からずんば解脫することを得ず。所以へに須らく心を一境に住せしめて更に異緣を緣ぜざるべし。四種の禪法の中に於て、如來清淨禪の中に住して、妄想を除かんと求め、須らく無住の住に住し、常に離念の心に依り、實相圓明にして法界に廓周し、大菩提の路此れに由て致すべし。此れ禪波羅蜜なり。

[一八一]智慧波羅蜜とは、智は能く了別し、慧は乃ち辨明す。明鏡の能く衆色を鑒るが如くにして、大小乘の法に差謬あることなし。其の[一八二]我執の二相を除いて大乘の心に住し、菩提を圓滿し、眞如際を證す。卽ち是れ如來と平等法身なり。修行者は六波羅蜜の印を結び、[一八三]六波羅蜜の眞言を誦し、六波羅蜜の觀門に住すれば卽ち一切如來の解脫如如智と同なり。法身は此の[一八四]六種方便に由つて卽ち三空の解脫門に入る。空無相無願の解脫門とせらる。一切萬法は擧げて體皆空なれば一事として眞ならざるなく、一物として實ならざるなし。眞空妙有にして、實相圓明なり。[一八五]愚呬耶の眞言を誦せよ。卽ち是れ毘盧遮那如來の正體は圓智なり。斯の勝上の義に由つて、轉じて便ち如來口の印を結で三密門觀に住して、三秘密の眞言を誦すれば、一切の有情解脫せざることなし。所出の法要を衆生に廻施せば、見聞覺知悉く三界を超ゆ。四大印を結び[一八六]四種の眞言を誦し、百字の明を誦し、三摩地

事業羯磨」と云へり。

【一〇一】已上第一金剛波羅蜜菩薩、第二金剛寶波羅蜜菩薩、第三金剛法波羅蜜菩薩、第四金剛業波羅蜜菩薩は如來部の四菩薩なり、略出念誦經第二に「都て一切如來摩訶波羅蜜と名づく」と云へり。

【一〇二】毘盧遮那佛云云。金剛嬉菩薩を明す。

【一〇三】金剛喜戲菩薩金剛嬉菩薩の異名。梵名嚩日羅邏西 vajra-lāsī. 密號を普教金剛と云ふ。種子[illegible]　三形は三佋三古杵形像は黑色にして二手拳となし各腰の側に安ず。

【一〇四】偈に曰はく、金剛頂經第二之に同じ、略出念誦經第二に「我無比供養、餘無有能者、若以愛供養、能成諸供養」と云へり。

【一〇五】今喜戲云云。金剛鬘菩薩を明す。

【一〇六】金剛鬘菩薩。梵名嚩日囉摩犂 vajra-mālī. 密號を妙嚴金剛と云ふ。又金剛花鬘天女形菩薩とも云ふ。種子は[illegible]　形像は花鬘を取つて胸の前に橫ふ。

【一〇七】偈に曰く金剛頂經第二之に同じ、略出念誦第二に「我是無寶、名寶供養、若於三界、爲勝諦王、卽以供養、而爲敎令」と云へり。

【一〇八】寶鬘供養云云。金剛歌

し。

次に、六波羅蜜の行に入れ。

[一七三]檀波羅蜜をば、是れ寶部となす。この故に亦無住の檀施に由て、等虚空界の一切有情の所求の者を意に隨て願を滿じ、みな之に施與す。復た生死の中に於て、衆生を愍念し、救護の爲の故に、悉く滿足せしむ。亦た能く菩提心を護り、未度の者をば度せしめ、未安の者をば安ぜしめ、亦よく種種の珍寶を雨して、廣く有情に施して、圓滿し富樂し、豐饒ならしめて、解脫を得せしむ。

[一七四]戒波羅蜜とは三聚淨戒なり。一には攝律儀戒、二には攝善法戒、三には攝衆生戒なり。亦饒益有情戒と云ふ。一切の戒行はみな攝律儀戒の管る所なり。持戒に由るが故に、身・口・意清淨の果報を獲得す。これ卽ち毘盧遮那如來の滿法界身如如の體に同なり。亦斷德といふ。攝善法戒とは、一切の善法みな此の戒に屬す。亦智德と云ふ。卽ち是れ毘盧遮那如來の圓滿報身なり。色相莊嚴し、光明赫奕たり。[一七五]須彌頂に據つて、諸の菩薩の爲に、大乘經を說くこと是れなり。饒益有情とは、卽ち是れ釋迦牟尼如來の化身なり。如來の世界に於て、有情を愍念して、變化身を作し、種種の方便を以て衆生を救度して彼岸に登らしむるに由て、卽ち恩德と名づく。此の三德の義に由て、總じて之を言はば、戒波羅蜜の攝化するところなり。

[一七六]忍波羅蜜に五義あり。一には伏忍、二には信忍、三には順忍、四には無生忍、五には寂滅忍なり。伏忍を東方に配し、信忍を南方に配し、順忍を西方に配し、無生忍を北方に屬し、寂滅忍を中央に配す、此の五方卽ち五如來なり。地前の三賢は伏忍なり。且らく初地、二地、三地を信忍に配し、四地五地六地を順忍に配し、七地、八地、九地を無生忍に配在し、十地を滿足に、等妙覺を寂滅忍に配す。忍波羅蜜を持するに由るが故に、所生の處に端正の果報ありて、眷屬圍遶することを得せしむ。功德廣大にして無量無邊なり、窮盡すべからず。之を見聞する者は、悉くみな歡喜し、

密號を大寶金剛、寶金剛と云ふ。種子 trāḥ 形像は白黄色にして、左手の蓮華上に寶函あり、右手に四角の金輪あり。

【九三】偈に曰はく。金剛頂經第二之に同じ、略出念誦經第二に「諸佛金剛契、我是寶金剛、堅牢灌頂門、說如來身印」と云へり。

【九四】觀自在王如來云云。金剛法波羅蜜菩薩を明す。

【九五】金剛法波羅蜜菩薩。梵名達磨嚩日囉 dharma-vajri. 密號を清淨金剛、蓮花金剛と云ふ。種子 hrīḥ. 形像は肉色にして無量壽の印を蓮華上に承け、篋あり。

【九六】偈に曰はく。金剛頂經第二之に同じ、略出念誦經第二に「一切佛謂我、清淨法金剛、若以性清淨、雖染而清淨」と云へり。

【九七】不空成就如來云云。金剛業波羅蜜菩薩を明す。

【九八】羯磨。karma 業と譯す。

【九九】金剛羯磨波羅蜜菩薩。梵名羯磨嚩日囉 karma-vajri. 密號を妙用金剛、作業金剛と云ふ。種子 aḥ. 形像は青色にして左手の蓮華に篋あり、右手羯磨杵を取る。

【一〇〇】偈に曰はく金剛頂經第二之に同じ、略出念誦經第二に「一切如來智、我多種羯磨、金剛若唯一、盡遍佛世界、能

の杵を持して頂上に安じ。一切如來の事業を成就し、衆生の事業悉くみな成就す。

次に、當に[一六四]金剛鬘印を以て莊嚴の事業をなすべし、衆寶より成ぜる羂索の寶鬘を以て、嚴飾をなし、此の印を額の上に安ぜよ。

次に、[一六五]金剛歌菩薩は、能く如來の[一六六]六十四の梵音歌讚吟詠を成じ、みな殊勝を成ず。箜篌の印を持して、有の肩に置在すれば、出づる所の言音みな妙法を成ず。

次に、[一六七]金剛舞菩薩は、神通自在にして十方に變化す、擧動施して佛事をなすにあらざることなし。

この四菩薩は、北方の四親近の大菩薩にして、業部の管るところなり。

次に、外の供養菩薩の印を結べ、卽ち金剛焚香、及び金剛華・金剛燈乃至塗香菩薩等なり。以て十七の雜供養となす。[一六八]金剛寶の印を以て供養すれば、能く有情をして所求の願を滿ぜしむ。[一六九]金剛妓樂歌讚諷誦簫瑟箜篌の微妙の法音を以て、供養をなす。

次に、[一七〇]劫樹の印を結び、能く諸の有情をして、能く殊勝の願を滿ぜしむ。百千の珍寶、玩弄の諸物・名衣・上服・凡て須むる所あれば、此の樹間に於て、みな滿足することを得、乏少あることなし。

次に[一七一]羯磨三昧耶の印を結び、當に思惟すべし。虛空の中に於けるあらゆる一切の諸の如來に、我れみな承事し供養す。一一の佛の前に想え。此の身有て瞻禮し供養すと。

次に、應に[一七二]達磨三昧耶の印に入るべし。當に思惟を作すべし。我れ今此の身と諸佛菩薩の身と等し、法の實性を觀ずるに差別あることなく、更に異相もなし。卽ち一切如來の身に同ずと。

已上は三摩地法の修行なり。

次に、六波羅蜜の法を行じ、有情を度し、[一七三]四無量心、弘誓願、發菩提心に於て卽ち當に證悟すべ

【八六】偈に曰く。金剛頂經第二之に同じ。金剛頂瑜伽中略出念誦經第二に「我是三摩耶堅牢縛身者、諸願求成就、雖解脫示縛」と云へり。

【八七】已上第一金剛業菩薩、第二金剛語菩薩、第三金剛牙菩薩、第四金剛拳菩薩は羯磨部の四菩薩にして金剛頂瑜伽中略出念誦經第二に「四菩薩の三摩地を都て一切如來の羯磨智と名づく」と云へり。

【八八】阿閦如來以下は四佛より毘盧遮那如來を供養せる四波羅密菩薩出生せるを明す。

【八九】金剛波羅蜜菩薩。梵名薩怛嚩嚩日離sattva-vajri. 又は薩怛縛縛日羅冒地薩怛縛摩訶薩怛縛 sattva vajra bodhi-sattva mahā sattva と云ふ。大日如來の東方にあり。密號を堅固金剛と云ふ。種子 hūṃ. 形像は黑青色にして、左手の蓮に篋あり。右手阿閦如來の印となす。

【九〇】偈に曰く。金剛頂經第二に「奇哉一切佛、薩埵金剛堅、由堅無身故、獲得金剛身」と云ひ、略出念誦經第二に「諸佛與薩埵。金剛極堅牢、若以堅牢故、非身金剛身」と云へり。

【九一】寶生如來云云。金剛寶波羅蜜菩薩を明す。

【九二】金剛寶波羅蜜菩薩。梵名囉怛那嚩日離 ratna-vajri.

して、面前に旋轉すること日輪を轉ずるが如し。

次に、[一五七]金剛幢菩薩の印を結べ、如意寶幢のごとく、能く一切有情の求願を滿じて滿足せしむ。之を擧て、直く上ぐること寶幢の由若くせよ。

次に、[一五八]金剛笑菩薩の印を結べ、能く一切の賢聖諸佛の海會及び天仙等をして歡喜せざらしむと云ふことなし。之を口より已上に置き、以て大喜笑を表はす。

已上は寶部の四供養菩薩なり。

[一五九]次に、當に蓮華部三摩地に入るべし、此の觀自在菩薩の觀に住するに由て、能く有情をして、法に無礙にして染汚する所なからしむ。卽ち蓮華の印を持して、口中に安住し、淸淨の法音を演べ化するところなり。

次に、當に[一六〇]文殊室利菩薩の智慧の觀に入べし、當に有情をして正法を辨明し、智慧の劍を持して、能く邪山を破し、二乘の見執の心を絕して、法の空・無相・無願の解脫門に住せしむべし。右の耳輪の邊に安じ、以て止住す。

次に、當に[一六一]法輪淸淨觀に入て能く無上の法輪を轉じ、三度法輪を大千に轉じて、廣く有情を度し、卽ち金剛因菩薩の金剛輪器杖を持して、左の耳に安住して以て幖幟とたす。

次に、當に[一六二]無言三昧耶に入り、一切の萬法みな言語を離るべし。言語は性空にして、本來常寂なり。また所說なし、卽ち金剛語菩薩、金剛舌を持して、卽ち頂後に安住して、以て無言を表はす。

已上の四親近菩薩は法部なり。

次に、業部の十七供養をせよ。卽ち[一六三]金剛喜戲菩薩能く有情をして適悅歡喜せしめたまふ。三鈷

第二に「奇哉精進甲、我固堅固者、由堅固無身、作金剛勝身」と云ひ、金剛頂瑜伽中略出念誦經第二に「精進所成甲堅牢、堅牢於餘堅牢者、以堅牢故非色身、能爲最上金剛身」と云へり。

【八〇】精進旣に云云。金剛牙菩薩を明す。

【八一】金剛藥叉菩薩。金剛牙菩薩の異名。梵名嚩日囉藥乞灑 vajra-yakṣa. 金剛摧伏菩薩とも云ふ。密號を猛利金剛、護法金剛、調伏金剛と云ふ。種子 hūṃ. 三形は牙、又は三鈷端雙なり。形像は白黃色にして二手拳になし臆に當つ。

【八二】偈に曰はく。金剛頂經第二之に同じ、金剛頂瑜伽中略出念誦經に「我是諸佛大方便、有大威德應調伏、若爲寂靜利衆生、摧滅魔故作暴惡」と云へり。

【八三】斯の威猛云云。金剛拳菩薩を明す。

【八四】四無量心。慈、悲、喜、捨の四を云ふ。

【八五】金剛拳菩薩。梵名嚩日囉散地 vajra-saṃdhi. 又辨現輪菩薩とも云ふ。密號を祕密金剛と云ふ。種子 vaṃ. 三形は二金剛拳なり。形像は祕藏記に「青色にして、二手拳と作し、揚げて心に當つ、腕は屈して稍々垂る」と云へり。

次に[一四八]金剛薩埵三摩地印に入り、菩提心を堅固にせよ。

次に[一四九]虚空藏菩薩の大寶印に入り、一切衆生の所願を滿足して匱乏する所なきことを獲得せよ。

次に蓮華三昧耶[一五〇]觀自在菩薩の印に入れ、此れ清淨にして染著なきに由る故に、一切の殊勝微妙の法を獲。

次に、[一五一]羯磨大菩薩三摩地に入り、能く一切如來の事業、衆生の事業を成じ、あらゆる修持成就せずと云ふことなし。此れ乃ち毘盧遮那及び四大菩薩、卽ち五如來に同なり。

次に、當に十六大菩薩の供養を修行すべし。是れ諸の大菩薩供養のための故に、各各器械の印を持して、身上の諸の支分の間に布在し、能く如來のために、大佛事を作す、初め金剛薩埵、[一五二]五智金剛杵の印を持し、以て堅固勇猛なる菩提心を表す。

次に、金剛王菩薩、金剛雙鉤の印を持し、四攝法を行じ、一切如來及び一切有情を召するに雲集せずと云ふことなし、之を右脇に置き以て標幟となす。

次に、金剛愛菩薩の[一五三]弓箭の印を結び、能く一切有情を愛念して、又た能く二乘の見執の心を射せしむ、之を左脇に置き、用て一切の色相染著する所なし。

次に、婆度大菩薩の[一五四]歡喜の印を結び、一切如來及び、諸の聖衆はみな善哉して、彈指し、讃歎し隨喜せり。之を腰の後に置き以て善哉を表はす。

已上は金剛部の四大供養なり。

次に、當に[一五五]虚空藏大菩薩の大寶印を結ぶべし。能く一切有情の所求を滿じて、みな得せしむ。之を額に置き、種種の寶を雨らし、また摩尼寶缾を持し、一切如來のために灌頂す。

次に、當に[一五六]金剛威光大菩薩の印を結ぶべし。威光、赫奕として能く千日を蔽ひ、金剛の日を持

部の菩薩なり、金剛頂瑜伽中略出念誦經第二に「已上四菩薩は是れ蓮華部なり、一切如來の大智三摩耶薩埵なり」と云へり。

【七三】語智に通ず云云、金剛業菩薩を明す。

【七四】五種の施。一施遠來者、二施遠去者、三施病痩者、四施餓鬼者、五施智法人、

【七五】毘首羯磨菩薩。金剛業菩薩の異名。梵名、嚩日囉羯磨 vajra-karma. 又虛空庫菩薩とも云ふ。密號を善巧金剛、辨事金剛と云ふ。種子 kaṃ. 三形は羯磨なり。形像は二手合掌して頂上に揚ぐ。

【七六】經の偈、金剛頂經第二之に同じ、金剛頂瑜伽中略出念誦經第二に「諸佛羯磨不唐捐、羯磨金剛所能轉、唯我住茲能廣爲、以無功用作佛事」と云へり。

【七七】既に事云云。金剛護菩薩を明す。

【七八】難敵精進菩薩。金剛護菩薩の異名。梵名嚩日囉路乞沙 vajra-rakṣa. 金剛精進菩薩、摩訶無畏とも云ふ。密號精進金剛、難敵金剛と云ふ。種子 haṃ. 三形は甲冑なり。形像は青色にして二手各頭指を舒べ、自餘の指は屈し揚げて腋側に當つ。

【七九】偈に曰はく、金剛頂經

設へ諸の微塵入るとも、　我復た此を引入せん。

[一三七]索の義既に辨ぜり。制止の理未だ行ぜず。即ち毘盧遮那佛は內心中より、[一三八]金剛鎖菩薩を流出せり。其れ鎖の義は制止の義なり。能く一切の諸惡趣門を閉ぢ、大慈悲を起して、一切有情に救護を生じ能く一切の衆印を縛す。及び如來の使を以て倶に解脫に由て大涅槃を得せしめ、復微塵海會の如來をして、此の道場に於て三摩地心に住せしめ、同じく密嚴の佛會をして、大佛事を作さしむ。

[一三九]偈に曰く、

奇しき哉一切の佛、　大堅の金剛鎖(鏁)は、
諸の縛をして脫せしむる者なり、　(これ)有情の利の故に縛するなり。

[一四〇]鎖の義、制止の事を具すと雖も、理智に遍入するに未だ圓通せず。即ち毘盧遮那佛は內心中より[一四一]金剛鈴菩薩を流出し、光明の磬を執持して、之に供養せり。無量微妙の音を發生するに、一切の聖衆、聞者は歡喜せざるなし。諸佛の種子なる惡字は能く一切如來の身心の中に遍入して、瑩けること明鏡の如し、無量の有情の身田に、[一四二]大種智を下し、能く諸佛の所に於て、身を捨て、僮僕と作て、承事供養し、三摩地の中に於て、適悅し歡樂す。これ乃ち金剛鈴菩薩の妙響なり。[一四三]偈に曰く、

奇しき哉一切の佛、　我れは堅金剛入なり、
一切の主宰となり。　亦た即ち僮僕たり。

此れ乃ち一切如來の三昧耶を以て、[一四四]鉤召し、[一四五]引入し、[一四六]縛し、[一四七]調伏するなり。三昧耶の印を結び、已て能く修行の人をして、諸の三摩地佛性海の中に入れ、適悅し安樂す、斯れに由て供養せしむ。

次に五如來の供養法に入れ、即ち毘盧遮那佛の觀に入つて、遍照尊の印を結べ、觀門せば即ち身心清淨にして菩提を圓滿して法界に廓周す。

誦經第二に「此是諸如來、般若波羅蜜、能破諸怨敵、滅罪中爲最」と云へり。

【六七】斯の斷惑云云。金剛因菩薩を明す。

【六八】轉法輪菩薩。金剛因菩薩の異名、梵名嚩日羅係都 vajra-hetu. 又金剛輪菩薩とも云ふ。密號は不退金剛、菩提金剛と云ふ。種子 [illegible] maṃ. 三形は八輻輪なり。形像は肉色にして左手拳に作し腰に安す、右手金輪を持す。

【六九】經の偈。金剛頂經第一之に同じ、金剛頂瑜伽中略出念誦經に「於執金剛中、金剛輪爲上、彼以纔發心、而能轉法輪」と云へり。

【七〇】無言菩薩。金剛語菩薩の異名。梵名、嚩日羅婆沙 vajra-bhāṣa. 金剛言菩薩とも云ふ。密號を性空金剛、妙語金剛とも云ふ。種子 [illegible] raṃ. 三形は舌上三鈷なり。形像は如來舌を持す。

【七一】經の偈、金剛頂經第一に「奇哉自然密、我名祕密語、所說微法、遠離諸戲論」と云ひ、金剛頂瑜伽中略出念誦經第二に「自然之祕密、我爲密語言、若說於正法、遠離語戲論」と云へり。

【七二】已上第一金剛法菩薩、第二金剛利菩薩、第三金剛因菩薩、第四金剛語菩薩は蓮華

出し、香印を執持して、毘盧遮那如來に供養せり。此れは妙塗香にして、能く一切有情の欝熱の疾を除く。如來の五分法身なる、戒・定・慧・解脱・解脱知見を獲、其の體を莊嚴し、亦能く清涼菩提心の廣大圓滿なるを證得す。此れ乃ち金剛塗香菩薩の供養なり。[129]偈に曰く、

奇しき哉香の供養、　我が微妙の悅意は、
如來の香に由るが故に、　一切身を授與す。

[130]已上は四菩薩外供養なり。

八供已に畢れり。四攝の事未だ圓ぜず。[131]即ち毘盧遮那の內心中より、[132]金剛鉤菩薩を流出して、之を召集す。夫れ鉤と爲すに、四攝の義あり。愛語・布施・利行・同事にして、能く無量の衆生を運度す。復た衆魔を調し難きあるも能く折伏す。亦能く狂象を控制して、皆順從ならしむ。即ち此れ大菩提心廣大圓滿なり。猛利堅固して、決定して不退なり。亦能く一切賢聖を召集して、道場に降臨し、能く一切の眞言行の菩薩を滿じ、悉地を速證す。此れ即ち金剛鉤菩薩の召集の智なり。[133]偈に曰く、

奇しき哉一切の佛、　我が堅固を鉤誓せり、
我が遍き鉤召に由て、　諸の曼荼羅を集めり。

[134]既に鉤の義を具せり。引攝の事未だ圓ぜず。即ち毘盧遮那佛の內心中より。[135]金剛索菩薩を流出す。能く一切の煩惱・無明・妄想・昏闇の心を禁制し、能く一切苦輪に縛せらるゝを、解脱せしむ。復た能く禪定の大菩提心を等引す。一切の印衆皆來て聚會せり。微塵の佛刹、咸な悉く曼荼羅道場に降臨して、共に佛事を作す。[136]偈に曰く、

奇しき哉一切佛、　我は金剛索を堅めり、

念誦經第二に「我是第一義、本來自清淨、筏喩於諸法、能得勝清淨」と云へり。

【六一】筏喩。法門を筏に喩へたるを云ふ。發菩提心論に「復た次に諸佛の慈悲は眞の起用に從つて、衆生を救攝して、病に應じて藥を與ふ。諸法門を施すに、其の煩惱に隨ふ。迷津を對治するに栰に遇ふて彼岸に達せば、法も亦捨つべし無自性の故に」と云へり。

【六二】法の圓滿云云。金剛利菩薩を明す。

【六三】般若波羅蜜 prajñā-pāramitā. 六波羅蜜の一。智到彼岸と譯す。

【六四】結使の心。煩惱心を云ふ。金剛頂經第一に「一切如來は結使の三昧耶を斷じて、盡く有情界を餘すところなし、一切の苦を斷じて、一切の安樂悅意を受けしむる故に」と云へり。

【六五】文殊菩薩。金剛利菩薩の異名。梵名、嚩日囉底乞灑拏 vajra-tīkṣṇa 又妙吉祥菩薩、金剛受持菩薩、金剛劍菩薩とも云ふ。密號は般若金剛、除罪金剛と云ふ。種子 dhaṃ. 三形は利劍なり。形像は金色にして左手花上に篋あり、右手利劍を持せり。

【六六】經の偈。金剛頂經一之に同じ、金剛頂瑜伽中略出念

佛の供養を安立す。

金剛の舞儀に由て、

一一六 已上は四菩薩內供養なり。

一一七 阿閦如來は、內心中より焚香菩薩を流出し、毘盧遮那如來を供養す。其の香は雲か海の如くにして、法界を遍周す。見聞覺知の者に、能く適悅を生ぜしめ、能く諸の佛體中に遍入して、悅樂歡喜せしむ。此れ乃ち一一八金剛焚香菩薩にして、大佛事供養を作すなり。一一九偈に曰く、

奇しき哉大供養、　悅澤して端嚴を具す。

薩埵の遍入に由て、　速疾に菩提を證す。

一二〇 香已に供養せり。寶生如來は內心より微妙の覺華を流出し、毘盧遮那如來に奉獻す。金剛寶蓮なるに由て、その華開敷して光明あり。厥の光鮮美なり。福德の聚、種種の莊嚴、能く一二一有情に安樂の願を施す。此れ乃ち一二二金剛華菩薩の妙用なり。一二三偈に曰く、

奇しき哉一切佛、　能く諸の莊嚴を作す、

如來の寶性に由て、　速疾に供養を獲。

一二四 華は已に供養せり。未だ光明を獲ず、即ち觀自在王如來は內心中より、金剛智燈を流出し、毘盧遮那如來に承事供養す。光明は照徹し、如來の五眼の清淨を獲得す。內外の障色を悉く咸な覩見し、內證智に於て、一切法を照し、本性清淨なること摩尼の由若し、百光千明を能く映蔽せず、智慧の日斯れに由て燈す。此れ乃ち一二五金剛燈菩薩の智照なり。一二六偈に曰く、

奇しき哉我か廣大なる、　供養燈は端嚴なり、

速かに光明を具するに由て、　一切の佛眼を獲、

一二七 燈は既に供養せり。未だ清涼なるを獲ず。即ち不空成就如來は、內心中より一二八金剛塗香菩薩を流

瑜伽中略出念誦經第一に「以上は寶部中の四菩薩なり。是れ一切如來の大灌頂薩埵なり」と云へり。

【五六】能く願云云、金剛法菩薩を明す。

【五七】勝義の菩提。勝れたる覺なり。發菩提心論に「二に勝義とは、一切法無自性と觀ず。云何が無自性、謂はく凡夫は名聞、利養、資生の具に執著す、務むるに安身を以てし、恣に三毒五欲を行ず、眞言行人は誠に厭患すべし、誠に棄捨すべし」と云へり。

【五八】行願の因、菩提に進まんとせる心也。發菩提心論に「謂はく修習の人は常に是の如き心を懷く、我當に利益安樂にして有情界に餘すところなし。十方の含識を觀ること己身の如し、言ふところの利益とは一切有情を勸發して悉く無上菩提に安住せしむるなり」と云へり。

【五九】觀自在菩薩。金剛法菩薩の異名。嚩日囉達磨 vajra-dharma. 西方阿彌陀如來の前方にあり。又金剛眼菩薩とも云ふ。密號は正法金剛、蓮華金剛と云ふ。種子 hrīḥ. 三形は開蓮なり。形像は肉色にして蓮華を持す。

【六〇】經の偈、金剛頂經第一之に同じ、金剛頂瑜伽中略出

奇しき哉無比の有、　　　諸佛中の供養なり、
貪染の供養に由つて、　　　能く諸の供養を轉ず。

[一〇五]今喜戲の供養を具す。毘盧遮那佛は內心より[一〇六]金剛寶鬘を流出し、其の體を嚴飾す、卽ち衆寶を集めて用て莊嚴と爲せり。寶聚の光明は福德圓德にして、五種の施願能く滿足せり。南方寶生如來の曼荼羅の左邊の月輪に住す。[一〇七]偈に曰く、

奇しき哉我は無比なり、　　　稱して寶供養となす、
三界に王として勝れり、　　　敎勅して供養を受けり。

[一〇八]寶鬘供養已りぬ。卽ち毘盧遮那は內心より大悲方便を流出し、三摩地心に住して、歌讃諷詠を發し、供養を興し已つて、六十四種の梵音を獲得し、說法無礙に住す。其の音清雅にして、衆樂・簫瑟・[一〇九]箜篌をして能く供養せしむ。此れ卽ち音聲もて佛事となす。法利の言說は本體自ら空にして、眞如は凝然として法界清淨なり。此れ乃ち[一一〇]金剛歌菩薩の供養語智なり。觀自在王如來の曼荼羅の左邊の月輪に住す。[一一一]偈に曰く、

奇しき哉歌詠を成じ、　　　我れ諸の見者に供す、
此の供養に由るが故に、　　　諸法響の應ずるが如し。

[一一二]歌詠を具すと雖も、未だ神通を獲ず。卽ち毘盧遮那佛は內心中より、如來事業及び衆生事業を流出す。善巧智及び自受用智を作し、種種に供養し、金剛舞印を結び、[一一三]廣大儀軌をもて、大神通を現じ、妙舞莊嚴、以て佛事と爲す。微塵の佛刹にして、供養すること恒沙なり。三昧門を出入すること無礙なり。此れ乃ち[一一四]金剛舞菩薩の妙用なり。不空成就如來の曼荼羅の左邊の月輪に住す。[一一五]偈に曰く、

奇しき哉廣く供養し、　　　諸の供養を作すが故に、

【四九】 金剛幢菩薩嚩日囉計都 vajra-ketu. 又善利衆生、虛空旗菩薩とも云ふ。南方寶生如來の前方にあり。密號は圓滿金剛、滿願金剛、種々金剛と云ふ。種子 trāṃ. 三形は幢幡なり。形像は肉色にして二手幢幡を持す。

【五〇】 檀波羅蜜。梵 dāna-pāramitā. 六波羅蜜の一。布施到彼岸と譯す。布施することに依つて彼岸に到るを云ふ。

【五一】 經の偈、金剛頂經第一之に同じ。金剛頂瑜伽中略出念誦經第一に「此是諸如來、希求能圓滿、名爲如意幢、檀波羅蜜門」と云へり。

【五二】 既に施の利云云、金剛笑菩薩を明す。

【五三】 金剛笑菩薩、嚩日囉賀娑 vajra-hāsa. 南方寶生如來の後方にあり。密號は歡喜金剛と云ふ。種子 haḥ. 三形は笑杵、橫雙杵齒或は三鈷なり。形像は肉色にして二手合せ耳側に揚げ拳に作す。

【五四】 經の偈。金剛頂經第一之に同じ。金剛頂瑜伽中略出念誦經第一に「此是諸如來、示生現希有、大智能踊躍、二乘所不知」と云へり。

【五五】 已上第一金剛寶菩薩、第二金剛光菩薩、第三金剛幢菩薩、第四金剛笑菩薩は南方寶生如來の眷屬なり。金剛頂

一切の印衆に於て、　堅灌頂の理趣なり。

[94]觀自在王如來は、內心に大蓮華智慧の三摩地智を證得し、自受用の故に、大蓮華智慧三摩地智より、蓮華光明を流出し、遍ねく十方世界を照し、一切衆生の客塵煩惱を淨め、還り來て一聚に收り、一切の菩薩を印し、三昧耶自受用智を受用せしめんが爲めの故に、[95]法波羅蜜菩薩の形を成じ、大蓮華を持し、毘盧遮那如來の後の月輪に住す。[96]偈に曰く、

奇しき哉一切の佛、　法金剛にして我れ淨なり、
自性清淨なるに由つて、　貪染をして無垢ならしむ。

[97]不空成就如來は、內心に於て、[98]羯磨金剛大精進の三摩地智を證得し、自受用の故に、羯磨金剛大精進の三摩地智より、羯磨の光明を流出し、遍く十方世界を照し、一切衆生をして、一切の懈怠を除き、大精進を成ぜしめ、還り來て一聚に收り、一切の菩薩を印して、自ら三摩耶智を受用せしめんが故に、[99]羯磨波羅蜜菩薩の形を成じ、羯磨金剛を持し、毘盧遮那如來の左邊の月輪に住す。[100]偈に曰く、

奇しき哉一切の佛、　我れは多業の金剛なり。
一切を成ずるに由て、　佛界に善く業を作る。

[101]已上は四波羅蜜菩薩の堅固の體なり。

虛空の由若くして能く沮壞することなく、烟塵雲霧の能く空界を翳し、日月の光猶ほ障礙をなすがごとく、一切衆生は本來自性清淨なれども、客塵煩惱と、能所の二相とのために、その心を纏染せられて、自在なることを得ず、今此の妄想の所有本體は自ら空なり。諸法不生たりと了すれば、空有無礙なり、是に於て、[102]毘盧遮那佛は、卽ち菩提心觀に住し、徹照圓明にして、適悅莊嚴種種の供養を流出す。此れ乃ち[103]金剛喜戲菩薩の大菩提心の妙用なり。不動如來の曼荼羅の左邊の月輪に住す。[104]偈に曰く、

閦佛の眷屬なり、都て號して一切如來摩訶三摩耶薩埵と爲す」と云へり。

【四二】斯の善法云云金剛寶菩薩を明す。

【四三】虛空藏菩薩、金剛寶菩薩、跋日囉囉怛那 vajra-ratna の異名。諸佛境界攝眞實經には金剛胎菩薩と云ふ。密號を大寶金剛、如意金剛、庫藏金剛と云ふ。種子は oṃ 三形は寶珠（火焰あり）なり。肉色にして、右手寶珠を持し胸に當て、左手與願なり。

【四四】經の偈。金剛頂經卷上之に同じ。金剛頂瑜伽中略出念誦經第一に「我是自灌頂、金剛寶無上、雖無住著者、然爲三界主」と云へり。

【四五】灌頂を受く云云、金剛光菩薩を明す。

【四六】金剛威光菩薩。梵、縛日羅諦惹 vajra-teja. 又金剛光菩薩とも云ふ。南方寶生如來の右方にあり。密號は威德金剛、威光金剛と云ふ。種子 aṃ 三形は日輪光焰なり。肉色にして二手日輪を持し、前に當て手を以て日輪を押す。

【四七】經の偈金剛頂經第一之に同じ。略出經第一に「此是諸佛習、除滅無智闇、以微塵等量、超越於日光」と云へり。

【四八】既に光明云云金剛幢菩薩を明す。

奇しき哉大方便、　諸佛の悲愍なり。
有形の寂靜に由つて、　暴怒の形を作して示めす。

[八三]斯の威猛に由つて、解脫の理之を助成し、三輪苦際の衆生、祕密の金剛、而も能く濟度す、大權の方便、三密の加持、祕印を、心傳し、三摩地に住し、一切の法要を以て、而も能く縛を解し、苦を脫せしめ、樂を與へ、[八四]四無量心に住す。此乃ち、[八五]金剛拳菩薩の密印智なり。[八六]偈に曰く、

奇しき哉我が堅縛、　我は堅三昧耶なり。
[八七]諸の意樂を成ずるが故に、　解脫者を縛となす。

已上の四菩薩は羯磨部なり。

[八八]阿閦如來は、內心に於て、金剛波羅蜜を證得し、金剛三昧耶に入つて、一切三摩地智を加持す。自受用の故に、五峯光明金剛菩提心の三摩地智中より、金剛光明を流出し、十方世界を遍照し、一切衆生の大菩提を淨め、還り來りて一聚に收り、一切菩薩を印せしめ、自ら三昧耶智を爲すが故に、[八九]金剛波羅蜜菩薩形を成じ、金剛杵を持し、毘盧遮那如來の前月輪に住す。[九〇]偈に曰く、

奇しき哉一切佛、　我は堅金剛身なり。
堅の無身に由るが故に、　金剛身を獲得す。

[九一]寶生如來は內心に於て、虛空寶大摩尼藏の功德三摩地智を證得し、自受用の故に、虛空寶大摩尼藏の功德三摩地智より、虛空寶の光明を流出し、遍く十方の世界を照らし、一切衆生をして、功德圓滿ならしめ、還り來て一聚に收り、一切の菩薩を印して三昧耶智を受用せしめんとす。故に[九二]金剛寶波羅蜜菩薩の形と成り、大摩尼寶を持し、毘盧遮那如來の右邊の月輪に住す。[九三]偈に曰く、

奇しき哉一切の佛、　我れを寶金剛と名く、

「奇哉不空王、金剛所生鉤、由遍一切佛、爲成就鉤召」と云ひ、略出經卷一に「我是不空王、從彼金剛生、以爲大鉤召、諸佛成就故、能遍一切處、鉤召諸如來」と云へり。

【三八】　金剛愛菩薩。梵、跋折囉阿囉伽 vajra-rāga 金剛薩埵の左方にあり。密號を自性金剛と云ふ。種子は 𑖮𑖺𑖾 hoḥ なり、三形は雙鉤なり。肉色にして、二手拳と作し、腕を交し、把して二風を舒べ、指頭の端を出す。又執鉤金剛と云ふ。

【三九】　經の偈、金剛頂經卷上之に同じ略出經第一に「我自性淸淨、能以染愛事、奉事於如來、以離染淸淨、染故能調伏」と云へり。

【四〇】　斯の勝行云云金剛喜菩薩を明す。梵、跋日囉娑度 vajra-sādhu. 金剛薩埵の右方にあり。密號を善哉金剛、讃嘆金剛、安樂金剛と云ふ。種子は 𑖭𑖾 saḥ 三形は彈指形なり。肉色にして二手胸に當て、彈指す。

【四一】　經の偈、金剛頂經卷上之に同じ。金剛頂瑜伽中略出念誦經第一に「此是諸佛等、善哉能轉者、此殊妙金剛、能增益歡喜」と云へり。已上第一金剛薩埵、第二金剛王菩薩、第三金剛愛菩薩、第四金剛喜菩薩は東方阿閦如來の眷屬なり。略出經第一に「以上四菩薩は、並びに是れ金剛部中阿

奇しき哉、我が祕密、　我を祕密語と名く、
所說の微妙の法は、　諸の戲論を遠離せり。

七二 已上の四菩薩は法部なり。

七三 語智に通ずと雖も、而も諸佛の事業及び衆生の事業は、未だ之を成就せず。卽ち一切業用の善巧門に入りて、成辦せられ、廣く供養を興し、有情を利樂し、虛空を以て庫藏となす。是の中の珍寶は、虛空の中に滿ちて蒼生を給濟し、七四 五種の施は匱乏することなく、十方の如來、一切の諸佛は、微塵刹海に、心を普ねくし供養す。卽ち 七五 毘首羯磨菩薩の善巧智なり。七六 偈に曰く、

奇しき哉我が不空、　我が一切業は多し、
功無くして佛事を作し、　能く金剛業を轉ず。

七七 旣に事を具し、堅固の精進をもて、之を妙用すべし、若し精修せずんば、魔は卽ち便りを得て、退還を生ぜん、所以に精進の鎧甲を被て、萬行を持し、心を修めて法門を守護し、退轉せざらしむ。卽ち慈護は廣大にして、能く懈怠を除き、堅猛の智を護り、頓に究竟菩提を成じ被らずと云ふことなし、此乃ち 七八 難敵精進菩薩の大慈護なり。七九 偈に曰く、

奇しき哉堅固の甲、　我れは堅固にして固き者たり。
堅固の無身に由りて、　堅固の身を獲得す。

八〇 精進旣に具せり。天魔・蘊魔・及び煩惱魔等は、須らく之を摧伏して、八一 金剛藥叉の形を示し、可畏の牙を作し、熾焰赫奕にして、恚怒威猛にして、金剛の牙を持して、自らの口中に安じ、能く一切有情の無始よりの無明を、及び諸の執見を食して之を摧滅して、大悲方便を作して、能く一切如來を恐怖せしむ。此乃ち金剛藥叉菩薩の大悲方便の智なり。八二 偈に曰く、

從堅固無身、獲得薩埵身」と云ひ。又略出經第一に「我是普賢、堅固薩埵、雖非身相、自然出現、以堅牢固、爲薩埵身」と云へり。

【三四】 大普賢。金剛薩埵は一に一切衆生。二に初修行の人。三に阿閦の內眷屬、卽ち普賢金剛手。四は大日の內眷屬にして、卽ち大普賢と云ふ。

【三五】 四攝法。梵 chatuh sam-graha vastu 又四攝事とも云ふ。一、布施攝、若し衆生財を樂めば財を布施し、法を樂めば法を布施し、是れに因て親愛の心を生じ、我に依つて道を受けしむを云ふ。二、愛語攝、衆生の根性に隨て善言慰喩す、是に因て親愛の心を生じ、我に依つて道を受けしむを云ふ。三、利行攝、身口意の善行を起して衆生を利益し、これに由て親愛の心を生ぜしめ、道を受けしむを云ふ。四、同事攝、法眼を以て衆生の根性を見、其の所樂に隨て形を分けて示現し、其の所作を同じくして利益に霑はしめ、是れによつて道を受けしむを云ふ。

【三六】 金剛王菩薩、梵、跋折囉阿囉穰 vajra rāja. 密號を自性金剛と云ひ、種子を jiḥ なり。阿閦如來の右方にあり。白色にして二手叉して拳にす。

【三七】 經の偈金剛頂經卷上に

動是れを六種散動と名く。心王を制止する能はず、須らく三摩地法を修して、以て其の心は、殊勝の行門、微妙の理義、大悲方便に住す、而して之を筏喩とす。[五七]勝義の菩提、[五八]行願の因、玆に頓證す。此れ乃ち[五九]觀自在の菩薩の悲智なり。[六〇]偈に曰く、

　奇しき哉我が勝義、　　本より清淨にして自然なり。
　諸法は[六一]筏喩の如し、　　清淨にして而も得べし。

[六二]法の圓滿を悟ると雖も、結使の煩惱、仍ほ未だ之を遣らず、是に於て文殊師利大菩薩の[六三]般若波羅蜜は圓滿して、智慧涯りなし、遂に乃ち智劍を操持して羂網を劃斷し、四魔と二乘の確執の心を除害して、所住なし、空有に居らず、永く二邊を絕し、能く一切有情の[六四]結使の心を斷じて、常に無爲に住して、智慧圓明なり、卽ち[六五]文殊般若の智慧なり。[六六]偈に曰く、

　奇しき哉一切の佛、　　我れ微妙の音を聞く、
　慧には色なきに由るが故に、　　音聲もて得べし。

[六七]斯の斷惑に由つて、須らく妙法斯に傳ふべし。卽ち纔かに發心すれば、[六八]轉法輪菩薩なり。三摩地の心に住し、大悲願行を起し、正法輪を轉じ、輪輻の光明大千界を動かす。三輪清淨にして、諸の曼陀羅に於て以て主宰たり、諸魔の所に於て之を敎令し、有情を調伏して、正に三昧を受けしむ。卽ち金剛場菩薩の智輪の用なり。[六九]偈に曰く、

　奇しき哉金剛輪、　　我れは金剛の勝行なり。
　纔かに發心するに由るが故に、　　能く妙法輪を轉ず。

妙法旣に轉ず、須らく頓に無言語文字の本空に入るべし、眞如法界は平等の修多羅藏なり。大乘の無を悟つて、開演せざるなく、玆を以て勝法を共に諸佛と談論し、律を念誦し、良に一代の眞言備さに此れに在り、乃ち[七〇]無言菩薩の語言三摩地智なり、[七一]偈に曰く、

智を云ふ又淸淨法性とも云ふ。梵 dharma-dhātu-svabhāva-jñāna.藏 rdsogs-pu-choś-dbyiṅs-ye-śes. 阿字本不生の理を觀照する智にして、諸法の根本眞理を觀照する智なり。已上五佛五智五部を說きたり。毘盧遮那如來の眞如法界智より餘の四智は出生せると見らる、卽ち眞如法界智は總體の智にして、餘の四智は部分的の智なり。又大日は普門の尊、餘の四佛は一門の尊、卽ち大日の分身と見らる。

【三一】次に云云、四佛の四方に在る佛を明す、是れ慧門十六大菩薩といふ。皆男身なり。

【三二】金剛薩埵。跋折羅薩埵梵 vajra-sattva藏 rdo-rje-sems-dpaḥ又普賢菩薩、金剛手とも云ふ。密號は眞如金剛、種子は ञः(aḥ) なり、阿閦如來の前方にあり。背は月輪に倚り、白蓮華に座し、右手五智金剛杵を持し、心上に安じ、左手般若波羅蜜金剛鈴を執り胯上に按ず、其身白色なり。右手金剛杵を心上に按ずるは一切如來の法印を主り、杵を持するは十種の煩惱を摧く。左手鈴を持するは般若波羅蜜淸淨の法音を以て、一切有情及び二乘人を驚覺するを表す。

【三三】經の偈、金剛頂經卷上に「奇哉我普賢、堅薩埵自然、

佛は所著なきに由て、　名けて三界主と爲す。

[四五]灌頂を受くと雖も、未だ威光を獲ず、須らく日輪の圓光を受け、洞かに千界を照すべし。金剛光明の日を持する所以は、赫奕暉煥にして、皎徹すること涯なし。微塵數の日ありと雖も、能く映奪すること莫し、此れ乃ち[四六]金剛威光菩薩の照徹なり。[四七]經の偈に曰く、

　奇しき哉無比の光、　有情界を照耀す、
　能く靜にして清淨なる者なり、　諸佛の救世者なり。

[四八]既に光明廣大にして、功業彌よ高し、錫賚酬賞するに、須らく檀施あるべし、即ち[四九]金剛幢菩薩なり。大摩尼幢を建立し、上に如意寶珠を安じ、光明照曜し、摩尼と百寶の幢と蓋と繒旛と微妙の香華とを雨して、皆一切有情に施與して、所須意に隨ひて、[五〇]檀波羅蜜行を滿足し、大悲心を具し、無量の珍財、施すに施す所なし。得る所無所の心なり、此れ乃ち金剛幢菩薩の大悲願力なり。[五一]偈に曰く、

　奇しき哉無比の幢、　一切の益成就し、
　一切の意滿ぜざる者なり、　一切の願を滿ぜしむ。

[五二]既に施の利を蒙て喜悅心に成す即ち奇特の志を獲て、發言するに、歡喜・微笑・悅樂して、廣く有情を度して、喜捨の心は能く事を備ふ。此れ[五三]金剛笑菩薩、奇特の喜智なり。[五四]偈に曰く、

　奇しき哉我が大笑、　諸の勝甚の奇特たり。
　佛の利益を安立して、　常に妙等引に住せり。

　[五五]已上は寶部の四菩薩なり。

[五六]能く願を滿したりと雖も、由散動を恐る、散動に共に六種の散動あり。作意散動、自性散動、外散動、內散動、相散動、麁散

り。

【二一】　法部。金剛界五部の一。

【二二】　妙觀察智梵 pratyave-kṣaṇā-jñāna 藏 so-sor-rtog-pa. 攝化利生の智なり。

【二三】　不空成就如來。梵 amogha-siddhi. 藏 don-yod-grub-pa. 之れ釋迦牟尼如來なり。金剛界七集卷上に「羯磨杵を一切金剛と名づく、萬德威儀圓滿するが故に」と云へり。又三形は花上に羯磨を畫けるものにして、其の形像は金色にして左手拳にし、右手五指を舒べ胸に當てり。

【二四】　四首羯磨菩薩。梵 viśva-karma. 業菩薩なり。不空成就如來の三形より得たる名なり。

【二五】　三密。佛の身語意を云ふ。

【二六】　業部。金剛界五部の一。

【二七】　成所作智。梵 kṛtyānuṣṭhāna jñāna 藏 bya-ba-grub-pa'i ye-śes. 直接に所化の衆生に接す實行方面の智を云ふ。

【二八】　如來部。金剛界五部の一。

【二九】　報身。梵 sambhoga-kāya 藏 longs-spyod-rdsogs-pa'i sku. 受用圓滿せる佛身なり。即ち因行の功德に報ふて顯れたる佛の實智を云ひ、自ら內證の法樂を受くるを自受用報身。初地已上の菩薩に應現せるを他受用報身と云ふ。

【三〇】　眞如法界智、法界體性

菩薩の妙用なり。經の偈に曰く、[三七]

奇しき哉不空王、　金剛所生の鉤なり、

一切の佛に遍ずるに由つて、　最勝にして能く鉤召す。

鉤召ありと雖も、然も未だ大悲の心を具せず、須らく愛念を一切有情に發し、救護を興すべし、是に於て金剛愛菩薩なり。乃ち大悲の箭を執り、能く二乘の計執の心を射る、若し能所を忘ぜずんば豈に濟拔することをせんや、此の大悲の弓箭を持し、亦能く一切の煩惱を殺害し、直ちに菩提を取る、即ち[三八]金剛愛菩薩の行位なり。[三九]經の偈に曰く、

奇しき哉自性淨、　染欲に隨て自然なり、

欲を離れて清淨なるが故に、　染を以て調伏す。

[四〇]斯の勝行に由て、極喜善哉す、即ち一切の善法三種の祕密心を獲、善口・善意・善身・三善の法門三業清淨なり。善功德の無量無邊なるを讃す。即ち善なる哉、菩薩の本事。[四一]經の偈に曰く、

奇しき哉、我れ善なる哉、　諸の一切の勝智なり。

分別を離るる所の者は、　能く究竟の喜を生ず。

已上は金剛部の四菩薩なり。

斯の[四二]善法に由れども、果願未だ圓かならず。須臾に灌頂して、其の體を莊嚴し、瑩飾す、即ち[四三]虛空藏菩薩なり。摩尼寶緋を持し、復た一切如來大摩尼を發生し、大菩薩に灌頂すと想へ。位を受け、乃し轉輪王の位に住する時に至るまで、悉く皆之が爲めに利益恒沙にして、無邊の福德聚、威德自在なり。此れ乃ち虛空藏菩薩の福智なり。[四四]經の偈に曰く、

奇しき哉妙灌頂、　無上金剛の寶なり、

是れ因位の金剛手菩薩と同にして、智に約すれば普賢菩薩　梵 samanta bhadra 藏 kun-tu bzaṅ-po となる。

【一四】金剛部。金剛界五部の一。

【一五】大圓鏡智、又大圓照智とも云ふ、梵 ādarśa-jñāna. 藏 me-loṅ-ye-śes. 諸法萬有の種々相が有るがまゝの狀態にある形相を、如實に觀照する智なり。

【一六】寶生如來。梵 ratna saṃbhava 寶を生ずる佛、寶より生ずる佛、寶性を具する佛と譯さる。然るに西藏にての佛を rin-chen-dpal.又は rin chen-tog として寶生の意を傳へてゐない語を用ひてゐる。

【一七】灌頂。梵 abhiṣeca 藏 dbaṅ-bskur.印度にて即位の式典を擧ぐる時、四大海の水を以て太子の頂に灌ぐなり、密教にて之を以て阿闍梨の位を授くる時に之を用ふ。

【一八】寶部。金剛界五部の一。

【一九】平等性智、梵 samantā-jñāna 藏 mñam-ñid ye-śes 生佛一如、凡即是佛の妙諦を照見する智なり。

【二〇】阿彌陀如來。梵 amitābha 又は amitāyus. 阿彌陀はその音譯、無量光・無量壽と譯す。西藏にては hod-dpag-med. tshe-dpag-med. 即ち無量光、無量壽にして二佛別の尊とせ

有情の菩提心を成就して、畢竟不退ならしむ。菩提道場に坐して、衆魔を降伏し、多諸の方便をして沮壞せしむることなく、亦能く虛空を變じて庫藏となし、其の中の珍寶は虛空中に滿ちて、十方微塵の一切諸佛を供養す、此の虛空庫菩薩は、即ち毘首羯磨菩薩の異名なり。行願所成の印は、善く[二五]三密門の大印の方便を護持し能ふ。此れ乃ち[二六]業部の攝する所なり。即ち[二七]成所作智なり。

其の禮する所の四方佛の儀軌、乃至眞言具さに經の中に明說あり。應に知るべし、其の中方の毘盧遮那佛は、即ち[二八]如來部なり。[二九]報身圓滿し、萬德莊嚴して、須彌盧頂の寶峯樓閣大摩尼寶殿に於て、金剛臺に坐し、等正覺を成じ、衆魔を降伏す。諸毛孔より大光明を放ち、十方の如來及び諸の聖衆咸な來て證を同じくし、十地滿足せる菩薩は皆此の會に歸して、各本方の座位に處し、三摩地心に住す皆毘盧遮那如來の心內の智中より、無量無邊の祕密法門を流出し、菩薩の修行三昧に相應せる瑜伽理智滿法界心なり。此の大菩提は五智圓滿す。即ち毘盧遮那如來[三〇]眞如法界智なり。中位に處するなり。[三一]次に十六大菩薩の三摩地の位に入れ、夫れ修眞言行人は、須らく十六大菩薩の三摩地の次第は各不同なることを知るべし。三昧耶心に於て、差別異りあり。且らく[三二]金剛薩埵の如きは、東方を首となす大菩提心なり、初發意より堅固勇猛にして、三摩地智に住し、自受用身光明赫奕として、廣く照すこと無邊なり。五智の金剛杵を執つて、其の座位に據つて、傲慢自在なるは、即ち金剛薩埵の事なり。[三三]經の偈に曰く、

奇しき哉[三四]大普賢、　堅薩埵自然なり、
堅固の無身に從て、　薩埵の身を獲得す。

薩埵の正位を證すと雖も、見惑未だ除かれず、一切有情を將た何を以てか引化せん。須らく[三五]四攝の法を行じて之を濟度すべし。四攝の法とは何ぞ、布施・愛語・利行・同事等なり。而して之を攝取す。[三六]金剛王菩薩は、雙金剛鉤を執り、用つて召集を爲し、而して之を攝召する所以は、即ち不空王

三婆頗 ratna sambhava. 藏 rin-chen-hbyun-ldan. 大日の南方月輪の中尊。菩提に配す。種子 trāḥ. 左手拳にし、右手外方に開き、無名指と小指とを屈し中指と、頭指と、大指とを舒にす。

【八】 觀自在王如來。梵、盧計攝伐囉阿羅穰 avalokeśvara rāja. 藏 spyan ras gzigs-dbaṅ-phyug. 大日の西方に住す。阿彌陀佛の本名なり。涅槃に配す。種子 hriḥ.

【九】 毘首羯磨 viśva-karma. 一切造者の義。

【一〇】 不空成就如來。梵、阿目伽悉地 amogha siddhi. 藏 don-yod grub-pa. 大日の北方に住す。方便究竟に配す。種子 aḥ. 左手拳にし、右手五指舒べ開き胸に當つ。以上五佛に五轉を配せるは中因發心不空の說なり。

【一一】 夫れ修行者以下四禮を明す。

【一二】 紇哩娜野心。(hṛdaya. 藏 sñiṅ-po)は眞實心、堅實心、眞言心、貞實心と譯す。汗栗馱 hṛd その語尾の變化のみにして、意異らず、是れ情・非情に通ずる心にして、自性清淨心、と同なり。

【一三】 吽 hūṃ 字。金剛手 vajra-pāṇi. 藏 rdo-rje-phyag. 菩薩の種子。金剛薩埵、梵 vajra sattva. 藏 rdo-rje-sems-dpaḥ.

金剛頂瑜伽略述三十七尊心要

[1]大廣智三藏和上　於含暉院承明殿道場說

爾の時[2]毘盧遮那如來、[3]須彌盧頂より金剛摩尼寶峰樓閣に至り已つて、[4]金剛界如來は、一切如來の加持を以て、一切如來の獅子座に於て[5]一切の面を安立せり。時に大菩提心[6]不動如來、大福德聚[7]寶生如來・三摩地妙法藏[8]觀自在王如來、[9]毘首羯磨成就一切事業[10]不空成就如來、一切如來の自身を加持し、婆伽梵釋迦牟尼如來は、一切平等に善く通達せるが故に一切方を平等に四方を觀察して坐せり。

[11]夫れ修行者の初發信心は、以て菩提心を表はす。卽ち大圓鏡智[12]紇哩娜野心にして是れ衆生の內心たり、[13]吽字を安じて種子とたす。所變の種子を月輪と爲す。輪の光明中に於て五智金剛杵を想へ、光明照徹せり。卽ち杵を易へて金剛薩埵と爲せ、卽ち普賢菩薩の異名なり。此れ東方阿閦如來は[14]金剛部を表はすなり。卽ち[15]大圓鏡智是れなり。次に當に南方福德聚[16]寶生如來を禮すべし。摩尼寶緋を持すと想ひ、一切如來に[17]灌頂を與ふと想へ。卽ち虛空藏菩薩は摩尼の寶珠を執り、一切衆生の所求の願を成滿す、此の福德聚の功德に由つて、無量無邊の赫奕たる威光は求むる所を預滿す、此れ乃ち寶生如來[18]寶部の攝する所なり。卽ち[19]平等性智なり。次に西方[20]阿彌陀如來を禮すべし。一切如來三摩地智を表す、初發心に由つて便ち能く法輪を轉ずるに、獨は言說すべきなく、理は涯際なし、語部に收むる所にして、能く衆生を聰明利智ならしむ。此れ乃ち西方[21]法部の攝する所なり。卽ち[22]妙觀察智なり。次に北方[23]不空成就如來を禮すべきなり、大慈方便を以て一切如來の事業を成ずるに、衆生の事業以て及ぼし、[24]毘首羯磨菩薩の善巧智方便に由つて能く一切

【一】大廣智三藏和上。梵名を阿目佉跋日羅 amoghavajra と云ひ、譯して不空金剛。又は單に不空と云ふ。

【二】毘盧遮那。梵 vairocana. 藏 rnam-par-snaṅ-mdsad. 大日如來の梵名。大日經疏第一に「梵音の毘盧遮那は是れ日の別名なり、卽ち除闇遍照の義なり」と云へり。

【三】須彌盧。梵 sumeru 藏 ri-rab 妙高、妙光と譯す。諸山の中最も高きとせらるゝより、王山 sumeruḥ parvata rāja. 藏 rihi-rgyal-po ri-rab とも稱せられ印度の世界觀の中心をなす。

【四】金剛界如來。跋折羅馱都梵 vajra dhātu, 發心に配す。種子 vaṃ. 五智の寶冠を戴き手に智拳印を結ぶ。卽ち金剛界智法身大日如來を云ひ、以下はこの法身が四菩薩の三昧に入るを明す。

【五】一切の面、金剛頂瑜伽中略出念誦經第一に四面毘盧遮那と云へるに同じく、卽ち四方四佛を意味す。

【六】不動如來。阿閦鞞 梵 akṣobhya. 藏 mi-bskyod-pa. 金剛界曼荼羅の中央大日の東方に住し修行に配す、種子、hūṃ. 左手拳にし、右手梵函を持し、黃金色なり。

【七】寶生如來。梵、阿囉怛娜

である。

此の三十七尊の出生發現については、經軌其の說區々である。出生義には毘盧遮那の內心より三十六尊が流出すと說き略出經第一には「次に一切如來、及び十六大菩薩、幷びに四波羅蜜、四種の內の供養、四種の外の供養を施設し、又四門を守ると想へ」とあり、祕藏記は理趣釋經に基づき「金剛界の曼荼羅は法界智より四波羅蜜を流出す、是れ卽ち定なり、之れより四智を流出す、三十七尊は所謂る五佛・四波羅蜜・十六大菩薩・十二供養なり」と云ふてゐる。

又其の尊位に關しては、略出經第三に「阿閦等の四佛を皆應に布置すべし、初めに金剛方(東方)より、阿閦鞞の壇を畫き具するに執金剛等の四の三摩耶の殊勝者を以てす。四方の佛面は毘盧遮那の座に向ふと想ふべし。先づ執金剛を畫きて、阿閦の前に在らしめ、次に右に畫き、左に、次に後に、諸部は此れに准ぜよ。次に寶方(南方)に至る、寶生の壇は圓滿にす、金剛藏等なり。次に花方(西方)に阿彌陀の壇あり、清淨金剛眼等なり。業方(北方)に不空悉地の壇あり、金剛毘首等なり。鑁部の中に於て各本方(中央)に依て四波羅蜜を置け。輪圓の四隅に四の內の供養を置き、初め火天の方(東方)より、順に旋つて以て作り、自在の方(北方)に終る」と云ふてゐる。而して金剛界曼荼羅鈔下卷の意に隨へば、大日如來より四波羅蜜菩薩は流出し、又內の四供養は大日如來が四佛を供養する爲めに流出し、外の四供養は四佛が大日如來を供養する爲に流出せるものであつて、これ恰も師弟互に供養せる如きであるとしてゐる。これによつてその深遠を來たすのである。

猶ほ大日如來は法界體性智を發現し、四佛は四智を發現せるのである。この中大日の法界體性智は密教獨特の說と古來言ふてゐるが、已に親光の佛地經論第三に法界體性智なる語を散見し、なほ其の八識の轉じて得る智なる說も出し同第七に法身・自性身・自受用身・他受用身・變化身の五身を五佛に當てる一說も出してゐるからこれ已に中印度に於て密教以外に其の說のあつたことを知るのである。

本文中に於ては偈頌を三卷教王經及び略出經と比較して置いた。そして形像については金剛界七集所載のものを出した。これは現圖とは幾らかの相違があるか知れない。こゝに諸氏の寬恕を乞ふ次第である。本經の譯並に解題は清水亮昇君の助力に依ること極めて大なるものあり、茲に記して同君の勞を謝す。

昭和七年三月十日

譯者　神林隆淨　識

三十七尊とは

（五　佛）

毘盧遮那如來	梵 mahā-vairocana tathāgata	藏 rnam-par snaṅ-mdsad.
阿閦如來	梵 akṣobhya	藏 mi-bsyod-pa
寶生如來	梵 ratna sambhava	藏 rin-chen-dpal（又は rin-chen tog）
無量壽如來	梵 lokeśvara-rāja	藏 ḥod-dpag-tu-me-pa
不空成就如來	梵 amogha-siddhi	藏 gdon-mi-za-ba（又は don-yod-pa）

（慧門の十六尊）

金剛薩埵菩薩	梵 vajra-sattva	藏 byaṅ-chub sems-dpaḥ kun-tu bzaṅ-po
金剛王菩薩	梵 vajra-rāja	藏 gdon-mi-za-baḥi rgyal-po
金剛愛菩薩	梵 vajra-rāga	藏 rdo-rje gshu
金剛喜菩薩	梵 vajra-sādhu	藏 rab-tudgaḥ: baḥi rgyal-po
金剛寶菩薩	梵 vajra-ratna	藏 rdo-rje rin-chen
金剛光菩薩	梵 vajra-teja	藏 gzi-brjid chen-po
金剛幢菩薩	梵 vajra-ketu	藏 rin-po cheḥi rgyal mtshan
金剛笑菩薩	梵 vajra-hāsa	藏 rdo-rjemdsum
金剛法菩薩	梵 vajra-dharma	藏 rdo-rje sbyan
金剛利菩薩	梵 vajra-tīkṣṇa	藏 rdo-rje ral-gri
金剛因菩薩	梵 vajra-hetu	藏 rdo-rje ḥkhor-ro
金剛語菩薩	梵 vajra-bhāṣa	藏 rdo-rje brjod-pa
金剛業菩薩	梵 vajra-karma	藏 las-thams-cad gyi rdo-rje
金剛護菩薩	梵 vajra-rakṣa	藏 rdo-rje go-cha-chen-po
金剛牙菩薩	梵 vajra-yakṣa（又は daṃṣtra）	藏 rdo-rjemcho
金剛拳菩薩	梵 vajra-saṃdhi	藏 rdo-rje bciṅ-ba

（定門の十六尊）

金剛波羅蜜菩薩	梵 vajra-pāramitā bodhisattva mahā-sattva	藏 sems-dpaḥi rdo-rje
寶波羅蜜菩薩	梵 ratna-pāramitā	藏 rin-chen kyi rdo-rje
法波羅蜜菩薩	梵 dharma-pāramitā	藏 chos kyi rdo-rje
羯波羅蜜菩薩	梵 karma-pāramitā	藏 las kyi rdo-rje

（八供養菩薩）

金剛嬉菩薩	梵 vajra-lāsī	藏 rdo-rje ḥdsin-ma
金剛鬘菩薩	梵 vajra-mālā	藏 rdo-rje phreṅ bama
金剛歌菩薩	梵 vajra-gītā	藏 rdo-rje gluma
金剛舞菩薩	梵 vajra-nṛtā	藏 rdo-rje gaṅma
金剛燒香菩薩	梵 vajra-dhūpā	藏 rdo-rie bgug-pama
金剛華菩薩	梵 vajra-puṣpā	藏 rdo-rje me-togma
金剛燈菩薩	梵 vajrālokā	藏 rdo-rje snaṅ lama
金剛塗香菩薩	梵 vajra-gandhā	藏 rdo-rje-drima

（四攝の菩薩）

金剛鉤菩薩	梵 vajrāṅkuśa	藏 rdo-rje leags-gyu
金剛索菩薩	梵 vajra-pāśa	藏 rdo-rje shags-pa
金剛鎖菩薩	梵 vajra-sphoṭa	藏 rdo-rje leags-rgrog
金剛鈴菩薩	梵 vajrāveśa	藏 rdo-rjedbab-pa

た五類あつて二十となる、五類とは上界の四天と、住虚空の四天と、地居に四天あり、地天に居る四天となり。瑜伽部の曼荼羅に四あり、一には金剛界、二には降三世、三には遍調伏、四には一切義成就なり」とある。又略出經第一にもこの說を見るのである。是れ等は金剛頂瑜伽經（大本）の十八會の中、初會を說けるものであつて、此の初會の全部を說ける經典が施護譯の敎王經であり、其の初會の中の第一品金剛界のみを說ける經典が不空譯の三卷の敎王經である。然し此の曼荼羅は成身會のみの說にして現圖曼荼羅の九會の總ての說ではないのである。卽ち兩部曼荼羅義記第四に「初會中に六曼荼羅あり所謂る金剛界大曼荼羅なり（十八會指歸の文）今是に出す所の金剛界大曼荼羅とは根本成身會なり（深賢法印等の說）故に金剛界と云ふ」とある。此れ等に依つて今金剛界と云ふ名義が何を指してゐるかが明かであらう。而してこゝに不空の說述せる心要は不空譯の三卷敎王經の要旨なることは言を俟たぬ。今の心要には「今金剛界三十七尊大曼荼羅及び賢劫千佛外金剛部二十天及び四十天等は此れを初原と爲す、展轉して無量の曼荼羅を相生ず」と云ふてゐる。

然し現圖曼荼羅が其の作者に疑問を遺し乍らも此れは今の六會に降三世品中の降三世會、降三世三昧會の二會を加え、理趣經等の所說によつて理趣會の一會を更に加えたものである。

前に一言した如くこの心要は三卷金剛頂經の要旨のみを摘取して不空が弟子のために說述したものであるが、瑜伽經大本と其の部分譯とは如何なる關係にあるかといふことに言及したい。古來この大本の梵篋は海に棄て、その略出せる略出經四卷の梵本のみが支那に傳えられたといふ說があるが、曇寂が金剛頂經私記第一に、大本の十八會に各經典を當てゝゐる、且つ、八家祕錄に金剛頂瑜伽經中第三會の金泥曼荼羅を金剛智が手繪したとあるから。それから推しても、支那に金剛智は十萬偈の金剛頂經を將來し座右に置いたものであらうと思はれる。只その全譯が行はれず只別生のみが譯出されたと思ふ。

三、三十七尊の尊位并びに出生

說の海會聖賢は各不同なるが故に、是の如く無邊の海會の功德は一切の凡聖の身中に在り、堅固不壞なることと彼の金剛の如し、是の如く常存不壞の法界體性を顯す故に、名づけて金剛界となす」と云ひ、又金剛頂經開題に「金剛界は梵に vajra dhātu(悉曇字)と云ふ、vajra(悉曇字)は翻じて金剛と云ひ、dhātu(悉曇字)は界の義、身の義、差別の義なり」と云ふてゐる。こゝに云ふ金剛界曼荼羅を說く經典が金剛頂經であるといふことは、金剛頂經瑜伽十八會指歸に「金剛頂瑜伽經に十萬偈十八會あり。初會を一切如來眞實攝大乘現證大敎王と名づく、四大品あり、一を金剛界と名づけ、二を降三世と名づく、三を遍調伏と名づけ、四を一切義成就と名づく、四智の印を表す。初品中に六曼荼羅あり、所謂ゆる金剛界大曼荼羅は并びに毘盧遮那佛の受用身、以て五相現成等正覺(五相とは所謂る通達本心・修菩提心・成金剛心・證金剛身・佛身圓滿なり、此れ則ち五智通達なり)を說く、成佛の後金剛三摩地を以て現に三十七尊を發生し廣く曼荼羅の儀則を說く、弟子の爲めに速證菩薩地法を受けしむ。第二に陀羅尼曼荼羅、三十七を具す、此の中の聖衆は皆波羅蜜形に住し、廣く入曼荼羅儀軌を說けり、弟子の爲めに四種眼を受けしむ、敬愛・鈎召・降伏・息災等の儀軌を說く。第三に微細の金剛曼荼羅を說く、亦三十七聖衆を具す、金剛杵の中に各特の定の印を畫け、廣く入曼荼羅儀軌を說く、弟子の爲に心を堪任にし、心を調柔にし、心を自在にせしむ、微細の金剛三摩地を說き、四靜慮法を修し、四無量心及び三解脫門を修す。第四に一切如來廣大供養羯磨曼荼羅を說く、亦三十七を具す、彼の中の聖衆は各本幖幟を持して供養して住す廣く入曼荼羅法を說けり、弟子に說きて十六供養法を受けしむ。第五に四印曼荼羅法を說く、弟子に四種の速成就法を受けしむ、此の曼荼羅を以て悉地成就を求めよ。如上の四曼荼羅中の所求の悉地は、此の像の前に於て成就を求めよ。第六に一印曼荼羅を說く、若し毘盧遮那の眞言及び金剛薩埵の眞言を持せば十七尊を具す、餘は皆十三を具す、亦入曼荼羅の儀を說く、弟子の爲めに先づ行法を受けしむ、集本尊の三摩地を修す」と云ひ、又都部陀羅尼目に「其の經に五部を說く、佛部・金剛部・寶部・蓮華部・羯磨部なり、彼の五部の主に各四菩薩ありて眷屬となる、前右左背に安列す。四の內の供養は各四部に屬す、次第に應に知るべし、四の外の供養も亦四部に屬す。四門には鈎・索・鎖・鈴なり。四部の次第應に知るべし。又四方に賢劫の中に十六大菩薩あり、賢劫の中の一千菩薩を表す。又外に五類の天あり、一一の類に四天あり、總じて二十天あり。并びに妃后に復

金剛頂瑜伽略述三十七尊心要解題

一、總説

金剛頂瑜伽略述三十七尊心要は、最澄、圓仁、圓行及び宗叡の四師に依つて本邦に請來（八家祕錄卷上（正藏五五・一一一六a））せられたのであるが、此の心要は他の諸經典と相違し大唐神龍元年に師子國 Cylon に生れ、天資聰明にして幼より道を慕ひ、開元六年歳十六の時甫めて此の地にて金剛智三藏に見え、之れに隨ひて同八年海を超えて唐に來た（貞元新定釋教目錄第十五（正藏五五・八八一a））不空が時の朝廷代宗の宮中の一院なる含暉院の承明殿（諸儀軌稟承錄第十二（二十丁右））に於て、金剛頂經等の金剛頂系の經典より金剛界三十七尊の三昧を論理的に説明せしものにして、これ大日如來と釋迦如來とを一體と見、而して初めに四佛を説き、次に十六大菩薩、四波羅蜜菩薩、八供養菩薩、及び四攝菩薩の三昧を説き。次に供養會の五佛・四波羅蜜菩薩・十六大菩薩・十七雜供養等を説き、次に曼荼羅の能所觀所生、降三世會、護摩法、三解脱門及び四印會等を述べ、それを弟子等の筆受せしものである。

二、金剛界曼荼羅について

眞言密教に於て諸種の曼荼羅中、最も重ぜられるものは、胎藏界曼荼羅及び金剛界曼荼羅である。之を兩部の曼荼羅と云ひ、胎藏界曼荼羅は大日經に據り、金剛界曼荼羅は金剛頂經に據つて居ることは言を要しない。今本圓の兩部曼荼羅義記第一の言を以てすれば「夫れ兩部の曼荼羅とは、諸佛の本源、衆生の色心なり」と。卽ち胎藏界曼荼羅は本有理平等を開示したる曼荼羅にして、金剛界曼荼羅は修生顯得の智差別を顯示したる曼荼羅である。若し此の兩部の曼荼羅を、理智・六大・色心・因果等に約すれば、胎藏界曼荼羅は理・前五大・色法・因に、金剛界曼荼羅は智・識大・心法・果に配當せらるるのである。今其の中金剛界曼荼羅のみについて述べるならば、先づ其の字義に關しては圓仁の金剛頂經疏第一に「金剛と言ふは是れ堅固、利用の二義あり、卽ち名に喩ふなり、堅固をば以て實相不思議祕密の理、常存不壞に譬ふなり、利用をば以て如來の智用が惑障を摧破し、極理を顯證するに喩ふ、本より摧破の用を具する故に、利用の義と云ふ、智用の自體は滅壞あることなし、故に堅固の義と爲す。（中略）界とは性の義、一切有情の身中に本來毘盧遮那の性功德を具足するが故に、性の義と云ふなり。又界は是れ義別の界なり。毘盧遮那體性海の中の不可説不可

くべきや。我等云何んが奉持すべきや。佛、文殊師利菩薩摩訶薩に告げて言く、此の經に具に一千の名字あり。所謂名づけて毗盧遮那廣大三密甚深一字經と爲す。亦は三界最尊勝經と名づく。亦如來說大悲門と名づく。亦は聞如來法不空得記と名づけ、亦は如來微妙法藏と名づけ、亦は如來妙究竟果と名づけ、亦は如來微妙法眼と名づけ、亦は普照諸法寶炬と名づけ、亦は能斷一切邪見と名づけ、亦は顯示諸法平等と名づく。是の如くの等の一千の名字あり。時に文殊師利、復佛に白して言く、世尊是の如くの名の中、皆甚深なりと雖、唯願くは如來我が爲に決定して應に守護國界主陀羅尼と名づくべし。是の名字を以て、汝當に奉持すべし。所以は何んとなれば、一千の名は此より生ずるを以ての故なり。爾の時に、世尊此の經を說き已つて、一切世間の天人・阿修羅・乾闥婆等の無量の大衆、佛の所說を聞いて皆大に歡喜し信受し奉行せり。

守護國界主陀羅尼經（終）

法をして久しく住せしめんが爲の故に、能く是の如くの大獅子吼を作したまふ。諸の善男子、當に我が說を聽くべし。若し諸の衆生、大乘を修行して未だ[五四]法忍を得ず、佛の神力を以て此の經を受持して精勤し修習すべし。次で後佛の所にして卽ち授記を得べし。是の如く或は二、或は三七佛を過ぎず。必定して阿耨多羅三藐三菩提の記を得べし。若し聲聞乘の種姓の衆生は此の經を聞くことを得ば、[五五]慈氏佛の龍華第一聲聞會の中に於て、當に最上第一の聲聞となるべし。若し緣覺種姓の衆生は此の經を聞くことを得て、受持し修習せば我れ涅槃の後、更に法を聞かざれども、必ず當に獨覺の菩提を成ずることを得べし。佛此の守護國界主陀羅尼經を說きたまふ時、無量無數の種種の衆生、阿耨多羅三藐三菩提心を發し、無數の菩薩は不退地に住す。無數の世界六種に震動し、日月の光明の照らすこと能はざる所、幽闇の處所皆大に明にして、衆の天花を雨らし繽紛として亂墜す。十方の國土諸來の菩薩の此の會に在る者、佛及び此の經を供養せんが爲の故に、菩提樹道場の四面各四由旬に於て、種種の寶衆妙雜花を以て其の地を莊嚴し、異口同音に佛に白して言さく、世尊、我等今日大利益を得て空からずして還て此の決定最勝微妙の經典を聞くことを得。唯願くは世尊、釋迦牟尼長く壽命を延べたまへ。願くは此の經をして久しく住して滅せざらしめ、閻浮提の一切國土に於て、大利益を作したまへ。世尊若し比丘・比丘尼・優婆塞・優婆夷・國王・大臣、一切人民此の經を受持せば諸の病苦無く、壽命長遠にして普く能く一切衆生を利益せん。

爾の時に文殊師利菩薩、佛に白して言さく、希有なり世尊、希有なり世尊、是の如く決定の最勝經典は、言詞微妙にして文字句義莊嚴圓滿して能く一切の菩薩大衆をして歡喜心を生じ、一切の諸魔外道を摧伏して、善能く一切の法門を堪任し、能く一切衆生をして歡喜せしめたまふ。是れ能く一切乘道を出生して一切如來功德の大波に隨順趣入せしめたまふ。若し能く是の如くの經典に於て精勤し宣示することあらば、一切空しからず。復佛に白して言く、世尊、當に何んが此の經を名づ

【五四】法忍。一世諸法の空なる理を信認すること。

【五五】慈氏佛の龍華等とは彌勒菩薩は兜率天の內院に居住し、五十六億七千萬年を經て娑婆世界に出現し、龍華菩提樹下に坐して三たび法會を開き上中下三根の有情を敎化すといふ。之を龍華三會といふ。今第一聲聞會といふは三會の中の第一會をいふ。

流布せしめん。

爾の時に[五〇]魔王波旬、此の經及び持經者を護らんが爲に、合掌して佛に向て偈を說いて言く、

若し此の經を持する者は、　煩惱滅して生ぜず。　我れ其の人に於て　障礙留難を作さじ。
此の勝經ある處をば、　我れ當に親り護持すべし。　魔をして心に入らざらしむ。　佛恩を
念ずるが爲の故に。

爾の時に、[五一]蘇夜摩天王、經及び持經者を擁護せんが爲に、合掌して佛に向て偈を說いて言く、

佛所有の菩提をば、　此の經の中に於て說きたまふ。　若し經を受持するは、　已に諸の如來を供するなり。　我佛の此の經を持して、　[五二]俱胝の天の爲に說きたまふ。　殷重に聽受して、
大菩提心を發さしめん。

爾の時に、慈氏菩薩、此の深經及び持經者を擁護せんと欲せんが爲に、合掌して佛に向て偈を說いて言く、

若し諸の眷屬を捨て、　菩提の道を勤修す。　此の經を守護せんが爲に、　自ら身命を惜まず、　我れ佛の神力を承けて、　親り兜率より來り、　是の如くの深經をして　常に廣宣流布せしめん。

爾の時に、[五三]具壽大迦葉波、此の經及び持經者を護んが爲に、合掌して佛に向て偈を說いて言く、

我昔世尊に從つて、　曾て百千の經を聞けども、　未だ曾て此を聞くことを得ず。　是の如くの深妙の法は、　我れ今親り佛に對して、　此の經を受持す。　諸の菩薩の爲の故に、　廣宣
流布せしめん。

爾の時に世尊、釋提桓因四大天王、大梵天王・兜率天子・商主天子及び魔波旬菩薩聲聞諸の經を護る者を稱讚して、是の如くの言を作したまふ。善い哉善い哉、汝等眞に是れ勇猛の丈夫なり。妙

【五〇】魔波旬。天魔のこと。
【五一】蘇夜摩天王。夜摩天のこと。
【五二】俱胝。數の名にして億の意なり。
【五三】具壽大迦葉波。比丘大迦葉波といふ意。

擁護せんと。偈を說いて言く、

『此の經を說く處、　及び聽法の衆會に隨つて、　我れ諸の眷屬とともに　皆當に之を守護すべし。　若し勤めて受持し　及び菩提意を發すことあらば、　當に四方に於て面り　擁護して常に離れざるべし。』

爾の時に[四七]釋提桓因、是の如くの經典及び持經者を擁護せんが爲に、合掌して佛に向て偈を說いて言く、

『我れ佛の此の　最勝微妙の經を說きたまふを聞いて、　決定して菩提を成ず。　佛恩の報じ難きを知る。　佛恩を報ぜんが爲の故に、　諸佛の護持したまふ如く、　當に是の經、及び經を護持する者を守護すべし。』

爾の時に、大梵天王、此の經及び持經者を護んが爲に合掌して佛に向て偈を說いて言く、

『四禪四無量　諸乘及び解脫　皆此の經より出づ。　義の甚深を具するに由る。　此の經を說くことあるに隨つて、　我、梵天の樂を捨て、　彼に往いて聽受し、　供養し幷に護持せん。

爾の時に、兜率陀天子、此の經及び持經者を護らんが爲に、合掌して佛に向ひ偈を說いて言く、

兜率天に往き　次の生に解脫を得んと欲はゞ、　當に此の　諸佛所護の經を受持すべし。　此の經を說くことあるに隨つて、　我れ當に天の樂を捨て、　[四八]閻浮に住して擁護すべし。　諸佛の恩を報ぜんが爲なり。

爾の時に、[四九]魔王子、商主天子、此の經及び持經者を護らんが爲に、合掌して佛に向て偈を說いて言く、

魔の業海を竭さんと欲せば、　魔の所行に隨はず。　當に此の經を受持すべし。　甚深の義を具足す。　我れ佛恩を念ずるが故に。　勤めて精進の心を發して、　是の經を守護して　廣宣

【四七】釋提桓因。帝釋天のこと。

【四八】閻浮。閻浮提にて須彌山の南方に在る大洲たる瞻部洲にて、人類の住居する此の世界のこと。

【四九】商主天子。商羯羅天にて大自在天のこと。

爾の時に世尊、此の偈を說き已つて、大音聲を出して普く一切菩薩摩訶薩等諸大衆に告げて言さく諸佛子我無量數劫の中に於て、精勤して懈らず一心に專求して此の諸佛世尊成就菩提不可思議祕密一字陀羅尼經を修習す。此の大衆の中に誰か能く大勇猛心を發起して大丈夫と爲るや。能く如來般涅槃の後に於て、受持讀誦廣宣流布して、此の妙法をして久しく世に住せしむるや。爾の時に衆中七十倶胝の菩薩摩訶薩、皆座より起ちて恭敬合掌し、異口同音に佛に白して言さく、世尊我等能く如來滅後に於て、此の佛の無數劫勤求修習成就菩提祕密一字陀羅尼經を受持して廣宣流布し、五濁世の一切衆生をして、此の法門を聞きて心に淨信を得、恭敬尊重して諸根を種ゑしめん。唯願くは如來神力加被したまへ。爾の時に世尊【四三】一切種智、諸の菩薩摩訶薩に告げて言く、善い哉善い哉汝等乃し能く斯の大願を發すべし。我今當に威神の力を以て此の經を護持すべし。偈を說いて言く、

『如來は眞實語なり。　常に眞實の法に住す。　諸佛は神力の故に、　此の經を擁護したまふ。
大悲の甲冑を被て　常に大悲の中に住し、　衆生を憐愍するが故に、　此の經を擁護して福聚
圓滿することを得。　此より智聚を生じ、　福智を滿ぜんが爲の故に、　此の經を擁護して、
能く一切の魔を滅し、　諸の外道を摧破し、【四四】邪見を斷除するが故に、　此の經を擁護す。
【四五】帝釋護世の王、　修羅尋香等、　我れ加被を爲すが故に、　當に是の經を護持すべし。　地
及び虛空の中の　十方の諸の天衆　諸佛加被したまふが故に、　當に此の經を受持すべし。
梵住を圓にすることを得んと欲はゞ、　次第に體を莊嚴し、　及び衆會を守護し、　當に此の
經を擁護すべし。　色は變じて空と爲るべし、　空も變じて色と爲るべくとも、　能く佛に【四六】變
じて　擁護して動搖せしむることなからん。

爾の時に、護世四天王、倶に座より起つて合掌して同聲に佛に白して言さく、世尊我れ如來に對して、深重の願を發す。未來世に於て、是の經及び諸の國王・大臣・長者一切人民の經を受持する者を

【四三】一切種智。佛の學號なり。
【四四】邪見を、斷除を一本には能く諸見を斷ずとある。
【四五】帝釋護世の王。帝釋天と四天王は何れも護國の天王なり。
【四六】變じては一本には變作となる。

使へ人あつて一切の寶を以て其の中に充滿して持用て一切如來に施し奉るに所得の功德無量無邊なり。若し復人あつて能く此の經一字一句を聽き、或は信樂を生じ、或は能く受持し、或は復書寫し、或は當に讀誦し、或は正しく修習し、或は廣く人の爲に演暢宣說し、行住坐臥常に勤めて精進す。妙法をして世間に久住せしめんが爲、三寶をして斷絕せざらしめんが爲の故なり。此の人の福德は前の諸佛に布施する福德に勝れたり。爾の時に世尊、重ねて此の義を宣べんと欲して偈を說いて言く、

佛眼所見の諸の佛刹の、　中に滿てる珍寶を如來に施す。　我れ此の福を說くに尙ほ輕微なり。　此の深經を聞かざるを以ての故に。　若し此の妙經經典を聞くことを得ば　甚深の勝義悉皆圓にせん、　是の故に經を讀誦し受持すれば、　斯の福最勝にして彼に過ぎたり。　諸佛は唯法の中に住して、　布施に因らずして菩提を得。　若し佛の法門を受持することあらば、　卽ち是れ能く佛恩を知る者なり。　是の故に佛を供養する福を　[四一]勘ふに、　此の深經を供養するに及ばず。　最勝の福聚を悉く皆圓にす。　此より能く善逝を生ず。　若し世に此の經に勝れたる寶なし。　佛種法施悉皆なし。　亦聽法及び修行なし。　衆生は苦海に常に淪溺す。　恩なき衆生は此の典を謗ず。　彼は苦海の法の舟航を破し、　三寶を斷滅する罪根深し。　阿鼻獄に墮して出るに由なし。　照明の六度は燈炬の如く、　吉祥の寶聚は須彌に等し。　[四二]首楞嚴定は無邊に等し。　及び一切の法皆從つて出す。　若し愚癡あつて心眼を翳へば、　此の慧日の爲に迷心を破す。　憂惱は赫日に燋燃せらる。　此の滿月の淸涼なるが爲に照さる。　最上乘に登つて放逸ならず。　此の菩薩修行を住して勤むれば、　能く寂靜大菩提を得。　下劣の乘の所得に非ず。　所有人天勝妙の樂、　聲聞緣覺の菩提を得ると、　此の經より一切悉く能く生ず。　摩尼寶の心願に隨ふが如し。

【四一】 勘は一本に尠となる。

【四二】 首楞嚴定、首楞嚴三昧のことにて佛所得の禪定なり。此を健相とも譯す。大將の軍旗の堅固なる如く此の三昧に入れば諸の煩惱魔悉皆退散するなり。

て無邊の義理に趣入せしめたまふ。其の義深遠なり。因緣の性を隨順し覺悟せしむるが故に。難入なり、懈怠懶惰にして入るに由なきが故に、難解なり。斷常の見は了すること能はざるが故に、難見なり。六處に依止して見ること能はざるが故に、難悟なり。下乘を樂る者は覺ること能はざるが故に、超權なり。是れ諸の菩薩甚深の境なるが故に、無相なり。是れ一切法眞實の印なるが故に、[三七]無開なり。法界平等にして能所なきが故に、無異なり。體虛空に同じく二相を離るゝが故に、[三八]阿賴耶なし。一切所依處を超過するが故に。衆生の行を知る。善く一切の因緣法を解するが故に深般若を得、光明諸法の性を照見するが故に諸度を出生す。一切巧方便を成就するが故に、善く法を分別す。四種の無礙智を具足するが故に身心普遍す。能く廣大の諸の神通を得るが故に平等に法を覺る。一乘の敎法の中に安住するが故に無[三九]、異行無し、如虛空平等性に入るが故に、亦平等もなし、一切處に於て對あることなきが故に。是れ無等々なり。一切の無等は唯諸佛如來と等しきが故に。二相を遠離す。諸法寂滅の體を出生するが故に。諦に文字を觀ず、一切の法を安立せんと欲せんが爲の故に。言の能く說くに非ず、卽ち是れ眞實の勝義諦なるが故に。宣說することを礙へず、普く能く世俗諦に隨順するが故に。能く三寶を出生す、能く廣大の三乘、能く三解脫門を開き能く三界を超出す。能善く三智を覺り能く如來の金剛三昧を生ず。是れ一切法の所住の處、是れ一切佛の智慧の門なり。普く能く一切衆生を養育す。世尊、諸の善男子・善女人等、應に此の世尊無量の[四〇]三密一字陀羅尼門に於て阿耨多羅三藐三菩提心を發すべし。世尊若し此の法の所有の義理を聞かば應當に修習し應當に人の爲に開示すべし。世尊若し能く是の如く乃至一偈・一句・一字を宣說せば是の如くの人は福を得ること無量なり。是を則ち名づけて佛恩を知る者となす。是れ佛恩を念じ是れ佛恩を報ずるなり。爾の時に世尊文殊師利を讃じて言さく、善い哉、善い哉、善男子「汝が所說の如し、是の如くの人の所得の福德は稱量すべからず。善男子、佛、眼所見の一切の佛刹に假

【三七】無開を一本には無礙となる。

【三八】阿賴耶。一切法の所依となる處なり。

【三九】無は一本には是となる。

【四〇】三密。身密と口密と意密とにて、密教に於ては手に印を結ぶを身密といひ口に眞言を誦へるのを口密といひ意に本尊の本誓を念ずるのを意密といふ。

の說きたまふ所は其の少分を擧げたまふ。我が向に見る所の苦事は甚だ多し。如來世尊は是れ眞語者なり、是れ實語者なり。世尊我れ此の身に於て諸の惡業を造り、今世尊諸大菩薩衆僧大會に對して發露懺悔す。諸惡を止息し相續心を斷ぜん。我れ今日より乃し菩提に至るまで誓つて[三三]五戒を持ち、優婆塞と爲り、佛所說の一字陀羅尼一切功能の如く、菩提心を以て先導とし、今より向去一日三時に精勤修習して、此の善根を以て悉皆一切衆生に迴向せん。佛王を讚じて言く、善い哉、善い哉、大王、諦に聽け、我れ今王の爲に過去佛微妙の伽陀を說かん。卽ち偈を說いて言く、

若し五逆極重罪を造るとも、發露懺悔せば罪は輕微なり。永く[三四]相續を斷つて罪根を滅す、壯夫の連れる根樹を拔くが如し。

佛、偈を說き已つて復王に告げて言さく、大王當に知るべし、譬へば團鐵を水に投ずれば、沈沒す。若し鉢器を爲つて水に置けば則ち浮ぶが如し。大王、智慧ある人は、彼の鉢器の苦海に沈まざるが如し。汝惡業に造つて阿鼻大地獄の中に入つて一劫苦を受くべし。汝智あるに由つて發露懺悔して暫らく入りて便ち出ず、壯男女の手を以て毬を拍つに、暫時に地に著けて卽ち騰起するが如し。此より命終して兜率天に生れ、[三五]慈氏尊を見て便ち[三六]授記を得べし。時に阿闍世佛の說を聞き已つて心に淨信を得、種々の供具を以て佛を供養し已つて還つて本座に復す。當に如來此の法を說きたまふ時に當つて、無數俱胝那由他の衆生は、皆阿耨多羅三藐三菩提心を發し、三十三俱胝那由他の菩薩は隨順忍を得たり。

如來囑累品第十一

爾の時に文殊師利菩薩摩訶薩、佛に白して言さく、希有なり、世尊希有なり、善逝、世尊の說きたまへる。此の陀羅尼門は、卽ち是れ諸佛の決定最勝の陀羅尼なり。無邊量の名句字門を以て宣說し

[三三] 五戒。不殺生戒・不偸盜戒・不邪婬戒・不妄語戒・不飲酒戒なり、五戒を持つて淸信士となる。

[三四] 相續。身體なり。

[三五] 慈氏尊。兜率天に居住する彌勒菩薩なり。

[三六] 授記とは、成佛の豫言をいふ。

屬の善く我を護念することを知る。八には營理する所を見て、心に讃歎を生ず。九には家事を遺囑し、藏の財寶を擧げて之を示して出さしむ。十には淨信心を起し、佛法僧を請うて對面し歸依して言さく、南謨佛陀・南謨達摩・南謨僧伽、我れ今歸依すと、若し無佛世には五通仙に歸す。大王、若し命終に臨んで此の十相を具せば、決定して人趣の中に生ずることを得。大王、當に知るべし。若し復人あつて命終に臨む時は十種の相あつて定んで天に生ずることを得。云何んが十となすや、一は憐愍心を起す。二には善心を發起す。三には歡喜心を起す。四には正念現前す。五には諸の臭穢なし。六には鼻欹側なし。七には心に恚怒なし。八には家財寶・妻子・眷屬に於て心愛戀なし。九には眼色淸淨なり。十には面を仰いで笑を含み、天宮當に來つて、我を迎ふと想念す。若し命終に臨み、此の十相を具せば決定して天に生ず。大王是の如く、臨終に善惡の相汝應當に知るべし。時に阿闍世王、佛說を聞き已つて、竊かに自ら思念すらく、如來此の說は是れ實事とやせん。是れ虛とやせん。世尊は辯才を具足して權に此の理を說きたまへり。爾の時如來は阿闍世王の心に念ずる所を知り、卽ち神力を以て阿闍世をして其の惡相を見せしむに、忽ち地獄苦器充滿し、諸の【三二】獄卒苦具を執持し、無量の衆生地獄に顚墜すること駛雨の點ずるが如し。爾の時に獄卒目を瞋し威を振ひ阿闍世を指して是の言を作す。此は是れ惡逆殺父の人なり。速に當に擒へ來つて阿鼻大地獄の中に付して之を苦治すべし。時に阿闍世、是の語を聞き已つて、極めて大に惶怖し身毛皆竪ち、遍體汗流し遽に座より起つて走り逃げ竄んと欲し悶絕躃地して都て覺知せず。譬へば猛風の根なき樹を伐るに久しうして蘇らざるが如し。乃ち種々の方宜を以て之を救うて漸く蘇息を得、聲を連ねて唱へて言く、世尊世尊願くは壽命を賜へ壽命を賜へ。我が今日の如きは、依なく怙なし。今より決定して佛法僧に歸すべし。是に於て如來神力を還攝て諸相を現ぜず。阿闍世に問うて言く、大王向に地獄に入る者の諸の苦き事を見るや。時に阿闍世悲を含んで笑つて言く、我れ今已に見ると。世尊

【三二】獄卒。地獄の焰摩王の從者なり。

惡眼を以て瞻視す。二には其の兩手を擧げて虛空を捫摸す。三には善知識の敎に相ひ隨順せず。四には悲號啼泣嗚咽して涙を流す。五には大小便利を覺せず知せず。六には目を閉ぢて開かず、七には常に頭面を覆ふ。八には側に臥して飲噉す。九には身口臭穢なり。十には脚膝(二六)戰掉す。十一には鼻梁欹側す。十二には左眼瞤動す。十三には兩目變じて赤し。十四には面を仆して臥す。十五には身を踡めて左の脇を地に著けて臥す。大王、當に知るべし。若し臨終に十五の相を具することあらば、是の如く衆生は決定して阿鼻地獄に生ずべし。大王、當に知るべし。若し復人あつて、臨命終の時に八種の相あらば、當に必ず(二七)焰摩羅界(二八)餓鬼界趣の中に墮すと知るべし。云何んが八となすや。一には好く其の脣を舐む。二には身の熱すること火の如し。三には常に患うて渴を饑え好んで飲食を說く。四には口を張つて合せず。五には兩目乾き枯れて鷲・孔雀の如し。六には小便あることなく大便遺漏す。七には右の膝先づ冷ゆ。八には右の手常に拳なり。何を以ての故に、心に慳悋を懷き、乃し水に至るも人に與へざるが故に。大王若し八相を具せば、命終して決定して餓鬼の中に生ず。大王、當に知るべし。若し復人あつて臨命終の時、五相現ずることあらば、是の人決定して(二九)畜生趣に墮す。云何んが五と爲すや。一には妻子を(三〇)愛染して貪視して捨てず。二には手足の指を踡む。三には遍體に汗を流す。四には麁澁の聲を出す。五には口中に沫を咀む。大王、若し此の五を具せば、命終して決定して畜生趣に墮す。大王、當に知るべし。若し復人あり、命終に臨む時、十相現ずることあらば、是の人決定して(三一)人趣の中に生ずべし。云何んが十となすや。一には臨終善念を生ず。謂く、柔軟心・福德心・微妙心・歡喜心・發起心・無憂心を生ず。二には身に痛苦なし。三には少しく能く語るに似て一心に所生の父母を憶念す。四には妻子・男女に於て憐愍心を作して、常に瞻視するが如く、愛なく恚なく、耳に兄弟・姉妹・親識の姓名を聞かんと欲す。五には善に於ても惡に於ても心錯亂せず。六には其の心正直にして諂誑あることなし。七には父母・親友・眷

【二六】戰掉を一本には戰顫掉すとある。

【二七】焰摩羅界。焰摩王の居住する世界にて此の世界は南瞻部洲の地下五百由旬の處に在り焰魔は罪人を裁判するものなり。

【二八】餓鬼界、餓鬼の居住する世界にて、餓鬼は鬼にして飢渴の苦の常に盡きざるものなり。

【二九】畜生趣。畜生の住する處にして畜生は牛馬等にして惡業に報として感得せる體なり。

【三〇】愛染を一本には愛戀とある。

【三一】人趣。人間の住する處。

に投ぐ、旣に法を聞き已つて隨順して修し、怨親平等にして皆慈[二四]濟す。云何んが佛の諸の功德を聞いて、一念好樂の心を生ぜず。唯だ非法を愛して菩提を遠ざくることは、生盲の人の他に道を示すが如し。

迦葉如來、此の偈を說き已つて、復、訖哩枳王に告げて言く、大王、汝夢に見る所の帝王の門前の二口の白象は恒に水草を食して、身羸瘦すとは、亦王の事に非ず。卽ち是れ釋迦如來遺法の中の五濁惡世の因果を信ぜざる百官令長なり。上、帝王の光寵榮祿を受け、下も百姓に於て非理に追求し、復貪求すと雖も、多く匱乏して賦稅度なく、萬人貧窮にして子孫を貿易して家業蕩盡し、寺に投じて剃落し、寺復荒蕪して惡比丘多く發心するに地なく、遂に[二五]外道路伽耶等の斷常の諸見異學の出家に投ず。邪見の因緣を以て師徒皆墮して自ら地獄に入る。復多人の與に地獄門を開き、相引いて奔馳して三惡道に趣き、人天の路を閉ぢて解脫するに由なし。大王當に知るべし。故に此の二夢は並に是れ釋迦如來遺法の相にして、王の事に非ずと。訖哩枳王、此の說を聞き已つて、永く疑網を斷じて歡喜踊躍し、復種々上妙の供具を以て釋迦如來を恭敬供養して、佛足を頂禮して右遶にして退きたまふ。

爾の時に釋迦如來、此の語を說き已んぬ。摩揭陀國主阿闍世王、復佛に白して言さく、世尊、佛の言ふが如し。諸の衆生地獄に入る。云何んが知ることを得ん。誰人か曾て見る。復云何んが餓鬼及與び畜生に墮すべきを知るや。當に人天に生ずべき、並に誰人か見る。爾の時に世尊、阿闍世に告げて言はく、大王、應當に一心に諦に聽くべし、我れ王の爲に說き、王をして現前に知見することを得せしむ。大王、當に知るべし。若し人命終せば當に地獄に墮して十五相あるべし。當に餓鬼に生ぜば八種相あるべし。當に畜生に生ぜば五種相あるべし。當に人天に生ぜば各十相あるべし。大王、何等をか名づけて當に地獄に生じて十五種相とたすや。一には、自の夫妻・男女・眷屬に於て

【二四】濟を一本には淨となす。

【二五】外道路伽耶。路伽耶底迦（Lokayatika）卽ち順世外道のことにして、斷常の二見に執着するもの。

一國邑に同居す。一切の惡事皆彼の眞實の沙門に推與へて、薇を蒙り、國王・大臣・官長、遂に眞實の沙門を驅逐して盡く國界に出さしむ。其の破戒の者は、自在に遊行して國王・大臣・官長と共に親厚たり。大王、彼の釋迦牟尼如來の所有の教法は、一切天魔外道惡人五通神仙、皆、能く壞して乃し少分に至らず。此の名相諸惡の沙門は皆悉く毀滅して餘あることなからしむ。須彌山の假使ひ三千界の中の草木を盡して薪となし、長時に焚燒すれども一毫も損することなきが如し。若し劫火、火を起して內より生ずれば、須臾に燒滅して灰燼を餘すことなし。爾の時に迦葉波佛、訖哩枳王の爲に偈を說いて言く、

『貧にして治せざるを畏れて剃落し、　敬養を得て貧窮を脫れんと言ふ。　散亂高擧して多財を務め、　內虛にして不實なること蘆葦の如し。　煩惱眷屬に迷醉せられ、　斯の人大菩提を遠離す。　眞金を負ふて、翻つて棄損し、　薪を捨てゝ荷擔して歡喜を生ずるが如し。　名利縈纏して孏惰を增し、　惰增して淨信心を滅盡す。　信心旣に滅して淨戒無し、　無戒無ければ、人天の果を斷滅す。　[二〇]蘭若閒林に自ら安處し、　本より名利及び親知を求む。　戒定智慧の心を遠離して、　但し豪貴親識に依つて住す。　自ら三惡及び八難を求め、　貧窮下賤にして[二一]邊地に生ず。　譬へば生盲の寶洲に至つて、　石を取つて如意寶を棄つるが如し。　放逸馳蕩して勝負を增し、　戒行正念の心を遠離して、　[二二]阿鼻獄の極めて怖しき中に墮して、　俱胝劫を經ても解脫し難し。　內心に恒に名稱を求めんが爲に、　身口を現に說き菩提と爲す。　鳥の空を飛ぶに猛風に遇ひ、　生死の大苦海に飄落するが如し。　薄福にして天人の女に耽染し、

戒を破つて善惡の因を遠離す。　佛教は皆　[二三]欲火の爲に燒かるゝこと須彌山の劫火に遇ふが如し。　菩提の味なく唯だ利を求め、　恒に人の爲に菩提を求むと說く。　心解脫の中に住せざれば、　獼猴の堅き椰子を得るが如し。　如來正法の寶を求めんが爲に、　身を懸崖大火坑

【二〇】蘭若。阿蘭若と譯し靜寂の處なり。
【二一】邊地。中國に非ずして邊陬の地なり。
【二二】阿鼻獄。阿鼻地獄にして地下に在る牢獄なり、間斷なく常に苦を受ける處。
【二三】欲火。婬欲の熱火なり。

ることなし。我れ應に剃落披衣して出家し、勤學し多く聞いて、受持禁戒し、大衆の中に於て坐禪入定して物をして名を知らしむべしと。是を第六となす。大王、云何んが名づけて生天を求めんが爲の故に沙門と作る。謂く或は人あつて、諸天の中長壽快樂を聞いて我に方便の上生を得ることなし。遂に即ち剃髪染衣して出家して善法を修持して皆天に生ぜんと願ふ。是を第七となす。大王、云何んが名づけて利養の爲の故に沙門と作るや。謂く、人あつて先に財寶あり、更に勝處を求めて、好精舍房院華飾を得て、以て捷遲自他所有の財產を受用すべしと。是を第八と名づく。大王、云何んが名づけて未來帝王の位を欲求せんが爲の故に、沙門と作るや。謂く衆生あつて、國王の自在・尊崇・富貴・安樂なるを見て、便ち愛樂を生じて遂に出家を求め、所修の善根を以て惟願くは[一八]當生に王位に居することを得んと願ふ。是を第九と名づく。大王、云何んが名づけて眞實の心の爲の故に沙門と作るや。謂く、衆生あつて刹利大臣の族姓婆羅門の家に生じ、或は長者・居士・商主・富貴の家に生じて盛年は美皃なりと雖、諸の財色・富貴・榮顯を觀るに、猶ほ浮雲・泡幻・電光の如く生滅して住せず、遂に厭離を起して菩提心を發し、親友珍財一切皆捨て、出家して道を慕ひ律儀を秉持し、法を學び禪を修し、精勤して懈らず。凡そ所作あるときは、皆衆生の爲にして唯無上菩提の果を求む。是を第十の眞實の心の故に沙門と作ると名づく。大王、當に知るべし。王の夢に見る所の一の獮猴は少欲知足にして、獨り樹上に處して人を擾せざる者の如きは、即ち是れ釋迦如來遺法の中の眞實の沙門なり。其の九の獮猴は衆人を擾亂し、同心して一の獮猴を驅擯すれば、即ち是れ釋迦如來の遺法の中の前の九の沙門なり。沙門の法なきが故に總じて名づけて相似の沙門と爲す。同じく惡行を行じて共に一の眞實の沙門を驅つて衆外に出す。大王、此の惡沙門は戒を破つて惡を行じ一切族姓の家を汚穢し、國王・大臣・官長に向つて、眞實の沙門を論說し毀謗し、横に是非を言ひ、是れ惡人破戒行惡と云ふ。我れに合せざる持戒の比丘同共に止住して[一九]布薩說戒すれども、亦一寺舍同

【一八】當生。未來のこと。

【一九】布薩說戒。布薩は毎月二度一處に集會して、戒經を說き、己の犯す所の罪を朝暮に懺悔して善根を修養し、或はまた六齋日（八日、十四日、十五日、廿二日、廿九日、三十日）に八戒等を持つて衆善を實踐すること。

んが爲に沙門と作る。十には眞實の心にして沙門と作る。時に彼の大王彼の佛に白して言く、世尊、此の十の沙門其の相云何、彼の佛の答へて言く、大王、貧にして活せざるを畏れて沙門と作るとは、多く衆生あつて、因果を信ぜず、財寶を貪求して互相に侵奪し、遂に天地を感ずるに、雨澤時ならず、五穀登らず、官稅を充たず、飢貧に逼められて男女を鬻ぎ賣り、投寄する所なく、樹上に遺棄せる袈裟を披挂して、自ら鬚髮を剃り沙門の像を作るに、阿闍梨もなく亦和上もなく、無戒無法にして相似の沙門なり。長時に一切の惡法を受行し、僧伽藍[一六]に入ては、自ら我は是れ律師なり、禪師なり、法師なり、大德なりと稱して、衆の首に坐居し餘僧に謂うて言く、汝等は皆是れ我が弟子なりと、淸信士[一七]の族姓長者婆羅門の家に於て出入遊從して多く過失を造る。是を第一貧にして治せざるを畏れて沙門と作ると名づく。

大王、云何んが名づけて奴の爲に怖畏あつて沙門と作ると爲すや。謂く下賤の奴婢、是の思惟を作す。云何んが一生に他の驅策を受けんと。逃げ竄れて出家す。是を第二となす。大王、云何んが名づけて債負を怖畏するが爲に沙門と作ると。謂く衆生あつて公私の債負、息利旣に多く酬還遂げず、旣に逼迫せられ逃逝して出家す。是を第三となす。大王、云何んが名づけて佛法の過失を求めんが爲に沙門と作ると。謂く諸の外道心に嫉妬を生じ遂に共に集議して誰か聰明利根辯慧ある。彼の所有の世出世の法を學び、其の是非を窺つて我が衆に還歸して、國王・大臣・長者に對して、論議の幢を樹てゝ其の過失を出して、彼の佛の正法を摧壞し破滅せん。是を第四と名づく。大王、云何んが名づけて他に勝るゝことを求めんが爲の故に沙門と作ると。謂く或は衆生あつて某甲あることを聞き、衣を披き髮を落し、多く伎能あつて三藏に通達し、心に熱惱を生じ便卽ち出家して經律論を學し、所修の善法皆彼れに勝れんと欲す。是を第五と名づく。大王、云何んが名づけて名稱の爲の故に沙門と作るとするや。謂く或は人有つて竊かに自ら思惟すらく、我れ若し家に在れば名稱あ

【一六】僧伽藍。衆園と譯す、敎團の衆の居住する處、律師とは戒律の師。
【一七】淸信士。優婆塞にて在家の信者なり。

正遍知・明行足・善逝・世間解・無上士・調御丈夫・人師・佛・世尊と名づく。彼の佛說法し、初善・中善・後善・[一二]梵行を開示したまふ。彼の時に王あり。[一三]訖哩枳と名づく。彼の如來に於て深く淨信を生ず。王、中夜に於て二種の夢を得。一は夢に十の獼猴あり、其の九の獼猴は城中の一切人民・妻妾・男女を擾亂し、飲食を侵奪し什物を破壞し、仍て不淨を以て之を穢汚す。唯一の獼猴のみ心に知足を懷うて、樹上に安坐して居人を擾さず。時に九の獼猴は同心して此の知足の者を惱亂して、諸の[一四]留難を作し、驅つて獼猴の衆會を逐出す。第二の夢には、一の白象を見る。猶ほ大山の如くにして帝王の門に當る、首尾に口あり皆水草を食す。恒に啾噉すと雖、身常に羸瘦すと。時に王寤め已つて大恐怖を生じ占相者を召して以て其の夢を原ねしむ。占者王に白さく、九の獼猴は卽ち是れ九王なり。其の知足者は卽ち是れ大王なり。是れ則ち九王同心にして大王の寶位を纂奪すべし。象二口には、卽ち是れ九王自の國邑を食ひ食王國を兼ぬと。王此の語を聞いて驚怖して毛豎てゝ心に未だ決せず。佛を見て以て疑ふ所を斷ぜんと欲せんと思ひ、卽ち左右に勅して、種々の供養の具を嚴備して一心に迦葉佛の所に往詣し、到り已つて禮を作して諸の供具を持して如來に上獻し、曲躬合掌して佛に白して言さく、世尊我昨夜に於て不善の夢を得たり。唯願くは世尊我が爲に解說して疑網を斷ぜしめたまへ。時に王、具に夢みる所を陳して佛に白す。佛の言さく、大王、王の夢みる所は王に在らず憂懼を生ずること勿れ。王善く諦に諦け、當に王の爲に說くべし。此れは是れ未來[一五]五濁惡世に佛あつて出現して釋迦牟尼と號す。滅度の後遺法の相なり。大王十の獼猴とは卽ち是れ彼の佛の十種弟子なり。王佛に白して言さく、世尊何をか佛の十種の弟子と名づくるや。迦葉佛の言く、一には貧にして活せざることを畏れ、二には奴の怖畏あつて沙門と作る。三には債負を怖畏して沙門と作る。四には佛法の過失を求めて沙門と作る。五には他に勝れんが爲に沙門と作る。六には名稱の爲に沙門と作る。七には生天の爲に沙門と作る。八には利養の爲に沙門と作る。九には未來王位を求め

【一二】梵行。清淨なる行爲なり。

【一三】訖哩枳王の十夢を說く。

【一四】留難。惡魔が善いことを留止して障難を加へること。

【一五】五濁惡世。劫濁・見濁・煩惱濁・衆生濁・命濁にて、一、劫濁とは天災疫病等蔓延して時節が濁惡になること、見濁とは我見斷見邊見等の種々の惡見を有する者が起つて是非善惡を顚倒する事、煩惱濁とは、衆生が貪瞋癡等の三毒の煩惱を盛んに起すことで衆生濁とは衆生の果報次第に盡きて身體や精神が衰亡すること、命濁とは衆生の壽命が衰へて短くなること、元來五濁は此の世界の一定の間安住せる間に起るので、初は濁の程度も薄弱であるが、次第を經るに從つて度を進め今日の如き法の季に在りては五濁は增大せりと說けり。

れ富貴の義、是れ自在の義、是れ殊勝の義、是れ勇猛の義、是れ端正の義、是れ智慧の義、是れ能く一切衆生の憍慢を摧滅し、自高にして他を陵懱する義なり。大王、汝今に於て因果を信ぜず、惡友【六】提婆達多に親近して、所生の父を殺し、囚縶飢餓し、渇乏して死せざるに其足を刖る。復【七】調達をして佛身より血を出し、和合僧を破せしむ。復護財を放ち、狂醉惡象如來を暴踐す。大王汝今復極大重罪あり。所謂一切衆生清淨法眼を挑壞し、諸佛眞正の法を斷滅し、人天涅槃の門を關閉し、三塗生死の惡趣を開示す。所以何んとならば、汝は是れ國王なり。園苑に出で遊ぶに、嚴備せる象一萬二萬【八】巾駁車二三十萬に駕して以て翊從となる。復百姓所有の膏血を以て用て象馬に塗る。時に阿闍世王、此の語を聞き已つて、佛に白して言さく、世尊、我今惟忖するに曾て百姓の膏血を以用て象馬に塗ることを省みず。世尊何を以てか是の如くの說を作したまふ。佛の言く大王、王の象馬に一一に皆【九】鬱金龍腦旃檀沉麝を以て和して香泥となして、用て象馬に塗れ、是の如く等の香皆百姓より出で、百姓を徵科すること油麻を壓するが如し。貧匱困苦にして千戶資財も一象の費に充給すること能はず。是の故に、當に知るべし。百姓の膏血は甚だ得易しとなす。是の如くの香等之を求むることは甚だ難し。大王若し疑はゞ、當に自ら一切囹圄萬姓の受苦を巡按すべし。大地獄に過ぎたり。大王百姓所有の資財を逼奪して豪貴に賞賜して、遂に富者をば、日に益奢侈せしめ、貧乏の者は轉た益貧窮にして諸の貧人をして孤恓困苦ならしむ。足を投ぐるに地無うして皆出家を求む。是の如くの人は和上及び阿闍梨あることなく、自ら袈裟を被り【一〇】禁戒を受けず、無法にして自ら居す。諸の有情心を　て輕賤を生ぜしめて見聞することを欲せず、固是れ大王、其の法眼を挑て佛法を斷滅し人天の路を閉ぢ、惡趣の門を開く。是の故に我れ言ふ、大王自己の名字を聞かずと。是の因緣を以て如何んが更に此の陀羅尼の神力加護を得ん。大王、我れ今當に古昔の因緣を說くべし。王當に諦に思ひ其の義を解了すべし。大王、乃ち往古世に佛ありて出現す。迦葉波如來・【一一】應供・

【六】提婆達多。佛の從弟なりしが五逆罪を犯せりと傳へらる。
【七】調達、提婆達多のこと。
【八】巾は、一本に馬巾とある。
【九】鬱金。鬱金香にして花黃色をせる草花なり、香として使用す。
【一〇】禁戒。禁制された戒律。
【一一】應供等とは、佛の十種の尊稱號なり。

巻の第十

阿闍世王受記品第十

爾の時に、會中の摩伽陀國主阿闍世王[一]、卽ち座より起つて偏に右の肩を袒し、右の膝を地に著け、合掌恭敬して佛足を頂禮して佛に白して言さく、世尊如來今菩提樹下我が國土に在して、陀羅尼及び曼荼羅を說きたまふ。既に是の如くの無量の功德あり、何を以てか摩伽陀國、風雨節ならず、旱澇調はず、饑饉相ひ仍りにして怨敵侵擾し、疾疫災難無量百千なるや。唯願くは世尊我が疑網を斷ちたまへ。

爾の時に世尊、阿闍世を讃じて、是の如くの言を作したまふ。大王、善い哉、善い哉、快く斯の義を問ふ。未來世に於て能く利益多し。一切衆生諦に聽き諦に聽き善く之を思念せよ。吾當に汝が爲に分別し解說すべし。大王、王の言ふ所の如きは、我が國中に於て、常に飢饉怨敵等あり。此の守護國界主陀羅尼は十六倶胝那由他陀羅尼を以て眷屬とす。此の大金剛城曼荼羅は三千五百曼荼羅を以て眷屬とす。然も彼の一切は皆信心を以て根本とし、深般若[二]を以て先導とし、大菩提心[三]及び大悲心[四]を以て莊嚴とす。大王、一切の善法は皆悉く此の陀羅尼より生ず。一切の罪惡は因果を信ぜざるを以て根本とす。大王、汝今因果を信ぜず。五欲の樂に耽ること大猛風の如し。其の信心及び菩提心を吹き、大悲總持悉皆遠逝す。大王、今者眼耳ありと雖、聾盲人の、雷霆を聞かず、日月を見ざるが如し。何を以ての故に、汝が王の名字は尙ほ自ら聞かず、況んや餘の聲に於てをや。何んが王の名と謂ふや、夫れ王と言ふは、卽ち囉惹[五]の義なり。囉の字の聲は、所謂苦惱の聲、啼哭愁歎して無主無歸無救護の聲なり。王當に慰喩して是の如くの言を作すべし。汝苦惱する莫、我れ汝主の爲に當に汝を救護し涙を拭ひ慈愍して之を撫育すべし。言く惹字の聲とは是れ最勝の義、是

【一】阿闍世王。佛在世の當時の摩訶陀國の國王たり父は「ビンバサラ」母は「キダイケ」夫人なりき。

【二】深般若。深般若の菩提心にして、三種菩提心の中の勝義の菩提心なり、是は智慧の作用によつて一切諸法無自性の原理を觀ずること。

【三】大菩提心。大菩提心とは三種の菩提心の一たる三摩地菩提心にして禪定をコラスことなり。

【四】大悲心。大悲心とは三種菩提心の中の行願の菩提心にして一切衆生を慈愛を以て相愛することなり。

【五】囉惹(rājaa)は王と譯す。

爾の時に、祕密主金剛手菩薩摩訶薩、此を說きたまふを聞き已つて、歡喜踊躍して卽ち起つて合掌し、右に世尊を遶ること百千匝を經て、還つて本座に復し恭敬し瞻仰す。佛、此の陀羅尼の功德品を說きたまふ時、三十二那由他の菩薩は、此の陀羅尼を得て、無量無數の衆生は、阿耨多羅三藐三菩提心を發しき。

解脫道に隨つて、永く一切の過を斷ず。此れ寶炬總持なり。光明普く世を照すこと、淨き日月輪の如く、能く眼をして淸淨ならしむ。此れ寶炬總持なり。天眼妙淸淨なり。慧明翳障なく、法眼も亦淸淨なり。此れ寶炬總持なり。能く[七六]煩惱の魔を淨め、及び[七七]蘊魔道を淨め、[七八]死魔已に降伏して、諸の魔軍退滅す。總持に自在に住す。[七九]那由他刹の中に、那由他の佛を見、無上の法を聽聞す。斯の廣大の法を聞いて、眞の明力を念持すれば、文義悉く皆圓なり。廣く衆生の爲に說く、此の總持に住する者は、法に於て微細に知る。諸の因緣を分別して心智刹那に滅す。此の總持を滿ずる者は、著もなく、所依もなし。[八〇]三智の眼已に明にして、三解脫に安住す。此の最勝の持を得て廣く眞言の要を說き、多總持の法を獲ること無量にして稱すべきこと難し。諸定及び解脫無量にして邊あることなし、諸の通明に遊戲し無邊の門悉く具す。大海の無量にして、能く諸の細流を納るが如し。是の如く最勝の明は、無邊の法の歸處なり。無盡の智を悟らんと欲せば、善く無盡の聲に入つて、永く[八一]結縛の源を滅すべし。此の眞の明法を說いて、若し諸の色相、種族悉く崇高ならんと欲はゞ、生生殊勝の身にして、[八二]如意寶を獲得す。能く甚深の敎に入れば、不出不生を忍むで、智地に動搖せず。此の總持の法を說くに、無數の諸の菩薩、無上の菩提を求む。此の陀羅尼を得れば、菩提得難きに非ず。十方一切の佛、說法して衆生を利す。此の最勝の明を得れば、辯才常に斷へず。此の眞の明法を得れば、說法皆空しからず。[八三]身根樂殊なるを知つて、無量の衆生を喜ばしむ。此の眞の明法に住して、最勝の[八四]輪を轉ずれば、衆生苦源を脫して、最勝の乘に安住す。那由他億劫に此の功能を讚歎すれども、此の功德無邊にして、佛說も盡すこと能はず。」

【七六】煩惱魔。貪瞋痴等の煩惱は人の身心を擾惱せしむるものなり。

【七七】蘊魔とは、魔は修道の上の障碍となるものにて、蘊魔を陰魔ともいふ。五蘊能く種々の苦を招致する故に名づく。

【七八】死魔。死は人の生命を奪取するものなり。

【七九】那由他刹。百萬の國土。

【八〇】三智の眼とは、一、一切智とは聲聞緣覺の智、二、道種智とは菩薩の智、三、一切種智とは佛の智なり。聲聞緣覺の智は一切諸法の總體の相を知る。然るに菩薩の智は一切諸法の差別の相を知る、佛智は一切諸法に通達し圓滿具足せるものなり。

【八一】結縛。結び縛する義で煩惱に喩ふ、煩惱は吾人の身心を結縛して自在を得ざらしむるものなり。

【八二】如意寶。如意寶珠なり福德を欲するまゝに授ける寶珠なり。

【八三】身根を一本には心根となる。

【八四】輪。輪寶のことにて即ち敎のことに喩ふ。

ことを得。善男子、十方世界如恒河沙の三世の諸佛、月輪に於て唵字觀を作さずして、成佛することを得るは是の處あることなし。何を以ての故に、唵字は卽ち是れ一切の法門なり、亦是れ八萬四千の法門の寶炬關鑰なり。唵字は卽ち是れ毘盧遮那佛の眞身なり。唵字は卽ち是れ一切陀羅尼の母なり。此より能く一切如來を生ず。如來より一切菩薩を生ず。菩薩より一切衆生乃至少分所有の善根を生ず。善男子、此の陀羅尼に是の如く等の不可思議の威德功用を具す。劫を窮めて演說すとも劫數は盡くべし、此の陀羅尼の功用威德は、窮盡すべからず。爾の時に、世尊重ねて此の陀羅尼の勝れたる功德を顯示せんと欲せんが故に、偈を說いて言く、

『若し煩惱の塵を離れば、　能く一切の垢を斷ず。　垢を離るれば心淸淨なり。　此れ寶炬總持なり。　若し身口意を淨めて、　平等に慈心を起す。　光明淨月の如し。　此れ寶炬總持なり。　諸の二見を解脫し、　念と疑とを遠離し、　智慧を得て心を想ふ。　此れ寶炬總持なり。　念智門に入つて大智の功德を具す。　[七二]空際の無垢なるが如し。　此れ寶炬總持なり。　三寶の種を斷ぜず。　三種の垢を遠離し、　[七三]三有の惑苦を脫がる、　此れ寶炬總持なり。　貪瞋癡を滅盡す。　陰翳の諸の煩惱　劫濁の爲に亂せられず。　此れ寶炬總持なり。　上中下の世界の　所有の諸の音聲　妙に無塵相に入る。　此れ寶炬總持なり。　甚深の法無邊の諸の字句を具足し、　我所の二見を脫す。　此れ寶炬總持なり。　妙に四行を建立し、　四禪を具足して、　隨順して解脫を得。　此れ寶炬總持なり。　勝義の法眼を得て、　[七四]四攝の梵住を圓かにし、　五通を先導とす。　此れ寶炬總持なり。　妙念處を建立して、　常に正斷に隨順す。　恒に四神足を修す。　此れ寶炬總持なり。　信等の五根を具して、　五力に安住し、　速に七覺分に住す。　此れ寶炬總持なり。　八正道に引攝して　止觀の峯に住し、　[七五]倶解脫の前導なり。　此れ寶炬總持なり。　自在に地を行ずること滿じ、　常に

【七二】空際。涅槃のこと、涅槃は眞空にして無垢のものなれば空際といふ。

【七三】三有の惑苦とは、三界の煩惱苦厄のこと。

【七四】四攝の梵住とは、四無量心なり、五通は前に出でたる五通神仙をいふ。

【七五】倶解脫。滅盡定を得たる阿羅漢をいふ。滅盡定とは六官の作用を起らざらしむる禪定なり。

覺一切三昧三摩鉢底を超過す。此の菩薩所有の禪定は陀羅尼より出生することを得。諸見及び諸の煩惱を遠離して、皆無上菩提に廻向し、衆生を成就して常に純一眞實の三昧に住して、乃至涅槃變異あることなし。是を菩薩の陀羅尼に住して靜慮を修習すとなす。

祕密主、云何んが菩薩、陀羅尼に住して、法毗鉢舍那を修習するや。謂く、此の菩薩は智慧眼を以て明に諸法を見るに、肉眼の見に非ず、天眼の見に非ず。此の菩薩是の如く見る時、法の寂靜を見、[六八]近寂靜を見、所行なきを見、合會なきを見、虛閑寂靜にして成就あることなし。此の菩薩は、是の如くの見を以て一切法を見る。若し少法を見るをば名づけて見とせず、少法を見ざるを是を名づけて見とす。何を以ての故に。若し法體を見れば智慧生ぜず。若し智慧なくば亦無智もなく、亦、有見もなし。是の如く法を見るは有我の見に非ず。衆生の見に非ず、壽者の見に非ず。養育の見に非ず、士夫の見に非ず。補特伽羅の見に非ず。是の如くの見をば是を見法と名づく。是の如くの見法は卽ち衆生虛妄顚倒を見る。是の故に菩薩は諸の衆生に於て極堅固の大悲の心を起して、是の念言を作して言く、奇なる哉衆生、是の如くの妙法、是の如くの淸淨、云何んが煩惱の爲に纒はれて恒に大苦を受くるや。其をして妄苦を解脫せしめんと欲せんが爲に大悲を起す。是を菩薩、陀羅尼に住して、法毘鉢舍那を修習すと爲す。[六九]佛の言く、祕密主、我れ無量無數劫の中に於て、是の如くの波羅蜜多を修習して、最後身に至つて六年苦行せしかども、阿耨多羅三藐三菩提を得て毘盧遮那と成らざりき。道場に坐せし時、無量の化佛猶油麻の如く、虛空に遍滿し、諸佛同聲に我に告げて言く、善男子、云何んが成等正覺を求むるや。我れ佛に白して言さく、我れは最も凡夫なり、未だ[七〇]求處を知らず。唯願くは慈悲を以て我が爲に解說したまへと。是の時に諸佛同じく我に告げて言く、善男子、諦に聽き諦に聽け當に汝が爲に說くべし。汝今宜しく應當に鼻端に於て淨月輪を想ひ、月輪の中に於て唵字觀を作すべし。是の觀を作し已つて[七一]後夜分に於て、阿耨多羅三藐三菩提を成ずる

【六八】近寂靜。近寂靜慮となる。

【六九】佛の言く以下乃至少分所有の善根を生ずに至るまで弘法大師は祕藏寶鑰第九住心に引用せり、茲に佛といふは釋迦牟尼佛にして、大日法身にはあらず。

【七〇】求處。自己の求むる最後の果をいふ。

【七一】後夜分。夜アケ方をいふ。

祕密主、云何が菩薩、陀羅尼に住して精進を勤行するや。此の菩薩は、諸の善法を增長せんと欲せんが爲の故に。精進を勤行して法界を觀ずるに增長を見ず、損減を見ず、少き眞實も成就を得べきなく、少き顚倒も壞滅を得べきなく、世界の成ずることもなく、世界の壞することもなし。此の淸淨陀羅尼門に依つて、諸法を觀察することも亦復是の如し。善法として增長すべきを見ず、惡法として滅減すべきを見ず。彼の諸の法性大なく、小なく、住處あることなく、來るに所從なく、去るに所至なし。是の如く一切諸法を知見して、是の如くの法に依つて自身を莊嚴し、衆生をして眞實に顚倒の法を解了せしめんが爲の故に爲に說法す。是の如く說く時衆生を觀察するに實に不可得なり。衆生不可得なりと知るを以ての故に、則ち一切法も亦不可得なり。何を以ての故に衆生を離れて少法として得べきもののあることなく、法を離れて亦衆生の得べきなし。又此の法性則ち是れ我性なり。我性卽ち是れ一切法性なり。一切法性卽ち是れ佛性なり。此彼本性體平等なるが故に。是の如くの佛法を觀察し尋求するに少も得べき法なし。法不可得なるが故に佛も不可得なり。又能く心を觀ずるに尙ほ不可得なり。況んや所求の法常に得べけんや。內外能所の二相倶に忘ず。是の如くの說法は此れは是れ菩薩の總持に安住して精進を勤行するなり。

祕密主、菩薩は云何んが陀羅尼に住して靜慮を修習するや。此の菩薩は若し諸定に入らば、當に諸禪に入るべし。平等の體性にして成就あるに非ず成就なきに非ず。諸定を觀察するに增もなく減もなく諸境に依らずして而も觀察あり、諸の禪定及び一切法を悟るに、平等の體性にして亂せず、滅せず、相ひ障礙せず。諸の淨慮に於て支林功德、身に依て求めず、心に依て求めず。是の如く入る時、實相眞際法性に於て定に入る。諸の衆生を觀ずるに體性平等にして諸法無生なり。是の如く相應して定を修習す。是の如く定に入るに心內に住せず、亦外に住せず、亦心に住せず。此の菩薩は識に住せず、一切の有見を超過し　衆生戒を持して禪に入ること、亦悉く一切外道　五通神仙[六七]聲聞緣

【六七】五通神仙。天眼天耳等の五神通を得た外道の仙人をいふ。

相應して布施す。悉く能く一切煩惱を捨離するを最勝の捨と名づく。諸見起らず內外の眷屬一切皆捨す。祕密主、此れは是れ陀羅尼住處に安住して布施を修行するなり。

祕密主、云何んが菩薩、陀羅尼に住して淨戒を修行するや。此の菩薩は身口意の本性を見て寂靜にして戒を護持す。身・口・意に於て心に所著なく、此世に依らず他世に依らず、內に依らず外に依らず、蘊界處に依らず菩提に依らず、亦陀羅尼門に依らず、涅槃及び一切法に依らず。淨戒を護持して亦念言せず、我れ能く戒を持す。是れ菩薩の總持に安住して淨戒を護持すと爲す。祕密主云何んが菩薩陀羅尼に住して安忍を修習するや。祕密主何んが菩薩・陀羅尼に住して安忍を修習するや。此の菩薩忍辱を修する時、自身を見ず衆生を見ず、補特伽羅を見ず壽者を見ず、我及以び我所を見ず。此の菩薩は內心清淨、衆生清淨、一切法清淨なり。所依無きを以て清淨心に依つて安忍を行ず。此の菩薩安忍を修する時、小法として修習すべきものなく、亦少法として損滅すべきものなく、亦少法として增長すべきなく、亦少法に於て生ならず、亦少法に於て滅ならざるが故に、[六五]亦少法に於て盡ならざるが故に。亦少に於て寂靜ならざるが故に。亦一切衆生に於て無我性ならざるが故に。亦一切衆生に於て寂靜の性ならざるが故に。無恐怖ならざるが故に。亦身滅盡ならざるが故に。亦語言盡ならざるが故に。亦心意盡ならざるが故に。並に是の如く等の法の爲にせずして安忍を修習す。此の菩薩身に於て安忍を修する時、他の爲に害せられて節節に[六六]支解す。當に自ら身と草木・牆壁・瓦礫等異りあることなしと觀察す。此の菩薩は、語に於て安忍を修する時、他の爲に毀辱せられ妙なる言詞を以て之を酬答す。自在に言語の性空を觀察して執持すべからず。體性寂靜にして住處あることなし。又此の法體皆相待せず。刹那刹那に相續せざるが故に。是の如く觀察して安忍を修行すれば、此の菩薩は、心に於て安忍を修する時、濁亂あることなし。亦高下なく、身と心とを見るに各相知らず、了に身心を見るに住處あることなし。此は是れ菩薩の總持に安住して安忍を修習するなり。

【六五】少は一本に少法とある。

【六六】支解。手足の分解すること。

を現じて其の問ふ所に隨つて三世の事を悉く皆辯說し、心の疑惑に隨つて悉皆斷除すべし。若し癲癇鬼魅の所著の爲には、當に楊枝及び石榴枝を以てすべし。上の眞言を以て加持すること七遍、安悉香を燒いて、地に於て彼の鬼神形像を畫き、前の童子をして楊枝等を執つて彼の圖畫の鬼神の形像の胸背等の處を鞭たしむ。時に彼の病人其の身を撻つが如し。嗥叫啼泣して頭を叩いて救を求む。今より永く去つて敢て更に來らじと。時に、阿闍梨鬼をして誓を立てしめよ。若し再び來らば願くは、我が眷屬喪滅して餘なからしめんと。鬼誓を立て、後更に再び來らざれば病者平復す。唯病を去るのみに非ず。種種の勝事、此れ總持の力なり、皆心に稱うて、所作を成就することを得。

爾の時に、世尊祕密主金剛手菩薩に告げて言く、善い哉善い哉、善男子、此の陀羅尼は能く、未來の一切衆生の與めに大利益を作し、一切如來悉皆隨喜したまふ。此の陀羅尼は能く衆生をして菩提心を發さしむ。又、一切外道異見をして悉皆調伏せしむ。諸の佛法の與めに以て先導と爲る。諸の國土に隨つて此の總持あり、國に饑饉なく、人民安樂にして、國主病無く復、怨敵なし。佛法流通して諸の障礙なし。祕密主、菩薩は此の陀羅尼を以て主として自身を覆護して、能く種種陀羅尼寶を持し、夜闇の中に於て明炬たり。又種種陀羅尼門を以て、瓔珞と作して其の身を莊嚴す。此の陀羅尼を以て先導となし、此の陀羅尼を以て器仗となし、過現未來恒に執持すべく、此の陀羅尼を以て室宅となし、其の中に安住して布施を行ず。淨戒を守護して安忍を修習し、懃に精進を行じ深く禪定に入り、般若を照明す。祕密主、菩薩は云何んが此の陀羅尼の中に安住して布施を行ずるや。祕密主、此の菩薩は平等を捨てずして施を行ずるを以ての故に。謂く陀羅尼平等の故に布施平等なり。布施平等なるが故に我平等なり。我平等なるが故に衆生平等なり。衆生平等なるが故に法平等なり。法平等なるが故に菩提平等なり。菩提平等なるが故に卽ち陀羅尼平等なり。此の菩薩は陀羅尼に住して、能く布施を行ず。是の如くの布施は煩惱に隨つて布施を行ずるに非ず。勝義の法と

る忿怒尊なり。

【六三】 金剛手甘露軍荼利金剛とは凡そ軍荼利明王は諸魔怨敵を退散する忿怒尊なり、之に甘露軍荼利、金引軍荼利蓮花軍荼利等あり、今は此等を言ひしものならん。

【六四】 瞿摩夷（Gomati）牛糞なり。印度に於ては牛を極めて神聖なものと視たる結果、其糞や尿を以て清淨なりと視たり。此の風習が一度密教に入り來るや、修法の際壇を造ることあり、此の時には必ず牛糞と牛尿とを混和して壇に塗ることゝなれり。

「南謨囉怛曩　怛囉耶也　唵阿蜜㗚多嚩曰哩　阿蜜㗚低　吽蘖捭蘖捭　曳他蘇佉三昧也摩奴三末囉娑嚩賀」

安悉香を燒き華を以て掌中に置いて、金剛合掌を作して、此の眞言を誦して四(方に)向つて花を散せば寃賊退散せん。

若し國土の內一切災難諸の惡鬼神、疫毒を流行して人畜を惱まし、及び他方の寃敵あつて侵擾せば、當に[62]極大威德忿怒王[63]金剛手甘露軍荼利金剛を作るべし、啞啞笑つて勝祕密の心法を要す。亦諸の毒刺を取つて、火に焚いて念誦して護摩を作せ。如上の災難皆悉く消滅す。若し効驗を欲せば、先づ眞言を誦すること、十萬遍を滿せば、卽ち悉地を得べし。

若し先づ善惡吉凶定不定を知らんと欲せば、應に此の陀羅尼を誦すべし。曰く、

南謨囉怛曩　怛囉耶也南謨始戰拏嚩折囉跛唵曳　摩賀藥乞叉　犀耶鉢戴曳　翳鬘
勿𠿒鉢囉乞叉茗娑茗勿𠿒　三沒哩𠿒覩唵阿蜜㗚低發　怛儞也他戰捉戰捉印捉泯捉
儈羯嚩摩泥捉　阿尾奢矯禰鉢囉尾奢矯禰　阿悉泯阿麌瑟吒　曼荼哩鉢扇努　那囉
迦那哩迦儞尾那斫𡡱灑　阿閉覩摩努山斫芻入眠斫芻　跛囉嚩多也　覩系那紇哩單
曳寫紇哩𥡴曳怛囉　悉他比單　怛薩挽捺哩灑也　莎嚩賀

次に持念軌儀を說かん。金剛阿闍梨先[64]瞿摩夷を以て塗つて方壇を成せ。乳酪末作儞也阿樂多を以て各椀に盛り滿てゝ、壇の四角に置き四角に燈を置き、然して後に花を散じ、安悉香を燒き或は劍の中或は鏡、或は牆或は指或は掌或は燈或は佛像或は水精或は壇或は琉璃の中に於て、心の欲する所に稱うて其の善惡を見、當に童男、或は童女の身に瘢痕なく淸淨にして過なきを以てすべし。身體を澡浴して白衣を著解し、此の眞言を誦して用て之を加持せよ。我れ當に至て自ら其の身

なり、八、知一切衆生智とは如來は大智ありて一切衆生の善惡の因緣を了知す。九知一切法智とは如來は全智を具して一切のことを知る、十、知無邊諸佛智とは佛は無邊の世界に出現して無邊の衆生を敎化することを知るなり。

【五四】刹利。刹帝利にて古代印度四姓階級の一、婆羅門の次の階級にて卽ち王種なり。

【五五】若し國土等とは雨を祈る祕法を說く。

【五六】大界は、小界に對する語にして廣大の範圍を限定して境界をつけること。

【五七】大孔雀王經とは不空譯に佛母大孔雀明王經、大孔雀明王畫像壇場儀軌、又義淨譯に大孔雀呪王經等あり。本經は雨を祈るに效驗ありしを以て古來眞言宗では祈雨には必ず此の經を使用する例となれり。

【五八】龍頭に擬すとは、龍の首をキルマネをすることなり。

【五九】止雨とは雨多きとき雨を止める祕法を說く。

【六〇】多くを過ぎとは、一本には過ぐる時となる。

【六一】若し他方よりとは、寃敵を退治する祕法を說く。

【六二】極大威德忿怒王とは、大威德明王のことならん、大威德明王は惡人怨家を退散す

那嚩折哩娜那賴也那賴也　戸嚧戸嚧　吽吽吽阿設哩多嚩　哩灑儞嚩哩殺覩禰嚩娑滿低襄癹癹癹癹癹癹佉佉佉佉佉佉咖佉咖佉咖佉　咖佉咖佉咖佉咖攞攞攞　娑嚩賀

世尊、我今復當に念誦軌儀法則を説くべし。金剛阿闍梨、凡そ爲す所あらんと欲せば、要ず當に先づ一切衆生に於て慈悲心を起すべし。[五五]若し國土あつて亢陽にして雨ふること無くんば、金剛阿闍梨、蓮花ある大龍池の所、或は河流の岸、或は復小池に往いて、當に[五六]大界を結ぶべし。或は四方界或は四隅界己身を結護し、其の處に壇を作り、壇の上に七頭の龍王を圖畫し、種種の花を散じ種種の香を燒き、塗香・末香・花鬘・資具・種種供養し、壇場の四面に青色の幡を懸け、赤色の幢を建て、當に穀・麥・油・麻・大麥・臘沓子・銀・金・錢等を以て龍池の中に投ずべし。右に四面を遶り、合掌禮拜して以て供養を爲せ。次に飲食を備へて以て供養を爲せ。謂く酪蜜・酥乳・糜白・粳米・飯種種の飲食なり。[五七]大孔雀王經を轉讀し、大慈心を起し、大誓願を發して、諸衆の生のために、甘雨を降らさんと祈れ。是の法を作し已つて、若し降雨せずんば、當に忿怒尊の陀羅尼を以て念誦加持すべし。我れ當に自來金剛杵を以て[五八]龍頭に擬して彼を驚怖せしむべし。時に龍、雲中に恭敬合掌して微細の雨を下し普遍く充ち洽ひ龍も亦歡喜す。唯衆生の決定等あつて、甘雨降らさざるをば除く。餘は必ず心に應ず。念誦の時三白食を食すべし。所謂乳酪及び白粳米なり。十萬遍を誦して便ち成就することを得。

若し雨[五九]多くを過ぎなば便ち[六〇]止雨の陀羅尼を誦せよ。曰く、

唵阿蜜哩低底吽底瑟吒　娑縛賀

此の陀羅尼を誦すること七遍、或は鉢器或は瓶缸等を以て蜀葵花を盛り、鉢瓶等を以て覆うて地上に在けば、便ち晴明なり。

[六一]若し他方より、寃敵來つて相ひ侵擾せば、當に此の陀羅尼を誦すべし。曰く、

他を利樂せんと願ふこと、九、力波羅蜜とは諸法の理を思惟して修習すること、十、智波羅蜜とは法樂を受用し有情を成熟するの智なり。

【五三】十種の智とは、小乘と大乘とにあり。小乘の十智は一世俗智、二法智、三類智、四、苦智、五、集智、六、滅智、七、道智、八、他心智、九、盡智、十、無生智なり。大乘に於ては、一、三世智、二、佛法智、三、法界無礙智、四、法界無邊智、五、充滿一切世界智、六、普照一切世間智、七、住持一切世界智、八、知一切衆生智、九、知一切法智、十、知無邊諸佛智なり。今單に大乘所説の十智につきて略解せん、一三世智とは三世の法を自在に知る智、二佛法智とは一切の佛法に通曉して衆生を教化する智、三、法界無礙智は法界の無礙圓融する理を知る智、四、法界無邊智とは衆生の色心實相は本來平等にして法界に無邊に存する理を知る智、五、充滿一切世間智とは如來が定より妙不思議の力用を現じて一切世間に充滿し衆生教化することを知る智なり。六普照一地世間智とは如來の大智は普く一切世間を照明すること、七、住持一切世間智とは如來は大智力ありて一切世間を住持して衆生を教化する

場門を護り、[五一]金剛道場の中にて、若し灌頂を得る者は、法王子の灌頂、久しからずして必ず當に成ず。千世に輪王となり、那由劫は帝釋、億劫は四王の位、無數世は人王なり。[五二]十度悉く圓に、十地に安住して、[五三]十種の智を成就し、十自在皆通じ、三解脱門に趣いて、三乘の法を建立し、隨順して佛地を成じ、相好以て莊嚴す。生を轉じて受くる所の身には、樂を得て大名稱あり。能く諸の病惱を脱し、智慧決めて疑なし、富貴にして貧窮を施し　安忍善を愛樂し、生生に宿住を知り、世世に莊嚴を盡す。世界は恒沙の如く、中に皆七寶を滿つ、淨心にして將て緣覺及び聲聞に布施せん。若し菩提心を發し、諸の含識を利せんが爲に、此の道場に入らば、此の福勝るゝこと前に過ぎたり。發菩提心より、佛及び菩薩を生じ、菩薩より緣覺と聲聞と、及び色究竟天と、[五四]刹利の諸の族姓とを流出す。幷に餘の諸の善業、凡夫の所行も、菩提心より出生す。菩薩は地を退せず。故に諸の勝行を修し、先づ菩提心を發す。』

爾の時に、祕密主金剛手、此を説くことを聞き已つて、佛に白して言く、世尊、我れ今此の大金剛城曼荼羅一切陀羅尼の母一切如來成正覺の法を聞き、心に清淨なることを得て歡喜し、踊躍し共の所在の國土城邑に隨つて若し此の曼荼羅を建立することあらば、我れ祕密主、陀羅尼を以て供養を爲すべし。即ち陀羅尼を説いて曰く、

曩謨囉怛曩　怛囉也耶　曩謨嚩折囉播曩曳　摩賀藥乞叉二合犀那鉢藏曳　摩賀麼囉鉢囉訖囉摩也　摩賀嚩折囉　謎囉嚩也唵阿沒嚟多軍吒嚟吽發蹬系蹬奚阿劫膽摩阿劫膽摩　阿迦哩灑也阿迦哩灑也　嚩賀哩曩薩嚩弩瑟吒那伽難　寧囉斯　頻那頻那嚩折囉曩跛吒也跛吒也　嚩折囉　曩娑吽吽吽　發發發　瞋陀瞋陀瞋陀　縛折囉曩薩嚩弩瑟吒娜健難　毘灑耶毘灑耶　佉囉勃佉八娑婆婆麼沙麼　彌勃多　入嚩囉　摩哩

いひ、五戒十善を行つて人間世界に君臨する王なり。

【四九】　菩提を一本には菩薩とする。

【五〇】　四梵住。慈悲喜捨の四無量心をいふ。此の四無量心は大梵天の住する所なれば四梵堂といふ。慈無量心とは慈愛を以て無量の人に樂を與へること、悲無量心とは一切人の苦を拔くこと、喜無量心とは人の拔苦與樂を喜ぶこと、捨無量心とは怨敵も親識も平等なりと觀じて慈愛することである。

【五一】　金剛道場。曼荼羅道場のことにて、即ち密法を授ける根本道場なり。灌頂を得る者とは、灌頂の功德を説く、灌頂は頭上に水を灌くことにて、印度國王即位式の儀式なりしを密教は踏襲して法脈を繼ぐ儀式とせり。

【五二】　十度。十波羅蜜なり。一、檀那波羅蜜は財を施し法を施すこと、二、戒波羅蜜は戒法を持つこと、三、忍波羅蜜は忍耐すること、四、精進波羅蜜は精勤努力すること、五、靜慮波羅蜜は心を一統すること、六、般若波羅蜜は智慧を磨くこと、七、方便善巧波羅蜜とは眞如の理に達する般若の智を修め又他を利樂する手段方便を修めること、八、願波羅蜜とは菩提を求めんと願ひ又

るとなす。何を以ての故に、此の曼荼羅は、卽ち是れ一切諸佛賢聖集會議論甚深の法處なり。若し能く入らば、則ち諸佛一切菩薩の爲に證知護念せられ、諸の如來法王眞子と爲り、能く一切衆生の父と爲る。三寶の種を紹いで三惡趣を斷じ、人天の門を開いて不退地に住し、一切の罪を遠ざけて、三十七菩提分法十力無畏を得、以て瓔珞と爲し自ら莊嚴す。善男子、其の城邑に隨つて、此の道場に、受持修行するあらば、[44]四天大王帝釋諸天八部、此の國土を擁護し常に飢饉なく亦寃敵なし。一切の人畜諸の災疫なく、諸の國の小王德を欽つて化に歸し、諸王の中に於て殊勝第一なり。一切の憂喜苦惱を遠離し、其の壽命に隨つて安穩快樂なり。乃至夢中に常に一切諸佛菩薩を見る。身を轉じて生を受くれば、常に安樂を得、大名稱あつて財寶を富有し、好むで[45]惠施を行じ、能く[46]安忍を修し、智慧を具足し、善法を愛樂し、生生に常に宿住智慧を得、百千世に於て[47]轉輪王と作り、那由他劫に天帝釋と作り、百倶胝世に常に[48]人王と作る。祕密主、若し善男子、善女人あつて、恒河沙世界の中に滿てる七寶を以て持用て布施し、若し復人あつて、一切衆生を利樂せんと欲せんが爲に、菩提心を發して、此の金剛曼荼羅に入らば、其の福彼れに勝れたり。爾の時に世尊、重ねて、此の義を宣べんと欲して、偈を說いて言く、

『諸佛の曼荼羅は　已に三身の法を說きたまふ。　法身及び報。化、　相續して次第に成ず。佛、[49]菩提を修する中に、　最勝微妙の法なり。　久しからずして當に成佛すべし。　三身は皆圓かなることを得、　十方の諸の世尊、　共に證知護念して、　當に法王子と成るべし。　佛種を持して、　常に全く已に惡趣の因を斷じて、　復諸の苦果を遠ざく、　不退轉に隨順して、　修行して菩提に趣き、　常に安住して　三十七道品を勤修し、　又[50]四梵住　無畏十力の中に住す。　若し此の道場を見れば、　一切の罪を遠離し、　人天等の　敬養尊重の心を受くべし。　現世に如來と成つて、　衆生の癡闇を滅す。　諸天は恒に佛を見、　常に道

の四種法あり。息災は大小公私の惡事災難を除去せんために行ふ護摩にして、增益とは小は個人より大は國家の繁榮增長を祈る法なり。降伏とは大小の怨敵を退散調伏せんために行ふもの、敬愛は相互の和敬を求むるために行ふものなり。今增長の護摩といふは增益、內外の寃滅すとは降伏、敬松とは敬愛の護摩なり。

【四二】內護摩。外護摩に對す、外護摩とは壇を作つて種々の供物を供へて修する護摩をいひ、內護摩は唯觀想のみをこらすをいふ。

【四三】五種の三昧とは、一、毘盧遮那三昧、二、觀自在三昧、三、祕密主三昧、四淨天眼三昧、五、普現身三昧をいふ。

【四四】四天大王とは、持國天增長天廣目天多聞天なり。須彌山の半腹に居する王にして、護世四天王と稱して、持國天は東方を守護し、增長天は南方を守護し廣目天は西方を守護し多聞天は北方を守護すと傳へらる。

【四五】惠施。惠み施すことにて仁慈と同じ。

【四六】安忍。能く忍耐して道を修めること。

【四七】人王は。一本には人天となる、

【四八】轉輪王。轉輪聖王とも

の中には、金等の寶を用ゐて珠とす。眞珠を念珠とするは、諸佛稱讃する所なり。[三六]蓮華部の中には、蓮華子を用ゐて尊とす。羯磨部の中の珠は種種和合して作る。[三七]五部珠を掐む法は、大拇指を用ゆること同じ。佛部は頭指に承く、金剛部は中指、寶部は無名指、蓮花部は三を合す。羯磨は四指を以て承く。皆初節を用ゆ。[三八]金珠は兩倍の福、眞珠は倶胝を得、金剛蓮子珠は、百千倶胝福なり。若し菩提子、及以び和合珠を持すれば、無數の福莊嚴す。諸佛の說く所、珠に一百八あつて、亂心を攝して馳せず。毘盧遮那の印を鼻端に當てゝ想を繫く。煩惱等を除かんが爲に、[三九]三摩提を增長して當に本尊を想ふべし。[四〇]護摩勤めて念誦し、先づ日輪を觀じて淨ならしめ、自ら輪の中に坐すと想へ。燄光を發して熾然なり。天光自體を嚴り、十方現在の佛五色青白珠なり。莊嚴極めて尊ぶべし。常に現前すと觀じて住すれば、三千塵數の佛は、悉く來つて我が身に入る。我が身虛空に等きは、[四一]扇底迦の供養なり。菩薩歡喜すと想ふは、是れ增長の護摩なり。忿怒我が身に入つて、內外の寃皆滅す。美色菩薩入つて、敬愛の相成るを想へ。瑜伽の[四二]內護摩は、過去諸佛の說なり。」

爾の時世尊此の偈を說き已つて、祕密主金剛手に告げて言く、善男子、諦に聽き諦に聽け、此の一字の陀羅尼門は、即ち是れ一切陀羅尼の母なり。無邊倶胝の陀羅尼門を以て眷屬とす。若し此の陀羅尼を觀察することあれば、無邊倶胝の三昧現前す。過去現在の一切諸佛、此の陀羅尼を觀察するに由るが故に、阿耨多羅三藐三菩提を得たまふ。善男子、我諸の國王の爲に略して一字を說いて受持することを得せしむ。若し諸の國王一字を得て觀ずること、一刹那頃なれば、便ち[四三]五種の三昧現前することを得て、所有の煩惱復現起せず。善男子、此の大金剛城曼荼羅所有の功能は、不可思議なり。若し善男子・善女人、能く此の曼荼羅に入ることあれば、則ち已に一切諸佛一切菩薩を見

【三六】蓮華子。蓮花の朶實にして珠數を作る。
【三七】五部珠を掐む法とは、即ち五部掐珠法を說く。
【三八】金珠。兩の福なり等とは以下珠を念誦する功德を說く。一百八とは凡そ數珠には一千八十、一百八、五十四、四十二、二十七、二十一、十四等の種類ある中の一にして、即ち百八は百八煩惱又は百八尊を象徵すといふ。高雄口決によれば二の母珠は無量壽佛を表し、緒を觀音とし、百八珠は菩薩の修行を表し、五十四は十信・十住・十行・十廻向・十地・煖・頂・忍・世第一法の五十四位を表し、五十四に本有修生する故に兩分すると說く。
【三九】三摩提は三摩地にして即ち心の散亂を止息して一境に安住せしめること。
【四〇】護摩は事火外道の行ふ儀式にして、彼は種々の供養物を燒いて天上の火天に供養せんとしたのである。之が密教に入つて供養の儀式となり。密教に於ても外道の如き方法によると雖も要は智火を以て一切煩惱の薪を燒盡すと內觀することを要趣とする。
【四一】扇底底迦。以下四種內護摩を說く。扇底迦とは息災と譯す、元來護摩には四種法と稱して息災・增益・降伏・敬

唵嚩折囉娑普吒娑嚩賀
唵嚩折囉囐吒娑嚩賀
唵因達囉也娑嚩賀
唵阿仡迺裔娑嚩賀
唵閻麼也娑嚩賀
唵泥以低娑嚩賀
唵嚩嚕那也娑嚩賀
唵麼那吠娑嚩賀
唵拘米囉也娑嚩賀
唵伊舍娜娑嚩賀
唵陀羅抳娑嚩賀
唵末囉設泥娑嚩賀

爾の時に、佛、祕密主に告げて言く、此の軌儀に依つて、次第に安布し、皆周ねく畢已つて、其の阿闍梨[三〇]入壇者の爲に、先づ當に[三一]三昧耶戒を授與して以て先導となすべし。然して後に灌頂せよ。既に灌頂し已つて、然る後、其の念誦眞言を敎ふべし。脣齒相合せ其の舌微く動して聲を出さしむる勿れ、力を量つて數を記し及び時の多少を以て常の限となす。要らず當に得勝境界を要期すべし。若し尅獲することなくんば、道場を出です。是の如く精勤して以て[三二]悉地を求めよ。我れ今當に珠を用ゆる差別を說くべし。偈を說いて言く、

[三三]佛部は佛種を紹ぐ。當に[三四]菩提子を用ゆべし。金剛部の中の珠は、亦[三五]金剛子を用ゆ寶部

【三〇】入壇者。眞言密敎の曼荼羅道場に入りしもの。
【三一】三昧耶戒。佛性三昧耶戒といふ。即ち佛と衆生と元來一體平等となることを諦信決定せしめる戒なり。密敎にては最初三昧耶戒を弟子に授け、然る後に金胎兩部の傳法灌頂を授與するなり。
【三二】悉地。成就と譯す。所願の圓滿成就すること。
【三三】佛部等以下は、五部に相應する念珠の種類を說く。
【三四】菩提子。雪山地方に產するBodhの果實にして、印度に產する菩提樹の果にはあらず。
【三五】金剛子。天目樹の實にして珠數に作る。

唵嚩折囉達摩娑嚩賀
唵嚩折囉底乞史那娑嚩賀
唵嚩折囉系覩娑嚩賀
唵嚩折囉㘑灑娑嚩賀
唵嚩折囉羯磨娑嚩賀
唵嚩折囉囉乞灑娑嚩賀
唵嚩折囉藥乞灑娑嚩賀
唵嚩折囉珊第娑嚩賀
唵嚩折囉攞洗娑嚩賀
唵嚩折囉摩隸娑嚩賀
唵嚩折囉儗諦娑嚩賀
唵嚩折囉囉哩諦娑嚩賀
唵嚩折囉努閉娑嚩賀
唵嚩折囉補澁閉娑嚩賀
唵嚩折囉阿嚕計娑嚩賀
唵嚩折囉囐第娑嚩賀
唵嚩折囉阿覽舍娑嚩賀
唵嚩折囉波舍娑嚩賀

薩なり。
【三九】　或は種子を安んず、佛菩薩の代りに佛菩薩の本誓を代表する眞言の種子を畫くので之を前の大曼荼羅に對して種子曼荼羅といふ。

由旬量、或は七肘量五肘三肘、或は量[二一]一肘量或は[二二]一手掌及至一爪甲量なり、我れ今當に金剛城勝曼茶羅を作る量の儀則を說くべし。當に[二三]叟方に作るべし。面に一門を開き、上に[二四]閬閬を安じ以て莊嚴をなす。一面に各自ら三十二磔手の量あり。四周に欄楯盡く三重に成して。共に十二角なり。種種の寶を以て用て華鬘を作りて莊嚴を爲せ。壇の中心に於て[二五]毘盧遮那如來の像を畫け并に[二六]四波羅蜜菩薩、[二七]四方四佛各[二八]四菩薩を畫け。[二九]或は種子を安んず。一一の菩薩に各一俱胝那由他の菩薩あつて以て眷屬となる。次に十二供養の菩薩を安んず。最外の一院に十天を安置す。彼の一一の尊に各眞言あり。五佛の眞言は已に上に說くが如し。

唵薩怛嚩嚩日哩娑嚩賀

唵囉怛曩嚩日哩娑嚩賀

唵達摩嚩日哩娑嚩賀

唵羯摩嚩日哩娑嚩賀

唵嚩折囉薩埵嚩娑嚩賀

唵嚩折囉佐娑嚩賀

唵嚩折囉囉嚩誐娑嚩賀

唵嚩折囉娑度娑嚩賀

唵嚩日囉囉怛曩娑嚩賀

唵嚩折囉諦者娑嚩賀

唵嚩折囉計覩娑嚩賀

唵嚩折囉悉蜜多娑嚩賀

の阿闍梨が閑靜の處等を選擇して曼茶羅を建立するのを心外の曼茶羅といふ。然し之を一層深く祕密に言へば吾人の心地の上に曼茶羅の作ることにて、支分生の曼茶羅は是なり。

【一九】吉祥相。吉慶の相。

【二〇】肘量。一肘量は大凡そ二尺八寸にて肘より中指の端に至る間をいふ。

【二一】量極大なるは一千由旬とは、曼茶羅道場の極めて大なることを說きしものにて即ち轉輪王の壇なり。

【二二】一手掌一爪甲量とは、道場の最少なることを說く。

【二三】叟方とは、正方形なり。

【二四】閬閬とは左にある門柱を閬といひ、右に在る門柱を閬といふ。

【二五】毘盧遮那如來。大日如來なり金剛界胎藏界兩部の曼茶羅に於ては大日如來は根本教主たり。

【二六】四波羅蜜菩薩。金剛波羅蜜菩薩、金剛法波羅蜜菩薩、金剛寶波羅蜜菩薩、金剛羯磨波羅蜜菩薩をいふ。

【二七】四方四佛。中央大日如來の四方の佛たる阿閦如來・寶生如來・阿彌陀如來・釋迦如來をいふ。

【二八】四菩薩。普賢菩薩と文殊菩薩と觀世音菩薩と彌勒菩

し諸の有情眼なく燈なく、日なく、月なく、父なく母なくば、身命[八]存すべけん。若し國王なくんば安立すべからず。又善男子、大龍池の如き、龍若し住する時は、水常に盈滿し黿鼉魚鼈水族皆安く、龍若し去る時は便ち枯涸し、水性の屬皆滅して餘なし。國王も亦爾なり。若し諸の國王此の陀羅尼門を受持すれば、能く無量無數の衆生をして現在安樂にして長へに尊貴を守り、身壞し命終すれば、善道に生ずることを得せしむ。是に知んぬ、國主善能く諸の惡趣の門を關閉し、人天涅槃の正路を開示す。故に我れ偏に守護國王を說く。

爾の時に、世尊、復、祕密主金剛手に告げて言く、善男子、汝が問ふ所の軌儀法則の如き、諦に聽き諦に聽け、我今、此の陀羅尼の爲の故に、金剛城大曼荼羅の軌儀法則を說かん、善男子、若し[九]曼荼羅を建立せんと欲する時は、[一〇]金剛阿闍梨先づ其の地を擇ぶべし。若しは山若しは野、其の地に若し種種の果木、軟草名花を有つて、平坦にして樂ふべし。或は清淨池沼澄潭泉流盈滿せるあらば、諸佛稱讚して以て[一一]曼荼羅場を建立すべし。或は大河の側、或は龍池に近く蓮華莊嚴せよ。所謂[一二]優鉢羅花[一三]拘勿頭花[一四]波頭摩花[一五]芬陀利花なり。復、鳧・雁・鴛鴦・白鶴・孔雀・鸚鵡[一六]舍利[一七]拘枳羅等。諸の妙鳥王あつて、翔集して莊嚴す。或は是れ諸佛及び諸の菩薩獨覺聲聞、曾し止住する所の寂靜の讃すべき、諸の天能等の守護する處、及び餘の城邑・聚落・僧房・舍宅・堂閣・塔廟・天祠所住の處、閑靜の園苑空舍の中、並に此の曼荼羅を建立すべし。若し是の如き法に稱ふ處なくんば、復簡せず便の宜所に隨つて以用て安置せよ。但し[一八]心地に隨つて曼荼羅を作せ。復次に善男子、若し阿闍梨、地を選擇する時、其の地若し沙石・瓦礫・樹根・株杌・髮毛・爪・齒・糠麩・灰・炭・骸骨・塚墓・蛇窟・蟻穴あらば、是の如く等の地は曼荼羅場を建立するに堪へず。既に地を擇び已つて、阿闍梨當に好宿直日を選ぶべし。清旦の時、[一九]吉祥相に於て、五體を地に投じ如來の足を禮し、其の力分に隨ひ、心の廣狹に隨つて以て道場を建立せよ。[二〇]量極大なるは一千由旬、或は復九百五百三百一百一

【八】存す云々を一本には何ぞ存せんとなる。
【九】曼荼羅 Maṇḍala は印度に於ては土を封じて平坦の壇を造り其上に諸尊の尊像を圖畫し供養せしなり。之を大曼荼羅といふ。從つて、曼荼羅を壇又は道場と譯す。而して今は密教の阿闍梨が結界して土壇を築く時の狀態を說く然るに後に至つて輪圓具足と譯するに至る。輪圓具足とは義によつて譯せるものにて一切の德を具足せる義に名づく。
【一〇】金剛阿闍梨。密教の阿闍梨なり。阿闍梨とは梵語にて敎師又は師範の義にて、密教の法を繼承傳持する學德高き人をいふ。
【一一】曼荼羅場。曼荼羅卽ち道場の義にして土壇を造ること。
【一二】優鉢羅火 Utpala は青蓮花と譯す。
【一三】拘物頭 Kumuda 黃蓮花と譯す。
【一四】波頭摩花 Padma 赤蓮花と譯す。
【一五】芬陀利花 Puṇḍarīka 白蓮花と譯す。
【一六】舍利 Śāri 百舌鳥鶖・鶖鷺等と譯す。
【一七】拘枳羅 Kokila 好聲鳥と譯す。
【一八】心地に隨つてとは密教

に莽字とは是れ化身の義、三字合するを以て共に唵字と爲る。義を攝する無邊たるが故に、一切陀羅尼の首となす。諸字義の與に先導と作る。卽ち一切法所生の處たり。三世諸佛皆此の字を觀じて而も菩提を得、故に一切陀羅尼の母となす。一切菩薩、此れ從り生ず。一切諸佛此れ從り出現す。卽ち是は諸佛一切菩薩諸陀羅尼集會の處たり。猶ほ國王の王城に住しては、臣佐輔翼し、釆女圍遶し或は出遊巡狩して皇居に還歸すれば、必ず[四]四兵を嚴り、導從千萬なれども但し、王の住王の往來とのみ言ふて、餘を說かずと雖、而も攝せざることなきが如し。此の陀羅尼も亦復是の如し。一字を說くと雖も、收めざる所なし。

爾の時に、祕密主金剛手、復佛に白して言く、世尊、佛所說の如し、諸佛は常に[五]平等三昧に住し、等しく衆生を視ること猶ほ一子の如し。今者云、何んが但し、守護國界主とのみ言ふや、諸有・貧窮[六]孤惸・困苦にして、依もなく、歸もなく救もなく、護もなし、何ぞ愍念して守護したまはざらんや。

爾の時に、如來[七]無上調御、祕密主金剛手に告げて言く、善男子、諦に聽き諦に聽け當に汝が爲に說かん。諸佛如來は平等三昧に住せざるに非ず。平等に由るが故に國王を守護す。善男子、譬へば良醫の小嬰孩の身、疾病に縈されて醫藥に勝へざるを見て、乃ち良藥を以て母に之を服せしむ。母服するに由つて藥力乳に及ぶ。其の子乳を飮んで疾病皆除くが如し。諸佛如來も亦復是の如し。一切を哀愍して國王を守護す。若し國王を守護すれば、七の勝益を獲、何等をか七となす。所謂若し能く國王を守護すれば卽ち是れ國王の太子を守護す。若し太子を守護すれば卽ち大臣を守護す。若し大臣を守護すれば卽ち百姓を守護す。若し百姓を守護すれば卽ち庫藏を守護す。若し庫藏を守護すれば卽ち四兵を守護す。若し四兵を守護すれば卽ち隣國を守護す。若し能く是の如くせば一切皆安し、善男子、是の故に國王と諸の衆生とは、日たり月たり、燈たり眼たり父たり母たり。若

【四】四兵。轉輪王が外出遊御すると之に侍從隨伴する兵にて、象兵・馬兵・車兵・步兵なり。

【五】平等三昧。同體大悲心と稱して、我と他人と同體平等なりと觀ずること。

【六】孤惸。兄弟なく孤り憂ふること。

【七】無上調御とは佛の十號にして無上師と調御師なり。

卷の第九

陀羅尼功德軌儀品第九

爾の時に會中に一の菩薩摩訶薩あり、[一]祕密主金剛手と名づく。卽ち座より起つて偏に右の肩を袒ぎ、右の膝を地に著け佛足を頂禮し、合掌恭敬して佛に白して言く、世尊、佛所說の陀羅尼門の如き、是の如くの一切陀羅尼門をば、云何んが名づけて陀羅尼門と爲る。何等の陀羅尼か、能く一切陀羅尼の母と爲る。何等の陀羅尼か普く能く一切衆生を利樂する。何等の陀羅尼か能く有情をして速に阿耨多羅三藐三菩提を得せしむるや。

爾の時に世尊、祕密主金剛手に告げて言く、善い哉、善い哉、善男子、能く如來に是の如くの深義を問ひたまふ。我今汝が爲に分別し解說せん。善男子、一の陀羅尼あり。卽ち是れ一切陀羅尼の母なり。守護國界主と名づく。若し菩薩あつて此の陀羅尼を受持し證得せば、則ち其の身如意寶に同ずることを得、衆生の見る者は所願滿足し、亦能く速に無上菩提を得べし。

爾の時に、金剛手、是の語を聞き已つて佛に白して言さく、善い哉世尊、願くは、我が爲に此の陀羅尼の少分の功能軌儀法則を說きたまへ、我等聞き已つて、精勤し修習して、便ち能く此の陀羅尼を證得せん。佛祕密主に告げて言く、善男子、毗盧遮那世尊は、色究竟天にて、[二]天帝釋及び諸天衆の爲に、已に廣く宣說したまふ。我今此の菩提樹下金剛樹下金剛道場に於て、諸の國王及與び汝等が爲に、此の陀羅尼門を略說せん。汝當に諦に、聽くべし。善男子陀羅尼の母は所謂[三]𑖌𑖽唵字なり、所以は何んとなれば、三字和合して唵字と爲るが故に。謂く𑖀婀𑖄烏𑖦莽なり。一に婀字とは、是れ菩提心の義、是れ諸法門の義、亦無二の義、亦諸法果の義、亦是れ性の義、是自在の義、猶ほ國王の黑白善惡心に隨つて自在なるが如し。又法身の義なり。二に烏字とは卽ち報身の義、三

【一】祕密主金剛手。金剛手祕密主たる金剛薩埵のことなり。金剛手とは、此の菩薩は手に金剛杵を執るから金剛手といふので。

【二】天帝釋。帝釋天なり。

【三】唵　Om は陀羅尼の最初に冠する語にして、密教にては、一歸命、二供養、三驚覺、四攝伏五三身等の五義ありて祕藏記に出でたり。此字はアウマの三字合成の語なり。アは法身の義にあたり、ウは報身、マは化身の義なりと說くなり。

般若峰菩薩は是なり。善男子、是の菩薩に、是の如くの無量の辯才智慧高勝なることあるを以て、般若峰と名づく。此の菩薩の辯才智慧に因つて、此の般若波羅蜜の母、般若の事業莊嚴法門をして世間に出現せしむ。佛是を說き已つて、爾の時に十方無量無數不可數不可稱不可量の種種の佛刹諸大威德菩薩摩訶薩、及び大威德無量の諸天・龍神・夜叉・乾闥婆・阿修羅・迦樓羅・緊那羅・摩睺羅伽、人非人・比丘・比丘尼・優婆塞・優婆夷等一切大衆、佛の此般若波羅蜜の母、般若の事業莊嚴法門を說きたまふを聞いて、踊躍歡喜して、種種の花香・塗香・末香、及び諸の瓔珞・鬘帶・衣服・幢幡・傘蓋、及び種種の音樂所謂箜篌・琵琶・鼓笛・歌吹・美妙樂音を以用て佛及び大衆を供養す。無量の衆生は阿耨多羅三藐三菩提心を發し、三十六倶胝那由他の菩薩は皆無生法忍を得たりき。

く、半月或は言く一月、或は言く六月、或は言く一年にして當に解釋すべしと。或は會中に一の菩薩あり、名づけて念意といふ、前んで吉祥守護佛に白して言さく、世尊我れ當に座を起たず威儀を易へずして、如來及び大衆の前に對して悉く能く是の如くの諸難を解釋すべし。此の語を說き已つて卽ち此の時に於て、師子吼を作して自在力を現じ、三千大千世界をして六種震動せしめ、大光明を放つて普く世界を照し其をして驚覺せしむ。時に會の大衆及び四天王天三十三天蘇夜摩天兜率陀天・樂變化天・他化自在天、乃至淨居是の如く諸天、光警覺を蒙つて、悉く來つて集會し、及び諸の龍神夜叉・乾闥婆・阿修羅・迦樓羅・緊那羅・摩睺羅伽人・與び非人、在家出家無量の品類[五三]光警覺を蒙つて、悉く會座に來り、是の如くして一刹那頃を經て未だ須臾に及ばず、此の道場をして、縱廣正等十千由旬たらしむ。

爾の時に、念意菩薩、此の大衆を見るに悉く已に雲集す。福德力及び智慧力・念力・法力・陀羅尼力・妙辯才力・大無畏力・佛威德力、是の力を以ての故に、彼の總集百倶胝の難を聞き已つて受持し、彼の如來及び大衆に對して、此の難の中に於て、一一に各百千倶胝の法門を以て解釋すること、圓滿無缺にして能く摧壞するものなし。其の流類に隨ひ、其の根器に應じて、之を演說して相續して斷ぜず。字句義理微妙に分析す。此の法を說く時其の聲遍く三千大千世界に滿ち、四天王天より乃し淨居一切諸天に至るまで、悉く其の聲を聞き、悉く其の義を解す。是の諸の天衆是の如くの言を發しき。奇特なり希有なり、念意菩薩、乃ち能く是の如し、善男子、念意菩薩、此の法を說く時、會中に六十千倶胝那由他の衆生あつて、阿耨多羅三藐三菩提心を發し、四十千倶胝那由他菩薩無生法忍を得たりき。

爾の時に、吉祥守護如來、念意菩薩を稱讚して言く、善い哉、善い哉、眞大丈夫・釋迦牟尼佛・無畏辯才菩薩に告げて言く、善男子、汝が意に於て云何、爾の時に、念意菩薩豈に異人ならんや。今の

【五三】光警覺、光明によつて心の惛沈を警め醒ますこと。

衆の妙寶莊嚴道場も亦復震動す。爾の時に、般若峯菩薩、佛に白して言く、世尊、何の因緣を以て此の十方界無量無數諸佛刹土六種に震動するや。此の衆の寶網の莊嚴道場、虛空に住在して亦六に震動するや。佛、般若峯菩薩に告げて言さく、善男子、此の般若波羅蜜の母般若の事業莊嚴法門に由て、過去の諸佛已に說き未來の諸佛當に說き、現在の諸佛今說く。若し諸の菩薩此の般若を得て、心虛空の如く、住著あることなし。我今汝及び此の大衆の爲に此の法門を說かん。是の因緣を以て、今、諸の世界の大地震動す。

爾の時に衆中に一の菩薩あり、無畏辯才と名づく。卽ち座より起って前んで佛に白して言さく、世尊何の因緣を以て、此の菩薩を般若峯と名づくや。佛の言さく、善男子、乃ち往古昔に佛あつて出現したまふ。吉祥守護如來[五〇]應正遍知・明行足・善逝・世間解・無上士・調御丈夫・天人師・佛・世尊と名づく。世界を妙有と名づけ、劫を無垢と名づく。彼の界の衆生種種の樂を受け、壽命半劫にして中夭無き者なり。彼の世界中の所有の人天・色相飮食・宮殿・樓閣、受用の資具皆等うして男なることなし。但し人と[五一]地居天と虛空に處して以て類別を分つ。彼の世界の中に唯佛法王のみにして、更に別の王なく餘天に事へず。亦餘諸の神祇を禮事せず、餘業を作さず、餘念を起さず。唯し勤めて佛を供して妙法を聽聞し、[五二]胎藏に處せずして皆化生し、女人無く亦無罪と名づけ、無犯戒者と名づく。其の中の衆生は唯常に此の般若の母、般若の事業莊嚴法門を勤修す。彼の吉祥守護如來、四萬二千の諸の菩薩衆八萬四千の聲聞の弟子あり。善男子、彼の諸の菩薩に皆廣大無量無邊の辯才智慧あり。爾の時に彼の佛一百倶胝の難問を總集して、普く一切菩薩衆に告げて言く、汝大衆の中に誰か能く勇猛に出世大丈夫の心を發起して、我が總集百倶胝の難に於て能く幾時の一一の難の中に於て、各百千倶胝の法門を以て而も解釋する者ぞ。時に此會中に或は菩薩あり、前んで佛に白して言く、我れ一日に於て當に能く解釋すべしと。或は菩薩あり、言く、七日夜當に能く解釋すべしと。或は言

【五〇】應正遍知明行足等とは佛の尊稱號なり。

【五一】地居天。四王天と忉利天の二は須彌山に居住するから地居天といふ。是に對して空居天あり。欲界の夜摩天・兜率天・化樂天・他化自在天や色界の諸天は空に居住するものなり。餘諸を一本には諸餘とある。

【五二】胎藏。母胎に藏することにて、卽ち四生の中の胎生のこと。

り。　知は涅槃を示現す。　此れは是れ般若の母、　大智の威德を得るは、　卽ち般若の事業なり。　自利具足を得るは、　此れは是れ般若の母、　能く多く衆生を利するは、　卽ち般若の事業なり。　妙法蘊を受持するは、　此れは是れ卽若の母、　己を知つて衆生を悟らしむるは、　卽ち般若の事業なり。　若し[四五]他心智を知るは、　此れは是れ般若の母、　三乘に住して出離するは、　卽ち般若の事業なり。　利他の行を起さしむるは、　此れは是れ般若の母、若し能く平等に利するは、　卽ち般若の事業なり。　[四六]諸有の焚燒を怖るゝは、　此れは是れ般若の母、　生死を捨てざるは、　卽ち般若の事業なり。　[四七]音聲忍に隨順するは、　此れは是れ般若の母、　[四八]性忍を修行するは、　卽ち般若の事業なり。　若し盡智を得るは、　此れは是れ般若の母、　若し無生智を得るは、　卽ち般若の事業なり。　若し[四九]隨順忍を修するは、此れは是れ般若の母、　若し無生忍を得るは、　卽ち般若の事業なり、　若し不退地に至るは、此れは是れ般若の母、　若し灌頂地を得るは、　卽ち般若の事業なり。　若し菩提樹に坐するは、　此れは是れ般若の母、　若し一切智を得るは、　卽ち般若の事業なり。　此の諸の般若の業は、　菩提心を發すに由る。　若し心に解脫を得れば、　諸の般若の業を成ず。　若し菩提心に於て　常に安住して不動なれば、　卽ち般若の母と成り、　常に諸の事業を作す。是の如くの諸の惡業、　及び佛の諸の勝義、　神力無礙辯は、　勝菩提心に由る。　若し菩提心、所有の諸の功德を讃せば、　多億劫を經て、　稱讃すとも盡すこと能はず。　三世の佛、一切諸の功德を生ずるを以て、　故に菩提心を、　十方諸佛の母なりと說く。　若し無量の寂靜尊を供養せんと欲することあらば、　當に菩提心を發すべし。　福は佛を供養するに過ぎたり。」

世尊、此の般若波羅蜜の母事業の莊嚴法門を說くとき、十方無量無數の佛刹六種に震動し、此の

【四五】他心智。如來の十智の一にして、他人の心を知る智なり。

【四六】諸有。種々の生死の果報をいふ。

【四七】音聲忍。音聲に由つて眞理を確認悟解すること。

【四八】性忍とは法性の理を悟解すること。

【四九】隨順忍。順忍ともいひ、眞如の理に隨順すること。

無我の義に疑を斷ずるは、此れは是れ般若の母、此の法の本より清淨なるは、卽ち般若の事業なり。涅槃寂靜を信ずるは、此れは是れ般若の母、衆生の本性寂なるは、卽ち般若の事業なり。隨順して深義を觀ずるは、此れは是れ般若の母、覺義に隨つて無礙なるは、卽ち般若の事業なり。若し深く法性を信ずるは、此れは是れ般若の母、法無礙解を得るは、卽ち般若の事業なり。諸の聲を聞て怖るゝことなきは、此れは是れ般若の母、詞無礙を分析するは、卽ち般若の事業なり。心に辯才を怖れざるは、此れは是れ般若の母、無礙辯才を得るは、卽ち般若の事業なり。[四三]生法に因つて慈を起すは、此れ是れ般若の母、若し無緣の慈を得るは、卽ち般若の事業なり。自他の爲に悲を起す、此れは是れ般若の母、無二の利悲を爲すは、卽ち般若の事業なり。法に於て愛樂し喜ぶは、此れは是れ般若の母、憂もなく愛喜もなきは、卽ち般若の事業なり。若し能く愛恚なきは、此れは是れ般若の母、二に於て解脫を得るは、卽ち般若の事業なり。具足して諸佛を念ずるは、此れは是れ般若の母、若し法身に隨順するは、卽ち般若の事業なり。恒時に能く法を念ずるは、此れは是れ般若の母、若し法を知つて著無きは、卽ち般若の事業なり。具足して僧を念ずるを得るは、此れは是れ般若の母、無爲に於て隨つて覺するは、卽ち般若の事業なり。智者恒に捨を念ずるは、此れは是れ般若の母、若し諸の煩惱を捨するは、卽ち般若の事業なり。若し清淨の戒を念ずるは、此れは是れ般若の母、煩惱無き戒に住するは、卽ち般若の事業なり。[四四]大威德天を念ずるは、此れは是れ般若の母、恒に寂靜を念ずるは、卽ち般若の事業なり。求むるに隨つて法を聽聞するは、此れは是れ般若の母、更に法の求むべきなきは、卽ち般若の事業なり。能く妙善業を作すは、此れは是れ般若の母、更に業の爲すべきなきは、卽ち般若の事業な

【四三】生法。衆生と法とにて、卽ち人空法空の理をいふ。前の法緣の慈のことなり。

【四四】大威德天。惡を降伏して善を擁護するに大威德ある天王なり。

卽ち般若の事業なり。惡を捨て、善を修する業は、此れは是れ般若の母、此の法本性淨なるは、卽ち般若の事業なり。四神足を修習するは、此れは是れ般若の母、神足の功用なきは、卽ち般若の事業なり。深く解脫門を信ずるは、此れは是れ般若の母、心を遠離して無著なるは、卽ち般若の事業なり。常に精進して滅することなきは、此れは是れ般若の母、若し身心安樂なるは、卽ち般若の事業なり。善く念じて放逸ならざるは、此れは是れ般若の母、一切處に住せざるは、卽ち般若の事業なり。妙定の覺悟に隨ふは、此れは是れ般若の母、本性等引の行は、卽ち般若の事業なり。若し妙慧に住する根は、此れは是れ般若の母、衆生の諸根を知るは、卽ち般若の事業なり。若し五力を修習するは、此れは是れ般若の母、摧伏なき智を得るは、卽ち般若の事業なり。順忍の七覺分は、此れは是れ般若の母、隨つて諸法の性を覺るは卽ち般若の事業なり。聖道支を修習するは、此れは是れ般若の母、能く法と非法と捨するは、卽ち般若の事業なり。苦惡の集生を知るは、此れは是れ般若の母、寂滅現在前は、卽ち般若の事業なり。不了義を觀察するは、此れは是れ般若の母、了義經に依るは、卽ち般若の事業なり。法を聽いて持して忘るゝことなきは、此れは是れ般若の母、敎に隨つて能く奉行するは、卽ち般若の事業なり。識に依らずして禪を修するは、此れは是れ般若の母、智に依つて奉行するは、卽ち是れ般若の事業なり。少しく人我の執無きは、此れは是れ般若の母、法に依つて奉行するは、卽ち般若の事業なり。諸行の無常を知るは、此れは是れ般若の母、法の本不生を知るは、卽ち般若の事業なり。[四一]諸行は是れ苦なりと知るは、此れは是れ般若の母なり。若し知の行あることなきは、卽ち般若の事業なり。空の義に於て觀察するは、此れは是れ般若の母、義に順じて[四二]二邊なきは、卽ち般若の事業なり。

【四一】諸行。一切の法のこと。

【四二】二邊。斷常の二邊にて前に出づ。

するは是れ般若の母なり。八萬四千の法智を得るは是れ般若の業なり。法を說く智を知るは是れ般若の母なり。說を知つて空しからざるは是れ般若の業なり。衆生をして菩提心を發さしむるは是れ般若の母なり。衆生を般若波羅蜜多方便善巧不退地の中に安置するは是れ般若の業なり。三有の因業受生も怖畏するは是れ般若の母なり。生死を捨てず意に隨つて身を受くるは是れ般若の業なり。忍むで音聲を受くるは是れ般若の母なり。性忍を修行するは是れ般若の業なり。不退地に住するは是れ般若の母なり。灌頂地を得るは是れ般若の業なり。菩提樹に坐するは是れ般若の母なり。知盡さゞるなく、遍く覺り細に念じて現に[四〇]如如を證し、刹那の心滅して智と相應して阿耨多羅三藐三菩提を得。此は是れ菩薩の般若の事業究竟莊嚴なり。爾の時に世尊、重ねて此の義を宣べんと欲し偈を說いて言く、

『法を聞いて放逸ならず、淨く持するは般若の母、慈力を以て他の爲に說て勤修するは般若の業なり。正念にして善く思惟するは、此れは是れ般若の母、思ひ已つて他の爲に說くは、即ち般若の事業なり。若し正念にして修習するは、此れは是れ般若の母、修し已つて他をして住せしむるは、即ち般若の事業なり。若し修して正しく精進する、此れは是れ般若の母、若し修し已つて演說するは、即ち是れ般若の業なり。若し心と智と倶なるは、此れは是れ般若の母、若し能く心智を說く、即ち般若の事業なり。若し獨寂靜の行、此れは是れ般若の母、若し身心あることなき、即ち般若の事業なり。若し憒鬧を遠離するは、此れは是れ般若の母、若し正念に獨住するは、即ち般若の事業なり。若し愛樂深く觀ずるは、此れは是れ般若の母、若し智を得て解脫するは、即ち般若の事業なり。若し三解脫を修するは、此れは是れ般若の母、三智現在前するは、即ち般若の事業なり。若し念住を修習するは、此れは是れ般若の母、無念現在前するは、即ち

【四〇】如如。眞如のこと。

は是れ般若の業なり。我人を執せざるは是れ般若の母なり。法に依つて修行するは是れ般若の業なり。諸法皆悉く無常なりと觀察するは是れ般若の母なり。一切法本より生滅せずと知るは是れ般若の業なり。諸行悉皆是れ苦なりと觀察するは是れ般若の母なり。一切法本より[三二]行あることなしと了するは、是れ般若の業なり。微細に諸法無我なりと觀察するは是れ般若の母なり。諸の衆生の本清淨智なりと知るは般若の業なり。微細に涅槃寂靜を觀察するは是れ般若の母なり。一切法本自り涅槃なりと知るは是れ般若の業なり。甚深の義を聞いて心驚怖せざるは是れ般若の母なり。[三三]義無礙を得るは是れ般若の業なり。[三四]勝義諦を聞いて心驚怖せざるは是れ般若の母なり。法無礙を得るは是れ般若の業なり。妙なる言詞を聞いて句義分析し心驚怖せざるは是れ般若の母なり。詞無礙を得るは是れ般若の業なり。佛の辯才を聞いて驚怖せざるは是れ般若の母なり。辯無礙を得るは是れ般若の業なり。衆生に因つて[三五]法緣慈を及ぼすは是れ般若の母なり。[三六]無緣の慈は是れ般若の業なり。自他悲を爲すは是れ般若の母なり。自他二種の大悲を遠離するは是れ般若の業なり。[三七]法喜を思惟するは是れ般若の母なり。[三八]取も無く捨も無きは是れ般若の業なり。貪瞋の捨を離るは是れ般若の母なり。二種の捨なきは是れ般若の業なり。常に諸佛を念ずるは是れ般若の母なり。法身を解了するは是れ般若の業なり。常に法を念ずるは是れ般若の母なり。法に於て無染なるは是れ般若の業なり。專心に僧を念ずるは是れ般若の母なり。無爲の性を觀ずるは是れ般若の業なり。常に捨を念ずるは是れ般若の母なり。諸の煩惱を捨するは是れ般若の業なり。常に淨戒を念ずるは是れ般若の母なり。行戒無しと知るは是れ般若の業なり。常に天を念ずるは是れ般若の母なり。法體清淨なるは是れ般若の業なり。[三九]多聞を具足するは是れ般若の母なり。衆に處して無畏なるは是れ般若の業なり。勝善根を修するは是れ般若の母なり。大智慧を得るは是れ般若の業なり。己を自利せんとするは是れ般若の母なり。自利利他是れ般若の業なり。能く八萬四千の法蘊に於て、平等に受持

【三二】行。變化の義なり。

【三三】義無礙法無礙詞無礙辯無礙、四無碍辯といふ。

【三四】勝義諦。第一義諦ともいひ眞如實相の理をいふ。

【三五】法緣慈。法を緣ずる慈悲の意にて、卽ち深く一切諸法の因緣より生ずるものにして人我の實體なき理を思惟して平等に自他を相愛する慈悲を起すことをいふ。

【三六】無緣慈。佛が六道に輪廻する一切衆生に對して自然に苦を拔いて樂を與へて慈益を得せしむるをいふ。

【三七】取も無く捨もなしとは、取は對境を執取することで、捨は對境に執着せずして心平等なることをいふ。

【三八】法喜。法の喜にて卽ち法の理を聞き法の功德を味ひ以て心に喜を生ずること。

【三九】多聞。數多の教を聞いて智識を豐富ならしめること。

善男子、般若の根本は能く般若を生ず、卽ち般若の母なり。般若の事業は卽ち是れ所生なり。善男子、若し諸の菩薩未だ聞かざる所の一切法門を聞かば、卽ち是れ般若根本の母なり。其の聞く所の如く廣く他の爲に說かば、卽ち是れ般若所作の事業なり。所聞の法に隨つて審諦に思惟せば、卽ち是れ般若根本の母なり。若し思惟し已つて他の爲に顯示せば、卽ち是れ般若所作の事業なり。正念觀察するは是れ般若の母なり。衆生を正念の中に安置するは是れ般若の業なり。自心に明了なるは是れ般若の母たり。本の寂靜を知るは是れ般若の業なり。獨處を樂ふは是れ般若の母なり。[二八]一道清淨なるは是れ般若の業なり。修行妙觀なるは是れ般若の母なり。慧を得て解脫するは是れ般若の業なり。[二九]三解脫門を修するは是れ般若の母なり。離念清淨なるは是れ般若の業なり。正斷を修習するは是れ般若の母なり。法性を知つて斷ずるは是れ般若の業なり。神足を修習するは是れ般若の母なり。無功用の行は是れ般若の業なり。能く因緣を知るは是れ般若の母なり。[三〇]諸著を超過するは是れ般若の業なり。精純無雜なるは是れ般若の母なり。身心安樂なるは是れ般若の業なり。常に善法を念ずるは是れ般若の母なり。念相に住せざるは是れ般若の業なり。定次第を知るは是れ般若の母なり。性等引を得るは是れ般若の業なり。善根を修習するは是れ般若の母なり。善く過去展轉の根性を知るは是れ般若の業なり。五力に堅住するは是れ般若の母なり。能く諸魔を摧くは是れ般若の業なり。七菩提分法に順忍するは是れ般若の母なり。諸法の性を知つて隨順覺悟するは是れ般若の業なり。集聖道分は是れ般若の母なり。筏喩の如しと知つて旣に法體を悟り、法及與び非法に住せざるは是れ般若の業なり。善能く苦集滅道を修行するは是れ般若の母なり。滅諦現前するは是れ般若の業なり。微細に[三一]不了義經を觀察するは是れ般若の母なり。了義經に依つて隨順修行するは是れ般若の業なり。所聞の法に隨つて總持して忘れざるは是れ般若の母なり。義に隨つて修行するは是れ般若の業なり。智に依つて觀察するは是れ般若の母なり。法智に隨順して行ずる

【二八】一道清淨。諸法其ものの眞實の相にして是は恰も蓮花の淤泥の中より出でゝ而も清淨なる如きものなれば一道清淨といふ。

【二九】三解脫門。空三昧・無相三昧無願三昧なることは前に出づ。

【三〇】諸著。諸多の執著たる煩惱。

【三一】不了義經。了義經に對す。卽ち。如來眞實の義を說かず唯だ假りに方便を交へて說くものなれば、一切經より言へば小乘や權大乘の經典は此にあたる。了義經は、如來眞實の義を開顯せるものにして卽ち實大乘の經典はこれなり。

無著の智莊嚴して　有情の疑網を斷ず。　智慧を修得するに因つて、覺悟の辯無邊なり。
正見止觀の心は、　究竟して邊際無し。　知教行を具足して　心念法智圓かなり。　諦光
及び神通　光照莊嚴の法、　八種皆清淨なり。　是の大威德の光は、　未だ菩提を得ずと雖、
能く諸佛の事を作す。」

爾の時に、世尊此の神通大光普照莊嚴の法を說き已つて、十方佛刹の諸來の菩薩及び諸の人天比丘・比丘尼・優婆塞・優婆夷・種種供養恭敬禮拜し、無量無數の無邊の衆生、皆阿耨多羅三藐三菩提心を發し、無量の菩薩は無生法忍を得たまひき。

般若根本事業莊嚴品第八

爾の時に、會の中に一りの菩薩あり、般若峯と名づく。佛の神力を承け、卽ち座より起て、偏に右の肩を袒して佛足を頂禮し、右の膝を地に著け、恭敬合掌して佛に白して言く、世尊佛の所說の諸大菩薩の迴向莊嚴陀羅尼門諸佛菩薩の大悲の事業、菩薩の瓔珞大光普明莊嚴の法門の如きは、云何んが、彼の一切の法を修得せん。爲く、何の法を以てか根本となし、云何んが得已つて永く忘失せず、一切衆生を慈念し養育せん。

爾の時に、世尊、般若峯菩薩摩訶薩に告げて言さく、善男子、菩薩若し時に能く甚深の般若根本に於て安住不動にして、及び能く般若の事業を作さば、則ち前の如くの迴向總持乃至光照莊嚴功德を得、得已つて失せざれば則ち是れ一切衆生を生長養育するの處なり。時に般若峯菩薩復佛に白して言さく、善い哉世尊、願くは我が爲に說かん。云何んが名づけて般若の根本とせん。云何んが名づけて般若の事業とせん。佛の言さく、善男子、諦に聽き諦に聽き善く之を思念せよ。吾れ當に汝が爲に分別し解說せん。

速に菩提の果を證す。義を以て意を莊嚴して、聲及び文に隨はず。智の清淨に依つて修して、分別說に依らず。法智は意を莊嚴し、惑を破して愚癡を離れ、般若敎智を圓にし、菩提に錯亂なし。勝菩提を求めて、意、一乘に雜らず。廣大にして劣心なく、佛に順じ應敎に達す。大悲、意を莊嚴し、暫くも衆生を惱さず。所知の法に疑なく、不了義善巧なり。衆生を知つて畏るることなく、【二六】無礙智無邊にして、作者本より來空なり。法の因緣起を了して、善巧廣大に說く。勝れたるに甚深門を要むるに、諸佛の法無邊なれども解了して皆窮盡す。世法の光照を以て、衆生の業悉く知る。出世の法の光明、般若虛空の相、有過及び無過、自在智を以て皆知る。智は聖道に契うて修し、物を利して皆果を招く。有漏及び無漏、法光知らざることなし。永く煩惱の源を斷じて、能く人天の益を作す。有爲無爲の法、智慧常に順知す。垢穢並に皆無し、諸行決定することを得。生死の法を遠離して、無礙智常に行じ、煩惱の根源を知る。性淨光明の體解脫涅槃の法、生起すれども本來如なり。無邊の法の光明、大乘の體を莊嚴す。第【二七】八人他智なり。須陀洹も亦然なり。及與び斯陀含、阿那含も亦爾なり。羅漢辟支佛菩薩及び如來、智此の法の中に於て、一一皆隨轉す。諦光照を具足し、勇健に妙に修行して、因に乘じて得果を圓にし、眞勝義を變ぜず、諸の聖諦を修習し、解脫果の門に入つて、四果次第に成ず。緣覺菩薩の忍、能く諸の異道を摧くこと、猶ほ師子王の如し。佛菩提を覺悟すること、皆諦光照に由る。神通天眼の見は、微細の色遺すことなく、天耳の分明聞は、十方の聲普く了す。昔那由劫の法界の諸の如來を念じ、善く衆生の心を知る。自然智の光照、自在に諸刹に遊び、智の光照遺すことなく、色相は虛空の如し、無漏の光は體を嚴り、無邊の福を具足して、遍く諸の衆生を育む。

【二六】無礙智。三世十方のことを無礙自在に知る智慧。

【二七】他は一本には地となる。

光照莊嚴と爲す。眞諦を修習して佛菩提を悟る。是を第八の光照莊嚴と爲す。是を菩薩の八種の諦光普照莊嚴と名づく。

善男子、菩薩に八の神通大光普照莊嚴あり。何等をか八とたす。所謂光明大光普照莊嚴、天[二三]眼を以て種種の色を見盡すが故に。微細智慧光照莊嚴、天耳を以て遠く種種の法を聞くが故に。隨順正念光照莊嚴、過去無量劫の中の[二四]宿住の事を憶念するが故に。本性智慧光照莊嚴、微細に善く衆生心を觀ずるが故に。虛空の性の障礙あることなきことを知る光照莊嚴、無邊の類刹を自在に行ずるが故に、清淨智慧光照莊嚴、煩惱なき智圓滿を得るが故に、大福德聚光照莊嚴、諸の衆生を養育し慈念するが故に、大智慧聚光照莊嚴、諸の衆生の種種の疑を斷ずるが故に、是を菩薩八種神通光照莊嚴と名づく。

善男子、菩薩に九の修行因得光照莊嚴あり。何等を九となすや。所謂修行の因に從つて智の光照を得て以て莊嚴となす。修行の因に從つて般若を得る光照莊嚴、修行の因に從つて覺悟を得る光照莊嚴、修行の因に從つて正見を得る光照莊嚴、修行の因に從つて奢摩他を得る光照莊嚴、修行の因に從つて深妙觀を得る光照莊嚴、修行の因に從つて他心を知る光照莊嚴、修行の因に從つて不退動及び正解脫を得る光照莊嚴、修行の因に從つて極究竟を得る光照莊嚴、是を莊嚴の九修行因、得普光照と名づけ、以て莊嚴を爲す。爾の時に、世尊、重ねて此の義を宣べんと欲して偈を說いて言く、

『過去世の淨業、　[二五]利生の念を忘れず、　定慧善根を積んで、　物の爲に迴向し、　即に隨つて正しく憶念し、　深義を微細に知り、　正念にして根門を守り、　塵境に居して然も靜なり。
惡法をば作すべからず。　善法をば要らず當に修すべし。　圓滿して莊嚴を念ずれば、　自ら佛の加護を得。　法城を能善く守り、　勝法を以て衆生を利す。　闇を離れて慧光圓かなり。
能く人天の衆を益す。　此の念光照を得れば、　疑惑悉く皆除く。　自然に念を習る中に、

【二三】天眼等は欲界に在つて色界天の眼根を得て種々の色を見ること、天耳は欲界に在つて色界天の耳根を得て種々の聲を聞くこと。
【二四】宿住。過去世の因緣をいふ。
【二五】利生。衆生を濟度利益すること。

に依つて狹劣の意に依らず。佛意に依つて衆魔の意に依らず。大悲の意に依つて衆生を損害するの意に依らず。是を菩薩の八種の意光普照莊嚴と名づく。

善男子、菩薩に八の解光普照莊嚴あり。能く諸法を知る。何等をか八となすや、所謂一切法を知り、衆生の行を知り、衆生の心を知り、四無礙を知り、法の體性本有の光明を知り、廣大莊嚴の法を知り、了義不了義の法を知り、一切佛の深廣の妙法を知る。是を菩薩の八種の解光普照莊嚴と名づく。

善男子、菩薩に八の法光普照莊嚴あり。云何んが八となすや、所謂世間の法光照莊嚴、諸の衆生の所造の業を說くが故に、出世間法光照莊嚴、解脫を求むる諸の衆生等の爲に[一九]般若を說くが故に。過染なき法光照莊嚴、妙智及び聖道を修習するが故に。煩惱なき法光照莊嚴、[二〇]欲有無明の見を起さゞるが故に。無爲の法の爲の光照莊嚴、無作の解脫常に現前するが故に。聖煩惱法の光照莊嚴、煩惱客塵の相を觀察するが故に。煩惱なき法の光照莊嚴、心の本性の淨光明を知るが故に。大涅槃の法の光照莊嚴、一切法の本寂滅を知るが故に。是を菩薩の八種の法光普照莊嚴となす。

善男子、菩薩に八智の光普照莊嚴あり。何等をか八となすや。所謂八人智光照莊嚴・[二一]須陀洹智光照莊嚴・斯陀含智光莊嚴・阿那含智光照莊嚴・阿羅漢智光照莊嚴・辟支佛智光照莊嚴・諸菩薩智光照莊嚴・佛菩提智光照莊嚴、是を菩薩八種智光普照莊嚴と名づく。

善男子、菩薩に八の諦光普照莊嚴あり。何等をか八となすや。所謂[二二]眞諦を修習して能く解脫現前覺を得るが故に。是を菩薩第一の諦光普照莊嚴となす。眞諦を修習して須陀洹を得、是を第二の光照莊嚴となす。眞諦を修習して斯陀含を得。是を第三の光照莊嚴となす。眞諦を修習して阿那含を得る、是を第四の光照莊嚴となす。眞諦を修習して阿羅漢を得。是を第五の光照莊嚴と爲す。眞諦を修習して、辟支佛を得。是を第六の光照莊嚴と爲す。眞諦を修習して菩薩忍を得。是を第七の

【一九】般若。般若波羅蜜多にて智慧のこと。

【二〇】欲有等。欲界に惡業の因によつて造る所の根本無明のこと。

【二一】須陀洹・斯陀含・阿那含・阿羅漢は豫流・一來・不還、阿羅漢の四果にて聲聞の修行階位たることは前に說けり。

【二二】眞諦。第一義諦ともいひ、諸法の體性たる眞如の理をいふ。

生も亦復是の如し。大乘を棄捨して乃ち聲聞緣覺の菩提人天の安樂を求む。世尊若し善男子、善女人等、此の法門を聞かば、或は已に大菩提心を發起し或は當に發起して、久しからずして皆無上菩提を得、及び前所說の殊勝の功德を具足し圓滿すべし。此の瓔珞の法門を說きたまふの時、此會中三千俱胝那由他百千の衆生、皆阿耨多羅三藐三菩提心を發しき。

大光普照莊嚴品第七

爾の時に、世尊、普く菩薩人天の大衆を觀じ、其の法に於て深く渴仰を生ずれども、心に未だ滿足せざるを知つて、文殊師利菩薩に告げて言さく、善男子、菩薩摩訶薩に、八種の大光普照莊嚴法門あり。彼の光照の故に、心開いて明了に愚闇を遠離し、大丈夫の菩薩の莊嚴を以て、其の身を嚴り、菩薩の行を修し、及び衆生を安んずべしと。此の行の中に於て何等をか八となす。所謂念光普照・意光普照・解光普照・法光普照・智光普照・諦光普照・神通光普照・修行光普照なり。是を[一六]八種の光照莊嚴となす。善男子云何んが名づけて念光普照となすや。善男子、菩薩に八の念光普照となすや。善男子、菩薩に八の念光普照莊嚴あり。云何んが八となすや。所謂一には[一七]普善を憶念して常に忘失せず。二には已に修する善根をば當に增長せしむ。三には所聞の法に隨つて憶持して忘れず。四には甚深の義に於て微細に解了す。五には其の心[一八]六塵の境に隨つて轉ぜず。六には恒に正念を以て根門を守護す。七には一切不善の法を斷ぜんが爲の故に、善法をして圓滿すること得しめんが爲の故に、常に諸佛を念ず。八には、諸佛の法城を守護せんと欲せんが爲に、念を先導として大光明を得。善男子、是を菩薩の八種の念光普照莊嚴と名づく。善男子、菩薩に八の意光普照莊嚴あり。云何んが八となすや。所謂義意に依つて語意に依らず。智意に依つて識意に依らず。法意に依つて煩惱意に依らず。理意に依つて非理意に依らず。菩提心意に依つて二乘意に依らず。廣大の意

【一六】是より八種の大光普照莊嚴法門を說く、八種とは、第一念光普照、第二意光普照、第三解光普照、第四法光普照、第五智光普照、第六諦光普照、第七神通光普照、第八修行光普照なり。
【一七】普は一本には晉となる。
【一八】六塵の境とは、眼識・耳識・鼻識等の六識によつて感官せらるる色聲香味觸法の客觀世界なり。

無盡の字を說いて智餘することなく、微細の義を解して皆圓滿す。諸佛の法を說いて邊際なく、煩惱の過を知ること亦無邊なり。解脫の功德は稱量し難く、衆生の根を知ること盡さざることなし。佛所說の四無畏を得て、祕密瓔珞莊嚴を作す。彼の諸の瓔珞身を莊嚴す。已に未だ說かざる諸の功德を說く。設ひ復精勤して劫を經て演ぶとも、所有の功德は窮むること能はず。』

爾の時に、文殊師利菩薩、是の法を聞き已つて、卽ち座從り起つて合掌恭敬し佛足を頂禮して、佛に白して言さく、希有なり世尊、佛世間に出でて勝妙の法を說いて、多く一切衆生を利樂したまふ所なり。皆、根性に稱うて、其をして歡喜せしむ。未來世に於て能く菩薩の一切の善根を生じて、能く一切初發心の者をして淸淨の心を生じ、菩提に趣向し一乘の道を行じ不退轉を得せしむ。佛の〔一五〕灌頂を受くれば、卽ち此の生に於て菩提分を得、一生に當に無上菩提を證すべし。此の菩薩の因果滅せざることを顯して、正定の衆生には爲に其の因を說き、邪定の衆生には大悲を示現して久しく趣入せしめ、不定の衆生には、各其の心の差別に隨つて樂ふ處を安んず。三乘の者には各其の根に隨つて、願をして滿足せしめ、乃至天人阿修羅等の一切世間を悉く莊嚴せしむ。所以は何んとならば、若し佛出世したまふときは、則ち是の如く等の種種の希有、奇特の法皆悉く出現す。大菩薩の衆の寶座寶帳、種種の寶樹微妙の莊嚴、大會の道場悉皆出現す。一切聲聞及び辟支佛は、百千劫に於ても思量すること能はず、況んや能く顯示せんや。世尊我が惟忖するが如きは、無智の衆生を甚だ愍むべき爲に、佛は是の如の甚深の大乘を說き、是の如くの奇特道場を顯示したまふ。大菩提心を發起すること能はず、而も反つて二乘の涅槃人天の安樂を希求するが故に、愍むべしとなす。何を以ての故に、菩薩の初發の菩提心は、所有の功德無量無邊にして一切二乘は及ぶこと能はざるが故に。世尊、譬へば人有つて無價の吠瑠璃寶を棄捨して乃ち假僞瑠璃の珠を取るが如し。一切衆

【一五】灌頂。元來印度に於て國王卽位の儀式なり。密教は法脈を傳へるために此の式を行ふ。

毘鉢舍那照さゞることなし。〔一〇〕法蘊を了知し、〔一一〕蘊智を成じて界平等なること虛空の如しと知る。諸處空處亦善く知る。法は本より無我にして因緣より起る。〔一二〕四眞諦を知つて散亂なく、法を觀じて眞實に世間を厭ふ。三際の智淨く著心なし。衆生を安ぜんが爲に三乘を了す。三寶の體同一相なることを知り、皆瓔珞の莊嚴する所なりと知る。積聚の相は幻の如く成ずと知る。分別の根本は皆夢の如し。輪轉は無實にして陽燄の如く、往もなく來もなく鏡像の身なり。因緣和合して影の生ずるが如く、但し緣より起るは猶ほ響の如し。法界眞常の性は壞することなく、眞諦の無住なること始て能く知る。眞際は湛然として動搖せず。有爲無爲は二體なし。此の深廣の智瓔をなす。菩薩珞を莊嚴し菩提を證す。忘念なき總持門を得れば、聞く所の諸義持して失することなし。一切の字義を微細に了して、善く巧に分析して智常に通ず。執著謇訥の語皆亡じ、詞理分明にして錯亂なし、所聞の法に隨つて常に義を求め文に於て具足して智超勝す。了義經の所行に依つて、法體の中に我相なきことを知る。善く世法と出世の法とを知る。皆是れ總持の嚴る所なり。眞諦に隨つて轉じて〔一三〕說の如く行ず。時を知り法を說いて人敬受す。此の法を說いて空しく過すなく、時に順じて缺くことなく悔心なし、速疾妙辯才を獲得して捷利如意にして所著なし。具德錯ることなく妙に分析し、璧の如く巧に飾つて莊嚴す。善く天龍の諸の語言夜叉乾闥阿蘇洛・迦樓緊那・摩睺等の、一切衆生の諸の語言を知つて、衆に處して無畏なること牛王の如く、諸の外道を摧くこと香象の如し。法を說いて無畏なること師子の如く、問難皆答へて泉の流るゝが若く、廣大の法を說いて〔一四〕慢山を摧き、心樂に隨つて說くこと意の如し、兇惡爲に金剛像を現じ、劫火五欲の心を焚燒す。機の所樂に隨つて三乘を說き、是義非義皆明に斷ず。廣大法を顯示し覺悟せしめ、自然智現じて師に從はず。

【一〇】法蘊。蘊は積集の義なれば諸種の法門。
【一一】蘊智。諸多の法門を知る智のこと。
【一二】四眞諦。四諦なり前に出づ。
【一三】二說を一本には法とある。
【一四】慢山。高慢の山なり。

力無畏の法盡く莊嚴す。亦復變化の智を莊嚴す。慈定瓔珞能く遍く覆ひ、柔和質直の智皆圓なり。已に幻僞諂誑の心を絕して愛恚癡怖隨轉することなし。[三]五蓋を斷除して瓔珞となし、[四]六念を勤修して莊嚴する所。[五]七覺[六]八道[七]三摩提[八]九次第定常に修習す。性稱うて止觀を勤修し、樂むで寂靜に住して諦に思惟す。正念は諸の善根を斷ぜず。聖種性を得て心自在なり。智は諸法に於て疑惑なく、現前惡作は永く生ぜず。無明癡闇悉皆除き、諦智の中に於て光普く照す。苦集滅道の智清淨なり。不可得の故に尸羅を淨む。念慧を超過して淸淨禪なり。二相を兼ね忘れて淨解脫なり。知見三世に著せず法蘊淸淨にして無染を成ず。亦能く念ずることなくして心を淸淨にす。智慧莊嚴皆具足す。智慧に依り瓔珞と爲し、能く施戒等三輪を淨む。無住の相を以て衆生に施して便ち布施の三輪淨なることを得。衆生菩提及び自己夢幻の如くなりと知つて求むる所なし。

智慧を以ての故に戒を莊嚴し便ち能く戒の三輪淨なることを得、身語及び心は鏡像の如く、響の如く幻の如く淨うして瑕なし。智慧を以ての故に忍を莊嚴す。彼の忍の三輪淸淨なり。智慧高なく亦下なし。常に淨妙眞法身を觀ず。智慧を以ての故に勤めて莊嚴す。精進の三輪亦淸淨なり、其の心任運にして能く堅固なり。取もなく捨もなく相皆空なり。智慧を以ての故に定を莊嚴す。禪定は便ち三輪の淨きことを得、本性深く觀じて因緣淨し。無動無著にして神通を起す。智慧を以ての故に方便を嚴る。彼の三輪盡く淸淨なることを得。善く眞言を攝して精進を願ふ。化生して妙法剎を莊嚴す。常に念處に住して念心なく、正斷の中に心不二なり。欲勤の心神通足を觀じて、諸の衆生の根性の殊なることを知る。諸力に安住して衆魔を摧き、正念を以て諸法の性を覺知す。去もなく來もなく道も亦爾なり。此を智慧瓔珞の嚴と名づく。深く寂靜[九]奢摩他に入る。

【三】五蓋前に出づ。
【四】六念前に出づ。
【五】七覺前に出づ。
【六】八道前に出づ。
【七】三摩提前に出づ。
【八】九次第定前に出づ。
【九】奢摩他毗鉢舍那。前に出づ。

卷の第八

菩薩瓔珞莊嚴品第六之二

爾の時に世尊重ねて此の四瓔珞の義を宣べんと欲し、偈を說いて言く、

『大智慧者の四瓔珞は、莊嚴最上第一乘なり。淨戒三昧智慧の門なり。勝妙眞言決定說なり。無瞋の衆生は皆愛樂す。一切の惡趣の門を關閉して、能く智者をして人天に處せしむ。此の圓滿戒を瓔珞とたす。身口意業皆清淨なり。所有の願欲悉皆圓滿す。正精進を行じて堅固に此の戒瓔珞莊嚴の體を求む。定慧及び解脫を成就す。解脫知見も亦復然なり。及び無上大涅槃を證す。此れ戒瓔珞莊嚴の體なり。尸羅清淨戒を破せず淳淨無雜及び清〔一〕涼なり。身に自在を得、法も亦然なり。此れ戒瓔珞莊嚴の體なり。若し清淨施を具することを得ば、安忍精進の淨も亦然なり。諸禪智慧方便門、及び不放逸〔二〕智清淨なり。不動堅固にして妙に安立す。甚深の教證退心なし。懈墮を遠離して知足を修す。此れ戒清淨莊嚴の體なり。聖者は戒を讚して勤精進す。彼の人は憂惱永く生ぜず。所作の衆善悔ゆる心なし。此れ卽ち淨戒莊嚴の體なり。衆に處して畏るゝことなく驚怖もなく、極めて決定して寂靜心を得たり。三有の牢獄は繫ぐこと能はず。大名稱堪任力を得たり。旣に自ら調伏して他の意を知る。此れ卽ち淨戒の莊嚴する所なり。諸の相好を以て身を莊嚴す。卽ち是れ淨戒莊嚴の體なり。說の如くに行じて能く語を淨む。卽ち智を具足して語を莊嚴す。煩惱なきことを得て心を莊嚴す。卽ち是れ淨戒の瓔珞なり。最勝の大願佛刹を嚴る。成就衆生の第一乘なり。一切惡業の因を造らず、所生の處をして皆嚴飾ならしむ。佛を學び能く菩薩の行を嚴る。善根を迴向して道場を嚴る。

〔一〕涼は一本に心となる。

〔二〕智は一本には皆となる。

珞莊嚴あり。云何んが一となすや、所謂正念不忘なり。

復次に善男子、菩薩に二の陀羅尼門瓔珞莊嚴あり。謂く、文持、義持なり。菩薩に三の陀羅尼門瓔珞莊嚴あり。謂く義に於て善巧あり。文に於て善巧あり。善巧分析に善巧あり。菩薩に四の陀羅尼門瓔珞莊嚴あり、謂く不著語・不審澁語・分明辯語・無雜亂語なり。菩薩に五の陀羅尼門瓔珞莊嚴あり、謂く所聞の義を知つて隨順して行ずるが故に。諸の文身を知つて隨順して行ずるが故に。了義經を知つて隨順して行ずるが故に。一切補特伽羅音聲法智を知つて隨順して行ずるが故に。諸の世間出世間の法を知つて隨順して行ずるが故に。菩薩に六の陀羅尼門瓔珞莊嚴あり。所謂、所說の理の如く而も修行するが故に。眞を證して說を起し宜に隨つて演ぶるが故に。言ふ所滅諦にして諂誑なるが故に。言く、常に威德あつて大悲を捨てず正法を說くが故に。善く根器を知り巧に能く演說して增減なきが故に。世間智を得て時を知つて說いて非時に非ざるが故に。菩薩に七の陀羅尼門瓔珞莊嚴あり。所謂迅疾辯・捷利辯・如意辯・無著辯・威德辯・無錯謬辯・一切世間最上妙辯なり。菩薩に八の陀羅尼門瓔珞莊嚴あり。所謂善く天語・龍語・夜叉語・乾闥婆語・阿修羅語・迦樓羅語・緊那羅語・摩睺羅伽、人・非人等、乃至一切衆生語言なり。菩薩に九の陀羅尼門瓔珞莊嚴あり。何等を九となすや、所謂衆に處して畏るゝことなきと。諸の異學を摧くと說法して畏るゝこと、善く問難を答へて廣大の說を知ると、隨意の說を知ると、正直の行を行ひ、金剛力を顯すと、劫燒[三五]を示現し、常想に著するを破すと、諸乘の法を說くと衆生を成就[三六]するとなり。是を名づけて九となす。菩薩に十の陀羅尼門瓔珞莊嚴あり。云何んが十となすや。所謂善能く一切の疑難を除斷す、善く一切廣大の法門を知る。善く[三七]無師自然の智慧を得。善く無盡の字句法門を說く。善く一切圓滿の深義を說く。善能く無邊の佛法を開示す。善能く無邊の煩惱の過患を說く。善く無量深解脫門を說く。善能く深く衆生の根性に入る、善く如來・無著・無礙・辯才・智慧に入る。是を名づけて十となす。善男子、是を菩薩陀羅尼門瓔珞莊嚴と名づく。

【三五】劫燒。世界が破壞する時に火災が起ること。
【三六】成就を一本には成熟となる。
【三七】無師自然智。師に從はずして自然に得たる智なり。

して取捨無きが故に。靜慮波羅蜜多三輪清淨、謂く本性清淨にして轉智なきが故に、妙觀清淨執著なきが故に、因緣清淨、神通を生ずるが故に、方便波羅蜜多三輪清淨、謂く財攝清淨、一切衆生界を成熟するが故に。總持清淨、一切妙法門を受持するが故に。大願清淨、種々淨佛刹を莊嚴するが故に。菩薩に復、七種の智慧瓔珞莊嚴あり。所謂無念の智慧、離念の四念住に住するが故に、無生滅の智、正斷に住するが故に、身心寂靜神足に住するが故に、具知根智諸根を住するが故に、[三四]四魔を摧破す、諸力に住するが故に。法の本性を知る、七覺に住するが故に。去來を知る智、八聖に住するが故に。菩薩復八種の智慧瓔珞莊嚴あり、謂く、妙*正を知る智、寂靜に入るが故に、深觀を知る智、翳障無きが故に。諸蘊を知る智、法蘊を悟るが故に。諸界を知る智、空平等の故に。諸處を知る智、空聚を了するが故に。因緣を知る智、無我に住するが故に。眞諦を知る智、心に亂無きが故に。厭離を知る智、實の如く眞實の法を觀察するが故に。菩薩復、九種の智慧瓔珞莊嚴あり。云何んが九となすや。謂く過去を知る智、前際清淨なるが故に。未來を知る智、後際清淨なるが故に。現在を知る智、中際清淨なるが故に。正定を知る智、因滅することなきが故に。不定を知る智、緣和合の故に。邪定を知る智、邪業を成ずるが故に。佛平等智法身の德なるが故に、法平等智、法無染の故に、僧平等智、無爲の德なるが故に。是を名づけて九となす。菩薩復、十種智慧瓔珞莊嚴あり。何等をか十となすや。所謂如幻を知る智、相を積集するが故に、如夢を知る智、相を分別するが故に。如燄を知る智、輪轉の相なるが故に、如像を知る智、往來せざるが故に。如影を知る智、因緣合するが故に。如響を知る智、緣起の相なるが故に。法界を知る智、不可壞の故に。眞如を知る智、住相なきが故に。眞際を知る智、湛然淨の故に、有爲を知る智、無爲の性なるが故に。是を名づけて十となす。善男子、是を菩薩十種の智慧瓔珞莊嚴と名づく。

善男子、云何んが名づけて一切菩薩陀羅尼門瓔珞莊嚴となすや。善男子、菩薩に一の陀羅尼門瓔

---

*正―本には上となる。

[三四] 四魔。煩惱魔・死魔・蘊魔・他化自在天子魔なり。―貪瞋痴等の煩惱は能く衆生の心身を錯亂せしむるものなれば煩惱魔といふ。次に死は能く人の命根を奪ふものなれば死魔といふ。色受想行識の五蘊は苦惱の根源となつて、正道を蔽ふものであるから蘊魔といふ、他化自在天の魔王は能く人に障害を與へるから他化自在天子魔といふ。

切衆生を利樂し、諸の法門に隨つて成熟することを得しむ。是を菩薩の九種の三昧瓔珞莊嚴と名づく。善男子、菩薩に復十種の三昧瓔珞莊嚴あり。何等を十となすや。所謂法性無亂の故に、妙定圓滿の故に、精進を捨てざるが故に、常樂寂靜の故に、善根を斷ぜざるが故に。心散亂せざるが故に、身安樂を得るが故に。諸法を觀察するが故に。心自在を得るが故に。聖種性[二九]を得るが故に。善男子、此れは是れ菩薩の十種の三昧瓔珞莊嚴なり。

善男子、云何んが名づけて菩薩の智慧瓔珞莊嚴と名づく。善男子、菩薩摩訶薩に、一の智慧瓔珞莊嚴あり。云何んが一となすや。所謂一切法の中に疑惑を斷除す。復次に善男子、菩薩に復、二種の智慧瓔珞莊嚴あり。謂く[三〇]惡作現起の煩惱等を遠離す。菩薩復三種の智慧瓔珞莊嚴あり。謂く愚癡を斷除し無明藏を破し、黑暗を除去す。菩薩に復四種智慧瓔珞莊嚴あり。謂く[三一]苦を知る智慧、集を斷ずる智慧、滅を證する智慧、道を修する智慧なり。菩薩復五種智慧瓔珞莊嚴あり。謂く[三二]戒蘊清淨、戒體は如空不可得なるが故に、定蘊清淨、勝智慧を發し、動念を超ゆるが故に、解脫蘊清淨、一切諸法體無二なるが故に、解脫知見蘊清淨、三世の體平等なりと了知するが故に。法蘊清淨、諸法體性染著無きが故に。菩薩に復、六種の智慧瓔珞莊嚴あり。謂く布施波羅蜜多三輪清淨、謂く、我輪清淨、我は如幻にして體平等なりと知るが故に。衆生輪清淨、所化の生は皆夢の如くなりと了するが故に。菩提心輪清淨、世間の異熟果を求めざるが故に、淨戒波羅蜜[三三]三輪清淨、謂く、身輪清淨なること、猶ほ鏡像の體平等なるが如くなる故に、語輪清淨なること、猶谷響の體平等なるが如くなる故に。意輪清淨心如幻の體平等なりと了するが故に、安忍波羅蜜多三輪清淨なり。謂く離瞋清淨、麁惡を受け毀辱を加ふるを忍ぶが故に。離愛清淨、稱讚敬養等を斷つが故に。斷支節清淨、法身體無二なりと觀察するが故に。精進波羅蜜多三輪清淨、謂く無功用清淨、生死は猶ほ夢の如しと觀察するが故に。堅固清淨、心は金剛の如く壞すべからざるが故に、取捨清淨、諸相を超過

色界初禪天に於て喜樂の生ずること、無尋無伺のことも前に出づ。

【二九】聖種性。五種性の一にして、十地なり。菩薩は十住十行十回向十地妙覺の四十一位を經て佛果を得るなり。今聖種性といふは十地のことにして十住十行十回向の地前の位を過ぎて十地の位に入り中道の妙觀によつて無明の一分を斷じて聖者の位に入るのである。

【三〇】惡作現起。種々追悔する心を現に起すこと。

【三一】苦等とは四諦なり。苦諦は迷の結果にして卽ち現に受けつゝある果報なり。集諦は迷の因にして、苦果の原因たる煩惱をいふ。滅諦は悟の果にして涅槃の理なり。道諦は悟の因にして卽ち涅槃の理を證するの原因たる八正道等の修行なり。

【三二】戒定慧解脫解脫知見。五分法身といふ。

【三三】三輪。佛の身口意の作用をいふ。佛の身口意の三作用は能く衆生の迷を斷破することは輪寶の能く敵を摧破するに等しければ三輪といふ。

善男子、云何んが菩薩、諸の三昧瓔珞莊嚴を修するや。善男子、菩薩に一種の三昧瓔珞莊嚴あり。云何んが一となすや。謂く一切衆生界の中に於て慈心を發起す。善男子、菩薩に復二種の三昧瓔珞莊嚴あり。謂く質直心及び柔軟心なり。菩薩に復三種の三昧瓔珞莊嚴あり。所謂非幻・非謗・非假なり。菩薩に復四種の三昧瓔珞莊嚴あり。謂く欲に隨順せず、瞋に隨順せず、癡に順ぜず、怖に順ぜず。菩薩に復、五種の三昧瓔珞莊嚴あり。所謂五種の障礙を斷ず。一には愛欲、二には瞋害、三には〔二三〕昏沈、四には〔二四〕掉擧、五には疑心なり。此の〔二五〕五蓋を斷じて以て莊嚴を爲す。菩薩に復、六種の三昧瓔珞莊嚴あり。謂く念佛・念法・念僧・念戒・念捨・念天なり。菩薩に復、七種の三昧瓔珞莊嚴あり。謂く菩提心を忘失せず。七菩提分に隨順し修學す。謂く念覺分・擇法覺分・精進覺分・喜覺分・輕安覺分・捨覺分・定覺分なり。菩薩に復、八種の三昧瓔珞莊嚴あり。謂く八聖道なり。正見・正思惟・正語・正業・正命・正精進・正念・正定なり。菩薩復九種の三昧瓔珞莊嚴あり。云何んが九となすや。善男子、此の菩薩は心忘失あることなし。大悲の威力衆生を捨てず。〔二六〕九次第定を修習し建立す。謂く欲惡不善の法を離る。〔二七〕有尋有伺にして〔二八〕離生喜樂に初禪に入つて圓滿住を得、尋伺を除滅し內に一心を淨めて無尋無伺にして、定生喜樂に、第二禪に入つて圓滿住を得、離喜住にして有念を捨て、正しく身の受樂を知り諸聖の所說の能く有念の受樂を捨て、第三禪に入つて圓滿住を得、樂を斷じて先に苦を除き憂喜已に滅して、不苦不樂にして捨念清淨なり。第四禪に入つて圓滿住を得、一切の色想を超へ、有對の想を滅し、種々の想を念ぜず、無邊の虛空に入つて空無邊處に於て圓滿住を得、一切の空無邊處を超過して無邊の識に入り、無邊の識處に於て圓滿住を得、一切識無邊處を超へて無少所有に入り、無所有處に於て圓滿住を得、一切の無所有處を超過して、非想非々想處に入り、非々想處に於て圓滿住を得、一切非想非々想處を超過して滅受想定に入り、滅受想定に於て圓滿住を得。是の如く善巧方便力の故に眞際現前す。先の滅力に由つて此に安住し、然して後一

【二三】昏沈煩惱の一種にして精神の憂欝になること。
【二四】掉擧。煩惱の一種にして精神の興奮すること。
【二五】五蓋。心を蓋うて善いことを生ぜざらしむるものにて普通五蓋は一は貪欲蓋にて見聞する處に對して貪愛を起すこと、二は瞋恚蓋とは、瞋恚を起して心を蓋ふこと、三睡眠蓋とは、身心を鈍重ならしむ、四、掉悔蓋とは、精神の掉き躁ぐのを掉といひ、畏怖を懷くのを悔といふ。掉躁畏怖して心を蓋ふものなり。五疑蓋とは、疑心を蓋うて猶豫決定せざることなり。五蓋を捨つることは負債を脫れ重病癒え飢餓より豐國に至るが如し。
【二六】九次第定。一初禪次第定、二、二禪次第定、三、三禪次第定、四、四禪次第定の色界四禪定と、五、空無邊處次第定、六、識無邊處次第定、七無所有處次第定、八、非想非非想處次第定の無色界の四種の根本定と、九、滅受想次第定にて、此の九種の禪定を次第を追うて修するのである。
【二七】有尋有伺等のことは前に出づ。
【二八】離生喜樂とは、離生喜樂地にして欲界の苦を離れて

復次に善男子、菩薩に五の〔二〇〕淨戒瓔珞あり。謂く三昧を具足し智慧を具足し解脫を具足し、解脫知見を具足し、大般涅槃を具足す。

復次に善男子、菩薩に、六の淨戒瓔珞あり。謂く不破戒、終に悔なきが故に、不穿漏戒、餘過なきが故に。不雜戒、和合なきが故に、清淨戒、白法を長ずるが故に、自在戒、意に隨つて往く所に體具足するが故に、自在轉戒、一切時に於て智自在なるが故に。

復次に善男子、菩薩に、七の淨戒瓔珞あり。所謂施に清淨を得、忍に清淨を得、勤に清淨を得、定に清淨を得、慧に清淨を得、方便に清淨を得、不放逸に清淨を得。

復次に善男子、菩薩は八の淨戒瓔珞あつて各別に圓滿す。所謂〔二一〕十地圓滿し、不悔圓滿し、不懈怠を圓滿し、不嫌恨を圓滿し、佛を供養することを圓滿し、〔二二〕八難を離ることを圓滿し、布施を修することを圓滿し、善友を得ることを圓滿す。

復次に善男子、菩薩に九の淨戒瓔珞あり、云何んが九となすや。所謂無所畏を得、無驚怖を得、決定心を得、近寂靜を得、調伏心を得、無貪心を得、勇悍心を得、一切衆生心念を知ることを得、寂靜地を得。是を名づけて九となす。

復次に善男子、菩薩に十の淨戒瓔珞あり、云何んが十となすや。所謂身瓔珞、圓滿の相好莊嚴を爲すが故に。語瓔珞、如說に修行して莊嚴を爲すが故に。意瓔珞、煩惱無きを以て莊嚴を爲すが故に。刹土瓔珞、願を圓滿するを以て莊嚴を爲すが故に。利他瓔珞、能く心を淸淨にして莊嚴を爲すが故に。生處瓔珞、諸惡を造らず莊嚴を爲すが故に。菩薩行瓔珞、佛の行を學すに隨つて莊嚴を爲すが故に。智慧瓔珞、一切法皆悉く幻化なりと了して莊嚴を爲すが故に。菩提場瓔珞、一切の善根を皆悉廻向して莊嚴を爲すが故に。力無所畏佛不共法を以て瓔珞と爲す。淨戒根本の體性を捨てず莊嚴を爲すが故に。是を名づけて十とす。

〔二〇〕戒・定・慧・解脫・解脫知見の五種は佛身を成就するものなれば五分法身といふ。如來の身口意の三業は淸淨にして一切の非を離れて居ることを戒法身といひ次に如來の心は靜寂にして一切の妄念を離れて居るから之を定法身といふ。次に如來の智は諸法の實相を了達するを以て慧法身といふ。次に如來は一切の妄想顚倒を解脫せるを以て解脫法身といふ。次に一切の妄想を解脫したことを知見することを解脫知見といふ。

〔二一〕十地。菩薩の修行する階程にして、一歡喜地・二離垢地・三發光地・四焰慧地・五極難勝地・六現前地・七遠行地・八不動地・九善慧地・十法雲地なり。

〔二二〕八難。佛道修行の上に於ての八種の障碍、一地獄に生れること、二餓鬼道に生れること、三畜生道に生れること、四樂のみあつて苦のなき北拘盧洲に生れること、五色界無色界の長壽安穩な處に生れること、六聾盲瘖啞に生れること、七世智辯聰、八佛前佛後に生れて佛法を聽くことを得ないこと。

故に我佛力を承けて敢て諮問せんと欲す。世尊云何んが名づけて菩薩の瓔珞となす。云何んが菩薩の瓔珞莊嚴、云何んが殊勝行を得ん。云何んが菩薩不思議の妙法光明を得て、黑闇及び諸の疑惑を遠離する。云何んが菩薩如來大法明門を得て、悉く能く清淨なるや、善い哉世尊、唯願くは我が爲に、決定して諸の菩薩衆の出生法門を決定宣說したまへ。若し諸の菩薩、此を聞くことを得已ぬれば、能く衆魔煩惱の寃敵を破し、一切法に入つて永く疑惑なく、現前に如來の境界を了知し、漸次に深く諸の菩薩の境に入らん。復能く漸く一切智の境に入り衆生の心を知り、衆生の行を淨め、諸佛の[一七]刹に遊び、魔軍を摧伏して速に能く一切の佛教を攝受し一切の法に於て自在に而も轉ぜん。

爾の時に、世尊、文殊師利菩薩に告げて言く、善い哉善い哉、善男子、汝能く大勇猛心を發起し師子吼を作して如來に是の如くの妙義を問ふ。汝已に能く一切如來無量の境界に於て、明了に通達し、能く斯の義を問ふ。善男子、諦に聽き、諦に聽き善く之を思念せよ。吾當に汝が爲に分別し解說せん。是の如の境界及び餘の無量の諸の功德の法、皆汝等をして速に圓滿することを得、一切法に於て自在に轉ぜしめん。文殊師利、唯然りと教を受く。佛、文殊師利に告げて言く、善男子、一切の菩薩は、皆悉く[一八]四種の瓔珞を具したまふ。云何んが四と爲すや。所謂戒を瓔珞とし、定を瓔珞とし、慧を瓔珞とし、陀羅尼門を以て瓔珞となす。是を四となす。善男子、云何名づけて戒を瓔珞となすや。善男子、菩薩に一の淨戒瓔珞あり。謂く衆生に於て瞋恚なく、障礙なき心を起し、諸の衆生をして見て皆歡喜して厭足あることなからしむ。

復次に善男子、菩薩に二の淨戒瓔珞あり。所謂[一九]惡趣の門を閉ぢて人天の路を開く。

復次に善男子、菩薩は三の淨戒瓔珞あり。謂く身・口・意皆悉く清淨なり。

復次に善男子、菩薩に四の淨戒瓔珞あり。謂く欲する所皆遂げ、願ふ所皆成じ、樂ふ所皆得て始終究竟せん。

【一七】刹。國土なり。

【一八】四種の瓔珞。以下淨戒、禪定智慧陀羅尼門の四種の方面より各々十種をあげて十種の淨戒瓔珞莊嚴、十種の三昧瓔珞莊嚴と十種の智慧瓔珞莊嚴と十種の陀羅尼門瓔珞莊嚴とを說く。

【一九】惡趣の門。地獄餓鬼畜生の三惡趣のこと。

の身及び其の處したまふ所の【一五】師子座をして威德光明あらしむ。大衆に過ぐること百千萬倍、猶ほ滿月の衆星を映奪するが如し。爾の時に、文殊師利童子、佛の威神を蒙つて卽ち座より起つて遍に右の肩を袒し胡跪し合掌して佛の功德を讃じて偈を說いて言く、

『佛は身智の大光明を放つて、普眼を以て無餘の義を見盡し、本性自然に諸の善巧あつて、不思議の德悉皆圓かなり。丈夫牛王大光を放つて、普く照し遍く三業を淨めたまふ。我を遶ること百千匝を經、遶り已つて頂より身心に入る。我れ昔の智慧及び辯才を總持す、光照皆微劣なり。人天主の光纔に我に觸れて、超過すること千倍にして前に勝れり。我が身を淸涼ならしめ我が心を淨めたまふ。踊躍歡喜して皆平等なり。佛香の妙辯は邊際なし。悉く皆我が身中に流入す。如來威德は量知り難し。劣を以て此を【一六】持念すること能はず。佛の智力を承けて今諸問したてまつる。諸の衆生を利樂せんと欲する爲、菩薩の諸行門に入らが爲めなり。復諸佛をして世に出興せしむ。神通放光の灌頂智、此の德を成じ如來に問ひたてまつらんと願ふ。此の衆の集會廣きこと無邊なり。最上乘の中に已に修入す。餘の未だ得ざる者は心を傾けて念ず。彼を利益せんために如來に問ひたてまつる。願くは、無等の智時機に順じて、妙法藏を聞き含識を利したまへ。魔王眷屬當に摧殄して、如來の敎に於て善く修持すべし。大雄の智慧は邊あることなく、善巧無窮にして際限なし。而も我が智慧は了すること能はず。是の故に如來に諸問したてまつる。世尊の智慧は實の如く知つて、無量劫に於て長時に轉じたまふ。曠劫に勤修して今自在なり。願くは佛智を開いて衆生に示したまへ。』

爾の時に文殊師利菩薩、此の偈を說き已つて佛に白して言さく、世尊、如來の境界は不可思議なり。是れ菩薩稱量の境界に非ず。佛の智慧は說法して倦むことなく、大悲憐愍して衆生を捨てず。

【一五】師子座。獅子が獸類の中の王である如く、佛人中の王なれば玉の坐する所を總じて師子座といふ。

【一六】持念。記憶して忘れざること。

を說きて示教利喜す。時に神通魔、是の事を見已つて卽ち起つて合掌して神通自在王菩薩を恭敬し禮拜す。爾の時に、菩薩之に告げて言く、仁者、菩薩の是の如くの廣大の器を見るや不や。魔の言く、已に見る。奇なる哉、大士能く是の事を辨ず。是の如くの大器は百千俱胝那由他劫も亦破壞すべからず。故に此の大寶莊嚴道場を任持して缺くることなく、無垢淸淨にして、變異あることなし、何の不可に干せん。時に神通魔、此の語を說き已つて佛足を頂禮して佛に白して言く、世尊、我れ過去世を思惟するに未だ曾て此の神通自在王菩薩の神通の事を見ず、未だ曾て此の法門を聞かざるの時、聲聞乘に於て勤行精進して、三界を出でて自ら涅槃を求めんと欲す。我今日、是を見聞し已つて、便ち阿耨多羅三藐三菩提に於て、決定極深重心を發起せん。世尊、設令我れ恒河沙劫に於て、大地獄に處して種々の苦を受け、然る後阿耨多羅三藐三菩提を成ずることを得るも、我れ此の苦を甘んじて菩提の心を捨てず。

爾の時に世尊、魔を稱讃して言く、善い哉善い哉、汝大丈夫、能く阿耨多羅三藐三菩提に於て、大甲冑を被、久しからず亦神通自在王菩薩の如く、一切の功德を具足圓滿したまふ。

菩薩瓔珞莊嚴品第六之一

爾の時に、十方種々佛刹より諸來せる菩薩、及び此の大會の天龍・夜叉・乾闥婆・阿脩羅・迦樓羅・緊那羅・摩睺羅伽・人・非人等、及び比丘・比丘尼・優婆塞・優婆夷、心に渴仰を生じ妙法を聞かんと欲す。爾の時に、世尊此の衆會の心の所念、深法を聞かんと樂ひ、[三]法藏を持するに堪へたることを知らしめて、歡喜怡暢し、復重ねて爲に守護國界主陀羅尼經を開示し顯現せんと欲して、[四]大人相無見頂光を放つ。此の光を名づけて不捨精進光と爲す。遍く此の菩薩大會を遶ること七匝を經已つて復文殊師利童子を遶ること百千萬匝なり。是の事を作し已つて文殊の頂に入る。其の光入り已つて、文殊

【三】法藏。佛の說かれた敎のこと。
【四】大人相無見頂光。佛の相好を形容せること。

得たり。

爾の時に世尊、普く一切の菩薩大衆を觀じて是の如くの言を作す。諸の佛子等誰か能く廣大の誓願を發起して、大威德を以て能く此の不可思議種々の妙寶を以て道場を莊嚴せる瓔珞網覆菩薩の住處及び十方來の諸の如意樹の華葉間列して燄を發し輝を含むを留めて常に變易なくして〔一〕彌勒佛の下生の時、年方に十六にして道場に坐して正覺し、始めて圓かに此の守護國界主經を說き、此の陀羅尼を演說したまふを待ちき。爾の時に以て供養を伸べ、乃至賢劫の千佛の出現にも亦復是の如く以て供養を爲すべしと。是の語を說く時、此の會中に於て、一切の菩薩あり、神通自在王と名づく。蓮花座に於て、身の威儀を整へ、右の膝を蓮花の臺に著け、恭敬合掌して佛に白して言さく、世尊我れ能く是の如く、佛の如く敎勅して此の道場に留り、慈氏乃至賢劫一切如來を供養して應に正覺すべしと。

爾の時に會中に神通魔あり、妙建立と名づく、四大洲に住して、此の語を聞き已つて即ち神通自在王菩薩に白して言さく、聖者何等の器を以て、此の衆寶瓔珞を安置して道場を莊嚴し、爾所の時を經て、損壞せざらしむ。時に神通自在王菩薩、彼の魔に語つて言く、仁者當に知るべし。一切器物は速疾に破壞し、諸の障礙多し。虛空を器となさば、損壞すべからず、障礙あることなし。一切の器の中に此を最勝となす。汝瞬すること勿れ、目諦に我が身を觀よ。自ら當に我が廣大の器を見るべしと。魔其の敎の如く諦に菩薩を觀じ、菩薩の身を見るに、臍輪の中に一世界あり、水光王と名づく。謂く此の世界に大水彌漫すること、猶ほ大海の如し、故に其の名を立つ、此の世界の中に於て一如來あり、吉祥寶蓮花如來・應供・正遍知・明行足・善逝・世間解・無上士・調御丈夫・天人師・佛世尊と名づく。唯だ清淨の大菩薩衆あり、其水中に於て彌漫して衆寶蓮花を生じ、吉祥如來寶花王に坐したまふ。諸の菩薩衆も倶に寶花に坐して恭敬圍遶す、時に彼の如來大衆の中に於て深妙の法

【一】彌勒下生。彌勒菩薩は五十六億七千萬年の後に此の娑婆世界に下生して成佛すといふこと。

て散し奉る、或は復、種種の天華を散して以て供養をなすことあり。所謂波利耶怛羅迦華・曼陀羅華・摩訶曼荼羅華・曼殊沙華[八]・摩訶曼殊沙華・盧遮迦華・摩訶盧遮迦華・濕他羅華・斫羯羅華・無垢斫羯羅華・百葉華・千葉華・百千葉華・普光華・普香華・光燄華・最勝華・無邊色華・大普遍華・愛樂見華、而も供養す。或は衆生あつて、陸生華を散ず。所謂嚩哩色枳華・蘇曼那華[九]・拘蘇摩華[一〇]・阿提目多迦華[一一]・瞻博迦華・阿輸迦華・馱努色迦哩迦華・波吒羅華・目眞隣陀華・摩訶目眞隣陀華なり。或は衆生あり、水生華を以て奉散供養す。所謂優鉢羅華・波頭摩華・拘物頭華・芬陀利華なり。是の如く等種種の妙華を散じて佛を供養す。一切諸天は虚空の中に於て諸天の樂を奏して淸雅寥亮微妙の音聲を以て供養をなす。所謂簫笛・箜篌・琵琶・螺貝、種種の天鼓美妙の聲鼓、種種の歌舞なり。恭敬稱歎して佛を供養す。復種種の天の諸の妙華、種種の抹香、種種の妙寶、種種の瓔珞、種種の衣服、是の如く微妙の諸天の供具を雨らして佛を供養したてまつる。

爾の時に十方所有の世界の諸天菩薩摩訶薩衆倶に來つて集會し及び此の衆中の諸菩薩等佛を供養せんが爲めに皆虚空に昇つて各各に身を變じて、天の形像を作し、纔に身を變じ已つて菩薩力の故に衆の寶網を以て遍く大會を覆ひ、其の網周匝して菩提樹を遶る。其の四面に於て各四由旬、皆厚さ八歩種種の眞珠瓔珞周く垂れ懸けたり。衆の網鐸寶鈴、和鳴し衆の寶蓮華を以て校飾をなす。其の珠の瓔珞一一の珠の中に皆無量無數の菩薩あつて、倶時に出現し現じ已つて恭敬して佛を遶ること七匝、佛を遶り畢已て、諸の菩薩の爲に一一に各衆寶蓮花師子の座を化す。

爾の時に十方無量の佛刹一一の如來皆自在威神力を以ての故に各如意寶樹寶網及び諸の希有殊特の供具をして平等に普く娑婆世界に至らしむ。菩提樹の下に羅列して寶樹を周匝し圍遶して供具を分布し道場を莊嚴す。釋迦如來及び此の經を供養せんと欲するが爲の故に、此の莊嚴を作す。之を供養する時、此の會の無量無數の衆生は阿耨多羅三藐三菩提の心を發し、無量の菩薩は無生法忍を

【八】曼殊沙華(Mañjusaka) 柔軟花又は藍花とも譯す。
【九】蘇曼那(sumana) 白色の花。
【一〇】拘蘇摩華、花の種類。
【一一】阿提目多迦華、苣藤子と譯す。花は赤く葉は青色なり、果實を香とする。

一切如來平等法體に入れしむ。善男子、是の故に、汝等應に是の如く不可思議如來の事業を解すべし、若し諸の菩薩、此の不可思議如來の事業に安住せば諸法に於て心平等を得と雖も、隨順して一切諸法の諸の過失を離れたることを知つて諸の過失を離る。能く三世平等に隨順すと雖も三寶の種性を斷絕せず。身性は猶虛空の如く本より搖動なしと雖、而も十方一切佛刹に於て普く其の身を現じ、諸法の體不可說なりと知ると雖、而語言を以て隨類の音を出して一切法を說きたまふ。衆生の心行の同じからざるに隨つて諸の因緣を說くと雖、而も衆生及び諸法の相を離る。善男子、諸佛如來は、[五]菩薩心を淸淨ならしめんと欲せんが爲の故に世に出興したまふ。而も實に如來は變異あることなく、常に此の難思の事業に住し、精進を捨てず、菩薩記を授け說法して不斷なり。

爾の時に世尊、此の如來の難思の事業深法門を說き已つて十方無量[六]阿僧企耶の算數を出過せる諸佛刹土の地六つに震動し、大光明を放ち、衆の天花を雨す。此の大會の中の諸の大威德の無量の菩薩、欲色の諸天、南閻浮提の十六大國及び諸の小王龍神・夜叉・乾闥婆・阿修羅・迦樓羅・緊那羅・摩睺羅伽・人・非人等、及び比丘・比丘尼・優婆塞・優婆夷、此の法門を聞いて心淨く歡喜踊躍すること無量、諸の供具を以て佛を供養す。所謂種種の妙華、種種の妙香・塗香・抹香・衣服・瓔珞・幢幡・寶蓋を以て供養を爲す。或は種種微妙の音聲、歌詠して讚歎恭敬供養し、或は頂上の髻中の明珠額上の明珠・耳璫・頸珠を以用て供養し、或は摩尼妙寶瓔珞・眞珠瓔珞・月形瓔珞、諸の身分を嚴る種種の瓔珞・寶鎖・寶印・寶釧・寶鐶・寶鏡・寶帶・寶篋・寶冠、衆の妙衣服種種の嚴具、諸の妙鈴鐸を以て俱に道場に散じて恭敬供養し、或は種種の妙寶を以て供養す。所謂吠瑠璃寶・閻浮洲寶・阿濕摩揭磨寶・室利葉摩寶・因陀羅尼羅寶・紅頗胝迦寶・如火色寶・火燄光寶・無邊色寶なり。是の如く等の寶を佛に奉獻して以て供養を爲す。復、衆生あつて、金銀等の種種の寶を以て粖して而も供養を爲し、或は沈香・[七]多伽樓香・隨時の香・妙栴檀香・龍華鬚香・赤眞珠香を以て、是の如く等の種種の香を以て粖して以

【五】菩薩心を一本には菩提心とある。

【六】阿僧企耶。無數と譯す。

【七】多伽樓(Tagraka)香とは根香と譯す。

善男子、此の三十二如來甚深事業は、諸佛皆悉く具足圓滿したまふ。一切衆生を調伏し其をして悟入せしめんと欲せんために、略して少分を說く、而も實には如來所有の事業は無量無邊にして宣說すべきに非ず。善男子、如來は復、眞實の事業あり、分量あることなく不可思議なり。一切世間の能く測からざる所、一切文字の能く宣べざる所、一切心識の能く解了せざる所、一切智慧の趣入すること能はず、一切安立の刹土に周遍し、一切佛平等智に隨順して、一切世間の事業に超過し、種種に施爲して作す所なく、體性平等なること猶虛空の如し。法界現前して分別あることなし。何を以ての故に、善男子、諸佛世尊は法界無二の性を顯示するが故に、種種の諸法、種種の衆生、種種の刹土、種種心識、種種の解脫、種種の涅槃、是の如くの諸法、若しは體、若しは相畢竟空なるが故に。善男子、如來は是の如くの自ら法界一味無相にして因緣を離るゝ法を覺りたまふ。衆生をして平等悟入せしめんと欲すこと猶虛空の礙法たきが如くなるが故に、諸の衆生の爲に不退轉無上法輪を轉じたまふ。善男子、譬へば巧匠の善能く摩尼妙寶を磨瑩するが如し。善く寶性を知つて之を山石に採り、乞叉羅藥を以て水を用ゐて塗磨し、羖羊毛の緂なるを以て瑩拭し、瑩拭して已まず、又別藥を以て利醋味と名づく。水に和して之を漬し、輭木を以て揩拭す。功猶ほ未だ已らざるに復、摩訶薜舍遮藥を用て、微細の物を以て之を瑩拭し、尙ほ未だ光あらざれば便ち熾火に入つて焚燒すること七日、餘石礦の穢一切消除して、假實に非ずと知つて名づけて無價の摩訶瑠璃摩尼妙寶となす。善男子、諸佛如來も亦復是の如し。諸の衆生生死を愛樂して不淨垢穢を知つて、爲に無常苦空無我不淨の法を說いて厭離を生じ、聖法に入つて身心を調伏せしむ。是の如くなれども如來の精進は息はず。次に爲に空無相無願を說く。故に其をして佛眼を覺悟せしむ。如來の精進も亦復未だ已まず。次に復た爲に不退の法輪を轉ず。如來の精進も亦未だ休息せず。亦未だ休息せず。最後に爲に三輪清淨の如來の境界を說いて、諸の衆生をして因緣を明了し、法の本性を見、乃至善く

『佛は未來世に無垢の眼を以て、遍く所有の已・當成を見る。一切諸佛及び刹中に纖毫も知り盡さゞることあることなし。彼彼の事の中に錯亂なし。復、細に未來の因を觀見して、衆生の心に隨て法門を說く、此れ兩足尊の超勝の業なり。』

復次に、善男子、如來は現在を知見したまふに、無著無障礙にして轉じたまふ。此れ云何んが轉じたまふや、謂く十方現前所有の一切佛刹に於て、三種の因を以て微細に知見したまふ。謂く、其の相の若しは生、若しは滅を知りたまふ。何等の法を知るや。謂く一切諸佛・一切菩薩・一切聲聞・一切緣覺・一切細色・一切麁色、如來は悉く知りたまふ。一切地界微細に分析するに、各若干の微塵を以て成ずる所、一切水界は毛滴を以て其の數量を知り、一切火界の焰の起滅、悉く其の數を知り、一切風界の色相飄擧、若干の微塵十方虛空、一毛端を以て周遍く度量して其の邊際を知る。是の如く等の境は盡く其の相を知り、亦其の生を知り、亦其の滅を知る。亦三種を以て衆生界を知る。地獄界を知り地獄の因を生じ地獄の因を出づ。畜生界を知り、畜生の因を生じ地獄の因を捨て、焰魔界を知り焰魔を生ずる因、焰魔を滅する因、人界を知り人趣に生ずる因、人趣を失する因、諸天界を知り天に生ずる因、天を退沒するの因、是の如く一切如來は現前に皆悉く了知し、諸の衆生の心の流注を知り、煩惱ある心、煩惱なき心、若干の衆生は諸根調伏し、若干の衆生は諸根不調にして如來悉く知りたまへり。如來は是の如く現前の境に於て、無二智を以て不二の現行に轉じ、亦衆生の爲に是の如く宣說したまふ。是を如來第三十二正覺事業となす。

爾の時に、世尊、重ねて此の義を宣べんと欲して偈を說いて言く、

『如來の境界は邊際なし、不可思議不可稱なり。等等あることなきこと虛空の如し。一切衆生豈に能く測らんや。十方所有衆生類、現前の境界事業の殊なる、如來は一切悉く能く知りたまふ。最勝自然の智業なり。』

一切衆生、三乘の中に於て各調伏を得、種種の壽量、種種の法住を如來悉く知りたまへり。彼の諸の衆生の出息入息、種種の飮食、種種の資具、種種の相貌種種の根器、種種の行解、種種の心性、此に死し彼に生ずる流注、生滅相續如來悉く知りたまへり。是の如く一切は[四]現量所得にして比量知に非ず。云何んが現量なりや。謂く動念せずして實の如く而も知る、流注の心に非ざれども過去に入る。是の如く知るの時、智慧具足し、衆生の心に隨つて種種に說法す。是を如來第三十正覺事業と名づく。爾の時世尊、重ねて此の義を宣べんと欲し、偈を說いて言く、

『佛智は無量なれども所著なし。　過去剎の佛衆生を知る。　說法大會名相殊なり。　心行根欲多く差別せり。　各三乘に依つて調伏することを得、　究竟じて解脫の源に同歸す。　及び生滅流注の心を知る、　一切の見者眞實に覺る。』

復次に、善男子、如來の智慧は未來世を見ること無著無礙にして現在を見るが如し。此れ云何んが見たまふや。謂く所有未來の種種の衆生、種種の諸法、種種の剎土に、當に生ずべき、當に滅すべき、曾て住し、當に住すべき、是の如く一切如來は悉く知りたまふ。所有剎劫、當に燒くべき、當に盡すべき、當に住すべき、剎中當に成ずべき所有の諸地、樹木・叢林・百卉・藥草、麁色・細色・日月星宿、乃至微塵皆實の如く知りたまふ。一一剎中諸佛當に現ずべし。當に聲聞あるべく、當に緣覺と成るべし。當に菩薩と成るべし、當に資具あるべし、出息・入息・往來・進止・取捨・威儀・如來悉く知りたまへり。種種剎中に是く如く衆生、當に三乘の中に解脫を得べし。解脫する差別如來は悉く知りたまへり。又彼の剎の中の一切衆生、所有の諸蘊諸入諸界、心心所法の當に生じ當に滅すること如來悉く知りたまへり。一切に於て皆實の如く知ると雖、而も如來の心も亦流注せず未來に入り、衆生をして未來の性を悟らしめん爲に是の如くの法を說きたまふ、是を如來第三十一正覺事業となす。爾の時に世尊重ねて此の義を宣べんと欲し、偈を說いて言く、

【四】現量所得。現に思量することで想像類推に非ず（比量知）

入如來不思議甚深事業品第五の三

爾の時に、世尊、復、文殊師利童子菩薩摩訶薩に告げて言く、善男子、如來の意業は智を先導として智慧に隨つて轉じたまふ。善男子如來は心意識の過あることなし。何を以ての故に、如來の心意識は倶に知るべからず。但佛智より顯現するが故に。如來は智慧を而も主となすが故に。善男子、如來の智慧は一切衆生の心に隨順して轉ず。隨順して諸の衆生の意に趣入す。隨順して諸の衆生の識を解了す。諸法及び諸の三昧を出生す。是の故に如來の心意識は能く知る者なし。因地を超過し緣生を遠離し、[一]三有の道に非ず。諸慢諸魔事業、謟誑幻惑我我所の執、愚癡無明黑闇翳障を解脫して、[二]妙に道品を修して散亂なし、分別する所なくして平等に入ること猶虛空の如し、是の如く等の無量の事業あり、一一皆智を以て先導となす。是を如來第二十九正覺事業となす。爾の時に世尊重ねて此の義を宣べんと欲し、偈を說いて言く、

『兩足尊の心は量るべからず、　淨智の因緣は世中の勝なり。　佛智は法界に同じく　隨順して
普く衆生心に入る。　禪定解脫は悉く皆圓かなり。　心意分別して搖動することなし。　魔境
及び魔業を超過し　無垢無變にして虛空の如し。』

復次に善男子、如來の正覺は過去世を見て無著無礙にして智慧隨轉したまふ。智云何んが轉ずるや。所謂過去種種の佛刹、顯現成壞無量無數なれども、如來は悉く知りたまふ。彼の諸刹の中卉木叢林藤蘿藥草如來は悉く知りたまふ。彼の刹の所有衆生の類、[三]卵生・胎生・濕生・化生・有色無色・有想・無想・非有想・非無想、是の如く一切如來悉く知りたまふ。彼の諸刹の中有情種種音聲如來悉く知りたまふ。彼の刹の所有の如來出現して種種の法を說きたまふ。種種の衆會・比丘・比丘尼・優婆塞・優婆夷

【一】三有。欲界色界無色界の三界生死をいふ。
【二】妙には一本には默にとある。
【三】卵生等とは、四生といふ。卵より生ずるものを卵生といふ。母胎より生ずるのを胎生といひ、虫の如く濕氣より生ずるを濕生といふ。

分明の聲、可愛の聲、樂聞の聲、甚深の聲、厭ふなきの聲、耳をして安樂せしむるの聲、能く善根を生ずるの聲、字句圓滿の聲、妙詞句字の聲、利益和合の聲、法と和合するの聲、善く時節を知るの聲、一切時に合するの聲、時に非ることあるなきの聲、昔諸根を說き展轉相續するの聲、莊嚴布施の聲、能く淨戒を持つの聲、能く安忍を生ずるの聲、猛利精進の聲、堪任靜慮の聲、廣大智慧の聲、大慈和合の聲、無倦大悲の聲、光明法喜の聲、深廣大捨の聲、三乘に安住するの聲、三寶を斷ぜざるの聲、三聚を分別するの聲、三脫門を淨むるの聲、諸諦を修習するの聲、諸智を修習するの聲、智者相應の聲、聖者讃歎の聲、虛空に隨順するの聲、分量あることなきの聲、諸相具足の聲、善男子、如來の語業は、是の如くの無量の音聲を具足するが故に如來の一切の語業は智を先導となし、智慧に隨つて轉ずと說きたまふ。是を如來第二十八正覺事業となす。爾の時に世尊重ねて此の義を宣べんと欲し、偈を說いて言く、

『佛語は無等淨にして瑕なく、　一切の功德皆圓滿す。　一音普く無邊の刹に遍じ、　各各隨類の音を聞くことを得、　或は聲聞の聲を聞くことを得るあり、　或は緣覺の法を聞くことを得るあり、　或は如來大威德を聞き、　便ち無上菩提心を發せり。　文字句義悉皆圓かなり、　次第に安布して俱に無礙なり、　而も心に異なる分別あることなし、　能く難思の妙法門を說く、　是の如く人中の最勝の聲出す所の音聲は谷響の如し、　無功無心にして普く應ず、　無聲の聲は物心を悅ばしむ。』

することを得。故に佛の威儀は少分も、一切衆生を調伏すること能はざることあることなし。是の故に說いて如來の身業は智を先導と爲し、智慧に隨つて轉ずと言ふ。此は是れ如來第二十七正覺事業なり。爾の時に世尊、重ねて此の義を宣べんと欲し、偈を說いて言く、

『若し最勝身の威儀を見、或は出或は〔三三〕入或は相好、或は烏瑟尼沙相を見、皆衆生調伏の
中に置く、最勝尊或は光明を放ちたまふ、無量の衆生悉く安樂なり。光の觸るゝ所皆調
伏す。兩足尊の業勝は量り難し。

復次に、善男子、如來所有の一切語業は智を先導とし、智に隨順して行ず。云何んが名づけて隨順智行と爲すや、如來の說法は障礙あることなし。能く具足して文義を說きて缺けたることなし。所發の言聲は衆生の心に入つて、智慧を發生す。謂く高からざる聲下からざる聲、正直の聲怯怖せざるの聲、謇澁ならざるの聲、麁獷ならざるの聲、稠林なきの聲、極柔軟の聲、堪任あるの聲、嘶破せざるの聲、恒審定の聲、太だ疾からざるの聲、太だ遲からざるの聲、差互なきの聲、善く分析するの聲、妙言詞深妙深遠の聲、妙廣大の聲、涌泉の聲、不斷の聲、潤熟の聲、深美の聲、和合の聲、莊嚴の聲、利益の聲、清徹の聲、塵なきの聲、煩惱なきの聲、垢染なきの聲、愚癡なきの聲、極熾盛の聲、所著なきの聲、善く解脫するの聲、極清淨の聲、委曲なきの聲、下劣なきの聲、堅硬なきの聲、緩緩なきの聲、能く安樂を生ずるの聲、身を清涼ならしむるの聲、心を歡喜せしむる聲、熈怡先導するの聲、先意問訊の聲能く貪欲を淨むるの聲、瞋恚を起さゞるの聲、能く愚癡を滅するの聲、能く衆魔を呑するの聲、能く惡業を摧くの聲、能く外論を燒くの聲、隨順覺悟するの聲、天鼓を擊つが如きの聲、智者喜を聞くの聲、釋提桓因の聲、大梵天王の聲、大海波潮の聲、雲雷音震の聲、大地震動の聲、〔三四〕迦陵頻伽の聲、〔三五〕拘枳羅鳥の聲、命令之鳥の聲、鹿王の聲、牛王の聲、雁王の聲、鶴唳の聲、孔雀の聲、箜篌の聲、篳篥の聲、琵琶の聲、箏の聲笛の聲、螯の聲、鼓の聲、解し易き聲、

【三三】入を一本には處となる。

【三四】迦陵頻伽。殊妙の聲を出す鳥。

【三五】鳥拘枳羅鳥、好聲鳥と譯す。

す。爾の時に世尊重ねて此の義を宣べんと欲して、偈を說いて言く、

『一切教の中智現前して、　無礙自在にして彼岸に到り、　自然に法を說いて含識を利す。　根に隨つて一句より無邊に入る、　衆生の行を解するに稱量し難し、　爲に八萬四千の法を說く、
智慧無邊にして滅ずべからず、　最勝十力の業は難思なり。』

復次に、善男子、如來世尊は解脫滅することなし。云何んが如來の解脫滅することなきや、謂く聲聞の解脫は、聲に隨順して得、緣覺の解脫は、因緣を悟つて生ず。如來の解脫は、一切の執著を遠離して起る所なり。前際を緣ぜず、後際に入らず、現在に著せず、眼に於て色に於て二相に著せず、耳聲・鼻香・舌味・身觸・意法亦爾なり。二相に著せざるが故に解脫と名づく。復微細の若しは執、若しは著、若しは意分別なり。此の三を遠離すれば卽ち解脫を得。心の自性智慧の光明を見る。故に此の解脫は則ち是れ智慧なり。是の故に說いて一刹那の心と智と相應して、卽ち阿耨多羅三藐三菩提を得と言ふ。如來は是の如く等正覺し已つて、亦衆生の爲に是の如くの法を說いて解脫を得しむ。此は是れ如來第二十六正覺事業なり。爾の時に世尊重ねて此の義を宣べんと欲して偈を說いて言く、

『[三]聲聞は聲に隨順して解脫し、　辟支佛は因緣を悟つて生ず、　善逝の解脫は虛空の如し、　無垢無著にして最尊勝なり、　過去の心の流注を了知して　本性解脫して羈なきことを得。
無繫縛に於て實の如く知る。　故に解脫不可滅と說く。』

復次に、善男子、如來の身業は智を先導とし、智慧に隨つて行ず。所謂如來の身業は具足圓滿し、或は衆生あつて、纔に佛身を見て調伏する者、或は語言を聞いて調伏する者、或は默然を見て調伏する者、或は飮食を受けて調伏する者、是の如く或は四威儀、或は相好を覩或は頂を見ず、或は復顧視し或は光明を放ち、足を擧げ足を下して城邑聚落に出入するのとき、衆生見る者、皆調伏

【三】聲聞。佛の出世に遇ひ佛の說法を聞て悟を得る佛弟子にして教團に關係あるもの、緣覺は無佛世に出で教團に關係なく唯だ十二因緣の理を覺つて悟を開くもの。

に謂く三昧平等は卽ち是れ諸法の體性平等なり。此の性平等は卽ち三昧平等なり。三昧平等は卽ち是れ如來なり。是の義を以ての故に、佛の三昧は諸法平等の性を得と說く。云何なるか諸法平等の性なりや。謂く染欲際平等は卽ち離欲際平等なり。瞋恚際平等は卽ち離瞋際平等なり。愚癡平際等は卽ち離癡際平等なり。有爲際平等は卽ち無爲際平等なり。生死際平等は卽ち涅槃際平等なり。此の平等に入る。是の故に說いて如來所有三摩呬多三昧は減ずることなしと說く。何を以て減ずることなきや、此の平等とともに增減なきが故に、又佛の三昧は眼と合せず、耳と合せず、鼻・舌・身・意と和合せず、如來は有分別の根なきが故に、如來の三昧も又亦地界と和合せず、亦水火風界と合せず、亦三界三世と合せず、此の不和合の體性平等にして不增不減なり。是の故に、說いて如來の三昧は不增不減と言ふ。亦衆生の爲に斯の如き法を說きて皆此の三昧を得て減ずることなからしむ。此は是れ如來第二十四正覺事業なり。爾の時に世尊重ねて此の義を宣べんと欲し偈を說いて言く、

『如來の三昧は增減なく、　常に等引に在て衆生を利す。　體性平等にして高低なく、　諸法と
而も和合せず、　地水火風界を觀察す。　欲色無色界も亦然なり、　恒に無減無合門を說きたまふ、
是の故に如來は定めて減ずることなし。』

復次に、善男子、如來の智慧は、無減なり。云何んが名づけて智慧無減となすや。所謂一切諸法自體の智を證し、普く一切差別の衆生の爲に、一切法智を開示演說し、善巧無礙に微細甚深にして〔三〕無盡智なり。一句を分析して無數の句に入り百千億劫に受持演說して窮盡なき智、別別に諮問し各各に斷疑して一切處に於て皆無著の智なり。能く三乘差別次第相續の智を說く、能く衆生八萬四千心行の差別を知り亦八萬四千法蘊を以て機に隨て智を說く。衆生を調伏して時を失せざる智なり。是の義を以ての故に、如來智慧無邊無際無盡を說くに無量門あり。此は是れ如來智慧無減なり。亦衆生の爲に是の如く宣說して、如來無盡の智慧を得せしむ。是を如來第二十五正覺事業とな

【三】無盡智を一本には究竟智となる。

心倦むことなし。佛も亦一劫或は一劫を過ぎても、座を起たずして飲まず食はず法を說いて斷ずることなし。若し復恒沙刹を過ぎて外に、一衆生のあつて調伏するに堪忍せば、卽ち往いて敎化して正行を修せしむ。而も佛の身心は懈倦[19]あることなし。安樂寂靜にして自行精進して聖解脫を得、亦衆生の爲に讃歎し精進す。是を如來第二十二正覺事業となす。爾の時に世尊重ねて此の義を宣べんと欲して、偈を說いて言く、

『精進出生するは人の師子なり。　是の故に常に精進を讃して、　念念勇悍にして減ずる時なし、　聞法に堪へたるあれば恒に宣說す。　善逝は精進し休息なし、　身口意等疲勞せず、
自然に堅猛にして諸非を離れ、　亦衆生を[20]　勸めて精進を起さしむ。』

復次に、善男子、如來正覺は一切時に於て一切處に遍じて正念減ずることなし。云何んが時處に正念減ずることなきや。善男子、如來は、始め無間道より後、阿耨多羅三藐三菩提を得るまで、卽ち三世の一切衆生の心行の相續の流注を觀じて、是の如く知り已つて念念に忘れず、求めず、退せざるが故に常に減なし。如來は普く能く三聚を觀察して正念減ずることなし。所謂深く衆生の諸根心行に入つて動念尋伺なしと雖、分別して爲に說法して錯亂することなし。是の故に、如來の念は減少することなし。亦衆生の爲に斯の如くの法を說き、念をして減あることなからしむ。是を如來第二十三正覺事業となす。爾の時に世尊重ねて此の義を宣べんと欲し、偈を說いて言く、

『佛の念は思に非れば常に減ぜず、　衆生界を知り盡して餘なし。　自從り大菩提を覺悟せん。
三世遍く知つて再び念ずることなし。　善く衆生の心行の別諸根の樂欲各不同なることを知りて、　無功用業に住して常恒に、　亦衆生の爲に勝法を說きたまふ。』

復次に、善男子、如來の所有の三昧は減ずることなし。云何んが如來の三昧減ずることなきや。如來の三昧は一切法に於て平等無二にして高もなく下もなし。一切法眞實義諦の如し、何を以ての故

【一九】　倦は一本には怠となる。
【二〇】　勸めは一本には觀となる。

さず、心意識の動念、境界に非ず。假の安立に非ず。有分別に非ず。是れ積聚に非ず、差別の見に非ず。是の如く如來は圓滿の大捨なり。亦衆生の爲に斯の如き法を說き、是の如く圓滿大捨を得せしめたまふ。是を如來第二十正覺事業となす。爾の時に、世尊重ねて此の義を宣べんと欲し、偈を說いて言く、

『如來は擇捨せざることあることなし、　最勝道の善の因緣を修して、　身戒心慧次第に修す。
　人中の最勝は愛恚なし。　假分別無分別に非ず。　積集に非ず、　捨と共に相應す。　眞實不
　變大捨の中に廣く衆生の爲に是の如く說きたまふ。』

復次に善男子、諸佛如來の樂欲は滅ずることなし。謂く善法の欲なり。云何んが名づけて善法の欲となす。所謂如來は大慈の欲滅ずることなし。大悲欲滅ずることなし。說法欲滅ずることなし。調伏衆生欲滅ずることなし。成熟衆生欲滅ずることなし、樂處寂靜欲滅ずることなし。諸の衆生を勸めて菩提心を發さしむる欲滅ずることなし。諸の衆生をして三寶の種を紹がしむる欲滅ずることなし。如來は心に隨ふ惡欲あることなし。凡そ善欲あり智を先導と爲す。自ら善欲を滿じて、亦衆生の爲に是の如くの法を說き、如來最勝圓滿一切智欲を得せしめたまふ。此は是れ如來第二十一の正覺事業なり。爾の時に、世尊重ねて此の義を宣べんと欲し、偈を說いて言く、

『佛は善法の欲已に圓極して、　慈悲常に轉じて衆生を度し、　成熟して勸めて菩提心を發し、
　三寶の種を紹いで斷絕せず。　貪欲瞋癡怖に順せず、　凡そ所欲あれば智を先となす。　最
　勝の智者は是の如く知る。　衆生を哀愍するに懈怠多く、　善法の欲なく惡欲多し、　善欲を
　して正しく勤修せしむ、　無等の智業衆生を利す。　有情此に因つて皆調伏す。』

復次に、善男子、如來所有の精進は滅ずることなし。如來は何なる精進に於てか滅ずることなきや。所謂衆生を調伏して審諦に觀察し精進して滅ずることなし。若し衆生あつて、專心に法を聽いて而も爲に演說して、劬勞を憚らずして精進滅ずることなし。若し衆生あつて一劫、法を聽きて身

處して搖動なし。　十方世界衆生類は能く佛の三昧心を測ることなし。　亦衆生の爲に此の門を說く。　是れ佛難思の事業なり。』

復次に、善男子、一切如來は種種の想なし。種種諸の異相を離るゝを以ての故に、心高下なし。云何んが如來種種の想なきや、所謂諸の佛刹に於て種種の想なし。佛刹の體性は虛空に同じく議ることなきが故に。諸の衆生に於て種種の想なし。衆生の本性は無我に同じきが故に諸佛の中に於て種種の想なし。平等智に同じて眞法界を證し一相無雜にして破壞なきが故に。佛法の中に於て種種の想なし。一切諸法の性は無染の故に。持戒を見る[一七]者は愛念を生ぜず。禁戒を毀るを見て瞋恚を生ぜず。自他利を得て心增高ならず、自他利を失して心減少せず。正見する者に於ても亦尊重せず。邪見する者に於ても亦輕賤せず。何を以ての故に、如來は平等性に住するが故に。如來は自ら諸法の平等に住して種種の想なし。亦衆生の爲に是の如く說いて諸想を離れしむ。此は是れ如來第十九正覺事業なり。爾の時に世尊重ねて此の義を宣べんと欲し、偈を說いて言く、

『善逝は等しく諸の異相なし、　謂く衆生を利する佛法の中には、　是の如の異想永く無し、
大名稱の住する所なり。　持戒破戒及び得失、　易調難調皆等心なり。　[一八]兩足尊は諸の衆生の爲に、　法を說いて諸の邪執を脫せしむ。』

復次に、善男子、如來正覺は擇捨せざるなし。何を以ての故に、如來は諸の善道を修習して捨す。非をば修習せずして捨する所あり。所謂身戒心慧を修習して是の如く捨す。如來の捨とは智と相應し、是れ無知に非ず。是れ出世の道、聖解脫の捨にして是れ世間に非ず。聖解脫に非ずして而も捨する所あり。是の如く捨は大悲を捨てず、能く梵行を轉じて衆生を利益すること自然に成就す。是れ待對因緣和合して成就を得るに非ず。是れ如來の捨は高下あることなし。平等に安住して動搖せざることを得。體に二あることなく、二相を遠離す。有量無量悉皆超越す。時を待つて捨て時を過

【一七】者を一本には人となす。

【一八】兩足尊とは、佛の尊稱なり。

に是の如くの法を說きて、是の如き異相の聲を離れしめたまふ。是を如來第十六正覺事業となす。
爾の時に世尊重ねて此の義を宣べんと欲し、偈を說いて言く、

『恭敬讃歎すれども心高からず、　輕慢毀呰すれども心下らず、　愛恚非法を遠離するが故に、
先世の妙行譏嫌なし。　佛は阿蘭若に昔修持して　我所取結皆あることなし、　是の如くの
法に住して是の如く說きたまふ。　此れ最勝の業唯だ如來のみなり。』

復次に、善男子、如來は忘失の念なきが故に、少法として明記せざることなし。何れの法に於て忘ることなきや。謂く諸の靜慮解脫三昧三摩鉢底是の如くの法の中に皆忘失なし。又衆生の心行起動顧視往來を知つて宜に隨つて法を說きて亦忘失なし。(一六)法義詞辯無所畏の中に亦忘失なし。如來は自ら無著の智慧に住して、三世の法の中に念に忘失なし。亦衆生の爲に是の如くの法を說きて、念に忘失あることなきことを得せしむ。是を如來第十七正覺事業となす。爾の時に世尊重ねて此の義を宣べんと欲し、偈を說いて言く、

『最勝法王は忘失なし。　禪定法智等しく遺るゝなし。　衆生の心行を悉く皆知りたまふ。　宜
に隨つて爲に無所畏の、　三世の諸乘一切の法を說きたまふ。　無著の智慧並に忘るゝことな
し。　忘失なきに隨つて說くことも亦然なり。　最勝丈夫の事業なり。』

復次に、善男子、一切如來は不定の心なし。謂く行住坐臥飯食語默、是の如くの時の中に、常に甚深の三摩呬多に住して諸の三昧に入り、彼岸に到り、諸の禪定に於て障礙あることなし、一切世間の人天の類は一として能く如來所住の三摩呬多を觀ずるなし。唯世尊の威德の被らるゝをば除く如來は自ら住して不定の心なし。亦衆生の爲に是の如くの法を說いて散亂を捨てしむ。此は是れ如來第十八正覺事業なり。爾の時に、世尊重ねて此の義を宣べんと欲し、偈を說いて言く、

『如來は常に三摩地に住して、　行住坐臥一切の時に、　飯食語默に衆生を利す。　恒に三昧に

【一六】法義詞辯のことは前に說明せり。

す。是の如く一切に寂諦安禪にして足地を履まずして地に於て〔一三〕千輻輪相を出現せしめて、分明なり。復蓮花あり、香潔殊妙にして其の足を承り、凡そ諸の蠢動如來の跡に觸るれば七日七夜安隱泰然にして、後、人天に生れ勝妙樂を受く。如來の袈裟は身を離るゝこと四寸にして墮落せず。旋嵐猛風も飄動すること能はず、身に常に光明あつて凡そ照觸する所は、乃至下、阿鼻地獄を濟ひ苦を離れて清涼なり。是の如く等に由るが故に如來の身業は失なしと說く。

復次に善男子、如來の意業は誤失あることなし。一切凡夫若しは愚若しは智、過失を求め得ば是の處あることなし、何を以ての故に如來は常に三摩呬多に住し、諸佛の行を行じて常に散亂なし。無著智を以て一切法を知る。是の故に、如來の意業は失なし。善男子如來は自ら誤失なき法に住し、亦衆生の爲に是の如き法を說き、如來をして誤失なき法を得せしむ。是を如來第十五正覺事業となす。爾の時に世尊重ねて此の義を宣べんと欲して偈を說いて言く、

『〔一四〕世尊は内に　煩惱の非なし、　身口意業淨うして瑕なし。　世尊は内に煩惱の非なし、
普く能く諸の含識を利益す。　衆生の諸の過失を斷ぜんと欲して、　爲に最勝の寂靜門を說
き、誤失なき世尊に同ぜしめたまふ。　此れ第十五如來の業なり。』

復次に、善男子、如來は異相苦樂等の聲あることなし。是の故に、一切の人天外道若しは魔若しは梵能く佛の聲に過失ありと說くことなし。何等の聲なきや、所謂如來は憂喜の聲なし。何を以ての故に、愛恚を離れたるが故に、一切衆生は種種供養恭敬讃歎すれども、歡喜心を生ぜず。亦高からず、一切衆生敬養をも修せず、毀謗罵辱すれども瞋恚の心を生ぜず、亦下らず。如來は悔恨の聲なし。何を以ての故に、所作の事業少しも艱難なし、已に究竟し玉ふが故に、如來は諍論の聲なし。何を以ての故に、往昔に常に樂て〔一五〕阿蘭若に住し、我我所を離れ、取ることなく求むることなし。已に煩惱の諸の結縛を脫るゝが故に、善男子、如來は、自ら異相なき聲に住して、亦衆生の爲

【一三】千輻輪相。佛の三十二相の一で足の下に千輻輪の印紋あることをいふ。

【一四】世尊は内に煩惱の非なしを一本には「三界の獨尊は誤失なし」とある。

【一五】阿蘭若。閑寂、空閑處等と譯す。人の雜鬧を離れたる處。

心安住することを得。復五道あり、是れ解脱の道なり。云何んが五となす。所謂信根・進根・念根・定根・慧根なり。復六道あり、是れ解脱道なり。云何んが六となす。所謂[七]念佛・念法・念僧・念戒・念捨・念天なり。復[八]七道あり、是れ解脱道なり。云何んが七となす。所謂念覺分・擇法覺分・精進覺分・喜覺分・輕安覺分・定覺分・捨覺分なり。復[九]八道あり是れ解脱道なり、云何んが八となす。所謂正見・正思惟・正語・正業・正命・正精進・正念・正定なり。復九[一〇]道あり。是れ解脱道なり。謂く初禪・二禪・三禪・四禪・空處・識處・無所有處・非想非非想處・滅受想定なり。復[一一]十道あり。是れ解脱道なり。謂く不殺生・不偸盗・不邪行・不妄語・不兩舌・不惡口・不綺語・不貪・不瞋・不邪見・是を名づけて十となす。是の如く所有の一切諸善菩提分法、或は戒蘊相應・定蘊相應・慧蘊相應・解脱蘊相應・解脱知見蘊相應、或は聖諦相應・皆解脱道なり。復解脱道あり、所謂眞正中道なり。少しく得べきなく不增不滅なり。不取・不捨・不攝・不散にして、眞實道を得て二念生ぜず。一切法本無二を以ての故に、如來は此の解脱道の中に於て眞實に知見し、亦衆生の爲に是の如く宣說したまふ。修習するあれば、能く苦源を盡くす。此は是れ如來第十四正覺事業なり。爾の時に、世尊重ねて此の義を宣べんと欲して、偈を說いて言く、

『清淨道を修習して　無量の樂を增益し、　能く甘露の徑に趣く。　佛智は自然に、　所有の衆善の因を知りたまふ。　是れ佛の菩提分なり。　修する者は解脱を得、　能く說いて非と爲すなし、　正念すれば　塵勞を滅し、　能く生死の流を脱れ、　定に依つて悲心を起せば、　諸有の輪轉を脱る。　此は是れ大仙の業なり。　世間に等倫するなし。』

復次に、善男子、如來の身には誤失なし。一切の凡夫、若は勝智の者、如來の少分の過失を求め得といはば是の處あることなし。何を以ての故に、如來は身業は儀範端嚴にして、行くに顧眄することなく、[一二]僧伽梨を被て衣を著し鉢を持ち、行住坐臥進止迴旋し、村坊に入出し、城邑に往來

【七】念佛等は。前に說明せり。
【八】七道。七覺支にて前に說けり。
【九】八道。八正道なり前に說く。
【一〇】九道。色界四禪定と無色界の四處と滅受想定なり。
【一一】十道。十善道なり。
【一二】僧伽梨。比丘の著用するものにして、三衣の中の大衣をいふ。主として王宮や村落に乞食するときに著用せるものなり。

て障礙となす。復、十法あり、能く障礙を爲す、云何んが十となす。所謂、殺生偸盜・邪行・妄語・兩舌・惡口・綺語・貪・瞋・邪見是を名づけて十となす。是の如く乃至不善の念を起し因緣を樂著し、一切煩惱結使に安住し、常に顚倒障礙と相應し、愛見の煩惱堅執して捨てず、凡そ所作あり、身口意業なり。皆名利諸欲と相應す。是の如く一切を皆障礙と名づく。如來悉く知りたまへり。亦衆生の爲に、實の如く無障礙の法を說いて、其の障礙をして永く斷じて生ぜざらしめたまふ。是を如來第十三正覺事業と爲す。爾の時に世尊、重ねて此の義を宣べんと欲し、偈を說いて言く、

『佛は障礙の法は　解脫を證すること能はずと覺る。　能く心清淨ならず、　無慚及び無愧
身語意業の中に、　無表戒[5]あることなし。　貪欲瞋癡怖、　惡行を起すこと無邊なり。　殺盜及び邪婬、　妄言飮諸酒、　六不敬七慢、　八邪道常に行じ　九惱十惡の因、　佛皆障礙なりと說きたまふ。　不善の念を修習すれば、　解脫の門を得ず。　佛は顚倒の源を知りて、　中堅にして執著なし、　慈悲して爲に說法し、　障礙の因を離れしめたまふ。』

復次に善男子、如來は實の如く、能く苦道を盡すと宣說したまへり。一切衆生は此に依つて修習して皆解脫を得。此の義の中に於て一切世間の若は天若は人、能く如理の說を作して、如來の所說は解脫道に非ずと言ふことあるなし。云何んが名づけて眞の解脫道と爲す。所謂一道あり、是れ解脫道なり。諸の衆生に於て淸淨の心を起す。復二道あり、是れ解脫道なり。謂く奢摩他・毗鉢舍那、復三道あり、是れ解脫道なり。謂く空[6]・無相・無願法門なり。復四道あり、是れ解脫道なり。謂く四念處なり。云何んが四となす。謂く身・受・心・法なり。云何んが身念處、謂く內身を觀じ循身に心を觀じて安住を得。外身を觀じて循身に心を觀じて安住を得、內外身を觀じ、循身に觀じて心安住を得。是を身念處と名づく。云何んが受念處となす。謂く內受・外受・內外受を觀じ、受を循じて觀じて心安住することを得。云何んが法念處となす。謂く內法・外法・內外法を觀じ、法を循じて觀じて

【五】無表戒。身口意の三業に於て受戒するときは、此際身內に防非止惡の一の力を發得する之を無表戒といふ。

【六】空、無相、無願を三解脫門又は三三昧といふ。空三昧とは諸法は因緣生にして我もなく我の所有物も一もなくして空なりと知つて我と我所との二を空ずるを空三昧といふ。二無相三昧とは涅槃の果たる滅諦の理は一切の差別相を離るゝものであるから無相三昧といふ。無願三昧とは苦、無常等の理は厭惡して願求すべきものにあらずと緣ずることである。

ねて此の義を宣べんと欲して而も偈を說いて言く、

『佛は欲の習氣なし。　故に欲の煩惱なし。　瞋恚の習氣盡きて　煩惱あれども生ぜず。
善逝は無明を離れて、　癡根本を滅するに由つて、　諸惑の習氣盡きて　見惑則ち生ぜず。
佛は俗諦門に依る、　故に煩惱盡くと說く。　眞の中には不可得なり。　滅もなく亦增もなし。　盡智緣に對せず、　聖知は本自り盡なり。　三相なきに由るが故に。　此の盡卽ち無爲なり。　法界は常に遷らず、　此を知れば彼岸に到る。　知り已つて是の如く說く。　此の業は佛能く窮めたまへり。』

復次に、善男子、如來は平等に諸の障礙無障礙の法に於て實の如く了知したまふ。一切世間の若しは天若しは人、能く如理の說を作して〔三〕如說所說の障礙の法は障礙に非ずと言ふものあることなし。此の中云何んが障礙の法と爲すや。謂く一法あり能く障礙を爲す。卽ち〔四〕濁亂の心なり。復二法あつて能く障礙を爲す。謂く無慚無愧、復三法あつて能く障礙を爲す。謂く身惡行・口惡行・意惡行なり。復四法あつて能く障礙を爲す。謂く貪を以ての故に、非法を行ず、或は瞋を以ての故に非法を行ず。癡を以ての故に非法を行ず。有は癡を以ての故に非法を行ず。復た五法あり、能く障礙を爲す。謂く殺生・偸盜・邪行・妄語及び飮諸酒なり。復六法あり能く障礙を爲す。謂く佛を尊敬せず、法を尊敬せず、僧を尊敬せず戒を尊敬せず、定を尊敬せず能く諸善知識を尊敬せず。復七法あり能く障礙を爲す。謂く慢と過慢と及び慢過慢と我慢と增上慢と卑慢と邪慢となり。復た八法あり。能く障礙を爲す。謂く邪見・邪思惟・邪語・邪業・邪命・邪精進・邪念・邪定なり。

復九法あり、能く障礙を爲す。謂く已に我を惱害し、現に我を惱害し當に我を惱害し、過去に我が善友を憎み、現在に我が善友を憎み、未來に我が善友を憎む。過去に我が怨家を愛し、現在に我が怨家を愛し、未來に我が怨家を愛し、此の九種に於て憶念對境して不善の心を增するを、名づけ

【三】如說を一本には如來となる。
【四】濁亂、心の濁り亂ること。

『自然に覺悟する者は　諸法の平等を覺る。　是の故に如來と號す。　正覺平等は一切凡夫の法と、　佛法平等なりと見る。　有學及び無學緣覺の法も亦然なり。　世及び出世の法、此の二亦平等なり。　善と及び不善の法と、　涅槃とも平等なり、　空法無相の法　無願無生の法　無行等の諸法も　平等にして顯示す。　佛は大悲廣說して　諸の衆生を覺悟せしめたまふ。　法を聞て解脱を得。　是れ佛の最勝業なり。』

復次に善男子、如來は自ら諸漏煩惱已に究竟して盡すと知りたまふ。一切世間若しは天若しは人、是の如くの說を作して如來は諸漏煩惱未だ盡きずといふことあるなし。云何んが如來は諸漏煩惱已に究竟して盡したまふ。所謂、欲煩惱に於て、心一切の欲行習氣煩惱を解脱することを得、滅諦を證するが故に、煩惱あるに於て心、一切の瞋行習氣煩惱を解脱することを得、滅諦を證するが故に、無明煩惱に於て心諸の愚癡の行習氣煩惱を解脱することを得、滅諦を證するが故に、見煩惱に於て、心諸煩惱の行及與び習氣を解脱することを得、滅諦を證するが故に。是の義を以ての故に俗諦に隨順して、如來は諸漏煩惱究竟して永く盡すと說きたまふ。聖者の慧眼は眞諦に稱ふが故に、觀察し現證するに少法として得べきことあることなし。所謂若しは能滅の智若しは所滅の惑、若しは思若しは修乃至現證するに俱に不可得なり。何を以ての故に、彼れ自性盡にして不盡の時なし。因緣待對に從つて盡と說かず。是の如くの盡は是れ眞實の盡なり。此の眞實の盡は餘法のために因緣と作らず。故に此の盡は卽ち是れ無爲なり。卽ち此の法の中には生もなく滅もなく亦住あることなし。此の無生滅は若しは佛の出世にも、若しは不出世にも法界常住なり。法界の常なるが如く、此の智の成就も亦復是の如し。此の如き成就は卽ち成就に非ず。若し能く是の如く教ゆる所の如く住すれば煩惱なきことを得煩惱を斷じて煩惱の無を得るに非ず。如來大悲は俗諦に隨順して衆生の爲に煩惱を滅する法を說きたまふ。是を如來第十二正覺事業と爲したまふ。爾の時に、世尊、重

入如來不思議甚深事業品第五之二

復次に、善男子、如來は[一]四無所畏に安住して、能く種種の諸佛の事業を作したまふ、謂く、自身は卽ち是れ無上正等正覺なりと知りたまふ。一切世間若しは天若しは人、能く如理の說を作して如來世尊は正覺に非ずといふものあることなし。何の因緣を以て諸の如來は是れ正覺なりと說きたまふ。謂く諸の如來は一切の法に於て平等に正覺して高下あることなし。何等か一切法なりや、所謂凡夫の法、[二]有學の法、無學の法、緣覺の法、菩薩の法、諸佛の法なり。是の如くの諸法は皆等しく正覺す。復世間の法、出世間の法、善法・不善法・有漏法・無漏法・有爲法・無爲法あり。是の如くの諸法を如來正覺は平等に體するが故に。云何んが平等なりや。謂く空平等なり。一切法の本性空を見るが故に無相平等なり。相の本性なるが故に、無願平等なり。三界の性なるが故に。無生平等なり。生の本性なるが故に、無行平等なり。行の本性なるが故に無出平等なり。出の本性なるが故に、無阿賴耶平等なり。心の本性なるが故に、是の如く眞諦は平等なり。三世の性なるが故に、智脫平等なり。無明有愛の本體性なるが故に、涅槃平等なり。生死輪轉の本體性なるが故に、是の如く一切の諸の平等の法を如來は正覺す。是の因緣を以ての故に、如來は眞に是れ無上正等覺者なりと說きたまふ。是の如くの正等覺を成ずるが故に、大悲心を以て妙言詞を出し諸の衆生の爲に種種の法を說き解脫道を示し、苦際を出でしむ。餘の諸の衆生は實に大師に非ずして自ら我は是れ正等覺者なりと言ふ。如來は此の諸の衆生の爲の故に、自ら德號を唱へて是の如くの言を作して、唯だ我れ如來のみ是れ等正覺なりと、法器に非るをして皆法器と成さしめたまふ。是れを如來第十一正覺無畏甚深事業と爲す。爾の時に世尊重ねて此の義を宣んと欲して而も偈を說いて言く、

【一】四無所畏。四無畏のことで、無畏とは蘇息安穩の義である。四無畏は一は一切智無所畏とは佛は大衆の中に於て我は一切智者なりと宣しても何等怖れる心なきこと、二は漏盡無所畏とは佛は大衆に對して我は一切の煩惱を斷盡すと宣しても何等恐縮することなきこと、三は說障道無所畏とは佛は大衆の中に於て佛道を障害する法を宣べても何等恐縮することなきこと、四は說盡苦道無所畏とは佛は大衆に對し苦惱を滅盡する道を說いても何等恐縮することなきこと是等の四は佛の有する無畏無恐怖の心なり。

【二】有學の法。聲聞の修行階程たる四果の中の預流一來不還の三果を有學といひ、最後の阿羅漢を無學といふ、前三果は未だ學修すべきものであるが、第四果は學び盡したので所謂學ぶべきものがないから無學といふのである。今有學の法無學の法といひしは總じて聲聞の法をいひしものなり。

を說きたまふ。　汝等本性空を思惟して　常に最勝妙寂靜を得べし。　衆生の數取趣を得ざれ、　作者及與び　[一〇四]摩納婆、　邪見に著する諸の衆生の爲に、　大覺悲を興して解脫を說きたまふ。　一切時に於て厭倦なく、　未だ曾て一念も衆生を捨てたまはず。　常に三昧に住して動搖なし、　衆生を利せんが爲に妙法を演べたまふ。　是の如く等の相は佛の事業なり。　十力は力地の中に住し、　無等等の最勝[一〇五]輪を轉じて、　能く寃敵を摧いて傾動し難し。

【一〇四】摩納婆(Mānavaka)勝我と譯す。外道の一派、吾人の身體の內に實我の本體ありと說く。

【一〇五】輪。輪寶と稱し、戰具なり之を轉じて敵を摧破する如く、佛は法の輪を轉じて衆生の迷を破す、故に佛の敎を輪に喩ふるなり。

めて現前し、具足し圓滿す。獅子吼を作して是の如の言を發したまふ。我生已に盡き、梵行已に立し所作已に辨じて後有を受けたまはず。如來は此を知つて煩惱を究盡し、極めて欲染なく、清淨光明あつて一切の習氣永く滅せずといふことなし。〔一〇一〕聲聞は惑を斷ずるに盡あり、量あり習氣を除かず。緣覺は盡くす。惑も亦分量あり。大悲を遠離し、無礙辯を闕す。唯如來のみ有つて、一刹那の心平等に相應し、一切の煩惱諸相煩惱根本煩惱習氣煩惱永く盡きて餘なし。大悲善攝して辯才無畏にして皆悉く圓滿し、一切世間に能く過ぐる者なし。何を以ての故に、諸佛如來は永く一切の諸業習氣・煩惱習氣・威儀誤失諸の習氣を滅するが故に、譬へば虛空の本性清淨にして一切の煙塵依住する所なきが如く、如來も亦爾なり。煩惱究盡の智を得て、諸の業煩惱一切の習氣の依住する所なし。如來の心は以て住相なし。煩惱の盡くる處智平等の中に微妙に安住して、衆生の一切の煩惱有漏の五蘊を斷ぜしめんが爲に妙法を說いて是の如くの言を作したまふ。哀れ哉衆生、無事の中に於て橫に煩惱を生ず。汝等應當に實の如く思惟し揀擇し觀察すべし。復衆生の爲に種種の善巧種種の譬喩を以て煩惱の性本より所有無しと說く。彼の諸の衆生實の如く觀じ已つて少法を見ず。而も執持すべき種種の煩惱任運に永滅して涅槃に入りたまふ。此れは是れ如來の第十正覺事業なり。爾の時に世尊重ねて此の義を宣んと欲して偈を說いて言く、

『〔一〇二〕十力世尊力を圓滿し、　廣大甚深門を成就したまふ。　煩惱障盡きて智と相應す。　勝菩提を得て最も寂靜なり。　聲聞は惑を滅して盡智を得れども、　量有つて習氣猶未だ除かず。　緣覺は惑を斷じて菩提を得れども、　大悲辯才皆具せず。　佛は世主たり人中に勝る。　〔一〇三〕惑習倶に滅し德皆圓かなり。　煩惱の際を盡し大悲を增し、　辯才無量にして皆成就す。　佛は煩惱を究盡する智に住して、　衆生の惑妄眞に非ざることを知り、　邪道を行ずる諸の有情の、　如來正法の跡を履まざることを愍みたまふ。　大悲猛利にして物の爲に　無常苦空無我門

【一〇〇】諸漏。諸多の煩惱のこと。

【一〇一】聲聞は。煩惱を斷ずるに就て聲聞は唯だ煩惱の正使といふて、現に起りつゝある煩惱そのものを斷ずるのみにして習氣と稱して煩惱の種子を斷ぜず然るに緣覺は正使を斷ずると同時に習氣の一部分を斷ず、然るに菩薩は正使と共に習氣の全部を斷ず。

【一〇二】十力。佛の尊稱號なり。

【一〇三】惑習。煩惱の正使と習氣のこと。

の如くなる、其の身相なき諸の衆生等其中に充滿す。多く三千大千世界の所有の人天に於て、佛は皆明に見たまふ、淨天眼を以て微細に觀察し一切世界の所有の衆生の調伏するに堪へたる者は、其をして一一に各佛身を見せしめて其前に現ずれば、彼彼の衆生互に相知らず、是を如來第九正[九八]覺事業と爲す。爾の時に世尊、重ねて此の義を宣んと欲して、而も偈を說いて言く、

『如來の光明淨天眼の、　威德、　劫の無邊を照見し、　十方一切剎の難思の　衆生の受生各何れも相あり、　或は已現當生別にして、　有色無色種種の　殊あり、　或は人天趣或は[九九]三塗下中上品の生一に非ず、　歿に垂んとし、　將に生ぜんとして種種の異あり。　一切の見者見るに遺なし。　罪を造つて惡趣に沈淪する所、　福を修して超へて人天の上に處し、　或は菩薩の行を修行するあり。　入出して菩提の根を種植す。　或は道樹に坐して衆魔を摧き、最勝の菩提道を覺悟し、　妙法輪を轉んずること皆自在なり。　人天解脫の量思ひ難し。　佛事を作し已つて涅槃を示す。　如來は天眼を以て皆明に見たまふ。　或は師に從つて鬪て正念を獲、　寂滅を履踐して淸凉を得、　或は有海を超へて師に由らず、　解脫安樂なり、　如來は見たまへり、　或は無數の聲聞衆あり、　或は復緣覺乘を修行す。　彼の衆生界邊あることなし、　佛は淨天眼を以て皆明に見たまへり。　或は衆生あつて色相なく、　車輪量に等しく衆多あり、　三千界の內の人天に過ぎたり。　是の如く微細なれども如來は見たまへり。佛は一一の衆生界を見たまふ。　五道に流轉して　邊あることなし。　一切智を以て了するに衆生なし、　大慈悲を以ての故に調伏したまふ。　或は利根にして度すべき者あらば、　各如來の眼在前を見たてまつる。　勝法を說かんが爲に其の心を愜ふ。　此れ佛第九の天眼業なり。』

復次に、善男子、如來は一切の[一〇〇]諸漏已に盡きて復煩惱なし。心善く解脫し慧善く解脫す。自ら覺

作用を滅却して起らざらしめる禪定なり。

【八七】　法王。佛のこと。

【八八】　宿住智とは、宿住智證通にて、六神通の一、過去の因緣を知ること。

【八九】　姓は一本には性となる。

【九〇】　善根。善良なる行爲によつて善果を生ずること。

【九一】　世間燈。佛の尊稱歟。

【九二】　五阿摩勒。五個の阿摩勒にて、阿摩勒は菴摩羅Āmaraと譯す。掌に「アマロク」を觀林檎の如き果物にて無垢淸淨るとは諦に見ることを形容したること。

【九三】　流注とは、流れ注ぐとの意味にて卽ち一切萬有は有爲法と稱して、剎那〳〵に前滅後生と變化せるなり。

【九四】　劫火洞然。一定安住して居つた世界が破壞せんとする時に大火災が洞然として起つて三千大千世界を燒盡すること。

【九五】　諸剎とは、(Kṣetra)卽ち國土のこと。

【九六】　道樹、菩提樹のこと。

【九七】　五通天眼。天眼天耳通漏盡通宿住通等の五神通の一。

【九八】　一本には正覺の下に力甚深の三字あり。

【九九】　三塗。地獄餓鬼畜生の三惡趣をいふ。

心斷へざる、一一の衆生を佛は悉く知りたまふ。劫數の量は恒河沙に等し、彼の無邊の行を說きたまふこと無盡なり。盡未來際の所有の劫、佛の宿住の因を說くこと能はず、智慧無等にして邊あることなし、猶ほ大海の涯際なきが如し。佛は利智勝通力に住し、昔修する所の白淨の因を念じ、及び彼の衆生の善根を種え、過去或は曾て佛を供養す。佛威神力を以て憶念せしめ、前の所作の白法の因の如く、念じ已ぬれば敎を示して三乘に住せしめ、清淨解脫して恒に退することなし、善逝の過去の因は無量なり。一切衆生は測量し難し、此の第八の業を以て因とし無數の衆生を悉く調伏したまふ。』

復次に、善男子、如來の天眼は清淨にして、人の眼見に過ぎたり。諸の衆生は此に死し彼に生ず、所謂下劣最勝善色惡色、若しは好、若しは醜、是の如の種種業に隨つて生を受く。或は衆生あつて身の惡行を具し、或は衆生あつて口の惡行を具し、或は衆生あつて、意の惡行を具し、或は賢聖を謗ると、及び邪見等の業の因緣の故に、此の身を捨て已つて地獄に墮す。復衆生あつて身の善行を具し、或は衆生あつて、口の善行を具し、或は衆生あつて意の善行を具し、賢聖を謗せず、及び正見等の因緣の故に、是の身を捨て已つて天上に生ず。如來は天眼を以て皆悉く知見したまふ。是の如く十方法界を盡し、虛空界を極めて無量無邊なり。數量を超過する所有の世界の其の中間に於て、或は世界あり、[94]劫火洞然として空にして所有なし、或は世界あり、種種の衆生あつて此に死し彼に生る。或は諸の菩薩[95]諸剎に遊行し、或は諸の如來[96]道樹に趣いて大菩提を證して正法輪を轉じ、應に晦跡を盡して入涅槃を示すべし。各各の聲聞現に解脫を得或は涅槃に入る。彼彼の緣覺種種の通を現じ、能く遇ふ者をして功德增長せしむ。是の如く種種佛は皆明に見ること目前に對するが如し。復世界の身相あることなく、諸の衆生等を見ることは、外の[97]五通天眼の所見に非ず。亦二乘及び菩薩眼の能く見る所に非ず、唯如來天眼のみあつて明に見たまふ。或は其の地の量あり、車輪

一內有色想觀外色解脫、二內無色想觀外色解脫、三淨解脫身作證具足住、四空無邊處解脫、五識無邊處解脫、六無所有處解脫、七非想非々想處解脫、八滅受想定身作證具住である。

【七八】三摩鉢底（Samāpatti）禪定に入ること。

【七九】有支。十二因緣の中の第九の有にて總じて十二因緣をあげたるなり。

【八〇】隨眠結惑。隨眠煩惱のこと。

【八一】空法。緣覺の人が觀ずる人空無我の理なり。

【八二】有海。三界生死の大海をいふ。

【八三】止觀。止（禪定）と觀（智慧）との作用。

【八四】三明。一宿命明。宿世の生死の相を知る、二天眼明色界天の眼を以て未來世の生死の相を知ること、三漏盡明とは、現在の苦惱の起つた由來を知つて、能く煩惱を斷ずる智。

【八五】正定三昧、三昧（Samādhi）を正受正定等持、等至等譯せども要するに散亂の心を調べて心を寂靜ならしむること。

【八六】滅定、滅盡定（Nirodha-samāpatti）とて、眼識耳識鼻識舌識身識意識等の六識の

び衆生是の如くの名字、是の如くの種[八九]姓、是の如くの飮食、是の如くの形相、是の如くの色類、是の如くの苦樂、是の如くの處所、是の如くの壽命、是の如くの生死、某處に歿して某處に生じ、無數種種宿住の事皆悉く憶念したまふ。復、彼彼の衆生、過去に、是の如くの因を以て此の世界に生ずと知りたまふ。如來は知り已つて其の所應に隨つて爲に說法したまふ。又、實の如く一切衆生過去の心行を知りたまふ。是の如く前念、是の如くの前念、次第に因滅すれば相續し、引起す。是の如く後念、或は復緣闕すれば後念生ぜず、是の如く種種なれども如來は悉く知りたまふ。一衆生の如き是の如く心滅し、是の如く心生じて輪轉して斷へざること無量無邊なり。恒河沙劫に說くとも盡すこと能はず。一衆生の如く一切衆生も亦復是の如し、念念生滅し心心相續して說くとも盡すべからず、如來は一一皆實の如く知りたまふ。假使未來際劫を盡して、說くとも如來所知の宿住に於ては、窮盡すべからず。故に如來の宿住智慧を說くことは、不可思議不可稱量なり。邊際を知り難し、說くとも盡すべからず。

爾の時に如來、大悲の聲を出したまふこと、猶ほ牛王の如く、普く衆生に告げたまはく、汝等應當に念念に思惟すべし、世に住すること久近にして曾て[九〇]善根を種、或は佛所に於て曾て善根を種、或は二乘の種る所の諸の善根、彼の諸の衆生、佛の威力を以て皆昔善を念ず。如來は知り已つて應に隨つて說法す。彼の諸の衆生法を聞くことを得已つて、昔の善根の如く各自乘に於て不退轉を得、是れを如來第八の正覺事業と爲す。爾の時に世尊重ねて此の義を宣べんと欲し、偈を說いて言く、

『佛　[九一]世間燈　住劫、　無邊億數那由佗を念じて、　自己及び衆生を諦了すること　掌に[九二]五阿摩勒を觀るが如し。　是の如く姓名色分別　壽命住處生死殊なり。　是の因緣を以て此の處に生じ、　善く時を知る　故に爲に說法す。　又　過去無邊劫、　衆生の心心所不同を知りたまふ。　無量の種類の各心を生ずるを、　如來大智は皆明に了したまふ。　過去　[九三]流注の

大悲を起して衆生教化の大智用を起す、之を後得智といふ。

【七〇】無生の理。とは加行位に於て因緣生無自性の理を觀ずること。解脫に近しとは解脫道に於て少分煩惱を斷ずること。

【七一】具足行。檀戒忍進禪の五の波羅蜜を具足し實行すること智慧解脫現在前とは六度の中の般若波羅蜜を得ること。

【七二】盡智。三界の煩惱を盡したる智。

【七三】無生智。三界の煩惱を斷盡して再び三界に生れないといふ自覺の智を起す。之を無生智といふ。

【七四】眞諦の理とは、緣覺所入の人空無我の理をいひ、人空無我の理を證する智を眞諦の智といふ。欲の次に一本には界とある。

【七五】有尋有伺。麁に觀察するを尋の作用といひ細に觀察するを伺の作用といふ。色界初禪天に尋伺の作用のあることを有尋有伺といふ。

【七六】離生喜樂地。欲界の惡を離れて喜樂を生ずるといふ意味で則ち色界四禪天の中の初禪定をいふ。

【七七】八解脫。八背捨ともいひ貪欲を離れ無常の理を證するために觀ずる方法である。

味に入る、而も常三昧は不定の心なし、一切能く如來所有の三昧を測知するなし。緣覺の三昧は聲聞に超過す。菩薩の三昧は緣覺に超過す。如來の三昧は菩薩に超過す。而して佛の三昧は能く過ぐる者なし。如來の智慧は一切處に於て障礙なく轉じて能く過ぐる者なし。一切の聲聞に隨順し敎化して聲聞定を生ず。緣覺菩薩も亦復是の如し。如來は是の如く種種なれども知り已つて、其の所應に隨つて爲に說法す。此れは是れ如來第七正覺事業なり。爾の時に世尊重ねて此の義を宣べんと欲し、偈を說いて言く、

『諸佛の法王は眞實智あつて、　諸の衆生の染淨因を知りたまふ。　是の如くの因緣は煩惱を生ず、　是の如くの因緣は解脫を得、　邪思を因とし、　無明を緣とす。　無明を因とし行を緣とす、　識と名色と六處等との、　[七九]有支の因緣悉く是の如し　煩惱を因とし業を緣とす。　諸見を因とし　貪を緣とす。　[八〇]隨眠結惑を以て因とし、　現行煩惱を以て緣とす。　衆生の解脫に二の因緣あり、　他に從つて聲を聞いて　隨順を起し、　內心正念に　[八一]空法を觀ず。　[八二]有海を解脫して超昇することを得。　[八三]止觀和合して互に相資く、　少き去來として得べきものはなし。　諦に無生にして亦無滅なりと觀ずれば、　解脫に親近して淸涼なることを得、　三種の行に住して[八四]三明を長ず、　解脫を修習して放逸ならず、　盡無生智に實諦を得、　此の因緣に由つて心を淸淨にす。　佛　[八五]正定三昧門に入り　[八六]滅定に出入して念を具足し、　[八七]法王の禪定は無等等なり。　八解脫多の等持に入り、　逆順の次第超間して遊び、　一定に無邊の定を顯示して、　心に迫隘なく分別なし、　常に定に住すと雖定心なし、　聲聞緣覺の三摩提　菩薩の億千種種の定、　佛の三摩地は諸定に過ぎたり、　此の善巧業智は量り難し。』

復次に善男子、如來は[八八]宿住智を以て、自身及び諸の衆生の過去無數宿住生事を知りたまふ。所謂一生二生十生百生・千生・萬生・億百千生、成劫・壞劫・成壞劫・無數成劫・無數壞劫・無數成壞劫、我及

惟するを常見といふ。三、邪見とは因果の道理を無視するもの。四、見取見とは愚劣のことを最勝なりと思惟するもの。五戒禁取見は天に生れて快樂を得るために戸外に臥して牛に似た生活をし、或は斷食等をして身心を苦しめ之を以て正しき方法と思惟するもの。貪とは。五鈍使とは貪瞋痴慢疑の五の煩惱なり。

【六三】隨眠煩惱とは、煩惱障（涅槃の理を障碍する惑）と所知障（菩提の智を障碍する惑）との二障の種子をいふ。種子とは未だ煩惱が活動しない間をいふ。

【六四】現行煩惱。煩惱の現に作用する位をいふ。

【六五】他に隨つて云々は、聞慧と思慧を明す。聞慧は他人より敎を聞くこと思慧は自ら道理を思惟すること。

【六六】奢摩他（Śamatha）は寂靜止息と譯す。散亂の心を止めて寂靜ならしむこと。

【六七】毘鉢舍那（Vipaśyanā）は觀又は見と譯す。眞理を觀ずること。

【六八】不來智、正體智なり。正體智とは眞如の理に契證一致する根本智なり。

【六九】如來智。後得智なり。後得智とは既に眞如の理に一致する正體智を得た時は更に

因とし識を緣とす。[五二]識を因とし名色を緣とす。[五三]名色を因とし[五四]六處を緣とす。六處を因とし、[五五]觸を緣とす。觸を因とし[五六]受を緣とす。受を因とし[五七]愛を緣とす。愛を因とし[五八]取を緣とす。取を因とし[五九]有を緣とす。有を因とし[六〇]生を緣とす。生を因とし[六一]老死を緣とす。煩惱を因とし業を緣とす。[六二]見を因とし貪を緣とす。[六三]隨眠煩惱を因とし[六四]現行煩惱を緣とす。此は是れ煩惱の生起する因緣なり。云何んが衆生諸の煩惱を滅する所有の因緣とならば、二種の因あり、二種の緣あり、云何んが二となす。一は[六五]他に從つて隨順の法聲を聞き、二は內心に正念を起すなり。

復次に二種の因あり、二種の緣あり。能く衆生をして淸淨に解脫せしむ。謂く[六六]奢摩他、心一境の故に、[六七]毘鉢舍那、能善巧の故に、復次に二種の因あり、二種の緣あり。[六八]不來智の故に、[六九]如來智の故に、復二種の因緣あり、微細に[七〇]無生の理を觀察するが故に、解脫に近きが故に、復二種の因緣あり、[七一]具足行の故に、智慧解脫現在前の故に、復二種の因緣あり、謂く[七二]盡智の故に、[七三]無生智の故に。復二種の因緣あり、隨順して[七四]眞諦の理を覺悟するが故に、隨順して眞諦の智を獲得するが故に、此れは是れ衆生の煩惱を除滅する淸淨の因緣なり。如來悉く知りたまふ。復次に善男子、煩惱の因緣數量あることなければ、解脫の因緣も亦、量あることなし、或は煩惱あつて能く解脫の與に以て因緣となる。實體を觀ずるが故に、或は解脫あつて能く煩惱の與に以て因緣と爲る。執著を生ずるが故に。是の如く廣大無障礙の行如來悉く知りたまふ。善男子如來は禪定智慧皆悉く具足せり。謂く欲の惡及び不善法、[七五]有尋有伺を離れて[七六]離生喜樂に初靜慮に入る、初靜慮に尋伺等を起滅し、隨順して次第に[七七]八解脫三摩鉢底に入り、逆次に諸の三摩地に入住し、或は復超間して橫竪無礙にして等至に住し、三昧を顯示す。如來は三摩鉢底と三昧門と少き差別無しと了知したまふ。如來の[七八]三昧三摩鉢底は因緣に從はず、一の三昧に一切の三昧皆悉く現前し一の三昧を起つて而も能く卽ち一切三昧に入りたまふ。如來は終に是の如くの念を作さず。我今能く是の如くの三

【五二】識。過去に於ける煩惱業の法果として現在世に母の胎內に托した最初の一念をいふ。
【五三】名色。母の胎內に托して後、次第に身體の生長する間をいふ。
【五四】六處。胎內に於て眼根・耳・根・鼻根・舌根・身根・意根等の六根が具足する間をいふ。
【五五】觸。小兒の二三歲の間で無意識的に外界を觸覺せんとする間。
【五六】受。六七歲の頃より次第に苦樂を感受する間。
【五七】愛。十四五歲の頃より次第に異性に對して愛欲を起す位。
【五八】取。愛欲を盛んにして諸方に馳走すること。
【五九】有。愛取等の煩惱を盛んに起したために、其結果として未來の果報を定める位をいふ。
【六〇】生。現在に於ける惡業の結果未來に生れる位。
【六一】老死。未來に於て老死する位。
【六二】見。見とは、五見卽ち一、身見又は我見といふ、實我ありと思惟して無我の理に暗冥たること、二、邊見は斷見と常見なり。人は死して斷滅に歸すと思惟するを斷見といひ人は永久人畜生は常に畜生と思

まふ。是れを如來第六の正覺事業となす。

爾の時に世尊、重ねて此の義を宣んと欲し、偈を說いて言く、

『一切處行は佛盡く知りたまふ、正定の衆生は大因力あり、不定の衆生は根熟の相なり。邪定は器に非ず空有に悲しむ。貪行の衆生は三種の因あり、瞋恚愚癡も亦三種あり。種種無邊の煩惱界、遍行の因起、佛は皆知りたまふ。苦行は疾く得、利根なるに因つてなり。鈍根は遲緩にして能く達せず、樂行は速疾なり、根利に由つてなり。鈍根は劣弱なり、佛皆知りたまふ。行遲速なれば漸く澄淸なり　復、遲鈍にして頓に淸淨なるあり、速疾の行有つて、得ること微劣なり、超過して速疾なれば無著の因なり。行あり智增すれば擇法を生ず、行あり定增すれば法器と成る。行あり俱に少なれば法器に非ず。定慧和合すれば勝道を生ず。行あり心力具して身に非ず。身力具して心具せざるあり、[四七]大威德の故に身心を具す。一切の見者悉く皆知る。行あり、語心を淨むる能はず、或は能く身語を淨ならしむるあり、或は心永く淨むること能はざるあり。行あり、但し能く心を淸淨にす。或は語言を淨むること能はざるあり、行あり能く心語を淨ならしむ。或は身永く淨むること能はざるあり、行あり三業淨くして瑕なし。行あり生死の因を建立す。行あり因となりて解脫を招く、是の如くの遍行を佛は皆了したまふ。是れ第六の業最勝門なり。』

復次に善男子、如來は[四八]一切靜慮解脫等持等至に於て煩惱を伏滅し生起する因緣、皆實の如く知りたまふ。佛云何んが知りたまふ。謂く、衆生の煩惱の生起する何の因を以て生じ、何の緣を以て生じ、惑を滅して淸淨なること、何の因能く滅し何の緣能く滅すと知りたまふ。此の中煩惱の生ずる因緣とは謂く[四九]不正思惟を以て其の因とし、[五〇]無明を緣とす。無明を因とし行を緣とす。[五一]行を

【四七】大威德。惡を排して善を修する大なる力あるもの。

【四八】一切靜慮解脫とは禪定三昧に入つて、十二因緣の生起する理と、之を伏滅する原理を說くなり。生起の因緣とは衆生が三界六道に輪廻轉生するの狀態を說く。伏滅の因緣とは輪廻轉生の主體たる煩惱を伏滅して涅槃に歸入するの狀態を說きしもの弘法大師の祕藏寶鑰の第五住心に引用す。

【四九】不正思惟。正しく因果の理を思惟せざることにて次の無明と同體のものなり。

【五〇】無明。明とは正智なきことにて、卽ち過去の煩惱をいふ。

【五一】行。善惡の行業にて、過去世に於ける煩惱によりて造つた善惡の業をいふ。

[三九]大悲の甲を擐たまふ。

復次に、善男子、如來は善く衆生三毒遍趣の行を知りたまふ。貪欲の行を知るに、其れに三種あり。云何んが三となす。謂く、或は貪欲あり、[四〇]妙境より生ず、或は貪欲あり、[四一]愛想より生ず。或は貪欲あり、[四二]宿習より生ず、其の瞋の行を知るに亦三種あり、云何んが三となす。謂く、或は瞋毒あり、恚より生ず。或は瞋毒あり、違境より生ず。或は瞋毒あり、過去[四三]隨眠より生ずる所なり。愚癡の行を知ることも亦三種あり。云何んが三となす。謂く或は愚癡あり。無明より生ず、或は愚癡あり、身見より生ず。或は愚癡あり疑心より生ず。是の如く種種なれども如來は悉く知りたまふ。

復次に如來は其の[四四]苦行速疾に通達すと知る。根利を知るが故に、又苦行遲緩に通達すと知る、根鈍を知るが故に、安樂行速疾に通達すと知る。根利を知るが故に、安樂行遲緩に通達することを知る。根鈍を知るが故に。復有行遲緩通達すと知る。正念に遠きが故に、復有行速疾に通達すと知る、能く堅持するが故に、又復善く速疾の行有つて遲鈍に通達すと知る。[四五]數息觀の故に、速疾の行あり速疾に通達す。心著せざるが故に、又復善く擇法の行を知る。謂く或は行あり、慧多く定少なし。或は復行あり、定多く慧少なし。或は定慧倶に具足せざるあり。或は定慧二倶に圓滿するあり。如來は悉く知りたまふ。或は復、行あり、心力具足し身力具せず、或は復行あり、身力具足し、心力を具せず。或は復行あり、二倶に具せず、或は復行あり、二倶に具足す。如來は一一に皆實の如く知りたまふ。

或は復行あり、身業を淨ならしめ口意は不淨なり。或は復行あり、口意を淨ならしめ、身業は不淨なり。或は三業を倶に淸淨なることを得せしむ。或は三業をして倶に淸淨ならざらしむ。是の如くの諸行は或は是れ三界生死の因或は解脫の因なり。如來は皆[四六]無礙の智眼を以て一切に隨轉した

【三九】大悲の甲とは、甲冑をまとうて軍陣に入るが如く菩薩は大慈悲の甲冑をつけて衆生を救度するのである。
【四〇】妙境。美妙の對象物をいふ。
【四一】愛想とは、愛着のこと、即ち自己の欲することに固く執着すること。
【四二】宿習、過去宿世からの惡習のこと。
【四三】隨眠。煩惱をいふ。
【四四】苦行。身心を苦しめて修行すること。
【四五】數息觀。又は安般觀ともいひ出入の息を數へて心の散亂を統一する觀法なり。
【四六】無礙の智眼。無碍自在に了智する所の智を云ふ。即ち佛の智なり。

女命　苦樂憂喜及び捨根信進念定慧を知る。當に知るべし　已知具知根悉く了したまふ。眼根に因つて唯耳に住し、　乃至身に因つて眼の中に住すと知りたまふ。　施根戒を持すれば爲に檀を說き、　戒根施を行れば爲に戒を說き　忍根勤を修すれば、　爲に忍を說き、進根忍を修すれば爲に勤を說く。　定根慧を修すれば諸禪を說き、　慧根定に住すれば般若を說く、　聲聞の根緣覺の行を修すれば、　根を知るを以ての故に聲聞を說く、　緣覺の根聲聞乘に住すれば根を知つて爲に緣覺を說く。　下劣上乘の法を遠離して、　大悲を以て爲に〔三四〕諸度門を說く。　根の熟すると未熟なると佛は皆知る、　是器には爲に說き、　非器をば捨す。　諸根の行相修習の性　其の因と緣と及與び恩と果と報と究竟とに隨つて　是の如く知りたまふ。　是れ佛第五の眞實業なり。』

復次に、善男子、如來は、〔三五〕遍趣の行に於て實の如く知りたまふ。當に云何んが知りたまふや。正定の衆生界を知り、不定の衆生界を知り、邪定の衆生界を知る。云何んが而も正定の衆生を知りたまふや。謂く、此の衆生〔三六〕大因力有つて、宿し多福を植へ、聰敏利根にして智慧將に開けんとす。如來は實の如く昔善を知り、已つて或は爲に說法し、或は說法せず、其の法器に稱うて皆解脫せしむ。云何んが而も不定の衆生を知るや。謂く、彼の衆生、大緣力有つて根將に成熟せんとす。若し其の心に隨つて、正法を聞くことを得れば、卽ち解脫を得。若し法を聞かされば解脫を得ず。如來、此の不定の衆生の爲に因緣和合の法を說きたまふ。彼の諸の衆生〔三七〕機に隨つて法を聞き心に清淨を得、各〔三八〕道果を證せり。如來は此の不定の衆生の爲に世に出興したまへり。云何んが邪定の衆生を知りたまふや。謂く此の衆生は愚癡心を覆うて是れ法器に非ず。更に方便以て化誘すべきなし。譬へば盲者の日光に對するが如く、若し爲に說法し、及び說法せざれども倶に利益なく、解脫分なし。如來は其の是の法器に非ることを知つて、便ち之を捨置するは彼の衆生の爲なり。此の故に菩薩は

【三四】諸度。菩薩が修行して生死の此岸より涅槃の彼岸に至る法門としての六波羅蜜のこと。

【三五】遍趣の行とは、次に出づるが如き衆生の種々なる行なり。

【三六】大因力と次の大緣力とは共に學德高き者より正法を聽いて自已の修養の資となすこと。

【三七】機に隨つて、機とは機根といふて、佛道修行者の智識信仰の程度をいふ。

【三八】道果。佛道を修行して佛果を成就すること。

に住す。如來其の無始より來、諸根展轉して多の差別あることを知りたまふ。是の故に爲に甚深般若波羅蜜多を說き、其をして一切廣大菩提分法を修習せしむ。

復次に、此の衆生は聲聞の根有つて、現に緣覺所行の行を修するを知りたまふ。如來は其の無始より來、諸根展轉して多の差別あり、聲聞に堪[三一]任すと知りたまふ。是の故に爲に聲聞乘の法を說きたまふ。若し衆生有つに緣覺の根あれども聲聞の行を修す。如來は其の無始より來、諸根展轉して多の差別あり、緣覺に堪任すと知りたまふ。是の故に爲に緣覺の法を說く。或は衆生あつて大乘の根あれども二乘の行を修す、如來は其の無始より來、諸根展轉して多の差別あり、大法を聞くに堪ふることを知り、爲に大乘を說きたまふ。復衆生あつて、下劣の根あれども、現に大乘を修す。如來は其の無始より來、諸根展轉して多の差別ありと知り、而も爲に法を說いて、下劣を捨て大乘を修習せしむ。復衆生あつて法器に任へず、如來は其の無始より來、諸根展轉して多の差別ありと知り、久しく堪任せざるが故に、且らく棄捨して根熟の時を待ち法器に堪任して慇重心を發す。如來は當に爲に慇勤に說法すべし。善男子、如來は是の如く諸の衆生を知りたまふ。若しは根已に熟し、若しは根未だ熟せず三界を出でんと欲し、或は出でんと欲せず、是の如く種種なれども、如來は、悉く知りたまふ、當に云何んが知りたまふ。其の根本を知りて云何んが修習し、云何んが相、云何んが因、云何んが緣、云何んが思、云何んが果、云何んが報、云何んが究竟と、如來は一一皆實の如く知りたまふ。此れは是れ如來第五の正覺事業なり。爾の時に世尊重ねて此の義を宣んと欲して而も偈を說いて言さく、

『佛は根智彼岸に到ることを知つて、　衆生の種種の殊に隨順したまふ。　上中下品悉く了知す。
　勝業は能く解脫の果を招く、　煩惱の際は唯虛假なりと了し、　厚薄輕重悉く皆知りたまふ。
善く諸惑の[三二]對治門と　惡は生死を招き善は解脫すと知りたまふ。　[三三]眼より意に至り、　男

【三一】任は一本に間となる。

【三二】對治門。煩惱を斷ずること。

【三三】眼より意とは、前に述べた二十二根をいふ。

復次に是の如くの根に隨つて分別して貪を生じ、是の如くの根に隨て分別して瞋を生じ、是の如くの根に隨て分別して癡を生じ及び外境に託して貪瞋癡を生ず。如來は悉く知りたまふ。

復次に根に隨つて分別して、貪瞋癡を生じて展轉增廣し、或は復根に隨つて分別して生ずる所、少しく貪瞋癡を少くして更に增長せず、如來悉く知りたまふ。

復次に此の根は是れ善根の因なり。此の根は卽ち是れ不善根の因なり。此の根は卽ち是れ解脫道の因、此の根は卽ち是れ生死の道を出づる因なり。是の如く種種なれども如來は悉く知りたまふ。

復次に善男子、佛は實の如く【三〇】眼耳鼻舌身意の六根、男女命根・苦根・樂根・憂喜捨根・信根・進根・念定慧根・未知當知根・已知根・具知根を知りたまふ、是の如く種種なれども如來は悉く知りたまへり。

復次に、眼根に因つて、心耳根に住して鼻舌身等の三根に住せず、耳根に因つて心舌根に住して餘根に住せず、鼻根に因つて心舌根に住して舌根に因つて心身根に住す。身根に因つて心眼根に住す。是の如く種種なれども、如來は悉く知りたまふ。

復次に若し衆生あつて、布施の根あつて現に淨戒を持す。如來は、其の無始より來た諸根展轉して多の差別あることを知りたまふ。是の故に爲に檀波羅蜜を說く。若し衆生あつて、淨戒の根有つて現に布施を行ず。如來は其の無始より來、諸根展轉して多の差別あることを知りたまふ。是の故に爲に尸羅波羅蜜を說く。或は衆生あり忍辱の根あつて現に精進を行ず。如來は其の無始より來、諸根展轉して多の差別あることを知りたまふ。是の故に爲に忍波羅蜜を說く。或は衆生あり精進根有つて現に忍辱を行ず、如來は其の無始より來、諸根展轉して多の差別あることを知る。是の故に爲に勤波羅蜜を說く。或は衆生あり禪定根有つて現に智慧を修す。如來は其の無始より來、諸根展轉して多の差別あることを知りたまふ。是の故に爲に禪波羅蜜を說く。或は衆生あり智慧根あつて現に禪定

【三〇】眼耳鼻等とは、二十二根を說く。眼根耳根鼻根舌根身根意根等は六識を誘發して外境を了別せしむる力をあたへるもの、男根女根は色慾を起させるもの、命根は生命を保持せしむるもの、苦樂憂喜捨等の五根は五受とも稱し、苦根は眼等の五識で認識したものに對して不快苦痛を感ずること、樂根は之と反對に快樂を感ずること、憂根は意識で認知したことを憂惱すること、喜根は喜悅すること、捨根は六識で認識したことに就て苦樂を感じないこと、次に信根等の五は五根といふ。信根は四諦の理を信ずること、精進根は善いことを精進すること、念根は正法を記憶すること、定根は心を統一すること、慧根は眞理を思惟することと、未知當知根と已知根と具知根との三は見道と修道と無學道との無漏智をいふ。

復次に地界水界風界は、皆虛空の如しと知りたまふ。
復次に、欲界色界無色界は、妄想分別より起る所なりと知りたまふ。
復次に有情界を知りたまふ。行相現前に窮盡あるが故に、無爲界を知りたまふ。行相なきが故に、煩惱界を知りたまふ、客塵相の故に、煩惱の流を了したまふ、斷絕すべきが故に、其の本性に達したまふ、光明相の故に、諸行界を知りたまふ、妄念無明を其相と爲すが故に、涅槃界を知りたまふ、智慧の相なるが故に、正念の相なるが故に、善男子是の如く是の如く世界の安立なり。初は現在前し世界轉滅し他世に至つて因緣を生起し作業に依住す。是の如くの差別如來一一皆實の如く知りたまふ。知り已つて應に隨つて爲に說法す。此れは是れ如來第四の[26]正覺事業なり。爾の時に、世尊、重ねて此義を宣べんと欲して、偈を說いて言く、

『佛は界善巧に於て、　及び住轉[27]滅の時に於て少善を以て大果を成ず。[28]人師子能く了したまふ。　有福と無福界と　福[29]開解脫門と　解脫界と不同なり。　一切智は明に見たまふ。
如來は眼界　色識界俱に空なりと知りたまふ。　耳界鼻舌身　意法も空なること亦爾なり。　地水火風界も實の如く皆空なりと了したまふ。　三界妄念心。　人師子能く了したまふ。
煩惱客塵の相と、　諸法の性とは皆無なり。　行不行は如空なり。　斯れは涅槃の三相なり。
世界の不善より起る、　成じ已つて壞滅すること同じ、　此の界及び他方、　無念にして皆知見したまふ。　十方は空にして無際なれども　界ありて佛は能く知りたまふ。　佛智は勝れて涯なし。　衆生は測ること能はず。　此れは是れ清淨主、　第四の調生門なり。　此を修すれば退還せず、　決めて菩提果を證す。』

復次に善男子、如來は諸の衆生の諸根の勝劣精進懈怠若しは利若しは鈍、皆實の如く知りたまふ。云何んが能く知りたまふ。善男子、鈍根愚闇下劣の衆生中根勝根皆實の如く知りたまふ。

【二六】一本には正覺の下に力甚深の三字あり。
【二七】一本には滅を滅となる。
【二八】人師子。佛は勇猛なること師子の如く實に人間界に於て尊勝のものなれば佛の敬稱語なり。
【二九】開は一本には門となる。

の資生の具を受用す。是の如くの差別、如來は悉く知りたまふ。或は樂欲有つて人天の上に處し、或は樂欲有つて當に解脫を得べし、是の如くの差別、如來は一一皆實の如く知りたまふ。是の如く知り已つて其の所應に隨つて爲に法を說きたまふ。是を如來第三の正覺事業となす。爾の時に世尊重ねて此の義を宣べんと欲して偈を說いて言さく、

『衆生の種種の欲、　意樂無數量なり、　如來の一切智は　實の如く悉く能く知りたまふ。　彼彼の諸の衆生、　貪に住して瞋恚を樂ひ、　瞋に住して癡冥を樂ふ。　一一如實に知りたまふ。　癡に住して貪を樂欲し、　善に住して不善を樂ふ。　其の心種種に變ず、　善逝は悉く能く知りたまふ。　下劣の因の衆生、　心に恒に廣大を樂ひ、　廣に住して廣大を樂ふ。　勝劣に住して中を求む。　或は復衆生有つて、　因の劣果は超勝し、　因勝れ果は中劣なり。　如來は實の如く知りたまふ。　邪不定の中に住して、　後時に當に決定すべし。正に住して三界を脫す。　如來は實の如く知りたまふ。　或は種種の生、　色相及び資具を樂つて、　人天の上に處し、　解脫欲相應す。　三世の諸の衆生の　樂欲佛は皆了せり。　心に隨つて爲に說法す。　是れ第三の業門なり。』

復次に、善男子、如來は無數の世界種種の界別に於て、皆實の如く知りたまふ。佛云何んが知りたまふ、謂く此の世界の其の中の衆生は諸の功德を修し、此の界の衆生は諸の惡業を造す。此の界の衆生は解脫の業を修す、此の界の衆生は當に出世を得べしと知りたまふ。是の如くの種種悉く實の如く知りたまふ。

復次に、善男子、如來は、眼界色界眼識界を知りたまふ。當に云何んが知りたまふ。三因あるが故に、謂く[二三]內空と[二四]外空と[二五]內外空とを知るが故に。是の如く遍知したまふ。乃至意界意識界を知りたまふ。內空外空內外空の故に。

【二三】內空。眼根耳根鼻根舌根身根意根等に於て何れも因緣假和合生にして神我の如き實體なきことをいふ。
【二四】外空。色聲香味觸法等の外の六塵に於て實我なしといふ。
【二五】內外空。內外共に觀ずるに實我なきこと。

ふ。　善業不善業、　各各の果當に成ずべし。　善逝悉く能く知りたまふこと、　摩尼の掌に在るが如し。　業有り甚だ微細にして、　當に廣大の因を成ずべし。　初は大にして後は微細なり。　如來は悉く見知したまふ、　業あり聲聞の行なり。業あり緣覺の因なり。業あり如來を成ず。　善逝は悉く知見したまふ。　或は因は樂、果は苦、　因苦果樂にして殊なり。　因果苦なること皆同なり。　因果倶に安樂なり。　業と法性とは、　因果相違せず、　如來は實の如く知りたまふ。　性相皆窮め究めり。　一切衆生界は三世の業輪廻して、　一一に差あることなし、　如來は悉く明に了したまふ。」

復次に善男子、一切衆生無數の樂欲種種に差別なれども、如來は一一皆實の如く知りたまふ。佛云何んが知りたまふ。或は衆生有つて、貪欲の行に住して嗔恚を樂ひ、或は衆生有つて瞋恚に安住して、婬欲を樂ひ、或は衆生有つて愚癡に安住して婬欲及び瞋恚を樂ふ。如來は一一に皆實の如く知りたまふ。或は衆生有つて、善法の中に住し不善を樂欲す。皆實の如く知りたまふ。或は衆生有つて、所作は微小にして樂欲廣大なり。或は衆生あり、所作は廣大にして樂欲微小なり。或は衆生有つて初め因中に於ては、樂欲微小にして果中に至つて樂欲廣大なり。或は因中に有つて樂欲廣大にして果中至つて樂欲微小なり。是の如く種種なれども皆實の如く知りたまふ。或は衆生有つて邪見等を樂ひ、因中は不定にして當に決定を成ずべし。或は樂欲有つて正中は不定にして當に決定を成ずべし。或は樂欲有つて正因は決定にして當に解脫を得べし。彼彼の差別、如來は悉知したまふ。或は樂欲有つて當に欲界を超ゆべし。或は樂欲有つて色界を超ゆべし。或は樂欲有つて當に三界を超ゆべし。是の如く一一如來は悉く知りたまへり。或は樂欲有つて日日に減少し、後に當に漸く增勝廣大なることを得べし。或は樂欲有つて最勝廣大にして後漸く減少すれば不可意を得。是の如く種種なれども、皆實の如く知りたまふ。或は樂欲有つて種種の生を受け、種種の色を得、種種

の因縁、種種の事相種種の異熟、無量差別なれども皆實の如く知りたまふ、云何んが知りたまふ、善男子此中の過去の行業誓願は善根を因とし、不善を遠離し未來に得果す。若し過去の行業誓願有つて不善根を以て其の因とし、善根を遠離して未來に得果す。是の如く種種なれども如來は一一皆實の如く知りたまふ。

復次に若しは〔三二〕行願未來に漸く滅ずるあり、若しは行願未來に漸く增すあり、若し行願現在に漸く滅じ未來に漸く增すあり、若し行願現在に漸く增し未來に漸く滅ずるあり、若し行願現在未來皆漸く減少するあり、若し行願現在未來皆漸く增長するあり、是の如く種種なれども、皆實の如く知りたまふ。

復次に若し行願現在は小因にして、來世は廣大なるあり、或は現在は廣大にして未來は微小なり。或は初起は微細にして、後漸く增勝なり。或は初は廣大にして後漸く微細なり。是の如く種種なれども、皆實の如く知りたまふ。

復次に行願有りて當に聲聞を得べし。若し行願有つて當に緣覺を得べし。若し行願有つて當に成佛の因なるべし。皆實の如く知りたまふ。

復次に或は行願あり、因は苦、果は樂なり。或は行願あり、因は樂にして果は苦なり。或は行願あり、因果倶に苦なり。或は行願あり、因果倶に樂なり。皆實の如く知りたまふ。善男子、是の如く過去現在未來の種種の行業所感異熟因果相順すること、猶ほ影響の如し。如來は一一皆實の如く知りたまふ。是の如く知り已つて其の所應に隨つて爲めに說法す。是を如來第二正覺力甚深事業と爲す。爾の時に世尊、重ねて此の義を宣べんと欲して、偈を說いて言く、

『如來善巧の智は、　衆生の〔三三〕業果を知つて、　三世悉く遺なし、　智眼皆著なし、　善因は當に樂を得べし。　異熟は人天に處す。　惡は是れ苦を感ずる因なり。　如來は悉く知見したま

【三二】行願。一切衆生に利益を與へ安樂を得せしめんとする願心をいふ。

【三三】業果。身口意の三業によつて感得する果報。

復次に若し人ありて如來も亦三昧[一八]三摩呬多に任せざることありといはゞ、是の處あることなし。若し如來は常に三昧等引の功德に在りと言はゞ斯れ是の處あり。

復次に若し人あつて、一切如來は虛妄及び誤失ありと言はゞ、是の處あることなし。若し如來虛妄なく亦誤失なしと言はゞ斯れ是の處あり。

復次に若し人如來は作業に錯誤ありと言はゞ、是の處あることなし。若し如來の諸の所作業は錯誤なしといはゞ是の處あり。善男子、是の如く等を以て說く、如來の處非處を知るに於て無量門ありて言の及ぶ所にあらず。實諦の如く變異あることなし。此は是れ如來第一正覺[一九]事業なり。

爾の時に世尊、重ねて此の義を宣べんと欲して偈を說いて言さく、

『[二〇]大地をば行ぜしむべく、虛空をも搖動すべくとも　如來は終に　非處を以て處と說かず。
虛空をば身と爲し、士夫五色に同ずべくとも、　如來は終に非處を以て　處と爲すと說きたまはず、　一切處の差別　上中下不同なれども、　如來は已に　決定して別異なしと宣說したまへり。　一切非處の別、　上中下不同なれども　如來は已に　決定して非處と爲すと宣說したまへり、　若しは處若しは非處、　如來は實の如く知りたまへり、　衆生の樂欲に隨つて　具足して宣說したまへり、　沙門婆羅門は、　處と非處とを知らず、　虛妄に諸境に馳す。　佛智は知らざることなし。　衆生は種種に執して非處に解脫を求む。　具に佛の所尊を得、　爲に眞實處と說けども、　彼れを執すれば法器に非ず。　故に佛は衆生を捨つ、　機熟して解脫する時、　復當に爲に宣說すべし。　此を佛第一の　最勝事業門と爲す。
諸の過非を遠離し、　能く衆生の苦を脫す。　是の處非處の法は、　無量にして邊あることなし、　屈し難く摧けざることなし。　斯を大仙力と名づく。』

復次に、善男子、如來は過去世現在未來に於て、所作の行業、誓願不同にして、種種の處所種種

【一八】三摩呬多。等引と譯す散亂の心を統制すること。

【一九】事業の下一本には、正覺力甚深事業となる。

【二〇】大地行ずとは、大地が震動すること。

復次に若し〔一四〕斯陀含にして、第三生を受くといはゞ、是の處あることなし。若し斯陀含にして第三生なく、一たび人天に生じて、能く苦際を盡すと云はゞ斯れ是の處あり。

復次に若しは〔一五〕阿那含にして欲界に還生すといはゞ、是の處あることなし。若し阿那含欲界に生ぜず、能く苦際を盡し涅槃を得といはゞ斯れ是の處あり。

復次に〔一六〕阿羅漢生死の身を受くといはゞ、是の處あることなし。若し阿羅漢生死を受けず涅槃に入るといはゞ是の處あり。

復次に若し人ありて、佛を除いて、大師、更にあり聖人は佛を超過すと言はゞ、是の處あることなし。若し唯佛は是れ天人の師なり、更に過ぎたる者なしと言はゞ、斯に是の處あり。

復次に人あり、無生忍を得て退轉ありと言はゞ是の處あることなし。若し無生を得、退轉せずといはゞ斯れ是の處あり。

復次に若し人あり菩提場に坐して正覺を成ぜずと言はゞ是の處あることなし。若し道場に坐して決して正覺を成ずといはゞ斯れ是の處あり。

復次に若し人あり、諸佛猶煩惱の習氣ありといはゞ是の處あることなし。若し諸佛は煩惱の習無しといはゞ斯れ是の處あり。

復次に人あり一切如來の智に障礙ありといはゞ是の處あることなし。若し如來の智障礙なしといはゞ斯れ是の處あり。

復次に人あり如來〔一七〕頂相、能く見る者ありといはゞ是の處あることなし。若し如來能く頂を見るものなしといはゞ斯れ是の處なし。

復次に若し人あつて佛は威を加へず、能く如來の心の所住を知ると言はゞ是の處あることなし。若し佛方を加へて如來の心の所住の處を知るといはゞ、斯れ是の處あることなし。

【一四】斯陀含果。一來果といふ。欲界に九地の思惑ある中前六を斷じて餘の三の殘存せる場合にて、三品殘存せる爲に欲界人天の界に一度に受生するものなり。卽ち一生にして三生といふは不合理なり。

【一五】阿那含果は不來果又は不還果と譯す。欲界の煩惱を斷盡せるを以て再び欲界に生れることのないものなり。

【一六】阿羅漢。一切の煩惱を斷じて涅槃に入り再び三界に生じ來らないから、之を不生と譯するのである。故に阿羅漢が生死の身を受くとは不合理なりといふ意。

【一七】頂相。如來の三十二相の一、無見頂相とて、如來の頂上に肉髻あつて、何人も見ることは出來ない。

復次に若し諸の衆生有つて、多く悔心に住し心に安樂を得といはゞ是の處あることなし。若し心に悔なくして心に安樂を得といはゞ斯れ是の處あることなし。

復次に若しは女人をして轉輪王を得、四天下に王たらしめ、或は帝釋大梵天王を得て、成佛出現すといはゞ是の處あることなし。若し女人を捨てゝ男子の身を得、轉輪王と作り、四天下に王たり、或は帝釋大梵天王と作り、及び成佛すといはゞ斯れ是の處あり。

復次に若し諸の轉輪王、非法を以て治化すといはゞ是の處あることなし。若し轉輪王、正法を以て治化すと云はゞ斯れ是の處あり。

復次に若し諸の帝王貪猥驕奢にして能く國政を理むといはゞ、是の處あることなし。若し諸の帝王無貪簡易にして能く國政を理むといはゞ斯に是の處あり。若し諸の人王斷常の見を執して國政を理むといはゞ是の處あることなし。若し諸の人王、明に因果を信じ國政を乃ち理むといはゞ、斯れ是の處あることなし。若し人王心均平ならずして能く國政を治むといはゞ是の處あることなし。若し諸の人王無私平等にして能く國政を治めば斯れ是の處あることなし。

復次に[一〇]北拘盧洲に報身を捨して後、三惡道に墮すれば是の處あることなし。若し北洲に死して後天に生ずといはゞ、斯れ是の處あることなし。

復次に若し殺害を行じて長壽を得、乃至邪法を受行し聖道を得といはゞ是の處あることなし。若し殺生せずして壽命長を得、乃至正見にして正法を受行し、聖道を得といはゞ、斯れ是の處あり。

復次に[一一]阿羅漢向にして定んで果を得ずといはゞ是の處あることなし。若し[一二]阿羅漢向は定んで得果すといはゞ、斯れ是の處あり。

復次に[一三]須陀洹の人第八生を受くといはゞ是の處あることなし。若し須陀洹に第八生なしといはゞ斯に是の處あり。

【一〇】北拘盧洲。須彌山の四方に在る四大洲の一なり。

【一一】阿羅漢向。阿羅漢果に至る前階にて、色界無色界の一切修惑を斷ずる位をいふ。阿羅漢果は一切の見思の惑を斷盡した位。

【一二】阿羅漢向とは、阿羅漢果に(Arhat)至る前の段階なり。

【一三】須陀洹果。預流果といふ。三界の見惑を斷じて聖者の位に入るのである。預流果を得た人は欲界七大生を受けて阿羅漢と成ることになつて居る。今第八生といふは不合理なりといふ意。

巻の第五

入如來不思議甚深事業品第五之一

爾の時に、世尊、復、文殊師利童子に告げて言さく、善男子、當に云何んが如來應正等覺現證甚深の事業を知りたまふ。善男子、如來は[一]三十二種の正覺甚深の事業あり。何等を名づけて三十二種と爲す。善男子如來は。[二]處と非處とに於て實の如く而も知りたまふ。善男子云何んが處となし、云何なるか非處となすや。非處と言ふは謂く諸の衆生は方便あることなく、身口意業に不善の行を造る。若し[三]可意愛樂を得、心に隨つて、遂に果を求めば是の處あることなし。言ふ所の處とは若し諸の衆生方便を具有して、身口意に諸の善行を造り、可意愛樂を獲得して、心に隨つて遂に果を求めば斯れ是の處なり。

復次に善男子、非處と言ふは、若し諸の衆生方便あることなく、心に慳悋を懷いて大富貴を得。淨戒を破して人天の身を得、常に瞋恚有つて、端正の報を獲、身心懈怠にして智慧を得。散亂の人能く解脱を得、惡慧の衆生能く習氣と諸の煩惱を斷ずといはゞ、是の處あることなし。若し諸の衆生具に方便有つて、布施を修行して大富貴を得、淨戒を護持して人天に生ずることを得、常に忍辱を修し、端正報を得、精進を勤行して智慧を獲得し、心散亂せずして正解脱を得、善く智慧を修し能く[四]習氣と諸の煩惱を斷ずといはゞ斯に是の處あり。

復次に、[五]五逆罪を作りて心安樂を得と云はゞ、是の處あることなし。淨く[六]禁戒を持して心に安樂を得と云はゞ斯れ是の處あり。

復次に、若し衆生あつて、[七]有見に執著して順忍を得といはゞ、是の處あることなし。[八]修空を愛樂して[九]隨順忍を得と云はゞ斯れ是の處あり。

【一】三十二種の正覺甚深の事業とは以下如來は三十二種の甚深の事業を實行して衆生教化の實をあげることを説く。
【二】處とは、道理に契ふことにて非處とは道理に反すること。
【三】可意愛樂。已の心に適つたことを欲し求めること。
【四】習氣。煩惱の種子をいふ。
【五】五逆罪。父を殺し母を殺し、阿羅漢を殺し佛身より血を出し、和合僧を破る大罪。
【六】禁戒。佛の禁制せられたる種々の戒律。
【七】有見。人體は勿論一切諸物を實有と執着する邪見にて常見のことなり。
【八】修空とは、人體は勿論一切諸物皆悉く空なりと観ずることなり。
【九】順忍。忍とは眞理に隨順し一致すること。

何を以ての故に因不斷の故に、如來此の衆會の中に於て、是の大悲深法門を說く時、一恒河沙數の衆生あつて阿耨多羅三藐三菩提心を發しき。二恒河沙菩薩は隨順忍を得、三恒河沙菩薩は如來十六大悲及び一切佛灌頂法忍を得たり。爾の時に一切の大衆、此の法門を聞き、踊躍歡喜清涼悅澤し身心を傾竭して合掌して佛に向て言さく、善い哉如來、善い哉善逝、快く斯の義を說きたまふ、即ち人天種々供具を以て供養を申ぶ。或は種々の妙寶瓔珞を以てし、或は種々上妙衣服を以てし、或は種々珍膳飲食を以てし、或は法服幢幡傘蓋を以てす。是の如く等の種々の供具を持ち恭敬尊重して佛を供養したてまつる。

と八萬四千劫なり。相好の身を隱して、世に能く視るものなし。八萬四千劫を過ぎ已つて彼の一衆生非想に住する者は方に人中大豪貴の家に生れて、年始めて八歳、時に彼の如來三昧より起つて童子の家に至り、相好の身を現じて童子の前に住したまふ。唯だ此の童子及び萬二千の天子、應に調伏すべき者は如來を見ることを得、餘は能く覩ることなし。時に彼の如來三昧より起ちて童子の爲に大乘を發起し、復爲に[二六]五欲の過患を演說して之を告げて言く、善男子、五欲の過惡をば甚だ怖畏すべし。譬へば高大の五聚の毒蛇の如し。隨一の毒蛇卽便ち人を害す。況んや五聚に於てをや、亦積集せる五聚の毒藥の如きは、若し少分を嘗むるも便ち能く人を害す。況んや五聚を食するをや、是の故に汝應に貪著を生ずる勿れ。爾の時に童子、是の語を聞き已つて、其の舍宅資生の具、若しは男、若しは女、一切所有、皆毒蛇の如しと觀じて深く厭離を生じ、便ち阿耨多羅三藐三菩提に於て深重の心を發し[二七]不退轉を得。佛、童子の身心證淨にして衆善を具足するを見て、便ち授記を與へて諸の天子に告げて言さく、今此の童子七十二阿僧祇劫を過ぎて、當に阿耨多羅三藐三菩提を得べし、最勝寶如來應正等覺と名づけ世に出現したまふ。佛[二八]授記したまふ時、餘人は聞かず。唯此の童子及び萬二千の天子のみ法器に任ずるに堪へ、皆悉く聞くことを得たり。時に諸の天子皆阿耨多羅三藐三菩提心を發して、是の願を作して言く、彼の最勝寶如來、若し成佛したまふ時は、我等當に彼の佛國土に生ずべし。時に栴檀舍如來、諸の天子に當に往生することを得べしと告ぐ。彼の最勝寶如來皆當に汝がために阿耨多羅三藐三菩提の記を授けたまふ。爾の時に栴檀舍如來、彼の菩薩の與に記別（莂）を授け已つて、然して後究竟じて涅槃に入りたまふ。一切人天舍利を供養す。善男子、是の義を以ての故に、一切如來は大悲深重にして具足圓滿す。諸の聲聞緣覺の境界に非ず。善男子、是の如くの法門は能く汝等をして佛種を斷ぜざらしむ。若し衆生あつて此の法門を聞き、乃至一字一句一偈を受持し讀誦し書寫し解說せん。所得の善根未だ涅槃に入らず、相續して斷ぜず。

【二六】五欲。五官の對象となる色聲香味觸の五種の欲望なり。

【二七】不退轉。學習すべき法門を精勤して懈怠せざること。

【二八】授記。記莂を授けることにて成佛の豫言をすることなり。

岸に至るは是れ佛の大悲なり。是の故に當に知るべし、如來の大悲を最も尊勝となす。諸の衆生を調伏せんと欲せんが爲の故に或は一劫を經、或は復百劫、或は百千劫、久しく世に住して究竟の[20]無餘涅槃に入りたまはず。

善男子、乃往久遠に阿僧祇劫を過ぎ、爾の時に佛有り世に出現したまふ。栴檀舍多陀阿伽度阿羅訶三藐三佛陀と名づく。世界を有香と名づけ、劫を最勝香と名づく。佛の壽十六八萬四千歲、聲聞の弟子其數十六八萬四千の集會する所なり。彼の如來の身の諸の毛孔の中より恒に妙香を流し、遍く三千大千世界に滿ちて、一切普く薰じて諸の穢惡なし。垣墻舍宅樹木山河、種々色相皆香ならざることなし。故に此の世界を名づけて有香となす。其の中の衆生斯の香に遇はゞ、三業清淨にして衆善を具足し、家を捨て道を修し深く[21]四禪に入る。此の世界の中に一萬の如來相ひ續いて出現したまふ、皆同一號にして栴檀舍と名づく。是の故に此の劫を最勝香と名づく。栴檀舍如來、佛事を作し已つて涅槃したまふ時至る。復一切人天の淨妙天眼を出過し、遍く衆生を觀じて、何等の衆生か餘佛の調伏なりや、何等の衆生か我れ當に調伏すべしやと、乃し[22]非想非々想天を見たまふに一衆生あり、過去世の中に曾て善根を種え、大乘を樂聞すべき心清淨なることを得、我れ應に調伏すべし。而るに此の衆生尙ほ八萬四千劫を經て彼の天の中に住す。是を過ぎて已後方に天より下つて人間に生じ未だ五欲を知らず、大乘を讚することを聞き便ち阿耨多羅三藐三菩提心を發し、大菩提に於て永く退轉せず。爾の時、栴檀舍如來、方便大悲を以て遍く觀察し已つて諸の比丘に告げたまふ。我れ今夜に於て當に涅槃に入るべし。便ち大悲憐愍三昧に入りたまふ。三昧に入り已つて涅槃を示現したまふ。佛滅度の後[23]舍利を分布して十方の人天を恭敬供養す。[24]正法世に住すること八萬四千歲、無量の衆生を利益安樂したまふ。純ら正法を以て一味に人を化し、復[25]像法の世に流行することなし。彼の佛世尊涅槃を示すと雖も、其の大悲憐愍三昧神通力を以て持ちたまへり。復世に住するこ

【二〇】無餘涅槃。有餘涅槃に對す。有餘涅槃とは釋尊が成道以來肉體を存して說法敎化せられたるが如く、悟を開いても猶ほ有漏の肉體の存在することを有餘涅槃といひ、有漏の肉體と智を滅したのを無餘涅槃といふ。

【二一】四禪とは、四禪定のことにて、初禪と二禪と三禪と四禪なり是は色界天に生ずるために修する禪定なり。

【二二】非想非々想天とは、三界の中の無色界の最上天なり。

【二三】舍利。佛の身骨なり。

【二四】正法。佛の說かれた正しき法儀が行はれる時を正法時といふ。

【二五】像法。正しき法儀行はれず從つて之を證せんとする者のなきに至るを像法時といふ。

めたまへ。

善男子、尸棄梵王、偈を說いて請じ已んぬ、我れ爾の時に於て、梵王の請を受けて、如來遊戲大悲を捨てず。波羅奈城仙人、隨處施鹿林中に於て、最初に無上法輪を轉ず。若しは沙門、若しは婆羅門、若しは天魔梵一切世間に轉んずる能はざる所に法輪を轉じたまふ時、其の無常の聲普く三千大千世界に聞ゆ。時に[一六]阿若憍陳如、最初に法を聞て悟解し得果せり。我れ爾の時に於て、偈を說いて言く、

『不可說甚深なり、　勝義は文字なし、　我れ說く果なきに非ず、　陳如初めて悟解す。』

善男子、我、法輪を轉んずる時、彼無量無數の衆生あり、皆如來の[一七]遊戲大悲に於て調伏することを得、復、無量無數の衆生ありて、菩提心を發したまふ。是の故に如來は諸の衆生に於て大悲隨轉したまふ。

善男子、是を如來具足圓滿の十六大悲と爲す。常に其の中に住して功用を假らず任運に恒に轉じて、一衆生の爲に恒沙劫を經、大地獄に於て具に衆苦を受く。而も此の衆生或は調伏するあり、或は未だ[一八]調伏せざれば、要らず調伏せしめて如來の正法の中に置く。一衆生の爲にするが如く、一切衆生の爲にも悉く亦是の如し。是の如く無量劫を經る中に、地獄の苦を受くるに疲厭あることなく、大悲の心も亦減少することなし。是の故に如來は諸の衆生に於て大悲深重不可思議なり。二乘の悲は、皮膚を割くが如く、菩薩の悲心は脂肉を割くが如く、如來の大悲は深く骨髓に徹す。又復佛智に隨順するは是聲聞の悲、諸の衆生を勸めて菩提心を發せしむるは是れ菩薩の悲、[一九]當佛の記を授くるは是れ如來の悲なり。慈心に因つて起るは是れ聲聞の悲なり。化衆生に因るは是れ菩薩の悲なり。究竟して衆生を成熟するに因るは是佛の大悲なり。生死を斷ぜんと求むるは是れ聲聞の悲なり。衆生を運度して彼岸に至るは是れ菩薩の悲なり。普く能く一切の生死一切の煩惱を度脫して彼

【一六】阿若憍陳如。釋迦成道後最初に說法せられしときに敎化せられた五人の比丘の中の一人。

【一七】遊戲大悲とは、如來の大悲を以て衆生救濟することは全く遊戲神變と稱して恰も俳優者が種々に演伎するが如きものなり。

【一八】調伏とは、降伏ともいひ、度し難き人を强いて度すること。

【一九】當佛とは、未來に當に成佛すべしと豫言すること。

一切法の如く一切衆生も亦復是の如し。諸の衆生一切の佛刹の如きも、亦復是の如し。一切刹の如く、大般涅槃も亦復是の如し。是の故に我れ一切諸法卽ち涅槃の相と說く。此を究竟實際の相となす。無對の相は無始淸淨本來無垢にして、本より已來處所あることなし。如來も是の如し。是の如く等の種々の色相に於て無色相を見る。故に諸法に於て現等正覺したまふ。等正覺し已つて遍く十方を觀じ、諸の衆生の不淸淨に住し、垢穢執著處所を起すを見て、便ち衆生に於て普く皆遊戲大悲を發起し善方便を以て法輪を轉ぜんと欲し、而して梵王の未來の誠請を念じたまふ。

爾の時に〔一〇〕尸棄大梵天王、佛の所念を知つて梵眷屬八十億天と前後圍遶して梵宮に於て沒し如來の前に現じ、頂に佛足を禮して佛に白して言さく、惟願くは世尊法輪を轉じたまへ。惟願くは善逝法輪を轉じたまへ。卽ち偈を說いて言く、

『如來の所證は最も寂靜なり、淸淨無垢にして妙なる光明あり、宣說すべからず名言なし、佛の淨智慧は方に窮究したまへり、此が爲に多億劫を經、難行苦行を經ずといふことなし、無始の癡愛我・隨眠　顚倒の衆生を覺悟せしめたまへ、　此の會の衆生は善利多し、　昔佛所に於て已に〔一一〕因を修す。　唯願くは廣く最上の法を開き、　最勝輪を轉じて〔一二〕含識を利したまへ。　彼れ當に最上の法を覺悟して　魔軍を摧破して餘あることなかるべし。　邪徑の諸の衆生を引導して　如來眞正道に住せしめたまへ。　如來の大悲は最上となす。　一切を利して不思議を爲す。　我今天人の師を勸請す。　最上微妙の法を轉じたまへ、〔一三〕拘留孫佛の所轉の如く、　亦〔一四〕拘那含牟尼、〔一五〕迦葉善逝轉法輪の如く、今世尊に是の如く轉じたまへと請ひたてまつる。　譬へば大雲の甘露を降して　藥草卉木等皆發生するが如く、　願くは佛大慈悲の雲を興し、　遍く難思妙法の雨を降したまへ。　如來初生して師子吼して、　誓て普く諸の有情を解脫せしめたまふ。　願くは法水を澍いで其の時に應じて、　以て人天の深き渇仰を滿ぜし

【一〇】尸棄大梵天王とは、過去七佛の中の第二の佛なり。

【一一】佛果に對して因を修すとは、因といふ。卽ち佛道修行をいふ。

【一二】含識とは、人類のこと。

【一三】拘留孫佛。過去七佛の中の第四佛なり。

【一四】拘那含牟尼。過去七佛中の第五佛なり。

【一五】迦葉善逝。過去七佛の中の第六の佛にて、釋尊の直ぐ前に出世せし佛。

し無明起らざれば卽ち十二有支生ぜず。若し[九]十二有支生ぜざれば卽ち是れ無生なり。若し無生なれば卽ち是れ解脫なり。若し解脫せば卽ち是れ了義なり。了義は卽ち是れ第一義諦なり。云何んが名づけて第一義諦となす。所謂無我なり。若し無我は卽不可說なり。若し不可說は卽ち是れ因緣和合の義なり。是の如く因緣和合の義は卽ち一切法義なり。一切法義は卽ち如來の義なり。是の義を以ての故に、若し因緣和合の法を見れば卽ち諸法を見る。若し諸法を見れば卽ち如來を見るなり。是の如くの眞見は第一義の中に審諦に觀察して少分見ず。云何んが少分なるや、所謂觀察なり。觀察の心に隨つて其の眞實を見るを眞實見と名づく。是の如くして諸法の平等を知る。是の故に如來現等正覺は、此れは之れ無漏無煩惱蘊なり。凡夫衆生は覺せず知せず、我れ當に覺せしむべし。是の故に如來は諸の衆生に於て大悲隨轉したまふ。

　復次に善男子、菩提は淸淨無垢にして處所あることなし。此の中に何れの法を名づけて淸淨となすや。云何んが無垢、云何んが復無有處所と名づくるや。いはゆる空は卽ち淸淨なり。無相は卽ち是れ無垢なり。無願は卽ち無處所なり。無生は卽ち是れ淸淨なり。無行は卽ち是れ無垢たり、無起は卽ち無處所なり。諸法の本性は卽ち是れ淸淨にして、窮究淸淨は卽ち是れ無垢なり。本性光明は卽ち無處所なり。體不可說は卽ち是れ淸淨なり。體無分別は卽ち是れ無垢なり、離言寂默は卽ち無處所なり。眞諦淸淨法性無垢眞實の際は卽ち無處所なり。蘊の淸淨を知り、界の本性を知るは卽ち是れ無垢なり。遠離に入ることを知れば卽ち處所なし。過去の盡智淸淨を知り、未來の無生の智を知るは卽ち是れ無垢なり。現在の法界住處を知るは卽ち處所なし。是の如く等の淸淨無垢無處所の義あるは皆悉く二所證の中に入る。所證と言ふは、卽ち是れ寂靜たり。寂靜は卽ち是れ寂滅なり、寂滅は卽ち是れ親證なり。親證は卽ち是れ無相なり。無相は卽ち勝義諦なり。勝義諦は卽ち虛空相なり。如虛空相は則ち菩提なり。相も亦復是の如し。菩提の相の如く一切法の相も亦復是の如し。

【九】十二有支とは、衆生が生死界に輪廻轉生する因果を說明せるものにして、詳しくは後に出づ。

現前に成等正覺す。性相に稱うて等正覺するが故に、現在の如の如く過去未來も亦復是の如し。前際は生ぜず、後際は未だ至らず中際は寂靜なり。是の如く平等なるは則ち是れ菩提眞實の所證なり。是の如く所證の一法は一切法に異らず。一切法は一法に異らず。是の如くの中を以て若しは一若しは二若しは復多法俱に不可得なり。是の如く所證は凡夫衆生は覺せず知らず。我當に覺せしむ。是の故に如來は諸の衆生に於て大悲隨轉したまふ。

復次に善男子、菩提は無相にして善く諸相に入る。云何んが相となし、云何んが無相なるや。此の中の相とは謂く[四]始て一切善法を起す。無相と言ふは謂く一切の法皆不可得なり。又復、相とは是れ無作の心の所住の處なり。無相と言ふは卽ち是れ無相三昧解脫なり。又復、相とは心心所の法、稱量し觀察する一切諸法なり。無相と言ふは稱量を過ぎて識に隨つて業を作す。又復、相とは[五]有爲法に於て審細に觀察す。無相と言ふは無爲法に於て現證相應す。是の如く甚深の相無相門は凡夫は覺せず、我れ當に覺せしむべし。是の故に如來は諸の衆生に於て大悲隨轉したまふ。

復次に善男子、菩提は[六]無漏無煩惱蘊なり。此の中云何んが漏無漏なる。漏に四種あり。謂く欲漏と有漏と無明漏と見漏となり。此の四漏に於て皆悉く遠離するが故に無漏と名づく。云何んが無煩惱蘊と爲す。四種の煩惱蘊を遠離するが故に、所謂欲蘊を遠離し、邪見蘊を遠離し、我見蘊を遠離し、[七]戒禁取蘊を遠離す。此の四煩惱は皆無明黑暗の爲に覆はれて盲ひて智眼なく、欲貪渴愛して乾燋し積集し建立せしむるなり。故に名づけて蘊となす。如來は此の我見等の惑根本あることなく、本來清淨なりと知つて亦隨順して衆生の清淨を知る。若しは我清淨、若しは衆生清淨、二もなく二相もなし。此の無二の相は卽ち無生の義なり。此の無生の義は卽ち無滅の義なり。此の無生無滅の中に於ては[八]心意識等皆悉く轉ぜず。此の心意識不轉の處に分別を生ぜざれ。若し分別あれば卽ち生死の法生ず。若し分別無ければ卽ち解脫の法生ず。若し解脫の法生ずれば卽ち無明起らず。若

【四】一本には始めての後に如の字あり。

【五】有爲法。現に生滅するもの、生滅なき常住の法を無爲法といふ。

【六】漏。煩惱のことで、一、欲漏とは欲界の中で無明を除いた外の修惑をいふ。二、有漏とは色界・無色界の中の無明を除いた外の修惑をいふ。三、無明漏とは三界の中の無明をいふ。四、見漏とは三界の中の見惑なり。修惑とは迷事の惑といひ見惑は迷理の惑といふ。

【七】戒禁取蘊とは、誤つた修行によつて生天して樂を得んと欲すること、例へば牛戒と稱して牛糞を食し牛と同じく住居して之を以て生天の原因と量計し、或は斷食して身心を苦しめて之によつて生天受樂せんとするもの。

【八】心意識。ともに精神作用なれど心は集起、意を思量、識を了別といふ定義を使ふ。

名を以て說く。是の如くの名字一切の法に於て住處あることなし。何を以ての故に、一切の相に依つて假りに其の名相を立つれども本性は空なり。名は何に依てか立せん、如來は是の如く如實智を以て一切の法を知りたまへり。此れ云何んが知りたまふ、本より來、不生・不出・不起・不滅・無障・無礙・無相・無爲にして心意識を離れて名字あることなく音聲あることなし。是の如く知見して解脫を得たまふ。是の如くの解脫は不縛不解なり。何を以ての故に、性平等なるが故に、諸の凡夫は覺せず知せず、彼に於て實の如く知覺せしめんと欲す。是の故に如來は諸の衆生に於て大悲隨轉したまふ。

復次に善男子、菩提と虛空とは平等平等なり。而も其の虛空は等もなく不等もなし。菩提も亦爾なり。等不等なし。何を以ての故に、諸法は如實にして生もなく滅もなし。故に一切の法にも等不等なし。如來は是の如く如實に等不等なきことを知見したまふ。故に諸法に於て等正覺を現ず。是の故に中に於て少法として等不等を說くことあることなし。一切法に於て實の如く而も知る。當に云何んが知るべき。一切の法、根本あることなく生なく滅なしと知る。一切諸法は本無にして今有り已に有りて還て無し。彼れ生者なければ亦滅者なし。是の如く生滅は因緣より生じ因緣より轉ず。此の中には少法として轉ずべきことあることなし。如來は生死長遠危險の道を斷ぜんが爲の故に。故に是の如く如實の法を說く。一切衆生は覺せず知せず、生死の道を斷ず、亦復法性平等及び不平等を知らず。彼を如實に知覺せしめんと欲す。是の故に如來は諸の衆生に於て大悲隨轉したまふ。

復次に善男子、菩提の所證は卽ち是れ如如なり。菩提の如の如く色も亦是の如し。第一義に於ては不卽不離なり。菩提の如の如く、受想行識の如に於ても亦不卽不離なり。菩提の[三]如の如く、地界の如、水火風界の如に於ても亦不卽不離なり、菩提の如の如く、眼界色界眼識界の如に於ても不卽不離なり。菩提の如の如く耳界・聲界・耳識界の如、乃至意界・法界・意識界の如に於ても不卽不離なり。是の如く諸蘊及び界處等、一切諸法如を離れず、如來は如に稱うて一切法を知れり。是故に

【三】如如。眞如のことにして是より以下、五蘊六根等身心一切諸法はそのまゝ眞如實相のものであると說くのである。

が故に無依處なり。耳は不可得なるが故に不可取なり、聲は不可得なるが故に無依處なり。鼻は不可得なるが故に不可取なり。香は不可[二]得なるが故に無依處なり。舌は不可得なるが故に不可取なり。味は不可得なるが故に無依處なり。身は不可得なるが故に不可取なり。觸は不可得なるが故に無依處なり。意は不可得なるが故に不可取なり。法は不可得なるが故に無依處なり。如來は是の如く取もなく依もなきが故に菩提現正等覺に於て眼に取色なく依處なきに由るが故に、識も所依なし、耳も取なく聲も依處なきに由るが故に識も所依なし。鼻に取なく香に依處なきに由るが故に識も所依なし。舌に取なく味に依處なきに由るが故に識も所依なし。身に取なく觸に依處なきに由るが故に、識に所依なし。意も取法なく依處なきに由るが故に識も所依なし。所依なきに由るが故に、識も住處なし。一切衆生は虛妄にして橫に識に住處ありと執す。云何んが衆生心の住處を識るや。此に四種あり。いはゆる色蘊受想行蘊なり。卽ち是れ衆生の識の住處なり。如來は衆生の住處卽ち無住處なることを了知して、無住の際を窮めたまふ。一切衆生は覺せず知せず、覺知せしめんと欲す。是の故に如來は諸の衆生に於て大悲隨轉したまふ。

　復次に、善男子、菩提と言ふは、體性空なるに名づく、體空に由るが故に則ち菩提空なり。體空に由るが故に一切法空なり。如來は是の如く其の體空の如く一切の法に於て正等覺を現ず。是の義を以ての故に、空を以て覺せずして而も空を覺る。此れ則ち一三菩提智と名づく。謂く若しくは空、若しくは菩提少分も二なし。空と菩提と分別すべからず。一切の法も亦復是の如し。無二にして二相なし。審諦に觀察するに、一切諸法は無名無相なり、能行あることなく、亦所行なく、趣向する所なく、無言無說無執無取なり。是を名づけて空と爲す。第一義の中には空も亦得叵し。但だ言有つて如と說き虛空と說く。但空の言あれども空は言の境に非ず。是の如く空を說いて不可說と名づく。是を名づけて一切法門に入ると爲す。謂く一切の法の名字あることなし。無名の中に於て强て

【二】得を一本には取となる。

が故に。不可壞なり。實際は是れ所證なり。不可動に由るが故に、不可壞なり。空門は是れ所證なり。不可得に由るが故に不可壞なり。無相は是れ所證を無分別に由るが故に不可壞なり。無願は是れ所證なり不可求に由るが故に。不可壞なり。無衆生は是れ所證なり。無本性に由るが故に、虛空は是れ所證なり、不可取に由るが故に不可壞なり。無生は是れ所證なり。無滅有ることなきに由るが故に不可壞なり。無爲は是れ所證なり、諸行無きに由るが故に不可壞なり、菩提は是れ所證なり。寂靜と親近寂靜とに由るが故に不可壞なり。涅槃は是れ所證なり。本無生に由るが故に不可壞なり。是の如く所證の跡及び不可壞は衆生は知らず、覺悟せしめんと欲す。是の故に如來は諸の衆生に於て大悲隨轉したまふ。

復次に、善男子、菩提は身を以て得べからず、心を以て得べからず、何を以ての故に、身は無知なるが故に、心は幻の如くなるが故に、是の如く正知するを菩提を得と名づく。世諦に隨順して菩提ありと說く。當に知るべし、菩提の體は不可得なり。能說の者なし。何んが不可得なるや、若しは身、若しは心、若しは理非理、若しは無、若しは有、若しは實、若しは虛、皆不可得なり。云何んが不可說なるや、一切諸法は種種の方便も能く此の菩提を顯說することなきが故に少分も法に住することあることなし。無住を以ての故に。是れ文字言說の境界に非ず。譬へば虛空の住處あることなく、宣說すべからざるが如く、菩提も亦爾なり。住も無く說も無し。如來は是の如く實の如く一切諸法を觀察したまふに皆不可說なり。何を以ての故に、一切の法の中に語言あることなし。諸の語言の中には亦法なきが故に。此の如くの妙法は一切衆生は覺せず知せず。覺知せしめんと欲す。是の故に、如來は諸の衆生に於て大悲隨轉したまふ。

復次に善男子、菩提は取るべからず、依處あることなし。云何んが不可取、云何んが無依處なるや。如來は實の如く法を知見したまふ。故に所謂眼は不可得なるが故に不可取なり。色不可得なる

舌識も不可得なるが故に無相となす。舌識も味に於て分別せざるが故に觀察なしと名づく。身識も不可得なるが故に名づけて無相となす。身識は觸に於て分別せざるが故に觀察なしと名づく。意識も不可得なるが故に名づけて無相となす。意識は法に於て分別せざるが故に觀察なしと名づく。是の如く無相にして觀察あることなし。是れ聖者の境なり。三界を出過するが故に。凡小の能く知る所に非ず。其をして實の如く知覺せしめんと欲せんがために。是の故に如來は諸の衆生に於て大悲隨轉したまふ。

復次に善男子、菩提は過去に非ず、現在に非ず、未來に非ざる故に、三際平等にして三輪を斷絶す。云何んが名づけて[一]三輪を斷絶すとなす。彼の過去に於て心起らざるが故に。彼未來に識行ぜざるが故に、此の現在に意作さゞるが故に、此の心と意と識とは住處あることなし。云何んが名づけて三際平等となす。過去の事は思量すべからず、未來の識は宣示すべからず。現在の意は說くべからず。故に是の如く甚深にして三際平等三輪清淨なり。衆生は知らざれば、其をして實の如く覺悟せしめんと欲する爲に、是の故に如來は諸の衆生に於て大悲隨轉したまふ。復次に、善男子、菩提は無身なり。菩提は無爲なり。云何んが無身なる、所謂眼識は知るべからざるが故に、是の如く耳・鼻・舌・身・意識も知るべからざるが故に。云何んが無爲なる、生もなく滅もなく亦住もなきが故に、故に無爲は三相を遠離すと說く。無爲の相の如く、有爲の相も亦復是の如し。何を以ての故に、一切諸法性は是の如くなるが故に、無性の性と此の性と無ならず。此の二の無二なるは是れ菩提の性なり。是の如く無身及び無爲の相は童蒙凡夫は覺せず知らず、知覺せしめんと欲す。是の故に如來は諸の衆生に於て大悲隨轉したまふ。

復次に、善男子、菩提は壞すべからず、所證の跡なし。云何んが所證及び不可壞なりや。所謂眞如は是れ所證の跡なり。住處なきに由るが故に、不可壞なり法界は是れ所證なり。種種なきに由る

【一】三輪。身と口と意の三業をいふ。

覺悟せしめんと欲せんが爲めに、是の故に如來普く衆生を緣じて大悲を起したまふ。

復た次に善男子、菩提は寂靜なり。親近寂靜なり。寂靜と言ふは、即ち是れ內に於て親近、寂靜は即ち是れ外に於てす。何を以ての故に。眼空なれば我も空、我所も亦空なり。性是の如くなるが故に、名づけて寂靜とす。耳も空・鼻も空・舌も空・身も空・意も空・我も空・我所も亦空なり。性是の如くなるが故に寂靜となす。眼空に由るが故に色境に行ぜず。是の故に名づけて親近寂靜と爲す。耳・鼻・舌・身・意・空なるに由るが故に、聲・香・味・觸・法境に行ぜず。是の故に名づけて親近寂靜と爲す。是の如くの寂靜親近、寂靜をば衆生は其をして知らしめんと欲することを知らず。是の故に、如來は諸の衆生に於て大悲隨轉したまふ。

復次に善男子、菩提の本性は淸淨光明なり、何を以ての故に、心の實性は本より淸淨なるが故に、云何んが淸淨なるや、性に合することなきが故に、猶し虛空の性淸淨なるが如し。故に亦虛空の相あることなきが如くなるが故に、亦虛空の性平等なるが如くなる故に、是の故に菩提を名づけて最極淸淨光明と爲す。此の淨光明は童蒙の凡夫覺知すること能はず。客塵煩惱に覆はるゝが故に、衆生をして實の如く覺悟せしめんと欲す。是の故に如來は諸の衆生に於て大悲隨轉したまふ。

復次に、善男子菩提は取捨なし、何を以ての故に、生死の岸を捨て、橫に瀑流を截つて彼岸に到るを名づけて取捨となす。如來は深く第一義諦に入つて、此の岸を見ず、彼岸を見ず、一切の法に彼此なきを以ての故に。是の故に、菩提は取捨あることなし。凡夫は取もなく、捨もなしと知らず、其をして知らしめんと欲す。是の故に、如來は諸の衆生に於て大悲隨轉したまふ。

復次に、善男子、菩提は無相にして亦觀察なし。云何んが無相なりや。所謂眼識不可得なるが故に、云何んが名づけて觀察あることなしとなすや。眼識は色に於て分別することなき故に。是の如く耳識も不可得なるが故に名づけて無相となす。鼻識も香に於て分別せず。故に無觀察と名づく。

卷の第四

入如來大悲不思議品第四

爾の時に、文殊師利童子、即ち座より起ち偏に右の肩を袒ぎ右の膝を地に著け、合掌恭敬して而して佛に白して言さく。世尊、唯願くは如來應正等覺、我が爲に宣說したまへ、諸佛如來は諸の衆生に於て大悲隨轉したまふ。世尊如來の大悲に幾種かありとなす。何を以て相と爲し、何を以て因となし何を以て緣となし、何を所住となす。善哉世尊、唯願くは我が爲に具足して宣說し及び如來の一切智智の現證の事業を說きたまへ。

爾の時に佛、文殊師利童子に告げて言さく、善哉善哉、善男子善能く是の如くの深義を諮問す。諦らかに聽き諦らかに聽き、善く之を思念せよ。吾れ當に汝が爲に諸佛如來の大悲海門の一滴の相を分別し解說せん。善男子、一切如來の諸の衆生に於ける所有の大悲は、不生不滅なり。何を以ての故に、如來の大悲は常恒不斷にして時として轉ぜざることなし。已に無量阿僧祇劫に於て諸の功德を積集し圓滿するが故に、去もなく來もなく常恒に一切衆生を捨てず皆悉く護念し攝受するが故に。如來の大悲は無量無邊にして窮盡あることなく、甚深甚深にして思議すべからず。堅固猛利にして、解し難く入り難し。是れ語言の能く宣說する所に非ず。何を以ての故に、善男子、譬へば如來大菩提を得たまふが如く、諸の衆生に於て大悲心を起したまふことも亦復是の如し。云何如來菩提を得たまへる。善男子、佛菩提を得たまふこと根本あることなく、住處あることなし。云何んが根本、云何んが住處なる。身見を根本とし、妄想を住處とし、而も身見と妄想と及與び菩提とは平等平等なるが故に、菩提は根本あることなく、住處あることなしと說く。此の義に依つて佛は菩提を得たまふ。一切衆生は覺せず知せず、根本あることなく、住處あることなし。其をして實の如く

常に六念を修し實の如く觀智せしむ。是を菩薩第三十の不共の事業と名づく。若し衆生、業煩惱の網に縈覆せらるを見ては、菩薩便ち現に業惑の網を裂き亦衆生をして生死の因を絕ち正法に安住せしむ。是を菩薩三十一の不共事業と名づく。若し衆生の諸の不善を具し善根を遠離するを見ては、菩薩便ち自ら諸惡を蠲除し、善く莊嚴を具し、復衆生をして善根を具足し不善を遠離せしむ。是を菩薩第三十二の不共事業と名づく。若し諸の菩薩、此の業に安住せば一切の善法恒に自ら增長し具足し圓滿すべし。

復た次に善男子、菩薩、復無量の事業あり、何を以ての故に、謂く衆生無量なれば衆生の煩惱も亦復是の如く無量無邊なり。菩薩は彼の一切衆生の煩惱の差別に隨つて亦無邊解脫法門を說く。善男子、假使ひ恒河沙數の世界の中に滿てる衆生の所有の行、或は聲聞の行、或は、緣覺の行、所有の事業は、此を菩薩の最初所發の菩提心に比するに、所有の事業は百分の一に及ばず、千分の一に及ばず。是の如く百千分俱胝分百俱胝分千俱胝分算分〔五五〕歌羅分數分喩分、〔五六〕優婆尼沙陀分皆一に及ばず。何を以ての故に、二乘は自ら煩惱を斷除せんが爲めなり。菩薩の事業は自身の爲めにせず、普く一切衆生の諸の煩惱を除斷せんが爲の故なり。是の故に菩薩所有の事業を、二乘に比するに最も殊勝と爲す。所得の功德無量無邊なり。何を以ての故に、凡夫衆生の所修の事業は皆一切の顚倒と相應し、二乘の所作は其の心狹劣なり。菩薩の事業は顚倒を遠離すること無量無邊なり。是の故に菩薩所得の功德は亦復是の如く無量無邊なり。是の義を以ての故に一切凡夫二乘に超過するなり。

爾の時に、文殊師利菩薩是の法を聞き已つて踊躍歡喜し、遍身怡暢にして、心清涼を得て是の言を作さく。希有なり世尊希有なり。世尊善能く甚深微妙の菩薩の種種の陀羅尼門大悲の門及與び不共事業の門を分別したまふ。我れ佛說を聞いて歡喜し頂受し如法に奉行すべし。

【五五】歌羅分。極少の分量なり。
【五六】優婆尼沙陀分。微細と譯す。

し衆生の剛强難化なるを見ては、自身を以て謙卑仁讓師長に承順して復、衆生をして、謙敬安住せしむべし。是を菩薩第二十の不共事業と名づく。若し衆生心に嫉妬を懷き修善の者に於て多く障礙を生ずるを見ては、便ち善根を以て自ら其身を嚴り、復衆生をして猜忌障礙の心を捨離し正法に安住せしむべし。是を菩薩第二十一の不共事業と名づく。若し衆生の貧窮困苦にして復法財なきを見ては、菩薩資生有つて無量の[五〇]七聖財を具することを示し、復衆生をして乏少なる所なく、聖財の中に住せしむべし。是を菩薩第二十二の不共事業と名づく。若し衆生の長く病苦に嬰へ[五一]四大の毒蛇互相に違反し身心を傷害するを見ては、菩薩卽ち無病の功德を以て自ら莊嚴し、復衆生をして諸の病惱なき、安樂の法の中に置く。是を菩薩第二十三の不共事業と名づく。若し衆生の愚癡無智にして智の光明に遠きを見ては、菩薩便ち智慧の光明を以て自ら其身を嚴り復衆生をして、無礙智慧の法の中に安住せしむべし。是を菩薩第二十四の不共事業と名づく。若し衆生の三界の穢惡深坑に樂著して[五二]五道に輪迴するを見ては、菩薩巧に能く自ら三界を出で復善巧を以て三界の道を出で諸の衆生を運ぶ。是を菩薩第二十五の不共事業と名づく。若し衆生の正道に違背して、邪徑を行ふを見ては、自ら正法に安んじ復衆生をして正法の中に住せしむべし。是を菩薩第二十六の不共事業と名づく。若し衆生の身命を愛著し、資養を嚴飾し、其の常存を冀ひ此の身の無常不淨なるを知らず。慚愧あることなく恩德を知らざるを見ては、菩薩便ち現に惡を厭ひ自身榮好を棄捨し、復衆生をして無常を觀察し厭離の想を生ぜしむべし。是を菩薩第二十七の不共事業と名づく。若し衆生佛法僧を[五三]遠ざくるを見ては菩薩自身に三寶の種を紹ぎ、復た衆生をして佛法僧を紹がしめ斷絶せざらしむ。是れを菩薩第二十八の不共事業と爲す。若し衆生の善法を退失するを見ては、菩薩便ち善法を以て身を嚴り復た衆生をして善法の中に住せしむ。是れを菩薩第二十九の不共事業と名づく。若し衆生の師長を遠離し[五四]六念を行ぜざるを見ては、菩薩則ち六念を以て自ら嚴り、復衆生をして

【五〇】七聖財。一、信財とは正法を信ずること。二、戒財とは戒律を持つこと。三、聞財とは正法を聞くこと。四、慚財とは自心に慚づこと。五、愧財とは人に愧づこと。六、捨財とは一切の煩惱を捨てること。七、慧財とは智慧を以て理を分別すること。

【五一】四大の毒蛇。地・水・火・風の四大によつて假りに組織された身體をいふ。

【五二】五道。地獄・餓鬼・畜生・人・天の五趣をいふ。

【五三】一本には遠離とあり。

【五四】六念。一、念佛とは大慈の權化たる佛に同じからんと念ずること。二、念法とは佛所說の法に大妙藥の功德あることを知り、法を證して衆生に施與せんと念ずること。三、念僧とは佛弟子たる僧の修行をなさんと念ずること。四、念戒とは佛の制定せる戒法を堅固に護持せんと念ずること。五、念施とは大阿育王の如く布施の行を爲して衆生を救濟せんと念ずること。六、念天とは三界の諸天に生れて快樂を受けんと念ずること。

名づく。若し衆生の瞋恨熾然にして諸惡を蘊積するを見ては、慈忍の力を以て自ら莊嚴し、復た衆生をして此の法に安住せしむ。是を菩薩第十の不共事業と名づく。若し衆生の身心懈怠にして精進を遠離するを見ては、自ら精進の甲冑を以て身を嚴り、復、衆生をして、懈怠の心を捨て、勤勇不惰ならしむ。是を菩薩の第十一不共の事業と名づく。若し衆生の散亂妄念を見ては、菩薩自ら三[四九]摩呬多に住して寂靜に觀察し、亦衆生をして亂を捨てゝ定に住せしむ。是を菩薩の第十二不共の事業と名づく。若し衆生の惡慧無智なるを見ては、便ち智慧を以て自ら莊嚴し、復、衆生をして惡慧を捨離し、般若波羅蜜多を具足せしむ。是を菩薩の第十三不共の事業と名づく。若し衆生の非理に作意して邪道を行ずるを見ては、菩薩、卽ち善巧方便を以て理の如く思惟し亦衆生をして非理を捨てゝ正道に安住せしむ。是を菩薩第十四不共の事業と名づく。若し衆生の昏亂無知にして煩惱に害せらるゝを見ては、菩薩自ら隨念に分別し種種に分別し微細に分別し一切の境界に住して、煩惱を遠離し、復衆生をして煩惱を斷除し正法の中に住せしむべし。是を菩薩第十五の不共事業と名づく。若し衆生の身見有見の牢獄に繫せらるゝを見ては智慧を以て、自身を了達し、見の爲に縛せられず復た衆生をして身見を遠離し有を計せず、正智慧に住せしむべし。是を菩薩第十六の不共事業と名づく。若し衆生の諸根縱蕩にして境界に馳流し制伏すること能はざるを見ては、而も自ら心を柔和にして放逸なく、復衆生をして律儀に安住し、善く根門を守り三業調順ならしむ。是を菩薩第十七の不共事業と名づく。若し衆生の無慚無愧にして恩報を知らず、善根を斷滅するを見ては、自ら莊嚴し恩を知り報を知り諸の善根を修し復た衆生の爲に說法し開示して慚愧を具へしめ能く恩德を知り善根を圓滿す。是を菩薩の十八不共事業と名づく。若し衆生の大瀑水波浪の爲に沒せられ、業に隨て漂溺して勉出すること能はざるを見ては、菩薩自ら現に瀑流を越渡して彼岸に到り、復衆生をして惡業を斷除し生死の流を越へ、涅槃の岸に到らしむ。是を菩薩第十九の不共事業と名づく。若

【四九】三摩呬多（samāhita）心を統一して散亂の心を去ること。

死の路を開く、當に爲に説法して[44]三惡を閉ぢ涅槃門に入れしむべし。善男子、是れを菩薩摩訶薩の十六種の大悲の心を起すと爲す。

爾の時に、世尊、復、文殊師利童子菩薩に告げて言さく、善男子、此の大悲門は卽ち是れ一切菩薩の母なり。菩薩、是の大悲の中に住して卽ち能く[45]三十二種の不共の事業を建立し、日夜に勤修すれば速に圓滿することを得。云何んが名づけて三十二種の不共の事業となす。いはゆる菩薩若し一切の愚癡重闇長眠大夜無智の衆生を見ては、便ち智慧を以て先づ自ら覺察し復た智慧を以て一切の愚癡の衆生を覺悟せしむ。是を菩薩第一の不共の事業と名づく。若し衆生二乘を愛樂し、其の心狹劣なるを見ては、菩薩便ち廣大の心を起して其をして大乘の法の中に安住せしむ。是を菩薩第二の不共事業と名づく。若し衆生非法を愛樂し三業を縱恣にし、無善の法を欲するを見ては、菩薩自ら正法の園苑に住して復た衆生をして正法の中に住せしむ。是を菩薩第三の不共事業と名づく。若し衆生の[46]邪命自活し、矯詐貪求するを見ては、先づ自身を以て[47]正命に住し復た衆生をして正命清淨法の中に安住せしむ。是を菩薩第四の不共事業と名づく。若し衆生、因果及び一切法を撥無して大邪見を起すを見ては、自ら正見に住し、復衆生をして無垢の正見の中に安住せしむ。是を菩薩第五の不共の事業と名づく。若し衆生の無知惡念にして煩惱を積集するを見ては、自ら智眼を以て正念に安心し復た衆生をして正念に住せしめ無知の闇を破し智慧の明を開かしむ。是を菩薩第六不共の事業と名づく。若し衆生正法を棄捨して、不正の法に住するを見ては、先づ自ら正法の中に安住し、復た衆生をして正法を解了せしむ、是を菩薩第七の不共事業と名づく。若し衆生、慳恡に纒はるゝを見ては、菩薩自身に無慳の心を起し、一切皆捨し、復衆生をして[48]捨行を勤修せしむ。是を菩薩第八不共事業と爲す。若し衆生淨戒を毀犯し表無表に於て遵行すること能はざるを見ては、便ち淨戒を以て其の身を莊嚴し、復衆生をして淨戒を堅持せしむ。是を菩薩第九不共の事業と

【四四】三惡。三惡趣にて卽ち地獄餓鬼畜生なり。

【四五】三十二種の不共事業。以下、菩薩は三十二種不共事業を日夜勤修して敎化の事業と爲すことを説く。

【四六】邪命。五邪命をいふ、一、詐現異相とは奇妙の相をして人を詐ること、二、自説功能とは自分の功を吹聽して利益を貪ること、三、占相吉凶は吉凶禍福を占相して利益を得ること、四、高聲現威とは大言壯語して人を欺くこと、五、説所得利動人心、人を煽動して利益を貪ること。

【四七】正命。正しき生活をなすこと。

【四八】捨行。心を平正ならしむること。

過慢と我慢と增上慢と卑慢と邪慢となり。云何んが慢とする。[四〇]爲く、下劣の衆生に於て、我れ彼れに勝れたりと計す、過慢と言ふは、己れと等しき者に於て我れ彼れに過ぎたりと言ふ。慢過慢とは、他の己れに勝れたるに於て我れ彼れに勝れたりと計す。我慢と言ふは色に於て我と計し、乃至識に於て亦我を計し、心をして高擧ならしむ。增上慢と言ふは、增上の聖法をば曾て未だ獲得せずして他人に向ては我れ聖法を得と說く。卑慢と言ふは彼の多分己に勝れたる人に於て我れ少しく劣ると言ふ。邪慢と言ふは、己れ邪見無德の中に於て己れ正しと謂ひ、翻つて他人を[四一]諂つて之を以て邪とたす。是の如く等の慢なり、我れ當に彼が爲に甚深の法を說いて其をして除斷して平等に住せしむべし。傷い哉衆生、邪道に趣向して聖道を遠離す。我れ當に爲に正道の法を說き邪徑を遠ざけしむべし。傷い哉衆生、恩愛の奴の爲めに其の驅策を受け、妻妾男女を以て杻械をなす。繫縛染著耽味捨離すること能はず、身口意をして自在を得ず、我れ當に彼れが爲に離貪の法を說き其の三業の動止をして羈すことなからしむべし。傷い哉衆生、更相に鬪諍し、瞋恚結恨互に怨讎と爲る。當に說法して其をして除斷せしむべし。傷い哉衆生、[四二]善知識を遠ざけ、惡友を隨逐して相捨離せず、指と甲と和合し相依して諸の惡業を造り暫くも休息なきが如し。當に爲に說法して惡友を捨て善知識に近づかしむべし。傷い哉衆生名利を貪求して厭足あることなし。海の呑流して之を得て彌々盛なるが如く、火の薪を益して無垢の實相智慧を遠離するが如し。我れ當に爲に眞實の法を說いて名利を斷じ淸淨の智を獲せしむべし。傷い哉衆生、無明黑闇無我法の中に橫に我見衆生壽命補特伽羅を起す。當に爲に說法して是の如くの種種の邪見を斷除し[四三]瞖膜を去け淨智の眼を開かしむべし。傷い哉衆生、生死の牢獄に輪廻し禁繫して五蘊の怨賊に殺害せらる。當に爲に說法して三界を出でしむべし。傷い哉衆生魔の羂索の爲に繫縛せられ、五欲の纏遶を出離することを得ず、我れ當に爲に超魔の法を說いて魔羂を絕ち、五欲の纏を斷ぜしむ。傷い哉、衆生、涅槃門を閉ぢて生

【三九】慢。是より慢を七種類說く。七慢とは慢・過慢・慢過慢・我慢・增上慢・卑慢・邪慢。

【四〇】爲を一本には謂くとあり。

【四一】諂を一本には銘とす。

【四二】善知識。自己に利益を與へる知人朋友、

【四三】瞖は一本には翳となる。

じ雜し、善男子、是の義を以ての故に、菩薩摩訶薩は諸の衆生の爲に、大悲心を起し勞謙忘倦すること、譬へば甘蔗及以び胡麻、物を以て之を壓せば、漿油便ち現ずるが如し。菩薩も亦爾なり。大悲深重にして復十六大悲の心を起し是の念を作して言く、[三三]傷い哉衆生、常に[三四]身見の爲に繫縛せられ、種種の邪見以て窟宅をなす。我れ當に彼れが爲に妙法を演說して悉く除斷せしむべし。傷い哉衆生、斷に於て常に於て執著し建立す、文殊師利、佛に白して言さく、世尊云何んが名づけて斷見常見となす。佛の言さく、善男子、斷見と言ふは、布施供養皆果報なく、善行惡行此世後世皆果あることなく、父母變化皆悉斷無なり。何を以ての故に、譬へば木を燒くに已に其灰と成れば終に生ずる理なきが如し。是を[三五]斷見と名づく。常見と言ふは、王は常に王たり、貴は常に貴たり、貧富男女端正醜陋、象馬等の類常に改易なし。何を以ての故に、譬へば種子の其の本類に隨つて各別に芽を生じ、終に雜亂なきが如しと。善男子、此等の衆生、是の如くの見を作して皆果報なしとす。菩薩彼が爲に大悲心を起し緣起の門を開示し演說し、其をして因緣果報を信入せしむ。菩薩復た念ずらく、傷い哉衆生[三六]四顚倒を起して無常を常と計し、無樂を樂と計し、無我を我と計し無淨を淨と計す。我れ當に彼れが爲に甚深の法を說いて顚倒を除かしむべし。傷い哉衆生、其れ我も無く、我所も無き所に於て[三七]我我所を計す。我れ當に爲に微妙の法を說いて其をして我我所の見を除斷せしめん。傷い哉衆生、諸の蓋障の爲に覆蔽せられ、貪箭心に中り、瞋火熾盛にして身心倶に焚き、昏沈睡眠に迷醉せられ、掉擧惡作纏遶して捨てず、甚深の法に於て常に疑惑を懷く、我れ當に爲に微妙の法を說いて其をして諸蓋の網を蘗裂せしむべし。傷い哉衆生、[三八]六處に戀著して眼に纔に色を見ては、色の名相に隨つて而も執著を生じ、耳に音聲を聞き、鼻に香臭を嗅ぎ、舌に滋味を嘗め、身に細滑に觸れ、意に法を分別して、皆名相に隨つて執著を生ず、我れ當に爲に深妙の法を說き、六處の空聚に、樂著せざらしむべし。傷い哉衆生、多く[三九]諸慢を起す。謂く、慢と、過慢と、及び慢

稱し、菩薩の生活行爲の規範を示せり。

【三〇】四攝。一、布施攝とは人に財又は法を施す。二、愛語攝とは人の性質に應じて親愛の心を以て引導敎化すること。三、利行攝とは善行を爲して人を利益して導くこと。四、同事攝とは敎化すべき人と共所作を同じくして導き救ふこと。

【三一】蘊界入。五蘊十八界十二處なり。

【三二】無生法忍。無生無滅の實相の理に住して動かざること。

【三三】傷い哉を一本には嗚呼苦哉となる、以下に出づるもの皆同じ。

【三四】身見。我見のことては、我體が常住なりと執する妄見なり。

【三五】斷見。斷滅の見にて人は死して斷滅するとなす妄見なり。

【三六】四顚倒。無常の理を常と執着し無樂なるを樂と執し無我の理を我と執着し無淨なるを淨と執着するが如き凡夫の迷見をいふ。

【三七】我我所。實我と實我の所有の義。

【三八】六處。眼耳鼻舌身意のこと。

す、此の最勝の陀羅尼を得れば、佛を見ること蓮の如く心著せず、三業恒に智慧に隨つて轉じ、動寂無礙にして衆生を利す。此の最勝陀羅尼を得れば、法を說くに常に諸佛の護を蒙り、大智能く衆生の主と作り、多劫に讃歎すれども窮むること能はず。』

爾の時に世尊、一切法自在王菩薩を稱讃して言く、善い哉善い哉、善男子、汝能く此の陀羅尼を讃說す。諸佛の說の如くして等しく異あることなし。我今隨喜す。善男子今此會中に六十億那由他の出家の菩薩及與び無數百千萬億の在家の菩薩あり、此の陀羅尼門を聞いて皆無生法忍[三二]を得、無量の天・龍・夜叉・乾闥婆・阿修羅・迦樓羅・緊那羅・摩睺羅伽・人・非人・比丘・比丘尼・優婆塞・優婆夷等皆、阿耨多羅三藐三菩提に於て不退轉を得たり。

大悲胎藏出生品第三

爾の時に、文殊師利菩薩摩訶薩、即ち座より起ちて、偏に右の肩を袒ぎ、右の膝を地に著け佛の爲に禮を作し、合掌恭敬して佛に白して言さく、世尊佛の所說の如く、心と及び虛空と陀羅尼と菩提とは無二無別なり。皆大悲を以て其の根となす。而も此の大悲は復、何の法を以て根本と爲す。佛、文殊師利菩薩に告げて言く。善い哉善い哉善男子、快く斯の問を發せり。多の衆生を利樂せんと欲せん爲の故に、諦に聽け諦に聽け、善く之を思念せよ、吾れ當に汝が爲に分別し解說すべし。善男子、此の大悲の根は、復た衆生の受苦を以て本と爲す。

文殊師利、復た佛に白して言く、世尊衆生の苦を受くる復何れの法を以て其の本と爲す。佛の言く、煩惱より生ず。又問ふ、煩惱は何を以てか本とする。佛の言く、種種の顚倒邪見より而も生ず。又問ふ、種種の顚倒邪見は何を以てか本とする。佛の言く、虛妄分別より生ず、又問ふ、虛妄分別は何を以て本とする。佛の言さく、此の妄分別は、根本あること無し、色相あることなく、知り難く、斷

四、觀神足、智慧によつて勝定を得る。

【三七】根。五根にて、一、信根は善法を信ず。二、精進根は善法を勇猛に行ふ。三、念根は善法を記憶す。四、定根は散亂の心を統御すること。五、慧根は眞理を正察すること。力とは五力にて、一、信力は能く邪信を除く。二、精進力は懈怠を除く。三、念力は邪念を除く。四、定力は散亂の心を除く。五、慧力は一切煩惱を除く。

【三八】覺。七覺支て、一、喜覺支は善行を爲して歡喜すること。二、擇法覺支は善惡を決定す。三、精進覺支は精進努力す。四、輕安覺支は身心の憂欝とコウフンを除くこと。五、念覺支は正法を記憶す。六、定覺支は心を一境に住せしむ。七、行捨覺支は心を平正にす。

【三九】道。八正道にて、一、正見は因果の理を正見す。二、正思惟は因果の理を明瞭に思惟す。三、正語は妄語綺語兩舌惡口等を去ける。四、正業は殺生、偸盜、邪婬を愼む。五、正命とは正しき生活をなす。六、正精進は善道を履む。七、正念は正法を憶念す。八、正定は正しき禪定に入る。以上を總合して三十七菩提分法と

きが如し。此の最勝の陀羅尼を得れば、衆會の見る者厭足なし、日光の輪平等に照して生死の闇を[19]除きて群迷を覺せしむが如し。此の最勝の陀羅尼を得れば、能く有情の諸の渇愛を除く、[20]轉輪王の十善を敎ふるが如く、[21]毘沙門の法財に富めるが如し。此の最勝陀羅尼を得れば　衆生を慈念して法雨を降らすこと、龍の雲を興して威德を現じ、震雷の電を曜して並く思なきが如し、此の最勝の陀羅尼を得れば　寂靜無心にして執著なく莊嚴微妙にして[22]帝釋の如く、大智機に隨つて法門を演ぶ。此の最勝陀羅尼を得れば、牛王の大衆に處するが如し。大梵王の慈定に住して　遍く世界を觀じて盡く超過するが如し、此の最勝の陀羅尼を得れば　常に五通を得て退轉なく、遍く法界難思の刹に遊ぶこと、梵天王の梵宮に遍ずるが如し。此の最勝の陀羅尼を得れば　十方諸佛海を供養す。諸佛共に親ること長子の如し。同時稱讚の德難思なり、此の最勝の陀羅尼を得れば、久しからずして佛の諸の功德を獲。辯才廣博にして窮盡なく、深廣の修多羅を演說す、此の最勝の陀羅尼を得れば、妙辯鬘の如くにして斷絕なく、智慧聰[23]明にして妄念なく、無邊の方便は虛空に同じ、此の最勝の陀羅尼を得れば　憍慢諂詐皆除斷す。定慧雙流して斷絕なく、慈悲俱起して相離れず、此の最勝の陀羅尼を得れば　永く世間諸の過失を斷じ、善く衆生の語言の法を知つて　心行根欲悉く餘なし。此の最勝陀羅尼を得れば、法を說くに纖毫も誤失なし。[24]念處[25]正斷及び[26]神足、[27]根力[28]覺[29]道定んで皆圓かなり、此の最勝陀羅尼を得れば、便ち殊妙の淨法智を獲て、諸度に隨順して彼岸に到り、[30]四攝に通達して餘あることなし。此の最勝の陀羅尼を得れば、能く善逝の諸の境界を知る。自然に佛に近きて深く寂靜なり。萬行を建立して衆生を調す。此の最勝の陀羅尼を得れば、一切の時に於て錯亂なし、無垢の[31]蘊界入を獲得して　胎に處して染せず無知なら

【一九】除くを一本には破すとある。

【二〇】轉輪王に金銀銅鐵の四輪王あれど、何れも十善の敎を根本の敎として人民を統御す。

【二一】毘沙門(Vaiśravaṇa)。天は四天王の中の北方を守護する神、元來婆羅門敎の富貴財寶の神なり。

【二二】帝釋天(Śakradevendra)は十二天の一にして東方を守護する神。

【二三】明を一本には利となる。

【二四】念處。四念處といふて、一、身念處は身は不淨なりと觀ず。二、受念處は世間には眞實の樂はなく、受領するものは悉く苦なりと觀ずること。三、心念處とは心は念々に生滅して無常なりと觀ずること。四、法念處とは一切法は無我なりと觀ずること。

【二五】正斷。四正斷又は四正勤といひ一、已に生じた惡を斷除すべく勸め、二、未だ生じない惡は生せざるべく勸め、三、未だ生ぜざる善は生ずべく勸め、四、已に生じた善は倍々修すること。

【二六】神足。四神足にて、一、欲神足は勝定を得んと欲求す。二、勤神足は勝定を得んと勸めること。三、心神足は一心を統攝して勝定を得る。

法を聞き已つて心に踊躍を懐いて偈を以て讃して曰く、

『[一五]善逝八總持の法を說いて　決定して微妙の乘を得しむ、　百千億の修多羅を演べて　義及び文に於て所著なし大聲淸淨にして邊際なし　百千無量の刹に皆聞き、　能く衆生の寂靜心を成ず　是を大聲淸淨の義と名づく、　一字に一切の法を演說するに　多劫も窮盡の時あることなし、　一一の字門亦復然なり。　此れ寶篋眞言地に住すなり。　諸邊を遠離して淸淨を得、　平等無著にして如來に同じ、　刹那の正念煩惱を除く、　是を法義旋復處と名づく。　四天下の中の諸の色相　大海に印現して　[一六]並に遺なし、　此の無思無盡門を說く。是を海印眞言德と名づく。　大人の相を　[一七]具して大衆に處し、　蓮花座に坐して天花を雨らし、　華、俱胝の妙法門を演べ、　蓮花の莊嚴總持を用ゆ、　一句の法に入るに所著なし、　億刹微塵の句も亦然なり。句句に難思の門を演暢して、　無著に總持して皆自在なり。　法義及び詞辯を具足して、　四方の衆生齊しく疑を啓く、　自他の疑網皆斷除す。　此は是れ四辯總持の力なり。　菩薩大法座に昇つて、　頂上に佛を現ずること金山の如し。　即ち右の手を舒るに相端嚴なり。　殷重に菩薩の頂を摩し　微妙の辯を獲て佛に同じ、　此を護念佛莊嚴と名づく。　入最勝總持門を得、　便ち難思の無盡の德を獲、　蓮の三界に染せざるが如く、五塵不動なること須彌に等し。　此の最勝陀羅尼を得れば、　無等の智三界に超へて轉ず、能く師子吼して畏るゝ所なく、　諸の外道を摧き邪山を碎く。　此の最勝陀羅尼を得て、　受生　諸の業果を遠離す。　地の諸の善法を生長するが如く、　水の垢を滌して淨にして餘なきが如く、　火の焚燒するに薪を擇ばざるが如く、　風の飄鼓して所住なきが如く、　醫の善く[一八]法藥を知つて、　衆生の病を除き安樂を得るが如し。　此の最勝の陀羅尼を得れば、　智諸法を演べて傾動なきこと、　月の圓明淨にして點なく、　光を流して普く照し等しくして私な

【一五】善逝。佛をいふ。
【一六】並は別本に普くとある。
【一七】具は別本に是とある。
【一八】一本には藥法となる。

て其の義を問ふ。西方所有の一切衆生同一道場にして各類音に隨つて善巧方便して其の詞を問ふ。北方所有の一切衆生同一道場にして、各類音に隨つて善巧方便して其の辯を問ふ。是の如く四方の一切衆生一時に種種の法門を發問す。菩薩一念に悉く能く領受して心に錯亂なく明記して失なく一語業に於て種種の音を出し、一一の音聲に一切法を說き、諸の衆生種類不同なるに隨つて所樂各〻異れども皆領解することを得。踊躍歡喜して心願滿足す。善男子、菩薩漸漸深入四無礙智陀羅尼門となす。

復次に、善男子云何んが名づけて諸佛護持莊嚴陀羅尼門となす。善男子菩薩此の陀羅尼を得るが故に、大會の中に於て大法座に處し其肉髻最處中心頂骨の交際に於て忽に如來の身鎔金色相好莊嚴を現じて右手を以て菩薩の頂を摩し玉へり。卽時に菩薩便ち色身相好莊嚴具足圓滿して佛と平等なることを得。又如來の語業莊嚴具足圓滿することを得、又如來意業莊嚴具足圓滿することを得、是の如く等の種種佛法を得て、具足圓滿す。既に是を得已つて此の大會の一切衆生心界不同、欲樂差別にして疑ふ所異あるに隨つて種種の法を說く、或は一日夜、或は二或は半月一月一年百年、或は百千年、其の心樂の久近多少に隨つて常に妙法を說き、窮盡あることなし。是の如く說く時に領せず食せず羸せず痩せず身心倦むことなし。是の如來の威德護持難思の力を以ての故に。菩薩又四種の大智を得、云何んが四となす。いはゆる、微細了知衆生心行各差別智・微細分別諸法無窮盡智・善能分別三乘修行諸次第智・具足圓滿隨順堪任演說法智なり。善男子、是れを略說諸佛護持莊嚴陀羅尼門と名づく。若し廣く說かば無量無邊にして虛空界に等しく、窮盡あることなし。如來と等しく皆諸の衆生を利益するが爲の故に、善男子、是を八種の陀羅尼門と爲す。若　菩薩有つて此の八陀羅尼門に安住せば、則ち能く一切如來及び諸の菩薩所說の妙法を總持して諸の菩薩をして辯才無盡ならしめん。一切衆生、若し聞くことあらば愛樂歡喜して情に厭足なし。爾の時に一切法自在王菩薩此の

び種種の門を說き、皆一切衆生の諸の煩惱を斷除せんが爲の故に、菩薩の心大捨寂然正受に安住して卽ち能く等しく是の如くの聲を引き、法を說くこと斷ぜず、衆生の苦を滅し諸の佛事を作す、又菩薩の遍身毛孔より種種の光を出し、一一の光の中に、種種の妙寶蓮花を出生す、一一の花の上に一菩薩あり、遍く十方無量無邊の諸世界中に往き而も佛事を作す、是を初入蓮花莊嚴陀羅尼門と爲す。若し廣く說かば窮盡すべからず。

復次に、善男子云何んが名づけて能入無著陀羅尼門となす。善男子、菩薩此の陀羅尼門に住すれば一の法門に於て所著なし。是の如く若しは二、若しは三、若しは十、若くは百、若くは千、若しは百千若しは、俱胝若しは那由他、乃至阿僧祇無量無邊無等不可數、不可稱不可・量不可說の法門皆平等にして所著なし、或は恒河沙の法門亦皆平等にして心に所著なし、是の如く閻浮提の微塵數の法門四天下の微塵數の法門三千大千世界の微塵數の法門亦所著なし、若しは一佛刹若しは十佛刹若しは百、若しは千、若しは恒河沙の佛刹の微塵數の法門、乃至一切の佛刹微塵數の法門も亦皆平等にして心所著なし。若しは一門を說いて如上の說を攝し、一切佛刹塵數法門皆一門に入る。一時に演說するに、一門の如く、若しは二、若しは三、乃至無量無邊の法門も亦皆是の如し。一一の門の中に一切の門を攝す。一時に演說すること是の如し。說くとき心に所著なく亦所住なし、一切衆生を利益し安樂ならしむ。其義深遠にして如實の理に稱へり。次第亂することなく文義具足す、善男子是を能入無著陀羅尼門と名づく。

復次に善男子、云何んが名づけて【一四】漸漸深入四無礙智陀羅尼門となす。善男子、若し諸の菩薩此の陀羅尼門に安住すれば、微細差別法門無盡智を得。微細甚深義門無盡智を得、微細詞門無盡智を得、微細辯無盡智を得、是の智を得るが故に、東方の所有一切衆生同一道場にして各、類音に隨つて善巧方便を以て其の法を問ふ。南方の所有一切衆生同一道場にして各類音に隨つて善巧方便し

が自身の過去世の因緣を說いた經なり。(九)方廣は梵語の毘佛略(Vaipulya)三千大世界が十方に在りと大乘の教を說く經文なり。(十)希法は梵語の阿浮達摩又は阿毘達摩(Abhidharma)未曾有とも譯す、佛が不思議の事柄を說きし經なり。(十一)優波提舍(Upadeśa)は論議と譯す法理を論議して闡明したるもの、(十二)阿波陀那(Avadāna)譬喩と譯す、譬喩を以て說きし經なり。

【一四】漸漸深入四無礙智陀羅尼門とは、四無礙智を說く。四無礙智とは法無礙・義無礙・詞無礙・(辭無礙)樂說無礙・辯說無礙なり。微細差別法門無盡智とは法無礙智にて一切諸法を自在に智解すること、微細甚深義門無盡智とは義無礙にして、一切教の義理を知解することが自在なること、微細詞門無盡智とは詞無礙にして一切言詞を使ゆるに自在なること、微細辯無盡智は、樂說無礙にして一切衆生の欲求する所を知つて自在に說法すること。

他上二合字印とは勢力の不可得を顯示するが故に。惹字印とは老死を超過して能く生ずる所なるが故に。濕嚩二合字印とは煩惱の所行皆遠離するが故に。馱字印とは法界體性雜亂せざるが故に。捨字印とは[九]深止觀に入つて皆滿足するが故に。佉字印とは、如虛空無盡の法を悟るが故に、乞叉二合字印とは、[一〇]盡智無生智に入るが故に、娑上多也阿四合字印とは昏沈懈怠の障を遠離するが故に、枳孃二合字印とは一切衆生智慧の體なるが故に、賀字印とは摧惡進善皆離るが故に、婆上字印とは覺悟の體を慣習觀察するが故に。者椑上二合字印とは、貪瞋癡の覆性を遠離するが故に、娑莽上二合字印とは、念散動せず忘失なき故に、訶婆上二合字印とは呼召を以て命體を請ずべきが故に。婆哆二合字印とは勇猛にして諸惑の體を驅逐するが故に。伽上字印とは、重雲無明の翳を散滅するが故に、姹字印とは、諸行を積集し體を窮盡するが故に、波囉二合字印とは、最勝寂照の體に隨順するが故に、頗字印とは、周遍して果報の體を圓滿するが故に、婆迦上二合字印とは一切[一一]蘊聚の體を悟解するが故に、也婆上字印とは、能く老死一切の病を除くが故に。室者二合字印とは、現前に覺悟して[一二]未だ曾て有らざるが故に。吒字印とは生死の道を斷じて涅槃を得るが故に、瑟姹二合字印とは無邊無盡の體を悟解するが故に。善男子菩薩は是の如く種種の法相を以て諸字印門を分別し演說す。善男子是を深入海印三昧陀羅尼門と名づく。

復次に善男子、云何が名づけて蓮華莊嚴陀羅尼門とするや。善男子菩薩、此の陀羅尼門に住し彼の無量大會の中に隨つて妙法を說く時、即ち廣大の妙蓮華座有つて其前に涌現し種種の色相殊妙の莊嚴あり。其れ見る者あれば情に厭足なし、此の座纔に現ずれば身便ち安處す。即ち空中に於て衆の寶華を雨らし、種種の花の中に種種の聲を出し種種の聲の中に種種の法を說く、所謂或は甚深無量の法を說き、或は善巧の名句法を說き、或は種種の諸譬喩門を說く。是の如く或は[一三]修多羅・祇夜・和伽羅那・伽他・掘陀那・尼陀那・本事・本生・方廣・希法・優波提舍を說く、是の如く等の十二分敎及

【九】深止觀とは、深妙なる止觀にて止とは禪定、觀は智慧、定慧双び修して行くことである。

【一〇】盡智。一切の欲惱を斷盡して起る自覺の智を盡智といひ、而して再び三界に生れないといふ自覺の智の起るを無智といふ。

【一一】蘊聚の體とは、五蘊法の假りに聚つて生ずる體をいふ。

【一二】一本には曾てを來とし有の下に情を加へたり。

【一三】修多羅等とは、十二分敎と稱して一切經を十二種類に分類せしもの、(一)修多羅(sūtra)は契經といふ經典の中の長行の文にして、頌文にあらざるもの、(二)祇夜(geya)重頌といひ、長行の文意を重ねて宣べるもの、(三)和伽羅那(Vyākaraṇa)は授記と譯す。菩薩に成佛の豫言を說いた經文、(四)伽他(gāthā)は諷誦と譯す。長行に依らずして直に偈を造りしもの、(五)掘陀那(Udāna)自說と譯す。佛が自ら問者なきにも拘らず說く經文、(六)尼陀那(nidāna)因緣と譯す。經中に敎化の因緣を說くもの、(七)本事は梵語の伊帝目多(Itivitaka)にして佛が弟子の過去世の因緣を說いた經文なり。(八)本生は梵語の闍多伽(Jātaka)にして、佛

巻の第三

陀羅尼品第二の三

復次に善男子、何等をか名づけて[1]海印陀羅尼門となすや、善男子大海の水の一切を印現するが如く、謂く四天下所有の無相、或は衆生の色相或は非衆生の色相・山澤・原阜・樹木・叢林・藥草・百穀日月星辰摩尼雲電　[2]村營聚落邑王都及與び諸天男女の宮殿一切の資具・香林・池・沼渠・河泉流綺麗嚴飾是の如く等の類の上中下品一切の色相、大海の中に於て平等に印現す。故に、大海を說いて第印最勝妙印希奇殊特無等無過となす。菩薩摩訶薩亦復是の如し、此の海印甚深三昧に住し一切衆生に身平等の印を得、衆生に語平等印を得、衆生に心平等印を得、十方世界の諸佛の語業妙法輪を轉ずる菩薩皆海印より流ずる所の口門の中に於て平等に演說す。所說あるに隨つて皆諸佛の法印と違ふことなく、亦疑惑なし、能く法界の一切衆生をして皆悉く悟解せしむるが故に。此の印を說く、諸の印の中の上なり。[3]所謂　婀(上短)字印とは、一切の性無生なるを以ての故に、[4]囉字印とは一切法無染著なるを以ての故に、[5]跛字印とは勝義諦門不可得なるが故に。者字印とは眼及び諸行皆清淨なるが故に、娜字印とは名色性相不可得なるが故に、攞字印とは愛支の因緣連續して斷ぜず皆現ぜざるが故に、拏上聲字印とは清淨の十力門に悟入するが故に、麼字印とは力菩提分皆清淨なるが故に拏上重字印とは諸の　[6]怨敵及び憂惱を離るが故に。灑字印とは六通圓滿して罣礙なきが故に、[7]嚩字印とは、不二の道言語斷ずるが故に。多上聲字印とは一切の法の眞實の義を悟るが故に。也字印とは如實の理に稱うて演說するが故に。瑟二合字印とは、制伏任持して不可得なるが故に。迦上聲字印とは世論を遠離す作者なきが故に娑上聲字印とは　[9]四眞諦皆平等なりと悟るが故に、莽輕く呼ぶ字印とは一切の法の清淨の道を悟るが故に。誐字印とは、甚深の法に入つて行取なきが故に。娑

【一】海印陀羅尼門とは、海印三昧をいふ。海印三昧とは大海の水の中に一切の事物が印現するが如く、佛平等の大智海の中には一切のことが印現するのである。

【二】村營とは、人の聚る處。

【三】所謂婀字印とは、是より四十二字の陀羅門を說く。

【四】囉字門は塵垢不可得の義なり。

【五】跛字は、第一義不可得の義なり、勝義諦とは第一義諦ともいひ諸法眞實の理を說くこと。

【六】怨は別本に寃となる。

【七】嚩字印。嚩字は言說不可得の義なり。

【八】四眞諦とは、四諦の理のこと。

復た次に、善男子云何んが名づけて無邊旋陀羅尼門とする、善男子、言ふ所の邊とは、謂く斷と常と十二因緣となり。無明は行に緣たり、行は識に緣たり、識は名色に緣たり、名色は六入に緣たり、六入は觸に緣たり、觸は受に緣たり、受は愛に緣たり、愛は取に緣たり、取は有に緣たり、有は生に緣たり、生は老死憂悲苦惱に緣たり。無邊と言ふは卽ち祕密界斷常等なく、趣入甚深なるを名づけて旋復と爲す。是の故に名づけて無邊旋復陀羅尼門と爲す。又復邊とは說いて取捨に名づく。言ふ所の旋とは不取捨と說くが故に。又復、邊とは生滅ありと說き、旋とは無生滅と說くが故に。又復邊とは煩惱生死なり、旋とは本性清淨の故に。邊とは有相無相なり、旋とは却て所行なきが故に、邊とは麁細思惟なり。旋とは無尋無伺の故に。邊とは因及び諸見なり。旋とは因を智了する見の故に。邊とは謂く名及び色なり。旋とは表示あることなきが故に。邊とは有爲無爲なり。旋とは三輪清淨の故に。邊とは內及び外を說く。旋とは識體無住の故に。邊とは謂く業及び果なり。旋とは業果の體なきが故に。邊とは善及び不善なり。旋とは行體あることなきが故に。邊とは過及び無過となり。旋とは體二あることなきが故に。邊とは謂く業煩惱なり。旋とは體性光明の故に。邊とは我及び無我なり、旋とは體性清淨の故に。邊とは生死涅槃なり。旋とは諸法の本性卽ち涅槃なるが故に。善男子、是の如きは略說なり。若し廣く說かば、邊を說くに無量の門あり、旋を說くにも亦無量の門あり。若し諸の菩薩、此の旋復陀羅尼門に住すれば、無邊の一切深法に隨順して、智に窮盡なく或は字或は義亦窮盡なく、漸次に無邊旋復陀羅尼門に趣入すべし。能く智光明に隨順するを以ての故に。覺の性に隨順するに本清淨なるが故に、智慧明を開いて癡瞑を決するが故に、解脫に隨順して體性を覺るが故に。

くが故に。色は中際無盡なりと說くが故に。色は後際無盡なりと說くが故に。色は寂滅無盡なりと說くが故に。色は親近寂靜無盡なりと說くが故に。色は無心行處無盡なりと說くが故に。色は無言語道斷無盡なりと說くが故に、色は不可思議無盡なりと說くが故に、色は不可度量無盡なりと說くが故に。色は無我無盡なりと說くが故に。色は無衆生無盡なりと說くが故に。色は無壽者無盡なりと說くが故に。色は無養育無盡なりと說くが故に。色は無補特伽羅無盡なりと說くが故に。色は無知無盡なりと說くが故に。色は無造作無盡なりと說くが故に。色は草木瓦礫石壁の如く無盡なりと說くが故に。色は無求得無盡なりと說くが故に。色は大種所生無盡なりと說くが故に。色は無聲無盡なりと說くが故に。色は無表無盡なりと說くが故に。色は不可說無盡なりと說くが故に。色は本來淸淨無盡なりと說くが故に。色は從因緣生無盡なりと說くが故に。色は無斷無盡なりと說くが故に。色は無常無盡なりと說くが故に。色は無造者無盡なりと說くが故に。色は無受者無盡なりと說くが故に。色は無業果無盡なりと說くが故に。色は法界平等無盡なりと說くが故に。色は眞如に住して無盡なりと說くが故に、色は實際に住して無盡なりと說くが故に。色は無我所無盡なりと說くが故に。色は無主宰無盡なりと說くが故に。色は無執受無盡なりと說くが故に。色は不可思無盡なりと說くが故に。色は不可稱無盡なりと說くが故に。色は不可量無盡なりと說くが故に。色は無有邊無盡なりと說くが故に。色は卽ち菩提性無盡なりと說くが故に。色は如空平等無盡なりと說くが故に。色は卽涅槃性無盡なりと說くが故に。是の如く廣く界處等の法名句文身一切の佛法を說いて皆悉く此の一字の聲智慧の門に入れて四大を以て同一身篋とするが如く。此も亦是の如し。一字の聲門に包攝して無盡の智寶甚深の法門を出生す。是の故に名づけん無盡寶篋となす。我上に略して此の一門の中の少分の義を說くこと地の一塵の如し。若し廣く說かば無量無邊阿僧祇劫にも窮盡すべからず。

に染せざるが故に。意清淨を得、善能く微細の法を分別するが故に。色清淨を得、所有の色相妙莊嚴なるが故に。聲清淨にして聞く所皆是れ法聲に順んずるが故に。香清淨を得、施戒聞香の所熏なるが故に味清淨を得、大丈夫上味の相を獲るが故に。觸清淨を得、身手の觸るゝ所、妙に柔輭なるが故に。法清淨を得、所知皆法明門を獲るが故に。念清淨を得、所聞を憶持して疑忘なきが故に。心清淨を得、一切の魔の境界を超越するが故に。行清淨を得、所解を出過する甚深の法なるが故に。善男子、菩薩、此の最勝不共大聲清淨陀羅尼を得るが故に。大聲普く十方世界に遍じ、光明普く照して、彼の一切世界衆生の爲め一切如來の所說の妙法を分別し演說し、彼の一切法眼をして開明せしむ。善男子我今略して大聲清淨陀羅尼門を說いて初めて次第一門の中の少分の德に入れしむ。若し廣く說かば復無數無量無邊不可說の義あるべし。此の一の阿字門を說くこと無量無邊にして窮盡すべからざるが如く、餘の一一の字も亦復是の如し、皆無著智慧の門を以て漸漸に修入すべし。

復た次に善男子云何んが名づけて無盡寶篋陀羅尼門と爲る。善男子、謂く一字の中に一切の法を說くに、皆窮盡なし。何等の一切法か窮盡あることなき、所謂色無盡なりと說くが故に、是の如く色は無常と說く、無盡なるが故に。色は是れ苦無盡なりと說くが故に。色は無我無盡なりと說くが故に。色は寂滅を盡なりと說くが故に。色は寂靜無盡なりと說くが故に、色は如聚沫無盡なりと說くが故に。色は如幻無盡なりと說くが故に。色は如餤無盡なりと說くが故に、色は水中の月の如く無盡なりと說くが故に。色は夢の如く無盡なりと說くが故に。色は響の如く無盡なりと說くが故に。色は鏡中の像の如く無盡なりとを說くが故に。色は無本性無盡なりと說くが故に。色は本無にして無盡なりとを說くが故に。色は緣會無くして無盡なりとを說くが故に。色は空門無盡なりと說くが故に、色は無相無盡なりと說くが故に。色は無願無盡なりと說くが故に。色は無行無盡なりと說くが故に。色は生法無盡なりと說くが故に。色は無生無盡なりと說くが故に、色は前際無盡なりと說

切法無顯示なり。體皆相似の故に、又阿字は一切法無相似なり。體境界なきが故に。又阿字は一切法無境界なり體虚空の如くにして常に平等なるが故に。又阿字は一切法無闇なり、體無明の故に、又阿字は一切法無明なり。體無對の故に。又阿字は一切法無過なり、體妙善の故に。又阿字は一切法無是なり、體妄なきが故に。又阿字は一切法無開解なり、體動なきが故に、又阿字は一切法無見なり、體色なきが故に。又阿字は一切法無聞なり、體聲なきが故に。又阿字は一切法無嗅なり。體に香なきが故に。又阿字は一切法無嘗なり、體味なきが故に。又阿字は一切法無觸なり、體所觸なきが故に。又阿字は一切法無知なり、體本より無法の故に。又阿字は一切法無念なり、體心意識を離れたるが故に。又阿字は一切法不思議なり、體性菩提平等平等にして無高下の故に。又阿字は一切法寂靜なり、體本より不生にして亦不滅なるが故に。善男子、菩薩は、是の如く此の大聲清淨陀羅尼門を得て第一の阿字に入りて、時に諸法を演説するは或は一年を經、或は復十年百年千年或は百千年、或は一小劫或は一大劫乃至無量無數大劫なり。此の法を說く、時に阿字を離れず、阿字を說くに義盡くることあることなきが如く、餘の諸字を說くことも亦復是の如く窮盡すべからず。是の如く法眼を建立し開示するに、其の義深遠に其の語巧妙に具足して清白なり。又善男子、菩薩此の陀羅尼に住するが故に、身清淨を得。威儀寂靜なるが故に、語清淨を得。辯才無礙なるが故に。意清淨を得、慈悲觀察するが故に、施清淨を得、財法悋むことなく、他に施すことを隨喜するが故に、戒清淨を得、破なく穿なく缺漏なきが故に、忍清淨を得、怨なく對なく障礙なきが故に、勤清淨を得、妙事業に於て退轉なきが故に、禪清淨を得、著なく慢なく亦味なきが故に、慧清淨を得、智慧の眼を開き癡膜を決するが故に、業清淨を得、普く一切の勝善業を修するが故に、眼清淨を得、天眼遠く一切の色を見るが故に。耳清淨を得、天耳遠く諸の佛法を聞くが故に鼻清淨を得、普く如來の淨戒香を嗅ぐが故に。舌清淨を得、隨心清淨の味を獲るが故に。身清淨を得、現に胎に處すと雖、胎

阿字は一切法無境界なり、體不可取の故に。又阿字は一切法無地界なり。體、諸結なきが故に。又阿字は一切法無縛なり。體本より散滅の故に。又阿字は一切法無聚散なり。體本無爲の故に又阿字は一切法無漏なり。體惑不生の故に。又阿字は一切法無自生なり。體初より無生の故に。又阿字は一切法無濁なり。體無有對の故に。又阿字は一切法無對たり。體本無作の故に。又阿字は一切法無色なり。體大種なきが故に。又阿字は一切法無受なり。體無受の故に、又阿字は一切法無想なり。體諸相に過ぎたるが故に。又阿字は一切法無行たり。體離有愛の故に、又阿字は一切法無識なり。體無分別の故に、又阿字は一切法無界なり。體空平等の故に、又阿字は一切法無入なり。體境界門を過ぎたるが故に。又阿字は一切法無境界なり。體去處なきが故に、又阿字は一切法無欲なり。體分別を離るが故に、又阿字は一切法無色なり。體根本なきが故に、又阿字は一切法無色なり、體思見し難きが故に。又阿字は一切法無亂なり。體亂ずべきなきが故に。又阿字は一切法不思議なり。體不可得なるが故に。又阿字は一切法無意なり。體本無二の故に、又阿字は一切法不可執受たり、體境界の道を過ぐるが故に。又阿字は一切法に阿賴耶なし。體因縁なきが故に、又阿字は一切法無常なり。體本無因の故に、又阿字は一切法無斷なり、體因を礙へざるが故に、又阿字は一切法無名なり、體相貌なきが故に、又阿字は一切法無雜なり、體相入せざるが故に。又阿字は一切法無住なり、體無住處の故に。又阿字は一切法無熱惱なり。體煩惱なきが故に、又阿字は一切法無憂惱なり。體惡業なきが故に、又阿字は一切法[三三]無習氣なり、體本無垢の故に、又阿字は一切法無垢なり。體本清淨の故に。又阿字は一切法無にして本より清淨なり、體形質なきが故に。又阿字は一切法無體なり、體依止なきが故に。又阿字は一切法無依止なり。體動作なきが故に、又阿字は一切法無動なり、執著を離るが故に、又阿字は一切法無障礙なり、體虛空に同じきが故に、又阿字は一切法は虛空に同たり、體無分別の故に。又阿字は一切法無色[三四]相なり。體境界の因なきが故に。又阿字は一

【三三】習氣。煩惱の現に起るを正使といひ、現に起らなくとも起るべき勢力が潛在するのを習氣といふ。

【三四】一本には相を根とす。

なるが故に。又阿字は一切法に根本なし。體初より未だ生ぜざる故に。又阿字は一切法無終なり。體初なきが故に。又阿字は一切法無盡なり。體去處なきが故に。又阿字は一切法無生なり。體無行なるが故に。又阿字は一切法出なし、體[三一]作者なきが故に。又阿字は一切法に求むることなし、體無相なるが故に。又阿字は一切法無礙なり。體相渉入するが故に。又阿字は一切法無滅なり。體主宰なきが故に。又阿字は一切法無行處なり。體無願の故に。又阿字は一切法無生死なり。體分別を離れて分別無きが故に。又阿字は一切法無言說なり。體聲入を極むるが故に。又阿字は一切法不可說なり。體無聲の故に。又阿字は一切法無差別なり。體處所なきが故に。又阿字は一切法無分別なり。體清淨の故に。又阿字は一切法無心意なり、體求むべからざるが故に。又阿字は一切法無高下なり。體本より平等なるが故に。又阿字は一切法解するべからず、體虚空の如くなるが故に。又阿字は一切法不可說なり。體言道を過ぎたるが故に。又阿字は一切法無限量なり、體に處所なきが故に。又阿字は一切法無生なり。體に生處なきが故に、又阿字は一切法無にして本淨なり、體本無相の故に。又阿字は一切法無我なり。體即ち我性なるが故に。又阿字は一切法無衆生なり、體本より清淨なるが故に。又阿字は一切法無壽者なり。體に命根なきが故に。又阿字は一切法に補特伽羅の體なし。所趣(取)を離れたるが故に、又阿字は一切法無にして本空なり。體性寂靜の故に。又阿字は一切法無相なり。體實に無際なるが故に。又阿字は一切法無和合なり。體性無生の故に。又阿字は一切法無行なり。體本より無爲なるが故に。又阿字は一切法無爲なり。體行無行を過ぎたるが故に。又阿字は一切法不共なり。體能く解する人なきが故に。又阿字は一切法無聚會なり。體積集なきが故に。又阿字は一切法無出なり。體無出處の故に。又阿字は一切法無本性なり。體本より無身なるが故に、又阿字は一切法無相なり。體・相本淨の故に、又阿字は一切法無業なり。體作者なきが故に。又阿字は一切法無果なり。體[三二]業道なきが故に。又阿字は一切法無種植なり、種子なきが故に。又

【三一】作者とは、外道の主張する如き神我は常一主宰と稱して萬物を能造する力を有す。

【三二】業道。業とは身口意による作用にして、之を三業といふ。三業によつて生ずる善惡の行爲によつて、六趣に生ずること。

て此の如くの八種の陀羅尼門を說きたまへ。菩薩聞くことを得ば、則ち能く此に於て勤求し趣入すべし。爾の時に世尊一切法自在王菩薩に告げて言く、善哉、善哉、善男子、諦に聽き諦に聽き善く之を思念せよ。今當に汝が爲に廣く分別し說いて諸の菩薩をして此の門に入ることを得しめん。

善男子云何んが名づけて大聲淸淨陀羅尼門と爲す。若し菩薩あつて此の陀羅尼門を修習せば應に無著淸淨の妙念を以て眞實に安住し心動搖を絕し、威儀凝靜にして決定心を以て微妙の法を說いて一佛刹所有の衆生をして其の類音に隨つて普く其の聲を聞き悉く其の義を解かしむべし。是の如く或は二佛刹、或は三佛刹、或は十佛刹、或は百佛刹、或は千佛刹二千佛刹三千佛刹百千乃至十方無量無邊俱胝那由他百千佛刹の其の中の衆生も亦各類に隨つて普く其の聲を聞き、悉く其の義を解けり。善男子、若し此の菩薩、衆會の中に於て師子座に處し、其座の量の高さ[二八]一俱盧舍なり。師子王の威力に持せらるゝを以て、衆寶嚴飾せり。是の如く或は復半由旬の量、一由旬の量、千由旬の量或は復量須彌山王に等しく、或は復其の量高さ梵天に至り、諸の衆生の心の所樂に隨つて、其をして各身座の大小を見せしめ、而も爲に說法す。正しく法を說く時、十方の諸佛悉く其の前に現じて此の菩薩の爲に妙法を演說せん。菩薩聞き已つて卽ち能く此の陀羅尼の力を以て一時聽聞して不忘を總持して深く義理に入り、現證相應し、身心怡暢して一一の法の中に一境性を成じ、一一の字句に無所聞を聞く。卽ち是の如く聽聞法に於て時に而も常に演說するに障礙あることなし。若し諸の菩薩深く是の如く一字聲聞に入らば、一切諸法悉く此の門に入る。卽ち此の門より出生して一切諸法を演說す。且らく初第一に[二九]阿字門（上短時下皆之に准ず）より無邊無數の法門を出生することを說かん。いはゆる阿字とは一切法來ることなし。一切法の體來ることなきを以ての故に。又阿字は一切法去ることなし。一切の法の體去ることなきを以ての故に。又阿字は一切法無行なり[三〇]。體無行なるが故に。又阿字は一切法無住なり。體無住なるが故に。又阿字は一切法本性無し。體本より淸淨

【二八】一俱盧舍。里程にして五里なりと。

【二九】阿字門。是より阿字の百義を說く。阿字は一切文字衆聲の最初にして此字が根本と成つて一切文字一切の聲は出づ、密教は阿字本不生といひ、萬物は因緣によつて生じたるものにして其の實體は無いと說くのである。而して此の阿字に有空不生の三義ありとし、阿字本不生不可得と說く、今、阿字を種々の方面より義釋せるなり。

【三〇】無行とは、變化なきこと。

切法心智清淨陀羅尼門・一切法不可得陀羅尼門・普散一切衆寶妙華陀羅尼門・本性顯現出生諸法陀羅尼門・遠離一切諸幻化法陀羅尼門・如鏡圓明出生影像陀羅尼門・出生一切衆生音聲陀羅尼門・令諸衆生最極歡喜陀羅尼門・巧須一切衆生音聲陀羅尼門・出生種々音聲字句陀羅尼門・無有障礙陀羅尼門・本性巧便陀羅尼門・解脫煩惱陀羅尼門・離一切塵陀羅尼門・分別字義陀羅尼門・解了諸法陀羅尼門・法無礙際陀羅尼門・猶如虛空陀羅尼門・猶如金剛陀羅尼門・近色光王陀羅尼門・得最尊勝陀羅尼門・不退轉眼陀羅尼門・法界出生陀羅尼門・常施安慰陀羅尼門・如師子吼陀尼羅門・超衆生福陀羅尼門・離諸憂惱陀羅尼門・離諸過惡陀羅尼門・妙華莊嚴陀羅尼門・破諸疑網陀羅尼門・諸法順　如陀羅尼門・出現諸法陀羅尼門・大聲清淨自在陀羅尼門・無盡寶篋陀羅尼門・無邊漩澓陀羅尼門・海印陀羅尼門・蓮華莊嚴陀羅尼門・能入無著陀羅尼門・漸々深入四無礙智陀羅尼門・一切諸佛護持莊嚴陀羅尼門なり。是の如く等の法を上首と爲して、無量無數の陀羅尼門皆悉く現前す。

爾の時に、一切法自在王菩薩摩訶薩、佛に白して言く、世尊是の如くの無數の陀羅尼門には、何等の陀羅尼門が能く菩薩をして諸佛所說の妙法を總持して失壞せざらしむるや。何等の陀羅尼門か能く菩薩此の法を說く時、辯才無盡ならしむる。何等の陀羅尼門か能く菩薩此の法を說く時一切衆生をして愛樂歡喜せしむるや。佛、一切法自在王菩薩に告げて言く。善男子、八の陀羅尼門ありて、若し受持する者は、能く、菩薩をして佛法を總持し辯才無盡にして衆生をして聞かんと樂はしむ。何等をか八と爲す。所謂大聲清淨自在王陀羅尼門・無盡寶篋陀羅尼門・無邊漩澓陀羅尼門・海印陀羅尼門・蓮花莊嚴陀羅尼門・能入無著陀羅尼門・漸々深入四無礙智陀羅尼門・一切諸佛護持莊嚴陀羅尼門なり。菩薩若し能く此の八種の陀羅尼門に於て受持し修習すれば即ち能く一切如來所說の妙法を總持し、辯才無盡にして亦衆生をして愛樂歡喜せしめ。

爾の時に、一切法自在王菩薩、佛に白して言さく、世尊惟願くは如來我等を哀愍して廣く分別し

に在て愛樂安樂して都て飢渇疾病の念を忘れて、但し更に心を專にして多く得んと希求するが如し。此の三昧心も亦復是の如し。少分相應すれば、悉く一切の煩惱の飢渇を忘れ、心に安樂なることを得て、轉た更に之を求む。云何んが名づけて漸現三昧と爲す。謂く、少しき愛樂安樂を得るに由つて、漸漸に增勝して身の毛皆竪ち悲泣流涙して[二三]黑物の中に一白縷を見るが如し。此も亦是の如し。月輪を觀じて少分住することを得るに由つて、無明闇の煩惱の中に於て、少しき定心の微分顯現することを見る。云何んが名づけて起伏三昧と爲す。謂く觀行未だ純ならず、或は起し或は滅し[二四]秤の低昂の如し。觀成ずれば惑滅し、觀失すれば惑生ず。云何んが名づけて安住三昧と爲す。前の四定に由つて心安住することを得、悉皆一切の善法を守護し、新善を增長し、身心安樂なり。盛夏の中に砂積を遠涉するに熱渇日久しくして忽に雪山清冷の美水を得れば所有熱渇憂苦皆除くが如し。此も亦是の如し。此の三昧を得れば[二五]業感苦惱一切皆遣る。是を無上菩提の芽生ずと爲す。善男子、如上所說の諸根具せず五無間業諸惡の衆生すら尙ほ此の中に於て修入するに分あり。何に況んや一切の比丘・比丘尼・優婆塞・優婆夷、而も趣入せざらんや。善男子、今此の大衆無數の衆生此の法を聞き已つて皆阿耨多羅三藐三菩提に於て不退轉を得、神通十力四無所畏念々に增進し、無數の三昧皆悉く現前す。[二六]所謂厭離一切法三昧・超過一切法三昧・一切法平等三昧・離諸見稠林三昧・遠離無明闇三昧・一切法離相三昧・解脫一切著三昧・離一切懈怠三昧・甚深法發光三昧・如須彌山三昧・永無失壞三昧・摧壞魔軍三昧・不著三界三昧・出生光明三昧・常見如來三昧なり。是の如く等を以て上首と爲して無數の三昧皆現在前す。復た無量の種々の衆生あつて無數の陀羅尼門を得、[二七]所謂觀諸法性陀羅尼門・發菩提心陀羅尼門・生菩提芽陀羅尼門・了金剛性陀羅尼門・得佛平等陀羅尼門・一切法本性清淨陀羅尼門・一切法本性攝受陀羅尼門・一切法本性不可得陀羅尼門・一切法出生智慧陀羅尼門・一切法皆悉成就陀羅尼門・一切法轉變自在陀羅尼門・一切法大光普照陀羅尼門・一切法遠離闇陀羅尼門・一

【二三】黑物とは、無明煩惱に喩ひ、一白縷を見るとは無明煩惱の中に一法の光明の生ずること。

【二四】秤の低昂とは、行者の觀行が整備しないため、秤の上下するが如く心進退して一定せざること。

【二五】業感。身口意の三業によつて感得した苦惱のこと。

【二六】所謂厭離一切法三昧とは、以下十五三昧を說く。

【二七】所謂觀諸法性陀羅尼門とは、以下五十三陀羅尼門を說く。

の兩角を執り、右の手掌を展べ、其の五指を竪て、肩に當つて外に向くるを[17]施無畏と名づく。此の印能く一切衆生に安樂無畏を施す。一切の惡人も惱害すること能はず。即ち[18]不空成就如來の印なり。次に亦上の毘盧遮那如來の眞言を誦し、[19]娑字の觀を作せ。當に此の字を以て月輪の中に處し頂上に置くべし。五色を具し觀想成じ已つて漸く遍身を觀ずるに皆五色を作し、不空成就如來と成る。此の觀成じ已つて卽ち頂上より五色の光を放ち亦無數百千億の光を以て眷屬となし一一の光の中に皆無量五色の光明菩薩ありて現じて各此の印を作り、皆無畏を施す。光北方恒沙の世界を照らし、其の中の衆生斯の光を遇はゞ悉く無畏を得ん。

佛、復、一切法自在王菩薩に告げて言く、如上所說の自證の法は唯自ら證知すべし。言の能く說くに非ず。諸見の相を離る。未成就の諸の衆生の爲の故に。無相の中に於て相を以て顯示し、無言說に於て假に言を以て宣ぶ。譬へば空中の[20]乾闥婆城の實に非ずして實を現ずるが如し。

爾の時に、佛復た一切法自在王菩薩及び諸の大衆に告げて言く、諸の佛子十方一切の諸の世界の中の無量無數百千萬億の異類の衆生、或は衆生あり、諸根具せず或は復五無間業を具足す。屠兒魁膾栴陀羅等一切皆不可思議三昧の中に於て修習し趣入するに悉く皆分あり、[21]五種の人をば除く。何等をか五と爲すや。一には不信、二には斷見、三には常見、四には邪見、五には懷疑なり。此の五衆生は趣入すること能はず。何を以ての故に。此の深三昧は大慈悲を以て根本と爲す。是の如く五人慈悲なき故に。善男子、若し復人あつて能く暫く此三昧を修習する者の身心輕安なれば卽ち能く五種の三昧を生ず。何等をか五とする。[22]一には刹那三昧、二には微塵三昧、三には漸現三昧、四には起伏三昧、五には安住三昧なり、云何んが名づけて刹那三昧と爲す。謂く月輪を觀じて刹那刹那暫時相應すれども尋いで復還つて失す。是の故に名づけて刹那三昧と爲す。云何んが名づけて微塵三昧となす。謂へ三昧に於て少分相應す。譬へば人ありて蜜の味を識らず、微塵許を得て、其の舌根

【一七】施無畏印。一切衆生に安樂無畏を施す印なり。
【一八】不空成就如來。五佛の一。北方の主。
【一九】娑字とは、釋迦如來のこと。
【二〇】乾闥婆城。蜃氣樓ともいふ。之は幻焰の如く實に無なるに喩ふ。
【二一】五種の人を除くとは、次に出だす所の五種の惡見を有する人にして之は何れも密教の怨なる故にかゝる惡見を有する人は密教の中に入ることは出來ない。
【二二】一には刹那三昧とは、これより五種三昧を說く。

て眷屬となし、一一の光の中に皆無量の青色の金剛菩薩ありて現じて各々此の印を作す。光東方恒河沙數の世界の中を照らし其の中の衆生斯の光に遇はゞ所有の欺猾殺害惡心皆悉く捨離して寂靜不動なり。

善男子、行者此の三昧より起ち已つて、復南方に於て面を北に向け坐して亦如上の金剛結跏を作し、端身正坐して左の手は前の如し。衣の兩角を執り右の手掌を仰げ滿願の印と名づく。此れ即ち[一]寶生如來の印なり。次に亦前の毘盧遮那如來の眞言を誦し[二]惹字の觀を作すべし。當に此の字を以て月輪の中に處し頂上に置くべし。融金色の如し。觀想成じ已つて漸く遍身を觀ずるに皆融金色なり。此の身即ち寶生如來と成る。此の觀成じ已つて即ち頂上より金色の光を放ち、亦無數百千億の光を以て眷屬と爲す。一一の光の中に皆無量の金色の金剛菩薩ありて現ず。各々此の印を以て一一の菩薩の各々の手の中に如意寶光を雨し南方恒沙の世界を照す。其の中の衆生、斯の光に遇はゞ所有の願求皆滿足することを得。復西方に於て面を東に向け坐して亦如上の金剛結跏に作し、端身正坐して左手掌を仰げ、臍上に當て右手掌を仰げ、左手の上に重ねて大母指を以て[三]頭をして相拄へしむ、此の印を名づけて第一[四]最勝三昧の印と爲す。能く狂亂一切の妄念を滅して心をして一境ならしむ。即ち[五]阿彌陀如來の印なり。亦如上の毘盧遮那如來の眞言を誦して[六]護字觀を作し、當に此の字を以て月輪の中に處し頂上に置くべし。紅蓮華の色の如し。觀想成じ已つて漸く遍身を觀ずるに皆紅蓮華色なり。此の身即ち阿彌陀如來と成る。此の想成じ已つて即ち頂上より紅蓮華色の光を放ち亦無數百千億の光を以て眷屬となる。一一の光の中に皆無量の紅蓮華色の菩薩有りて而も現じて各此の印を爲す。深三昧に入り、光西方恒沙世界を照らし、彼の中の衆生斯の光に遇はゞ皆三昧に入る。

復た北方に於て面を南に向け坐して亦如上の金剛結跏を作し端身正坐して左の手を前の如く、衣

【一】寶生如來。金剛界五佛の一、萬法を能く生ぜしむる德を主る如來、南方の主。
【二】惹。寶生如來の種子とす。
【三】頭。頭指即ち親指なり。
【四】最勝三昧印とは、阿彌陀定印なり。
【五】阿彌陀如來。五佛の一、西方の主。
【六】護とは、阿彌陀佛の種子。

唵吽惹護娑

云何んが此の陀羅尼を觀察せん、當に唵字を以て前所觀の月輪の中に安んじて頂上に置くべし。此の唵字を觀ずるに色珂雪の如し。此の想成じ已つて卽ち自身を見るに月輪の中に坐して便ち【七】毘盧遮那を成就することを得。是の如く等の無量無邊微塵數の智を以て此の身を成就す。是れ則ち名づけて一切智を具すと爲す。亦名づけて金剛智を具すと爲すことを得。是の觀を修する者の瑜伽の智は亦是れ般若波羅蜜多なり。亦は則ち名づけて諸菩薩の果と爲す。此の果に能く三種の眞實を得。何等をか三となす、一は前に得せし眞實不可思議一切智々、諸佛の境界三昧なり。二には前に得せし眞實祕密の眞言、三には前に得せし眞實祕密の印契なり。前の觀成じ已つて便ち頂上に白光明を出づと想へ。復、百千萬億の光明を以て眷屬となし、下阿鼻地獄に至り、上阿迦尼吒天に至る。其中所有一切衆生の無始生死の無明黑闇に盲いて智眼なきものを此の般若波羅蜜の燈を以て彼の佛眼を開く。深山谷幽闇の處は、日月の光明を照すこと能はざる所なり。若し一燈を然せば久遠の闇冥一切皆除くが如し。何を以ての故に、法是の如くなるが故に、毘盧遮那如來の三昧の白色の光を放つこと亦復是の如し。

復次に、善男子、行者此の三昧より起ち已つて、次に復た不動三昧に入り、面西方に向け、亦前の如く金剛結跏を作し、端身正坐して、應に左手を以て被る所の衣服の兩角を以て交過して其の手の腕に遶り、拳を以て之を執り上に兩角を出し、右の手地を按ずべし。此れ卽ち名づけて【八】能摧伏の印と爲す。一切の衆魔及び諸の外道諸の惑業等皆動ずること能はず。卽ち是れ【九】阿閦如來の印なり。次に亦默して如上所說の毘盧遮那如來の眞言を誦して、應に【一〇】吽字を以て月輪の中に處して頂上に置くべし。此の吽字を觀じ以て青色に爲して觀想成じ已つて次に遍身を觀じ皆青色に作せ。此の身卽ち阿閦如來と成る。此の觀成じ已つて卽ち頂上より青色の光を放ち、亦無數百千億の光を以

は釋迦牟尼佛の本師たる大毘盧遮那如來なり。

【七】毘盧遮那云々。是より五佛を說く。

【八】能摧伏の印。阿閦觸地の印ともいふ。

【九】阿閦如來とは、金剛界五佛の一にして東方を主宰する佛、菩提心を表したるもの。

【一〇】吽。ウン字と讀む、阿閦如來の種子なり。

卷の第二

陀羅尼品第二の二

爾の時に世尊、象王の迴るが如く、普く大衆を觀じ、復た一切法自在王菩薩摩訶薩に告げて言さく、善男子、此の會の中に二種の人あり、一には[一]成就、二には未成就なり。我今重ねて未成就の者の爲に善方便を以て世諦に隨順し、譬喩の言詞を以て一乘の法を說かん、世に法あり、[二]迦樓羅と名づく。此の法を修せんと欲せば、應に先づ迦樓羅の像を圖畫すべし、審諦に觀察し觀行純熟して然して畫像を去り、手に印契を結び、其の自身迦樓羅と成ると想ふて[三]五大觀を作すべし。一は地を觀じて白色觀を作す。二は水を觀じて綠色觀を作す。三は火を觀じて黃赤觀を作す。四は風を觀じて黑色觀を作す。五は空を觀じて青色觀を作す。此の觀成じ已んぬれば一切の諸毒皆非毒と成る。謂く若しは有情の毒、若しは非情の毒、或は迴つて互に或は取り或は捨てしむるに、縱任にして自在なり。善男子、菩薩摩訶薩も亦復是の如し、若し觀に入らんと欲せば、先當に默して此の前の迴向陀羅尼門を念じ、然して後に、當に毘盧遮那如來の三昧に入るべし、謂く此の身體を觀じて金剛堅不可壞と成る。當に身を以て[四]金剛結跏を作すべし。謂右の脚を以て左の髀の上を厭し端身正坐して舌根微動し脣齒相合せて[五]金剛語を作すべし、金剛語とは謂く言聲なし、但心默念して堅牢の智を以て諦に白心を觀じて以て月輪と爲し當に鼻端に於て馳散せしめず。清淨圓滿にして色凝雪と牛乳と水精との如し。而して此の月輪を菩提心と爲す。此の菩提心は本より色相なく、未成就の諸の衆生の爲の故に、月輪の如しと說く。應に右の手を以て[六]金剛拳に作り心に當て、左手の頭指を握るべし。此を能與無上菩提最尊勝印と名づく。即ち是れ本師毘盧遮那如來の印なり。爾の時に世尊即ち陀羅尼を說いて曰く、

【一】成就とは、菩薩は三大無數劫の間修行するのであるが就中初阿僧祇劫を經れば一分の惑を斷じて初地（歡喜地）に入る、然るに地上に十種の階級あり、之を十地といふ。十地の行を滿じて佛果に至るなり。初地已前を地前といひ之れ凡夫の位、初地已上を地上といひ聖者の位といふ。今成就といふは地上の菩薩、未成就とは地前の菩薩なり。

【二】迦樓羅とは、迦樓羅觀といふ。彼の迦樓羅鳥が毒蛇を噉食して其の害を除くが如く諸の災害を除く觀法を迦樓羅觀といふ、義を以て微妙觀と義とも譯す。

【三】五大觀。地水火風空の五大を觀ずるので、地大を白色水大を綠色、火大を黃赤色風大を黑色、空大を青色に觀じ之によつて、煩惱の毒を除却するなり。

【四】金剛結跏とは、半跏趺坐なり。半跏趺坐とは右の脚を以て左の髀の上を厭すこと。

【五】金剛語。金剛念誦のことにて音聲を發せずして經文を默誦すること。

【六】金剛拳等とは、智拳印といふ。智拳印とは右の手を金剛拳にして左手の頭指の端を握ること。之は金剛界大日如來の結ぶ印なり。

所説の如く、十力無畏諸功徳等皆悉く具足す。若し人誓くも此の陀羅尼に於て思惟すること一遍せば、便ち百轉して帝釋宮に生ずることを得ん。復百轉して梵宮に生ずることを得ん。夜、夢中に於て、佛菩薩の爲に妙法を說きたまふことを見、諸の惡夢なく、諸の[六一]總持に於て皆成就することを得。執金剛菩薩護念し攝受して願に隨つて諸佛の淨土に往生すべし。

【六一】總持。陀羅尼のこと一字の中に無量の意味が含攝されるから總持といふ。

清淨の音聲を出して諸佛菩薩に廻向し供養すべし。復種種の華樹ありて妙華香を發し種種の鬘樹諸の鬘帶を垂れ、種種の幢樹高顯建立し、種種の幡樹、影を接し瓔珞を連ぬ。是の如く等の一切妙物を持す。無我の心を以て一切諸佛諸大菩薩に廻向し供養すべし、復一切の佛眼所見の十方無邊の一切世界の大供養雲を以て供養を爲せ、いはゆる種種の華雲種種の香雲・帳雲・塗香雲・末香雲・寶蓋雲・寶座雲・寶幢雲・寶幡雲・妙寶衣服雲・衆寶資具雲・天諸上味雲・摩尼寶聚雲、是の如くの種種無量の色類諸の寶供雲を以て一切諸佛諸菩薩等に供養せよ。復當に願くは小千世界を以て一燈の盞と爲し、中に香油を百須彌量を滿たし、以て其の炷と爲し、然すに寶燄を以てして、大光明を發し一切の諸佛菩薩を供養す。是の如く供養して窮盡あることなし。復當に一切如來を勸請すべし。菩提樹に往いて衆魔を降伏し等正覺を成じ、妙法輪を轉じ、久しく大劫に住し[五七]般涅槃したまふ莫れと。復此の種種の善根を以て衆生に廻向す。願くは諸の衆生に速に阿耨多羅三藐三菩提を證せしめん。是の如く廻向する時、能廻向の心を見ず、所向の境を取らず、所廻の善根に著せざれば[五八]三輪清淨なり。復た次に一切如來一切菩薩一切衆生、是の如く等の類の所有の功德我皆隨喜す。復是の願を作すべし。此の善根を以て願くは我等が一切諸障極重惡業をして皆消滅することを得しめたまへと。爾の時に世尊卽ち[五九]廻向陀羅尼を說いて曰まはく、

唵　娑嚩　唎娑嚩　囉　微嚩嚢　婆囉摩訶斫迦囉　嚩吽

佛の言く、如上に說く所の種種の供具を、此の廻向陀羅尼の力を以て、諸佛の前に於て、悉く眞實の供養を成就し、一切諸佛皆悉く攝受することを得べし。若し善男子及び善女人能く此の大廻向輪陀羅尼門に於て、若しは時非時、若しは晝若しは夜、默念して一遍觀察し想を運んで前の供具を以て諸佛菩薩に恭敬し供養することあらば、此の力に由るが故に[六〇]五無間等の極重の罪業皆消滅することを得。何に況んや輕罪を而も除滅せざらんや。一切の煩惱は皆輕微なることを得ること、前

【五六】大を一本には天となる。

【五七】般涅槃。涅槃即ち圓寂の理に入ること。

【五八】三輪清淨、身と語と意との三種の作用の清淨なること。

【五九】廻向陀羅尼とは、尸羅達摩の譯なる佛說廻向輪經の中にも之と同樣なるものあり。

【六〇】五無間　五無間業即ち五逆罪なり。父を殺し母を殺し阿羅漢を殺し佛身より血を出し和合僧を破ること。

香樹・旃檀香樹・隨時香大葉香樹を擂す。其の樹四時に華敷相續し香氣美妙にして、若し[五四]嗅(香)かば沈寂虚凝なり。是くの如の無量の種種の香樹芬芳郁烈して能く人心を悅ふ。復、種種の無有主宰の如意等の樹あり。心の所願に隨ひ、皆滿足することを得、大海の中の種種の摩尼及び如意寶なり。復、種種の寶迷盧山・摩訶迷盧山・羯邏斯山・健駄末陀山・摩維耶山・尾儞耶山・民陀維山・摩訶民陀維山・目眞隣陀山・摩訶眞隣陀山・金剛山等是の如くの山の頂に種種の寶莊嚴種種の寶樓閣種種の寶巖窟種種の寶帳蓋種種の寶堂宇、種種の寶階陛、種種の寶窓牖、種種の寶を以て塗飾せん。種種の寶梁柱、種種の寶庫藏。吠瑠璃等の種種の寶牆あり。復奇妙なる種種の色類の無有主宰の諸天の宮殿あり。復種種の[五五]倶蘇摩等の天の諸の妙華ありて、見る者厭ふことなく清涼悅樂す。復た種種の諸の妙音聲ありて、能く聞く者をして身心安樂にして諸の熱惱なくして清涼を得、貪瞋を斷伏し、癡毒を散滅し、惡業を摧壞して餘あることなからしむ。いはゆる天帝釋の聲、梵天王の聲、種種の天の聲[五六]諸大仙女の歌詠の聲、天の諸の樂器拆擊に因らず、微妙の聲を出し、簫笛・箜篌・琵琶・瑟螺貝等の聲、忉悧天鼓の聲、牟陀羅鼓の聲、復種種の諸天鳥の聲及於び、山林泉流の鳥聲あり。所謂白鶴、孔雀鳥、鸚、鴛鴦、拘枳羅鳥、命命之鳥、迦陵頻伽種種好鳥鳴囀の聲、及び鹿王等の諸の妙音聲なり。復種種の雲聲・地聲・水聲・火聲・風聲・大海波濤、是の如く等の聲、若し人聞かば悉く能く解了し愛樂して厭ふことなく、耳根安靜にして其聲深遠なり。諦實淸徹にして能く善根を生じ、文字名句悉く皆具足して、義と相應し深法理に契ひ、善く時宜に合ふ、所謂三乘平等の聲、演說三明の聲、莊嚴檀那波羅蜜の聲、淸淨尸羅波羅蜜の聲、能生羼提波羅蜜の聲、勸 修精進波羅蜜の聲、成就禪那波羅蜜の聲、廣大般若波羅蜜の聲、心と和合する大慈の聲、覺と和合する大悲の聲、光影和合大喜の聲、虛空に同じき大捨の聲、出生三乘の聲、不斷三寶の聲、分別三聚の聲、淸淨三空の聲、觀察四諦の聲、觀察智慧の聲、智者不毀の聲、聖者稱讃の聲、量等虛空の聲、是の如く等の

涅槃の一にして無住とは生死に安住せず涅槃に安住せず、生死と涅槃とに大自在を得て衆生を教化すること。

【五〇】 四無礙解。法義辭辯の四無礙智。

【五一】 十八不共法とは、十八不具法ともいひ佛に限つて具足する功德なり。一には諸佛は身に失なし、二には口に失なし、三には念に失なし、四に異想なし、五には不定心なし、六知り已つて捨せざるなし、七には欲滅することなし、八には精進滅することなし、九には念滅することなし、十には慧滅することなし、十一には解脫滅することなし、十二には解脫知見滅することなし、十三には一切の身業は智慧に隨つて行ず、十四には一切の口業は智慧に隨つて行ず、十五には一切の意業は智慧に隨つて行ず、十六には智慧もつて過去世を知ること無礙なり、十七には智慧もて未來世を知ること無礙なり、十八には智慧をもつて現在世を知ること無礙なり。

【五二】 四攝とは、布施愛語利行同事。

【五三】 六通とは、六神通なり。

【五四】 大正藏經には、嗅者とあれど一本には嗅香となる。

【五五】 倶蘇摩、花の一種なり。

種種惑業の爲に羅網せられ、憂迫恐怖し恒に本心の自性寂靜を失ひ、種種の三摩地門陀羅尼門、諸地諸忍般若波羅蜜多甚深の住處を遠離し、亦復慈悲喜捨、諸の菩薩戒、[四五]四無礙智、[四六]六通、[四七]十力、[四八]四無所畏無忘失法、[四九]無住涅槃を遠離し、一切の隨眠は我見に具足し、一切の功德は我身に容無なり。七菩提分八聖道分、是の如く等の法百千萬種悉く皆遠離し、無數の苦惱障礙留難に恒に惱害せらる。唯願くは諸佛諸大菩薩、大慈悲哀愍護念を起し、我がために主となり救となり、歸となり依となり趣となりたまへ。願くは我等をして速に大菩提の道を圓滿することを得しめたまへ。及於び無量の菩薩の眷屬、如來の十力、四無所畏[五〇]四無礙解[五一]十八不共[五二]四攝三昧解脫總持[五三]六通諸道福德智慧[五四]是の如くの一切の諸の功德海、願くは我等をして皆滿足することを得しめたまへ。又復十方一切の諸佛諸大菩薩當に我を證知すべし。當に我を哀愍して我が供養を受けたまふべし。願くは供具をして積集圓滿し及與び我が身を、十方一切の世界に充滿し、及び十方無有主宰の廣大の莊嚴無量の供具を攝して現前して諸佛菩薩に供養せしめたまへ。いはゆる種種の妙寶諸天の宮殿各妙寶を以て莊嚴を爲す。衆寶欄楯分布し行列して寶樹寶山以て映帶を爲す。寶座寶蓋寶幢寶幡寶器寶珠寶鈴寶網寶光 寶燄及び寶功德一一無量無數の寶洲摩尼寶、聚其中に充滿して、諸の寶燈樹種種の妙寶間錯し莊嚴し金燄熾を發し寶網羅覆す。復無數の妙寶蓮花あり閻浮檀金を以て其の臺と爲す。眞金を葉となし菡萏敷榮し天より寶雲を興し、天の寶雨を雨らし、天の寶樹を降らし天の寶華を散らし、衆の寶光を發し、衆の寶藏を開く。復無數の閻浮檀金諸天の宮殿あり、衆寶を以て莊嚴し妙寶廓宇金剛を牆と爲し、衆寶欄楯周匝圍遶し、種種の天仙衆妙の園苑、華林香草恭敷布護し、無數の龍宮阿修羅宮に、各種種の林木殿堂香華寶器あり、是の如く等の無量無邊曾つてより未だ受用せざる衆寶供具を以て、悉く將に十方の諸佛菩薩に迴向し、供養せんとす。復た十方一切世界の種種の妙樂及び天の甘露、天の諸の珍膳色香美味を皆悉く具足せるを攝し、又十方一切世界の諸の妙香樹・龍腦

【四五】 四無礙智。又は四無礙辯ともいふ。一、法無礙とは教法に滯らざること、二、義無礙とは義理を知りて停滯せざること、三、辭無礙、言說に自由に通達すること、四、樂說無礙說法に於て無礙自在なること。

【四六】 六通。六神通にして、一、神境通又は身境通とも稱し身に變現作用をなすこと。二、天眼通色界天の眼を得て自在に照見すること。三、天耳通色界天の耳根を得て自在に聽聞すること。四、他心通とは他人の心を自由に推量すること。五、宿命通とは過去世の運命を自在に知ること、六、漏盡通とは一切の煩惱を斷盡することが自在なること。

【四七】 十力。如來の具へる十通りの智力なり。

【四八】 四無所畏とは、四の有する四無畏にして、一、一切智無所畏とは佛は大衆に對し我は一切を知ると大言するも何等怖れざること。二、漏盡無所畏とは佛は一切の煩惱を斷盡せりと大言するも遜色なきこと。三、說障道無所畏とは佛は正道を障礙する法を說きて怖れなきこと。四、說盡苦道無所畏とは佛は盡苦の道を說きて怖心なきこと。

【四九】 無住涅槃。大乘の四種

益なし。此の諸の凡愚は猶ほ生盲の燈光を見ざるが如し。又聾人の細語を聞かざるが如し。砂鹵の地の蓮華を生ぜざるが如し。世尊、國王大臣長者ありて飢險の世に於て、衆の甘美天の諸の珍饍を食し、高樓閣に昇つて無量の饑餓の衆生に告げて是の如くの言を作す。我れ是の如くの種種の上味を食すと、是の言を作すと雖、諸の饑人に於ては、都て益する所なきが如し。今佛說きたまふ所、此の衆會に於て、未成就の者も亦復是の如し都て利益なし。

爾の時に佛、一切法自在王菩薩に告げて言さく、善い哉、善い哉、善男子善能く是の如くの深法を諮問す、一切衆生を利益する所多し。諦に聽き諦に聽き善く之を思念せよ。吾れ當に汝及び此の衆會の爲に諸の方便を以て汝等に示教すべし。今汝不可思議一切智智の諸佛の境界甚深三昧を解することを得たり。善男子若し諸の佛に、阿耨多羅三藐三菩提を成就することを得んと欲せん者、若し善能く自心を知らんと欲せん者、若し大慈悲の手を以て生死の泥より衆生を拔かんと欲せん者あらば、應に先づ大慈悲心を發起し普く衆生の爲に三寶に歸依し[四三]菩薩戒を受け、菩提心を發し至誠に懺悔して是の如くの言を作すべし。唯だ願くは十方一切の諸佛及與び住地の[四四]金剛智を得たまへる諸大菩薩當に證知すべし。我れ當に我を憶念すべし、我某甲菩提心を發せども未だ妙道に任せず、今身を將て命を十方一切の三寶に歸依す。唯願くは諸佛諸大菩薩、慈悲心を起して我某甲等を哀愍攝受したまへ、無始流轉より已來三界生死の輪中に處在して惡趣に沈溺し、苦の籠檻に入り諸惡に顚墜し、無明の羅刹大力勢あつて、諸の煩惱の怨長夜に逼迫して、主なく救なく、歸なく依なく、所趣あることなく、敎導あることなく、邪見險惡道の中に住して、生死に趣向し涅槃に背捨し、三惡道に入つて自ら出づること能はず。險惡廣大の深坑に墮ち、惡友を追逐し惡敎に隨順し、一切の諸善知識を遠離して、都て何者か損をなし、何者か益をなす、何者か是れ善、何者か是れ惡なるかを覺知せず。不善の法の爲に繫著せられて捨せず一切の三乘の聖人に乖背し、長夜に常に生老病死憂悲苦惱

【四三】菩薩戒。大乘の菩薩の堅固に持つべき戒律にして普通總じて三聚淨戒といふ。卽ち一攝律儀戒とは五戒十戒等一切の戒律を持つこと、二攝善法戒とは一切の善法を修行すること、三攝衆生戒とは饒益有情戒ともいひ、一切衆生を利益することである。

【四四】金剛智。金剛とは金剛杵とて、印度古代の武器、之に自體堅固にして一切の物を摧破する作用あり、今金剛杵の如き堅固にして傾動なき智を金剛智といふ。

く別なく斷なし。是の如くの一切は、皆大慈大悲を以て根本とし、方便波羅蜜の攝受する所なり。善男子、是の故に、當に知るべし、我今此の諸の菩薩等の大衆の中に於て、是の如くの法を說きたまふ。廣大の菩提心を淨めんための故に、一切をして自心を了せしめんための故なり。是の故に一切法自在王、若し善男子善女人有つて菩提眞實の性を知らんと欲せば、當に自心を了すべし、其の心性の如きは卽ち菩提の性なり。云何んが能く心性を了知せん。謂く此の心性は一切の相に於て、若しは[三八]形、若しは[三九]顯、若しは復色蘊受行識、若しは色聲香味觸、若しは有執受、若しは無執受、若しは[四〇]十二入若しは[四一]十八界。是の如く等の法を觀察し推求するに竟に不可得なり。善男子、若し諸の菩薩是の如く了知せば卽ち第一清淨法光明門を成就することを得べし。此の門に住し已んぬれば、任運に此の不可思議の一切智智諸佛境界甚深三昧を得。菩薩此の三昧を獲得すれば已に一切の佛と平等平等にして、及び一切衆生の語言陀羅尼三昧を得。復隨順諸衆生心陀羅尼門を得て、常に能く無間に衆生を利益し、無爲界に於て具足圓滿し、[四二]斷常六十二等の一切の邪見を遠離し、正見圓明なり。善男子若し諸の菩薩是の三昧に住すれば、一切の佛法功用を作さずして任運に成就す。善男子我今略說す。若し能く此の三昧に住する者あらば、無量無邊無數の功德皆悉く圓滿せん。

爾の時に一切法自在王菩薩、復佛に白して言く、世尊佛の所說の如し。虛空性の如きは、卽ち是れ心性なり。心性の如きは卽ち菩提の性なり。菩提の性の如きは卽ち陀羅尼の性なり。其の虛空の性と心性と陀羅尼性と無二無別なる者なり、是の如くの義は甚深甚深にして通達すべきこと難し。趣入すること得難し。思議すべからず、心地を超過して是れ凡愚劣解の知る所に非ず。此會中に於て二種の人あり。一には菩薩の位を滿足せる人は則ち利益を得、二には菩薩の功德を成就することを得ざるなり。謂く摩伽陀國主阿闍世王及び諸比丘・比丘尼・優婆塞・優婆夷等の無量の衆生は則ち利

【三八】形。形色とし方圓三角半月等の形をいふ。
【三九】顯。顯色とて靑黃赤白黑等の色をいふ。
【四〇】十二入とは、十二處ともいひ、眼耳鼻舌身意の六根と六根によつて感知せられる色聲香味觸法の六境をいふ。
【四一】十八界六根と六境の外に主觀的作用たる眼識・耳識・鼻識・舌識・身識・意識の六識を加へたるもの。
【四二】斷常六十二等とは、斷常の二見や六十二見なり。斷見は斷滅の見にて我は死して無に歸すと邪思惟すること、常見は常住の見にて人は常住に存在すと執着する邊見、六十二見とは我見に就て起す所の妄見なり。

慈悲を以て根本とし、〔三一〕方便を修習して無上菩提を以て究竟と爲す。善男子、此の中には、何者をか名づけて菩提となすや。善男子菩提を知らんと欲せば當に自心を了すべし。若し自心を了すれば、卽ち菩提を了す。何を以ての故に、心と菩提との眞實の相は畢竟して推求するに倶に〔三二〕不可得にして虚空に同じ。故に菩提の相は卽ち虚空の相なり。是の故に菩提は所證の相もなく、能證の相もなく、亦能所契合の相もなし。何を以ての故に、菩提は畢竟じて諸相なし。故に善男子、一切の法は卽ち虚空の相なるを以てなり。是の故に菩提は畢竟して〔三三〕無相なり。

爾の時に一切法自在王菩薩、復、佛に白して言く、世尊、若し此の菩提の相、虚空に同ならば、〔三四〕一切智の體、當に何の所にか求むべき。云何んが菩提を證得し現前せん。〔三五〕一切智智當に何に於て生ずべきや。

佛、一切法自在王菩薩に告げて言く、善男子、一切智の體は、當に心に求むべし。一切智智と及與び菩提とは心より而も生ず。何を以ての故に、心の實性は、本より清淨なるが故に、善男子、〔三六〕此の心性は、內に非ず外に非ず、中間にも在らず。若し、善男子一切如來、此の心相は青に非ず黃に非ず赤に非ず白に非ず紅に非ず、紫に非ず、亦金色に非ず、長に非ず短に非ず、圓に非ず方に非ず明に非ず暗に非ず。男に非ず女に非ず、非男女に非ず、亦復是れ亦は男亦は女に非ず、善男子、此の心は欲界の性に非ず。色界の性に非ず。無色界の性に非ず。天に非ず、龍に非ず、夜叉に非ず、乾闥婆に非ず。阿修羅に非ず、迦樓羅に非ず、緊那羅に非ず、摩睺羅伽、人非人等の一切と同類に非ず。善男子、此の心は眼に住せず、亦復耳鼻舌身意に住せず、三世の中に於ても亦見るべからず、何を以ての故に、此の心は虚空相に同ずるが故に。是の義を以ての故に一切麁細分別を遠離せり。何を以ての故に、此の虚空性は、卽ち心性なるが故に、其心性の如き卽ち菩提の性なり。菩提の性の如き卽ち陀羅尼の性なり。善男子是の故に此の心と虚空と菩提と〔三七〕陀羅尼との性は二なく二分な

【三一】方便を修習とは、自利利他の方便を修習して佛果を成就すること。

【三二】不可得とは、絶對的にして一切の認識を超絶するの謂なり。

【三三】無相とは、一切の相を具足せること。

【三四】一切智。一切のことを知る智。

【三五】一切智智。佛自證の智と稱して一切の智を總括したる總體智なり。此の智能く萬物の眞理を如實に契證するもの。

【三六】此の心性の下は自心の本性の絶對無相にして一切の相對差別の概念を超越せることを説く。

【三七】陀羅尼。總持と譯す。一字の中に一切の義理を總括して任持するが故なり。今は密教の根本教義とする阿字をいひしものなり。

す。何等をか四と爲すや。一には、三世諸佛皆此の勝三昧に入るに由るが故に、阿耨多羅三藐三菩提を得。我も亦是の如し、三無數劫に〔二七〕諸度を修し、六年苦行すれども菩提を證せず。此の定に入るに由つて便ち無上正等菩提を得たり。是の因緣を以ての故に斯の瑞を現ず。二には此の三昧に由るに旣に言說なし。體性寂滅にして宣示すべからず。方便善巧の力を以ての故に、衆生の爲に說かんと欲するが故に斯の瑞を現ず。三には我れ昔此の菩提樹下に於て是の三昧を得て等正覺を成じ、恩に報ゐんが爲の故に今是の處に於て此の三昧を說けり。三世の諸佛も亦復是の如し。皆此處に於て此の三昧を說けり。故に斯の瑞を現ず。四には十方恒沙世界、無數諸來の菩薩摩訶薩及び摩伽陀國の主阿闍世王・比丘・比丘尼・優婆塞・優婆夷・天龍夜叉、此の諸の衆會及與び法界の一切衆生の爲に、此の三昧を說かんと欲す。是の因緣を以ての故に斯の瑞を現ず。

爾の時に、大衆此の說を聞き已つて、踊躍歡喜し身心淸涼なり。悲感欣慕して自ら持つこと能はず。譬へば人あつて毒箭心に中つて更に所思なく、唯だ良醫の毒箭を拔除し、我をして安樂ならしめんことを思ふが如し。諸の菩薩衆も亦復是の如し。諸法を思はず、唯如來の此の三昧を說きて、諸の有情の生死の大夜無明黑暗の知見する所なきを拔き、諸の煩惱を破し正法眼を開き、智光明を得しめたまはんことを希ふ。時に此の衆會此の念を生ずと雖、佛の威德の故に敢て諮問せず。

爾の時に、一切法自在王菩薩摩訶薩、佛の神力を承けて、五體を地に投じ佛足を頂禮し、胡跪合掌して佛に白して言さく、世尊彼の不可思議一切智智の諸佛境界は、爲く、何れの法を以て〔二八〕其の因とし、復た何れの法を以て根本とし、云何んが修習し、云何んが究竟するや。

爾の時に、世尊、一切法自在王菩薩摩訶薩に告げて言く、善哉、善哉、善男子、汝今善能く斯の義を諮問す。未來世に於て利益する所多く。一切衆生を安樂する所多し。諦かに聽き諦に聽け、善く之を思念せよ。當に汝が爲に說くべし。善男子、此の深三昧は〔二九〕菩提心を以て其の因と爲す。〔三〇〕大

【二七】諸度。主として菩薩の修行すべき檀波羅蜜・戒波羅蜜・忍辱波羅蜜・精進波羅蜜・禪定波羅蜜の六波羅蜜をいふ。

【二八】是より以下の文は大日經住心品の文と大同にして三句の法を說く、三句とは菩提心を因とし、大悲を根とし、方便を究竟となすことなり。

【二九】菩提心を以て云々、三句の中第一の菩提心を因とすること。菩提心に菩提を求める主觀的の心と主觀の心智によつて求めらる菩提其ものとの二あり、前を能求の菩提心といひ後を所求の菩提心といふ。

【三〇】大慈悲云々、大慈悲を根本とすることにて大悲の修行を根本とするの意。

有悉く皆五色なり。彼の中の衆生亦見るに一切皆五色を具す。是の如く所照の一切世界、一一、下は阿鼻地獄に至り、上は阿迦尼吒天に至つて諸の世界を照して佛事を作し已つて、光を收め、本に歸り、其の白色の光還つて上より下つて佛所に來り至つて、右に如來を遶つて三匝を經已つて、佛の頂より入る。帝青色の光、還つて、東方より來つて、佛所に至り、右に遶ること三匝して佛口より入る。鎔金色の光還つて南方より來りて佛所に至り、右に遶ること三匝して、佛の右の肩より入る。紅玻璨色の光還つて西方より來つて佛所に至つて、右に遶ること三匝して、如來の背より入る。五色光明還つて北方より來つて佛所に至り、右に遶ること三匝して佛の左の肩に入る。此の光明展照して還收すと雖、如來の身體は增減なきこと、譬へば月光虛空を遍ねく照して增減あることなきが如し。亦、油水及以び融蘇を沙聚の中に投ずるに亦增減なきが如し。又雪山の浮雲を騰出し虛空に遍滿すれども、須臾に卷き攝めて還つて雪山に歸して、纖毫も亦跡なく、爾も其の雪山の體に增減なきが如し。

爾の時に世尊復た[二四]三昧に入りたまふ。而も此の三昧は名字あることなし。無言無說不可思議にして卽ち一切智諸佛の境界なり。三昧に入り已つて、時に此の大地[二五]六種震動す、所謂東に涌き西に沒し、西に涌き東に沒し、南に涌き北に沒し、北に涌き南に沒し、中に涌き邊に沒し、邊に涌き中に沒しぬ。

爾の時に會中に一の菩薩摩訶薩あり、一切法自在王と名づく。佛の[二六]神力を承けて卽ち座より起ちて身の威儀を整へ、偏に右の肩を袒ぎ佛足を頂禮し胡跪合掌して、佛に白して言さく、世尊何れの因何れの緣あつて、大光明を放ち地六に震動するや。

爾の時に、佛、一切法自在王菩薩に告げて言はく善い哉、善い哉、善男子、汝今善能く斯の問を啓發す。吾れ當に汝がために分別し解脫すべし。善男子、四の因緣あつて斯の光明を放つて大地震動

【二四】三昧。禪定と譯す。心を統制して散亂の心を除く法なり。

【二五】六種。東西南北上下の六方をいふ。

【二六】神力。神通力にして卽ち神妙不可思議の力なり。

龍八部人非人等種種差別なり。それ無信の者は都て所見なし。猶ほ生盲の日月を見ざるが如し。その見ることを得る者は其の種類に随て其の身の種種威儀を見、其の類音に随つて種種の聲を聞き、其の樂ふ所に随つて種種の法を聞き、其の力能に随つて種種の解を生ず、衆生に随つて是の如く知見すと雖、而も如來の身は一味無二なり。所謂一解脱味[一九]なり、猶ほ虚空の一切の麁細の分別及び無分別を離れたるが如し。亦大地の能く一切世出世間天龍八部の依持と爲つて住せしめ生長成熟して厭倦なきが如し。又火大の能く衆生の諸の煩惱の薪を燒きて厭倦あることなきが如し。亦風大の能く一切煩惱の塵垢を飄して亦厭倦なきが如し。又水大の悉能く一切衆生所有の善根を滋長し、煩惱の熱を除きて清涼の樂を得て亦厭倦なきが如し。

爾の時に世尊、忽ちに頂上肉髻の中、膚骨毛孔より大光明を放ち、其の光鮮白なり。復無量百千の光明を以て而も眷屬となし、普く世間を照し、下、阿鼻地獄[二〇]に至り、上、阿迦尼吒天[二一]に至り一切の所有皆同じく白色なり。其の中の衆生皆一切の山・林・河・海・情・非情物を見るに皆同じく鮮白なること猶ほ乳色の如く、亦雪山の如し。又口中より大光明を放つこと帝青色の如し。亦無量百千の光明を以て而も眷屬と爲し、東方を照したまふ。金剛座より東、恒河沙の世界を盡す。其の中の所有の山河石壁草木叢林情非情の境皆帝青色[二二]なり。彼の中の衆生皆一切を見るに帝青色の如し。復右の肩より大光明を放つこと鎔金色の如し。亦無量百千の光明を以て而も眷屬となし南方を照らす。金剛座より南、南方恒沙世界を盡して其の中の所有皆鎔金色なり。彼の諸の衆生亦見るに一切皆鎔金色なり。復背上より大光明を放ち紅玻璃色[二三]なり。亦無量百千の光明を以て眷屬となし、西方を照らす。金剛座より西、西方恒沙の世界を盡して其の中の所有皆紅玻璃色なり。彼の中の衆生亦見るに一切皆玻璃色なり。復、左肩より五色の光を放つ、所謂青黃赤白及び綠色なり。亦無量百千の光明を以て眷屬となし、北方を照らす、金剛座より北、北方の恒沙世界を盡し、其の中の所

【一九】解脱味なりとは、大日經住心品に一切智々の道は一味なり所謂如來の解脱味なり云云とある文と大同なり。

【二〇】阿鼻地獄。Avici 無間地獄にして即ち苦惱を間斷なく受くるの意。

【二一】阿迦尼吒天 Akniṣṭha 色究竟天にして即ち三界の中の色界天の最上處なり。

【二二】帝青色とは、寶珠の色なり。

【二三】紅玻璃色と紅の水精の色なり。

紫金山の如く、光明大衆を映蔽す　亦、摩尼寶光耀　一切寶光明を超奪するが如し。福德智慧方便門は、精勤にして一切皆善巧あり。遍ねく世界を觀ずるに倫匹なし。況んや復能く世尊に過ぎんや。我れ大雄の世間を哀み、智慧大海光明の照すを見たてまつる。五體を佛足の下に投げ、踊躍歡喜して自ら持し難し、我れ如來世間燈の能く功德最勝智を生じたまふことを讃して、此の福聚を以て含識を利し一切速に大菩提を證せしめん。

爾の時に、文殊師利童子菩薩摩訶薩、此の伽陀を説いて佛を稱讃し、已つて合掌恭敬して如來を瞻仰し、目暫くも捨てず、一心に如來所住の微妙の法性を思惟したてまつるに、甚深難入にして見相すべきに非ず。見難く解し難し。是れ凡愚外道の境界に非ず、微妙寂靜にして、不可思議たり。能く諸佛の無等等智を生じて不可思議なり。法界の差別の教法を流出して不可思議なり。唯し如來のみ有つて究盡したまへり。明了に無所住虛空法界に住して現に諸法の本性清淨眞實際を證して、諸佛の無礙解脱を得、常住不變にして安樂寂靜なり。其の身一切の刹土に充滿し、普く一切衆生の前に現じて三際平等の源底に入る。是れ心識稱量の境界に非ず、無量劫に於て、思惟し宣説すとも窮盡すべからず。文殊師利是の如く審諦、微細に深法の性を觀察し已に默然として住せり。

陀羅尼品第二の一

爾の時に、世尊常に三世平等の法性に住して三昧に入りたまふ。普隨順衆生心行と名づく。三昧力を以て時會の中に於て調伏すべき所、一切大衆各に佛を見ること種種不同なり。所謂或は衆生あり、如來相好の身を見、或は衆生あり、聲聞身と見、或は衆生あり、菩薩身と見、或は衆生あり、梵天身と見、或は衆生あり、大自在天身と見、或は衆生あり、那羅延天身と見る。是の如く乃至天

【一七】大雄。佛をいふ。
【一八】含識意識を含むの意で人類のこと。

熱惱を除て身心清涼なり。是の如きは皆如來を供養したてまつらんが爲の故に斯の瑞を現ず。爾の時に當つて金剛座を去り、四隅に於て近からず遠からずして各寶樹あり、地より其の樹を涌出す。其の樹各七寶所成なり。樹身高く聳ゆること二由旬半、枝葉周布して一由旬を覆へり。

爾の時に、文殊師利法王子菩薩摩訶薩、衆會の中に於て如來を瞻仰したてまつり、金剛座に處して、威德特尊、光明炳著にして、大衆を蔽ふこと百千日に逾へたり。餘の光輝を一切衆會に映じ、觀ずるに厭足なく、清淨の心を發し、卽ち座より起ちて胡跪合掌して、[一四]妙伽陀を以て佛を讃して言く。

『如來の威容は量るべからず、　人天及び衆聖に超出すること、　譬へば滿月の空界に澄んで、一切星宿の光輝を奪へるが如し。　佛は慈悲大海の中に處して、　百千の光を放つて照輝すること、　譬へば須彌の巨海に出で、　諸天依住して光明を放つが如し。　常に解脫禪定の中に住して、　自在光明一切を照すこと、　譬へば三千の大梵王、　寂靜の光、　諸の梵天に超へたるが如し。　功德智慧以て心を嚴り、　實相身を嚴つて光普く照す、　帝釋の光及び智慧、一切の忉利天に超過するが如し。　大慈悲の意自ら莊嚴し、　衆生を聖道に安立すること、四天王の能く世を護り　諸の衆生を慰諭し敎化するが如し。　佛日は恒に法の光明を放つて、　普く衆生を照して　[一五]邪見を滅すること、　譬へば千の日光明らかに照して、　摩尼火等の光を映奪するが如し。　佛面圓滿の相は端嚴にして　見る者　歡悦して心清淨なること、　譬へば中宵の圓淨月、　衆生樂み見て　清涼を得るが如し。　大仙、　恒に智の光明を放つて、　一切無明の暗を滅除すること、　夜、高山に大火を聚めて、　遠きを照さゞるなくして、　[一六]光耀を發するが如し。　佛、無我と諸の法空とを說きたまふ。　一切外道皆驚怖すること、　山窟の中に師子吼すれば、　百獸聞いて精光を喪ふが如し。　佛の身は　鎔

【一四】妙伽陀と殊妙なる偈頌のこと。

【一五】邪見、善因善果惡因惡果の道理を顧みないこと。

【一六】耀を一本には輝とす。

釋の如し。七聖寶を具すること轉輪王の如し。決定して[三]法空無我を宣說すること師子吼の如し。光明一切世界を照徹すること夜暗の中に大火を然すが如し。種種の光を放つて普く十方一切世界を照らすこと大摩尼及び衆寶を聚めて分別する所なきが如し。魔怨を降伏し、諸の異見を摧くこと大象王の如し。順に於て違に於て心に垢濁無きこと淸淨池の如し。衆に處して畏れなきこと猶ほ師子の如し。智慧深廣無量無邊にして能く底に至ることなく、能く一切の功德寶聚を生ずること、猶ほ大海の普く法雨を雨して一切を潤洽し、生長成熟すること猶ほ大龍の如し。是の如く等の無量の功德を具せり。

爾の時に一切の衆會一心に合掌し、如來を瞻仰し難遭の想を生じ、如來大悲慈眼を以て普く身光普く照すことを覩ず、爾の時に當つて、菩提樹王の、其の四面各七由旬、地上虛空に於て天龍八部一切の衆會周匝し遍滿して微塵毛端の量處あることなく、聖衆なし。如來の處したまふ所の金剛の座は高きこと一由旬、縱廣正等にして各半由旬なり。無量種百千萬億の微妙の天衣を以て其上に敷き、衆寶蓋を懸け、諸の細鐸、衆寶繒綵を垂れて以て幢幡と爲す。羅列し建立し、周匝して座の四周に垂れ掛けたり。皆金剛を以て其の地と爲す。平坦なること掌の如く、淸淨潤澤香潔柔輭にして、蹈むときは則ち足を沒し、擧ぐるときは則ち還復す。衆生見れば欣樂して厭ふことなし。

爾の時に諸天、佛を供養せんが爲めに、天の妙華を雨す。所謂瞻博迦華・阿提目多伽華・婆利師迦華・曼陀羅華・摩訶曼陀羅華・曼殊沙華・摩訶曼殊沙華たり。是の如く等の種種の天華を以て、佛の上及び諸の大衆に散じて、遍く其地を覆ひ、微風吹動して殊妙の香を出して諸穢を飄滌し、忽に其地に於て無數百寶の蓮華を涌出す。大さ車輪の如く、眞金を葉と爲す。各百千萬吠瑠璃を以て、其の莖とたす。帝靑摩尼を以て其の臺と爲す。阿濕摩羯摩寶を以て其の鬚と爲す。衆の妙香を發して諸天に出過せり。其の華柔輭にして光淨細滑なり。衆生見れば情に厭足なし。若し觸るゝあれば能く

[三] 法空無我とは、一切諸法は何れも皆因緣假和合のものにして自性なし、自性なきを以て本來空なりといふ。

薩摩訶薩・勝意菩薩摩訶薩・增上意菩薩摩訶薩・無邊意菩薩・方廣意菩薩・廣大意菩薩・無盡意菩薩・持地意菩薩・持衆生意菩薩・得勝意菩薩・善分別意菩薩・陀羅尼自在王菩薩・執寶炬菩薩・寶印手菩薩・寶冠菩薩・寶髻菩薩・寶積菩薩・寶生菩薩・寶峯菩薩・寶幢菩薩・金剛藏菩薩・吉祥藏菩薩・無垢藏菩薩・淸淨藏菩薩・如來藏菩薩・智藏菩薩・日藏菩薩・三昧藏菩薩・蓮華藏菩薩・解脫月菩薩・普月菩薩・大勢至菩薩・普見菩薩・蓮華眼菩薩・廣嚴眼菩薩・普威儀菩薩・普端嚴菩薩・普行意菩薩・智慧意菩薩・法意菩薩・金剛意菩薩・師子遊戲菩薩・大雲自在王菩薩・師子威猛音菩薩・廣大深妙聲菩薩・無染著菩薩・離諸垢菩薩・月光燄菩薩・日光燄菩薩・智光燄菩薩・智吉祥菩薩・月吉祥菩薩・蓮華吉祥菩薩・賢吉祥菩薩・寶吉祥菩薩・妙吉祥童子菩薩・觀自在菩薩・彌勒菩薩と、等しく而も上首と爲す。皆[九]賢劫に於て當に菩提を得べし。是の如く等の菩薩摩訶薩八萬四千人と與なりき。

復、無量の四大王衆天あり、四大天王を而も上首と爲す。復、無量の忉利天子釋提桓因有つて而も上首と爲る。復、無量の[一〇]須夜摩天子・夜摩天王有つて、而も上首と爲る。復無量の[一一]兜率天子兜率陀天王有つて、而も上首と爲る。復無量の化樂天子・妙化樂天王有つて上首と爲る。復、無量の他化自在天子他化自在天王有つて、上首と爲る。復日光天子・滿月天子・商主天子有つて各無量の天子眷屬と俱なり。復大梵天王有つて無量の梵衆と俱なり。復、淨居の諸天摩醯首羅天王有つて各無量の眷屬と俱なり。是の如くの無量の天龍夜叉・乾闥婆・阿修羅・迦樓羅・緊那羅・摩睺羅伽・各々無量百千の眷屬と俱なりき。復無量の比丘・比丘尼・優婆塞・優婆夷各眷屬と俱なり。是の如くの無邊の一切衆會各佛所に至つて佛足を頂禮し、退いて一面に坐し恭敬圍遶し奉る。

爾の時に、如來衆會に處し、[一二]金剛座に坐したまふに、威德巍巍として一切に超過すること須彌山の大海を出づるが如く、光相炳曜して一切を映奪すること譬へば朝日の高く虛空に昇るが如し。見る者淸涼なること秋の滿月の如く、身心寂靜なること大梵王の如く、衆に敬畏せらるゝこと天帝

【九】賢劫 Bhadrakalpa 現在の住劫をいふ。住劫とは、成住壞空の四劫の中にして、成劫とは世界及び有情の成立する間、壞劫は世界及び有情の破壞するに至る間、空劫とは破壞して無一物となるに至る間、而して住劫とは世界及び有情の安穩に住する間をいふ。

【一〇】須夜摩。Suyāma 欲界六天中の第三天なり。

【一一】兜率天。都史多天ともいふ、欲界六天の中第四天なり。

【一二】金剛座。佛成道せられし時の座にして即ち摩訶陀國の菩提樹下に在りといふ。

守護國界主陀羅尼經

罽賓國三藏沙門般若、牟尼室利と共に譯す

巻の第一

序品第一

是の如く我れ聞きゝ、一時薄伽梵伽耶城に住したまふ。城を去ること遠からず菩提樹下にして大比丘衆七千人と倶なりき。皆是れ〔一〕大阿羅漢なり。諸漏已に盡きて復た煩惱なし。已に作す所を作し、已に辦ずる所を辦じ、心善く解脫し慧能く解脫す。猶大龍の〔二〕宿住智を得、已つて重擔を捨て已利を逮得し、〔三〕三有の結を盡して復た〔四〕後有なきが如し。一切の法に於て眞實智を得、深く法性に入つて彼岸に到り、法に於て〔五〕善巧あり、法化より生じ、順に於て違に於て心染著なく、言を發して和悅し意を先にして問訊す。〔六〕梵行清淨にして正念明潔なり。解脫道に於て已に圓滿することを得。唯だ阿難のみ學地に住することあり。復菩薩摩訶薩八萬四千人あり、皆一生に於て當に菩提を得べし。一切智に任運に深く入つて源底に至る。十方の諸佛常に現在前して無染著陀羅尼門を得、〔七〕首楞嚴諸三昧門に住し大自在遊戲神通諸解脫門を得、已つて一切煩惱障礙を離る。大慈悲を以て普く十方一切世界を覆ひ、遍く法海無邊の刹海に遊んで、無住の相を以て虛空性に入る。常に勤めて一切衆生を利益す。佛境界に於て已に善巧を得、心意智慧廣大無量なること猶ほ虛空の如く、甚深無際なること猶ほ大海の如し。安住不動なること須彌山の如し、染著する所なきこと猶ほ蓮華の如し。內外清淨なること〔八〕摩尼寶の如し、光明熾盛なること鎔眞金の如し。是の如く等の無量無邊諸の功德聚を具せり。其の名を普賢菩薩摩訶薩・普眼菩薩摩訶薩・普觀菩薩摩訶薩・普光菩薩摩訶薩・普燄菩

【一】大阿羅漢。小乘佛教の目的とするもの、煩惱の賊を殺すが故に殺賊といひ、三界に生せざるが故に不生と譯し、人天の供養を受くべきが故に應供と譯す。
【二】宿住智。過去世の因緣を知る智なり。
【三】三有の結。三界の煩惱なり。
【四】後有。未來に於て生死の果報を招くこと。
【五】善巧。善良にして巧妙なる方便をいふ。
【六】梵行。婬欲等のなき淸淨なる行爲。之に反するを非梵行といふ。
【七】首楞嚴諸三昧門 Śūraṃgama samādhi 健行又は一切事竟と譯す。佛所得の三昧にして能く一切煩惱惡魔の怨敵を斷除して堅固なる佛德を首楞嚴又は首楞伽摩と云ひ、かゝる佛德を成就せんために入る禪定を首楞嚴三昧といふ。
【八】摩尼寶。如意寶珠なり。

釋迦如來遺法の中の五濁惡世時代に於ける狀態を述べたので、即ち此惡世に於ては上帝王より下百姓に至るまで、皆因果を信ぜず、租稅度なく、萬人貧窮し、寺も荒蕪して惡比丘多き時代の狀態を述べたのであると說いて居る。

次に釋迦如來は摩揭陀國王阿闍世王の問に對して地獄に墮落するには十五種の相あり、餓鬼に生ずるには八種の相あり畜生に生ずるには五種の相あり、人天に生ずるには十種の相あることを一一說いて居る。

〔如來囑累品第十一〕

此品に於ては如來滅度の後に於て守護國界主陀羅尼經を受持し讀誦し廣宣し流布せしめて五濁惡世の一切衆生をして淨信を得せしむるの次第を說いて居る。爾の時に護世四天王や釋提桓因大梵天王兜率天子魔王子商主天子魔波旬蘇夜魔天慈氏菩薩具壽大迦葉波等の諸多の者は合掌恭敬して偈を以て此の經を持する者を護持し廣宣流布すべきことを述べて居る。

昭和七年三月二十一日

譯者　岡田契昌　識

夢が說いてある。訖哩枳王は中夜に二種の夢を見た。一は夢に十の獼猴ありと見、其九の獼猴は城中の一切人民妻妾男女を擾亂し飲食を侵奪し什物を破壞する等惡性のものであつた。然るに唯一の獼猴は心に知足を懷いて樹上に安坐し、人民等を擾亂せざる善性のものである。然るに九疋の獼猴は心を合せて此の一疋の知足の者を惱亂し諸多の災難を加へ其仲間から驅出した。第二の夢は一の大きな白象あり、首と尾に口あつて、水草を食つても身常に瘦せ衰へて居る。王は寤めて大に怖れ占相者に其夢を占しめた所、九の獼猴は九人の王で一の獼猴は大王で、是れ則ち九王同心して大王の位を奪はんとするので、象の二口は是の九王が自己の領土を食ひ且大王の食まで食はんとすることであつた。其處で訖哩枳王は大に恐怖し直に迦葉波佛(釋尊のすぐ前に出た佛)の所に往き事の始終を陳述して疑網を斷ぜしめたまへと哀願した。すると迦葉波佛は王に對して憂懼する勿れ、其の夢は實は未來五濁惡世に釋迦牟尼佛といふ佛が出現するが其佛の滅度の後の遺法の相で、大王の十の獼猴は釋迦牟尼佛の十種の弟子を豫言したのであると說き、是より十種の沙門をあげて詳說してをる、十種の沙門とは

一は、因果を信ぜず財寶を貪求し破戒無慚の生活をして沙門となりし者

二は、奴隷となつて一生涯他に使役せられることを厭ふて逃竄して出家して沙門となりし者

三は、公私の負債や利息多く返濟すること困難、而も債鬼に逼迫せらるゝため逃亡して出家し沙門となる者

四は、諸の外道等心に嫉妬を生じて出家して沙門となり佛法の中に入つて其の過失を探して佛の正法を破滅せんとする者

五は、三藏に通達する者出家して沙門となり經律論を學び以て他人に優勝せんとする者

六、家に在つては名譽を博することなしと考へて出家し沙門となる者

七、上天界に生れて長壽快樂を求めんと欲して、出家し沙門となる者

八、利益を得んが爲に出家して沙門となる者

九、未來の帝王の位を求めんとして出家し沙門となる者

十、世間の富貴榮顯は浮雲電光の如く無常なりと觀じて世間を厭離して眞正の菩提心を發して沙門となり、無上菩提を求むる者

とあるので、そして十人の獼猴の中で九疋の獼猴は今述べた前九人の沙門で、是は總じて相似の沙門である。知足の一獼猴は第十にあたる沙門で卽ち眞實の沙門といふのである。又二の夢とは、卽ち是れ

羅尼あり、卽ち是れ一切陀羅尼の母なり。守護國界主と名づく、菩薩有つて、此の陀羅尼を受持し證得するときは則ち其の身如意寶に同ずることを得、衆生見れば所願滿足し亦能く速に無上菩提を得ん」と述べて、國王を守護する法を說き出したのである。而して守護國界主陀羅尼とは所謂唵字なりと說き、此の唵字は所謂阿と烏と莽との三字合成語にて、阿は法身、烏は報身、莽は應身の三身の義ありとし、三世の諸佛は此の唵字を觀じて菩提を得ると述べて居る。而して所謂國王を守護するの法として金剛城大曼荼羅の軌儀法則を說いて居る。而して曼荼羅を建立せんとせば、金剛阿闍梨は第一に適當の地を選擇し、第二に宿曜日曜を選びて四角三重に壇を築き、壇の中心に毘盧遮那如來（大日如來）と四波羅蜜菩薩や四方四佛と各四菩薩とを並べ書き、（之は大曼荼羅といふ）或は單に種子（三昧耶曼荼羅）を安き最外の一院に十天を書く。而して各尊の眞言を出すのみならず、入壇者の爲に三摩耶戒を授與することを說いて居る。又五部念珠や五部に相當する念珠を掐む法や念珠校量の功德や息災增益忿怒、敬愛等四種護摩、灌頂功德、祈雨法止雨の呪、怨敵を退治する呪、善惡吉凶を先知するの陀羅尼等を說いて居る。

五部念珠と念珠を掐む法とは左の如し

（一）佛　部　菩提子　頭指
（二）金剛部　金剛子　中指
（三）寶　部　金、眞珠等の寶　無名指
（四）蓮花部　蓮花子　三指を合す
（五）羯磨部　種種和合して作る　四指を以て承く
（但し皆初節を用ゆ）

序に祈雨の法を說かう。若し國土亢陽して雨なきときは、金剛阿闍梨は蓮花ある大龍池河流の岸或は復小池に往いて、一定の場所を境界して淨め此處に壇を作り、壇の上に七頭の龍王を圖畫し、種種の華や香等を供養し壇場の四面に靑色の幡を懸け赤色の幢を建て穀麥油麻大麥金銀等を龍池の中に投ず。而して四面を右廻し合掌禮拜して酪蜜白硬米乳糜等種種の飯食を供養して大孔雀王經を轉讀しつゝ甘雨の降るやうにと誓願するのである。若し其れでも降雨なきときは忿怒尊の陀羅尼を誦へつゝ金剛杵を以て龍の頭を截る眞似をして驚怖せしむるときは必ず雨が降るのである。而して降雨の量多分なれば止雨の呪を誦へるのである。

而して更に持念の軌儀を說いて居る。これは阿闍梨、牛糞を塗つて方壇を造り乳酪等各椀に盛滿して壇の四角に置き四角に燈を置き花を散らし香を燒いて修するので、是によつて三世の事を悉皆辯說し、心の疑惑を斷除するのみならず、顚癇鬼魅に著かれたものや病人等も、皆病を去つて平復するのみならず種種の勝事がみな成就するのである。

〔阿闍世王受記品第十〕

此の品に於ては先づ第一に訖哩枳王の

である。瓔珞莊嚴は四種ありて、卽ち一、戒瓔珞莊嚴二、定瓔珞莊嚴三、智慧瓔珞莊嚴四、陀羅尼瓔珞莊嚴とである。而して之等の四を各々に分類して居る。卽ち第一戒瓔珞莊嚴を十種に分類し、第二定瓔珞莊嚴も亦十種に分類し、第三智慧瓔珞莊嚴も十種に分類し、第四一切菩薩陀羅尼門瓔珞莊嚴を復十種に分類して詳しく述べて居る。而して「第六ノ二」品では世尊は重ねて此の四瓔珞の義を偈を以て再說してをる。

〔大光普照莊嚴品第七〕

玆處では八種の大光普照莊嚴法門を說いて居る。大光普照莊嚴とは光照によつて心眼を開き明了に愚闇を遠離して菩薩の莊嚴を以て其身を嚴り菩薩の修行をなし乃至衆生を救度することである。而して此に念光普照莊嚴と意光普照莊嚴と解光普照莊嚴と法光普照莊嚴と智光普照莊嚴と諦光普照莊嚴と神通光普照莊嚴と修行光普照莊嚴との八種あり。而も此の八種の各々に八種の普照莊嚴ありと說いて居る。其の一例をあげて見よう。最初の八の念光普照莊嚴とは專ら記憶を第一義とすることで、

一には昔善を憶念して常に忘失せざること

二には旣に修めた善根は當に增長せしめること

三には聖賢より聞いたことは憶持して忘れざること

四には甚深の義は微細に解了すること

五には六塵の境に眩惑せられざること

六には常に正念を以て精神や肉體を守護すること

七一切の惡事を斷じて善事を圓滿せしめんために常に諸佛を正念することと

八には諸佛の法城を守護せんが爲に、念を先導と爲して大光明を得ること

〔般若事業莊嚴品第八〕

此の品に於て般若峰菩薩と稱する菩薩あつて、佛に對して般若の根本と般若の事業とに就て問はれた。佛は此の問に對して般若の根本とは般若の母にして般若の事業は般若の母の所生であると說き、一段に亘つて、可成詳しく長文と頌文とから般若の母と般若の事業との兩方面を巧みに種々の教義を說いて居る。例へば法を聞いて放逸ならずして淨く持つは般若の母にして、慈悲を以て他人の爲に說いて勸修せしむるは般若の事業である。又正念を以て善く思惟するのは般若の母にして、思惟し已つて他人のために說くのは般若の事業である。

〔陀羅尼功德軌儀品第九〕

玆の品に至つて、會中に一人の菩薩あり、卽ち祕密主金剛手といふ。此の菩薩は佛に對して一切陀羅尼の母は何であるかと尋ねられ、佛は玆に始めて「一の陀

て居る。

玆處では第四海印陀羅尼門が說いてある。此の門では阿字、囉字等の四十二字門が說いてある。

〔大悲胎藏出生品第三〕

此の品に於ては、最初、文殊師利菩薩摩訶薩は合掌恭敬して、佛に對して、「心と虛空と陀羅尼と菩提とは無二無別なり。皆大悲を以て其の根となす。而も大悲は復た何の法を以て根本と爲す」と發問し佛は之に對して、「大悲の根は復衆生の受苦を以て本と爲す」とし、受苦は煩惱より生じ煩惱は種々顚倒邪見を生ず云々と衆生流轉の現相を說き、之に對して、菩薩は大悲深重なれば、十六大悲心を起して三十二種不共事業を建立して日夜に勤修すれば速に圓滿することを得と說いて居る。三十二種不共事業とは勿論菩薩大慈悲の精神と事業とをいふたので、卽ち一切衆生の愚癡、邪命自治し、因果を撥無し正法を棄捨し慳悋淨戒を犯し身心懈怠し其他衆生の非道を列擧し之に對して正しき道を示し正しく誘導するの大慈悲行を說示したのである。

〔入如來大悲不思議品第四〕

入如來大悲不思議品に於ては、文殊師利童子は佛に對して如來の大悲は幾種かある等のことにつきて發問し如來の大悲は無量無邊にして窮盡あることなく、甚深甚深にして思議すべからずと說き、更に如來は大菩提を得と說き、菩提の內容を種々の方面より說き、然も衆生は實の如く知らざるが爲の故に如來は之を憐むがために大悲隨轉したまふといふてをる

入如來不思議甚深事業品第五ノ一、五ノ二、五ノ三

此の三品に於ては、佛には三十二種の正覺甚深の事業ある旨を說いて居る。三十二種の正覺事業とは、如來は三十二種等諸多の事項を正覺ることを說いたのである。例へば第一正覺事業とは如何といへば如來は處と非處とを如實に知りたまふといふのである。所謂處とはしか有るべきことで、非處とはあり得べからざるの謂である。例へば如來に煩惱や習氣があるといふのは非處で、諸佛に煩惱なしといふのは處である。かゝる處非處の事柄を種種の方面から述べたのが第一正覺力甚深事業である。而して第七正覺甚深事業に於ては「如來は一切の靜慮解脫等持等至に於て煩惱を伏滅し又煩惱を生起する因緣を皆實の如く知りたまふ」と述べて、十二因緣の理を流轉と還滅との二方面から詳說して居る。弘法大師は此處の文を祕藏寶鑰の中の第五拔業因種心たる緣覺乘が觀ずる十二因緣の文證として引用されたことは前說の如くである今は自餘のものに就ての略說は省略したい

〔菩薩瓔珞莊嚴品第六の一、六の二〕

此の二品は菩薩の瓔珞莊嚴を說いたの

〔陀羅尼品第二の二及び第二の三〕

陀羅尼品第二の二に於ては迦樓羅觀を說いて居る。迦樓羅とは鳥の名で金翅鳥と譯す。此鳥は諸龍を食ふて毒を除くものである、今、此の鳥の如く諸多の災厄を除滅する觀法を迦樓羅觀といふのである。之は迦樓羅鳥の像を圖畫し、手に印契を結び自身迦樓羅と成ると觀じ、然る後五大觀を作すのである。五大觀とは地を觀じて白色と作ると觀じ、水を觀じて綠色と作ると觀じ、火を觀じて黃赤色と成ると觀じ、風を觀じて黑色と作ると觀じ、空を觀じて青色と觀ずるので、此の觀成じ已つて、一切の諸毒が消除するのである。次に毘盧遮那如來の三昧に入らんことを說き、先づ大日如來の座たる結跏趺坐に坐して、手に能與無上菩提最尊勝印(智拳印なり)を結び、唵吽惑護娑等の五字の眞言を說き、自心月輪と觀じて、最初唵字を月輪の中に觀じて自身大日如來と成ると觀じ、次に東方に月輪の中に吽字を觀じて自身阿閦如來と成ると觀じ、次に南方に月輪の中に惑字を觀じて寶生如來と成ると觀じ、次に西方に月輪の中に護字を觀じて阿彌陀如來と成ると觀じ、終に北方に月輪の中に娑字を觀じて不空成就佛と成ると觀じて、要するに自身五佛と成ると觀ずることを說き、全く金剛界の五佛と同等である。而して一度五佛の三昧に入れば五種三昧十五種三昧や五十三陀羅尼門を證得すと說いてある。五種三昧とは

(一)刹那三昧
(二)微塵三昧
(三)漸現三昧
(四)起伏三昧
(五)安住三昧

次に十五種三昧とは

(一)厭離一切法三昧
(二)超過一切法三昧
(三)一切法平等三昧
(四)離諸見稠林三昧
(五)遠離無明闇三昧
(六)一切法離相三昧
(七)解脫一切著三昧
(八)離一切懈怠三昧
(九)甚深法發光三昧
(十)如須彌山三昧
(十一)永無失壞三昧
(十二)摧伏魔軍三昧
(十三)不著三界三昧
(十四)出生光明三昧
(十五)常見如來三昧

次に五十三陀羅尼門の名は略するが、此の五十三陀羅尼門の中で能く佛法を總持して辯才無盡にして衆生をして聞かんとねがはしむるに八種ありとして

(一)大聲清淨自在王陀羅尼門
(二)無盡寶篋陀羅尼門
(三)無邊漩澓陀羅尼門
(四)海印陀羅尼門
(五)蓮花莊嚴陀羅尼門
(六)能入無著陀羅尼門
(七)漸漸深入四無礙智陀羅尼門
(八)一切諸佛護持莊嚴陀羅尼門

を說く。今、主なる點を述べたい。第一大聲清淨陀羅尼門の中に於て所謂阿字の義を百種を以て說いてをる。第三無盡寶篋陀羅尼門には十二因緣相關等の義を說い

は伽耶城に住したまひ、城を去る遠からざる菩提樹の下に大比丘衆七千人菩薩摩訶薩八萬四千人、無量の四大王衆天、無量の忉利天乃至日天月天比丘比丘尼優婆塞優婆夷等あつて、何れも佛所に至り佛足を頂禮して恭敬圍遶された。すると、文殊師利法王子菩薩摩訶薩が衆會の中から起立して胡跪合掌して、佛の尊嚴なる所以を「如來の威容は量るべからず、人天及び衆聖に超出したまふ云々」と、種々の方面から稱歎されて居る。

(陀羅尼品第二の一)

世尊は隨順衆生心行といふ三昧に入つて頂上肉髻の中や膚骨毛孔口中右の肩背の上、左の肩等から青黄赤白綠色鎔金色等無量の大光明を放つて、一切衆生や國土を照益し、後にまた其光を本に收めた。而して更に佛は一切智智諸佛境界といふ三昧に入るや、大地は六種に大震動した。時に衆會の中に一切法自在王菩薩あり、世尊は何の因緣を以て大光明を放つて大地六種震動するかと佛に問はれた。佛は之に對して四種の因緣を以て此の瑞を現ずと答へられた。猶ほ此品に於て注意すべきことは大日經住心品と大同小異の文がある。大日經宗は因根究竟の三句の法門を以て綱領とするが、本經の此品にも亦之と同樣に三句の法門が說いてある。彼の大日經住心品では一切智々を說き「此の一切智々の道は一味なり。所謂如來解脫味なり云々」と說き之の內容を虛空大地火界風界水界の五大を以て喩說し而もかゝる一切智々は何を以て因とし、云何なるかを根とし、云何なるか究竟とすると發問し、之に對して菩提心を因とし大悲を根とし、方便を究竟すとして所謂三句の法門を說き、更に菩提の無相なる所以を縷說し心と虛空と菩提との三種は無二なりと言ひ初法明道除蓋障三昧を述べて居る。而して今國譯した守護經の此品にも、全く大同小異の文がある。卽ち如來の身は一味なり、無二なり、所謂一解脫味なりと說き此の內容を五大を以て喩說し、更に不可思議一切智々諸佛境界三昧は、何れの法を以て其の因とし何れの法を以て根本とし云何んが修習し云何んが究竟すと問うて、佛は菩提心を因とし、大慈悲を根本とし方便を以て無上菩提を修習して究竟となすと說き、次に菩提の無相不可得なる所以を說き、自心と虛空性と菩提と陀羅尼(阿字)とは無二なり、此の菩提を了知すれば第一清淨法光明門(初法明道)を成就し更に不可思議一切智々諸佛境界甚深三昧(除蓋障三昧)を得る等の義を說いて居る。猶ほ本品には迴向輪陀羅尼といふものを說く。此の陀羅尼は、貞元五年尸羅達摩の譯した佛說迴向輪經の中にもあるが、稟承錄によれば此經は守護國界主經より拔出して譯したといふて居る。

を以て太政官牒を僧綱所へ下されて允許されたが官符の一節に、

件の經、宜しく眞言宗の僧をして、每年夏中永く彼の寺に講じ、禍を消し福を修し、雨を降し風を止め、年穀を饒益し邦家を擁護せしむべし云々

とある。從つて東寶記などの記事によるに、天慶六年の安居講にも、守護國界主陀羅尼經は仁王經、妙法蓮花經、金光明經、最勝王經などとゝもに講說されたので、其の時の表白にも

國主聖朝、增長寶壽、天下太平、無諸災難、風調雨順、百穀成就、萬民豐樂云々

と出て居る。猶ほ一言、大師に關することを附加したい。大師は承和二年正月廿二日眞言宗年分僧三人を度すべき事につき上表されたが、其に對し官符を賜つたが此の中でやはり守護國界主陀羅尼經一部十卷は十八道一尊の儀軌とともに金剛頂業の人が學ぶべきだと出て居る。其他大師は其著「祕藏寶鑰」の中卷第五住心たる緣覺乘を說く拔業因種心に於て本經第五卷に在る十二因緣の段を引いて居る。又下卷に於て第九極無自性心たる華嚴宗を論じた中などでも、本經の文を引用して居られる。

三、本經の組織

本經は一部十卷である。今品數と卷とを表示することにした。

品	卷
序品　第一 守護國界主陀羅尼品　第二の一	卷一
陀羅尼品　第二の二	卷二
陀羅尼品　第二の三 守護國界主陀羅尼經大悲胎藏出生品　第三	卷三
入如來大悲不思議品　第四	卷四
入如來不思議甚深事業品　第五の一	卷五
入如來不思議甚深事業品　第五の二	卷六
入如來不思議甚深事業品　第五の三 守護國界主陀羅尼經菩薩瓔珞莊嚴品　第六の一 菩薩瓔珞莊嚴品　第六の二	卷七
守護國界主陀羅尼經大光普照莊嚴品　第七 守護國界主陀羅尼經般若根本事業莊嚴品　第八	卷八
陀羅尼功德軌儀品　第九	卷九
阿闍世王受記品　第十 守護國界主陀羅尼經如來囑累品　第十一	卷十

四、各品大意

今、各品に就て詳しく述べることは必要でもあるが、紙數の都合により、極く大意を紹介して置きたい。

〔序　品〕

序品は一經の總序であるから別に滯つたことはない。諸經によくある如く、佛

傳教大師と弘法大師とが、勅を奉けて入唐されて以來、第五十六代淸和天皇貞觀四年に至る間のことで、其の間天台宗の側に三人あり、眞言宗の方に五人あつたから之を古來入唐八家と呼ぶ所である。而して、守護國界主陀羅尼經は何人が本朝に將來したかといへば、傳教大師と弘法大師と智證大師(圓珍)と宗叡僧正の四人である。

〔守護國界主陀羅尼經と弘法大師〕

我が眞言密教は支那に於ては諸多の經典も翻譯されて頗る盛大に行はれたものであるが、然し密教は支那に於てはまだ組織整頓はされなかつたのである。實に我が朝に於て弘法大師の一大見識によつて全く內容外形共に一大組織整理をなされたと斷言し得られる。大師は弘仁十四年十月十日「眞言宗所學經律論目錄」といふものを朝廷へ上進された。是はどんなものかといへば、所謂密教の諸經律論を內容に從つて分類區別したもので、卽ち合計四百二十四卷の密教の經律論を經二百卷、梵字眞言讃等四十卷、律一百七十三卷、論十一卷として纒めたものである。而して今經のみに就て言つて見ると、經は合計一百五十部二百卷として、之を金剛頂瑜伽眞實大教王經三卷を初めとして六十二部を先づ金剛頂經宗經となし、大日經七卷等を初めとして七部を次に胎藏宗經となし、更に、今國譯した守護國界主陀羅尼經十卷を初めとして六十三部の經を雜部眞言經と定めて居る。雜部とは金胎兩部に屬する經が大毘盧遮那如來所說なるに反して、釋迦所說の顯密雜へ說いたといふ意である。

〔護國法としての本經と弘法大師〕

本經は其の名の示す通り國界主を守護する經典である。本經の內容に就ては後に述べたいが、本經は彼の仁王經や最勝王經などと等しく、護國安民の經であることは勿論である。般若三藏の譯なる大乘理趣六波羅蜜經(十卷)も本經と同じく護國の法を說いて居る。卽ち陀羅尼護持國界品第二などには「國界を擁護し云々」の文がたび〱出て來る。ソンナ理由で弘法大師は一代の根本主張であつた鎭護國家の思想に基いて、本經を受持講供すべきことを定められたのである。卽ち天長二年(淳和天皇)三月十日には「東寺每年の安居(アンゴ)に守護經を講ぜんことを請ふの表」を上進されて居る。今表文の一節に左の如き文がある。

今此の守護國界主陀羅尼經一部十卷は文は顯密を括り義は諸乘を呑む。轉禍爲福の方、降雨止風の法、具に此の經に說けり。伏して望らくは、每年夏中、永く此の經を講じて國家を擁護せんことを。天恩允許せば請ふ所司に宣付し給へ

と。是によつて、朝廷は同年四月八日附

嚴經普賢行願品の梵本が長安に來て居つたから、三藏は之を翻譯して同十四年二月廿四日に朝廷へ上進した。今國譯した守護國界主經は貞元十九年に翻譯されたのである。三藏は何時終焉したかは不明である。少しく

〔般若三藏と弘法大師〕

との關係を一言したい。大師は、眞言宗の法脈相承の次第を述べられた祕密曼荼羅教付法傳上で龍智菩薩が現に南天竺に生存することを般若三藏と牟尼室利三藏から聽聞したと述べられて居る。又、御請來目錄の中でも

梵夾三口

右般若三藏の告げて曰く、吾が生緣は罽賓國也、少年にして道に入り五天を經歷し常に傳燈を誓つて此の間に來遊す。今桴に乘ぜんと欲するに東海に緣なくして本願遂げず、我が譯する所の新華嚴六波羅蜜經及び斯の梵夾將ち去つて供養せよ。伏して願くは緣を彼の國に結んで元々を拔濟せんと、繁を恐れて一二にせず

と述べられた。三藏は新譯の華嚴經四十卷理趣六波羅蜜多經十卷延命功德經一卷と梵夾三册と共に、今、國譯した守護國界主陀羅尼經十卷を大師に付囑されたのである。猶ほ序に般若三藏が譯出した經を煩しいが表示したい。

一、大乘理趣六波羅蜜多經　一〇卷	貞元四年十一月十五日	雜部密經
二、大華嚴長者問佛那羅延力經　一卷	貞元五年二月四日	方等
三、般若波羅蜜多心經　一卷	貞元五年	般若
四、大乘本生心地觀經　八卷	貞元六年	方等
五、大方廣佛華嚴經　四十卷	貞元十四年	華嚴
六、諸佛境界攝眞實經　三卷	貞元年中	金剛頂部經
七、造塔延命功德經　二卷	貞元年中	雜部密經
八、守護國界主陀羅尼經　十卷	貞元十九年	雜部密經

二、牟尼室利三藏に就て

牟尼室利とは梵名で唐には寂默と言ふのである。其の人となり神宇高爽量度眞率であつた。德宗貞元九年那爛陀寺を發足して支那に渡り、同十六年長安興善寺に至つた。同十九年崇福の醴泉寺にうつり又、慈恩寺に住居して翻譯事業に從ひ、般若三藏と共に守護國界主陀羅尼經十卷を譯した、時に牟尼室利は梵本を證し、光宅寺智眞は譯語をつとめ圓照筆受、監虛潤文、澄觀證義である。時に十一月三日に譯を畢へて八日に進上せられた。三藏は元和元年六月十九日慈恩寺で逝去せられた。(宋高僧傳三)

〔守護國界主陀羅尼經の傳來〕

凡そ密教の諸儀軌が本朝に傳來したのは、人王第五十代桓武天皇の延曆廿三年

守護國界主陀羅尼經解題

一、譯者般若三藏に就て

今國譯を完了した守護國界主陀羅尼經十卷は、罽賓國の沙門般若三藏が牟尼室利三藏と共に譯した本であるから、最初に譯者の略傳を述べて置きたい。

般若三藏の傳記は宋高僧傳第二や貞元錄第十七續開元錄上等に詳しく載せてあるから今は是等の資料によつて大略を記すことにする。三藏は梵名を般剌若といひ唐に智慧と譯すのである。北天竺迦畢(カビ)試(シ)國の人で、世に罽賓國の般若三藏といふて居るが、迦畢試國と罽賓國とは同國の異名にして、現今のカフヒルスタンだといふ。姓は憍答摩(ゴウタマ)氏で天性聰敏、七歲にして發心出家し、大德調伏軍といふ人に師事して、四阿含十萬頌・阿毘曇二萬餘偈を誦した。後、師に隨つて迦濕蜜に詣り、二十歲具足戒を受け薩婆多四萬頌倶舍論二萬八千偈並に大婆沙を誦して其の義を受けられた。二十三歲の時、中天竺那爛陀寺に行き、智護、進友、智友の三大論師に隨つて、大乘唯識、瑜伽中邊等の諸大乘論、金剛般若經其他、因明、內明、聲明、工巧明、醫方明等の五明論を研究された。當時、南天竺に持明藏の盛行することを耳にし、遂に往いて、未だ聞かざる所を諮詢した。又當時烏荼那國に達摩耶舍卽ち法稱といふ灌頂師の居ることを聞き、往いて之に師事して祕密瑜伽の教を受け且つ曼荼羅に入り、三密護身五部印契等を傳授された。而して般若三藏は大唐の國は佛教を弘宣すべき機緣熟せると思ひ、支那に遊化せんと欲し、幾度か風濤に遭難して、德宗皇帝建中二年廣州に渡來し、貞元二年始めて大都長安に至つて六波羅蜜經を景淨といふ人と共に胡語から譯したが義理が通曉しなかつたので、更に貞元四年十一月十五日西明寺に於て十人の大德と共に大乘理趣六波羅蜜多經十卷を重譯し、同年十一月二十八日に朝廷へ上進せられた。時に皇帝より絹一百疋冬衣一副賜つた。又、貞元五年二月四日六波羅蜜多經中眞言契印法門を再譯して奉上された。又同年二月十五日圓照の請に依つて大華嚴長者問那羅延力經一卷を譯した。次いで千福寺大德智柔の請に依り般若波羅蜜多心經一卷を譯出し、同六年には本生心地觀經八卷を譯した。貞元六年七月廿五日には勅により般若三藏の名號と紫衣を賜り北印度迦濕彌羅國に派遣されたが、貞元十一年四月京に歸つた。貞元十一年十一月八日、烏荼那國々王が自ら書寫せられた華

字を稱へれば一切の惡雲退散す。

又棘針を取りて羅視迦の油に和して明を以て燒けば能く大雨を止め、能く行者をして大界を成結せしめ、亦千種の事業を成就す。

又無動尊金剛畫像の法を說かん。身に赤土色の衣を著せしむ。左に辮髻を垂れ、斜に視て童子の狀にせよ、手に金剛杵及び寶棒を執て眼微かに赤くして石上に坐し、瞋怒にして遍身に火焰あり、像の前に於て愛樂の一切の印契を結び、皆成就を得。前法に依つて所樂空に騰り形を隱し及び所愛の法を作す、意に隨つて成就す。縱ひ畫像なくとも獨り閑靜に處し或は寺中に在り、或は山窟の中にして雜鬧を離れたる處にせよ、所求の者一切皆成就を得。

瘧病を患ふ者を加持すれば、卽ち自ら縛して下語せん。

鏡を加持すれば亦像現ずることを得。事を問へば皆說かん。

童子或は童女を取て道場の中に置き神を召して壇中に下らしむ。一切の事を問ふに皆得。

次に〔一五〕繫迦羅の法を成就せんと欲せば、月の一日の日中の時に於て、種種の香華を著し、供養すること歇まず、明を誦すること一百八遍、壇中に一切の諸佛菩薩を念ぜよ。每日念誦して一月日滿じ如法に供養し已て苦練木の柴を用て火を燒き遏羅木の上に蘇を塗り、白芥子を加持し火を燒くこと黃昏よりし、火を燒くこと夜半に至り、乃至日出までせよ。繫迦攞卽ち來つて行者に語つて言く、我をして何事を作さしむと。行者攝受し已て後、常に行者の使ふ所に隨て、必ず隨順を得、乃至天上に往いて天女を取らしむれば、卽ち將ゐ來りて、所須の飲食齒木水等皆給侍を得しめん。

底哩三昧耶無動尊聖者念誦祕密法（終）

【一五】繫迦羅とは、セイタカ童子と共に不動明王の八大童子の一なり、常に不動明王の側に坐す。

若し稻穀を燒くことを明す。彼の都嚕を捨てゝ即ち貧窮ならしむ。

若し大人をして愛樂せしめんと欲せば鹽を以て彼の形狀を作り、段段に之を斫り、誦滿ずること七日すれば彼れ即ち愛樂す。又倶蘇摩花を取つて燒くこと十萬遍すれば夜叉女來ることを得て三事の中に於て所求皆得ることを明す。

又明す。曼荼羅花は彼の人の名を稱すれば、即ち橫亂せしむと。

明す。鹽を燒けば即ち天女來つて所使意に隨ふことを得ん。

明す。安息香を燒けば羅闍歡喜を得。

又畫像の法、先づ釋迦牟尼佛の像を畫け、文殊師利童子の像を畫き執金剛菩薩を畫き、微咲の面に作れ。手に金剛杵を執つて執金剛の下に於て無動聖者を畫き、種種に莊嚴せよ。即ち彼の前に於て明を誦すること五十萬遍、然して後に一切事を作すに皆意に稱ふことを得。

若し他の兵をして降さしめんと欲はゞ、即ち無動聖者の眼印を結び、瞋怒の聲を作して吽字を稱へ、心を以て魍魎彼を捉へしむと想へ。乃ち降す。尸陀林の灰を取つて加持すること七遍して彼の人に與ふれば即ち愛樂を得。

又の法は、牛黃を取つて加持すること七遍、自身の額上に點ずれば能く衆人の見者をして愛樂せしむ。[二二]毗那夜迦も損害すること能はず。熾焰成就するが故に。

又の法は、已身の上に於て明梵字を布すれば彼の[二三]羅刹衆百由旬の外に退散す。又蛇に毒せられて半年を經ても差へざるに之を明せば即ち差ゆ。又壁の上に於て劍の契を畫け。又[二四]句律迦大蛇を畫け。劍の上に纏はしめ、其の劍の周圍に火焰あらしめよ。即ち加持すること千遍して、以て病者に示さば、病者即ち下語せん。加持すること一百八遍すれば病者常に聖者の擁護を蒙らん。毎日殘食を加持して淨處に置て聖者に供養すれば常に願の如くなることを得。行者瞋怒して心印を結び吽

【二二】毗那夜迦とは、常隨魔又は障礙神と譯す。常に人に隨從して障礙を與へる惡鬼神なり。
【二三】羅刹は暴惡の鬼なり。
【二四】句律迦大蛇とは、倶利迦羅龍王のこと黑龍とも譯す。

時念誦して力に隨て供養して沈水香を燒け。是の如くして六月を滿足すれば自ら見に尾沙那の主を得。

又の法は、旗幡を取て明を誦すること一千遍、軍陣の前に執らば、能く他の軍を破す。

又の法は、他の軍を禁じて動くことを得ざらしめんと欲せば旗幡の上に於て無動尊を畫け、身黄肉色に作り、四面なり。上下に牙を出し、四臂にして怖畏瞋怒の狀に作り身に遍じて火焰あり。他の兵を呑む勢に作れ。持法の人旗を以て彼の人に示すべし。又想へ、聖者羂索を以て彼の兵衆を縛すと。彼れ即ち能く動ずることなし。

四面無動金剛の明に曰く、

曩麼三曼哆嚩日羅二合 赧始變二合 含嚢悉饡二合 迦播羅楞訖哩二合 哆戶怛嚩賀娑僞嚩嚩引路囉駄縛二合 能瑟吒邏二合 迦囉邏娜捨曩步惹誐跛哩吠瑟徵擔捨唎邏底縈捺囉嚢野曩迦賀護娑訖哆二合 吒賀三者咄娑佉尾訖哩二合 怛嚕引跛莽賀避沙拏也怛儞也二合 他唵尾訖哩哆尾迦吒尾迦邏摩賀囉唎二合 哆尾瑟他娑怛羅契駐、齒瑟吒賀囉案怛囉莽羅駄羅者咄娑母佉入嚩二合 邏那比路駄嚩二合 計奢吽嚩日囉二合 嚩日嚇二合 蘗羅二合 吽泮吒莎嚩二合訶

若し他をして相鬪はしめんと欲せば烏鴿鵄梟の羽を取り明を以て燒けば即ち鬪諍を得。

若し設都嚕卒を燒かしめんと欲せば稻糠を取て燒け。燒くの時に當つて想へ、聖者索を以て彼の捨都嚕を縛し、將て南方に向ひ困苦して血を吐かしむと。彼等が族類皆存することを得ず。

又の法は、設都嚕をして卒せしめんと欲せば、土と鹽と蠟とを取つて苦練の葉に相ひ和して擣て泥となし、捻して彼の形狀を作り地上に置て斫斷せば即ち卒す。

【一】沈水香とは沈香なり。

く大疫病を除く、

又は蓮花を取り蘇酪蜜に和して明を誦し火中に沃れて燒いて明を誦すること十萬遍すれば蓮華吉祥天行者に願を與へん。

又の法は、近き海に臨み河の口に於て、水に入れて胸に至つて明を誦すること三十萬遍すれば、[七]尾沙耶を得、又明を誦し華を以て火中に擲げ燒て華の色に隨て衣を得、穀米を燒けば穀米を得。又尾邏縛木を取つて明を誦し燒くこと十萬遍すれば即ち[八]囉闍を得。又必哩養隅木を取て明を誦し燒けば能く一切人をして愛念せしむ。柏木を燒けば即ち無量の僕從を得ることを明す。大麥を燒けば大長者と爲ることを得と明す。

次に畫像の法を說かん。無動尊を畫け。身に赤土色の帬衣を著し、左に辮髻を垂れ、眼は斜に視手に劍索を執り、寶蓮華に坐し、眉を嚬し、嗔面にして三世を怖る狀に作るべし。是の如く畫き已て、流水河海岸の上に於て如法に像を安じ行者の自身に亦赤色の衣を著し、心に染著なくして寂靜乞食して治を爲し、像の前に於て誦すること五十萬遍し畢已て即ち夜中に於て薩欝木を以て火に燒け。一明に一燒して火中に擲げ、一萬遍を滿ずれば即ち無動聖者を見る、現前に自身如來の使者と爲ることを得、三摩地を得て菩薩と共に同位なり。

又の法は、[九]尸陀林中の帛を取つて無動金剛の像を畫け、自身の血を以て淡く色を作して、像を安置し、面を西に向けて著け、行者は面を東に向けて坐して念誦せよ。每時三時に澡浴して濕衣を著し像の面前に對して明を誦すること十萬遍して即ち一切の鬼神に食を施せ。又黑月八日の夜に於て[一〇]摩奴沙を取つて其の上に坐し、明を誦すること一萬遍し已れば彼の摩奴沙身を動かす、行者必ず怕るゝことを得ざれ、彼の口より大開敷蓮華を現出せば即ち把取すべし、能く行者の身をして十五六の童子の如くならしめ、髻連環の如くにして天地に遊歷し大明王を得しむ。又像の前に於て每日二

【七】尾沙耶とは、大臣と譯す。

【八】囉闍とは、王と譯す。

【九】尸陀林とは、死屍を棄てた林なり。

【一〇】摩奴沙とは、人と譯す。

摩蘗羅嚩二合摩他薩羅婆多羅二合路計達壓馱埵底多僧伽帝莎嚩二合訶

前の法を作し已て、過去燃燈佛の禮拜の法の如くすべし。金剛合掌して長く二の臂を、頂上に舒べ面を東にして、面をして地に著けしめ、長く二足を展べ心を以て地に著けよ。是の如く禮拜する時、一切諸佛菩薩を觀念せよ。唯願くは我等を攝受して最上成就を作さんことを。哀愍の故に。是の如く三たび廻し已つて後、意に隨て消息せよ。心に明相を念じ速に成就の相を作せ。

無動金剛事業求願第七

爾の時に釋迦牟尼佛、執金剛菩薩に告げて言く、我今汝が爲に無量神通力無動金剛の法を說き、能く一切の事業を利益し成就す。若し修行者菜食し長齋し或は菓子等を以て誦滿すること一萬遍已つて月の八日或は十五日に於て一日一夜大に供養を作せ。像の前に於て苦練木を取り[四]蘇に和して燒け、一たび呪し一たび燒て一千八遍を滿ぜよ。此法を作し已て、然して後、所作一切の事法皆成就することを得。行者語を出して縛せしむれば卽ち縛す、及び事を問ふ等、能く樹木を摧折し飛鳥を墮落し、能く一切の泉池をして枯渇せしめ、亦能く人をして鬪諍に勝つことを獲せしむ。此を得已て亦能く風を團めて一團となせ。

又の法は、月蝕の夜に、未だ地に著かざる[五]牛糞を取つて曼荼羅に塗り、種種の香花を壇上に散じ大般若經を置き、前に純色の犢牛と牸子の蘇一兩を取り、熟銅の椀の中に置き、佉陀羅木を取り[六]齒木に爲り、幷に蘇を攪て明を誦して遍數を限らず種種に成就せしむ。

又山峯の頂上にして食を喫はず、誦滿ずること十萬遍すれば、卽ち一切の伏藏を見ることを得ん。

又乳を用て火法を作し、誦すること一千八遍し火に沃れて燒けば能く疫病を除き、若し一切の人と共に論議すれば卽ち彼の人口噤んで論せざることを得。

又の法は、句濾草を取り蘇乳蜜に和して加持して火中に沃れて燒いて誦すること十萬遍すれば能

【四】蘇とは、蘇油なり、香油にて蘇摩那の花汁にて造ると。

【五】牛糞は印度に於ては牛糞を清淨なものと信じ曼荼羅を造るとき之を塗るなり。

【六】齒木。齒を磨する木なり。

火院界是れなり。燈焰如來解界の眞言に曰く、

曩麼悉底哩也二合陀嚩拏哦哆喃唵紇哩二合

密語を誦し已つて、重ねて香花を以て、如法に供養し、三業を懺悔せよ。卽ち部母の印を結び護身して方に起去すべし、[1]大乘方廣理趣を轉誦し、諸の善事[2]隨て修行せよ、持明行者食せんと欲する時毎に、事業金剛の眞言を以て、自身中の種子を加持して鑁字を加へ、復十力の明を誦すること八遍して乃ち之を食せよ、明に曰く、

曩麼三曼哆鑁

十力の明に曰く、

曩謨薩嚩母馱冐地薩怛嚩二合喃唵麼蘭捺泥帝引孺吒喋寧莎縛二合訶

是の如く先づ本尊を成就すること訖んぬ。所餘の[3]觸食には成辨諸事の心明を以てせよ。食すべき所の者を供養せんには、當に不空威怒增加聖者不動尊の明を用ゆべし。誦すること一遍すれば、受者歡喜して當に行者に隨て之を護念すべし。每日是の如く供養して斷絕することを得ず。常に本尊の護念を得ば諸魔も害を爲すこと能はず。食を施し已つて常の如く禮懺し、法に依て念誦せよ。中夜分に於て消息せんと欲せん時は、卽ち先の莊嚴の印を結べ。

無動金剛光莊嚴印明第十二

慧の手、掌を翻して彎いて心の上にせよ　　定の掌還つて心の上に來て合す

本明を加持して頂上に安け　　便ち二手を開いて身に順じて摩せよ

能く障難を除きて成就を得、　　護身を以の故に莊嚴と名づく。

光莊嚴明に曰く、

曩麼悉底哩也四合陀嚩二合拏伽哆喃薩嚩怛他蘖哆喃摩訶三昧耶伽底伽帝三曼帝三

【一】大乘方廣理趣とは、大乘經典なり。

【二】隨を一本には意に隨つてとある。

【三】觸食とは、四食の一にて、樂食ともいふ。愉快の事にて身を長養することにて、例へば己の趣味に耽つて居れば終日食はざれども飢を感ぜざるが如きことなり。

五度を散じ開いて猛焔の如くせよ　是を無動金剛火と名づく、

無動金剛法螺印第九

二羽各無動の劍の如くにして、　掌の內鉤鎖して形、環の如くせよ

忍願竪て合せて頭相ひ拄へ、　進は忍の背と重ね相ひ著けよ、

力度を願の背にする事も亦是の如くせよ　是を無動の法螺印と名づく、

無動金剛索印第十

禪三度の背を捻して拳に爲り　進度は直く舒て觀の羽をもて握れ

力度屈して智を捻して環の如くせよ　是を無動金剛索と名づく、

明に曰く、

曩莫三曼哆嚩曰囉二合被阿引波舍伴闍那吽泮吒

無動金剛劍の印明は、　能く一切の事業を成就す。

明に曰く、

唵阿者羅迦拏勃駄制吒迦吽吽佉陸佉醯伊能魚哩二合醯摩訶賀唎尾沙索鉢多二合惡紇哩二合訶吽引泮吒阿哩耶二合者羅阿引蘗車緊至羅夜思伊引能迦哩羅耶二合句嚕耶婆莎縛二合訶

持明行者常に食する時每に、一分の殘食を出して本尊の像に供養すれば、歡喜擁護して所求皆得、終に空しく過さず。復無動金剛根本の明を誦せよ。

無動金剛解界明印第十一

持明行者念誦し了つて、卽ち前に結ぶ所の火界及び墻界を解き已れ。灌頂の印とは二小指を竪て頭相拄ふ是れなり。當に燈焰如來の解界の明を誦すべし。印を以て左に轉じて卽ち解界を成せ。前の

無動金剛誓印第三

戒方檀慧内に相ひ叉へ　忍願竪て合せ進力を附けよ
禪智二度背け相ひ著け　屈して戒方の相ひ叉へたる内に入れ
二無名面相ひ著け　印を擧げて左の膂の中に置安せよ
是を無動金剛誓と名づく。

無動金剛眼印第四

前の誓印に準じて手を飜へし倒に垂れて額の前に至せ。即ち無動金剛眼と名づく。

無動金剛口印第五

檀慧二度内に相ひ叉へて、　戒方雙て内に叉へたる上を押せ、
忍願竪て合せて進力を附けよ、　禪を以て戒の背を捻じ智を以て方を捻せ
是を聖者金剛の口と名づく、

無動金剛心印第六

戒方檀慧内に相ひ叉へて　忍願竪て合せ進力を屈し
禪智並て忍願の文を捻て　是を無動金剛心と名づく、

無動金剛師子奮迅印第七

前の無動金剛甲に準ず　唯進力を改めて頭相ひ拄へ
起立つて頻伸して虎舞の勢にし、　壇を遶つて行道して魔を辟除せよ
師子頻伸大奮迅なり。　是を五股金剛の印と名づく、

無動金剛火印第八

禪を以て三度の背を捻じて拳に爲り、　進度獨り舒べて定の掌を指す、

復本明を誦して悉地を成す。

眞言に曰く、

唵阿三摩阿三摩三曼哆都那哆怛嚩泌底舍那儞訶維訶維娑摩二合囉拏娑塺嚨二合　囉拏尾蘗哆母馱達摩帝薩羅薩羅三摩嚩邏荷羅荷羅荷娑荷娑怛羅耶怛維耶伽那　伽那　摩訶嚩囉囉迦沙二合儞入縛二合攞那入嚩二合　攞那娑伽嚟莎縛二合訶

百字の明を誦して加持し、復觀ぜよ。一切諸佛菩薩行者の前に在して前の如く種種の供養を攝受して廣大に成就す。所謂現世所求の一切悉地するを最勝悉地と名づけ、亦金剛薩埵悉地と名づく。復是の願を作さく、願くは此功德を以て普く一切に及ぼし、我等と衆生と皆共に佛道を成ぜん。毎日〔二六〕三時に念誦し、時別に最少は一百八遍せよ。已下は成ぜず、念誦了つて虛空眼の眞言及び印を以て本尊を加持し歡喜して願を與へしむ。亦堅固にして散ぜざらしめ、後根本印明を誦すべし。曰く、其の手印は前の根本三昧耶に準ずる是れなり。二手の中指已下を以て並に內に向け相ひ叉へて便ち鉤に爲り、二頭指側め相拄へて二大指各名指の甲を捻して卽ち根本明を誦すること三遍せよ。

卷の下

無動金剛寶山印第一

金剛堅固にして內に相ひ叉へよ、　是を寶山の身密印と名づく、
種種供養并に護身　　本明を以て加持し頂上に散ぜよ。

無動金剛頂印第二

禪度掌に入れ把つて拳に爲り　頂上に置安せよ頭印と名づく
想へ此の全身聖者の前にありと、　靜坐して心を安んじて觀照を作せ。

【二六】三時とは、朝・日中・黄昏なり。

戒方進力内に相ひ叉へ　六度竪て合せ頭相ひ拄へ、
腕を開いて左右の臂を加持し、　印を擧げて漸く頂上に至つて開け、
眞言の悉地此に隨て生ず。　是の故に名づけて
法生の印とす。　印を結んで加持せよ。

明を誦して曰く、

𠸪麼薩嚩母馱冐地薩怛嚩喃阿薩羅嚩他薩羅縛多囉路計渉嚩二合訶

法生の印とは一切如來の不動の菩提心より生じ、大悲本願より生じ、佛口より生じ法花より生ず、故に法生の印と名づく。

次に前の虚空部母眼の明を誦すること七遍、即ち觀ぜよ、一切の諸佛菩薩目前に在すが如く、手に數珠を執り如法に念誦せよ、是の如く廣く佛事を作し已つて當に本尊根本三昧耶の印を結ぶべし。先づ金剛百字の眞言を誦すべし。加持して傾動せざらしめんがための故なり。

捻數珠明印第十三

其の印前の部母の印に準じて、二羽分開す。即ち是れ此の印なり。明を誦して曰く、

𠸪麼嚩曰羅二合目契弊薩嚩怛他引蘗帝毗喩二合婆伽梵特縛弊　怛地也二合他嗃唎健馱哩戰茶唎麼蹬儗濱俄哩怛他引伽多吠曳二合使摩底吽入縛二合哩多帝逝伊能迦羅娼句嚕渉縛二合訶

無動金剛根本三昧耶印明第十四亦は根本身印と名づく

六度和合して内に相ひ叉へ　直く進力を舒べて頭相ひ拄へ
智度屈して方便の背を捻ぜよ　禪戒の背を捻ずることも亦是の如し
當に金剛百字の明を誦して　自身を加持し堅固に住すべし

曰く、

曩麼薩婆母駄菩地薩埵嚩二合喃薩婆怛路二合僧句素弭哆二合鼻枳惹二合曩始吠三合那謨素都帝薩嚩二合訶

復、無動明王の根本の明を誦すること三遍すれば能く聖者をして歡喜して願を與へしめ速に菩提を圓滿することを得るが故に、次に卽ち先業を懺悔せよ。一切の罪障願くは皆消滅せん。復此の願を作すべし。我れ今所有の一切の善業法界の衆生に迴施して我が此の願をして速に無上菩提を成就することを得せしめ、一切種智を具せしめんと。復此の加持の明を誦すること八遍せよ、明に曰く、

曩麼薩埵嚩喃那慕素都帝摩訶嚩曰羅二合薩婆薩埵嚩四路迦羅底瑟他薩婆怛羅嚇吠達羅摩摩拏地瑟他耶莎嚩訶

上の如く供養し本尊を加持し已つて、前の灌頂の印を結んで自ら灌頂せよ、

無動金剛虛空部母印第十一

此の虛空明印を結び、用て身を護り及び本尊を護す。故に部母と名づく。亦た虛空眼と名づく。

進力俱に蓮華掌に入る、　卽ち虛空部母眼と名づく、

印を以て身を護り及び本尊を護り、　二羽分開して

珠を捻し印にせよ、　亦聖者虛空眼と名づく。

明に曰く、

曩麼悉底哩二合也陀嚩二合拏蘗帝弊薩嚩怛佗蘗帝弊唵哦哦那路者儞哦哦那三摩薩嚩都嚕蘗哆底沙囉三婆吠入嚩二合攞那謨阿謨伽喃莎嚩二合訶

無動金剛法界生印明第十二

曩莫悉底哩三合也陀嚩二合 蘗哆喃薩嚩怛他蘗哆喃唵阿蘗哩阿蘗哩始弃始弃始南薩嚩怛度嚩始弃莎嚩二合訶

華供養印明第七

明を誦して曰く、

曩莫悉底哩三合也陀嚩蘗哆喃薩嚩怛他蘗哆喃阿嚩路枳哆二合摩訶布澁波二合嚩底莎嚩二合訶

飯食供養印明第八

明を誦して曰く、

曩莫悉底哩三合 也陀嚩 蘗哆喃薩嚩怛他蘗哆喃唵阿囉婆阿囉婆迦囉迦囉嚩哩 嚩哩鄰嚩鄰那陀毘摩訶嚩哩莎嚩二合訶

燈供養印明第九

明を誦して曰く、

曩莫悉底哩三合 也陀嚩蘗哆喃薩嚩怛他蘗哆喃阿藍帝爾嚩二合 藍帝儞波儒底始弃莎嚩訶

普莊嚴供養明印第十

明を誦して曰く、

曩莫薩婆母駄菩地薩埵嚩喃薩婆他烏特二合伽帝娑破羅嗢給伽伽那劒莎縛訶

此の明を持する力の故に、能く如意寳を生じて一切の諸佛菩薩の衆會に供養したてまつる。此の讃歎を誦する福德力に由るが故に、此の供養をして普く一切の諸佛菩薩の衆會に遍ぜしむ。讃歎の明に

曳怛唎二合藍引莎嚩二合訶

持眞言者結護し了つて、若三昧耶を闕犯することあらば、當に此の印を結び頂上に安ずべし。明を誦すること、三遍し或は七遍し、右に旋ぐること三匝して衆過を懺謝して然して後に本尊の明を念誦せよ。

無動金剛滿足印明第四

虚心合掌して甲を相拄へよ、　是を本尊滿足の印と名づく、
種種の供養及び塗香、　焚香燈明并に飯食
上妙の供養吉祥の事　俱に此の印を持すれば皆圓滿す。

明を誦して曰く、

曩麼悉底哩也四合陀嚩二合蘗哆喃薩嚩怛他蘗哆喃暗尾哆哩摩訶嚩曰囉二合薩怛薩怛莎囉帝　莎羅帝　莎縛訶

復た此の明印を以て想へ、水陸の珍寶及び寳山等の物、海中妙寶摩尼華樹王等、悉皆主の所攝なきを我が福德力と諸佛の加持力とを以て、願くは此の香華雲、諸佛の刹土(せつど)に遍滿し一切の諸佛菩薩に供養して上願を滿足せんことを。

塗香供養印明第五

印は前の如し、明を誦して曰く、

曩麼悉底哩也三合陀嚩二合蘗多喃薩縛怛他蘗哆喃阿三摩彥度怛謎素餐馱嚩底薩頗二合羅咖弩哦哦喃摩呼那曳泥去尾薩嚩㗚他二合莎馱儞莎嚩二合訶

燒香供養印明第六

明を誦して曰く、

を作すべし。是れ速に成就を得。復不動聖者を觀じて本位に住す。前の灌頂の印明を用て本尊に奉獻し即ち根本の明を誦すること一遍して能く聖者をして歡喜せしめば速に圓滿成就を得るが故に、又持明行者、次に三昧耶の印を結んで頂上に安置せよ。（印は前に已に說くが如し。）即ち想へ自身本尊の如く、八葉の蓮華に乘ぜりと。手に香爐を執つて、即ち三業寂然にして亂なからしむ、精舍に往詣し、道場の門に至り三たび吽字を稱へて諸聖を驚覺して精舍に入れ。已て（已上三昧の印の後に安んず。）

次に常の如く〔三〕禮懺して〔四〕閼伽を奉獻すべし。應に是の念を作すべし。我今當に全身を捨て十方三世の常住三寶の道場の衆會に供養すべし。唯願くは一切の諸佛菩薩我等に乞與へて大加持を作したまへ。最上に成就し金剛薩埵の悉地を成ずることを得しめたまへ。攝受すべきが故に、加護を請ひ求むと、是の如く三たび白して便即ち云云と、又杵と印とを以て前の如く結界して本尊の座を加持すべし。如來所生の印を以て諸佛菩薩に奉獻して每日三時に如法に供養せよ。或る時は忘念して法則を闕少すれば即ち〔五〕三昧耶を犯す。先づ大輪金剛の明を誦し及び大輪の印を結で用て其の咎を除き其の過罪を謝すべし。

大輪金剛懺悔印明第三

是の如く法に依て結護し已るべし、　皆三昧耶を闕犯することあるも
密に蘇摩金剛の明を持して　四時に諸の過咎を懺悔せよ、
戒方進力内に相ひ鉤して、　六度竪て合せよ金剛輪たり。
此の明印を結んで頂上に安じ　右に旋すこと三匝して其の過を謝せよ。

明を誦して曰く、

曩麼悉底哩耶（四合）地尾迦喃薩縛怛他誐多喃唵尾囉耳尾囉耳摩訶斫迦羅嚩日羅（二合）薩哆薩哆娑囉帝娑囉帝怛囉（二合）曳怛囉（二合）曳尾馱摩儞三盤若儞怛囉（二合）摩底悉馱阿紇哩

〔三〕禮懺、佛を禮拜讃歎し、又罪業を懺悔すること。
〔四〕閼伽とは、水のこと。
〔五〕三昧耶を犯すとは、佛の本誓に違犯すること。

明を誦して曰く。

唵哈吽嚩曰羅二合入嚩二合隸吽泮吒

此の火焔の印を結び已て明を誦すること三遍、金剛墻の外に於て右に旋らせ、三匝にして即ち火院と成る。

供養品第五

無動金剛座印明第一

平かに定の掌を舒べて慧の背を承けよ、　行人想へ金剛座と成ると、
座の上に更に所生の印を安んぜよ　一切の聖者皆隨喜す。

明を誦して曰く、

唵哈吽嚩曰羅二合莎儞梵吽泮吒

此の明印を以て住處を加持すれば金剛不壞の地と爲ることを得。即ち地上に於て、金剛座ありと想へ。便ち如來所生の印を以て諸佛菩薩を金剛座の上に安置し、便ち此の印を廻つて諸聖に供養す。

一切如來所生印明第二

金剛堅固にして内に相叉へて　檀慧竪て開け所生の印なり。
此の印をば名づけて功德の母とす。　佛法僧寶其の中に住す。
明王及び本尊を請召するには、　此の祕印を結べ皆雲集す。
便ち此の印を廻して諸尊に獻ず。　即ち閼伽と成つて佛に供養す。

曩麼薩嚩拼駄冐地薩怛嚩二合喃阿引摩羅尾迦羅二合多帝餌儞阿羅逝莎嚩二合訶

便ち此の如來所生の印を以て閼伽と爲ると想へ。諸佛菩薩諸尊賢聖に奉獻すと。常に此の法供養

復密言を誦して曰く、

曩莫三曼多嚩日囉二合赧戰拏唵阿者邏迦拏者𠻘娑馱耶吽泮吒

此の杵の明と印とは能く一切の事業を成就す。乃至[一]洗浴明淨土、及以び護身結界にも皆此の明印を用ゐよ。

無動金剛墻印明第四

戒方進力屈して掌に入れ、　忍願並に檀慧を側て竪てよ、
禪支屈して進の下の文を捻し、　智、力支を捻することも亦是の如し。

明を誦して曰く、

唵唅吽嚩日囉二合曼茶隷畔馱畔馱吽泮吒

明を誦すること三遍して印を以て[二]左に轉ぜよ。三遍心の遠近に隨つて卽ち墻界を成就す。

無動金剛網印明第五

戒方進力內に相ひ叉へ　六度竪て合て頭相ひ拄へよ
腕を開て頂上にして右に三たび旋らせ　卽ち金剛堅固の網と成る。

明を誦して曰く、

唵唅吽嚩日羅二合薩囉二合步嚩儞幕吽泮吒

此の印を結び已て明を誦すること三遍頂上に於て右旋らせ。三匝にして卽ち網界を成す。

無動金剛火焰印明第六

二羽掌を翻じて背いて相ひ叉へ、　卽ち本尊三昧の火と成る。
金剛墻の外に三たび旋繞せよ、　火の猛焰の如く金剛城なり。
一切の魔軍悉く馳散す。

【一】洗浴明とは、一本には洗浴明水とあり。

【二】左を一本には右とあり。

禪智並べ合て　蓮華掌にして
本明を加持して額の上に安く、　諸法の本不生を思惟す。

不動威怒辟除障難印明第二

九 願力並べ竪てゝ端くせよ
智度を以て捻して環の如くせよ、　慧方鉤の勢の如くし、
卽ち忍・進を以て劍にして　慧の羽も亦是の如し。
是を無動の劍と名づく、　定の鞘の中に穿ち入れよ、
刀を拔て左に之を遶らし、　方隅界を結護し、
劍を持して右に旋轉せよ、　一切魔を辟除す、
上に虛空界を結せよ。　下に指すに金剛橛なり、
復祕密明を誦せよ。

曩莫三曼哆嚩曰囉二合赧怛羅二合吒戰茶摩訶路灑拏沙頗二合吒耶吽怛羅二合吒唅𤚥

密に誦すること三遍或は七遍、印を以て右に旋して結護し左に轉じて辟除せよ。及以び上下せよ。是の明の威力能く大に十方の大界を擁護し、及以び身を護し幷に處所を淨除す。乃至三界も猶ほ能く防護す。況んや一の方所に是の法を作さんをや。時に行者の心に隨て明印を念じて及ぶ所の處能く種種の類及び難調の魍魎の屬をして皆熾然の金剛威怒の大火聚の如く其の處に周遍するを見、此の印の功能甚大にして說き難し。若し人世に住すること劫を窮めて其の功能を說くとも亦盡くすべからず。是れを無動の金剛劍と名づく。此の印明は亦五部の護身結界に通じて用ゐよ。

無動金剛能成就一切事業杵印明第三

一〇 止の羽の掌を竪て開き、　禪進捻じて環の如く、
各々建てゝ金剛峯の如くせよ　是を無動杵と名づく。

【八】蓮華掌とは、蓮華合掌にして蓮花の開き初めたる如き形に掌をすること、頭指中指無名指の三指の頭を少しく離すなり。
【九】願力等とは、不動明王の劍印を說く。

【一〇】止の羽とは、密教は左右の手を左の如き異名を附す。
左　止　定
右　觀　慧

不動金剛灌頂印明第五

戒方檀慧内に相ひ叉ひ忍願竪て合せ進力に附けよ。智方の背に捻ぜよ。禪も亦然り。是を本尊灌頂の印と名づく。明に曰く、

曩摩悉多羅　也地尾　蘖多　南薩羅嚩怛他　蘖哆喃紇唎　薩羅嚩母駄那婢　邏波波羅濕摩鼻囉廚婀婢誂者怛謨努遮皤邏嚩底戸囉者麗莎嚩訶

修眞言者甲を著し身を護し洗浴して衣を著し竟て明を誦して曰く、

唵唅吽塞頗吒耶薩醯吽羅迦沙唅泮吒

不動金剛杵の印眞言は一切の穢處に用ゐよ。修眞言者一切の穢處に往んと欲はゞ先づ杵の印を用て五處を印せよ、いはゆる兩の肩心額喉頂是れなり。印を用ゆるの時、明を以て加持して頂上に至て散ぜよ。明を誦して曰く。

唵阿者邏迦拏戰茶莎駄耶吽泮吒

結護道場品第四

無動金剛三昧耶印明第一

是の如く法に依て洗浴し已て卽ち精舎に往け、淸淨の心を以て常の如く合掌して禪智二度を直く竪て額の上に於て思惟せよ。諸佛菩薩目前に對するが如く其身心を放し坦然として禪悅して三昧耶に入る。明を誦して曰く、

曩摩薩嚩勃駄冐地薩怛嚩二合　喃那莫蘇悉地莎達儞阿蘖隷二合　迦噜儞嚩羅提怛羅異怛羅異阿皤曳阿底摩㘑那莽素都二合　帝波羅摩悉地駄也闍鼻喩二合摩訶訖哩二合　閉弊毘也莎嚩訶

指の背に於て相交へ二頭指を以て各無名指を握つて二大指を竪て中指の中節を捻ずる是れなり。明に曰く、

曩麼三曼多勃馱喃、一唵二賀羅賀羅三摩訶儞弭多吽引泮吒半音四

爾の時に無動聖者洗浴の法を説く、二種あり。一は內淨二は外淨、內淨とは諸の衆生に於て慈悲喜捨の心清淨無我の心を起すなり。二には外淨水を以て洗浴するなり。或は河の中に於てせよ。先づ三昧耶の印を結べ。頂上に置安して[三]明を誦すること三遍卽 杵の印明を用て身を護り垢に瀉ぎ方に結界すべし。水及び土を淨むるにも亦杵の印明を用ゐよ。

無動金剛洗浴結護八方印明第二

[四]禪度を掌に入れ握つて拳に爲し、獨り進度を竪てゝ金剛峯の如くして三轉せよ。右に轉ずれば結界と成り左に轉ずれば[五]解界及び辟除なり。明に曰く、

唵唅吽摩訶咖摩畔馱儞畔馱吽泮馱嚩曰囉嚩日黎禰吽泮吒、

無動金剛洗浴水印明第三

禪智を定慧の掌中に雙べ入れて印を以て水を攪し、諸障を除く明に曰く、

曩麼三曼哆嚩曰囉二合赦怛囉 吒阿謨伽戰茶二摩訶嚕灑拏、薩頗 吒耶吽四 怛囉二合渉耶怛囉二合渉耶吽怛囉二合吒吽怛囉二合吒、

不動金剛著甲印明第四

戒方を掌に入れ背き相ひ著く、進力掌に入るも亦是の如し、六度竪て合せ三鈷杵の如くに腕を開いて身上頂を印し[六]五處を加持して頂上に散ず。是れを金剛甲と名づく。明に曰く、

唵唅吽嚩曰囉二合三摩曳嚩曰囉迦縛制護嚩曰羅 吽泮吒

此の明印を以て五處を印して卽ち[七]甲を著るに成る。意に隨て洗浴せよ。

【三】明とは、眞言なり。

【四】禪度等とは、密教は左右の手を左の如くに觀ずるなり。左小指(檀)無名指(戒)中指(忍)頭指(進)大指(禪)右小指(慧)無名指(方)中指(願)頭指(力)大指(智)

【五】解界とは、結界して修法了れば更に之を解くのである。

【六】五處とは、心と額と喉と頂と兩肩なり。

【七】甲とは、甲冑なり。

字門に入れば卽ち本無生死の義なり。茶は是れ戰の義、此無生死大勢の王を以て諸の四魔と戰ふなり。次の魔は是れ我の義。阿字門に入れば卽ち是れ無我なり。亦是れ空三昧なり。嚧は囉字あり、垢障の義を體とす。鄔の聲あるは是れ三昧なり。卽ち奢摩他を大三昧と爲す。儞は是れ戰の義、阿字門に入れば卽ち大空三昧なり。薩は是れ堅の義、頗は是れ沫の義、世間の法の聚沫の如くなることを知るが故に破壞し易し。傍に阿字の點あるは卽ち行なり。吒は是れ戰の義、能く障に敵して怖畏して破らしむ。野は是れ乘の義たり。吽は是れ大空三昧なり。上に說くが如し。怛は是れ如なり。囉は是れ無垢なり。吒は是れ作なり。謂く一切法は無作なり。唅字の上に空點あるは是れ圓寂の義なり。亦大空智と名づく。訶字門に入るは是れ行の義、又阿の聲あるは魔障を怖るゝ金剛三昧の行なり。野は卽ち大空なり。此の大空不動の行を以て大に一切の魔障を怖る、𤚥字をば亦大空智と名づく。謂く、𤚥字門は是れ我の義なり。阿字門に入れば無我なり。謂く一切法は本と生滅なし。又此の大空無我の三昧を以て衆魔を怖る。此字亦阿の聲及び野を有するを以てなり。阿嚧唅𤚥、此四字皆阿の聲あり、卽ち重ねて魔を怖る極怖畏たり。卽ち是れ內外二障を破るの義なり。三昧を結び已つて卽ち想へ、自身全く𤙖字と成る。此の字猶火色の如くに成ると想へ。字より熾然の猛焰を發して身中の三毒煩惱及び隨煩惱を焚燒し、一時に頓に盡る時、火も亦隨つて滅して唯𤙖字のみを存す。融じて皎月と成つて心中に在り。是の觀を作す時遲住すべからず、速に慧心を轉じて共をして成就せしむ。

澡浴結護身品第二

無動金剛極安穩護身印明第一

先づ二小指を以て內に相ひ叉ひ大指の虎口の中に於て、出して二中指を並べ竪て、二無名指を中

【三】奢摩他とは、散亂の心を靜定にする禪定のことなり。

根本眞言品第一

三昧耶經の中に略說して無動明王根本祕要成就一切事業を出す。諸の修行者をして諸佛の實智を顯發せしめんと欲ふが爲の故に。三世の諸佛應正等覺者、皆陀羅尼門三摩地門を成就するに由て、菩提樹下に於て最勝の三解脫門を現證し、一切智を具す。彼釋師子は無比大明呪藏を獲るに由るが故に能く魔軍を摧伏し一切を利益す。是の故に智者心を此の門に安じて祕密を行と爲し、應當に淨菩提心を以て此の法を修行して速に一切智を成就することを得。故に我が薄伽梵大日世尊復た一切の修眞言者の爲に障を除かんが爲の故に、火生三昧に住して此の摧障の眞言を說く、此の祕密明の威勢能く一切有情の種々の障難を除く、乃至佛、道樹下にして此の眞言の力を以ての故に一切の魔軍散壞せずと云ふことなし。何に況んや世間所有の諸障をや。又此の障を明すに略して二種あり、一は內障、謂く自心より生ず其類甚だ多し。二には外障、外より生ず。其の類亦甚だ多し。要を以て之を言はゞ皆能く障を除く。卽ち大摧障聖者不動明王威怒の明を說いて曰く、

曩麽三曼多縛曰羅二合赧怛羅二合吒阿謨伽戰拏二 麼賀路灑儜 娑頗二合吒野吽 怛囉二摩野怛羅摩野 吽怛囉二合吒唅𤚥六

祕密釋に曰く、曩莫三曼哆縛曰囉二合赧 歸命普遍忿怒金剛王なり。怛羅吒 殘害破障也。阿謨伽戰拏 不空威怒極惡中の極惡なり、形狀の暴惡にして過る者のあることなきことを示す。乃至 摩賀路灑儜 此は是れ大怒なり。極惡の中に更忿怒暴惡なり。卽ち是れ一切世間の諸障を噉食して餘なからしむる惡中の惡なり。諸佛の第一義なり。威猛世間を殘害して其の巢穴を盡して定んで法界に入り金剛界に歸依するなり。娑頗二合吒野 破壞なり。吽 恐怖なり。怛囉麼野 堅固なり。吽怛羅二合吒唅 𤚥 種子なり。

後の二字を用て種子と爲す。諸の句義の中に皆能く事業を成ず。初の戰拏は是れ死の義なり。阿

【二】後の二字とは、唅𤚥の二字なり。

唵若嚩囉路者寧莎嚩二合訶引

金剛部明王心

唵滿度哩儞異鉢帝莎嚩訶

念誦し已つて眠らんと欲するの時には、前の光莊嚴の印を作すべし。又部母を以て護身し再び被甲し所臥の處を加持して、然して後に身心を澄淨にして明を誦して曰く、

唵吠除儞吽

此を以て加持すれば惡夢なからしむ。若し諸の惡相(あくさう)を夢(ゆめ)みることあらば、即ち此の明を誦して曰く、

唵嚩曰囉二合那羅呵那娑佗盤闍囉拏吽泮吒

誦すること一百八遍、所眠の處に於て如法に辟除結界(びゃくじょけっかい)せよ。若し善惡の相を知らんと欲せば、前の三部の明王心を用て檀香水を加持すること七遍して三掬を飲み、并に以て身上に灑(そゝ)ぐべし。若し念誦して成就を求るの時、上の如く作法して方(まさ)に善相を取るべし。

一切衆生は、無明に覆(おほは)れ、唯、菩提を求めて、信受すること能はず。我れ今彼が爲にす。己身の爲には非ず。唯願くは如來、成就の時には、我が遍數を還したまへ。

偈を誦すること既に畢つて、百字の明を以て加持すべし。又部母を以て尊及び己身を護し、三昧耶大結護を以て其の印を左轉して文闍(もんじゃ)の句を以てすべし。即ち界を成ず。

るが故に。金剛索を執ることは大菩提の路に引至し佛の解脫門に住し、三寶の種位を紹隆して斷ぜざるが故に。降三世の義と名づく。是の故に本尊四密門に[六一]住す。所謂阿路哈給重々なり。是れ怖魔の義、亦是れ種子の義なり。世間の良田の善種を下すに堪えたるが如く、諸佛の智種も亦復是の如し。能く大悲曼荼羅を成就し一切陀羅尼門三摩地門を出生す。拘底支木（槐木是れなり）烏伽木（榲桲か）阿彌尸利師木（守宮槐木是れなり）鎭頭迦木（柿木未詳）篤迦木（栗木是れなり）播囉師木（胡桃木是れなり）羊素佉木（甘草）居凌迦木（李子是れなり）舍利般那木（墻微是れなり）

復次に或はある眞言の中に三の吽字あらば能く一切の事を成ずるなり。所謂護身[六二]結界召請供養相助決罰教授等の事なり。若し久しく一切の眞言を持するに、成就せざれば此の眞言を持するに、當に一切眞言の法を成ずべし。三の吽字眞言に曰く、

曩謨喇怛曩怛囉夜耶、曩莽室戰茶嚩曰囉皤拏曳二　摩賀藥乞叉　細那鉢多曳　唵蘇悉地耶蘇悉地耶　娑太野　蘇悉地羯羅　吽吽吽　泮吒泮吒

蓮花部の明王を賀野羯利婆と名づけて、補瑟徵迦の明王の眞言と爲す。亦降三世明王と名づく、眞言に曰く、

曩謨囉怛曩二合　怛囉二合　夜耶曩莽室戰二合　茶嚩曰囉二合　皤拏曳摩賀藥乞叉二合　細曩鉢多曳唵嗉婆儞嗉婆吽　疙哩二合　吽拏　疙哩吽拏二合　吽疙哩　吽拏　播耶吽阿娜耶護引　薄伽梵尾儞夜嚩曰囉二合　囉闍吽泮吒曩莽

蓮花部明王心

唵微路枳寧莎嚩二合訶引

佛部明王心

【六一】住すとは、一本には位すとある。

【六二】結界とは、一定の場所を限定して惡魔の侵入を防ぐことにて、密教には大結界といふて廣大の範圍を限定して清淨區域とすることあり、又中結界とて、修法道場を結護することあり又小結界とて修法壇の四圍のみを結護することあり。

善惡を問ふことなく一ら教命に依る。無動使の義も亦復是の如し。能く眞言行者をして親しく佛を見たてまつるが故に廣大心を發して[五八]灌頂位の中に佛の長子と爲らしむ。佛は淨佛國土遊戲神通を願はしむ。右手に劍を執ることは、世間征戰を防禦するの如きは、亦皆利器を執つて然して始て勝つことを得。菩薩も亦爾なり。左手に索を執ることは、是れ繫縛の義なり。又世間、密に一人を捉ふるに、如し違逆難伏の者あらば、卽ち繩を以て繫縛して捉將す。諸佛の祕索を以て四魔を降伏するが如きことも亦復是の如し。[五九]盤石の上に坐することは亦是れ不動の義なり。世の山岳の、亦石を以て鎭押して方に始より動ぜざるが如し。又大海も亦須彌山を以て鎭押して然して始て常安を得て湛然として圓滿なるが如し。不動も亦爾なり。其の大石の性は能く一切の寶物を出生す。無動大盤石に坐せば亦能く佛の功德の寶を出生す。亦是れ四魔を降伏するの義なり。不動は亦自身に遍く火焰の光を出す。卽ち是れ本尊自ら火生三昧に住するなり。又火を明すに四義あり。一種は世間、二種は出世間なり。世間の火とは一は是れ內火なり。三毒の煩惱之を名づけて火と爲す。能く諸の衆生の諸善の功德を燒くが故に。二には外火、能く衆生を成就し、萬物を長養す。出世間の火とは是れ大智火なり。[六〇]九十五種外道の法の中に事火を最と爲るが如し、大火龍の世の火を變出して、衆生を燒損し亦能く衆物を焚燒するが如く、此の無動の智火は、先づ能く火龍を降伏し諸の異道を制し、上、等覺に至り、下、衆生に至るまで、皆能く諸の煩惱乃至菩提大智習氣を燒き、亦一切衆生無明の煩惱黑闇の障を燒くが故に。又本尊の眞言句に自ら火生の義あり、卽ち摩賀盧沙の句是れなり。此の智火は阿字の一切智門に住して重々に諸の菩薩の廣大の習氣煩惱を燒き盡して餘無からしむ。故に火生三昧と名づく。又無動の義とは、利劍を執持して能く生死の業愛の煩惱を斷壞するが故に。三世の貪瞋癡我慢煩惱を降伏するが故に。殘食を喫することは一切衆生の惡業煩惱の重障を噉ひ盡して餘無からしめ、無生法忍を證するが故に。三たび未來世を降して無明煩惱習氣の見障を斷ずる

【五八】灌頂位とは阿闍梨より法を傳授繼承すること。

【五九】盤石とは、不動明王の座にして淨菩提心の堅固不動なることに喩へたるなり。

【六〇】九十五種外道とは、印度に於ける外道の總稱にして就中事火外道とは火天を信奉する外道なり。

突、一切諸法の相を常なりと說く、當に眞言業に住し、善を作して疑無かるべし』とは此の意の言く、如來は一切智を具して諸法の中に於て自在を得たまふ。衆生は劣慧にして未だ頓に如來自證不思議の力用を說くに堪えざるを以ての故に、此の畫色等の方便を作して諸の衆生をして所作の者に隨うて能く所求を滿じて利益を得しむ。然る所以は諸の衆生は未だ諸法の空相を解せざるを以て、是の故に無相の中に於て有相の方便を作して之を說きたまふ。若し人、佛の深意を得ば、當に眞常の行に住して諸有の所作皆理體に入つて一切智智の心に同ず。是の如くの疑慮なからん者は、一切の障法其の便を得ることなし。

次に復法界生の眞言を說いて曰く、

曩麼三曼多沒陀南一　達磨馱睹二　薩嚩二合　婆嚩二合　句痕

祕密に曰く、不動とは是れ菩提心、大寂定の義なり。我が薄伽梵大日世尊、最初正覺して[五四]寂滅道場に坐したまへしより、大願を以ての故に、三世の諸佛の應正等覺を證す。皆[五五]四祕密三菩提より起つて三身を應現し、等正覺を成ず。如來成道の時、先づ寶菩提樹に坐して魔を降し、道を成ぜば卽ち是れ大寂定不動菩提の本因、三世諸佛は皆幻化の義なり。種種の身雲を現じて諸の衆生を敎化し調伏す。故に事に因つて號を立て、不動尊と號す。又明とは尊の義なり。卽ち是れ大日世尊の[五六]差別智身なり。大願を以ての故に無相の中に於て而も相を現作したまふ。一目を閉づることは深意あり。極惡醜弊の身を示現するなり。唯だ佛世尊のみ廣大圓滿し衆相具足したまへり。我は下劣卑弊の身なり。亦是れ怖魔の義なり。頭上の[五七]七種の髮は七菩提分を表す。左に一髮を垂れ下に向ふは是れ慈悲を垂るゝの義にして下惡極苦惱の衆生を悲念するなり。無動使者と云ふは、卽ち大日如來なり。世間の王勅敎命の如きは一人を火急に追役使して人をして至らしめ已んぬ。上は王公に至り、下は凡庶に及ぶまで貴賤を問ふことなく更に敢て拒逆せず。皆使に隨うて彼の王所に往來す。

【五四】寂滅道とは菩提樹下金剛座上のこと。

【五五】四祕密とは、又は四意趣ともいひ佛の說法をいふ。一平等意趣、二別時意趣、三別義意趣、四補特伽羅意樂意趣。

【五六】差別智身とは。大日如來が衆生を敎化せんために種種差別の智身を現ずることをいふ。

【五七】七種の髮とは、印度に於ける奴隷の相を示したるものにて、不動明王は奴隷となつて、衆生敎化に從事すといふ。

の事業を作すべしとは[四四]是れ金剛手身を以て勸懇に之を行じて言く、我等が作すべき所の事業亦復是の如し。若し未來世の持眞言者も亦此の位に住すべし。所謂如來の家法なり。無量の門を以て諸障を降伏し、如來の法をして敢て隱藏することなからしむべし。此の眞言行人も亦諸尊に於て若し降伏を作さんと欲せば卽ち自身無動尊と作つて火輪の中に住すべし。亦[四五]火生三昧と名づく。[四六]祕密主若し諸の彩色曼荼羅の中の諸尊の色を畫くは、先佛の說なりとは、謂く本尊に各[四七]形色あり。[四八]下に當に之を說くべし。上に說くが如く本位に隨つて住して事業を作す。謂く、會中に於て所有る諸尊若し其の黃色を見ば卽ち金剛の中に坐せしむべし。白色ならば卽ち水輪の中に坐すべし。赤色ならば卽ち火輪の中に坐すべし。黑色は風輪の中に坐すべし。次の下に色の字あり。梵音別名なり。此は是れ形相なり。是の如く寂然卽ち須く圓壇等の類に坐せしむべし。一一に敎に依つて畫くべし。是の故に諸佛の所說なり。其の道玄に同じ。我れ故に說くにあらず、衆生をして決定の信を起さしめんと欲するなり。[四九]祕密主、未來世に當に衆生有りて劣慧不信にして此の法を聞かんに、先より信根なきを以ての故に、此れを聞いて信ずること能はず」とは、此の衆生等鈍根少智にして信具せざるを以ての故に此の甚深の事を聞いて曉了すること能はず、更に疑網を增すべし。此は卽ち障をなす所由を說くなり。是の如く眞の畫色及び持誦等は一一に皆深意あり。畫は是れ如來[五〇]不思議の事なり。此の如く畫色等、法に依つて疑はざれば乃ち能く深く法界不思議に入る。唯し信ずる者のみ入ることを得。若し心を以て數へ下して量らんと欲せば、云何ぞ所以を知て疑はざるを得んや。謂く如來は眞空無相の法に非ず。從つて自ら傷むなり。此の色の字をば亦通達と云ふ。是れ正義なり。謂く異の方便事として解せずと云ふことなきの義なり[五一]已に彼れ先に此の一切を說きたまふとは梵音[五二]廻互せるなり。上文には已に諸佛を明し、今此の下の句に先佛是の如くの說を作したまふ。已に彼れ此の一切を說いて求むる者を利益すと云ふ。彼れ凡夫なれば知らず[五三]說(諸)法の相は

【四四】是れとは、以下疏釋なり。

【四五】火生三昧とは、不動尊の三昧にて身中より火焔を出すのである。

【四六】祕密主以下は、息障品第三の餘の文。

【四七】形色とは形色と顯色にして形色は諸尊の形相をいひ、顯色は本尊の色相をいふ。

【四八】下に當に說くとは大日經第五と疏第十六祕密曼荼羅品等を指す。

【四九】祕密主とは、大日經文なり。

【五〇】不思議は、一本には不思議境といふ。

【五一】已を一本には也とある。

【五二】廻互とは、廻文の末盡をいふ。

【五三】說法を一本には諸法となる。

生とは卽ち是れ佛慧の門を起すなり。是の故に眞言行者、應に一一に諸佛密語に[三八]思順すべし。

又の法は、芥子及び諸の毒藥を用ひて、二種相ひ和して彼の障を爲す者の形像を作り、用て之に塗りて彼の身をして火の燒くが如くにして速に中傷を被らしむ。故に速被著と云ふなり。乃至大梵等の障を爲すを尙ほ能く著せらる、何に況んや餘をや。又凡そ此の法は皆是れ久時に持誦して大成就解法の者のみ乃ち能く之を作す。若し但し法を聞いて卽ち是の如くの用を得んことを求めば此の理なし。其の佉陀羅木の橛は若は此れなくば、當に苦練木を用ゆべし乃至[三九]賓鐵を用るも亦得る事之れを知る。[四〇]時に金剛手佛に白して言く、我れ佛世尊の所說の義を知るが如く、我も亦是れ曼荼羅の位に住することを知る。世尊の尊主威を現じて彼の位に住せしむ。是の如く如來の敎救敢て隱蔽せず。何を以ての故に、此の佛の[四一]三昧耶は一切の諸の眞言の師とする所なり。謂く、性に住する者なり。金剛手佛に白して言く、此の大無動明王は卽ち是れ尊主 能く是の如きの威猛の事を作して能く難調を調ひ是の如くの祕密の敎令を傳ふる使と爲る。如し本尊是れ佛部ならば卽ち金輪の[四二]中にす。若し是の如く作せば必ず靈驗あり。此の現威は卽ち効驗の語なり。修行者をして若し是の如く作さしめば、必ず効あらしむ。諸の生死の中に普く聞知することを得しめて敢て此の眞言主を隱蔽せず。是の故に持金剛者大威猛にして敢て隱蔽せざる所なり。謂く此の尊、靈驗あるが故に所作の善事皆成じ諸の障を爲す者敢て如來の敎勅したまふ所を隱蔽せず。此れは卽ち是れ十方三世の諸佛の三昧耶なり。我等一切の執金剛も亦應に此の法を作すべし。作すべき所の者は、此の三昧耶に隨つて敢て失墜せず。何を以の故に、此れは卽ち是れ諸の執金剛の性なり。是の故に當に斯の法に住すべし。四姓等各各に家法あるが如し。若し家法を失すれば、則ち先祖父の敎に敬順すとは名づけず。世人名づけて惡子とす。今此の大雄猛、難調を調伏し、難信の敎を宣布したまふは、是れ我が金剛等家姓の法なり。所謂如來種姓の家なり。[四三]是等は眞言門を修行する諸の菩薩等は、本中に住して一切

【三八】思順を一本には思惟となる、

【三九】賓鐵とは、鍊鐵のこと。賓は一本に鑌となる。

【四〇】時に金剛手以下は息障品の本文なり。

【四一】三昧耶は、諸佛の本誓と譯す。

【四二】中にすとは、一本には中に坐すとある。

【四三】是の故に已下は、金剛手未來の眞言行人を勸誡することを說く。

く所有る諸穢を噉ひ、盡して餘なからしめ、便ち執へて彼を佛の所に來至せしむ。彼れ復た言さく、爾等は是れ夜叉の類なり。我は是れ諸天の主なり。何ぞ能く爾が所召の命を受けんや。尋で即ち逃れ歸る。是の如くすること七遍なり。爾の時に無動明王、佛に白して言さく、世尊此の有情[二八]故らに三世の諸佛の三昧耶の法を犯せり。當に何事を以てか之を治すべきかと。佛の言く、即ち當に彼を斷ずべし。時に不動明王即ち[二九]彼を持へて左足を以て其の頂の[三〇]半月の中を蹈み、右の足を以て其の妃の首の半月の上を蹈む。爾の時に大自在天尋で即ち命終しぬ。爾の時悶絶の中に於て無量の法を證して授記を得、灰欲世界に生じて作佛して日月勝如來と號す。此れ皆[三一]祕密なり。一切穢惡の汚を食すといふは是れ惡業煩惱等の垢穢滓濁を噉ふなり。之を謂ひて法本命終と爲ることは、是れ彼の一切の心法永く斷じて無生の法性に入る故に、此の中に於て一切の[三二]佛記を得、是れ殺には非ざるなり。爾の時に、諸天等三千界の天王の諸佛の三昧耶に順ぜざるを以ての故に自ら命終を取るを見て、一切敬畏して自ら相ひ謂つて言く、天主すら尚爾なり。我云何ぞ往かざらん。即ち共に佛所に來詣して大曼荼維の中に於て法利を得たり。時に無動明王佛に白して言さく、此の大自在天をば當に云何んがすべき。佛の言く汝應に之を[三三]甦らしむべし。時に無動明王即ち法界生の眞言を說きたまふ。爾の時に、大自在者即ち復蘇息して大歡喜を生じて佛に白して言く、甚だ希有なり。我れ初め召されて至り已つて佛に[三四]向ふが故に。此の夜叉は是れ何等の類ぞ、我れ解せざる所なりと。佛の言く、是は諸佛の主なりと。我れ是の念を作さく、諸佛は一切の尊にいまさば云何ぞ此れを以て更に主とするや。是れ解せざる所なりと。今乃ち之を知りぬ。此の大王の[三五]力の故に、我をして現前に作佛を得記せしむ。當に知るべし、實に是れ諸佛の尊なりと。[三六]祕密主大自在天は三千世界の主なりとは即ち是れ衆生自心なり。所謂[三七]無明住地なり、諸惑の中に於て自在を得。唯大菩提心を除いては能く伏する者なし。其の命を斷じ已らば即ち寂然世界に於て作證すべし。所謂

【二八】故にを一本には何が故にとある。
【二九】彼を一本には彼の命となる。
【三〇】半月とは額をいふ。
【三一】祕密を一本には祕密語といふ。
【三二】佛記とは、成佛の豫言なり。
【三三】甦を一本に起すとある。
【三四】向ふが故にとは、一本には佛に問ひ奉るとあり。
【三五】力の故にを一本には力に由るが故にとあり。
【三六】祕密主の前に一本には「然る所以は」とある。
【三七】無明住地とは、一切煩惱の所依となる處の義。

一切の金剛に同じて然して後に之れを作るべし。此る橛は是れ三股金剛なり。邊支を除去すれば即ち獨股金剛と成る。其の最小の者を金剛針と名づく。一切の障難を息除す。復た大威徳忿怒不動大力の眞言法を說かん。本曼荼羅の中に於て作住せよ。持誦者曼荼羅の中に於て彼の形像を畫作せよ。左の脚を以て彼の頂上を蹈み當に除息すべし。死、疑なし。復た更に異の方便を以て一切の障を除くことを明す。即ち前に說く所の不動明王の本曼荼羅なり。即ち是れ三角曼荼羅にして其の中に[21]黑色なるは是れなり。持誦者自ら己身不動尊明王の像と作ると想へ。又此の中の作法に於て二の意あり。一は不動尊[22]圓壇の中に在して彼の上を蹈むと想ふたり。二には自身不動尊なりと想うて即ち本眞言と[23]印とを以て上を蹈む。三角の中に彼の障を爲す者の形を畫け。然して後に中に入れて左の脚を以て彼の頂上を蹈み、大忿怒の形を以て之れに加へよ。彼れ當に時に應じて退散すべし。若し彼此の教に違戾すれば主必ず自ら其の命根を斷ぜむ。是の故に持誦者當に慈心を生じ念言して彼をして命を斷ぜしむることなかるべし。然も此の中の密意は不動は謂く障を爲す者なり。即是れ心より生ずる所の慳貪等の法、能く行人の爲に一切の障事を作す。今此の無動明王は即ち是れ一切智智の大菩提心なり。當に知るべし、此れは即ち是れ大力威猛にして能く永く一切の隨眠等の過を害し、彼をして永く斷ぜしむるは即ち是れ死の義なり。[24]瑜伽の會中の如き佛初めて正覺を成じたまふときに大集會の中の一切曼荼羅の所攝の三界の衆に[25]摩醯首羅といふものあり、即ち是れ三千世界の主にして、三千界の中に住したまふ。心慢るが故に肯て所召の命に從はずして是の念を作さく、[26]是れ三界の主なり。更に誰の尊有つてか我を召さんや。復是の念を作さく、彼の持明者は一切の穢惡を畏る。我今一切穢汚の物を化作して、四面に圍遶して其の中に住せば彼が施す所の明術何ぞ能く爲す所かあらんと。時に無動明王、佛の教命を承けて彼の天を召すに、其の此の如くの事を作すを見て即ち[27]受觸金剛（即ち是れ不淨金剛）を化して彼をして之を取らしむ。爾の時に、不淨金剛須臾に悉

【二一】黑色は、三角曼荼羅の中に青黑色の不動尊あるのは是である。

【二二】圓壇とは、方圓三角等種々の曼荼羅なり。

【二三】印とを、「印とを「之に加へて」」と一本にはある。二十一を一本には乃至となる。

【二四】瑜伽とは、金剛頂十八會の初會四大品の中の第二降三世品をいふか、但し此品は降三世明王が摩醯首羅天の障害を降伏することを說く。

【二五】摩醯首羅とは、色界の頂上に居る天にて大自在天のこと。

【二六】是れを一本には我れとあり。

【二七】受觸金剛とは、ウスサマ明王なり。

〔一一〕秘密主、一切の悪風には當に阿字を誦すべし。亦深意あり。正に〔一二〕阿字を取つて身とす。此の〔一三〕本無生の字門を以て而も我身と作すなり。無我に於て訶字を作して心に誦せよ、塗香を地に點じて七の圓點を作せよ。此の風には先づ訶字中にありと想うて七點を加へて而して好く之れを蓋へ、方は〔一四〕縛庾に依つて瓦椀を以て蓋として之れを合せよ。此の瓦椀に於て大衆生の彌盧を思念して時時に彼の上に阿字并に點を想へ、是れを作して風大を縛繫すべし、先佛の所説なりとは謂く壇を造立する時に或は大風ありて障を爲さば、露地に〔一五〕立つを以ての故に當に須らく之れを止むべし。當に此の阿字身分の內に遍じて此の字金剛不動の色と作る。謂く眞金色なりと想ふべし。是の如く想ひ已つて又心に阿字を誦ぜよ、風方（西北方なり。）に於て塗香を用ひ地に於て〔一六〕一の小圓點⁘を畫作して、各彈丸許りの大さの如くせよ。數の如く足て卽ち瓦椀を用ゐて之れを蓋ひ、瓦器の上に於て阿字を想へ。此の字を以て金剛山と爲して之れを鎭押するなり。三千大千の諸の須彌山を合して一體として其の上に蓋ふなり。又當に時時に器の上に阿字の想を作すべし。此の阿は是れ金剛不動の義なり。一點を加ふるは是れ遍一切處たり。今此の金剛不動をして一切處に遍ぜしむべし。卽ち是れ增廣の義なり。

秘密主、〔一七〕水障の法とは、當に囉字を思ふて身內に遍ぜしむべし。赤色の大力の焔を作せるは是れ火焔の鬘なり。內より出でて身上に遍じて鬘の如し。大力可畏の惡形を作りて手に大刀の印を執る。瞋形を作り已りて地に畫いて雲の像を作れ、或は龍蛇の像を作り、刀印を用ひて其の形を斬り斷ぜよ。雲卽ち散滅せん。雲は是れ諸水の因依する所なるを以ての故なり。障を起す所の方に隨つて之れを作れ。如し雨東より來らば卽ち東方に於て作れ。或は〔一八〕金剛橛を作りて此れを用ゐて其の風を止めよ。其の橛には〔一九〕佉陀羅木を用ゐて獨股金剛杵を作りて〔二〇〕金剛の眞言を以て之れを加持せよ。一切の金剛に同なりと想うて以て之れを打つべし。亦所在の方面に隨ふべし。此れは應に自身を

と示現すること。

【一〇】一目を閉づとは、不動明王が右の目を開いて睨視し左の目を閉づること。

【一一】秘密主以下先佛所説とは、息障品の本文なりされど現存のものとは、稍々異る。是れ又未完成の本なり。

【一二】阿字、風大の種子なり。是は風の障碍を息むことを説く。

【一三】本無生とは、阿字は本不生の義あり。

【一四】縛庾とは、西北方をいふ。

【一五】立つるを一本には立つる法とあり。

【一六】一を一本には、七となる七の方正しと思ふ。

【一七】水障の法とは、以下水の障礙を息むることを説く。息障品の本文大有情諦に聽けより一切金剛に同じに至るなり。

【一八】金剛橛、修法壇の四方に立てる柱なり。

【一九】佉陀羅木とは、紫檀木なり。

【二〇】金剛の眞言とは、成辦諸事の眞言なり。

底哩三昧耶不動尊聖者念誦祕密法

大興善寺三藏沙門不空　詔を奉けて譯す

卷の上

底哩三昧耶不動明王本事神力息障祕要品　第一

我[一]薄伽梵大日世尊、復た修眞言者の爲に除障の因を說かん。一切の障法は無量ありと雖、要を以て之を言はゞ、但だ心より生ずるなり。又行者過去世に[二]慳法に隨順せしに由るが故に、今世に多く諸障あり。當に知るべし、亦た是れ心の因緣より生ずるなり。當に知るべし、彼の慳貪等は是れ諸障の因なり。若し能く彼の[三]因障を除けば諸障自ら息む。若し能く[四]除對治するは卽ち淨菩提心なり。若し菩提心を念ずるが故に卽ち是れ能く諸障の因を除くなり。又一切の諸障は[五]分別心に由つて生ず。心[六]思有なるは卽ち是れ障なり。謂く心中の煩惱隨煩惱等なり、若し諸の分別を離れば卽ち是れ淨菩提心なり。眞言行者、此の心を憶念するに由つて、卽ち一切の諸過を離る。意に常に[七]無動聖者を思惟すれば、卽ち能く一切の障を爲す者を除くこと前の所說の如し、無動明王は此は是れ如來の法身なり、大願を以ての故に[八]無相の相の中に而も是れ相を現じて一切の眞言行者を護りたまふ。若し能く常に念ずれば、能く一切の障を離る、いはゆる無動とは卽ち是れ眞淨の菩提心なり。是の義を表せんが爲めの故に[九]事に因つて名を立つ。此の明王、[一〇]一目を閉づることは亦深意あり。佛の明鑒唯一にして無二無三なるを以てなり。其の印は下に自ら當に之を說くべし。

【一】薄伽梵（Bhagavan）は佛、又は世尊と譯す。大日世尊とは眞言密敎の根本敎主大日如來なり。
一切障法以下大凡法界生眞言までは大日經息障品疏の文と大同小異なり。然れども現存の文とは稍ゝ異る是れ修正を了せざるものなればなり。

【二】慳法とは、慳恪にして卽ち財寶や法門を慳みて惠み與へざること。

【三】因障とは、慳貪等の諸障の原因なり。

【四】除對治とは、慳貪の障因を除き退治することにて、之は淨菩提を念ずることなり。

【五】分別心とは、種々に推度すること。

【六】思とは、思惑にして諸障の因なり。

【七】無動聖者とは、不動明王なり。

【八】無相とは、「相として具せざることなき」の意味にして、卽ち密敎は、法身は十方三世に遍滿せる絕對身なれば之を無相法身といふ。今不動明王は、無相法身の中より分れ出たる一の有相の身なりとの意なり。有相とは相形を有する身の意なり。

【九】事に因るとは、無相の身を以て假りに如來使者の形

眞言を說き「能く一切の事を成ず」と述べ更に降三世明王、蓮花部明王心、佛部明王心、金剛部明王心を說いて居る。

次に中卷では根本眞言品第二に於ては『大日如來が火生三昧に住して大摧障眞言を說く』と稱して大摧障者不動明王威怒明を說き而も「祕密釋に曰く」として眞言の句義を解釋してをる。次に澡浴結護身品第二（一本には三となる）に於ては、澡浴結護身、結護道場、供養の三品を說き、澡浴結護身品に於ては、極安穩護身印明、洗浴結護八方印明、洗浴淨水印明、著甲印明、灌頂印明を說き、結護道場品では三昧耶印明、辟除障難印明、能成就一切事業杵印明、牆印明、網印明、火焰印明等を說き、供養品に於ては、座印明、如來所生印明、懺悔印明、滿足印明、塗香供養印明、燒香供養印明、華供養印明、飲食供養印明、燈供養印明、普莊嚴供養印明、虛空部母印、法界生印明、捻數珠明印、根本三昧耶印明等を出して印明作法を說いてをる。次に下卷に至つては、第一に無動金剛寶山印、無動金剛頭印、無動金剛髻印、無動金剛眼印、無動金剛口印、無動金剛心印、無動金剛師子奮迅印、無動金剛火印、無動金剛法螺印、無動金剛索印、無動金剛辟界明印、無動金剛光莊嚴印明を出して各々結印の法や成就法を述べて居る。而して次に無動金剛事業求願品に於ては最初不動金剛法を出して「能く一切事業を利益し成就す」といふて諸の成就法をとき、更に次に「畫像法を說かん」といふて、第一に「赤土色の帛衣を著て左辮髻を垂れ眼斜に視、手に劍と索とを執つて寶蓮花に坐し、眉を嚬め面を瞋らして三世を怖れる狀を作る」第二は尸陀林の中の帛を取つて、自身の血を以て淡く色を作して狀（かたち）を畫く」のである。第三は他の軍勢を防禦せんために旗旛の上に畫くので、身は黃肉色にして四面、上下に牙を出し四臂にして怖畏瞋怒の狀に作り、遍身に火焰あり、他の兵を呑む勢に作るのである。第四は先づ釋迦牟尼佛の像を畫き次に文殊師利童子の像を畫き次は執金剛菩薩を畫き、執金剛の下に於て無動聖者を畫くのである。第五は身に赤土色の衣を著せしめ、左に辮髻を垂れ、斜に視て童子の狀にし、手に金剛杵と寶棒を執つて眼微かに赤くして石上に坐し、瞋怒にして遍身に火焰あるものである。又、不動尊に隨從する緊迦羅（こんがう）童子の法を成就するの法をも說いて居る。

昭和七年三月二十一日

譯者　岡田契昌識

結護道場品第四
無動金剛三昧耶印明第一
不動威怒辟除障難印明第二
無動金剛能成就一切事業杵印明第三
無動金剛牆印明第四
無動金剛網印明第五
無動金剛火焰印明第六

供養品第五
無動金剛座印明第一
一切如來所生印明第二
大輪金剛懺悔印明第三
無動金剛滿足印明第四
塗香供養印明第五
燒香供養印明第六
華供養印明第七
飲食供養印明第八
燈供養印明第九
普莊嚴供養明印第十
無動金剛虛空部母印第十一
無動金剛法界生印明第十二
捻數珠明印第十三
無動金剛根本三昧耶印明第十四

卷　下
無動金剛寶山印第一
無動金剛頭印第二
無動金剛髻印第三
無動金剛眼印第四
無動金剛口印第五
無動金剛心印第六
無動金剛師子奮迅印第七
無動金剛火印第八
無動金剛法螺印第九
無動金剛索印第十
無動金剛解界明印第十一
無動金剛光莊嚴印明第十二

各品の概要

底哩三昧耶不動明王本事神力息障祕要品第一に於ては最初に大日經息障品の本文と之を釋した無畏三藏の疏の文が載せてある。大日經は開元十三年に善無畏の譯する所にして、大日經疏廿卷は三藏の口說を弟子一行の筆錄したものであることは言をまたない。而して今開元年間に出來た疏の文が底哩三昧耶經の中に出で居ることに就ては、古人は「不空三藏が底哩三昧耶經の梵本を得て之を譯さんとせしに疏の文とたま〳〵全同であつたのだと說いて居る。之に就て密教發達志では

初品、大日に說く所に似たりと雖、第二品に乃ち三昧耶經の中に略說すと云ふ。然れども其三昧耶經とは、存否明ならず、是の法、蓋し不空大日經息障品等の意に依りて以て之を作るか

といふて、寧ろ不空三藏の揑作ならんと推定された。尤も本經の中に「上は王公に至り下は凡庶に及ぶまで貴賤を問ふことなく」云々とか、又は「先祖父の敎に敬順せず世人名づけて惡子とす」等といふのを見れば密教發達志の說も首肯される。大日經の息障品は具緣品の次に出る處で具緣品に於て曼荼羅の行を說き示したから、息障品は、曼荼羅を畫き及び眞言等持誦の時に障を爲すものを息除することを說いたのである。今も、息障の文と疏の文を引用して居る。而して其中に於て、無動明王の成就法々義幖幟等を述べて居る。次に法界生眞言を說き、更に「祕密に曰く」として不動の字義や不動尊の像につき解釋して居る。次に三吽字の

底哩三昧耶不動尊聖者念誦祕密法解題

不動明王の事

底哩三昧耶不動尊聖者念誦祕密法は不動明王のことを說いたものである。「不動明王は毘盧遮耶佛の化身なり。久しく既に成佛せども、本願を以ての故に如來の使者と示現して行者に給仕し、諸務を執行す。故に童子の形を現じその身體肥滿し能く行者に給仕し衆生を化するに怯弱ならざるを表せり」と佛像新集に在るが、元來不動明王の本地に就ては除蓋障菩薩であるとか、阿閦佛であるとか、釋迦佛であるとか種々の說もあるが底哩三昧經では大日如來の差別智身であるとして居る。本文に

　即ち是れ大日世尊の差別智身なり。
　大願を以ての故に無相の中に於て相を現作す

とあるのは是である。而して底哩三昧耶經の

譯者

は、不空三藏である。即ち不空三藏は傳によると乾元元年より大曆六年に至る間に於て翻譯したのであるが、猶ほ不空三藏の譯に底哩三昧耶不動尊威怒王使者念誦法一卷あり、是は空海慈覺智證慧運の請來する所である。今國譯したのは三卷の方で慧運の請來する所である。一卷の方にも作法印明や諸の成就法其他不動尊を畫作する方法などを說いてある。不空三藏の譯は諸經軌に亘つて廣多であるが不動明王に關するものとしてもザツトこんなものがある。

一、不動尊八方神旗經
二、金剛手光明灌頂經最勝立印聖無動尊大威怒王念誦儀軌品一卷
三、聖無動尊一字出生八大童子祕要法一卷
四、勝軍不動明王四十八使者祕密成就儀軌一卷

底哩三昧耶祕密法の組織

次に今、國譯した三卷本の組織を表示する。

卷上

底哩三昧耶不動明王本事神力息障祕要品第一

卷中

根本眞言品第二
澡浴結護身品第三
　無動金剛極安穩護身印明第一
　無動金剛洗浴結護八方印明第二
　無動金剛洗浴淨水印明第三
　不動金剛著甲印明第四
　不動金剛灌頂印明第五

◇　◇

目次

密教部四

岡田契昌
神林隆淨
譯

國譯一切經

大東出版社藏版